

昭和58年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1984・3

三重県教育委員会

序

地方文化の育成、見直しという時代にあって、实际的にその地域に根ざしたものを取り上げ、一つの文化行政の枠の中に組み入れる方法としては幾多の施策が考えられる。埋蔵文化財こそ真に地域に根ざし、今日まで大切に継承された文化的遺産ではあるが、地下に埋もれているという属性をもつが故に、かえって理解を得難いという面をもっている。

今日の開発は、高度経済成長期における一連の超大型のものは影をひそめたものの、依然として各地域でブロック集中化している感がある。

埋蔵文化財の保護は土地を媒介とするため、農業基盤整備の各事業をはじめ、あらゆる開発との調整が必要となっている。ここに報告する11遺跡も、再々その保護協議がなされ、最終的に記録による保存という方法を取らざるを得なかったものである。各遺跡にはそれぞれ地域に根ざした個々内容の異なった価値を持っており、これらをここに報告書として公表するとともにその成果の利用を広く求めるものであります。

今回の調査に際しまして、終始、協力の労を惜しまれなかった県農林水産部の各関係機関、また現地にあっては、各土地改良区をはじめ地元の多くの方々の暖かいご理解とご援助を得ましたことは誠に感謝に堪えないものであります。

昭和59年3月

三重県教育委員会

教育長 横 田 猛 雄

例 言

1. 本書は、昭和58年度農業基盤整備事業地域内にかかる埋蔵文化財の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。
3. 調査の体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会
 調査担当 三重県教育委員会 文化課
 文化財係員（主事・技師）及び昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者研修生
 調査協力 三重県農林水産部 耕地第一課、耕地第二課
 各耕地事務所
 各土地改良区
 各市町村教育委員会

4. 各遺跡の整理、報文作成は各調査担当者が中心にあたり、下記の表のとおりであり、文末にも記した。

項 目	執 筆 者	項 目	執 筆 者
前 言	技 師 新田 洋	風呂谷館跡	主 事 森前 稔 主 査 伊藤 久嗣
岸之上遺跡	主 事 杉谷 政樹	北切遺跡	主 事 田中喜久雄 技 師 新田 洋
大門遺跡・湫遺跡	主 事 杉谷 政樹	藪の下遺跡	主 事 中村 信裕
狭間遺跡	技 師 吉水 康夫	中ノ垣外遺跡	主 事 高見 宜雄 岩中 淳之 (伊勢市教育委員会)
永井氏城跡	研修生 中山 暁 井藤 正文 中西 正典	六谷遺跡	技 師 新田 洋 神田 薫 (菟野町教育委員会)
高顔遺跡	技 師 新田 洋		
檀・柏原遺跡	主 事 田阪 仁		

5. 本書で用いた遺構表示略記号は下記により、図面における方位はすべて磁北を用いた。また、各遺跡の遺跡表示略記号は目次（カッコ書き）に示した。

S B; 竪穴住居・掘立柱建物 S D; 溝・堀 S E; 井戸
 S A; 塀・柵 S K; 土壇 S X; その他の遺構

6. 本書に使用した航空写真、各事業計画図面は農林水産部の提供による。
7. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

前 言	1
I 上野市中友生 岸之上遺跡(8 J K U)	9
II 上野市下友生 大門遺跡(8 J D M)他	31
III 上野市枅川 狭間遺跡(8 J H M)	39
IV 阿山郡大山田村 永井氏城跡(9 V N G)	43
V 阿山郡大山田村 高顔遺跡(8 J T T)	53
VI 名張市赤目町 檀・柏原遺跡(8 J D A N)	55
VII 阿山郡大山田村 風呂谷館跡(9 V F T)	77
VIII 阿山郡大山田村 北切遺跡(8 J K G)	101
IX 松阪市岩内町 藪の下遺跡(8 G Y S)	125
X 伊勢市佐八町 中ノ垣外遺跡(8 G N G)	131
XI 三重郡菰野町 六谷遺跡(7 E R T)	201
索 引	220

図 版 目 次

PL 1-1	岸之上遺跡	航空写真			調査前風景
PL 1-2	〃	調査前近景	PL 6-2	〃	SB 2、SK 3
		調査後近景			SE 4
PL 1-3	〃	SB 6	PL 6-3	〃	SK 5、SX 6
		SB 6			DW区全景
PL 1-4	〃	SB 2・3・4	PL 6-4	〃	SB 12
		SK 1			SB 12カマド
PL 1-5	〃	出土遺物	PL 6-5	〃	SB 14
PL 1-6	〃	出土遺物			SX 15
PL 1-7	〃	出土遺物	PL 6-6	〃	SB 16
PL 1-8	〃	出土遺物			SB 19カマド
PL 1-9	〃	出土遺物	PL 6-7	〃	縄文・弥生・古墳時
PL 1-10	〃	出土遺物			代の遺物
PL 2-1	大門遺跡	調査前全景	PL 6-8	〃	古墳時代の遺物
		調査風景	PL 6-9	〃	古墳時代の遺物
PL 2-2	〃	調査後全景	PL 6-10	〃	平安・鎌倉・室町時
		調査後近景			代の遺物
PL 2-3	大門遺跡	SB 8	PL 7-1	風呂谷遺跡	遺跡遠景
		SB 11			遺跡近景
PL 2-4	〃	SK 9 土器出土状況	PL 7-2	〃	遺跡近景
		Pit B 土器出土状況			遺跡近景
PL 2-5	〃	出土土器	PL 7-3	〃	SD 5
PL 2-6	淵遺跡	近景			SD 6
		Aトレンチ東壁・D	PL 7-4	〃	SB 12・13、SD 14
		トレンチ北壁			SB 19
PL 3-1	狭間遺跡	遺跡遠景	PL 7-5	〃	SB 36、SD 35
		調査区全景			SB 41、SD 37・39
PL 3-2		調査風景			・40
		土層断面	PL 7-6	〃	SB 32、SA 3、SE
PL 4-1	永井氏城跡	南外堤			31、SE 31断面
		中出山第12号墳	PL 7-7	〃	SE 31
PL 4-2	〃	鞍部全景・鞍部東壁			SE 31陣木
		鞍部出土土器	PL 7-8	〃	出土遺物
PL 4-3	〃	鞍部出土石器	PL 7-9	〃	出土遺物
PL 5-1	高顔遺跡	遺跡遠景	PL 7-10	〃	出土遺物
		発掘区全景	PL 8-1	北切遺跡	航空写真
PL 5-2	〃	SB 1			調査前風景
		SK 3	PL 8-2	〃	A地区全景
PL 6-1	檀・柏原遺跡	航空写真			A地区中央部

PL 8-3	北切遺跡	SX 1・5・8			SK 10
		SB 15	PL 10-6	中ノ垣外遺跡	SK 21
PL 8-4	〃	土師器(甕)出土状況			SK 21
		磨製石剣出土状況	PL 10-7	〃	SD 12
PL 8-5	〃	B地区全景			SX 29
		SX 1	PL 10-8	〃	縄文土器・石器
PL 8-6	〃	SX 1	PL 10-9	〃	弥生土器
		SB 2・3	PL 10-10	〃	須恵器・土師器・鉄器
PL 8-7	〃	SX 1周溝内遺物出土状況	PL 10-11	〃	土師器
PL 8-8	〃	SB 2カマド	PL 10-12	〃	灰釉陶器・山茶碗・緑釉陶器
		SB 2カマド			
PL 8-9	〃	SB 4	PL 10-13	〃	山茶碗・青磁
		SX 6	PL 10-14	〃	土師器・常滑甕・石硯ほか
PL 8-10	〃	出土遺物(A地区)			
PL 8-11	〃	出土遺物(〃)	PL 10-15	〃	中世墓出土遺物
PL 8-12	〃	出土遺物(〃)	PL 11-1	六谷遺跡	航空写真
PL 8-13	〃	出土遺物(〃)			調査前遠景
PL 8-14	〃	出土遺物(〃)	PL 11-2	〃	B地区調査風景
PL 8-15	〃	出土遺物(B地区)			調査区全景
PL 8-16	〃	出土遺物(〃)	PL 11-3	〃	B地区中央部
PL 9-1	藪の下遺跡	航空写真			SD 2
		遺跡遠景	PL 11-4	〃	SB 3
PL 9-2	〃	SB 1・SK 3			SB 1
		SK 3	PL 11-5	〃	SB 10
PL 10-1	中ノ垣外遺跡	航空写真			SB 11・12
		調査前近景	PL 11-6	〃	SB 10
PL 10-2	〃	SB 74・75			SB 18
		SB 75	PL 11-7	〃	SB 8
PL 10-3	〃	SB 24			SB 20
		SB 71	PL 11-8	〃	出土遺物
PL 10-4	〃	SB 62	PL 11-9	〃	出土遺物
		SB 33	PL 11-10	〃	出土遺物
PL 10-5	〃	SB 40			

挿 図 目 次

第1-1図	岸之上遺跡	遺跡位置図……………9	〃-3図	試掘坑No40出土遺物実測図……………11
〃-2図		遺跡地形図……………10		

ㄥ-4 図	発掘区位置図……………14			……………61
ㄥ-5 図	遺構平面図……………14	第6-7 図	S B 12実測図……………62	
ㄥ-6 図	S K 5・S B 6・7 出土 土器実測図……………17	ㄥ-8 図	S B 12カマド実測図…63	
ㄥ-7 図	S K 1 出土土器実測図 ……………20	ㄥ-9 図	S B 16実測図……………64	
ㄥ-8 図	S K 1 出土土器実測図 ・瓦拓影……………21	ㄥ-10 図	縄文・弥生時代遺物実測図…66	
ㄥ-9 図	S K 1 出土瓦拓影……………22	ㄥ-11 図	古墳時代遺物実測図…69	
ㄥ-10 図	S K 1 出土瓦拓影……………23	ㄥ-12 図	S B 12カマド内出土甕実測図…70	
ㄥ-11 図	S B 2～4 出土土器実 測図……………26	ㄥ-13 図	平安～室町時代遺物実測図…71	
第2-1 図	大門遺跡他 発掘区位置図……………31	第7-1 図	風呂谷館跡 遺跡位置図……………77	
第2-2 図	大門遺跡他 遺構平面図……………32	ㄥ-2 図	遺跡地形図……………78	
ㄥ-3 図	S K 9 土器出土状況・ 出土土器実測図……………33	ㄥ-3 図	発掘区平面図……………79	
ㄥ-4 図	土器実測図……………35	ㄥ-4 図	遺構配置図……………80	
ㄥ-5 図	平面図……………38	ㄥ-5 図	S D 1～3 断面実測図 ……………82	
ㄥ-6 図	土層断面図……………38	ㄥ-6 図	S D 3・5 断面実測図 ……………83	
第3-1 図	狭間遺跡 遺跡位置図……………39	ㄥ-7 図	S B 10～13実測図……………84	
ㄥ-2 図	遺跡地形図……………40	ㄥ-8 図	S B 19・22・23実測図 ……………86	
ㄥ-3 図	発掘区位置図……………41	ㄥ-9 図	S B 37・42実測図……………87	
ㄥ-4 図	調査区断面図……………42	ㄥ-10 図	S E 31、S B 32、S A 33実測図……………88	
第4-1 図	永井氏城跡 遺跡位置図……………43	ㄥ-11 図	S E 31実測図……………89	
ㄥ-2 図	遺跡地形図……………44	ㄥ-12 図	S B 15・16・22・23、 S A 24実測図……………90	
ㄥ-3 図	発掘区位置図……………45	ㄥ-13 図	S K 25断面実測図……………91	
ㄥ-4 図	永井氏城跡南面土塁測 量図……………46	ㄥ-14 図	出土遺物実測図……………93	
ㄥ-5 図	土層断面図……………47	ㄥ-15 図	出土遺物実測図……………94	
ㄥ-6 図	中出山12号墳実測図…48	ㄥ-16 図	出土遺物実測図……………96	
ㄥ-7 図	石器実測図……………49	ㄥ-17 図	出土遺物実測図……………97	
ㄥ-8 図	遺物実測図……………50	第8-1 図	北切遺跡 発掘区平面図…………… 101	
第5-1 図	高顔遺跡 発掘区位置図……………53	ㄥ-2 図	S B 15実測図…………… 102	
ㄥ-2 図	遺構平面図……………54	ㄥ-3 図	S X 5 実測図…………… 103	
ㄥ-3 図	出土土器実測図……………54	ㄥ-4 図	A 地区遺構平面図… 104	
第6-1 図	檀・柏原遺跡 遺跡位置図……………55	ㄥ-5 図	S X 11周溝出土土器実 測図…………… 107	
ㄥ-2 図	遺跡地形図……………56	ㄥ-6 図	S K 28出土土器実測図 …………… 108	
ㄥ-3 図	発掘区平面図……………58	ㄥ-7 図	S K 22、包含層出土土 器実測図…………… 109	
ㄥ-4 図	遺構平面図……………59	ㄥ-8 図	S X 5 周溝出土土器実 測図…………… 109	
ㄥ-5 図	S E 4 実測図……………60			
ㄥ-6 図	S K 5、S K 6 実測図			

	測図……………	111	第10-24図	中ノ垣外遺跡	遺物実測図……………	176
第8-9図	北切遺跡	土器実測図……………	ノ-25図		遺物実測図……………	179
ノ-10図		土器実測図……………	ノ-26図		遺物実測図……………	182
ノ-11図		B地区遺構平面図…	ノ-27図		Pit16出土銭貨拓影…	184
ノ-12図		S B 2・3 実測図…	ノ-28図		S X 29出土土器実測図	
ノ-13図		S X 1 実測図……………			……………	184
ノ-14図		S B 2 カマド実測図	ノ-29図		中世墓出土遺物実測図	
		……………			……………	185
ノ-15図		S X 6 集石遺構実測図	ノ-30図		民家の間取り例……	188
		……………	ノ-31図		主要遺構配置図	
ノ-16図		B地区出土遺物実測図			……………	191~192
		……………	ノ-32図		付近の地形分類図…	193
第9-1図	藪の下遺跡	遺跡位置図……………	ノ-33図		付近の投影断面図…	193
ノ-2図		遺跡地形図……………	ノ-34図		地質断面位置図……	194
ノ-3図		発掘区位置図……………	ノ-35図(1~2)		地質断面図……	194~195
ノ-4図		遺構実測図……………	ノ-36図		住居跡高度分布図…	198
ノ-5図		S K 3 出土土器実測図	ノ-37図		付近の古地理変遷図	
		……………			……………	199
第10-1図	中ノ垣外遺跡	遺跡位置図……………	第11-1図	六谷遺跡	遺跡位置図……………	201
ノ-2図		遺跡地形図……………	ノ-2図		遺跡地形図……………	202
ノ-3図		発掘区平面図……………	ノ-3図		発掘区平面図……………	203
ノ-4図(1~4)		S B 74・75実測図…	ノ-4図		A地区遺構平面図…	204
ノ-5図		遺構平面図……	ノ-5図		S B 8 実測図……………	205
ノ-6図		S B 24・71実測図…	ノ-6図		B地区遺構平面図…	206
ノ-7図		S B 62実測図……………	ノ-7図		B地区 S B 3 実測図	
ノ-8図		掘立柱建物実測図…			……………	208
ノ-9図		掘立柱建物実測図…	ノ-8図		ノ S B 8 実測図	
ノ-10図		掘立柱建物実測図…			……………	209
ノ-11図		掘立柱建物実測図…	ノ-9図		ノ S B 10・18実測	
ノ-12図		掘立柱建物実測図…			図……………	210
ノ-13図		掘立柱建物実測図…	ノ-10図		ノ S B 10・18断面	
ノ-14図		掘立柱建物実測図…			実測図……………	211
ノ-15図		掘立柱建物実測図…	ノ-11図		ノ S B 20実測図	
ノ-16図		土壇実測図……………			……………	211
ノ-17図		土壇墓実測図……………	ノ-12図		ノ S B 20断面実測	
ノ-18図		遺物実測図……………			図……………	212
ノ-19図		遺物実測図……………	ノ-13図		縄文土器・弥生土器・	
ノ-20図		遺物実測図……………			石器実測図……………	213
ノ-21図		遺物実測図……………	ノ-14図		竪穴住居出土土器実測	
ノ-22図		遺物実測図……………			図……………	214
ノ-23図		遺物実測図……………	ノ-15図		S B 16・包含層出土土	

表 目 次

第 1 表	昭和58年度農業基盤整備事業地域 内埋蔵文化財一覧……………2～3	第1-5表	S K 1 出土瓦観察表……………19
第 2 表	発掘調査遺跡一覧……………7	第1-6表	S B 2～4 出土土師器など観察表 ……………26
第 3 表	現地説明会開催一覧……………7	第1-7表	S B 2～4 出土瓦器観察表……………26
第1-1表	試掘調査結果一覧表……………10～11	第1-8表	S K 1 出土瓦器椀法量表(1)……………28
第1-2表	S K 5・S B 6・7 出土土器観察 表……………16	第1-9表	〃 (2)……………28
第1-3表	S K 1 出土土師器・瓦質土器観察 表……………18	第6-1表	土師器高杯一覧表……………68
第1-4表	S K 1 出土瓦器観察表……………19	第10-1表	掘立柱建物一覧表…………… 158
		第10-2表	Pit 16出土銭貨一覧表…………… 183
		第11-1表	B地区掘立柱建物の規模…………… 212

前 言

県教育委員会文化課では庁内各開発関係課に対して事業照会を行ない、当該年度、あるいはそれ以降の事業計画予定・内容を聞くとともに事業関係図面の添付提出を求めている。これまで、こうした作業は年度当初に行なわれてきたが、この段階ではすでに地元了解、設計の完了、買収済み等によって事業の推進と埋蔵文化財の保護調整が円滑に進まない場合もかなり多い。開発事業をできるだけ早期に、計画段階で察知し、各々の事業地内に所在する遺跡の確認と周知がなされ、事前に遺跡の保護のための設計変更等が可能になる方向が今後も模索されて然るべきであろう。

県営圃場整備事業そのものは昭和52～54年頃の膨大な事業量からすればかなりの減少傾向にはあるものの、事業対象域が漸次、平野部から山間部に移行している。必然的に遺跡にかかる割合も多くなるわけであるが、その一方、山間部の畑・水田は高低差の大きいものが多く、工事における削平度（切り盛り）も大きくなっており、遺跡の保護に支障をきたしている。高低差の少ない平野部と異なり、設計変更そのものが困難化しているということである。

一方、各種農免道路の場合、かなり以前にルートが計画されており、たとえ現在は未買収段階にあってもすでに地元了解の上での設計書作成がなされて

いる場合が多く、遺跡のためにルートそのものを抜本的に変更することが難しい場合がほとんどであり、かなり先行した関係課との文化財保護協議が必要と考えられる。

また、事業地域内での遺跡分布調査にあたっては作付状況ともからみ、どうしても畑を中心とした表面観察に基づく場合が多く、それを中心に保護協議がされても、遺跡そのものの範囲（広がり）についての理解を欠く場合もある。

すべての埋蔵文化財に言い得るが、遺跡はすべて個々その所在する土地土地に密着した等価値的な文化遺産である。圃場整備事業等は一つの地区を含む広大な面（地域）に及ぶものであり、この大規模な土地改良事業は、現代までに培われた農業地域そのもの（耕作地、及びその歴史的環境を含め）の改変とも言えるものである。一方、遺跡自体も個々切り離した一つの点として捉えるだけでなく、広域的、地域ゾーンとしての調査、資料収集がなされなければならぬ。

視点と価値観の相異等、今後も開発事業と文化財保護との調整については幾多の困難な局面に遭遇するであろうが、なお一層の関係者への理解と協力を強く望むものである。

1. 分布調査

昭和58年度農業基盤整備事業については、昭和57年9月に農林水産部各関係課あてに事業照会を行ない、昭和57年12月にその回答を得た。そこで早速、当課では同年12月から翌58年1～2月にかけて、事業計画図面（縮尺1：1000）をもとに全県下の事業実施予定地全域についての現地分布調査を実施した。

その結果の詳細は第1表の通りであるが、圃場整備事業については事業面積622haのうちで64件（遺跡）、面積にして651,950㎡もの遺物包含地、古墳等を確認した。その他、県営畜産経営環境整備事業の

大安地区で1遺跡、農村基盤総合整備パイロット事業の阿坂地区で2遺跡の所在が判明した。

一方、農道整備事業関係についても並行して分布調査を実施した結果、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大山田南部、及び南部二期）地区内で古墳1基と、周知の遺跡として著名な永井氏城跡の南側の堀の一部は工域内に含まれることが確認された。

これらの分布調査の結果については、各々事業の主管課である耕地第二課と耕地第一課を通して各所

轄耕地事務所に連絡、報告するとともに、遺跡の保護に支障のないように極力工事の設計変更等をされ

る旨の通知文書を提出した。

事業名	耕地事務所	地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	保存方法	
県	桑名耕地事務所	大安東部	41	高林遺跡	員弁郡員弁町大泉字高林	3,400	試掘	
		大安西部		三本松遺跡	〃 〃 〃 字三本松	1,800		
		北勢						
	四日市耕地事務所	八安風塚	30	六谷遺跡	三重郡菰野町小島字下六谷	30,000	試掘・本調査 6,000㎡	
		鈴鹿第二溝合川・下ノ庄	29	起西遺跡	鈴鹿市安塚町	5,000		
	営圃場	津耕地事務所	安濃川右岸	26	北神山A遺跡	安芸郡芸濃町北神山	2,000	試掘・盛土保存
			津南部	〃 B 〃	〃	〃	1,800	
				〃 C 〃	〃	〃	1,600	
				〃 D 〃	〃	〃	〃	
				〃 E 〃	〃	〃	〃	
美里中南部		20	宮ノ前遺跡	津市雲出長常町字宮ノ前	21,000	試掘		
豊地三雲東部河芸南部		白山西部	寺地遺跡	〃 字寺地	5,100	〃		
			段々遺跡	〃 字段々	60,000	〃		
		豊地	高峯遺跡	〃 字高峯	1,200	〃		
			外山A遺跡	安芸郡美里村五百野字外山	2,000	} 地区除外		
	外山B遺跡		〃	3,000				
白山西部	12	八反垣内遺跡	〃 字八反垣外	1,200	試掘			
整備	松阪耕地事務所	齋宮堀坂川沿岸	30	西池村遺跡	多気郡明和町西池村	20,000	試掘	
			23	曲A遺跡	松阪市曲町	1,200		工事立会
		東黒部	〃 B 〃	〃	〃	2,200	〃	
			〃 C 〃	〃	〃	2,000	〃	
			〃 D 〃	〃	〃	2,000	〃	
			〃 E 〃	〃	〃	2,500	〃	
	上御糸	25	大垣内A遺跡	松阪市大垣内町	4,000	} 試掘		
			〃 B 〃	〃	7,500			
		〃 C 〃	〃	2,000				
		〃 D 〃	〃	2,000				
業	伊勢耕地事務所	伊勢南部	28	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	20,000	試掘・本調査 8,500㎡	
			乙部遺跡	〃 円座町	10,000	〃		
	上野耕地事務所	上野南部	4	丸山A遺跡	上野市比自岐	1,200	試掘	
				〃 B 〃	〃	1,600		
		大山田第二	21	〃 C 〃 (狭間遺跡)	〃	300	〃・本調査 300㎡	
富永A遺跡	阿山郡大山田村富永			25,000	盛土保存			
〃 B 〃 (風呂谷館跡)	〃	6,000	試掘・本調査 6,000㎡					
〃 C 〃	〃	6,600	試掘					
〃 D 〃 (高顔遺跡)	〃	3,300	試掘・本調査 300㎡					

事業名	耕地事務所	地区	事業面積 (ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	
県営圃場整備事業	上野耕地事務所	大山田第二	8	富永 E 遺跡 (北切遺跡)	阿山郡大山田村富永	29,700	試掘・本調査 3,500㎡
				〃 F 〃	〃	9,400	盛土保存
		赤目河合	7	壇遺跡 (壇柏原遺跡)	名張市赤目町柏原	100,000	盛土保存・本調査 5,500㎡
				河合 A 遺跡	阿山郡阿山町河合	1,500	} 次年度以降
		〃 B 〃	〃	2,000			
		〃 C 〃	〃	800			
		上野東部	31	〃 D 〃	〃	5,200	試掘
				〃 E 〃	〃	2,200	〃
				円徳院遺跡	〃 円徳院	27,000	次年度以降
				中友生 A 遺跡	上野市中友生	84,000	試掘
				〃 B 〃 (岸ノ上遺跡)	〃	23,400	試掘・本調査 260㎡
				〃 C 〃	〃	6,400	試掘・工事立会
				〃 D 〃	〃	30,000	試掘
				〃 E 〃	〃	3,600	〃
				〃 F 〃	〃	2,400	〃
				〃 G 〃	〃	1,500	〃
				〃 H 〃	〃	2,100	〃
〃 I 〃	〃			2,000	〃		
〃 J 〃 (淵遺跡)	〃	17,300	〃・本調査 700㎡				
〃 K 〃	〃	11,000	〃				
〃 L 〃	〃	10,400	〃				
〃 M 〃 (大門遺跡)	〃	24,000	〃・本調査 500㎡				
	熊野耕地事務所	相野谷		—	—	—	—
		合計	622	64遺跡		651,950	
県営畜産環境整備事業	四日市耕地事務所	大安		北山遺跡	三重郡菟野町小山	20,000	試掘
県営総合農村基盤整備事業	松阪耕地事務所	阿坂		辰の鼻遺跡	松阪市岩内町	2,500	試掘
				下の田遺跡	〃	800	試掘
				菟の下遺跡	〃	2,000	試掘・本調査 130㎡
県営広域営農団地基幹農道整備事業	津耕地事務所	中勢	路体工 ℓ=820M	岩城遺跡	安芸郡安濃町岩城	1,000	試掘
県営財源身替農道整備事業	上野耕地事務所	大山田南部	路体工 ℓ=1529M	永井氏城跡	阿山郡大山田村出後	500	試掘・本調査 500㎡
		大山田南部二期	路体工 ℓ=219M	出後古墳	〃	400	試掘

第1表 昭和58年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧

2. 試掘調査

64遺跡の内、多くは試掘調査を実施することによって遺跡の実態（遺構・遺物の有無確認）をより明確化してゆくこととなった。ここでは試掘調査によって得られた遺跡の範囲、遺物包含層の深度等に基づき再度、遺跡の保護に立脚した工法変更等について

て具体的に各耕地事務所との間で協議をもった。

一方、遺跡の所在が明確化した段階で、鈴鹿市北長太遺跡は盛土による設計変更で、美里村外山A、B遺跡、松阪市大垣外F遺跡等は地区除外という形で、遺跡が保護されることとなった。

また、赤目工区については前年度の経験もあり、当初より排水路以外の面部分については極力、盛土による遺跡の保存策が考えられ、広範囲にわたる名張市檀柏原遺跡の大部分は地下に保護されることとなった。

一方、当初の分布調査段階から膨大な遺跡面積が予想された伊勢市中ノ垣外遺跡では、試掘期にタバコ、あるいは夏野菜が作付されており、試掘箇所が大幅に制限されたものの、結局は南北に長くのびる微高地全体（1万㎡以上）に良好な遺構・遺物包含層が存在することが確認された。当遺跡ではその中央部に幹線排水路が計画されており、遺跡の保護とともに、工期と調査期間についての調整は困難を極めた。

伊賀では大山田南部工区で6箇所、上野東部工区で13箇所を試掘調査を各々実施したが、大山田村富永E遺跡（北切遺跡）では弥生中期の完形壺が出土し、中世が中心と考えられていた当遺跡の重要性が

再認識されることとなった。富永B遺跡（風呂谷館跡）は棚田上の最高部の水田にあり、表面の調査ではほとんど遺物散布が認められなかったが、地元の話で「甚兵衛屋敷」、「神田屋敷」との言い伝えがあることが判明した。南北と東西にトレンチによる試掘の結果、室町後期の遺物包含層と土壇等が確認されたが、整地層も加わり、遺跡の範囲確定については苦慮した。

一方、農免道路にかかる永井氏城跡他については、すでに道路用地買収済にあり、路線変更は不可能という結論に対し、結局、買収地内にかかる堀の一部と古墳の周溝部について本調査を実施することとなった。

試掘調査は県下各地に及んだが、その結果を再度耕地課、各耕地事務所との間で計画図面の具体的な切り盛り関係を検討をすることとなり、それでもなお最終的に遺跡が削平される部分については本調査の必要な箇所として集約化することとなった。



第1図 調査遺跡位置図

3. 第一次調査

4月一杯から5月中旬は各遺跡にかかる保護協議が続行され、当課の調査能力、予算等とのからみで耕地課あるいは各耕地事務所との最終調整の段階にあった。5月23日を期に伊勢市中ノ垣外遺跡、上野市大門遺跡・刈遺跡、名張市檀柏原遺跡の3遺跡については排水路敷を含む調査でもあるため第一次としてその調査を開始することとなった。農免道路にかかる永井氏城跡についても8月工事着工とのからみもあり、6月段階で調査を開始せざるを得なくなった。中ノ垣外遺跡では、現地がタバコ畑、夏野菜畑がその多くを占め、とりあえず休閑地から調査に

入るという虫食いの調査体制をとらざるを得ない状況に置かれた。

檀柏原遺跡においても麦、野菜等の作付によって調査の手順をしばしば変更することを余儀なくされ、調査開始前の地元への作物了解の不徹底さが各地区でみられ、圃場整備事業地内における調査遂行上で、今後早急に解決を必要とする課題であろう。

中ノ垣外遺跡からは試掘結果の通り、いたる処に掘立柱建物の柱穴群が多数検出され、本年度最大面積をかかえた長期にわたる発掘調査となることが予想された。

4. 第二次調査

試掘、及びトレンチ調査では不明な点が多かった大山田村風呂谷館跡は7月から調査を実施した。また、排水路のみの小面積で調整のついた上野市狭間遺跡も下旬には調査を開始した。風呂谷館跡は段差の大きい水田の最上段の平地にあり、地元の人の伝承によると、「神田屋敷」「甚兵衛屋敷」との言い伝えが残っており、屋敷地、あるいは館等が存在したらしいが、表面的な遺物散布も極少で、土墨等の構築物の残欠も確認できなかった。しかし、調査が進行するにつれて、意外と遺構の残りは良好で、その範

囲も大きく広がることが判明した。ここで新たに調査面積と経費の追加が必至となり耕地課、耕地事務所、土地改良区とその理解を求めための協議を重ねた。遺跡は周囲に巨大な堀をめぐらし、郭では多くの掘立柱建物、井戸、溝等を検出、県下では初めてその全容を解明し得る城館跡の本格的調査となった。遺跡の分布調査段階での線引き、試掘後の遺跡範囲の捉え方等、地下に埋蔵されているという宿命をもつ埋蔵文化財の実態把握の難しさを思い知らされた。

5. 第三次調査

中ノ垣外遺跡、風呂谷館跡は広面積に及ぶ調査のため、なお調査続行中であったが、秋風を感じる間もなく、9月初旬には大山田村北切遺跡の調査を開始した。この遺跡は県道をはさんで風呂谷館跡の南西に位置し、服部川の河岸段丘上に立地するもので、分布調査、試掘等から判断して約3万㎡の遺跡範囲と推定できた。工法変更（盛土等）を極力要請する中、最終的に約3,500㎡の工事による削平部分については本調査をせざるを得なくなった。

一方、八風地区においてはこの時期に新たな問題が生じた。菰野町六谷遺跡は当初、数千㎡の遺跡範

囲と考えられたが、工事着工後、事業域を南北に走る幹線排水路の工事での表土剥ぎ段階で多量の遺物出土と包含層の確認がなされた。急拠、四日市耕地事務所に連絡するとともに、耕地第二課をまじえて今後の取り扱いを協議することとなった。一方、予算面でもすでに本年度調査分を超えていたため、耕地第二課、文化庁へも追加予算の措置を講ずるよう要請した。

結局、再度、事業域のほぼ全体（特に削平する田畑について）を試掘することにより遺跡の範囲、包含層までの深度を明確化し、できる限り遺跡の保護

に支障のない設計変更を考える方向を検討することとなった。しかし、遺跡深度の非常に浅い部分も多く、その保護協議は困難を極めたが、およそ3万㎡の遺跡面積の中、最終的にどうしても工法変更の不可能な約6,000㎡については工事を一時中止して調査を実施することとなった。広面積にもかかわらず、

工事完了期とも関わり、10月19日に開始し、翌59年1月終了という緊急調査を余儀なくされた。

以上、大まかに調査に至る経緯、状況等を記してきたが、各所で件数にもまして広大な遺跡面積を調査することとなり、各現場担当、係員が一年中東西奔走する日々が続いたことを最後に記しておく。

5. 遺跡の保存と文化財啓蒙

昭和58年度農業基盤整備事業地域内にかかる埋蔵文化財の発掘調査は計12件となった。試掘調査はほぼ全地区に及び、その他、工事中の立会調査等を含めるとその調査日数と労務は年間における当課の仕事量の中で相当な比重を占めている。遺跡は現状保存されることが最も望ましいが、様々の土地改良事業においては工法的になかなかこうした保護策は難しい。盛土保存という方策もあるが、遺跡を含めた歴史的な環境保全という意味（特に古墳、中世城館などの場合）においては決して良策とは言えないであろう。遺跡は単に地下に残されておればよい（凍結）というのではなく、十分に将来の活用可期する状況をつくった上での現状保存策が講じられなければならぬ。

さて、本年の調査でも多くの学問的成果をあげることができる。大山田村風呂谷遺跡は当初の推定面積をはるかにしのぐ広大な面積の調査となったが、室町時代後期の城館のほぼ全域を完掘することができた。建物、井戸等と共に巨大な堀の検出はこれまで不明な点が多かった城の郭内の建物配置、及びそれとかわる外郭遺構の在り方を示す一つの典型的な調査例として今後の検討が期待される。また、本年度は県下の北と南で大規模な調査がなされた。菰野町六谷遺跡は約3万㎡に及ぶ範囲が推定され、弥生時代から中世まで連面とつながる大複合遺跡と判断された。今回の調査では奈良時代を中心とした大型掘立柱建物が規則性ある姿で検出され、これまで面的な調査例のないこの地域の古代・中世史を考える上で今後の検討、解明には期待が持たれる。一方、伊勢市中ノ垣外遺跡は宮川右岸の河岸段丘上に立地するが、鎌倉時代を中心とした掘立柱建物が多数検出された。これらの建物は柱穴底に根石をもつ総柱

建物が主で昭和56年度に調査した当遺跡の南数百mに所在する中新田遺跡での検出例とも類似しており、中世村落の存在形態を知る好資料となろう。また、建物そのものは建築史的にも興味深く、また村落の性格等についても今後言及する処は多かろう。加えて、当遺跡では南勢地域では初例の弥生時代中期の竪穴住居が発見され、その出土土器と共に、宮川中・下流域における弥生時代の集落立地と変遷、土器編年を考える上で貴重な資料を提供した。

その他、昨年度につづく名張市赤目地区（檜柏原遺跡）では排水路幅という線の調査ではあったが、縄文時代から中世に至る各時代の遺構、遺物が検出され、赤目地区を取りまく遺跡、各時代遺物の密度の濃さを今さらにして思い知らされた。

調査の中間段階、あるいは終了段階ではできるだけ地元を中心とした多くの人々に遺跡の理解、埋蔵文化財の大切さを知っていただくよう現地の説明会を開催した。大山田村北切遺跡では約2千年という悠久の眠りから覚めた装飾華麗な土器を手にして身近に古代人の技術の卓越さに触れた。また菰野町六谷遺跡では古代建築の威風の中に歴史の重みに触れた。いずれも現代生活との結節点を垣間みることにより多くの参加者の共鳴を得ることができた。

分布調査にはじまり、各現地での発掘調査の完了に至る長い期間、各耕地事務所、各土地改良区にあっては様々なご配慮とご協力をいただいた。また、猛暑極寒の中にあつて地元の方々には惜しみない調査へのご援助とご理解を得ることができた。一方、公務の多用の中にあつて、伊勢市教育委員会、菰野町教育委員会の各位には調査の推進及び整理への協力に至るまで格別のご高配を賜わった。以上、文末ながら記して多大なる感謝の意を表したい。（新田 洋）

遺 跡 名	所 在 地	調査面積(m ²)	発 掘 調 査 期 間
六 谷 遺 跡	三重郡菟野町小島	6,000	昭和58年10月19日～昭和59年1月17日
中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	8,500	昭和58年5月23日～昭和59年1月31日
岸之上遺跡	上野市中友生	260	昭和58年9月5日～同年9月10日
大門遺跡・湊遺跡	上野市下友生	1,200	昭和58年5月23日～同年6月29日
狭間遺跡	上野市栢川	200	昭和58年7月22日～同年7月28日
檀・柏原遺跡	名張市赤目町	5,500	昭和58年5月23日～同年9月7日
北切遺跡	阿山郡大山田村富永	3,500	昭和58年9月5日～同年12月15日
高顔遺跡	阿山郡大山田村下阿波	300	昭和58年8月3日～同年8月5日
風呂谷館跡	阿山郡大山田村富永	6,000	昭和58年7月4日～同年11月24日
藪の下遺跡	松阪市岩内町	130	昭和58年12月15日～同年12月16日
永井氏城跡	阿山郡大山田村出後	500	昭和58年6月27日～同年7月28日

第2表 発掘調査遺跡一覧

遺 跡 名	開催年月日	人 数	備 考
檀・柏原遺跡	昭和58年8月7日	50人	現地説明及び小島集落センターで展示説明会を開催
風呂谷館跡	昭和58年12月10日	100人	
北切遺跡	昭和58年10月29日	80人	
六谷遺跡	昭和59年1月14日	100人	
中ノ垣外遺跡	昭和59年1月21日	40人	

第3表 現地説明会開催一覧

I 上野市中友生 岸之上遺跡

1. 位置と歴史的環境

伊賀盆地は、木津川の本・支流によって形成されたいくつかの盆中盆地を内包して成り立っている。この様な木津川の支流の一つに伊賀盆地東部中央を西流する久米川がある。久米川は、布引山地西麓に源を発し、北側の服部川と南側の比自岐川とはさまれた丘陵地帯を貫流している。上流域では喰代の小盆地を形成し、蓮池と上友生の間に介在する狭隘部を径て、中流域では友生の小盆地を形成して、上野市久米町付近で木津川に注いでいる。友生盆地中では、特に右岸に河岸段丘を発達させ、川流は盆地南側を流れているが、現川流周辺の沖積地には旧河道と考えられる水田地割りが、いくつかみられる。

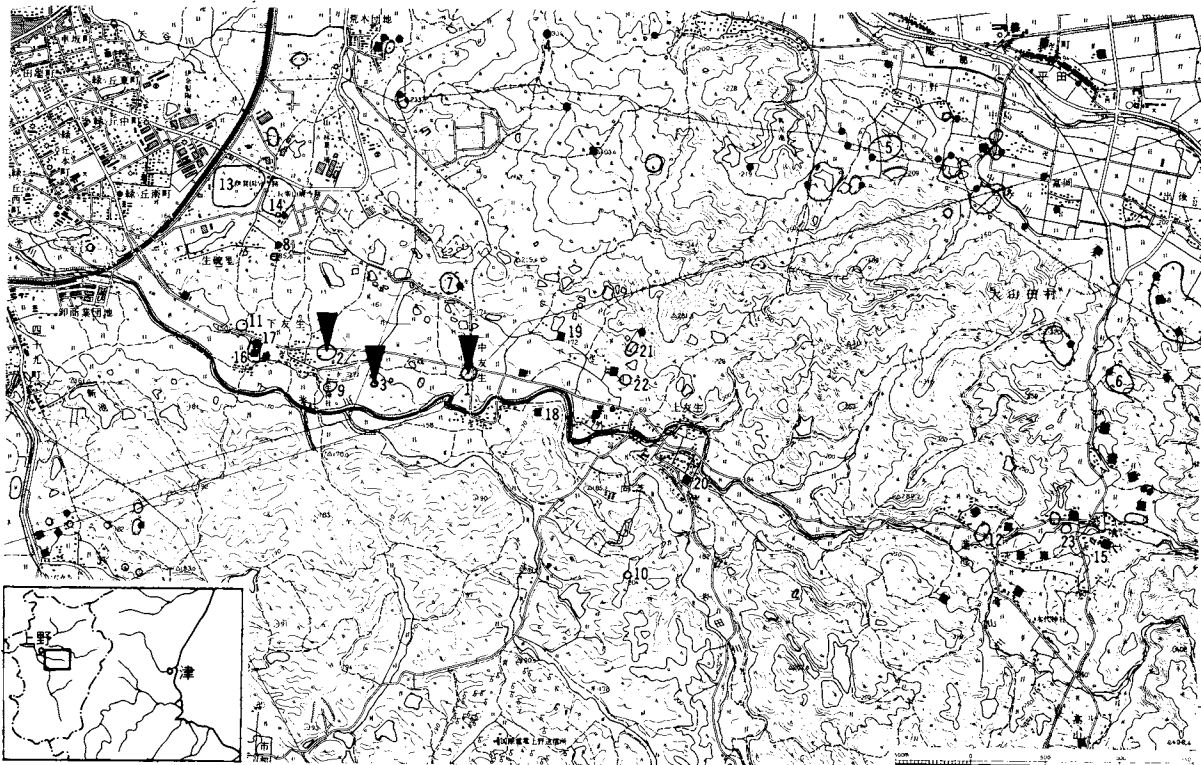
岸之上遺跡（1）は、友生盆地の中央部、久米川中流右岸の河岸段丘上の標高約161 mあたりに所在し、行政的には上野市中友生字岸之上を中心とした部分に広がる。

次章で報告する大門遺跡（2）は、岸之上遺跡の

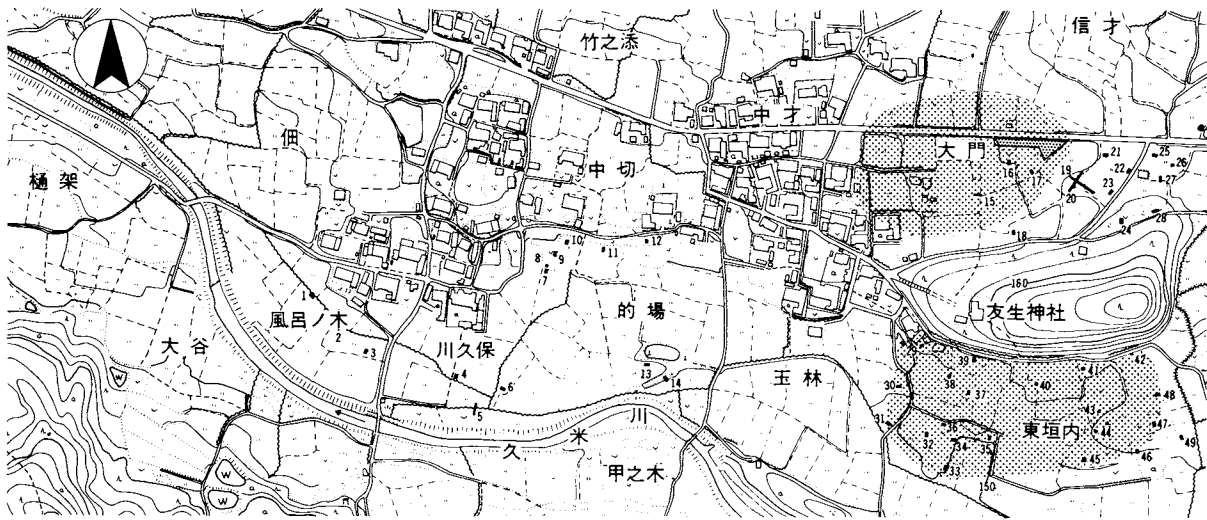
西方、下友生の集落の東側のやはり河岸段丘上、標高約154 mあたりに所在し、行政的には上野市下友生字大門を中心とした部分に広がる。また、淵遺跡（3）は、大門遺跡の南東方、河岸段丘をおりた沖積地の標高約152 mあたりに所在し、行政的には上野市下友生字淵に属する。

友生盆地では、今のところ弥生時代以前の明確な遺跡は確認されていない。続く古墳時代に入ると友生盆地の北方の山頂に伊賀盆地最古と推定される荒木車塚古墳（4）が出現し、これに続く様に服部川流域では寺音寺古墳などの前方後円墳や神林古墳群（5）、高猿古墳群（6）などの多数の後期群集墳が造営される。一方、南側の比自岐川流域でも全長120 mの前方後円墳石山古墳を初現として、かなりの古墳が築かれている。

しかし、これに対して友生盆地では、旗ヶ峯古墳群4基（7）、鳩ヶ峰古墳（8）など後期古墳と推測



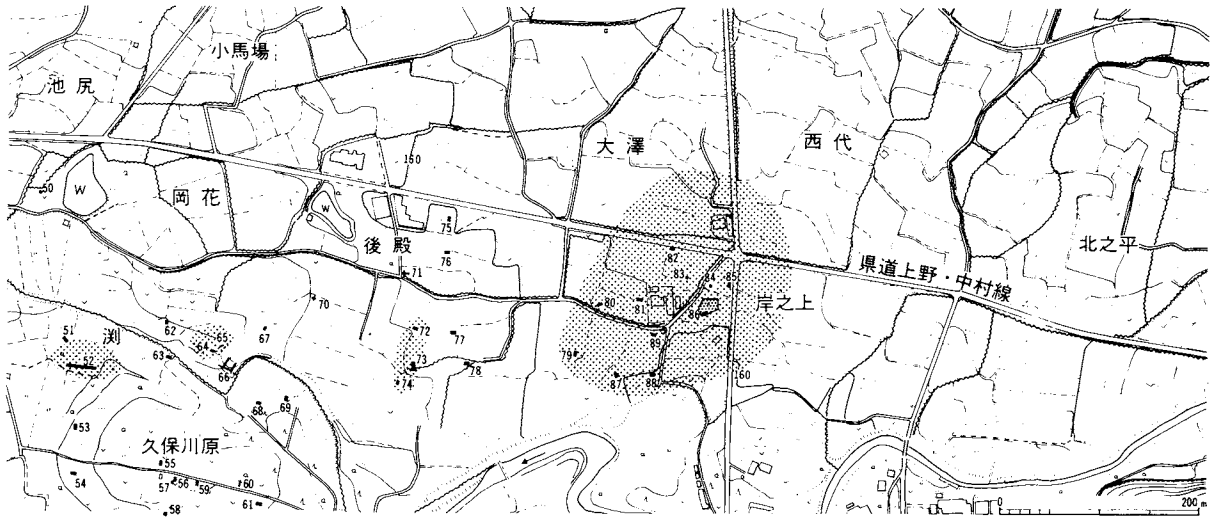
第1-1図 遺跡位置図（1：50000）



第1-2図 遺跡地形図(1:7500)

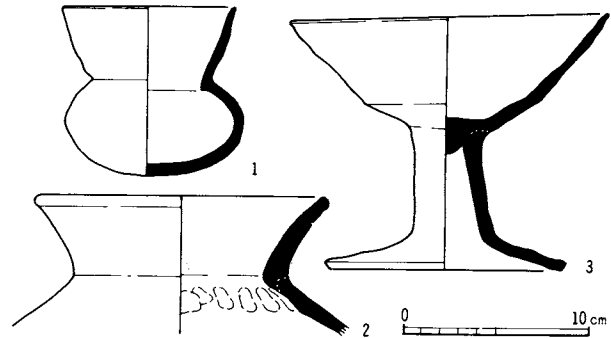
No	規模(m)	遺構	遺物				No	規模(m)	遺構	遺物			
			須恵器	土師器	瓦器	その他				須恵器	土師器	瓦器	その他
1	4×2					31	4×2				サヌカイト 陶器		
2	〃			○		32	〃	○			播鉢、青磁		
3	〃			○		33	〃						
4	〃			○		34	〃						
5	10×1					35	〃				播鉢・瓦質土器		
6	4×2			○		36	〃						
7	3×2					37	〃						
8	2×2					38	〃						
9	4×2					39	〃	竪穴住居(?)					
10	〃					40	2×2	溝		○多			
11	〃			○多		41	〃	小穴・溝		○			
12	〃		○	○		42	〃	溝(?)					
13	〃		○			43	4×2	小穴	○				
14	5×2					44	2×2						
15	8×1	溝				45	4×2						
16	4×2					46	〃						
17	〃	小穴		○		47	〃						
18	〃					48	〃		○		陶器		
19	32×1					49	〃						
20	25×1					50	2×2						
21	4×2					51	7×1			○			
22	〃					52	29×1						
23	〃					53	4×2						
24	〃	溝				54	〃				○多 陶器		
25	〃					55	〃						
26	2×2					56	〃	小穴		○			
27	4×2					57	3×1.5	小穴					
28	〃					58	2×2				陶器		
29	〃			○		59	4×2						
30	〃			○		60	5×1						

第1-1表 試掘調査結果一覧表



上野都市計画図No.35・36

No	規模(m)	遺構	遺物			
			須恵器	土師器	瓦器	その他
61	4×2					
62	〃					
63	〃			○		
64	〃		○	○		
65	4×1	溝(?)	○多	○多	○多	
66	44×1		○	○	○	
67	4×2					
68	4×1			○		
69	〃		○			
70	5×1					
71	10×1					
72	4×2		○	○	○	
73	9×1					
74	4×2		○	○	○	
75	〃		○	○	○	
76	〃					
77	〃			○	○	陶器
78	〃			○	○	
79	〃		○	○	○	山茶碗・陶器
80	〃	小穴、溝	○	○	○	
81	4×1	溝	○	○	○	
82	4×2		○	○	○	
83	2×2		○	○多	○多	
84	〃		○	○	○	
85	4×2		○	○	○	
86	〃	土塚	○	○多	○多	
87	〃			○	○	陶器
88	〃			○多	○多	
89	〃	小穴	○	○		



第1-3図 試掘坑No.40出土遺物(1:4)

される小規模な古墳が点在するに過ぎず、前二者地域に比べ劣勢の指摘をまぬがれえない。また、この時代の遺跡も少なく、東垣内遺跡(9)などがある程度である。ただ、向芝の南の丘陵には、実態はよく解っていないが奥山古窯跡(10)があり、注目される。

一方、歴史時代に入ると、下友生に白鳳期の広見遺跡(11)があり、蓮池には昭和56年度の発掘調査により奈良～平安時代の公的性格を窺わせる掘立柱建物群が検出された蓮池代遺跡(12)がある。また、友生盆地の北西の台地上には、伊賀国分寺跡(13)及び同尼寺と推定される長楽山廃寺跡(14)が所在し、国府もその北西方約3kmの上野市印代あたりにおかれたものと推定されている^④。

また、実際の施行時期については議論あるところだが、久米川左岸の中友生の南西の水田部には条里地割が遺存し、上友生の東側には小字名に「四ノ坪」という坪付名が残っている。

一方、高名な天喜四(1056)年の「散位藤原實遠

所領讓狀案」(平安遺文763号)には、

(前 略)

大内郷

一處

友生村 四至 東限喰代西山 南限山
西限久米河橋 北限国分寺
(後 略)

とあり、当時、友生盆地は伊賀郡大内郷に属する、藤原実遠の荘園の一つであった事がわかる。

続いて、中世に入ると、伊賀盆地では、小規模な

城館が多数分布する状況となるが、久米川流域でも特に喰代盆地には、百地氏の居城(15)など12の城館が集中して存在し、伊賀盆地有数の城館集中地域となっている。一方、友生盆地には、西岡氏館(16)・中切館(17)・田中氏城(18)・日野地氏館(19)・沢城(20)など10の城館が存在する。また、中世寺院として、阿弥陀寺跡(21)・長楽寺跡(22)があり、集落遺跡の調査例として、喰代の馬場遺跡^⑥(23)がある。

2. 試掘調査

昭和58年度上野東部地区県営圃場整備事業地は、友生盆地の内、久米川右岸で中友生から下友生にかけての県道上野・中村線以南の一带に及ぶものであった。事業地内について昭和58年1月に分布調査を行い、その結果に基付き、試掘調査を同年3～4月及び一部7月に実施した。試掘調査は、4m×2mの試掘坑を基本とし、遺物の散布が確認された部分を中心に事業計画の土地削平度合を勘案して、第3-2図に示した如く総計89箇所で行った。

その結果の一覧は、第3-1表である。すなわち、字大門を中心とするNo15～17(大門遺跡)、字東垣内のNo29～48(東垣内遺跡)、字淵のNo51・52(淵遺跡)、字後殿のNo64・65(後殿A遺跡)、同じくNo72～74(後殿B遺跡)、字岸之上を中心とするNo79～89(岸之上遺跡)に於いて、遺構あるいは遺物の多数出土が確認された。特に、東垣内遺跡の試掘坑No40では、溝の一部が検出され、埋土より土師器小型丸底壺・壺・高杯が一括出土した。また、大門遺跡については北側、岸之上遺跡については北・東側が今回の事業予定地外である為、試掘調査を行っていないので、各々の遺跡範囲は各方向にさらに広がるものと推定される。

以上の結果に基付き、淵遺跡については本調査、大門・岸之上遺跡については盛土対応及び削平部分の本調査、他の遺跡については、盛土対応及び削平部分の立ち会い調査を行う事となった。

なお、大門遺跡は試掘調査段階で中友生M遺跡、以下、東垣内遺跡は中友生K・L遺跡、淵遺跡は中友生J遺跡、後殿A遺跡は中友生A遺跡、後殿B遺

跡は中友生C遺跡、岸之上遺跡は中友生B遺跡と各々呼称されていたが、本報告にあたり、各々所在地の小字名をとって、本文中に使用してある名称に変更した。

東垣内遺跡試掘坑No40出土土器(第3-3図)

土師器

小型丸底壺(1) 口径9.1cm 体部径9.5cm 器高8.9cmで口縁部の比較的長いものである。体部は、やや偏平な球形を呈し、口縁部は「く」の字形に外反して伸び、端部は丸くおさまる。口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面は指オサエ後ナデで平滑に仕上げている。胎土は、細砂粒、赤褐色土粒をわずかに含むが、よくしまり、淡赤褐色を呈する。体部に径約3cmの黒斑あり。

壺(2) 口径15cmで口縁部厚手の壺である。口縁部は、「く」の字形に外反してまっすぐ伸び、端部は丸くおさまるが、端部外面直下にわずかな段がみられる。体部は、口縁部に比してやや薄い。口縁部内外面ともヨコナデ、内側口縁部と体部の境に指オサエ痕が一行にならぶ。胎土は、(1)と同じだが、赤褐色土粒は含まない。

高杯(3) 推定口径16.8cm 器高13.4cmである。杯部は、外面やや下方に弱い稜を残す深目のもので、口縁部は、ほぼまっすぐ斜め外方に開いて伸び、端部は丸くおさまる。内面及び外面稜までヨコナデ。脚部は、筒状部分に偏平に近く開いた裾部がつくもので、裾端部は角をなしておさまる。裾部内外面ともヨコナデ。また、杯部と脚部は、挿入法で接合されている。胎土は、(1)と同じで、口縁部外面の一

部に黒斑あり。

以上、3点は試掘塚No40溝中一括出土のもので、

5世紀中～後半の所産と考えられる。

3. 遺構

本遺跡は、久米川中流右岸に立地し、現況は水田である。今回の調査は、遺跡南東部の圃場整備により削平される約240㎡について実施した。(第3-4図)

調査区の基本層序は、第Ⅰ層：灰褐色土(耕土)、第Ⅱ層：黄褐色強粘質土(床土)、第Ⅲ層：茶褐色粘質土、第Ⅳ層：淡橙色粘質土(地山)であり、第Ⅳ層(地山)までの深さは約60cmである。遺物包含層は、第Ⅲ層である。

遺構は、第Ⅳ層(地山)上面でしか確認できなかったが、主なものとして奈良時代の竪穴住居・土塚、平安時代後葉の竪穴住居・土塚がある。また、調査区北西隅で小穴がまとまって検出されたが、建物等にはまとまらなかった。以下、各々の遺構について概述する。(第3-5図)

1. 竪穴住居

SB2・3・4

調査区中央東寄りで重複して検出されたものである。SB4は、東西約2.8m深さ約0.1mの方形プランのものだが、SB3に切られて規模不明、SB3は、一辺約3.6m深さ約0.3mの方形プラン、SB2は、東西約2.6m×南北約4.0m深さ約0.2mの方形プランのものである。いずれも、柱穴・カマドは検出されなかった。土師器(皿、羽釜)、瓦器(椀、皿)などが出土しているが、遺物にはほとんど時期差は認められない。埋土の若干の差異による切り合いにより、SB4→SB3→SB2の順に新しいものと考えられる。

SB6

調査区中央南寄りで検出された約4.7m×約3.4m深さ約0.2mの方形プランの竪穴住居である。長軸方向は、N58°Eである。住居内壁沿いの東・北・西の各辺に幅30cm前後、深さ20cm前後の周溝がめぐり、南隅を除き径20~30cm深さ20cm前後の柱穴が検出された。また、東隅に焼土が検出され、カマドの存在が想定される。土師器(皿・甕)、須恵器(杯蓋)が出土した。

SB7

SB6の南西で検出された約4.7m×(3m以上)深さ約0.2mの方形プランの竪穴住居と考えられるものである。周溝・柱穴等は検出されなかった。土師器(椀・甕)、須恵器(高杯)が出土した。

2. 土塚

SK1

SB4の南東で検出された約2.3m×約2.0m深さ約0.2mの略円形を呈する土塚である。小規模な土塚であるが、土師器(皿・羽釜)、瓦器(椀)、瓦質土器鍋、瓦など多数が、おり重なってぎっしり詰った状態で出土した。

SK5

調査区西部で検出された約0.8m×約0.6m深さ約0.2mの方形の土塚である。埋土に炭化物を含み、須恵器(甕)などが出土した。

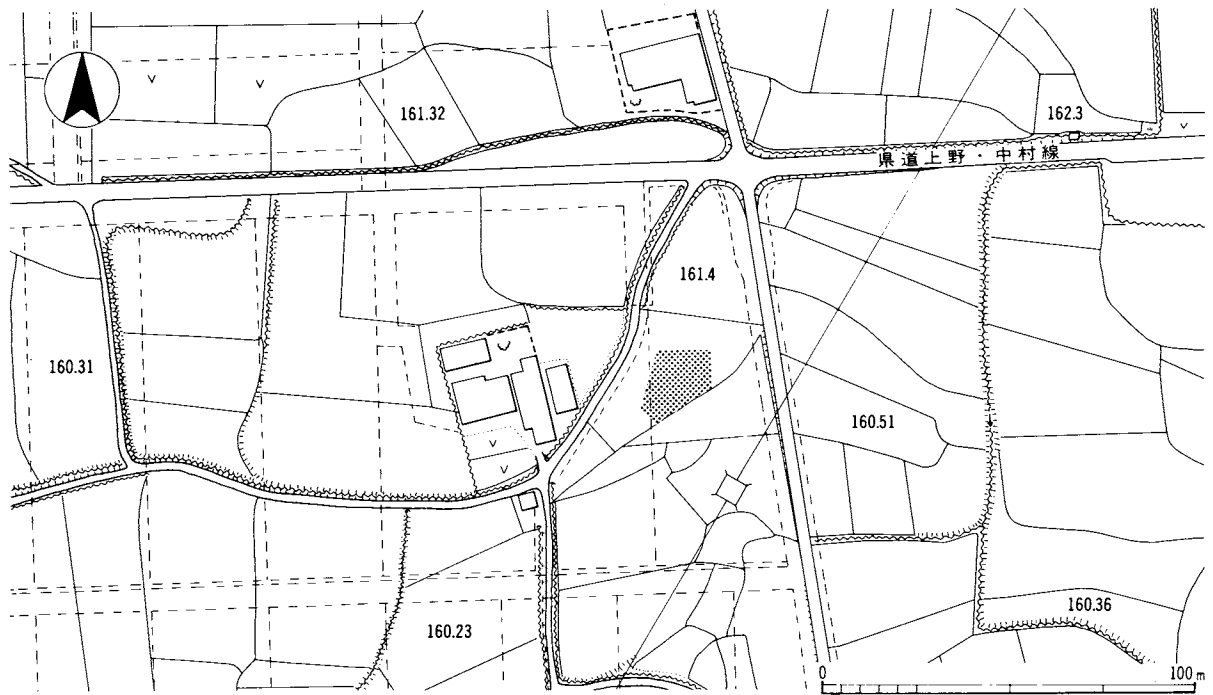
SK8

SB7の南で検出された約3m×(2m以上)深さ約0.1mのカギ形の土塚である。遺物は出土しなかった。

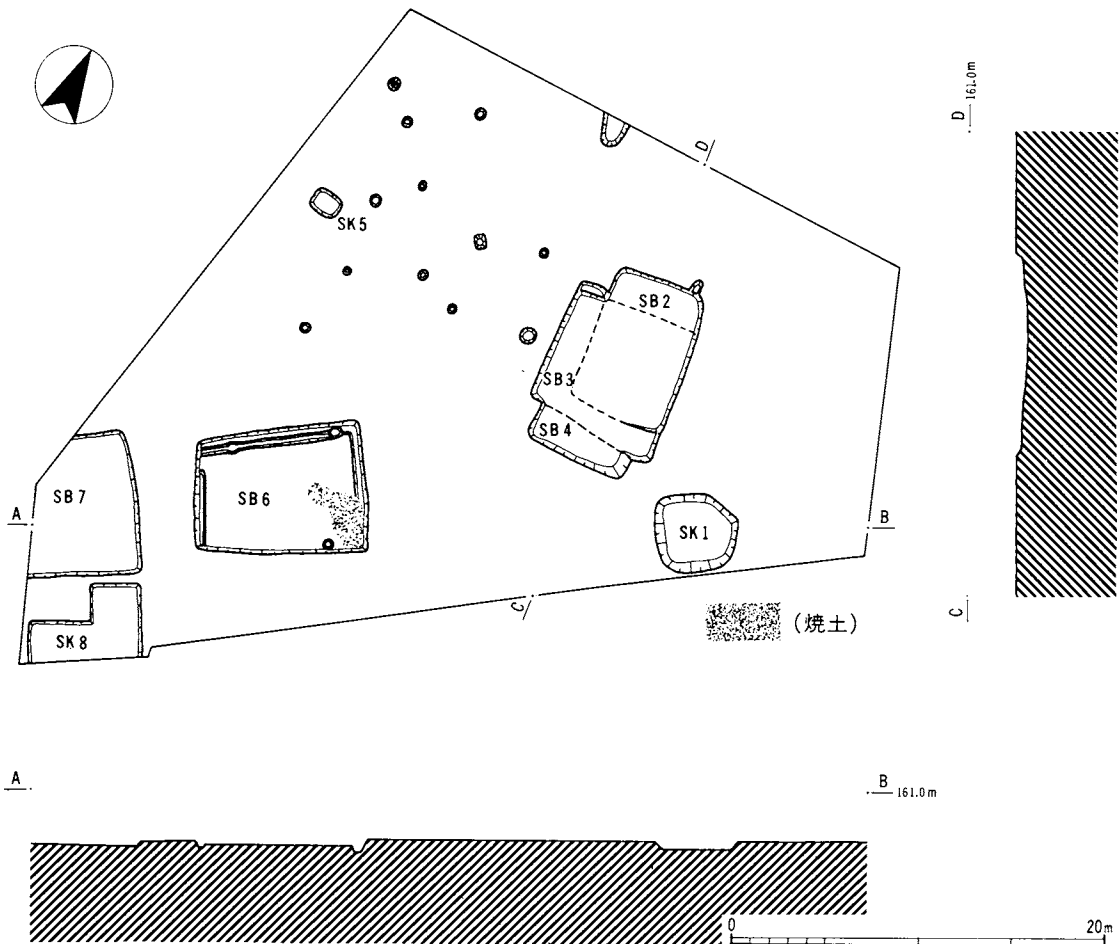
4. 遺物

出土土器は、すべて土器・土製品で、遺構から出土したものがほとんどである。出土量は、調査面積に比して比較的多く、中でもSK1からはその規模に比しかなりの出土量があった。須恵器・土師器・

瓦器・瓦質土器・瓦があり、時期的に大別すると奈良時代と平安時代後葉の遺物に分かれる。前者はSK5、SB6・7、後者はSK1・SB2~4の遺物で、各々各時代の良好な資料である。



第1-4図 発掘区位置図 (1:2000)



第1-5図 遺構平面図 (1:200)

以下、図示し得た主な遺物について遺構別に概述する。なお、各遺物の計測値などについては、表3-2~7を併照されたい。

1、奈良時代の土器

(1) SB6の土器

須恵器杯蓋(4) 偏平な擬宝珠様のつまみをもつ杯蓋である。天井部は、平坦な中央部からやや丸味をおびながら伸び、口縁部は下方にやや内傾気味に小さくおりまげられて、端部は丸くおさまる。天井部を程は、回転ヘラケズリされ、他はロクロ水挽きされる。

土師器皿(5) 平坦な底部から、口縁部はやや丸味をもって立ち上がり、端部はわずかに外反して丸くおさまる。口縁部はヨコナデ、底部は不調整のa手法である。褐色を呈し、軟質である。

土師器小型甕(6) 口径14.7cmの小型の甕である。球形の底部から続く体部は垂直に伸びる。口縁部は、外面はなだらかに内面はやや角をなして斜め外方にまっすぐ伸び、端部は丸くおさまる。内底部は、外方向への細かいハケ目、体部内面は、左上方への細かいハケ目が施され、口縁部内外面ともヨコナデ調整される。体部外面は器壁が弱く調整不明。炎を受けたのか外面に赤褐色を呈する部分もあるが、全体に淡褐色を呈し、軟質である。

土師器甕A(7・8) 体部から「く」の字形に外反して、内湾気味に伸びる口縁部をもつ甕である。7は、口縁部中央が把厚して内湾し、端部がわずかに外方につままれて丸くおさまる。8は、口縁部中央がやや角張り気味になって内湾し、端部に1条の沈線がめぐり、いずれも、口縁部内外ともにヨコナデ調整され、8は、体部外面に3cm強で13条の右下方へのハケ目、内面に同様の下方へのハケ目が施される。砂粒を含み、やや白、ぼい色調を呈する。

(2) SB7の土器

須恵器高杯(10) 小型の高杯脚部である。「ハ」の字形に開き、端部近くではほぼ水平になる。端部は、ごく浅い凹面状の面をなし、下端は下方につまみ出される。全体にロクロ水挽きされる。

土師器椀(9) 浅い丸底の椀である。粘土紐巻き上げ成形され、内底部は不定方向ナデ、口縁部は

内外面ともヨコナデ、底部は指オサエによる凹凸が残る。

土師器甕A(12) 長胴で上方がすぼまり気味になる体部から「く」の字形に外反する口縁部は、中央が肥厚して内湾気味に伸び、端部は内側上方にわずかにつまみ出されて丸くおさまる。口縁部内外面ともヨコナデされ、体部外面は7~11本/cmの右下方への細かいハケ目、内面は9本/cmの右下方への細かいハケ目が施された後下半のみ上方へのナデあげが施される。

土師器甕B(11) 球形に近い体部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ甕である。口縁部は、中央でやや肥厚するもののほぼまっすぐ斜め外方に伸び、端面は外傾して1条の浅い沈線がめぐらされる。口縁部外面はヨコナデ、内面は左方向への細かいハケ目が施される。体部外面は、8本/cmの細かい下方へのハケ目が施された後下半部のみ下方へへら削られる。体部内面は、上半に10本/cmの左下方への細かいハケ目、下半に同様の左方向への細かいハケ目が施される。

土師器甕C(13・14) 長胴で上部がすぼまる体部から、「く」の字形に強く外反してまっすぐ伸びる口縁部をもつ甕である。口縁部は、外面下半がやや厚く、端部は丸くおさまる。口縁部外面はヨコナデ、内面は左方の細かいハケ目が施される。体部外面は、7~8本/cmの細かいハケ目が右下方及び下方へ施され、14は残存部分下端に上方へのへら削りが認められる。体部内面は、8~9本/cmの細かいハケ目が左方向に施される。

土師器甕D(15) 半球形に近い体部から強く外反する口縁部をもち、体部に一對の把手がつく甕である。口縁部の外反はかなり強く水平に近くなり、端部は垂直の面をはなす。端面に細く浅い沈線がめぐり、口縁部外面はヨコナデ、内面は左方向への細かいハケ目が長さ約3cmで連続して施される。体部外面は、上部に16本/cmの細かいハケ目が、その下方に20本/cmの細かいハケ目が右下方へ施され、下半は下方へのへら削りが施される。体部内面は、上半に左方向の8~9本/cmの細かいハケ目が施され、下半に不定方向の4~5本/cmのやや粗いハケ目が施される。把手は、うすい粘土板の外側両端を内側に折り

曲げて作られた如き三角形状のもので、体部の中程位に貼り付けられ、やや上部に曲げられている。接合部のみ上から不定方向の短いハケ目が施される。全体に淡橙褐色を呈するが、外面の一部に炎を受けたのか赤褐色化した部分とうすく煤が付着する部分がある。

(3) SK5の土器

須恵器甕 (16) 丸味をおびた体部から、口縁部は「く」の字形に外反して斜め外方にまっすぐ伸びる。端部はわずかに外傾する面をなし、内端が内側上方につまみ出されて凹面状になる。体部外面は格子叩きの後数条の細いナデにより線状に消されている。内面は円弧状叩きが施される。8世紀代の所産であろう。

2. 平安時代後葉の土器

(1) SK1の土器

瓦器碗 (17~36・63~65) 底部破片の検討により推定最低個体数137個体に及ぶ多量の出土をみた。ここではその内、完形もしくは全体形が容易に想定でき得るものについて報告を行う。

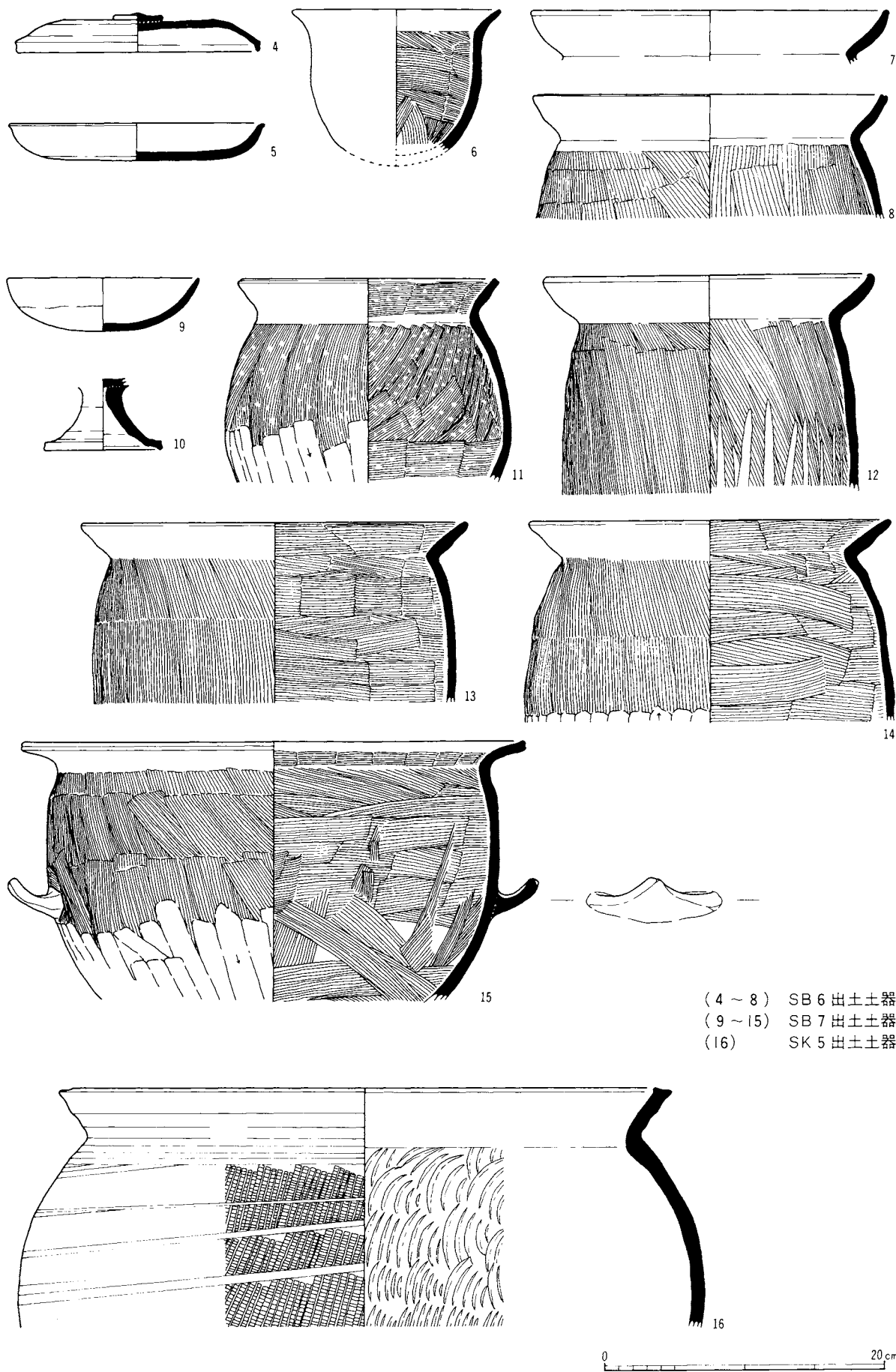
出土瓦器碗は、法量・形態等によってA~Dの各タイプに分類できる。各々、碗A (17~28) は口径16cm前後を中心とするやや大ぶりのもの、碗B (29~35) は口径14cm前後のやや小ぶりのもの、碗C (36)

は他に比し扁平なもの、碗D (63~65) は底部高台の内側中央にさらに小さな高台状のものがつくもの^⑦ (ここでは以下、内小高台をもつものと仮称する) である。器高指数は、碗Cを除き、ややバラつきはあるが39前後である。碗Cは、器高指数27とかなり低い。一方、出土瓦器碗全体について、胎土は精選され良質であるが、土壇埋土の土壌特質によるものか、あるいは他の要因によるものか表面のイブシが消失しているものがほとんどである。また、土器そのものの遺存状況が悪く軟質となっているものが多いが、逆に焼成時に還元焰焼成を受けたかと思われる程の硬質のものも少なからずあり、その中に焼き歪みのみられるものもある。体部内外面および見込みのミガキは、器壁の弱さのために残っていないものも多く、また残っていてもイブシが消失しているための素地につけられた暗文としてのみ見られる場合がほとんどである。この制約を前提としてみれば、体部内外面のミガキ1本の幅は1mm前後がほとんどであり、見込みのミガキはこれに比しやや太い程度である。

碗A (17~28) 口径16cm前後、高さ5.6~6.6cmで、17~21・23・26~28はやや平底状の、22・24・25は丸底状の底部から、体部が丸味をもちながら外上方に伸びるもので、口縁部は外面ヨコナデによりやや外反気味になるもの (17~19・21・22・27) と

	No.	種類	器形	大きさ (cm)			胎土	遺存	色調	備考
				口径	器高	その他				
SB6	4	須恵器	杯蓋	11.7	2.7		良	良	青灰色	2/3ヘラケズリ
	5	土師器	皿	18.2	2.6		やや良	不良	茶褐色	a手法
	6	〃	小型甕	14.7	—	胴部径12.2	細砂多含	〃	淡褐灰色	外面赤化
	7	〃	甕A	25.0	—		細砂含	並	乳橙白色	
	8	〃	〃	24.4	—		〃	良	淡褐色	
SB7	9	〃	碗	13.6	3.8		良	〃	明茶褐色	
	10	須恵器	高杯	—	—	脚部径8.4	砂少含	〃	青灰色	脚高4.4
	11	土師器	甕B	18.8	—	胴部径20.6	細砂含	良好	褐色	
	12	〃	〃A	23.0	—		〃	〃	乳白色	
	13	〃	〃C	27.2	—		細砂少含	〃	褐色	
	14	〃	〃C	25.4	—		〃	〃	〃	
15	〃	〃D	35.8	—	胴部径32.6	〃	〃	淡橙褐色	把手あり	
SK5	16	須恵器	甕	41.6	—	胴部径48.8	良	良	青灰色	

第1-2表 SK5、SB6・7出土土器観察表



(4 ~ 8) SB 6 出土土器
 (9 ~ 15) SB 7 出土土器
 (16) SK 5 出土土器

第 1—6 图 SK 5、SB 6·7 出土土器实测图 (1:4)

そのまま伸びるもの(20・23・25・26)がある。器壁は体部中央で4mmとやや薄手である。口縁部内側には1条の沈線がめぐり、底部には断面逆台形の高台が20・23・24・27は直立気味に、他は外開して貼り付けられる。体部外面のミガキは、25を除いて下半部に空隙を残しており、17・27は5区分、18・19・24・25は4区分して密なミガキが施され、18・19はその上方に連続したミガキが施される。他は不詳である。体部内面には、口縁部内側の沈線直下からやや不整合はみられるが連続圏線状のミガキが密に施される。見込みのミガキは、17~21は粗いジグザ

グ状、23は平行線状、24~26は格子状ないしは斜格子状となっており、各々ミガキの端は内面の連続圏線状ミガキに切られる。他は不詳である。

椀B(29~35) 口径14cm前後、高さ5.1~5.8cmで椀Aと同様の形態のもので、底部は29~33がやや平底状、34・35が丸底状となり、口縁部はいずれもやや外反気味となる。器壁は、体部中央で4mm前後とやや薄手である。口縁部内側には1条の沈線がめぐり、底部には断面逆台形の高台が外開して貼り付けられる。体部外面のミガキは、下半部に空隙を残して30・31・33・34は4区分して密に施されるが、

No.	種類	器形	大 き さ (cm)			胎土	遺存	色調	備考
			口径	器高	その他				
37	土師器	小皿A	9.4	1.5		細砂少含	並	淡橙灰色	
38	〃	〃	9.4	1.9		良	良	淡灰褐色	
39	〃	〃	9.4	1.6		細砂少含	並	淡橙灰色	
40	〃	〃	9.8	—		〃	〃	〃	
41	〃	〃	9.4	1.1		〃	〃	〃	
42	〃	〃	9.5	1.5		良	良	淡橙褐色	
43	〃	〃	8.7	1.7		細砂少含	〃	橙褐色	
44	〃	〃	9.6	1.6		良	〃	橙灰色	
45	〃	〃	9.6	1.9		精良	〃	淡橙褐色	
46	〃	小皿B	10.3	—		細砂少含	良好	青灰色	
47	〃	〃	10.2	1.4		良	〃	明橙色	
48	〃	〃	9.8	1.6		細砂少含	並	淡橙灰色	
49	〃	〃	9.7	—		〃	〃	〃	
50	〃	〃	9.8	1.8		良	良	〃	
51	〃	〃	9.4	2.0		〃	〃	淡橙褐色	
52	〃	〃	9.0	1.5		〃	〃	淡灰褐色	
53	〃	〃	9.2	1.7		〃	〃	淡橙褐色	
54	〃	小皿C	8.9	0.9		精良	良好	青灰色	
55	〃	〃	8.2	0.8		細砂少含	〃	灰白色	
56	〃	〃	8.0	1.2		〃	〃	〃	
57	〃	小皿D	10.6	1.3		やや砂含	並	淡橙褐色	
58	〃	小皿E	9.2	1.0		砂含	〃	淡橙灰色	
59	〃	土釜	—	—		〃	良	〃	
60	〃	皿	14.8	—		良	〃	灰褐色	
61	〃	〃	14.2	2.8		〃	〃	淡茶褐色	
62	〃	〃	15.0	3.0		〃	〃	暗茶褐色	
63	瓦質土器	鍋	20.4	8.9	胴部径21.2	〃	〃	乳白灰色	内面ミガキあり

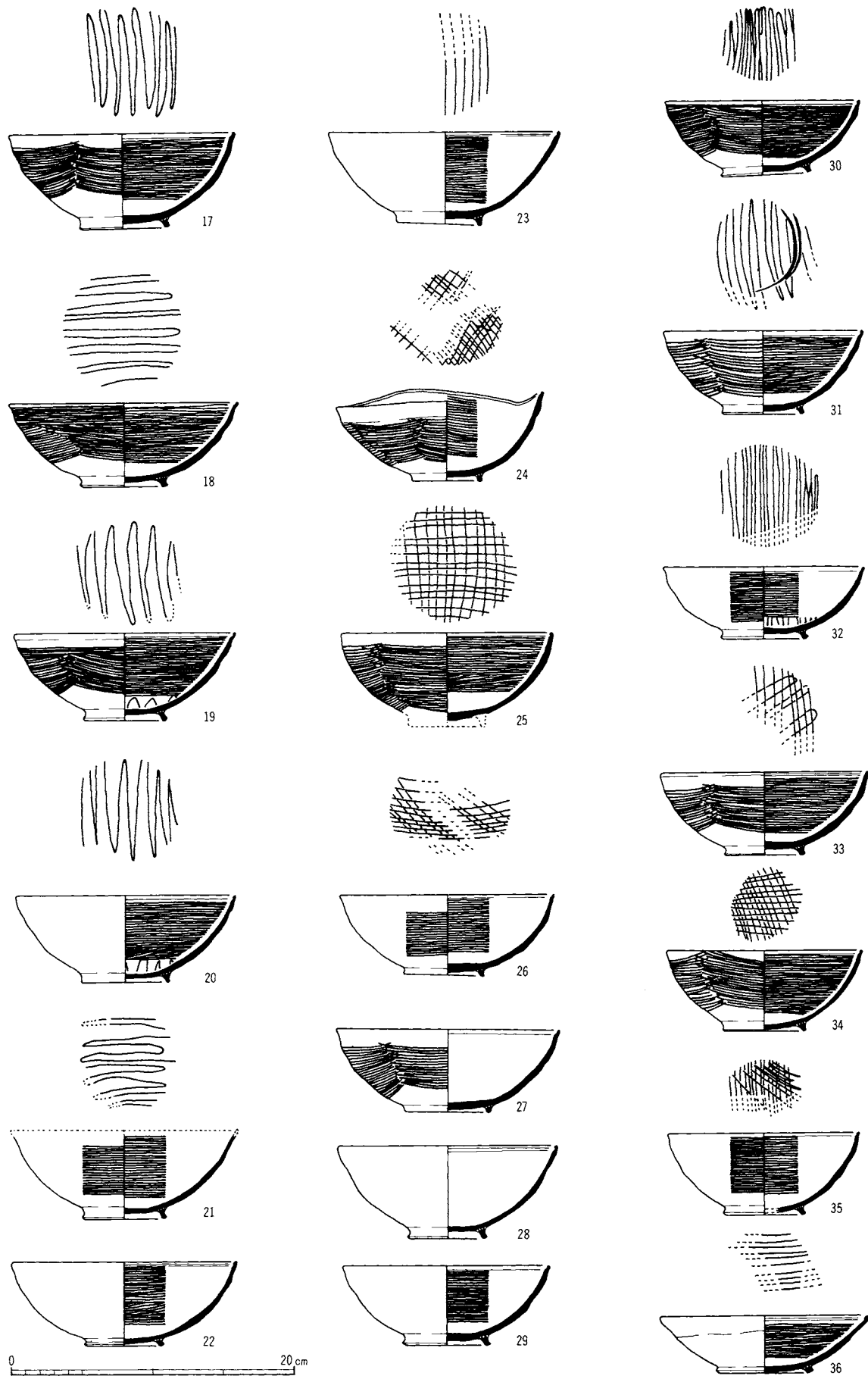
第1-3 SK1出土土師器・瓦質土器観察表

No.	類別	大 き き (cm)				胎 土	遺 存	外面ミガキ	内 面 ミガキ	見込みミガキ	器高 指数	深さ 指数
		口 径	高台径	器 高	深 さ							
17	椀 A	16.0	5.8	6.6	5.8	良	並	5分割 密	密	ジグザグ状	41	36
18	〃	16.2	5.4	5.8	5.1	精 良	良 好	4分割 密	〃	〃	36	31
19	〃	15.8	5.5	6.1	5.4	良	並	〃 〃	〃	〃	39	34
20	〃	15.6	6.0	6.2	5.6	〃	良	—	〃	〃	39	36
21	〃	—	5.5	—	—	〃	〃	—	〃	〃	—	—
22	〃	15.9	5.1	5.8	5.4	〃	〃	—	〃	—	36	34
23	〃	16.4	5.5	6.4	5.5	〃	〃	—	〃	平行線状	39	34
24	〃	—	4.8	—	—	精 良	良 好	4分割 密	〃	格子状	—	—
25	〃	15.0	—	—	5.6	良	良	〃 〃	〃	〃	—	37
26	〃	15.2	5.2	5.6	4.9	〃	〃	密	〃	斜格子状	37	32
27	〃	15.9	5.7	5.7	5.2	〃	〃	5分割 密	〃	—	36	33
28	〃	15.5	5.5	6.6	5.7	〃	並	—	—	—	43	37
29	椀 B	14.7	5.6	5.5	4.7	〃	良	—	密	—	37	32
30	〃	13.8	6.0	5.2	4.6	精 良	良 好	4分割 密	〃	平行線状	38	33
31	〃	14.0	5.4	5.8	5.3	〃	〃	〃 やや密	〃	ジグザグ状	41	38
32	〃	14.2	5.6	5.1	4.3	〃	良	密	〃	平行線状	36	30
33	〃	14.6	5.2	5.8	4.9	良	並	4分割 密	〃	斜格子状	40	34
34	〃	13.9	5.5	5.6	5.3	良 好	良	〃 〃	〃	〃	40	38
35	〃	13.6	5.3	5.8	—	精 良	良 好	密	〃	〃	40	—
36	椀 C	14.6	6.2	3.9	3.6	〃	〃	なし	〃	平行線状	27	25
63	椀 D	16.0	5.6	6.2	5.5	良	良	4分割やや密	〃	斜格子状	39	34
64	〃	15.6	5.6	6.6	5.8	〃	〃	—	〃	〃	42	37
65	〃	—	5.2	—	—	良	不 良	—	—	—	—	—

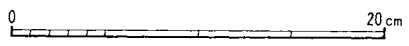
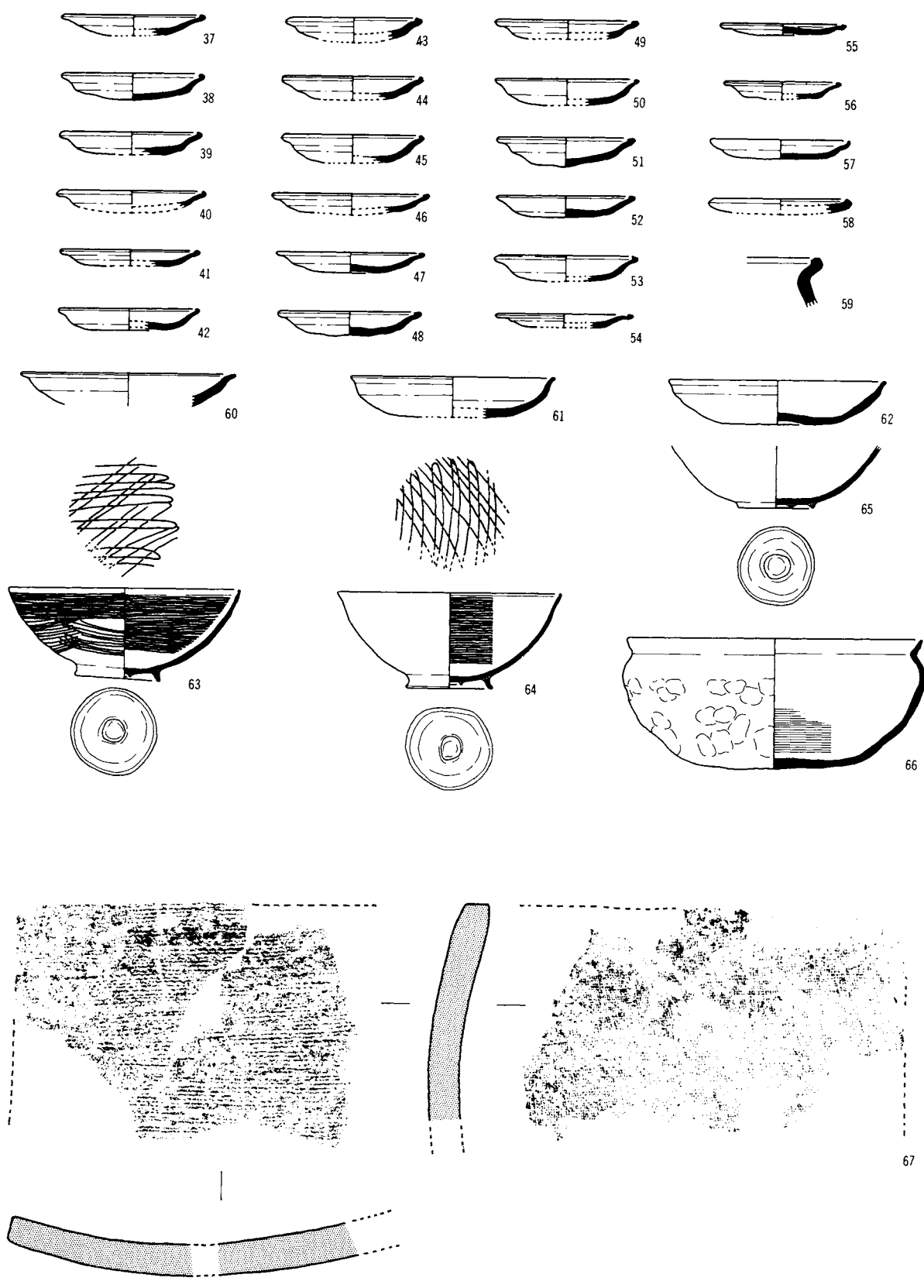
第1-4表 SK1出土瓦器観察表

No.	大 き き (cm)			胎 土	遺 存	色 調	凸面(本/cm)	凹面(本/cm)	備 考
	全 長	幅	厚						
67	—	—	2.1	細砂含	やや良	淡乳赤色	布目 タテ6 ヨコ7	縄叩 3.5	平瓦B
68	34.0	~25.4	2.0	砂 含	不 良	暗灰青色	縄叩 3	不 詳	
69	—	—	2.1	細砂少含	良 好	青 灰 色	〃 3	布目 タテ8 ヨコ6.5	凹面模骨痕
70	—	24.0	1.8	砂少含	〃	〃	〃 3	タテ9 ヨコ8	
71	—	—	1.5	砂少含	〃	淡白赤色	〃 3.5	タテ6 ヨコ7	
72	—	32.1	2.1	砂 含	不 良	淡乳赤色	布目 タテ6.5 ヨコ6	縄叩 3.5	平瓦B
73	—	—	1.8	細砂含	〃	淡 褐 色	縄叩 2.5	不 詳	

第1-5表 SK1出土瓦観察表



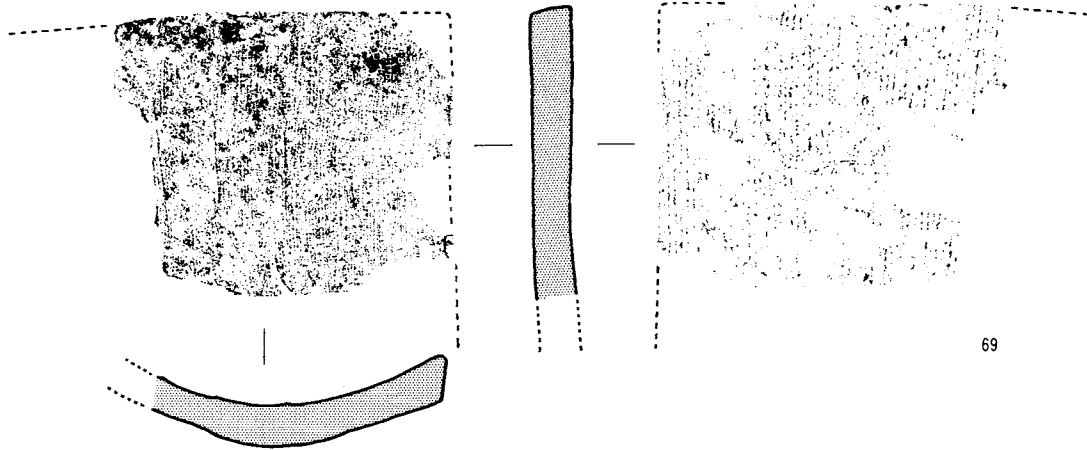
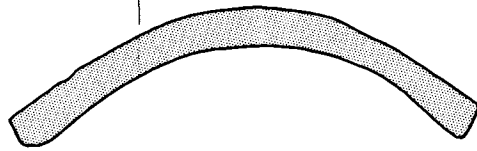
第1-7图 SK1出土器实测图(1:4)



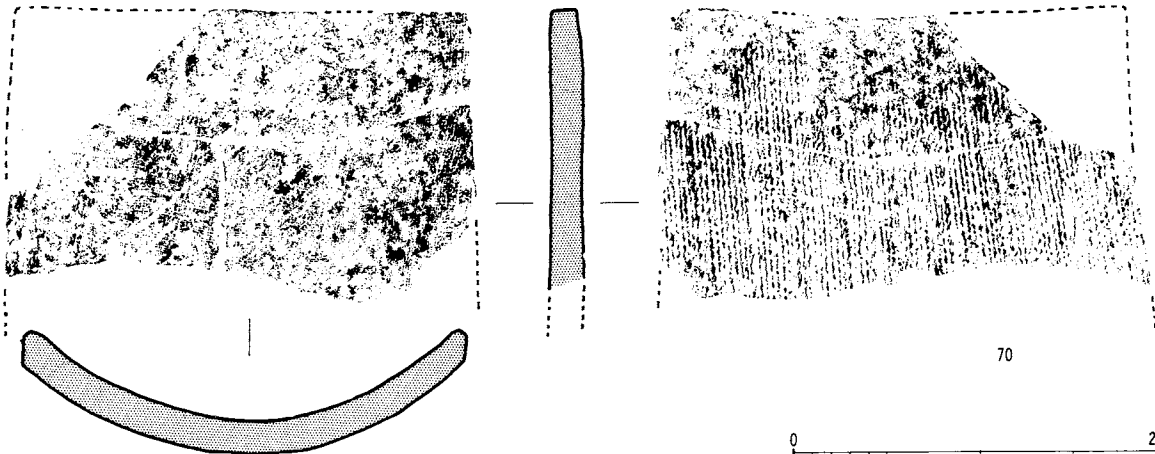
第 1—8 图 SK 1 出土土器实测图·瓦拓影 (1 : 4)



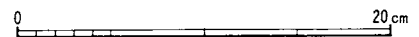
68



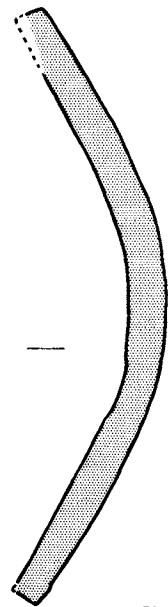
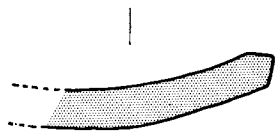
69



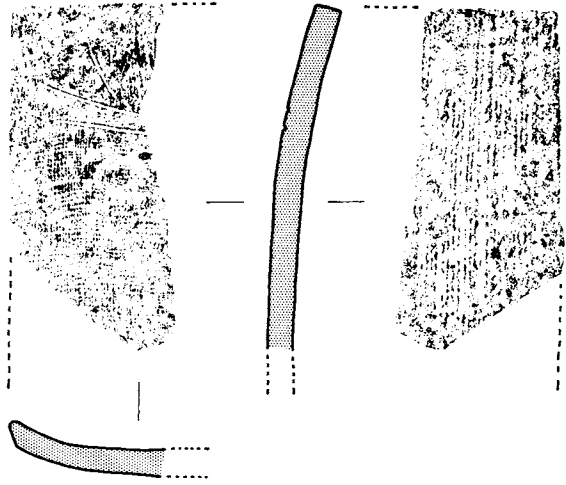
70



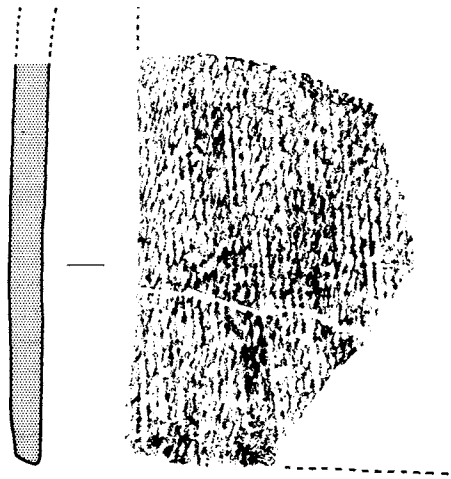
第 1 - 9 图 SK 1 出土瓦拓影 (1 : 4)



72



71



73



第 1-10 图 SK 1 出土瓦拓影 (1:4)

31のみやや粗い。他は不詳である。体部内面には、口縁部内側の沈線直下からやや不整合はみられるが連続圈状のミガキが密に施される。見込みのミガキは、31はジグザグ状、30・32はやや密な平行線状、33は斜格子状、34・35はやや密な斜格子状となり、いずれもミガキの端は内面の連続圈線状ミガキに切られる。29は不詳である。

椀C (36) 口径14.6cm高さ3.9cm器高指数26の偏平な椀である。やや丸味をもった底部から体部は直線的に外上方に開き、口縁部もそのまま伸び端部が内側に巻き込まれる^⑧。器壁は薄手で、底部に断面方形の高台が外開して貼り付けられる。体部外面にはミガキは認められず、内面には連続圈線状のミガキが施される。見込みには平行線状のミガキが施され、その端は内面のミガキに切られる。

椀D (63~65) 法量・形態は椀Aと同様で、底部高台の内側に内小高台をもつものである。ただし、器壁は椀Aに比しやや薄い。63・64は、外開するやや高く薄い高台の内側に径1.5cm前後高さ2mm強の内小高台がつき、65は、やや低い断面三角形の高台の内側に径1.7cm前後高さ2mm強の内小高台がつく。63・64は、見込みの暗文はやや粗い斜格子状で、体部内面は連続圈線状のミガキが密に施される。体部外面は、63はやや粗い4区分のミガキの上方に連続するミガキが施され、64は不詳である。65は器壁が弱くミガキ等の調整は不詳である。

瓦質土器鍋 (66) 口径20.4cm高さ8.9cmの鍋である。平坦な底部から、体部は外上方に立ち上がり、上半で内弯する。口縁部は「く」の字形に短く外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内外面から体部肩部まではヨコナデ、体部下半と底部は指オサエの凹凸が残る。内底部は不定方向ナデ、体部内面は範囲不詳だがミガキが施される。

土師器小皿 (37~58) ややバラつきがあるが、口径9cm前後を中心とした小皿で、形態等によりA~Eの各タイプに分類される。その内、A~Cはいわゆる「て」の字口縁の小皿である。

小皿A (37~45) 「て」の字口縁の小皿で、外反する口縁部の端部を内側に巻き込んで肥厚させ丸くおさめるものである。37~43は単に丸くおさめるのみであるのに対し、44・45は丸くおさめた端部外面

が浅い沈線状の凹面をなす。内底部は不定方向ナデ、口縁部内外面ともヨコナデ、底部は指オサエされる

小皿B (46~53) 「て」の字口縁の小皿で外反する口縁部の端部を内側に巻き込み、さらにその巻き込んだ部分の上面をナデて平坦面をつくるものである。46~51は単にナデて平坦面をつくるのみであるのに対して、52・53はさらにその内側端部を上方に引き出す。各部位の調整は皿Aと同じである。

小皿C (54~56) 小皿Bと同じ形態・調整のもので口径がやや小ぶりで高さが1cm前後とかなり偏平なものである。

小皿D (57) 外反する口縁部の端部を上方に引き上げ丸くおさめるものである。やや薄手で、内底部は不定方向ナデ、口縁部内外面ともヨコナデ、底部は指オサエ後ナデられている。

小皿E (58) 厚手の偏平な皿で口縁端が上方に肥厚し断面三角形になるもので、胎土は砂っぽい。

土師器皿 (60~62) やや丸味をもって外上方に立ち上がる口縁部の端部が外反する皿である。60は口縁端近くから、61は端部が、62は端部がやや外反する。いずれも内底部は不定方向ナデ、口縁部内面から外面上半まではヨコナデ、口縁部外面下半と底部は不調整である。60・61は褐色系、62は灰紫色を呈する。

土師器土釜 (59) 土釜の口縁部の小片である。口縁部は、内傾する頸部から「く」の字形に外反し、端部は内上方に折り曲げられて肥厚する。ヨコナデ調整される。

平瓦 (67~73) 出土した瓦は、すべて平瓦で、他の瓦はみられない。いずれも、一枚作りで成形され、断面観察によれば素地の粘土が波状にうねっている。凹面に布目、凸面に縄叩きのみられる通常のものA (68~71・73) と、通常とは逆反りし凹面に縄叩き、凸面に布目のみられるものB (67・72) がある。縄叩き縦位の不整合、布目の綴じ合せ痕はみられない。

平瓦A (68~71・73) 68は残存部より全体形を想定し得るもので、全長34cm、狭端幅23cm前後、厚さ2cm前後で、残存部分の重量より算定して全重量約3.3kgと推定されるものである。凹面は、布目が部分的に残るが器壁が弱いため不詳で片側端がナデ

られる。凸面は指オサエのため右上と左下に縄叩きのみられない部分がある。各端面は垂直、側面は一方の凹面側が丸く仕上げられ、調整は不詳である。

69は、凹面に模骨痕が残り端面近くは布目がナデ消される。凸面は縄叩きの上から部分的に指オサエされる。端面はほぼ垂直、側面は凹面が丸く仕上げられ、いずれもヘラ削りされる。

70は、凹面は布目の下に糸切り痕が残り、端面近くで布目がナデ消される。凸面の縄叩きはやや斜めになり、端面近くがナデ消される。端面はほぼ垂直、側面は凹面側が面取りされ、いずれもヘラ削りされる。

71は、やや薄手のものである。凹面はヒビ割れがわずかに見られ、布目の上に「＝」状のヘラ記号が記される。凸面は縄叩き。端面は凹面側が丸く仕上げられ、いずれもヘラ削りされる。

73は、凹面は部分的に布目、糸切り痕が残るが器壁が弱く不詳である。凸面はやや粗い縄叩きがやや斜めに施される。断面は斜めで、側面は凹面側が面取りされるが、調整は不詳である。

平瓦 B (67・72) 各部位の調整及び表面のヒビ割れを観察すると、本来平瓦 A と同様に製作されたものが、意識的か他の要因によってか逆反りにされたものと推測される。

67は、凹面は横位の縄叩きである。凸面は布目の下に糸切り痕がみられ、かなりのヒビ割れがある。端面は凸面側が面取りされ、側面は垂直。いずれもヘラ削りされる。

72は、凹面は横位の縄叩きで、横位に不整合がみられないので瓦幅を越える原体が使われたものと推測される。凸面は布目の下に糸切り痕がみられ、かなりヒビ割れがある。端面は凸面側が面取りされ、側面は垂直。いずれもヘラ削りされる。

(2) S B 2～4 の土器

瓦器 椀 (83～86) 84～86は、やや小さいが椀 A に、83は、椀 D に分類される。いずれも遺存状況が悪くイブシはすべて消失している。

椀 A (84～86) やや丸味を持った底部から、体部が丸味を持ちながら外上方に伸びるもので、86は口縁部がやや外反気味となる。器壁は、口縁部中央で、84が4 mm前後とやや薄手、85・86が5 mm前後と

やや厚手である。口縁部内側には1条の沈線がめぐり、底部には、84は薄い外開した高台が、85は断面逆台形の外開した高台が、86は断面逆台形の直立気味の高台が各々貼り付けられる。84は、ミガキはすべて不詳。85・86は、外面ミガキは不詳、内面は連続圏線状のミガキが密に施され、見込みには85がジグザグ状、86が格子状のミガキが施される。

椀 D (83) 底部のみの破片であるが、径5.9 cmの高台の内に断面三角形の内小高台が貼り付けられる。ミガキは、不詳である。

瓦器 皿 (82) 口径10.2 cm高さ2 cmの皿である。ややふくらむ底部から、口縁部は角をなして立ち上がり端部はやや外反して丸くおさまる。器壁が弱いためイブシは消失しており、ミガキも不詳である。

土師器 小皿 (74～76) いわゆる「て」の字口縁の小皿である。74は小皿 C、75・76は小皿 A に分類される。

小皿 A (75・76) 外反する口縁部の端部を内側に巻き込んで肥厚させ丸くおさめるもので、76は巻き込んだ端部がやや厚くなっている。口縁部はヨコナデ、底部は指オサエされる。

小皿 C (74) 口径7.8 cmと小さなもので、外反する口縁部の端部を内側に巻き込みさらにその上面をナデで平坦面をつくるものである。口縁部はヨコナデ、底部は指オサエされる。

土師器 皿 (77～79) 77は、やや小ぶりで厚手のものである。丸味をもって外上方にのびる口縁部は、端部近くで外反し、丸くおさまる。78は、丸味をもって立ち上がる口縁部の端部が外反し丸くおさまるものである。79は、やや大ぶりで、角をなして立ち上がる口縁部の端部がやや外反するものである。いずれも口縁部内面から外面上半までヨコナデ、底部不調整である。77・79は褐色系、78は淡橙灰色を呈する。

土師器 土釜 (80・81) 80は口径21.5 cmで、内傾する頸部から、口縁部は「く」の字形に外反し、端部が上方に折り曲げられて肥厚するものである。ヨコナデ調整され、外反する外面が特に強くナデられる。81は、口径18.6 cmとやや小ぶりで、内傾する頸部から、口縁部は「く」の字形に外反し端部が内上方にやや肥厚して丸くおさまるものである。肩部に

幅 1.8 cm の鏝が水平やや上向きに貼り付けられる。口縁部内外面及び鏝部はヨコナデされ、特に外反する外面が強くナデられる。鏝のついている内面に径 3 cm 程の指圧痕がならぶ。

(3) その他の土器

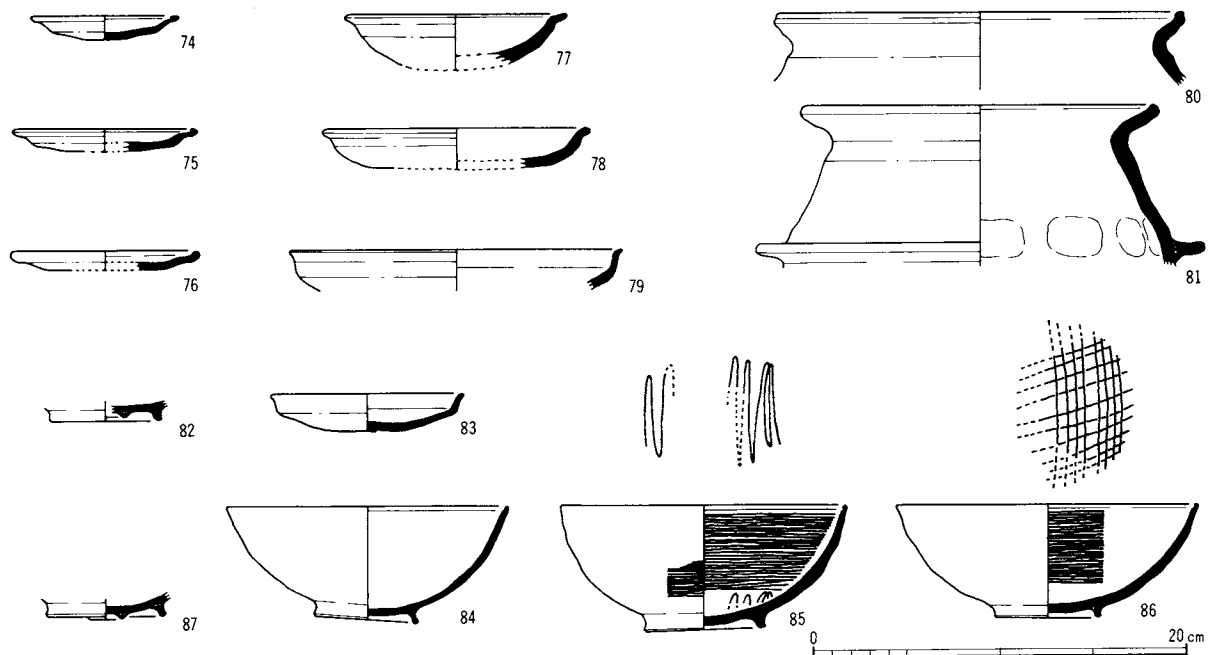
瓦器椀 (87) 包含層出土の底部の破片である。径 6 cm で外開する高台の内側に断面三角形で径 1.7 cm 高さ 3 cm の内小高台が貼り付けられる。この内小高台は、底部の丸みにより本来の高台より約 1 mm 強突出する。見込みのミガキは不詳である。

No.	種類	器形	大きさ (cm)			胎土	遺存	色調	備考
			口径	器高	その他				
74	土師器	小皿 C	7.8	1.2		砂含良	良好	青灰色	
75	〃	〃 A	9.5	1.2		精良	〃	〃	
76	〃	〃 A	9.8	1.0		細砂含	並	淡褐色	
77	〃	皿	11.8	—		良	良	〃	
78	〃	〃	13.8	2.1		細砂含	並	淡橙灰色	
79	〃	〃	17.8	—		良	良	漆褐色	
80	〃	土釜	21.5	—		砂多含	並	淡暗褐色	
81	〃	〃	18.6	—	鏝径 24.2	良	〃	淡橙白色	
82	瓦器	皿	10.2	2.0		〃	不良	淡灰白色	ミガキ不詳

第 1-6 表 SB 2~4 出土土師器など観察表

No.	類別	大きさ (cm)				胎土	遺存	外面ミガキ	内面ミガキ	見込みミガキ	器高指類	深さ指数
		口径	高台径	器高	深さ							
83	椀 D	5.9	—	—	—	良	良	—	—	—	—	—
84	椀 A	15.0	5.3	6.0	5.4	〃	〃	—	—	—	40	36
85	〃	15.2	5.9	6.6	5.9	〃	〃	密	密	ジグザグ状	43	38
86	〃	16.0	5.2	6.0	5.4	〃	並	—	—	斜格子状	37	33

第 1-7 表 SB 2~4 出土瓦器椀観察表



第 1-11 図 SB 2~4 出土土器実測図 (1:4)

5. 小 結

今回の調査は、約240㎡とごく小範囲の調査であったが、良好な遺構・遺物を検出し得た。検出した遺構・遺物は、時期的に奈良時代と平安時代後葉に大別され、各時期の良好な資料である。

以下、各節を通じてのまとめと若干の問題点をあげて小結としたい。

1. SB6・7及び

その出土遺物について

SB6は、約4.7m×約3.4mの規模で床面積約16㎡である。SB7は、調査区外にのび規模は不明だがさして大差ないものと推測される。この述数を周辺地域の同時期の竪穴住居と比較すると、同一水系上流に所在する蓮池代遺跡例^⑪の場合、全体形のわかるもの2例は、各々床面積約57㎡、37㎡といずれも大きいものである。しかし、地域的に北接する服部川流域の大山田村西沖遺跡^⑫、歌野遺跡^⑬について規模のわかるものを単純平均すると、西沖遺跡例の場合15棟平均約16.1㎡、歌野遺跡例の場合14棟平均約15.4㎡となる。よって、本例はこの時期この地域で平均的面積をもつものである事が理解され、蓮池代遺跡例はやや異質と言えようか。

一方、SB6の場合、住居の短辺である北東辺の東隅近くに焼土が検出されカマドを想定した。しかし、少なくともこの時期前述の各遺跡の場合、長方形プランの竪穴住居にあっては、カマドは北あるいは東の長辺上におかれる傾向にあり、SB6の場合北東辺におかれる点変わらないが、それが短辺である点他と趣を異にしている。

次に各竪穴住居の年代についてであるが、各々出土遺物が限られているため、断定はできないが一応の目安を示しておきたい。

SB6出土の須恵器杯蓋(4)は、天井部の平坦化、ヘラ削り、口縁部がZ字状に折れない点など形態的に陶邑編年Ⅳ段階第2型式に相当するものと考えられ、8世紀前半の所産と考えられる。そこでSB6の年代は、奈良時代前半と考えたい。SB7の出土土器については、土師器D(15)は折り返され

る薄い把手など幾内の色彩のみられるもので、形態的にみて奈良時代の所産であろうが、それ以上時期を限定し難く、他の土器も時期を限定する決め手に欠ける。そこで、SB7の年代は、一応奈良時代と言う事で止めておきたい。

さて、今回土師器甕Aとしたものは、いずれも口縁部が「く」の字形に外反して、内弯気味に伸びるもので、伊賀地方のこの時期の遺跡でしばしば見受けられるものである。内弯気味になる口縁部の形態^⑭はいわゆる近江型の甕に似るが、口縁端部に内傾する面を持たないなど相違する点も目立つ。よって、土師器甕Aとしたものは、いわゆる近江型とは言えないが、かなりその影響を受けたものである事が推測されよう。

2. 平安時代後葉の遺物について

今回の調査では該期の資料としては、SKI・SB2～4などの出土遺物がある。中でも、SKIは出土状況からして一括資料として扱えるもので、その数量も多い。以下、SKI出土資料を中心に他の資料をも含めて検討を加えたい。

まず、出土遺物の大半を占める瓦椀について、今回の報告では椀A～Dに分類した。ただし、椀Dは前述の如く内小高台の付属によって分類したものであり、椀自体は椀Aと同様であるのでこれに含めて考えると、形態的に椀A・B・Cの3分類を行った事になる。

さて、SKI出土瓦器椀の器高指数は、低平な椀C(器高指数27)を除外した全体の平均は38.9となり、椀A・椀B間でさして差異は認められない。この状況を図表化したのが3-8表である。これによると、SKIの瓦器椀は、椀Cを除き器高指数39の線にそって分布し、中央部分で若干の接近はあるものの、口径16cm前後を中心とする椀Aと口径14cm前後を中心とする椀Bに大別され得る状況^⑮が看取されよう。また、型作りの可能性の指摘される瓦器椀^⑯にあっては、同時期のものに比較検討を加える際、椀内面の法量比較も重要な条件となろう。そこで、口

径と椀部内面の深さを対比したものが3-9表である。(これにより導き出される指数を一応、深さ指数と仮称する)これによると、やはり器高指数の場合と同様、椀Cを除き、深さ指数平均34.4にそって分布する。ただし、椀Bの方にややバラツキがみられるのに対し、椀Aの大半は口径16cm深さ5.5cmを中心とする±0.5cmの部分に集中し、あるいは型作りによる類型化を反映しているのかも知れない。

また、調整等については、口縁部内側には椀A・Bとも1条の沈線が施され、椀Cは端部を折り返して肥厚させ沈線状の段をつけている。高台は、幅の太いものと細いものがあるが外開するものが多く、椀A・B間で差異はない。外面ミガキは、全体のわかるものはいずれも下半に空隙部を残し4-5分割して施され、内面ミガキもいずれも連続圏線状の密なものである。見込みのミガキは、ジグザグ・平行線状のものと格子・斜格子状のものがあり、前者がやや多い。また、椀Aに比し、椀Bがやや密に施されている。

以上の諸点より、少なくともSK Iの瓦器椀については、例外的存在の椀Cを除き、形態及び調整はほぼ同一であるが、その法量に差異がみられ、やや大ぶりのもの(椀A)とやや小ぶりのもの(椀B)に区別され得ると言えよう。ただし、資料数が限られており、また中間的存在のものもあるので各々を明確に一群として把握できるとは言い切れず、一応の傾向として区別でき得るとしておきたい¹⁸⁾。さらに全体を表わす3-8表の椀Bの座標値と椀部内面を

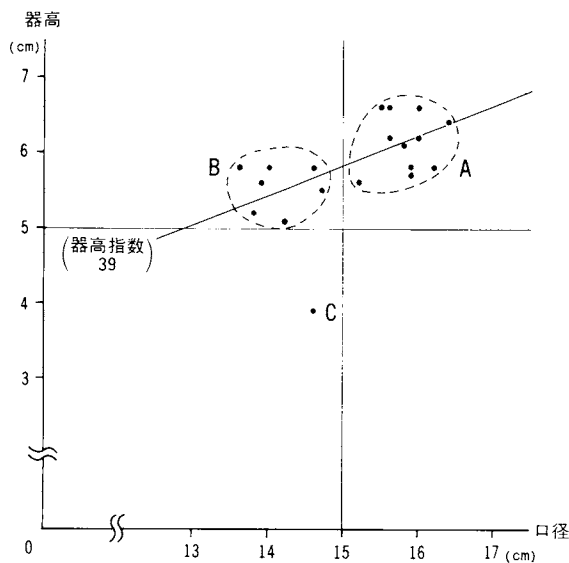
表わす3-9表の椀Aの座標値を比較すると、椀Bの器高と椀Aの深さがほぼ同一である状況が看取される。試みに完形品の内、例えば椀Aの23に椀Bの30を入れるとすっぽりと中に納まり、はみ出さないあるいは、大ぶりのものと小ぶりのものの中には入れ子の関係として把握できるものがあるかも知れない。

この様な状況に対し、本例の次時期にあたると思われる大山田村西沖遺跡S E 66¹⁹⁾の瓦器の場合、そのほとんどが口径15cm弱~16cm、器高5cm代に納まる状況にあり、本例に比し法量の齊一化がみられる。

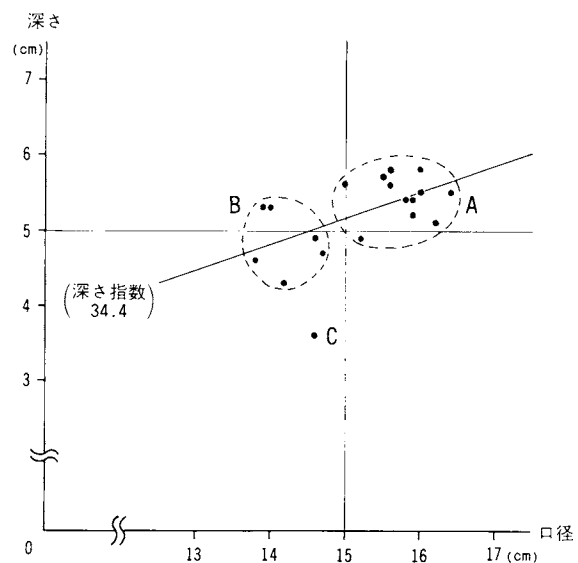
さて、今SK Iの瓦器椀について、法量の差異によりやや大ぶりのものとやや小ぶりのものに区別し得る事を指摘したが、見込みのミガキの疎密を重視し、これに共伴の土師器小皿A・Bにみられる口縁端部の型式差を対応させて考えるならば、同じ一括遺物の中で、瓦器椀B・土師器小皿Aがやや古相を残し、瓦器椀A・土師器小皿Bがやや新相を呈するものと考え得る可能性も残るので付記しておきたい。

一方、今回椀Dとしたものは、高台の内側に内小高台のつくものである。SK Iでは椀底部128点中3点、他の遺構を含めても5点と数量的に極く少ない。伊賀地方では、上野市北掘池跡に類例があるのみで、本例と同じ時期のものである。現段階では、内小高台は極めてまれなものであるという把握以上の事は言えないが、これが何らかの遺存形態であるのか、機能的なものなのかは、今後の資料の増加を待ちたい。

次に、SK Iの年代については、瓦器椀が形態的



第1-8表 SK I出土瓦器椀法量表(1)



第1-9表 SK I出土瓦器椀法量表

に川越氏の指摘される大和型の範疇に入るもので、^①氏の編年に準拠すれば第1段階D型式に相当するものと考えられる。伊賀地方に於いては、この時期の瓦器碗の報告例は少ないが、本例は伊賀町的場遺跡^②碗A・上野市上寺遺跡SK16出土例に続き、大山田村西沖遺跡SE66碗Aに先行する時期に位置付けられ、11世紀後葉の所産と考えられる。また、伴出の土師器小皿A・B・Cは、いわゆる「Z」の字口縁のもので、口径10cm未満であり、瓦器碗の年代に矛盾しない^③。

さて、SK1の遺物の組成は、先述のとおり瓦器碗・土師器小皿・土師器皿・土師器土釜・瓦質土器鍋・瓦がある。そのほとんどは破片で正確な個体数は把握できないが、数量の多い瓦器碗については底部破片、その他については各破片の検討により最底個体数を推測すれば、瓦器碗138、土師器小皿41、土師器皿14、土師器土釜4、瓦質土器鍋1、瓦23となる。この述数は、多分に主観的な面を含み、正確な数字とは言い難いが、一応の傾向は知れよう。これによると調理具としての土釜、鍋に対して、供膳具としての碗、皿が圧倒的に多い事が着取される。また、供膳具の中に瓦器皿・小碗がみられず、他の

(註)

- ① 上野市都市計画図(1/2500)及び航空写真の観察による。
- ② 吉村利男「高猿6号墳」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981.3
- ③ 森前稔「蓮池代遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982.3
- ④ 谷岡武雄・福永正三「伊賀国糸里に関する若干の問題点」『伊勢湾岸地域の古代糸里制』1979.6
- ⑤ 谷岡武雄・福永正三「伊賀国の糸里」『伊勢湾岸地域の古代糸里制』1979.6
また、現在友生盆地内で地籍図上に坪付名のみ見えるものは「四ノ坪」のみだが、旧検地帳・地誌取調書などを含めた坪付名の調査は、「友生界外村落の開発の歴史」『THE CONTOUR』No.15立命館大学地理学研究会 1975.11に詳しい。
- ⑥ 山田猛「馬場遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982.3
- ⑦ 黒色土器にみられる「二重高台」とはかなり異なるものなので、ここでは一応こう仮称した。
- ⑧ 本例の場合、口縁端部はわずかしか遺存せず、その部分のみ巻き込まれていたのか、全体にわたるのかは明確でない。
- ⑨ 一枚作りの平瓦に模骨痕の残るものについては、上原真人「恭仁京跡発掘調査報告 瓦編」京都府教育委員会 1984.3で、一杯作りの場合でも模骨痕が残ると指摘されており、本例もそういうものであろう。
- ⑩ 平瓦Aには表面のヒビ割れはほとんどなく、平瓦Bでも、凹

遺構を含めても瓦器皿が1点みられるのみである。

この点、特徴的で、これに替るものとして土師器小皿があり、少なくともSK1では瓦器碗に土師器小皿という組合せの供膳形態が考えられる。

また、多数の瓦器片のほとんどは、イブシが消失しており、軟質からなり硬質で歪んだものがみられ土師器皿などでも青灰色を呈し硬質で歪んでおり、中には歪みのためうまく接合しないものもある。

これらの内には、流通機構の中で商品として価値を疑われるべきものもあり、これらすべてを流通機構によってもたらされたとするには、一抹の疑問を感じざるを得ない^④。

以上、岸之上遺跡の発掘調査により、明らかにされた事について、若干の所見と問題点を述べて来た発掘調査は、遺跡のごく一部に限られており、これを似って、遺跡の性格及び全貌に言及する事は不可能である。ただ、検出した平安時代後葉の遺構と遺物は、まさに先にあげた藤原実遠の所領譲状の時期のものであり、当時の荘民の生活の一端を垣間見た感がある。今後の研究に期待したい。

(杉谷 政樹)

面にはみられず、凸面のみ認められる。

- ⑪ 註③に同じ。
- ⑫ 森前稔「西沖遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981.3
- ⑬ 中森英夫「歌野遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983.3
- ⑭ 中村浩「陶器Ⅲ」大阪府教育委員会 1978.3
- ⑮ 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』106号 1980.6
- ⑯ 本例の如き 内湾気味になる口縁部をもつ甕は、この時期伊賀地方にかなりみられるもので、小笠原好彦氏は註⑮掲載書にて、伊賀・伊勢型と包括的に述べておられるが、伊勢型の甕と異なる本例の如き甕の存在も留意すべきではなかろうか。
- ⑰ 川越俊一・井上和人「瓦器製作技術の復元」『考古学雑誌』第67巻第2号 1981.9
- ⑱ この瓦器碗の口径の異なりを瓦器碗製作上の法量の齊一化以前の不安定な段階として、単なるバラツキとみるむきもあるが、表3-8・9に示したように器高・深さ指数ともよく似た中での法量のみ差であるので、単なるバラツキとは考え難いではなかろうか。ただし、本文中にも示したが、差のある法量を各々明確にグルーピングするには資料数が未だ少なく、今後、この時期の瓦器碗の出土例の増加をまって、再検討すべきであろう。
- ⑲ 註⑫に同じ
- ⑳ 調査担当の駒田利治氏の御教示による。

- ㉑ 川越俊一「大和地方出土の瓦器碗をめぐる二、三の問題」『文財論叢』奈良国立文化財研究所 1983.3
- ㉒ 駒田利治『的場遺跡発掘調査報告』伊賀町教育委員会 1978.3
- ㉓ 山田猛「上寺遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980.3
- ㉔ 今回、土師器小皿A・B・Cとしたものは平安京Ⅲ期にみられるB₂類あるいはB₃類(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター1981.3)と同種のもので11世紀中～後半に盛行したものであり、近江においても同様の時期に盛行したもの(兼康保明『延暦寺発掘調査報告Ⅰ』滋賀県教育委員会)とされている。
- ㉕ SK1出土の瓦器碗にあっては、本文中に示した如く軟質のものと硬質のものがあるが、小さな同一土坑内の遺物で同じ土壌の作用を受けたものにこの様な遺存状況の差異が生じるであろうか。また、硬質のものには歪んでいるものがみられ、

中には表面が薄く剥離した様に破れているものもある。この様な、軟硬質の差、歪み、破れ方をみると焼成時の不良品というイメージが浮ぶ。また、土師器小皿や皿の中の還元化され青灰色を呈しかなり歪んだり、歪みのためうまく接合しないものや、平瓦の中の同様のものをみれば、そのイメージはさらに強くなる。この様なものがはたして流通商品となり得たのであろうか。また、SK1のぎっしり詰った遺物の出土状況を考えあわせれば、これらが焼成時の不良品として一括投棄されたものである可能性もなきにしもあらずではなかろうか。確かに、伊賀地方の瓦器碗の中には大和からの搬入品(橋本久和『上枚遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会1980.2)もあったであろうが、本例の如きものをもそう説明するには疑問を感じざるを得ない。また、岸之上遺跡周辺は、本文中に示した如く、東大寺領ではなく、伊賀地方の中ではどちらかと言えば周辺地域に属する所でもある。

Ⅱ 上野市下友生 大門遺跡・他

前章第1節で述べた如く、本遺跡は久米川中流右岸の河岸段丘上、微地形的に南西方向に極く緩く傾斜する地点に立地し、現状は水田である。遺跡西半には、現在「大日堂」と呼ばれる小堂を中心にその南・東側に細長い水田があり、西側には県道沿いの小さな池とその南に続く水田・用水溝がある。また、

地元の古老によれば北側の現在の県道部分に東西方向に細長い水田があったらしく、ここに約110m×約80mの何らかの遺構を想定させる地割りが認められる。

今回の調査は、遺跡の北東部の排水路及び一部削平される部分約550㎡について実施した。(第2-1図)

1. 遺 構

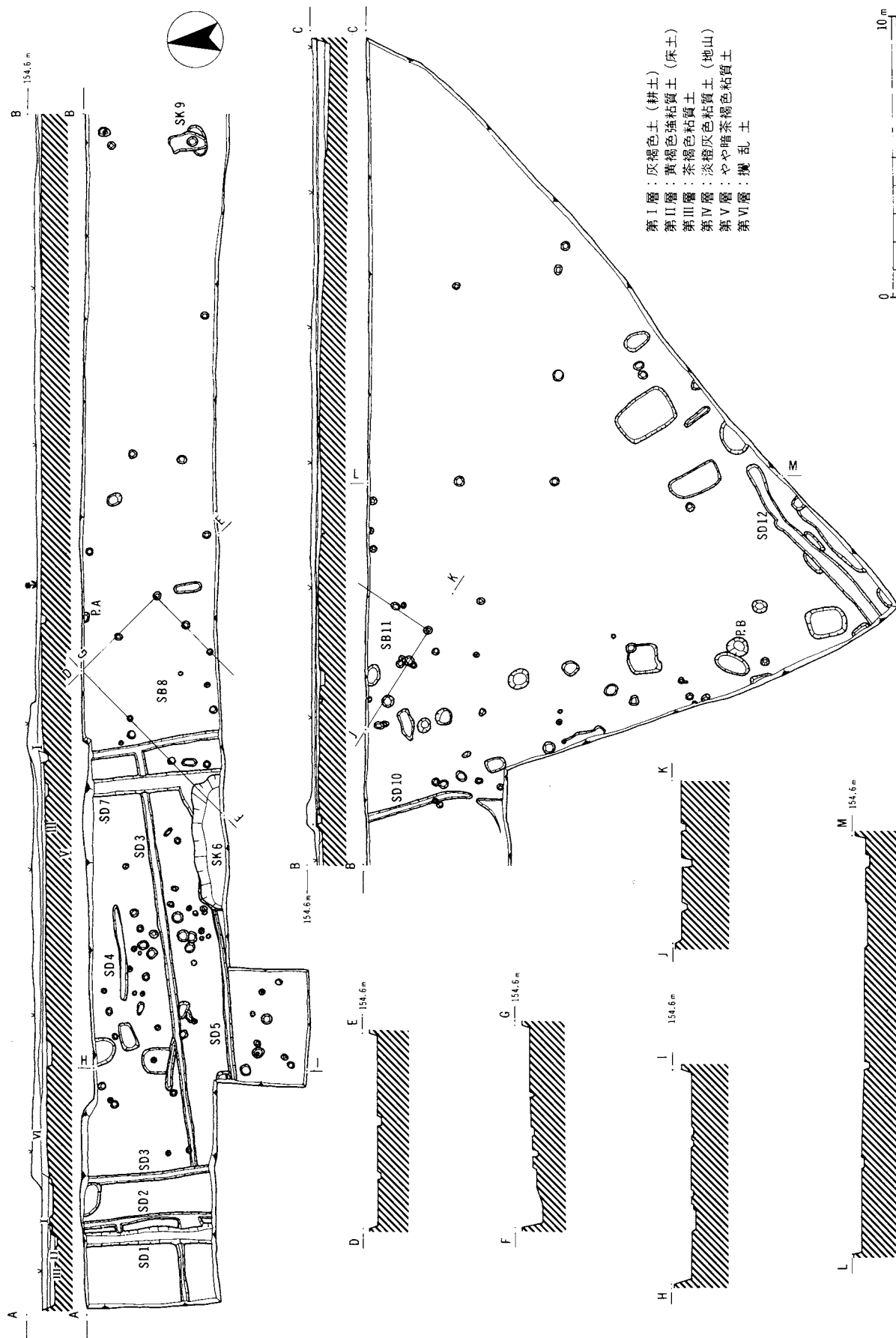
調査区の基本層序は、第Ⅰ層：灰褐色土（耕土）、第Ⅱ層：黄褐色強粘質土（床土）、第Ⅲ層：茶褐色粘質土、第Ⅳ層：淡橙灰色粘質土（地山）であり、第Ⅳ層（地山）までの深さは約40cmである。全体的に遺物は少ないが、第Ⅲ層が遺物包含層である。ただし、第Ⅲ層上半は、やや灰色を呈し、下半は茶褐色が強いが、漸移的变化であるため、一層とした。な

お、第Ⅲ層が調査区中央部でほとんどみられないのは、近代に入ってから水田の改良によるものである。

遺構は、一部を除いて第Ⅳ層（地山）上面でしか確認できず、埋土は大半が茶褐色粘質土、すなわち第Ⅲ層である。検出遺構は、掘立柱建物2・土坑12・溝10及び多数の小穴である。特に調査区西部で多



第2-1図 発掘区位置図 (1:2000)



第2-2図 遺構平面図 (1:200)

数の小穴を検出したが、建物としてはまとまらなかった。以下、主な遺構について概述する。(第2-2図)

1. 掘立柱建物

SB 8 調査区西半中央で検出された桁行2間(4.6m)以上×梁行2間(3.7m)、棟方向N53Eの建物である。桁行は、2間まで確認しえたが、それ以上はSK6に切られたり、調査区外となり不明である。柱間は、梁行が約1.9mで、桁行北西面が約2.3m、桁行南東面が約1.5mと揃いだいが、北西面2間分と南東面3間分がほぼ一致する。柱穴は、径25~30cmとほぼ揃っており、深さは10~20cm、埋土はすべて茶褐色粘質土である。柱穴埋土中に土師器の小片を含むものがある。

SB 11 調査区中央東よりで、調査区に一部かかった状態で検出されたものである。南東面は1間まで、南西面は2間まで確認しえたが、これ以上は調査区外となり不明である。柱間は、各々約1.5mとほぼ揃っている。柱穴は、径30~40cmで、深さは南西面中央のものが38cmである以外は15~20cmである。埋土はすべて茶褐色粘質土で、黒色土器・土師器の小片を含む。

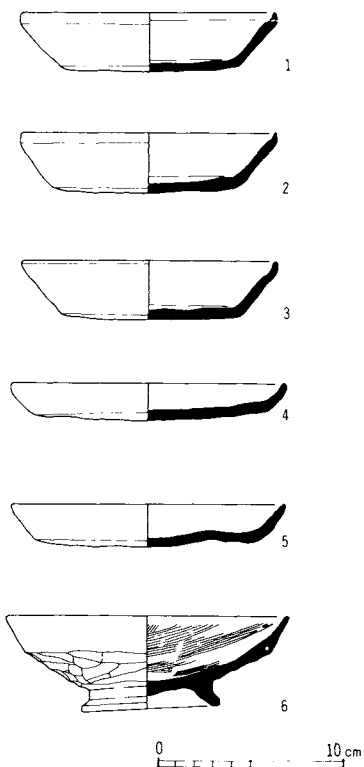
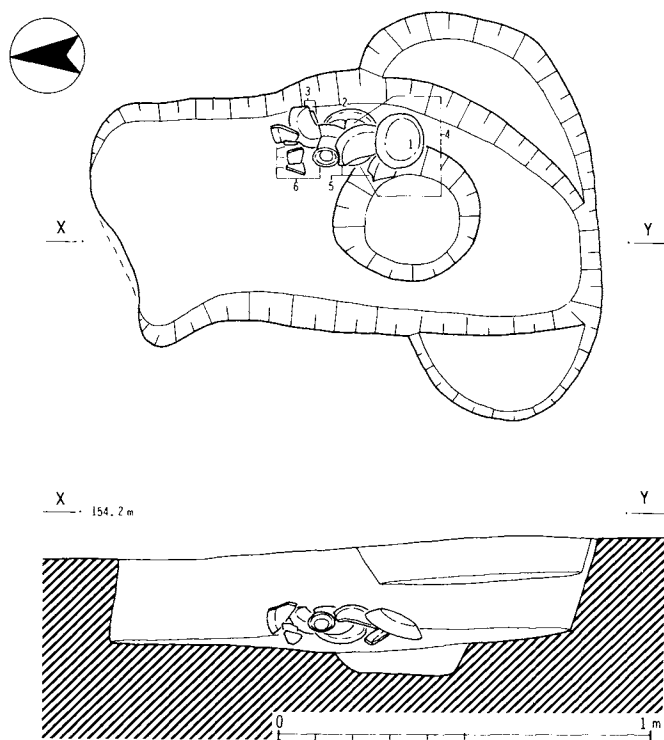
2. 土 塚

次にあげるもの以外は、ほとんどが埋土は茶褐色粘質土ではあるが、遺物を含んでいないか、あるいは含んでいても極く細片である。

SK 9 (第2-3図) 長径約1.4m×短径約0.7m深さ約0.2mのやや角張った楕円形の土塚である。時期の異なる小穴により南側上部を切られたかたちで検出された。土塚掘形は、ほぼ垂直に切り込まれ、底部は平担で中央に径約30cm深さ約5cmの小穴がある。埋土は、主に茶褐色粘質土で、下方で灰白色粘質土にかわる。土塚中央部東壁沿いの底部から、土師器杯3・皿2・台付椀1が、一括出土した。土器は、破片となっていたものもあるが、総じてふせられた状態で出土し、接合の結果一片もあまらず上記の数となった。

SK 6 東西約4.8m深さ約0.2mの土塚である。方形で南側に広がると考えられるが、調査区外となり不明である。埋土は、茶褐色粘質土で瓦器・土師器の小片を含む。

3. 溝



第2-3図 SK 9土器出土状況(1:20)・出土土器実測図(1:4)

SD 1 調査区西端を南北に走る幅約0.3mの溝である。南北とも調査区外にのびて明確ではないが、SD 7とほぼ平行である。深さは、東側肩から約0.2mで、この溝を境に地山は西側が約0.1m低くなる。埋土は、茶褐色粘質土である。

SD 7 SD 1の東側約16mのところを南北に走る幅約0.3m深さ0.2mの溝である。SD 1とほぼ平行である。南側でSK 6の上部を切り、中央でSD 3により上部を切られている。埋土は、青灰色粘質土で須恵器・土師器の小片を含む。

SD 2・3・5・10・12 いずれも、幅約0.2m深さ0.1m前後、埋土は暗灰色土の溝である。遺物は

ほとんど含まない。平行したり直交して走っているが、ほぼ現在の水田の畦畔に沿っており、近世以降の水田に関連するものと考えられる。

4. その他

Pit A 径約30cm深さ約20cmの略円形の小穴である。埋土は、茶褐色粘質土で、土師器杯1・皿1が出土した。

Pit B 径約70cm深さ約38cmの略円形の小穴である。埋土は、茶褐色粘質土で、瓦質鍋が半分にわられ、その破片が重った状態で出土した。

2. 遺物

出土遺物は、すべて土器で、調査面積に比して概して少量であった。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・天目茶碗・播鉢などがあるが、その大半は土師器である。また、土器のほとんどは小片で、図示できるものはわずかである。以下、図示し得た主な土器について概述する。

1. SB 11の土器

黒色土器碗 (12・13) いずれもA類である。小片の為、口径などは不明だが、体部は内弯気味に伸び口縁部がやや反する器形のものである。口縁端部内側に、12は幅3mmの浅い沈線、13は幅2mmの沈線が施される。内面から口縁部外面までヨコナデ、体部外面はオサエの後不定方向にナデられている。胎土は小砂粒を含みやや軟質で、素地は淡橙褐色を呈する。いぶしは、内面全体と一部口縁部外面にかかる。小片の為明確ではないが、平安時代中頃の所産であろう。

2. SK 9の土器

土師器杯 (1~3) 口径13.6cm器高3.2cm前後の杯である。ほぼ平坦な底部から、口縁部は角張り気味に立ち上がり、斜め外方にほぼまっすぐ伸び、端部近くで上方つまみ上げられる。底部は、指オサエによる凹凸が目立ち、粘土紐巻き上げ痕が残る。また、一部に指オサエの上に板状物体のアタリの痕

跡が認められる。1・3は、内底部一方向ナデのあと口縁部内面から外面底部との境までヨコナデ、2は、内底部一方向ナデのあとその上から口縁部内面及び外面底部との境までヨコナデ調整される。胎土は、細砂粒が目立ち、やや軟質で淡橙色を呈する。

土師器皿A (4・5) 口径14.6cm器高2.1cmのやや厚手の皿である。ほぼ平坦な底部から、口縁部は斜め外方に、4はやや内弯気味、5はほぼまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁部内面から外面底部との境までヨコナデ、内底部は指オサエ後不定方向ナデが施される。底部は、指オサエによる凹凸が目立ち、粘土紐巻き上げ痕が残る。胎土・色調は、前述の土師器杯とまったく同じである。

土師器台付碗 (6) 口径15.2cmの浅い碗に径7.2cmの高台が付くもので器高5cmである。碗部は、内面が浅い球状を呈し、外面が下半のヘラ削りにより屈曲する形状を呈するものである。内底部中央部分是不定方向ハケ目、その周りに外方へのハケ目調整が施され、さらにその先端を切る様に口縁端部内側から外面上半にかけてヨコナデが施されている。外面下半のヘラ削りは、左方向への不規則なものである。高台は、碗部外面下半のヘラ削後付けられ、外方に開く低いもので、端部はやや角張っている。全体にヨコナデ調整される。胎土は、前述の土師器杯と同じだが、やや赤味をおび固い。

3. Pit A の土器

土師器杯 (9) 口径13.0cm器高 3.2cmで、やや小ぶりだがSK 9出土の土師器杯と同類のものである。口縁部は、角張り気味に立ち上がり、ほぼまっすぐ斜め外方に伸び、端部は上方につまみ上げられる。口縁部内面から外面底部との境までヨコナデされ、特に端部内側は強くナデられている。内底部は、不定方向ナデ、底部は、指オサエによる凹凸が目立ち、その後ナデられている。胎土も、SK 9出土のものに近似するが、色調は灰桃色を呈する。

土師器皿A (10) 口径14.6cm器高 2.4cmで、SK 9出土の土師器皿Aと同類のものである。やや外方にふくらむ底部から、口縁部は角張り気味に立ち上がり斜め外方に伸び、端部は丸くおさまる。口縁部内面から外面底部との境までヨコナデされる。内底部は、不定方向ナデ、底部は、指オサエ後不定方向ナデが施される。胎土も、SK 9出土のものに近似するが、色調は淡赤褐色を呈する。

4. Pit B の土器

瓦質土器鍋A (16) 口径29.8cm器高25cmのいわゆる瓦質の屈曲口縁の鍋である。口縁部を除き、器壁は 0.6cm前後の厚さでやや薄手である。体部は、ほぼ平坦な底部からなり直角に近く角をなして立ち上がり、上半はほぼ垂直に近くなる。口縁部は、かなり外方に開き、外面は屈曲して、内面はほぼまっすぐに伸びる。口縁端面は外方に傾斜して角をなし、端部内端は、わずかに上につまみ上げられる。口縁部内面から外面屈曲部までヨコナデ、外面屈曲部から体部上端までは縦方向にナデツケられている。体部内面は、19~20本セットの細いハケ目が左方向に

施され、内底部との境には幅狭の細いハケ目が左方向に連続して施される。内底部は、不定方向ナデにより調整され、体部外面および底部は調整不明だがかなり平滑に仕上げられている。胎土は、極く細かい砂粒を含むものの良質堅緻で、灰白色を呈する。

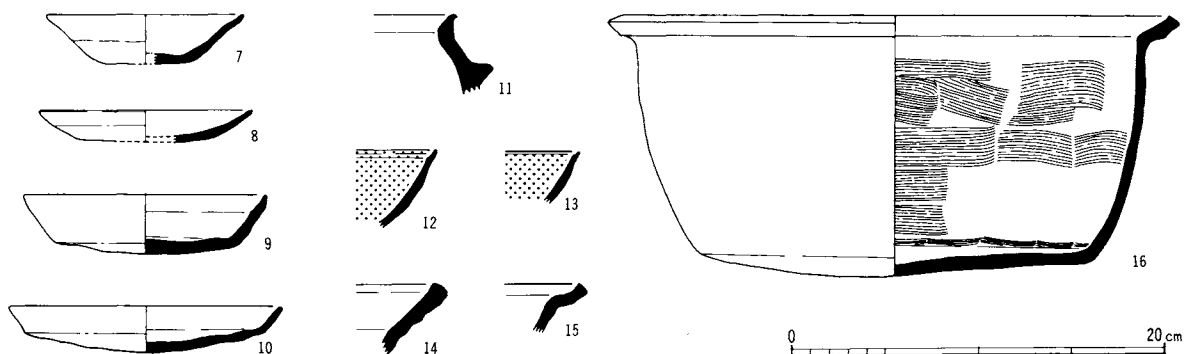
5. その他の土器

土師器皿B (7) 口径10.6cm器高 2.6cmの皿である。口縁部は、斜め外方に立ち上がりやや外弯気味に伸び、端部は、やや上方につまみ上げられて丸くおさまる。内底部は、中央がやや肥厚して盛り上がる。内底部から口縁部内面下半まで不定方向ナデ、口縁部内面上半から外面中程までヨコナデ調整される。底部は、指オサエ。胎土は、やや砂っぽく、淡橙褐色を呈する。室町時代後半の所産であろう。

土師器皿C (8) 口径11.4cm器高 1.7cmの浅い皿である。口縁部は、かなり開いて外方に伸び、端部はやや尖り気味におさまる。内面全体と口縁部外面上半までヨコナデ、外面下半から底部まで指オサエが施される。胎土は、良好で堅緻で、明橙白色を呈する。室町時代後半の所産であろう。

土師器土釜 (11) 小片の為、口径などは不明であるが、口縁部が内傾しながら端部近くで外反し、端部は外方にわずかにつまみ出される形態のものである。鏝は、幅1cmで断面三角形を呈する小さなものである。口縁部内外面ともヨコナデ調整。胎土は、小砂粒を含むやや軟質のもので、暗褐色を呈する。

播鉢 (14) 小片の為、口径などは不明。口縁部は、まっすぐ伸び、端部はやや肥厚しながら内側に角をなしておさまる。口縁部内面の無文帯は、3cmと幅広く、内面下方にわずかに密な筋目が残る。胎土は、長石などの砂粒を含み、よく焼き締められ、



第2-4図 土器実測図 (1:4)

淡紫褐色を呈す。17～18世紀頃の所産であろう。

瓦質土器鍋B (15) 小片の為、口径などは不明だが、いわゆる瓦質の屈曲口縁の鍋である。やや開いた体部から口縁部はほぼ水平に開き、屈曲して斜

め上方に伸び、端部は角張っておさまる。口縁部内外面ともヨコナデされ、特に外面体部との境は幅3～4cmの強いヨコナデが施され凹線状になっている。胎土は、やや軟質だが良好で、乳白色を呈する。

3. 小 結

今回の調査は、遺跡範囲の北東部約550㎡の限られた部分の調査であった。その中で、調査により検出した遺構の密度はさして高くなく、また出土遺物も概して少量であった。この事は、今回の調査区の西側に現水田地割りより想定される何らかの遺構の存在と相俟って、調査区が遺跡の縁辺に近い部分にあたっていたという感を与える。

しかし、少数とは言え検出した遺構・遺物は、この地に残された平安時代から室町時代にかけての断続的ではあるが人の営みの痕跡である。以下、各節のまとめと若干の問題点をあげて小結としたい。

1. 掘立柱建物について

今回の調査では、SB8・11の2棟の掘立柱建物を検出した。

SB8は、桁行2間以上×梁行2間、棟方向N53°Eの建物である。桁行の各面で、柱間が異なるが、北西面2間分と南東面3間分がほぼ一致する事より、この異なりは建物壁構造などの違いによるものと解しておきたい。明確に時期決定する遺物に欠けるが、柱穴埋土に含まれる土師器の小片は、図示できる程の大きさはないものの皿あるいは杯の底部の一部と考えられるもので、胎土・色調及び破片にみられる調整は、SK9出土の土師器杯・皿Aに近似する。よって、SB8は、SK9と同時期の建物と考えたい。

SB11は、建物の角だけの検出であるが、柱間および柱穴が揃っているところから建物の一部と推定したものである。さらに想定すれば、南西面中央の柱穴が他に比べやや大きく深い点より棟持ちと考えられ、北東—南西棟の可能性がある。柱穴埋土に含まれる黒色土器(8・9)は小片であるが、平安時代中頃の所産と考えられ、SB11はこの時期に位置付けられよう。

2. SK9及び出土土師器について

SK9は、長径約1.4m×短径約0.7m深さ約0.2mのやや角張った平面形で、ほぼ垂直に掘られた土壇である。土師器杯3・皿2・台付椀1が出土した。遺物の出土状況は、極めて特徴的で、①出土土器は、すべて土師器である。②土器は土壇東壁沿いの中央で底に近接してまとまって出土し、土壇の大半は空隙部分となっている、③破片のほとんどは反転した状況であった、④破片の接合の結果一片もあまらず接合して上記の数量となり、すべてほとんど完形に復元された、の各点に要約される。①～④の要点より、SK9の土器は破砕のため投棄されたものとは考え難く、意識的に埋納されたものと考えられ、しかも②にあげた如く土壇の大部分をあけて片隅に偏っているところから従属的・副葬的なものである可能性が強い。一方、土壇底部に径約30cmの小穴のみられることによりここに柱の存在を考え、柱埋設に伴う土器群の可能性もあるが、SK9の周囲にこれに対応するような柱穴がみられないので、建物の一部とは考えられない。そうなれば、SK9の底部の空隙をうめるものは大きな有機物と考えるのが適当で、よって、SK9は土壇墓であり、一群の土器はその副葬品として埋納された可能性が強いと言えよう。そう考えれば、前述の土器の数量および③の反転した状況の出土は、何らかの示唆を含むものであるかも知れない。

次に副葬品と想定した土師器群の時期についてであるが、杯3・皿2・台付椀1の良好な一括資料であるにもかかわらず、伊賀地方に於いて同様のセット関係にある土師器群は管見に属さず、伴出遺物も欠いている為、早急な時期決定は行い難い。また、Pit A出土の土師器杯・皿Aも同類と考えられるのでこれらを含めて、検討を加える。

まず、各器種について要約する。杯は、口径13.0～13.6cm高さ3.2cm、粘土紐巻き上げ成形、口縁部内面から外面底部との境までヨコナデ、底部指オサエ、口縁端部が上方につまみ上げられる。皿Aは、口径14.6cm高さ2.0～2.5cm、以下は口縁端部が丸くおさまる点以外杯とまったく同じ。台付椀は、口径15.2cm高さ5cm、椀部内面ハケ調整、口縁端部内側から外面上半までヨコナデ、下半ヘラ削り、ハの字に開いた高台がついている。杯・皿については、各々法量にかなりの規格性がみられ、調整技法は相互に共通している点が多くみられる。また、杯の調整技法は、時期を考慮外に言えば5手法に分類され得るが^①、ヨコナデはさして強くない。

さて、ここで杯についてみれば、本例に類似するものとして、伊賀地方では上野市上寺遺跡S D15出土例^②がある。上寺遺跡例は、口縁端部のつまみ上げがそれ程顕著でないが、9世紀前半の所産とされている。一方、地域的には異なるが伊勢地方では、斎宮跡第42次調査のS E 2622、第44次調査のS K 1424出土土器群中に形態的に本例に近似する杯・皿の共伴関係をみることができ、ともに平安時代前半の所産とされている。斎宮跡例は、地域的差異・胎土等生産地の差異などの問題はあがあるが、これらの例の存在及び杯にみられるf手法による調整、また台付椀のヘラ削り等の調整法や高台が新しい要素とは考え難い点などから本例は平安時代前半を中心とした時期に位置付けられ得る可能性が強いと考えられる。ただし、胎土の相違、調整法に地方色の強くみうけ

られる事は否めない。

一方、杯はまた、形態的に平安京IV期あるいは中世京都I期にみられる口縁端部を面取りした土師器^④皿にも類似しており、この時期の可能性も考慮しなくてはならない。しかし、口縁部外面のヨコナデが本例は底部との境まで施される点^⑤や伴出の皿などが中世京都I期などには一般的にみられない点などの相違点がある。

以上の諸点より、ここではS K 9出土の一括資料を積極的根拠に欠けるが、一応平安時代前半の所産と考えておきたい。ただし、鎌倉時代の所産とする可能性もあるので今後の類例の増加に期待したい。

3. 瓦質土器鍋について

中世京都に多くみられるいわゆる屈曲口縁の鍋で、伊賀地方の中世遺跡で例は少ないながら散見するものである。今回の調査では、口縁部の屈曲状況の異なる鍋A・Bの2形態が出土した。

鍋Aは、口縁部の内面が直線的、外面が屈曲するものだが、基本的には屈曲があまくなり直線的に伸びる形態に近いものと考えられ、また端部も三角形状になっている。よって中世京都II期中～新以降の口縁部がほとんど一直線に斜めに立ち上がる形態^⑥に近似し、14世紀後半以降の所産と考えたい。

鍋Bは、鍋Aに比べ口縁部の屈曲が依然残るものであるが、屈曲はあまく、鍋Aにやや先行するものであろう。

4. 洩遺跡

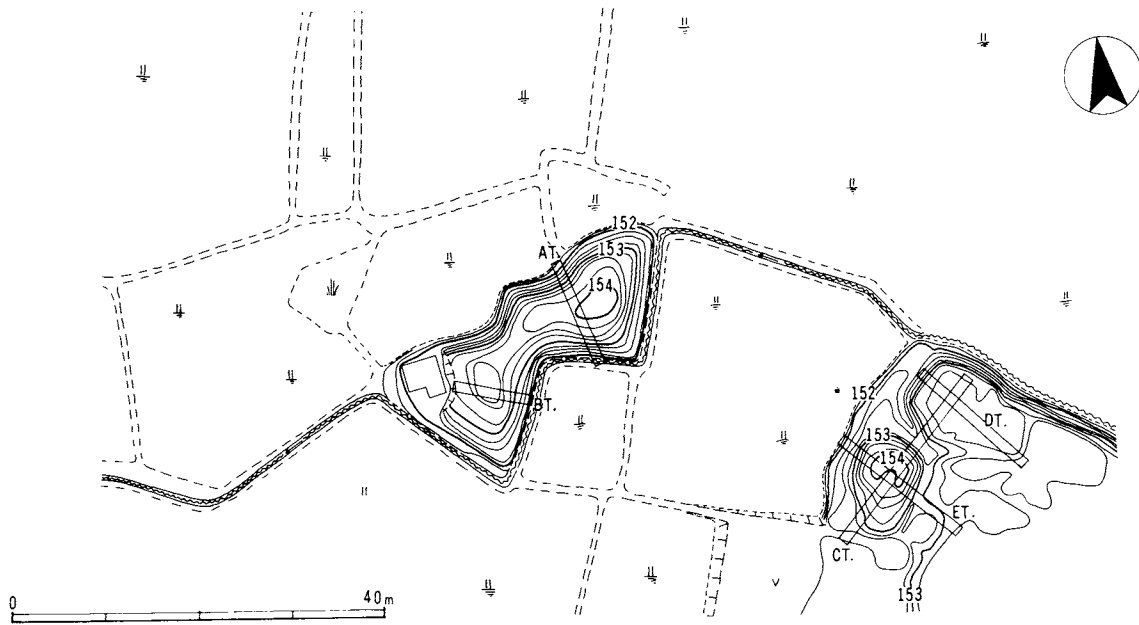
本遺跡は、久米川中流右岸の沖積地、大門遺跡の南東方の同遺跡がのる河岸段丘の段丘崖下近くに所在する。現況は、周囲をとりまく湿田状の水田の中に幅10m前後高さ約2.2mのカギの手に曲った土塁状の高まりと、その東方に径約10m高さ約1.2mの古墳状の高まりが認められた。また、都市計画図などの観察によると久米川沖積地には旧河道と思われる地割りがいくつか遺存しており、その一つが本遺跡の北側を通過している。

調査は、西側の高まりにA・B2本、東側の高ま

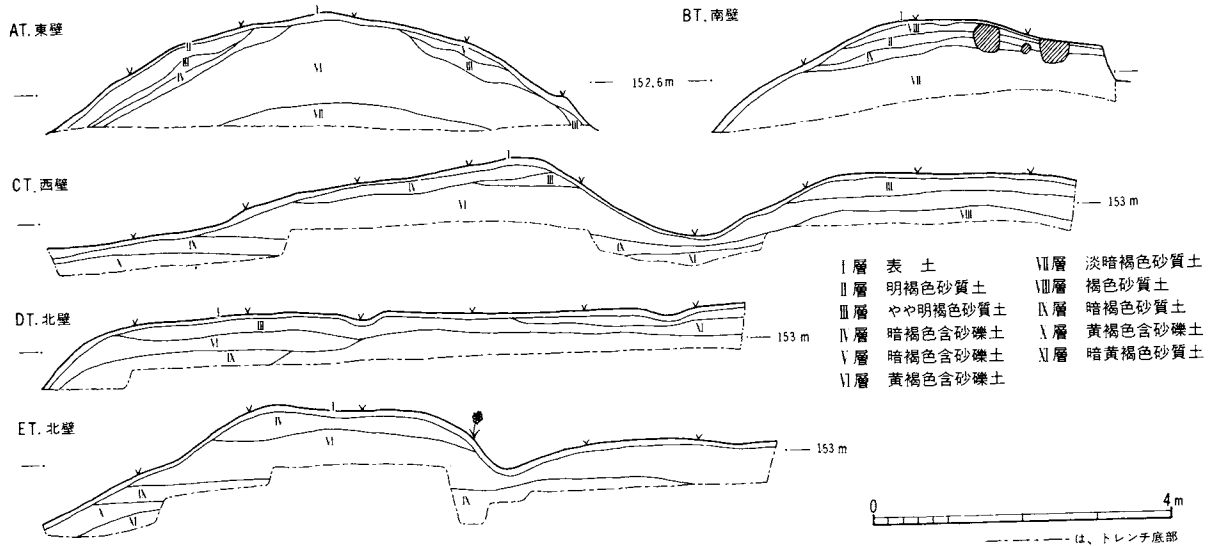
りにC・D・E3本のトレンチを各々設定して行った。(第2-5・6図)

その結果、西側の高まりは、ほとんどが黄褐色含砂礫土によって構成され、また東側の高まりも、黄褐色含砂礫土と褐色系の砂質土が互層となり、各層は基本的に水平堆積している状況である事が判明した。

遺物は、わずかにCトレンチ南端で磨滅を受けた土師器片・須恵器片若干とDトレンチ西端で同様の瓦器片・土師器片1点が出土したに過ぎない。



第 2-5 図 平面図 (1:800)



第 2-6 図 土層断面図 (1:100)

以上の各点より、土墨状及び古墳状とみられた高まりは、河川(久米川)による砂礫の自然堆積物と考えられ、これらが周辺の水田開発が行われた際に

開発をまぬがれて遺存して来たものと想定される。

(杉谷 政樹)

〈註〉

- ① 百瀬正恒「長岡京の土器(1)」『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975
本例の場合、胎土などから在地の土器である事は想像に難しく、また底部不調整部分に粘土紐巻き上げ痕が残る点は共通するものの口縁部のヨコナデはさして強いものでないでf手法と言いつけるには疑問が残る。地方色の強い鈍化したものと考えべきだろうか。
- ② 山田猛「上寺遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文

化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980

- ③ 『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』三重県斎宮跡調査事務所 1983
- ④ 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981
- ⑤ 平安京のこの時期の皿には、まれにヨコナデが底部との境にまで達するものもあるが、極く少量である。
- ⑥ 註④に同じ。

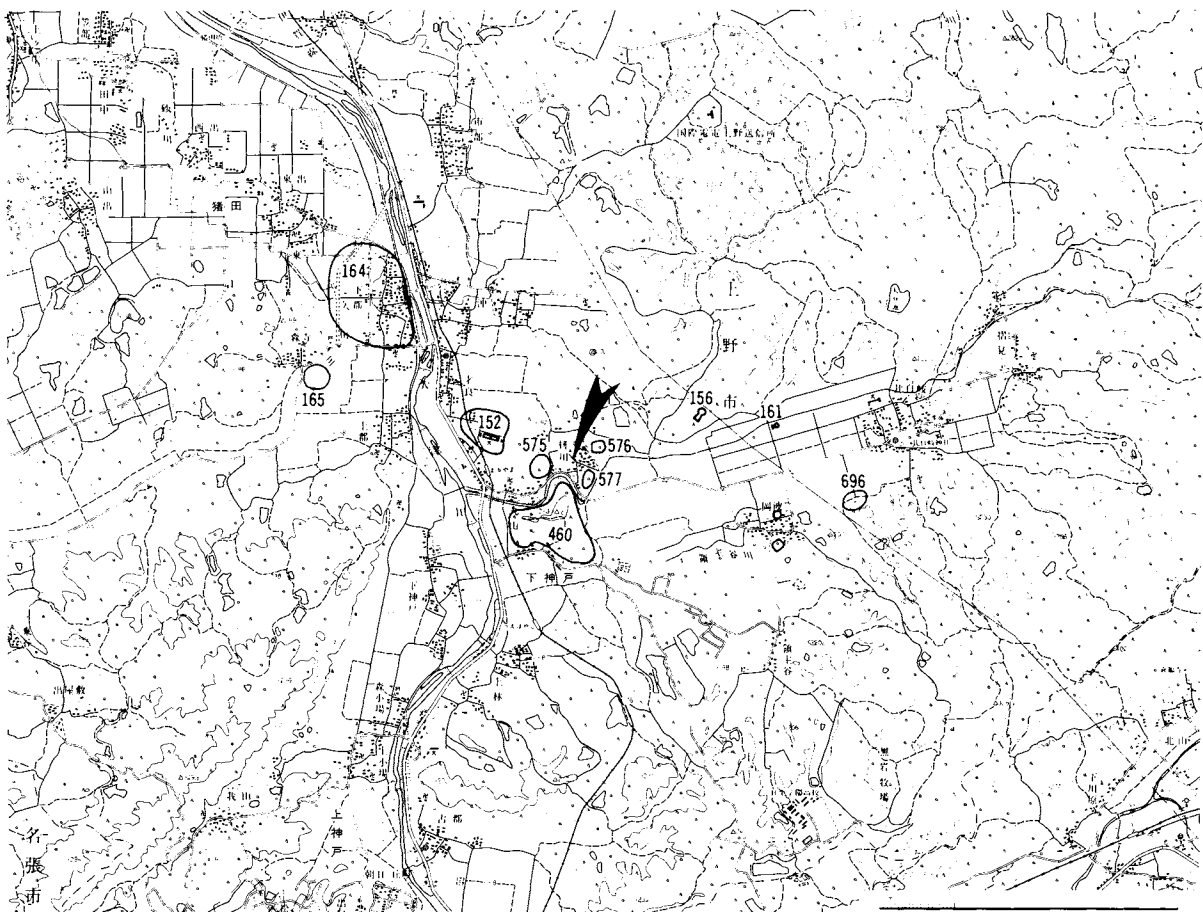
Ⅲ 上野市柘川 ^{はざま} 狭間遺跡

1. 位置と環境

比自岐の小盆地を形成する比自岐川は、木津川の本流に合流する手前で、南北を丘陵地にはさまれた狭窄部を蛇行して通過する。この南側に位置する丸山（標高213.1m）は比較的まとまった山塊を呈するのに比べ、北側に位置する丘陵地はいくつもの谷水田が入りくみ、やや複雑な形状を示す。このため、小支流を合流しつつ比自岐盆地を西流してきた比自岐川は、盆地西端の丸山に至って北に流れを変え、丸山を迂回して木津川本流に至る。

今回発掘調査を実施した、狭間遺跡がその一部を重複して所在すると思われる柘川の集落は、この北側にあたる丘陵地中央の谷水田に面した西向き斜面

に位置する。この中央の谷水田は西・北・東の三方をとり囲む丘陵地からの湧水で、平常でも水の溜る湿田となっているところである。今回当地域で県営圃場整備事業が実施されることとなったため、これに先立って埋蔵文財の現地踏査を実施したところ、一部に遺物の散布が認められるところから、昭和58年3月に第1次調査を実施した。その結果、水田部分では遺跡の所在が確認されなかったものの、これに隣接し、柘川の集落に接する畑地で若干ながら遺構・遺物の所在が確認された。このため、その取り扱いについて協議を重ねた結果、当該地は地区除外として現状のまま保存が計られることとなった。し



第3-1図 遺跡位置図（1：50000）

かしこれに隣接して掘削される幹線排水路部分についてはやむを得ず今回発掘調査を実施することとなった。

当狭間遺跡周辺の比自岐盆地及び上野市南部の木津川沿岸地域では、これまでいくつかの遺跡で発掘調査が実施され、地域の歴史的環境についてはそれ

らの報文に何度かふれられているところである。そのためここではかつて発掘調査の実施された遺跡を中心として付近に所在する遺跡名を列挙するにとどめておきたい。

まず弥生時代の遺跡では昭和57年6月、丸山中学校の校舎改築に伴って発掘調査が実施され、弥生



第3-2図 遺跡地形図(1:5000)

時代後期の良好な一括資料が出土したことで知られる才良遺跡(152)が当狭間遺跡の西方約600mに位置するほか、西約2kmには昭和31年に弥生土器をはじめ木製鋤が出土し、今年度も団体営圃場整備事業に伴って、上野市教育委員会によって発掘調査が実施された森寺遺跡(165)が存在する。また南約4kmの上野市比土地内では銅鐸の出土が伝えられている。

古墳時代では、昭和26年から3カ年、京都大学によって発掘調査され、三重県下でも屈指の著名な前方後円墳である全長約120mの石山古墳(156)が比自岐盆地を見おろす北側の丘陵上に位置するのをはじめ、全長約41mの前方後円墳である王塚古墳(161)など多くの古墳が存在している。またこの時代の集落跡では県営圃場整備事業に伴ない昭和52年度に発掘調査を実施

した比自岐盆地の馬場西遺跡(696)、昭和52年度より木津川の河川改修及びこれに関する事業に伴って継続的に発掘調査を実施している木津川西岸の下郡遺跡(164)などで古墳時代の竪穴住居跡が確認されている。

一方、当狭間遺跡が立地し、比自岐川をはさむ狭窄部は、比自岐盆地から木津川沿岸に至る関門ともいえる地形によるものか、この地域の丘陵地には南岸の丸山に所在する丸山城跡(460)をはじめ、滝川



第3-3図 発掘区位置図(1:2000)

三郎兵衛砦跡(575)、城氏館跡(576)、嵯峨尾主馬砦跡(577)などの中世城館跡が集中し、まもりの拠点ともいえるべき様相を呈している。

また、昭和49年から昭和51年に上野市によって実施された上野市南部都市開発地域埋蔵文化財分布調査では、計画区域約2000haの中でもこの区域は古墳や城館跡などの埋蔵文化財が最も集中する区域のひとつとして挙げられている。

2. 層 序

調査の方法は、調査区が排水路部分のみに限定されるうえに、平常でも湧水が激しく、また調査の進行にともない遺構の存在が認められないところから、

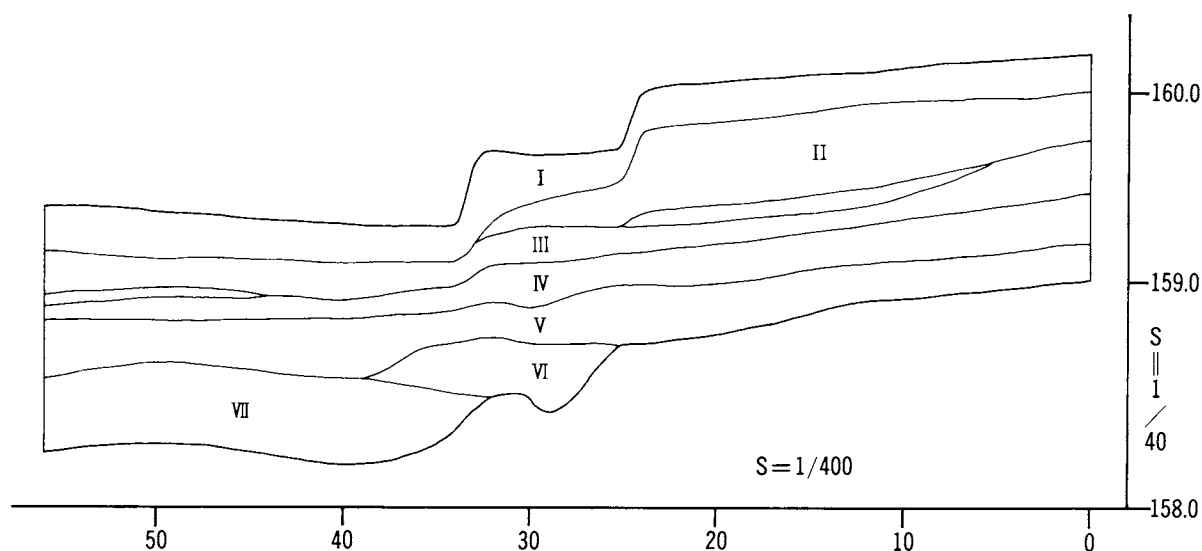
幅約4m、延長約56mあまりにわたって耕作土を重機によって排土したのち、その西半部にあたる幅約2mのみを手掘りによって無遺物層まで掘り下げ、

遺物の採集及び断面の観察とその実測図作成を行なったものである。

調査区の田面高はトレンチ北半に当る高位の水田で約160.2m、トレンチ南半に相当する低位の水田で約159.4mであり、厚さ約20cm前後の水田耕作土下にほぼ高位の水田のみで淡灰褐色砂質土が認められる。以下20～30cmの厚さで北から南にかけてゆるやかに傾斜しながら暗灰色粘質土層、黒灰色粘土層、黒茶褐色粘土層と続き、一部に暗灰色粘土層（無遺物層）が見られ、最下層は青灰色砂質粘土層となっている。また激しい湧水と粘性の強い土質のため十分明確とはいえないが、暗灰色粘質土層には瓦器片や土師器片を若干含むほか、その下部で加工痕が認められる用途不明の板材が出土している。また、

暗灰色粘質土の遺物出土状況と同様に不明確ではあるが、黒灰色粘土層では数点ながら古墳時代の土師器・須恵器の小片が出土している。さらにこの下層である黒茶褐色粘土層は多量の植物遺体を含む層で、調査中の新鮮な断面では黄褐色ともいべき色調を呈するが、多量の植物遺体が露出とともに酸化するためか、極めて短時間のうちに黒く変色してしまうため黒茶褐色粘土層と呼称することにしたものである。なおこの層中には土器片・加工痕を残す木片等の遺物というべきものは何ら出土しなかった。この黒茶褐色粘土層の下はトレンチ中央部付近の15mたらずの範囲で暗灰色粘土層、トレンチ南半で青灰色砂質粘土層が見られ、トレンチ底のほぼ全延長にわたって青灰色砂礫層の上面を確認して調査を終った。

(吉水康夫)



第3-4図 調査区断面図 (単位m)

IV 阿山郡大山田村 永井氏城跡

1. 位置と歴史的環境

布引山地を源流とする服部川は、阿波・三谷・広瀬へと浸食作用によって土砂を運び、沖積平野を形成していった。それが山田盆地である。その南東部の谷口付近に出後集落があり、付近は水田地帯である。出後集落の南部の標高240m、比高33mの舌状台地上に永井氏城跡(1)がある。

山田盆地には先土器・縄文時代の顕著な遺跡は不明確であるが、西谷遺跡(2)から、縄文前期末から中期初頭の土器片が出土している。

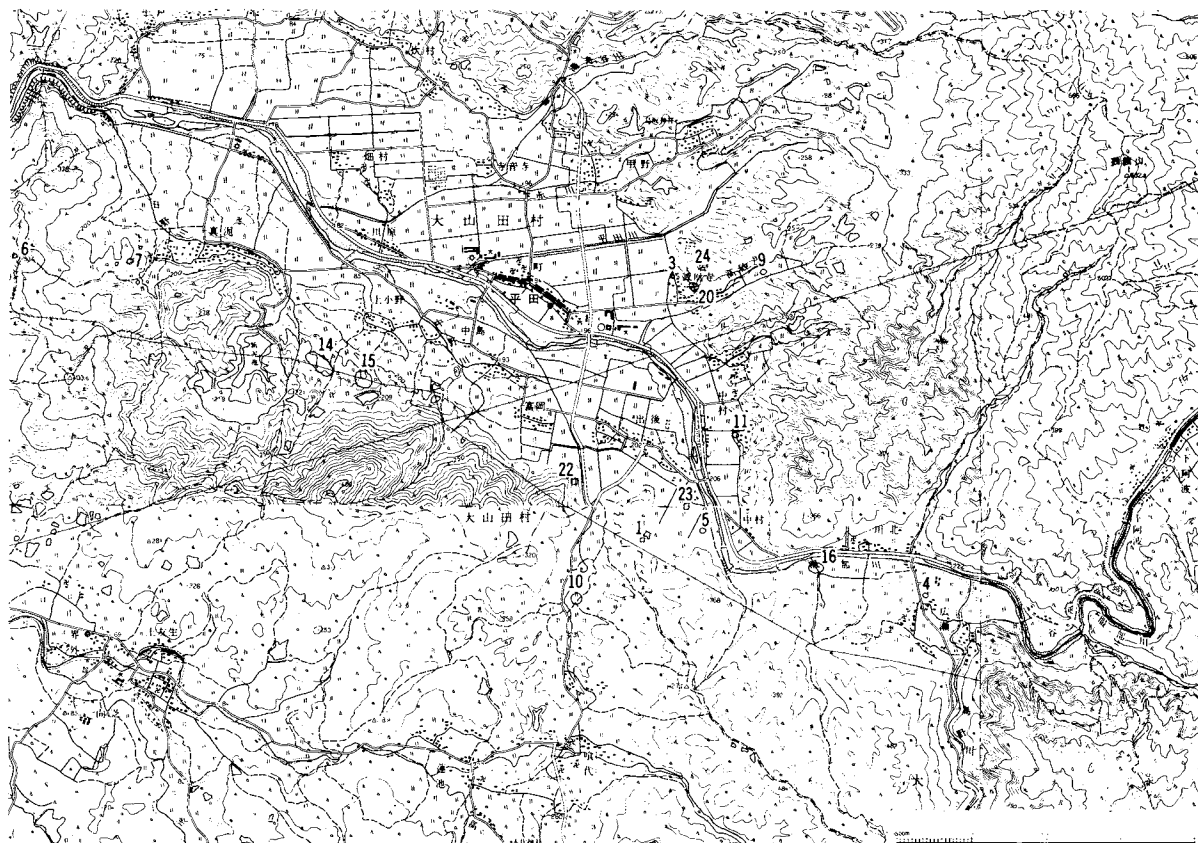
弥生時代では、轟遺跡(3)・沢遺跡(4)・高北遺跡(5)が知られている。

古墳は多数分布している。前期では、上野盆地と山田盆地との境にある高塚山から北に延びた稜線の鞍部に、伊賀最古の前方後円墳といわれている全長

90m程の荒木車塚古墳(6)がある。この東麓には、朱彩痕のある円筒埴輪を出土した寺垣内古墳(7)、盆地の中央には全長60mと推定される寺音寺古墳(8)がある。

後期の主要な古墳としては、鳳凰寺集落の東方高砂川がつくる谷底平野に横穴式石室をもつ鳴塚古墳(9)、中野川東岸の尾根上には高猿古墳群(10)がある。特に1号墳は、蛤・鮑の貝殻や蝶の骨の入った須恵器が出土したことで知られている。また、中村集落の東には両袖式の横穴式石室や組合せ式石棺・暗渠排水溝をもつ辻堂古墳(11)がある。

後期の群集墳は、永井氏城跡に近接して中出山古墳群(12)がある。また、三谷古墳群(13)を東限として平林古墳群(15)・神林古墳群(15)・横枕



第4-1図 遺跡位置図(1:50,000 国土地理院 上野・平松・伊勢路・佐田)

古墳群(16)等、盆地の東部及び南部の山地に160基余りあり、横穴式石室が開口しているものが多い。

奈良～平安時代の集落では、蓮池代遺跡(17)・山出遺跡(18)は緑釉陶器を、西沖遺跡(19)は鉄製紡錘車を出土し、注目されている。また、伊賀安女宅子のゆかりの鳳凰寺廃寺(20)は、白鳳期の古瓦を出土しており、この地域の古代史を考える上で貴重な資料となっている。

伊賀には、500余という多数の中世城館が築かれている。山田盆地だけでも、永井氏城跡のほか中出山城跡(21)・岡山氏城跡(22)・出後氏館(23)・轟城跡(24)・久保氏城跡(25)等、40余りもの城

館がある。このように多くの中世城館が出現した背景には、黒田の悪党に代表されるように、荘園領主の力が弱まるにつれて、領主に反抗し、土豪化する傾向があった。幕府から、任命された守護は、土豪を統一するだけの力を持たず、土豪たちからも一村さえ領有する者がでず、一村に数人から十数人の土豪たちが、互いに牽制し協調しあって割拠し、小規模な城館を築いていった。特に室町時代にいたっては甚だしく、現在確認されている城館は、室町中期以降から織田氏の伊賀攻めに備えた天正期の城が大部分と思われる。

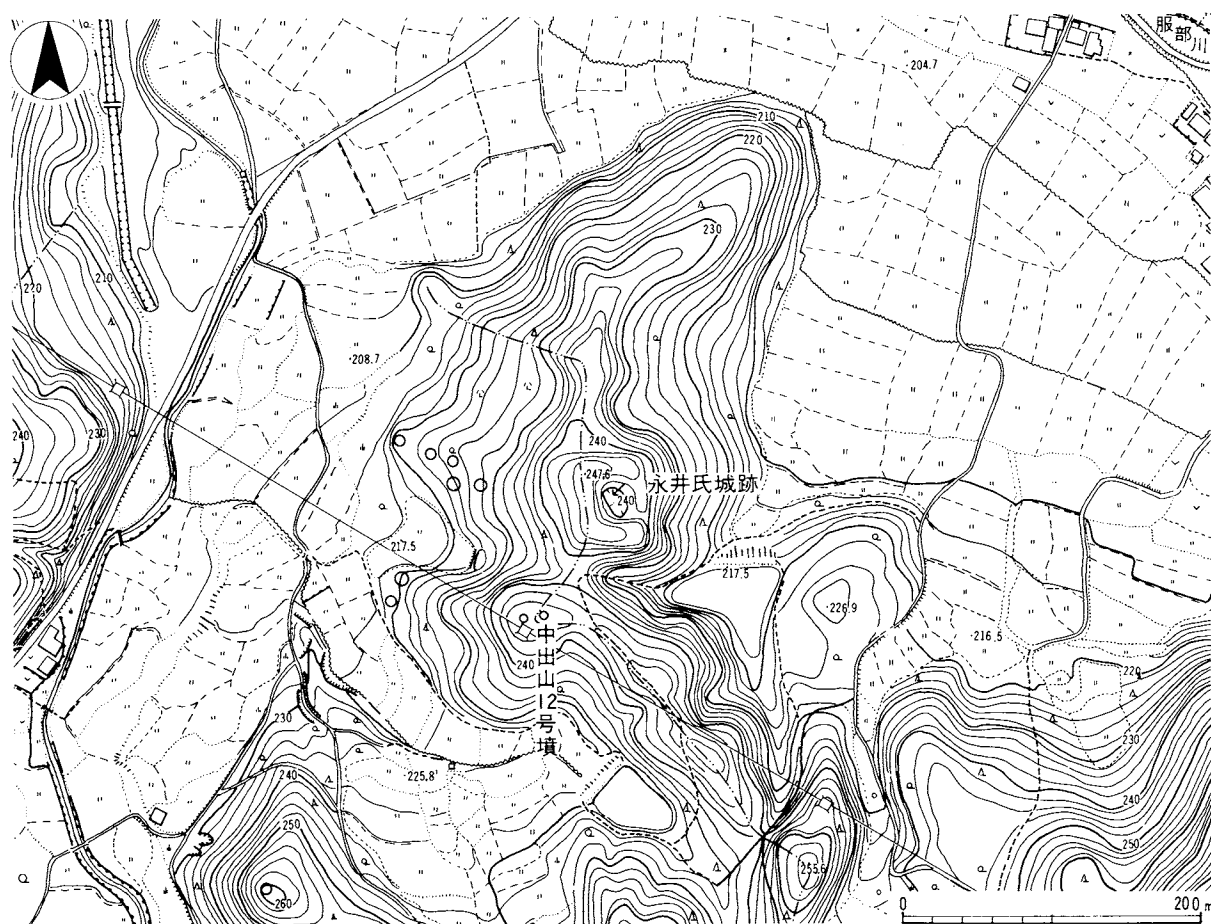
2. 城館の現況

山田盆地の南東部にある丘陵東斜面に永井氏城跡がある。行政上は阿山郡大山田村出後字中出山1684番地に所在する。

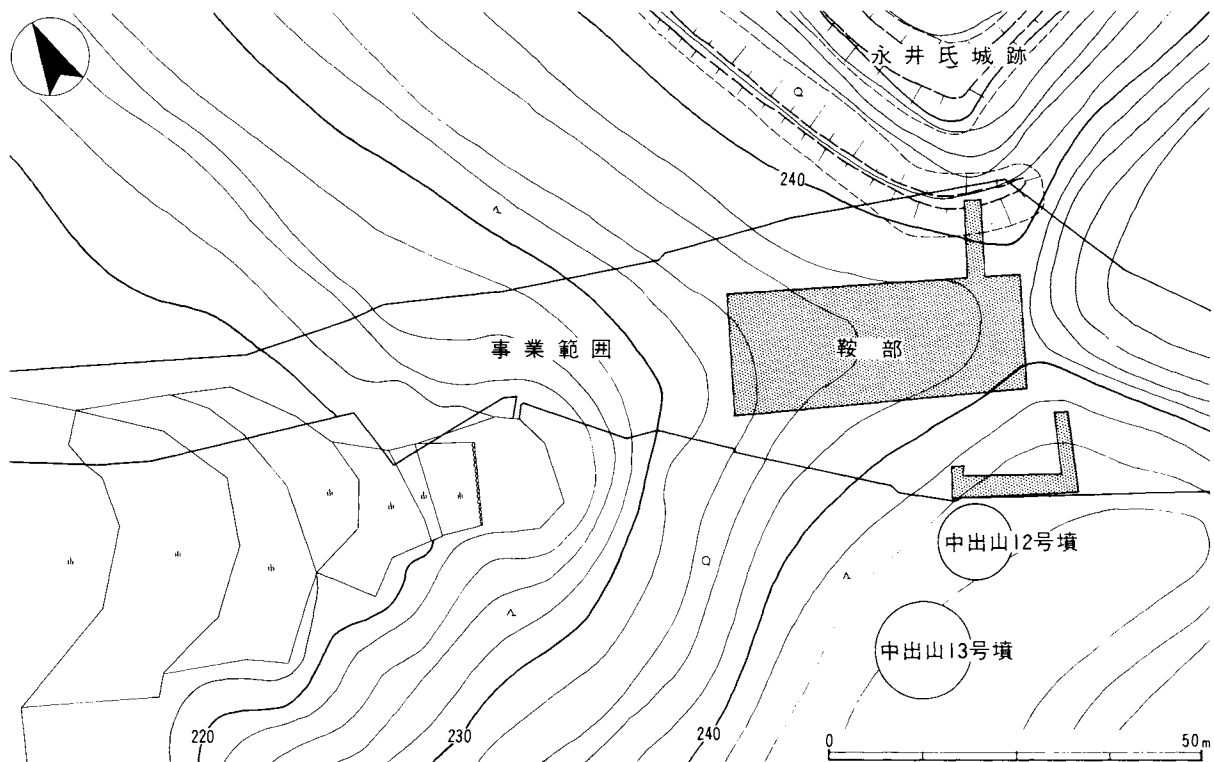
『三国地志』や『明治地誌取調上申書』には、永

井氏城跡は、元龜・天正の頃郷土永井内膳の居城と伝えられている。

永井氏城跡は、山林として利用されているにもかかわらず、比較的現状をよくとどめている。四方が土



第4-2図 遺跡地形図(1:5,000)



第4-3図 発掘区位置図(1:1,000)

塁(内堤)で囲まれ、その中に主郭を形成している単郭の丘城である。その規模は、およそ70×60mである。東側は入口で、盛土によって土塁(内堤)が築かれ、土塁(内堤)のほぼ中央に虎口が設けられている。主郭部の遺構として、北東部の隅に石組井

戸がある。土塁(内堤)の南西隅には、方形の見張台がある。主郭の北東部の斜面には、三段の切込みによる平坦地や掘切りを設け、西側斜面に対しては、空堀をめぐらし、さらに土塁(外堤)を設けて防備をほどこしている。

3. 遺 構

(1) 永井氏城跡および鞍部

今回の発掘調査は、外堤および鞍部が事業地内に入るため、次の方法で行なった。

外堤部分は、平板測量と1m幅のトレンチによって外堤を南北に断ち割り調査を行なった。

鞍部については、永井氏城跡および古墳に関連する遺構の有無を確認するため、東西約36m、南北約11mの調査区域を設定した。その結果、地表から約30cm下の暗黄褐色粘土上面で遺構の検出にあたったが、遺構は確認できなかった。そこで、調査区域内に東西約20mと南北約26m(永井氏城跡の外堤の断ち割りトレンチの延長)の幅約1mのトレンチと、この2本のトレンチが交叉する地点から西へ約7m、南へ約11mまでの区域に限定して、下層遺構の確認につとめた。深さ約130cmの地山である淡緑褐色粘

土の上面まで、各層ごとに遺構の検出にあたったが、遺構は確認できなかった。

外堤部および鞍部の堆積状況からは、漸移的に堆積したものと推定され、不整合面は見られなかった。

その基本的な層序は、第Ⅰ層=覆土、第Ⅱ層=永井氏城改修時の盛土層、第Ⅲ層=永井氏城構築時の盛土層、第Ⅳ層=永井氏城以前の土器と石器の包含層、第Ⅴ層=石器のみの包含層に分類される。遺物は、第Ⅰ層・第Ⅳ層・第Ⅴ層の鞍部のみに出土した。

第Ⅰ層の淡黄褐色粘質土は、外堤の南斜面から鞍部におよんで、約20cmの厚さで堆積している。遺物は砥石1点と中近世陶器片数点が出土しており、第Ⅰ層は中世後期以降の層と推定される。

第Ⅱ層は、城館改修時に第Ⅲ層の上に盛土され、外堤をより高くしている。第Ⅱ層は、いずれも破碎

された小岩が混入している。暗黄褐色土が外堤盛土を覆い、第V層の上面まで外堤の内側に厚く堆積しているのは、盛土してあった土が風化し、流れ落ちたものと思われる。遺物はなく時期は不明である。

堆積状況から見て、第Ⅲ層も単なる自然地形とは思われず、外堤であった可能性が強い。第Ⅲ層の茶褐色粘土は、第V層の小岩混入茶褐色粘土とよく似ている。それは、第V層を掘って空堀をつくり、その時に生じた排土を盛土したと推定される。しかし、第Ⅲ層上部の暗褐色土は、旧表土と思われるところから、第Ⅱ層と第Ⅲ層は同時ではなく、2期に及んで築かれていると推定される。遺物はなく、時期は不明である。

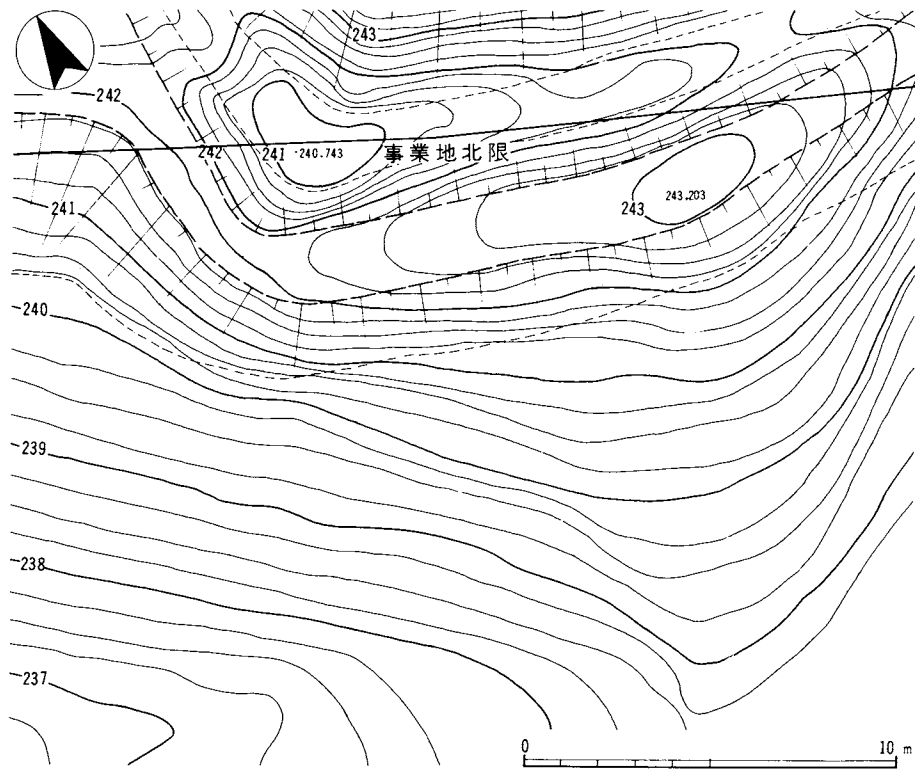
第Ⅳ層は、第V層の上に外堤の南斜面から鞍部にわたって暗黄褐色粘質土が堆積したものであり、鞍部に炭化物が混入している。その上の鞍部に、黒褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗黄褐色粘質土がレンズ状に堆積している。暗黄褐色粘質土から縄文土器

3片・石器5点（石鎌・石匙等）、黒褐色粘質土から縄文土器2片・須恵器2片・石器5点、暗茶褐色粘質土から縄文土器2片・石器1点（石匙）が出土している。その他に暗黄褐色粘質土をはじめ、これより上層から少量ではあるが瓦器細片が出土しており、第Ⅳ層は瓦器出現以降の層と推定される。

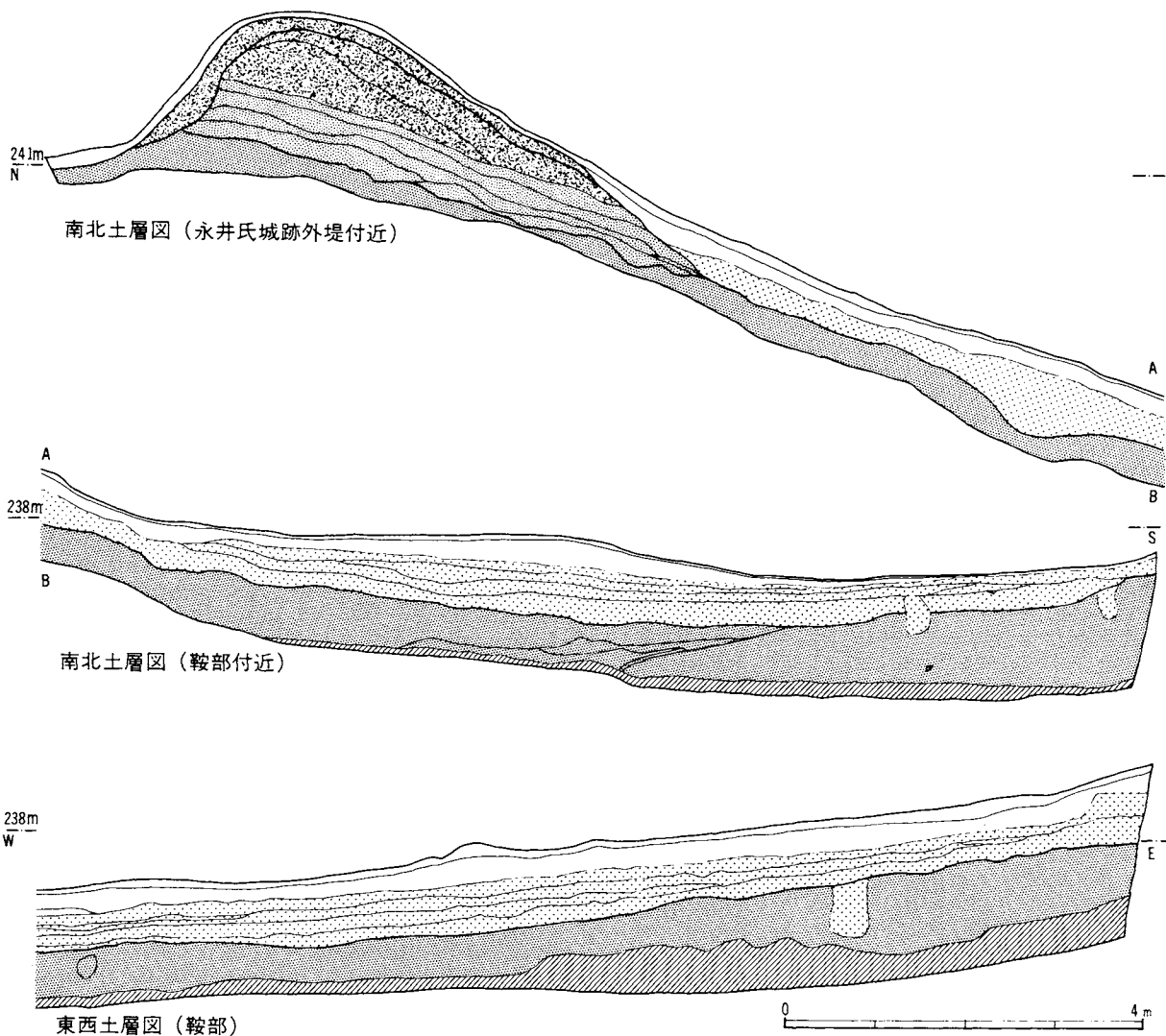
第V層は地山直上にあり、黄褐色粘土が約15cm～60cmの厚さで鞍部に堆積した上に、やや明るい黄褐色粘質土が、外堤から鞍部にわたって約50cm～100cmの厚さで堆積している。また、黄褐色粘質土には、外堤部では小岩が、鞍部では炭化物が混入している。黄褐色粘土から剥片石器1点、黄褐色粘質土から石鎌3点を出土している。第V層は、土器類が出土せず、石器類のみが出土している。

(2) 中出山12号墳

永井氏城跡から鞍部を隔てた南の尾根上には、中出山12・13号墳が知られているが、この東にも1基存在する可能性があり、事業地に一部含まれると判



第4-4図 永井氏城跡南面土塁測量図（1：150）



第4-5図 土層断面図 (1:80)

断された。

古墳の北側斜面が事業地内に入るか否かを判断するための試掘溝を第一次調査として実施したが、主体部を含む古墳関連遺構が事業地内から外れているため、古墳全体については、発掘調査をせず、測量による現況の記録だけにとどめた。

測量の結果、12号墳の東側のたかまりは単なる自然地形であり、西側の12号墳は径10m・高さ1m程の円墳と推定された。

12号墳の時代は、鞍部から出土した須恵器杯身が、6世紀初頭であるが、これが古墳の築造もしくは追葬の一時期を示すものか定かではない。

4. 遺物

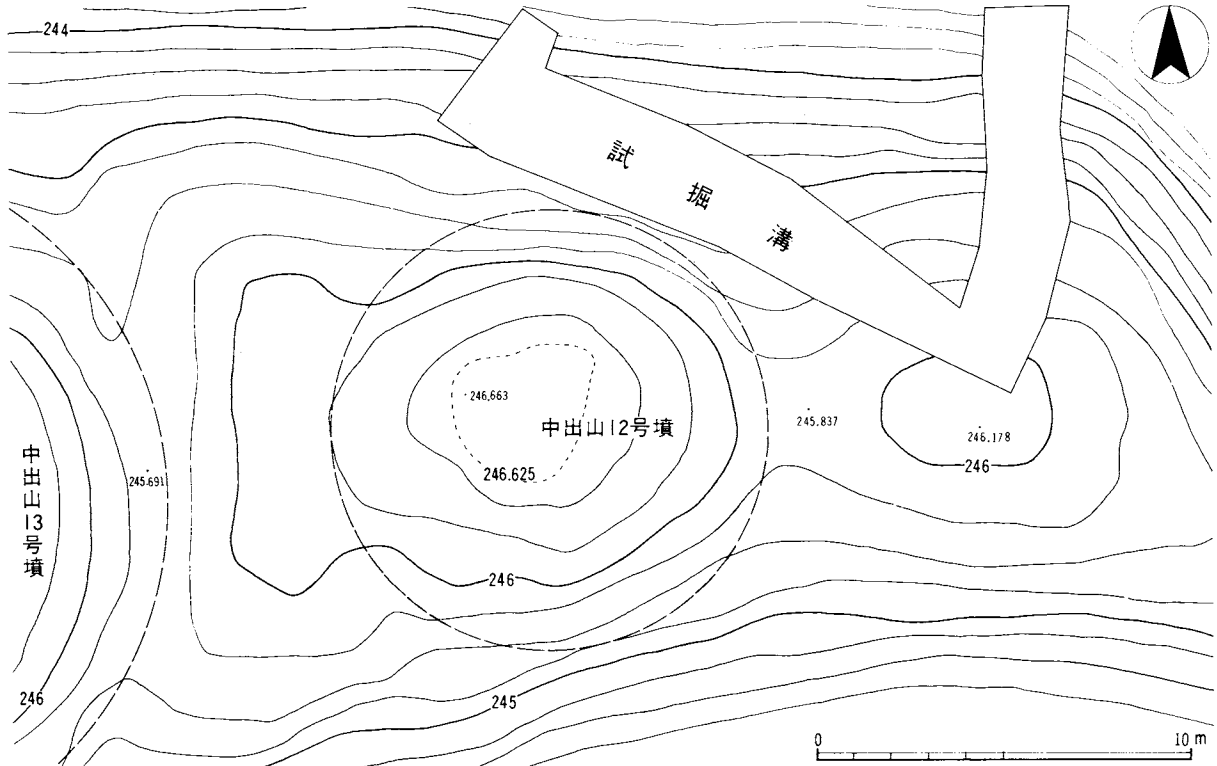
鞍部の調査区から少量ではあるが、石器（石鏃、石匙、削器、搔器、フレーク等）を中心に、縄文晩期土器片、須恵器杯、剝片、その他・中近世陶器片等が出土した。

(1) 石器

図示した石器は石鏃（1～7）、石匙（8、9）、削器（15）、搔器（11、13）、剝片（10、12、14、16～18）

であり、石材はすべてサヌカイトである。

石鏃はすべて凹基無茎式である。寸法は、長さ16mm～30mm、幅14mm～19mm、厚さ2mm～25mm、重量は0.5g～0.75gである。平面形態からは、側辺が直線的なもの（2、4～7）と、側辺が先端部より外弯し脚部先端に至るもの（3）と、両側に肩をつくるもの（1）の3種類があり、わたくり部が丸味を



第4-6図 中出山12号墳実測図(1:200)

もつもの(3~7)と、三角形状となるもの(1、2)とがある。わたくり部が浅い例は3(3mm)、4(2mm)で、他は4mm以上である。最も深いもので1と6の7mmである。1は先端部が細く、基部で横に広がる。2は全体的に細身で側縁には小さな調整剥離がなされているが先端部付近で剥離は細密である。平面形は左右対称となる。片面の先端部には石の節理が見られる。3は側縁の湾曲度が強く、全体的にずんぐりとした形態となり、先端も鈍角となっている。先端部と脚部一端を欠損する小型の石鏃である。平面形は左右対称となる。4は他に比べて小型の石鏃である。5はいわゆる「鍬形鏃」の形態をとり、両脚部は幅広に作られている。わたくり部は半円形を呈している。6も鍬形鏃に近い形態をとる薄手の石鏃である。わたくり部は三角形状に近い。7は左右対称の石鏃で、片面には鑄が通っている。

石匙には縦形と横形とがある。8は横長の剥片を利用した縦形石匙である。横長の剥片を調整した後、刃部とつまみ頸部を調整加工している。表裏とも一方の側縁にのみ調整加工が施されている。幅28mm、高さ77mm、厚さ8mmである。9は横形石匙である。大きな剥離で先ず三角形を形成した後、調整剥離で、つまみ部と刃部をつくりだしている。両面とも調整

剥離は入念に行なわれている。幅57mm、高さ38mm、厚さ7mmである。

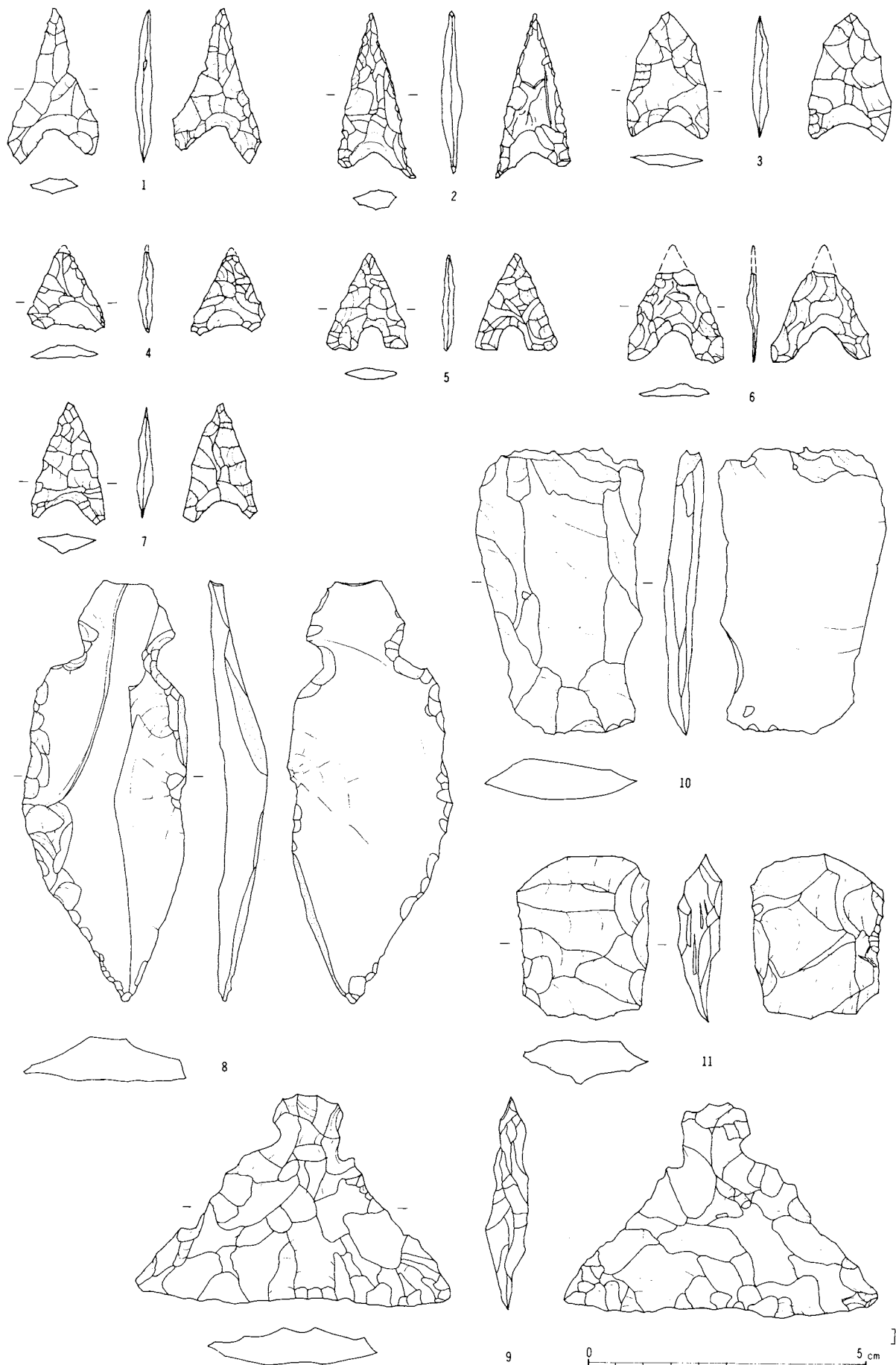
削器(15)は横長の剥片を素材としているが、1面には自然面を残している。自然面を残す面の1側縁に調整加工が、他面の先端部には細かい調整加工が施されている。

搔器(11)は楔状石器の形態を呈している。両面とも調整加工が施されるが、自然面の残る面はやや加工が雑である。13は一部を欠損する。2面の合する鋭い1辺の片面にのみ調整加工が施され、刃部を作り出している。

剥片は全て小さい。10は比較的整った縦長の素材の片面にのみやや粗に調整加工が施されている。12は自然面の残る不定形な素材の側縁に調整加工が認められる。14は横長の剥片を素材とし、片面にわずかな加工が施されたものである。16~18は両面ともに大剥離を施したままである。

(2) 土器

19、20は須恵器の小片である。19は宝珠つまみの付く杯蓋であり、かえりはない。端部は短かく下方に屈曲している。口径は13.6cmである。胎土は緻密で石英小石(1~5mm)が混り、細砂を含む。色調は暗青灰色を呈する。20は古墳時代の杯身である。



第4—7图 石器实测图(1:1)



第4—8图 遺物実測図石器(1:1)、土器(1:2)

口縁部は直立し、端部は内傾した面をとる。体部は右廻りのロクロにより成形している。口径は9.6cmと推定されるが、小片であり、不確実である。胎土は緻密であり、石英小石（～2mm）が混り、細砂を含む。色調は青灰色を呈する。

21～25は縄文時代晩期後半の小片の土器である。21は1条の刻目突帯を持つが磨耗が激しく、調整技

法は不明である。また、口縁部片か体部片かも定かでない。刻目は「D」字形を呈し、ハケ状具によって施文している。

22～25は横位の条痕をとどめる体部片であり、ヘラ状工具によって施文されている。胎土は全て石英、長石類および金雲母を含み、器壁が荒い。23、24は器壁にススが付着している。

5. 結 語

(1) 遺 物

出土遺物は少量であったが、各種の石器をはじめ、縄文晩期土器、古墳・奈良時代須恵器、瓦器等と各時代におよぶ。

石器類は全てサヌカイト製であり、横剥技法を中心としている。横剥ぎ剥片の中には翼状を呈すものもあるが、打面に自然面を残す例もある。出土石器の大部分は縄文時代前期を中心とした時代と推定されるが、10のように、岩盤から10cm程の位置から出土した、他よりもやや風化の進んだ例も含まれる。

(2) 城館について

今回の発掘調査は、中井氏城跡に関しては事業地内に入る外堤のみに限られていたため、城館に伴なう遺物はなく、時代を確定することはできなかった。

外堤の断ち割り調査によって、外堤は2期に及んで構築されたことが判明した。外堤部分である第Ⅱ層と第Ⅲ層が、遺物がないため時代を確定することができない。堆積状況から見て、少なくとも第Ⅲ層は、第Ⅳ層以後に構築されたものである。その第Ⅳ層も、瓦器出現以降すなわち古代末以降の層としか

推定することができない。また、第Ⅳ層は、瓦器が少量で細片であるため、瓦器の頃の層と必ずしも断定できない。

伊賀地方の中世城館は、中世後期に築かれたものが多く、永井氏城跡もおそらく他の中世城館とほぼ同時期に築かれたのではないかと推定される。したがって、第Ⅱ層・第Ⅲ層も、中世城館の外堤として、中世後期に2期に及んで構築された可能性が高く、その廃絶期も確定できない。

(3) 中出山12号墳

第一次調査の結果、12号墳は事業地にまでおよばず、また平板測量の結果、12号墳東方の高まりは自然地形と判断した。

12号墳は、測量の結果から径約10cm、高さ約1mの円墳と推定される。埴輪や副葬品等は不明であるが、鞍部上面から須恵器杯身が出土している。これが古墳からの転落物であれば、古墳築造もしくは追葬の一時期を6世紀初頭と推定することも出来るが定かではない。

(中山 暁・井藤正文・中西正典)

V 阿山郡大山田村 ^{たかつら} 高顔遺跡

1. 遺 構

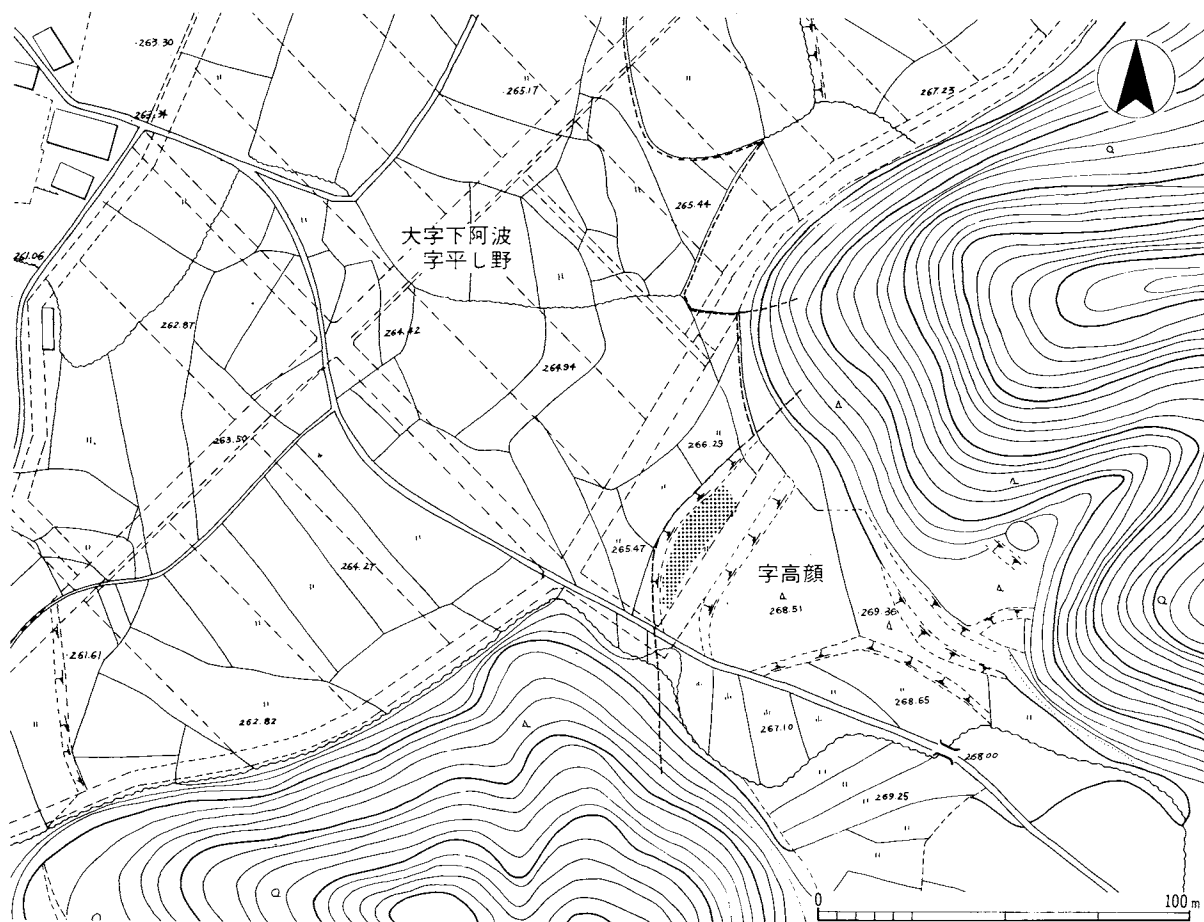
土層の基本的層序は上から第Ⅰ層：耕作土（15～20cm）、第Ⅱ層：灰褐色土（床土で数cmと薄い）、第Ⅲ層：黄褐色粘質土（30～35cm）、第Ⅳ層：暗灰褐色粘質土（約30cm）、第Ⅴ層：黄褐色粘質土（砂礫混りで地山と考えられる）となる。地山までの深さは約80cmあるが、南から北に向って傾斜し低くなる。また、Ⅳ層は地山のレベルが低いところで厚く堆積するが、高所ではみられない。Ⅳ層には少量の中世遺物が確認され、遺物包含層と判断できるが、その上に堆積するⅢ層とやや攪乱がみられる無遺物層を後世（中世以降）の置土と考えると、それ以前の旧耕作土であった可能性も考えられる。

検出された遺構としては掘立柱建物（一部）と土壇があるが、以下概述してゆきたい。

S B 1 桁行3間、あるいはそれ以上、梁行1間以上の東西棟の掘立柱建物と考えられ、棟方向はN44°Eである。柱穴は径30～40cm、深20cm前後、柱間は桁で6尺(1.8m)、梁で7尺(2.1m)の等間である。

S K 2 長軸1.1m、短軸40cmの楕円形を呈する土壇で、深さ10cm内外、底は平坦である。埋土は暗茶褐色で土師器（羽釜）等を少量含む。

S K 3 2.3m×1.4mの不整楕円を呈する深さ10cm強の浅い土壇である。埋土は暗茶褐色土で、瓦器、土師器（羽釜）等を少量含む。



第5-1図 発掘区位置図（1：2,000）

SK4 径1 m余の円形土壇の北半分と考えられ

る。深さは20cm、埋土には炭を多量に含む。

2. 遺物

A. SK2出土の土器

羽釜形土器 (1) 復元口径28cm余の土師器の羽釜である。内傾して立つ口縁部は端部で丸みをもっておわる。口縁部内外面、及び鏝全体はヨコナデ調整されている。色調は茶褐色を呈し、胎土には金雲母の他、細砂粒を多く含む。焼成は良好で鏝下面には煤の付着がみられる。

瓦器小皿 (3) 口径10cm余、器高1.8 cm余の瓦器小皿である。外面は口縁部のみ強いヨコナデがみられ、以下は未調整で指頭圧痕と凹凸がよく残って

いる。見込み部にはジグザグ状の暗文がみられる。胎土は灰色、色調は黒色を呈する。

B. Pit 1出土の土器

土師器 (2) 復元口径14cm余、器高2.8 cm余の皿である。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、特に外面のヨコナデは強く、口縁部は外反し、底部との境で稜をつくる。口縁部以下は未調整であるが若干のナデの跡もうかがえる。色調は淡褐色で、胎土には細石粒を少量含むが、焼成は良く硬質である。

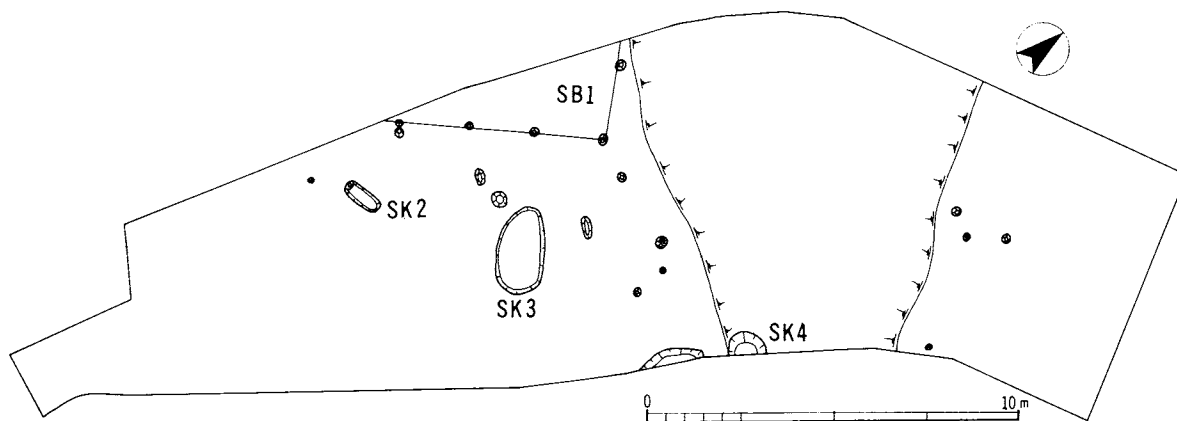
3. 結語

検出遺構としては掘立柱建物(1棟)の一部と考えられる柱穴列の他は、土壇が数基ある限りである。遺構面は発掘区中央東寄りが窪地状(元々の谷地形か)になっており、その両側に建物跡等の集落跡の広がりを推定できるが、今回の調査は限定された少

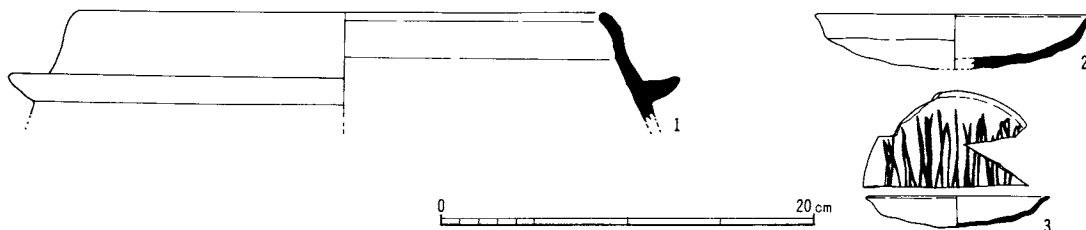
面積のため全容については不明である。

出土遺物はその形態、技法等からおよそ平安時代末から鎌倉時代初頭(12世紀後半~末)のものと考えられ、建物についてもその時期に比定できよう。

(新田 洋)



第5-2図 遺構平面図(1:200)



第5-3図 出土土器実測図(1:4)

VI 名張市赤目町 檀・柏原遺跡

1. 位置と歴史的環境

近鉄大阪線赤目口駅の南東約300mの所に赤目小学校と保育所がある。当該遺跡はその保育所の南方、滝川右岸に広がる標高約212m前後の扇状地状地形に立地している。

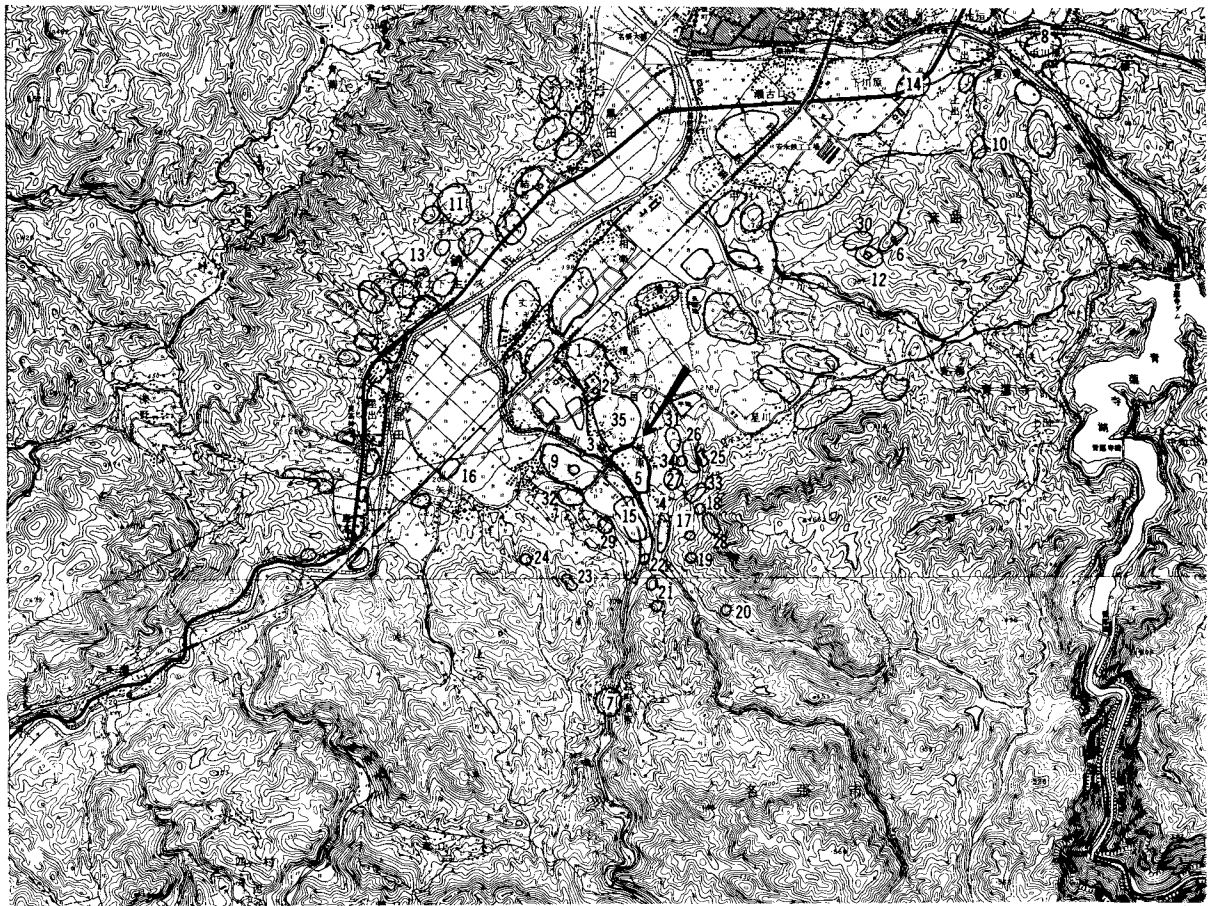
名張市赤目町大字柏原字北戸から垣添にまたがるこの地域には、従来から赤目檀遺跡(1)、大垣内古墳(2)、北戸古墳〔旧称垣内古墳〕(3)、貝増遺跡〔旧称柏原遺跡〕(4)等が知られていた。その後、檀遺跡と貝増遺跡の中間地帯にも垣添遺跡(5)の存在が確認された。

ここに言う檀・柏原遺跡は、北で檀遺跡と一部重複する一方、間に北戸遺跡(35)をはさんで、南に

垣添遺跡を包摂する格好になっている。従って、正確には檀・北戸・垣添遺跡とすべき所を便宜的に檀・柏原遺跡として報告するのであって、ここには旧称柏原遺跡は含まれてはならず、ましてや柏原地区内の遺跡の総称でもない。

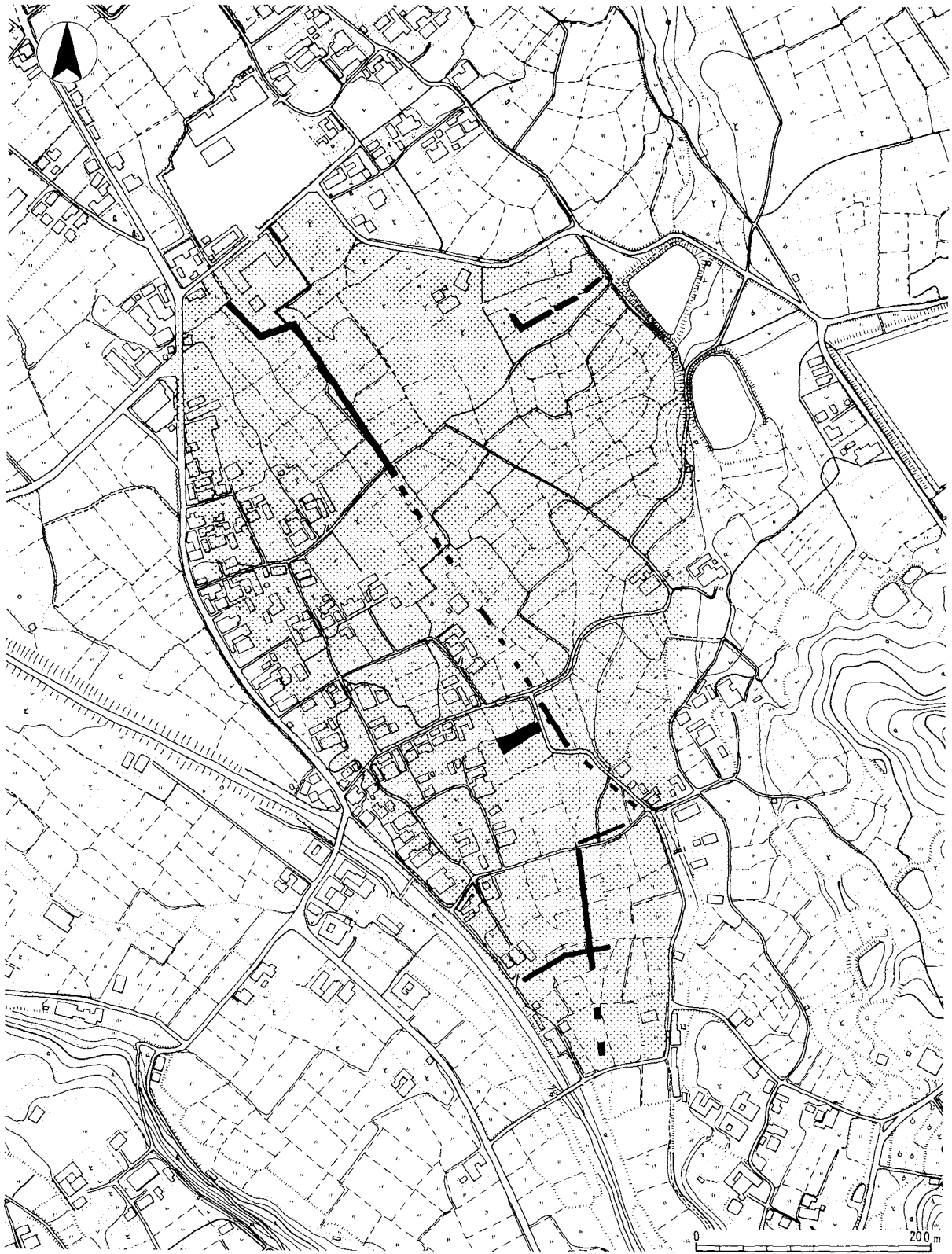
①
当該遺跡をとりまく歴史的環境を以下に略述しておく。



まず、縄文時代早期の遺跡として、サヌカイト製有舌尖頭器を出した白早稲遺跡(6)がある。前期は赤目檀遺跡と貝増遺跡が知られ、中期になると長坂地区(7)の他、蔵持黒田遺跡からは里木Ⅱ式併行の深鉢片が出土している。後期では薦生遺跡、中



(国土地理院地形図、名張昭和53年 大和大野昭和57年)

第6-1図 遺跡位置図(1:50000)



 檀・柏原遺跡範囲
 発掘調査地区

第6-2図 遺跡地形図(1:5000)

川原遺跡（8）及び辻垣内遺跡（9）がある。晩期の遺跡としては、口縁端部に刻み目凸帯のある深鉢片が出土した奥出遺跡（10）や把手部分に格子文を刻んだ石刀などが出土した井手城屋敷遺跡（11）をはじめ、土山遺跡（12）、辻堂遺跡などが知られている。

現在までの所、伊賀地方で出土した弥生式土器中最古のものは土山遺跡で出土しており、それに続くのは平尾山遺跡で、これらはいずれも弥生時代前期に属している。円形竪穴住居跡を検出した辻垣内遺跡や御所垣内遺跡（13）をはじめ、下川原遺跡（14）及び井手城屋敷遺跡などからは弥生時代中期の遺物が出土している。弥生時代も後期から古墳時代初頭にかけての頃になると周知の遺跡数は増加する。中でも、30数点の手焙形土器や竪穴住居跡等を検出した蔵持黒田遺跡を筆頭に、奥出遺跡、井手城屋敷遺跡、上東野遺跡（15）は弥生時代後期の中心的遺跡と言い得るが、他に下川原遺跡、町田遺跡〔旧称矢川遺跡〕（16）、大屋戸の大江寺跡、土山遺跡、白早稲遺跡などを挙げるができる。

古墳時代の遺跡は、名張では300基をこす古墳が確認されていることもあって、数量ともにヴォリュームラスとなる。

古墳時代前・中期の竪穴住居跡16棟と飛鳥時代のそれが43棟も検出された夏見の鴻之巢遺跡や35棟の竪穴住居跡を出した白早稲遺跡をはじめとして、他に古墳時代前期の竪穴住居跡を伴うのは、石製盒子等が出土した奥出遺跡、下川原遺跡、井手城屋敷遺跡、辻垣内遺跡、上東野遺跡^②がある。北部の美旗古墳群中、殿塚古墳は前期末から中期初頭に比定される名張で最古の前方後円墳である。

中期になると、5世紀前半の壺、甕、高杯、小形丸底埴や勾玉、管玉、石製模造品、銅鏡等の他、祭祀遺構も検出された土山遺跡^③がある。また、美旗古墳群には女良塚古墳、毘沙門塚古墳、馬塚古墳という中期の前方後円墳も知られている。

これに対し、南部の古墳群はおおむね後期に属すると言われている。わけても赤目から箕曲にかけての丘陵地帯はさながら古墳銀座の観があり、赤目地区の周辺だけでもおおよそ110基を数えることができる。このうち、貝増1～4号墳（17）、高善山古墳（18）、

木戸口古墳（19）、滝谷古墳（20）、台ヶ芝1～2号墳（21）、道観古墳（22）、大垣内古墳、北戸古墳、春日宮山古墳（23）、桃山古墳（24）、琴平山古墳（25）、横山1～12号墳（26）、宮城1～5号墳（27）、天神森1～5号墳（28）、辻垣内1～5号墳（9）、堂ノ前1～4号墳（29）などは、檀、柏原、一ノ井地区を中心に発見される古墳時代の集落と直接関係をもつと考えるのが妥当であろう。

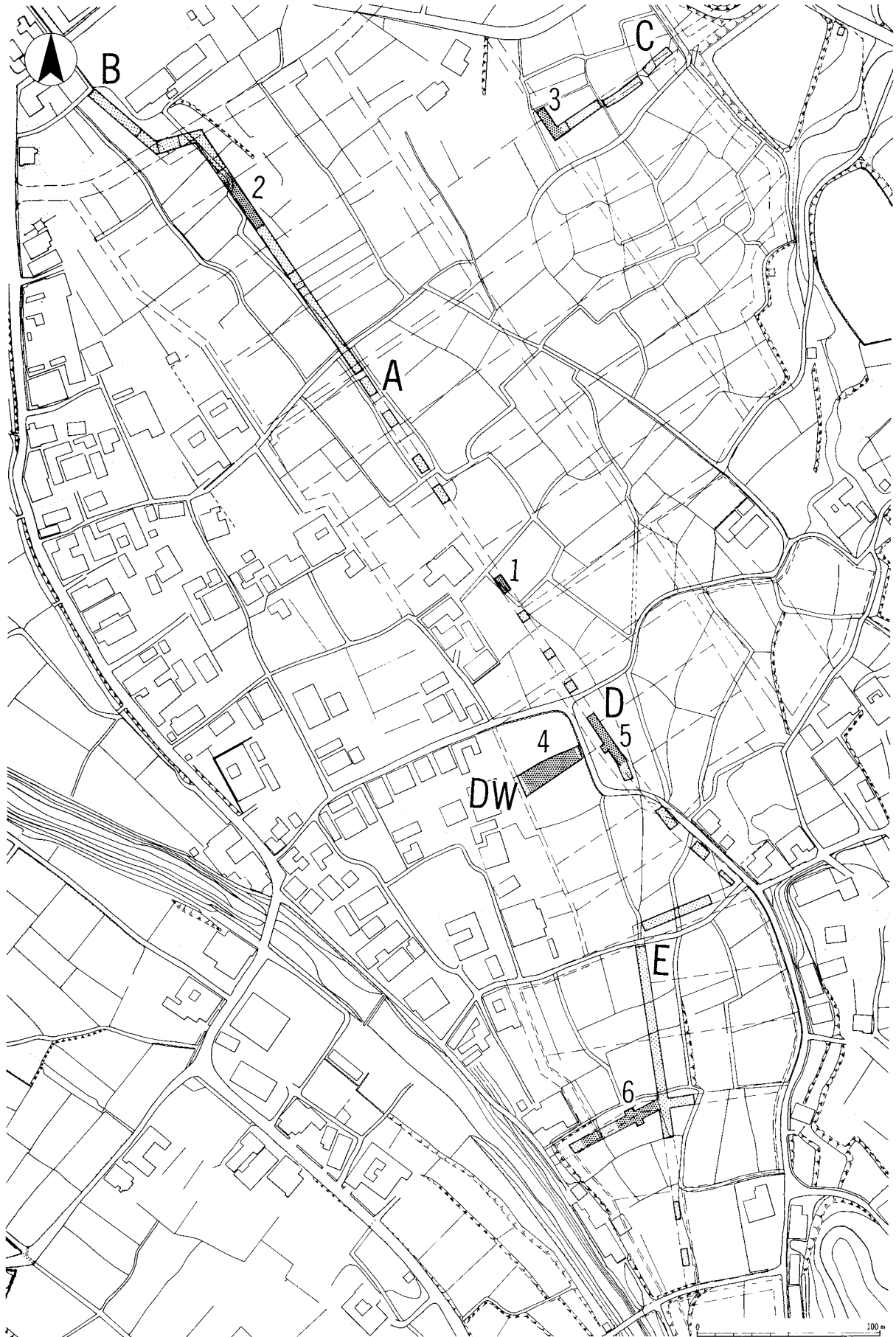
発掘調査によって後期の古墳であることがはっきりしているのは、奥出11～15号墳（10）、中村2、3、10号墳（30）、小谷3～4号墳、大垣内古墳、白早稲1号墳、辻垣内1、3～5号墳などで、いずれも6世紀前半から7世紀前半内におさまり、円墳で横穴式石室のものが大部分である。辻垣内遺跡や上東野遺跡で検出された竪穴住居跡にはその伴出遺物から古墳時代後期に比定されるものも多い。

飛鳥～奈良時代の遺跡としては、奥開遺跡、夏見廃寺、あるいは前述の鴻之巢遺跡などがある。

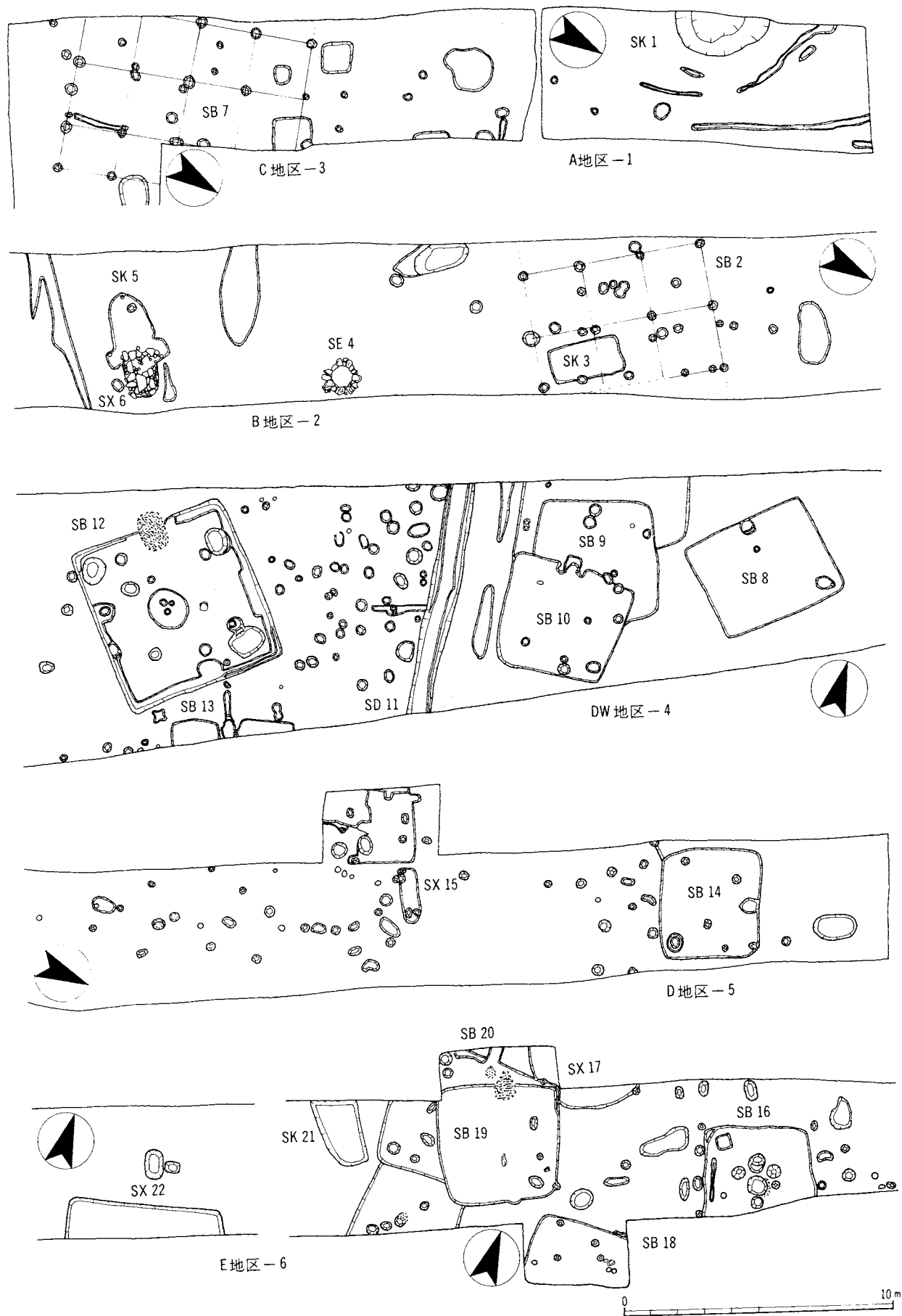
この他、掘立柱建物に伴い白磁、青磁、平安時代末から鎌倉時代初頭の瓦器椀等を出土した赤目檀遺跡、鎌倉時代前半～中頃の瓦器椀や土師器皿が出土した辻垣内遺跡、青磁、瓦器、陶器と多数の柱穴を検出した土山遺跡、室町時代を中心とした掘立柱建物群を検出した小谷遺跡などがあり、滝野氏城（31）、滝野氏城跡（32）、貝増館〔旧称宮城館〕（33）、滝野氏古城跡（34）などは赤目地区の中世城館として知られている。

最後に、この地域の歴史上不可欠なのは、ここが長く東大寺の荘園であったことである。その歴史については他書に詳しい記述があるので略すが、承安4年（1174年）12月3日の後白河院庁下文により、宇陀川東岸の矢川、中村、築瀬は一円不輪寺領化された。滝川左岸の一ノ井は矢川、同右岸の檀、柏原などは中村であったのである。鎌倉時代～南北朝時代には所謂黒田悪党が活動するわけであるが、檀には兵衛次郎、柏原には浄覚という悪党も住んでいたと言われている。

天正伊賀の乱は、数百年間続いた当地と東大寺との関係を断ち切る事件であったがしかし、今でも赤目町一ノ井の人々は、毎年3月12日に、東大寺二月堂への松明調進をして春を迎えている。



第 6 - 3 图 発掘区平面図 (1 : 3000)

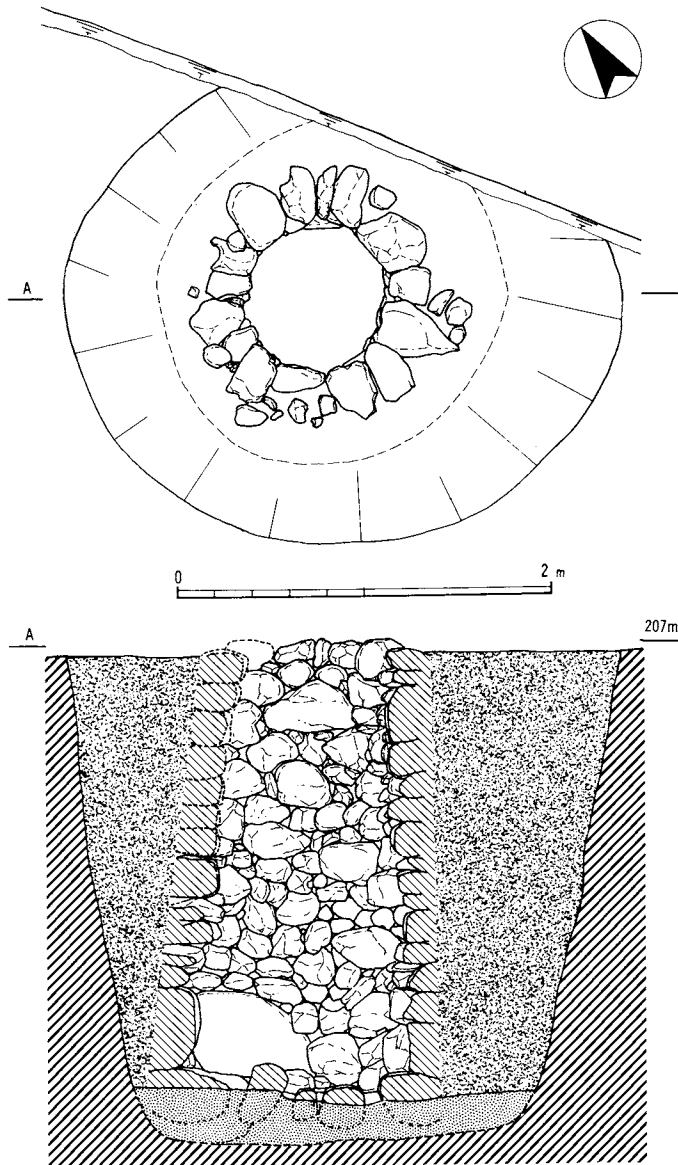


第6-4图 遺構平面図 (1:200)

2. 遺 構

発掘区平面図が示す通り、今回の調査は主として幹線排水路を対象としたため、非常に細長いトレンチ掘りになっている。便宜上、A、B、C、DW、D、Eの6地区に分けて調査を行った。このうち、DW区だけは排水路ではなく、工事によって削平される部分約300㎡の多少面的な調査区である。

基本的層序は、第Ⅰ層：暗茶褐色砂質土（耕作土）、第Ⅱ層：黄褐色砂質土（床土）、第Ⅲ層：黒褐色砂質土（包含層）、第Ⅳ層：淡黄褐色砂質土（地山）となる。遺構検出面は表土上面から40～50cmの所で、一部深い所では60～70cmの場合もあった。



第6-5図 SE 4 実測図 (1:40)

以下に検出された主な遺構について調査区毎に概述しておく。

A地区-1の遺構

SK 1 発掘区の西側壁際で検出。約半分が壁によってさえぎられているため全容は不明。掘形の径約3mで、深さは検出面から約60cmである。暗灰色粘土（埋土）に混じって瓦器碗（12世紀～13世紀）等が出土した。

B地区-2の遺構

SB 2 桁間の柱穴を2ヶ所欠いてはいるが、少なくとも桁行3間（6.6m）×梁行2間（4.7m）の建物と考えられる。この場合、梁行の1間分は西側へのびると予想すべきかも知れない。棟方向はN40°Wである。柱穴の掘形は円形で、径30～60cm、深さは12～23cmである。3柱穴から瓦器碗と瓦器皿の破片が出土した。また、南東の隅に浅い土壇（SK 3）を検出した。

SK 3 短辺約0.7m×長辺約1.3mの長方形を呈し、深さは約8cmと浅い。12世紀末～13世紀前半の瓦器の破片が比較的多く出土している。この土壇の北西約50cmの地点で軒丸瓦（巴文）も一点出土している。

この土壇がSB 2に付属するものかどうかの問題は残るが、出土遺物の比較検討からほぼ同時期の存在と推定できる。しかしその機能面については不明である。

SE 4 掘形の長径約3m、深さ約2.6mの中に川原石で小口積がなされている。検出面での井戸の直径は約75cmで、底へ行くほど少しずつ広くややふくらみを感じさせ、底面近くでは径約1m36cmとなっている。基底部に陣木はなく、埋土中からはわずかに茶臼片、播鉢片等が出土しただけである。

SK 5 長径約1.8m、短径約1.4mで、深さは約8～10cmの不定形をしている。上層埋土（明褐色粘質土）と下層埋土（暗褐色土）にはさまれて、1～3cmの炭化物層があった。出土遺物としては、瓦器細片と赤褐色の播鉢

底部破片（15世紀～16世紀）があるのみ。隣接するS X 6の掘形との境界ははっきりせず、両者の関係も不明である。

S X 6 幅約0.5 m、長さ約1.2 mで、比較的扁平な川原石を使用した構築物である。県下出土の類例⁵からみて古墳時代後期の小石室の可能性もある。側壁、床石の一部がすでに抜かれており、その抜かれた部分の埋土に炭化物が混入していた他は出土遺物らしいものは何もない。

C地区-3の遺構

S B 7 東側に廂をもった桁行4間（8.4 m）×梁行2間（4.5 m）以上の掘立柱建物と考えられる。柱穴の埋土は全て茶褐色粘質土で、そこからの遺物はほとんどなく、わずかに瓦器や土師器の細片が数点出土したにとどまる。

DW地区-4の遺構

S B 8 北西辺4.6 m×北東辺3.9 m、深さ約16 cmで、長方形プランをもつ竪穴住居跡である。西辺のほぼ中央にカマドがあったと思われ、壁際で焼土を検出している。北西辺に直交する軸はN42°Wである。周溝や主柱穴と認められるものはなく、東隅に長径70cm、短径46cm、深さ7 cmの楕円形の土壇がある。床面の中央部は周壁直下よりやや高まりをもっている。出土遺物には摩滅した土師器の甕や高杯脚部の破片の他、須恵器の杯身片等があり、後者は6世紀後半のものである。

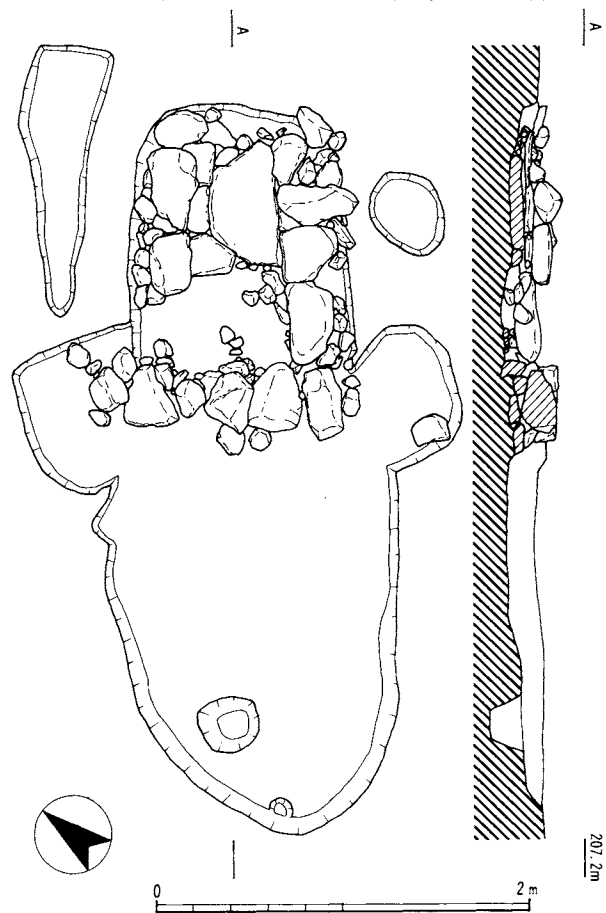
S B 9 北辺3.9 m×東辺3.9 m、深さは東南の隅が一番深く約23cmの竪穴住居跡である。北辺のほぼ中央に半径20数cmの範囲で焼土が残存していた。カマドの可能性が強い。S B 10によって切られており、全体として残り具合は良くない。

S B 10 北辺4.7 m×東辺3.6 m、深さ約19cmで、やや台形状のプランを示す竪穴住居跡である。北辺中央やや西寄りにカマドが取りつく。カマドの両袖に当たる部分に20～25cm大の直方体状の石を残す。カマド築造時に使用された可能性が強い。その石の下から北へ50～60cmの舌状に焼土が残る。出土遺物には須恵器の杯身・蓋等がある。

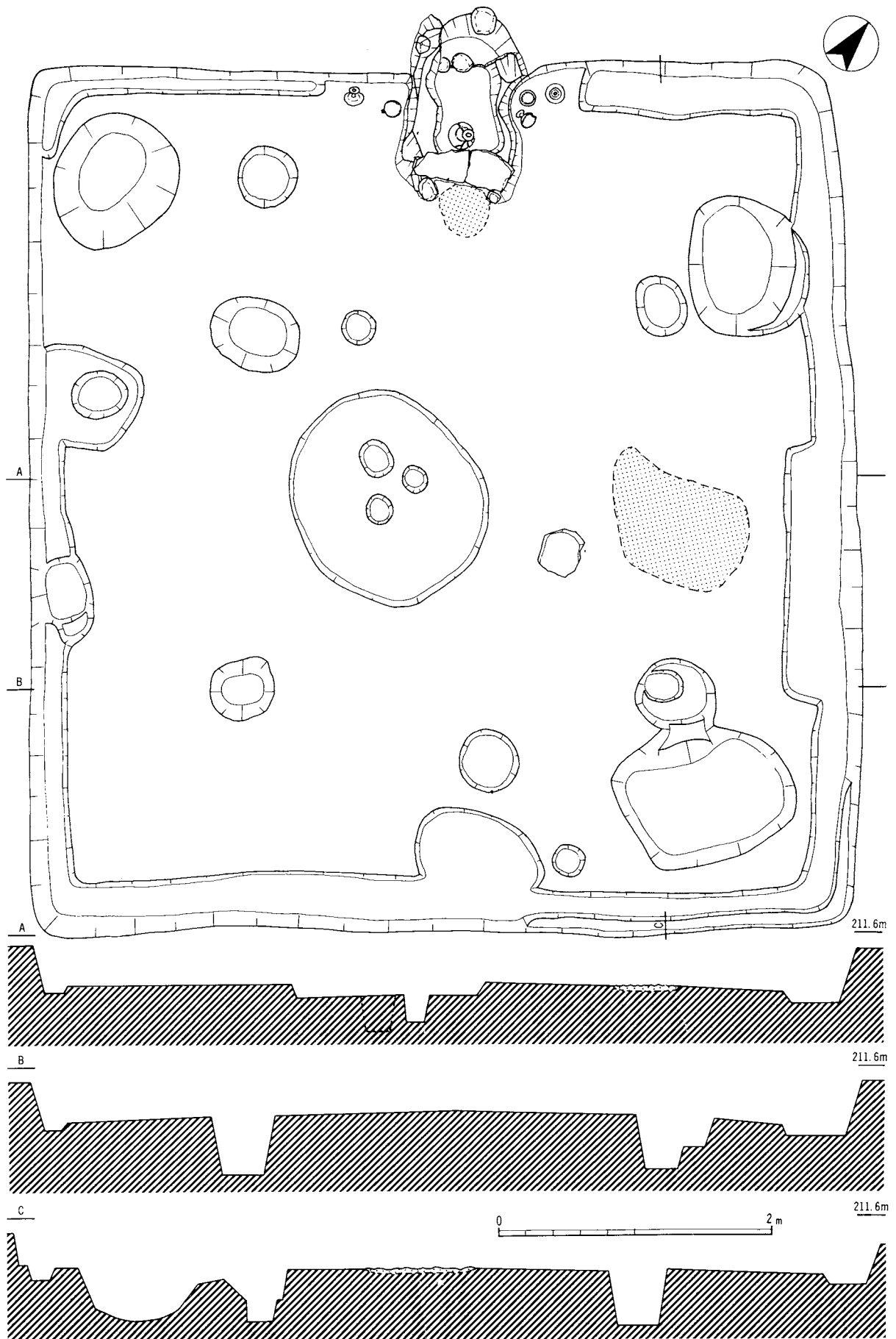
S D 11 幅約1 m、深さ約30cmで、S B 10の西側を南北に走る。掘形から約20cm下で一度テラス状の段があり、そこから溝底までは約10cmである。底幅

は約40～50cmである。出土遺物は少ないが、摩滅した瓦器や土師器等の細片が出土していることから、中世の溝と考えている。

S B 12 今回の調査中、最も保存状態の良好であった竪穴住居跡である。北辺6 m×東辺6.3 m、深さ約30cmで南北中軸線の傾きはN35°Wである。主柱穴をもち、壁際に周溝がめぐる。北辺の中央やや東寄りにカマドが取りつく。主柱穴の掘形はほぼ楕円形で、深さは38～42cm、主柱穴間の距離は東側で2.8 m、西側2.6 m、北側3 m、南側3.2 mである。周溝の幅は不規則で10～40cm、深さも3～9 cmと場所によって異なる。西側壁の少し周溝が途切れた所に入出口が設けられていた可能性はあるが確証はない。カマド（第8図）は天井部が崩壊しているが、遺存状態は良好である。現状での袖部最大幅は約90cmで、左袖は1 m 35cm、右袖は1 m 10cmがほぼ平行に張り出す。素材には淡黄褐色粘質土が使用され、焚口部幅約40cmでその上に厚さ約4 cmの扁平な石を渡して焚口を構築している。石の下から径約40cmの範囲で焼土が強く張りついている。奥部は焚口から約90cmで



第6-6図 SK 5、S X 6 実測図（1：40）



第6—7图 SB12实测图(1:40)

住居側壁が立ち上がり、その上に15cm大の川原石を据え、更に約40cm壁外へ緩やかな勾配で突き出る。カマドの右脇から土師器の高杯(38)(39)、須恵器の杯身(13)、左脇から土師器の高杯(34)(37)の他、カマド内からは土師器甕(46)(65)が出土し、また大小二点の土師器の高杯(36)(35)が上下に伏せた格好で出土した。支脚に使用された可能性がある。

この住居跡の床面中央部はやや高く、そこに径約1.4m、深さ10cmの円形状のフラットな土壇があり、更にその中に径約20cm、深さ14~26cmのピットが3穴ある。又、東側の支柱穴間には不定形に焼土が残っており、その非常な硬さは、そこで常時、もしくは長期間火が使用されたことを物語っている。三隅にある土壇は、長径1.0~1.2m、短径80~90cm、深さ38~51cmで、貯蔵穴の特定は難しい。

出土遺物には、土師器の壺、甕、高杯、石製模造品、鉄鏝などの他、須恵器の杯身が一点だけある。^⑥ わけても30数点の高杯は当住居跡の特色であろう。

S B 13 北辺ほぼ中央にカマドをもった竪穴住居跡である。北辺の長さは4.5m、他は不明。カマドの外へ約1mの煙道が突き出ている。

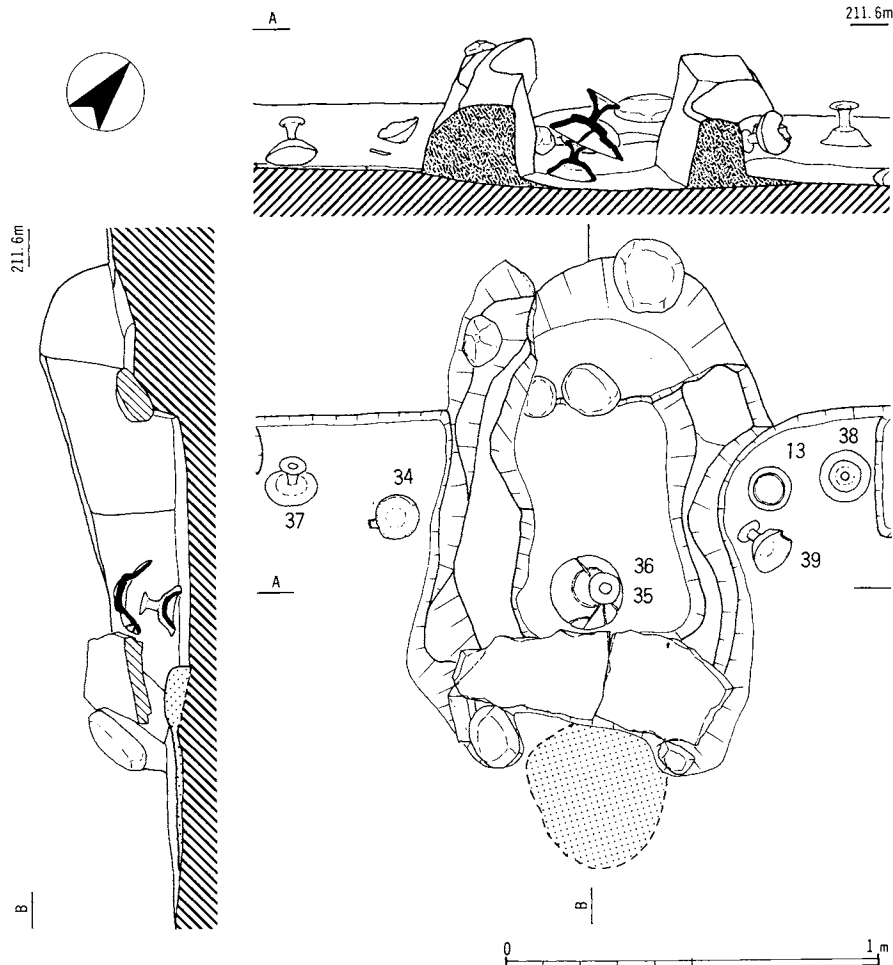
D 地区-5の遺構

S B 14 北辺約4m×東辺約3.5m、深さ約9cmの竪穴住居跡。北辺中央の壁際に径50~60cmの範囲で焼土を検出。カマド跡と推定できる。カマド南の床面上に扁平な川原石の散乱が見られた。東隅にテラスをもった土壇があり、外径60cm、内径30cm、深さは26cmである。貯蔵穴かも知れない。

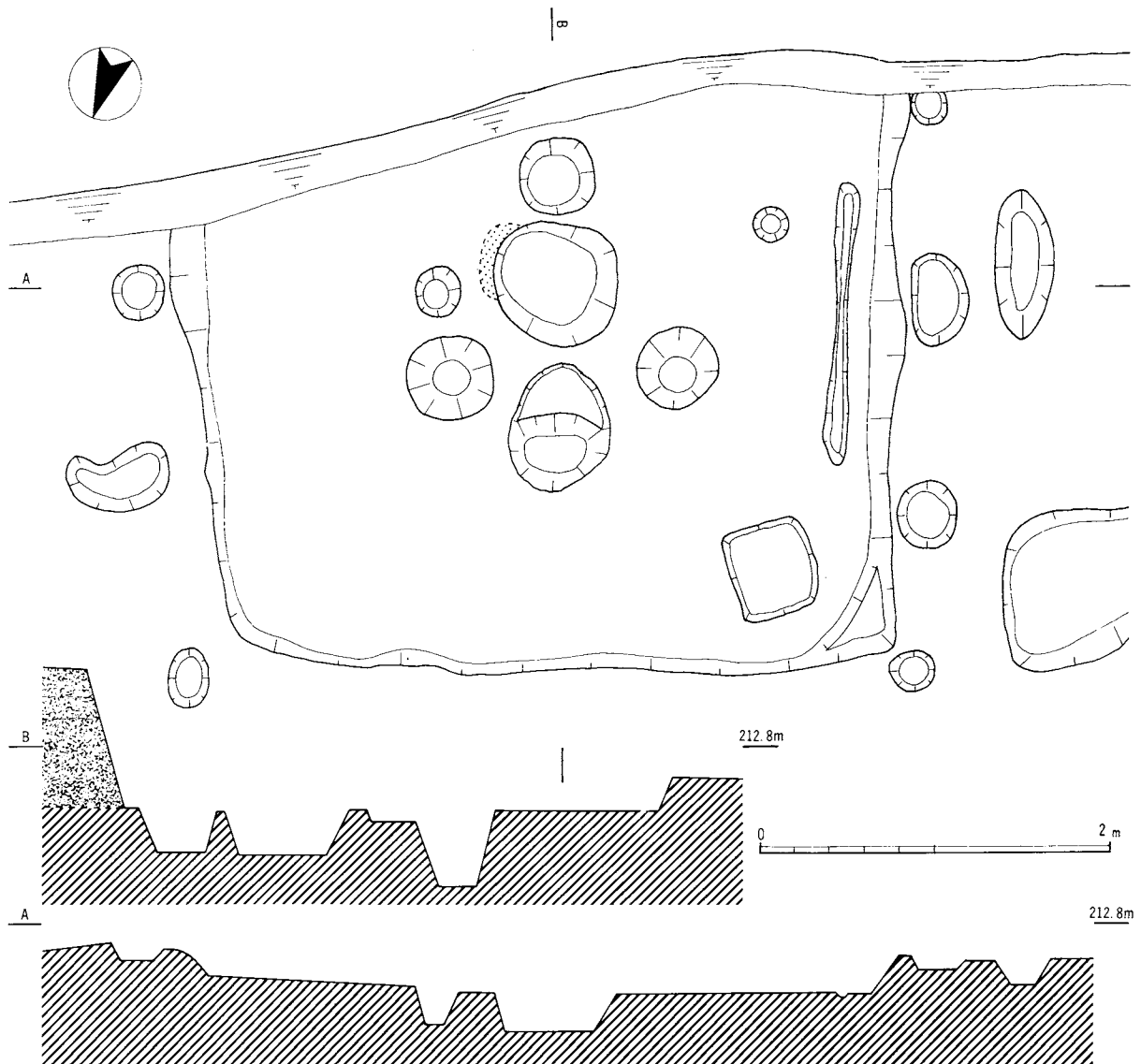
S X 15 長径2m、短径70cmの長楕円形の掘形をもち、深さ9cmを測る。土師器の完形の椀が一点だけ出土した。

E 地区-6の遺構

S B 16 北辺3.8m×西辺4.2m以上の竪穴住居跡。深さは20cm前後で、床面中央部に大きなピットが5穴かたまっている。中心にある穴は径70cm、深さ26cmで、掘形東半分の肩に三日月状に焼土を検出



第6-8図 S B 12 カマド実測図 (1:20)



第6-9図 SB16実測図(1:40)

した。他の4穴の深さは30~40cmである。東西両壁の肩に沿ってほぼ等間隔にピットの並ぶのが注目される。この住居跡からはサヌカイトの石鏃や弥生時代中期の土器片が出土した。

SX17 発掘区の壁にさえぎられ、SB19、SB20に切られているが、検出された円弧状掘形から直径5mの円形遺構が想定できる。深さ13~16cmで、出土遺物は少ない。

SB18 北辺3m以上×西辺2m以上、深さ8~17cmの竪穴住居跡。攪乱を受けてはいるが、出土遺物は多く、土師器高杯、小形丸底壺、石錘、サヌカイト剥片などがある。

SB19 北辺4.5m×東辺4.1m、深さ16cmで、北壁にカマドをもつ竪穴住居跡で、カマドの造りはSB12のカマドと類似する。ただしこちらは石の支

脚を使用している。須恵器の杯蓋や甕等が出土した。切り合い関係から、SB17、SB20より新しいと言える。

SB20 北辺5.5m×東辺4.8m、深さ24cmの竪穴住居跡。北の壁際に径40~50cmの範囲で焼土が残り、その中央に石の支脚が立つ。北壁外に切り込む40cm幅の溝は煙道であるかも知れない。SB17より新しく、SB19より古い。

SK21 中心部分の深さが47cm、長さ2.5m、幅1.5mの土塚で、埋土が他と異なり、淡い灰緑色砂質土である。埋土中から弥生時代中期の土器片が出土している。

SX22 北辺5.6m、深さ13cmを測るが、南側を発掘区の壁に遮られたため、西辺は1.5m分を検出したにとどまる。布留式併行期の土器片が出土した。

3. 遺物

出土量の多かったのはD地区-4とE地区-6で、他は割合に少なく、C地区などは破片の出土することすら稀であった。

時代的には縄文時代～鎌倉・室町時代とバラエティーに富んでいる。

数量的に少ない縄文・弥生時代のものは、弥生時代中期の壺(3)(4)、および甕(5)、石鏃(9)以外は、包含層もしくは時期不明の土坑等への混入物として出土している。

古墳時代のもは比較的完形品も多く、数量的にも当該遺跡出土遺物の中心をなしていると言えよう。就中、土師器の高杯の出土が目立ったのが一つの特徴であろう。

鎌倉時代の瓦器については、破片の多い割に復元可能なものが少ないのは、当地における使用頻度の高さを窺わせる一方、トレンチ掘りという発掘条件から来る制約も否定できない。

1. 縄文時代の遺物

A. 土器

早期押型文土器 (1) 菱形状格子目文のネガティブな押型文土器である。口縁部の破片のみがE地区-6の包含層中より出土した。

格子目文の残り具合は一様ではないが、ほぼ長径約7mm、短径約4mmほどの菱形状で、左から右方向へ横位施文されていると思われる。下方に一個所、石の剝落痕がある。

施文原体の径は約6～7mmで、長さはほぼ4.4cm程度ではないかと考えられる。

また、口唇部には斜めの刻み目が施され、口縁は大きく外反している。内面は指圧痕のほか、横方向のナデが観察される。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に黒色雲母や砂粒を多く含有しており、焼成は良である。

所謂大川式に類似するこの種の土器は、県下においては、東庄内A遺跡^⑦、射原垣内遺跡^⑧、鐘突遺跡^⑨、樋ノ谷遺跡^⑩等においてその類例を見ることができる。

後期磨消縄文土器 (2) E地区-6の西端壁際

で検出された竪穴状遺構S X 22の埋土中から、古墳時代前期の土器に混入して1点だけ出土した。

破片の形から、深鉢の胴部最大径部位の一部分と推定される。

外面は、単節斜縄文を施文した後、3～4.5mm幅の沈線で区画し、その間を磨り消している。下方の「く」の字状に内湾した所と内面全体にミガキによる調整がなされている。

色調は明るい茶褐色で、胎土中に白色細砂粒を多数含有しており、焼成は大へん硬い。

堀之内Ⅱ式に相当する土器であろう。

B. 石器

石錘 (6) 細長い川原石の長軸方向を磨り切っている。一方の磨り切り部分横には、浅くもう一条の磨り切り痕が残るが、製作途中で切り直したものと考えられる。重さは38.9gである。

2. 弥生時代の遺物

A. 土器

弥生時代の土器は、E地区-6のS B 16及びS K 21から出土している。いずれも中期のもので、壺と甕があるが、実測に耐え得るS K 21出土の三点について以下に概述する。

壺 (3)(4) ともに口縁部の破片である。(3)は推定口径20cm、色調は、外面が淡黄褐色、内面が暗灰褐色で、胎土中に長石質白砂やマンガン質微砂を含有している。焼成は良である。

口縁部の立ち上がりはやや内傾し、その外面に櫛状施文具による刺突文が羽状に施され、その下方端部に刻み目を施す。

また、口縁部内面は、横方向の刷毛目とナデにより、頸部外面は縦方向の刷毛目により調整される。

(4)は推定口径18cm、色調は淡茶褐色、胎土中には0.5～3mm大の長石質白砂粒を多数含有している。

口縁部及び頸部の外面に櫛描横線文を施し、焼成は良である。

甕 (5) 底部のみ出土。平底で、径5.5cmを測る。色調は外面が暗灰褐色、内面が黒色、胎土中に

長石質白色砂粒 (0.5~3mm) を多数含有し、焼成は良である。

外面は下から上に向かってヘラケズリ調整をしており、砂粒の動きは明瞭である。内面には刷毛目調整をしている。

B. 石器

ここにあげる石器は、いずれもサヌカイト製で、E地区-6のSB16から弥生時代中期の土器にともなって出土した(9)以外は、包含層もしくは時期不明の土坑等から出土したものである。従って、(7)(8)(10)(11)の4点については厳密な時期決定は容易ではなく、(7)は縄文時代の石鏃である可能性も残るが、(9)と共に一括して概述しておく。

石鏃 (7~11) (7)は凹基無茎鏃である。脚部は丸味を帯び、抉りも深く作られている。刃部は表裏両面から丁寧に押圧剥離を施している。裏面には一次剥離面が残る。重さは0.5gと出土石鏃中で最

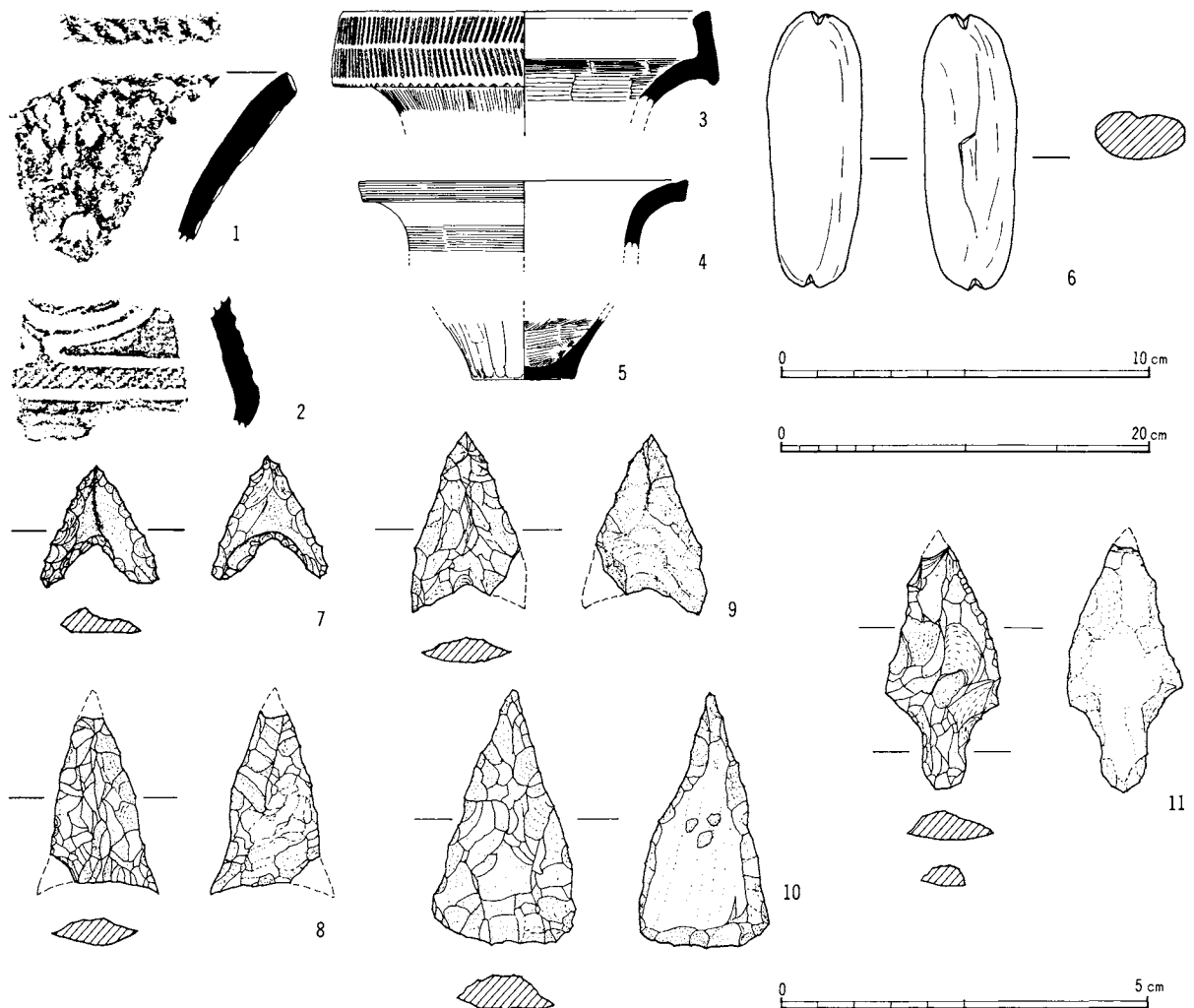
も軽い。

(8)は平基無茎鏃であり、先端を欠失するが、二等辺三角形を呈している。刃部は表裏両面から丁寧に押圧剥離を施している。重さは1.0gである。

(9)は凹基無茎鏃である。脚部はあまり長くはないが、端部は鋭く尖っている。刃部の作りは表裏両面からの押圧剥離を施しているが、裏面の作りはやや雑である。重さは1.1gである。

(10)は平基無茎鏃であるが、基部は直線的ではなく、やや丸味を持っている。裏面には自然面が残るが、刃部については表裏両面から、やや粗く押圧剥離を施している。重さは3.4gあり、出土石鏃中で最も重い。

(11)は有茎の石鏃である。先端を欠失している。刃部の調整は、表側のみ押圧剥離を施していて、裏面にはなされていない。ただ、裏面には一次剥離面が残っている。重さは1.7gである。



第6-10図 縄文・弥生時代遺物実測図 (1・2・6は1:2、3~5は1:4、7~11は1:1)

3. 古墳時代の遺物

A. 土師器

一番多いのは高杯で、出土した遺構別に大きく二分すると(26)～(30)のグループと(34)～(44)のグループに分けられ、前者はE地区-6のS B 18出土、後者はDW地区-4のS B 12出土である。

同様にして、小型丸底壺(23～25)、複合口縁壺(33)及び甕(31)(32)はS B 18からの、椀(12)、壺(47)(48)、甕(45)(46)及び(65)(第13図参照)はS B 12からの出土である。なお、(35)(36)及び、(46)(65)はS B 12のカマド(第9図)内から、(43)(47)はS B 12の西隅の土壇(第7図参照)内から出土している。

椀(12) 高杯(38)の北東約40cmの地点から出土した。

口径12.3cm、器高6cm、色調は明茶褐色で、胎土中に0.5～2mmの白色、乳灰白色砂粒を多数含有し、焼成はあまい。器壁は可成り摩耗している。

体部は内弯しながら立ち上がり、やや外反しながら口縁端部をつくる。口縁部は内外面とも横ナデをし、底部外面はヘラケズリ、内面には指頭圧痕が残る。

高杯(26～30、34～44) 杯部だけが出土した(26)は、杯部口径16.1cm、赤味を帯びた茶褐色をしており、胎土中に1mm前後の砂粒、金雲母を多く含み、焼成も良好である。

丸味をもった杯底部から、やや外反しつつ口縁部が開き、口縁端部に2mmぐらいの面をもっている。

杯部内面は横方向に刷毛目を施した後、同方向にナデ調整し、外面は縦方向に刷毛目を施した後、横方向にナデ調整をするという、極めて丁寧な作りである。刷毛目の一単位幅は約1cmであろう。

なお、これと同種の高杯がもう1個体、やはり同じS B 18から出土している。ただ、こちらの方は杯底部から裾部のごく上の部位までの破片である。

それによると、脚部にも縦方向に刷毛目の跡が残り、裾部内面には横方向の刷毛目と横ナデの跡が観察されるほか、杯部と脚台部とが所謂「ソケット」式の接合方法をとっていることが分かる。

従って、この(26)の脚台部も同様の作りであったと推定できる。(27)(30)はともに杯部口径16cm、

器高は各々12.3cm、13.3cm、脚台底部径12.3cm、11.8cmである。(27)の方がやや低いが、色調も同じ赤褐色で、一見よく似ている。胎土中には微細な金雲母や白色の細砂粒を含む。焼成はともに良。

(26)に比べると口縁部はやや内弯気味である。(27)は薄く、曲線的、(30)は重厚で、直線的な感触がある。

杯部は内外面とも刷毛目調整の後、丁寧に横ナデをしているので、刷毛目は殆んど消えている。杯底部外面はヘラケズリ、また、脚柱外面は縦方向に、(27)はヘラミガキを、(30)はヘラケズリの後横ナデを施している。(あるいは最初に刷毛目調整をしているかもしれない。)そして、裾部は内外面とも横方向の刷毛目調整の後、丁寧に横ナデを施している。脚柱部内面には、杯部との接合部分から絞り目が明瞭に残っている。

(29)も調整方法は(27)(30)とほぼ同様である。ただ、焼成があまく、器壁の摩耗が著しい。杯部口径15.6cm、器高13.2cm、脚台底部径12.3cm。淡乳白色。胎土はやや粗で白色小石粒が目立つ。口縁端部が内弯している点は(26)と対照的である。

(28)はやや小振り、(27)(29)(30)が杯底部に少し稜をもつのに対し、緩やかな丸味を帯びている。

口縁部は10分の9、裾部は約2分の1を欠失しているので、杯部口径と脚台底部径は各々推定14.8cmと10.6cm、器高は12.85cmである。色調は淡黄褐色で、杯部内面のみ暗灰色である。焼成は良く、胎土に赤茶褐色土が斑点状に混じっているのが特徴である。

杯部内外面とも横ナデ調整をするが、それ以前に内面と口縁部外面には刷毛目調整を施している。脚台部については、脚柱外面をヘラケズリと横ナデ、裾部を横ナデによって調整し、絞り目の残る脚柱部内面をナデ上げている。

(34)～(44)の杯部口径、器高及び脚台底部径は表1のとおりである。色調は基本的に淡黄褐色で、(42)のみやや赤味を帯び、その杯部内面に煤煙が付着している。胎土に金雲母や白色細砂粒を含む点も共通しており、焼成も良である。先のグループに比して作り方はやや粗となる。いずれも杯部内外面を横ナデしているが、(43)の口縁部内外面には刷毛目の跡が僅かに残っている。杯底部外面は指押えとナデにより、また脚柱外面については、絞りの跡やヘラ

	E地区-6 S B18出土					DW地区-4 S B12出土										
	No. 27	28	29	30	平均值	No. 35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	平均值
A. 杯部口径	16.0	(14.8)	15.6	16.0	15.6cm	14.5	21.2	14.8	14.6	14.6	15.8	15.7	15.0	14.4	14.2	15.5cm
B. 器高	12.3	12.85	13.2	13.3	12.9cm	12.6	16.4	11.6	11.0	10.55	11.75	13.9	10.45	10.25	10.25	11.9cm
C. 脚台底部径	12.3	(10.6)	12.3	11.8	11.8cm	9.6	11.7	9.0	8.3	9.1	9.2	11.4	9.0	9.7	8.7	9.6cm
D. $\frac{B}{A} \times 100$	76.9	86.8	84.6	83.1	82.7 82.9	86.9	77.4	78.4	75.3	72.3	74.4	88.5	69.7	71.2	72.2	76.8 76.6
E. $\frac{C}{A} \times 100$	76.9	71.6	78.8	73.8	75.6 75.3	66.2	55.2	60.8	56.8	62.3	58.2	72.6	60.0	67.4	61.3	61.9 62.1

第6-1表 土師器高杯一覧表

()内は推定値 Dは器高指数、Eは底部径指数

ケズリ痕跡のあるものも認められるが、一様に縦方向のナデにより調整されている。裾部内外面は全て横ナデによる調整である。更に、脚柱内部はヘラケズリが施されているが、所謂「円盤充填組み合わせ成形技法」によっているため、観察不可能な(34)以外は、押し出された粘土部分に指頭圧による下方向へのナデが認められる。

なお、このグループで一際大きい(36)は、第8図に示すとおり、(35)の上に重なる格好でカマドの内部に伏せられていた。破片ながら、同型のものももう1点同じS B12内から出土している。

小型壺 (23~25) (23)は口径約8.8cm、器高6.4cm。色調は淡灰褐色、胎土は精良で、焼成は良である。

内面底部には指頭による乱方向のナデが、同口縁部には左回りの横ナデがなされている。外面については明瞭ではないが、ナデによる調整がなされているようである。

(24)は、口径8.1~8.3cm、器高7.8cm、色調は淡橙褐色で、胎土中には最大3mmまでの白色砂粒を極めて多く含んでいる。焼成はもろく、器壁の摩耗は著しい。胴部の内面は左回りに横ナデされていることが石の動きで分かり、その外面に刷毛目調整がなされている他は、全く不明である。

三点のうちで最大の(25)は、口径が9cm、器高は9.4cmある。色調は淡灰褐色。胎土には乳灰色の微細な砂粒の他、3~5mmの小石も含まれている。焼成は良である。

口縁部は内外面ともに横ナデをし、内面底部は指頭圧とナデが、同胴部には左回りのナデがなされている。頸部の括れから胴部にかけては、縦方向と横方向に刷毛目調整を施した後、ナデ消している。外

面底部は乱方向のナデによる調整をしている。

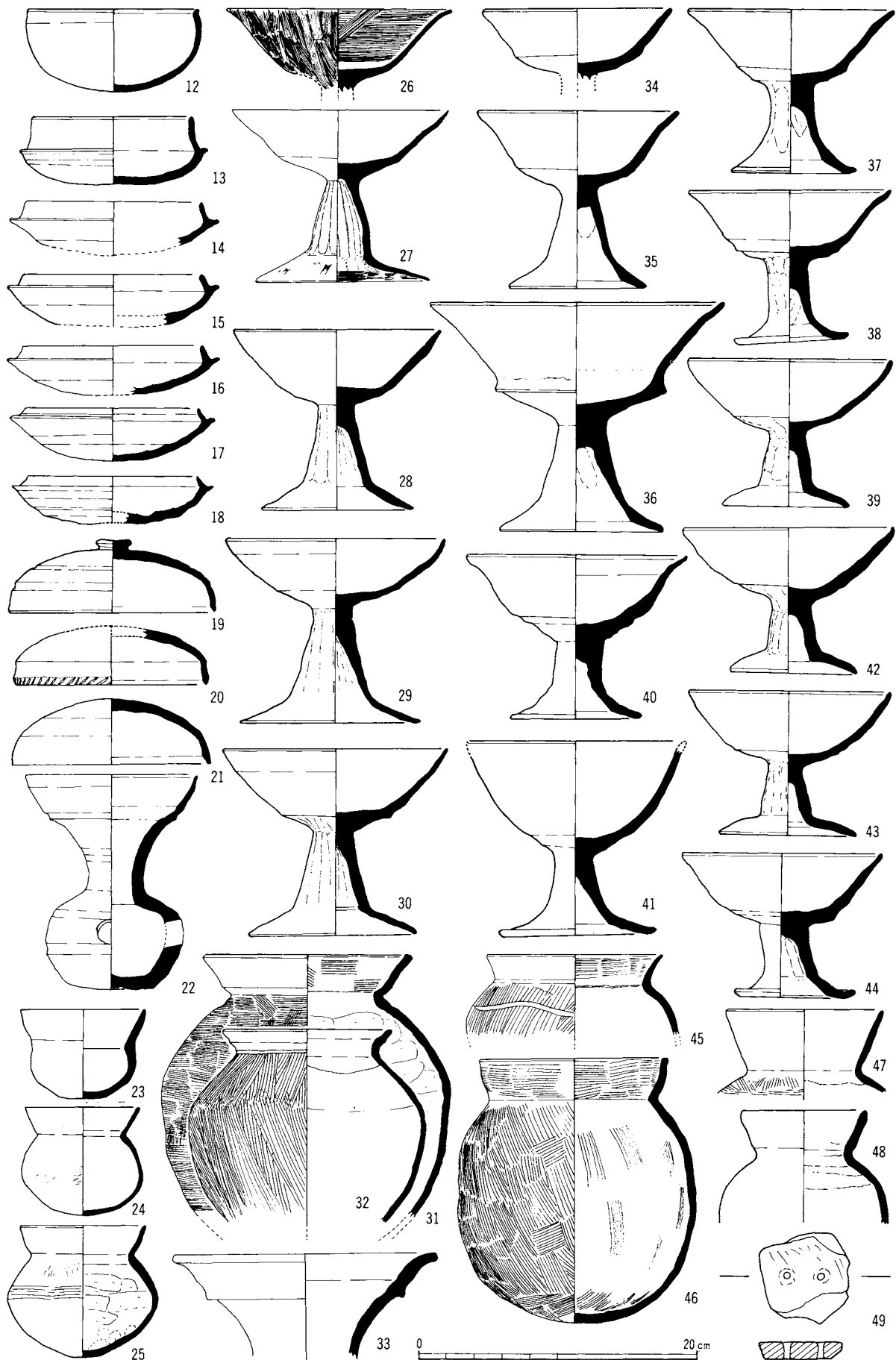
壺 (47、48) (47)は口径11.2cmで明橙褐色。胎土精良、焼成良である。(48)は口径8.8cmで淡黄褐色。胎土、焼成ともに良。いずれも頸部が「く」の字に曲がり、口縁部が「八」の字に開く。後者は口縁端が心もち内弯しながら終る。器壁は(47)の方が薄手である。内外面を横ナデ調整するが、(47)の場合は、頸部のくびれから胴部にかけて、縦方向と横方向の刷毛目が残る。また、(48)の頸部内面はつなぎ目を指でナデおろしており、数本の皺になっている。

複合口縁壺 (33) 口縁部の破片が出土している。推定口径約18.6cmで、明橙褐色をしている。胎土には1~3mm程の白色及び乳灰色の砂粒を含む他、高杯(28)や甕(45)に見られるのと同様の赤茶褐色土が斑点状に混じる。口縁部は、鋭く屈曲した段からやや肥厚しつつ外反し、少し薄くなって水平に近く曲がり、端部に面をつくる。屈曲部に対応する内面の線は余り強くはない。器壁の剝離が著しく、調整技法に不詳な点が多いが、口縁部内外面は横ナデをしている。

甕 (31、32、45、46、65) (31)は口縁部だけがパーフェクトで、胴部は大半が欠失し、底部は全くない。口径14.8cm、推定高22.5cmである。暗茶褐色の器壁外面には、胴部から口縁部にかけて煤煙が付着している。胎土には金雲母や白色細砂粒を含んでいる。

胴部は球形で、頸部はやや肥厚しながら「く」の字に曲がり、短かく内弯しながら立ち上がった後、口縁部が心もち外反しつつ外に開き、端部は内方に丸味をもって肥厚する。

胴部内面はヘラケズリ、口縁部内面には刷毛目の後横ナデを施す。口縁部から頸部にかけての外面は



第6-11図 古墳時代遺物実測図 (12~48は 1 : 4 49は 1 : 1)

横ナデをするが、両部境界付近に稜線が1本明瞭に残る。胴部には先に縦方向の刷毛目、次いで横方向に同じく刷毛目を施しており、叩き目は見られない。

(32)はS字口縁甕である。口縁部から胴部へかけての破片が出土した。推定口径約12cmで淡灰褐色。胴部及び口縁部の外面に煤煙が付着している。胎土には1～2mmの白色砂粒を含む。

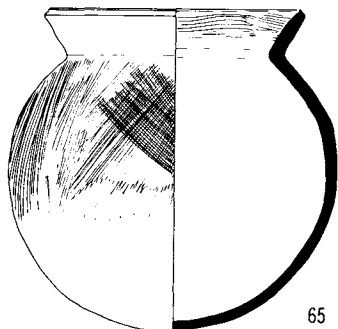
口縁部はやや肥厚して丸味をもち、器壁は薄く3mm前後で、胴上半から中央部位が張っている。口縁部は横ナデし、外面に粗い刷毛目調整を施す。櫛描沈線はすでにない。内面は指押えとナデにより調整するが、頸部に稜線をのこしている。また、頸部外面の括れ部分に、ヘラ状工具による沈線が1本走る。

(45)は口縁部から胴上半の一部までが残っている。口径12.6cmで、暗橙褐色をしており、胎土には高杯(28)に見られたような、赤茶褐色土が斑点状に混じっている。

やや肥厚した頸部から「八」の字に口縁部が開き、端部は丸味をもって終わる。頸部内面にはつなぎ目痕跡が明瞭に残っている。

口縁部内面は刷毛目の後で横ナデをし、ナデは頸部外面にまで至る。括れの部分から胴部にかけて丹念に刷毛目調整をする。なお、胴上半部に幅3～4mm程の、ヘラによる沈線が1本見られるが、故意に施されたものかどうかは不明である。

(46)は口径13.5cm、器高約18.9cmである。暗茶褐色で、胎土は粗く、1～3mmの白色砂粒を多く含む。器表に火を受けている。可成りの使用に耐えたものらしく、器壁の剥落も著しい。そのせいか、全体として粗製の感じがする。内外面とも全体に刷毛目調整をしている。口縁部内面から頸部外面に至る間を横ナデするが、口縁端部が外側に丸味をもって肥厚しているため、その下は弱い沈線状になっている。



第6-12図 S B12カマド内出土甕実測図(1:4)

(65)は、S B12のカマド内より(46)と共に出土した。底部を欠失している。口径13.4cm、推定器高17cm。球形の胴部から、頸部は「く」の字に曲がり、口縁部はやや肥厚しつつ外に開く。横ナデの結果、端面に横線ができています。口縁部内面と胴部外面に刷毛目を施し、胴部内面はナデ調整をしている。淡赤褐色の器表に煤煙の付着があり、甕(45)等に見られた赤茶褐色土が斑点状に混じっている。

B. 須恵器

杯身6点(13~18)、有蓋高杯蓋1点(19)、杯蓋2点(20~21)、匙1点(22)は、いずれも竪穴住居跡からの出土である。

(13)は、既に述べたように、多数の土師器高杯を出したS B12からの唯一の須恵器である(第8図参照)。(14)はDW地区-4のS B8からの、(18)はD地区-5のS B14からの出土である。また、(15~17)と(20~22)の6点はE地区-6のS B19から、(19)はS B20から各々出土している。

杯身(13~18) 完形出土の(13)は、口径11.4cm、器高4.8cm、灰白色で、胎土には1～4mmの乳灰色砂粒を含む。器表は少しザラザラしており、他の須恵器とは感触がちがう。

たちあがりは最初やや内傾しながら直に立ち、高さ2.3cmを測る。端部は丸味をもっている。受部は短い。内面から受部の下(体部)まではロクロナデをし、体部から底部全面をロクロヘラケズりする。後者のロクロ回転方向は左回りである。底部外面の中央に僅かに指圧痕があり、指紋が残る。扇状に暗灰色の部分があるのは、焼成時の重ねによる結果であろう。

(14~18)は、平均口径12.56cm、器高約3.7cmで、基本的に暗灰色もしくは青灰色である。(18)だけがやや小振りではあるが、それ程大きな差はない。たちあがりは一様に内傾化し、その高さは7mm～1.3cmで、端部は受部とともに丸味をもっている。ロクロヘラケズリの範囲も狭くなっている。ロクロの回転方向は不明である。(16~18)の3点には、底部外面に自然釉のあとが残っている。

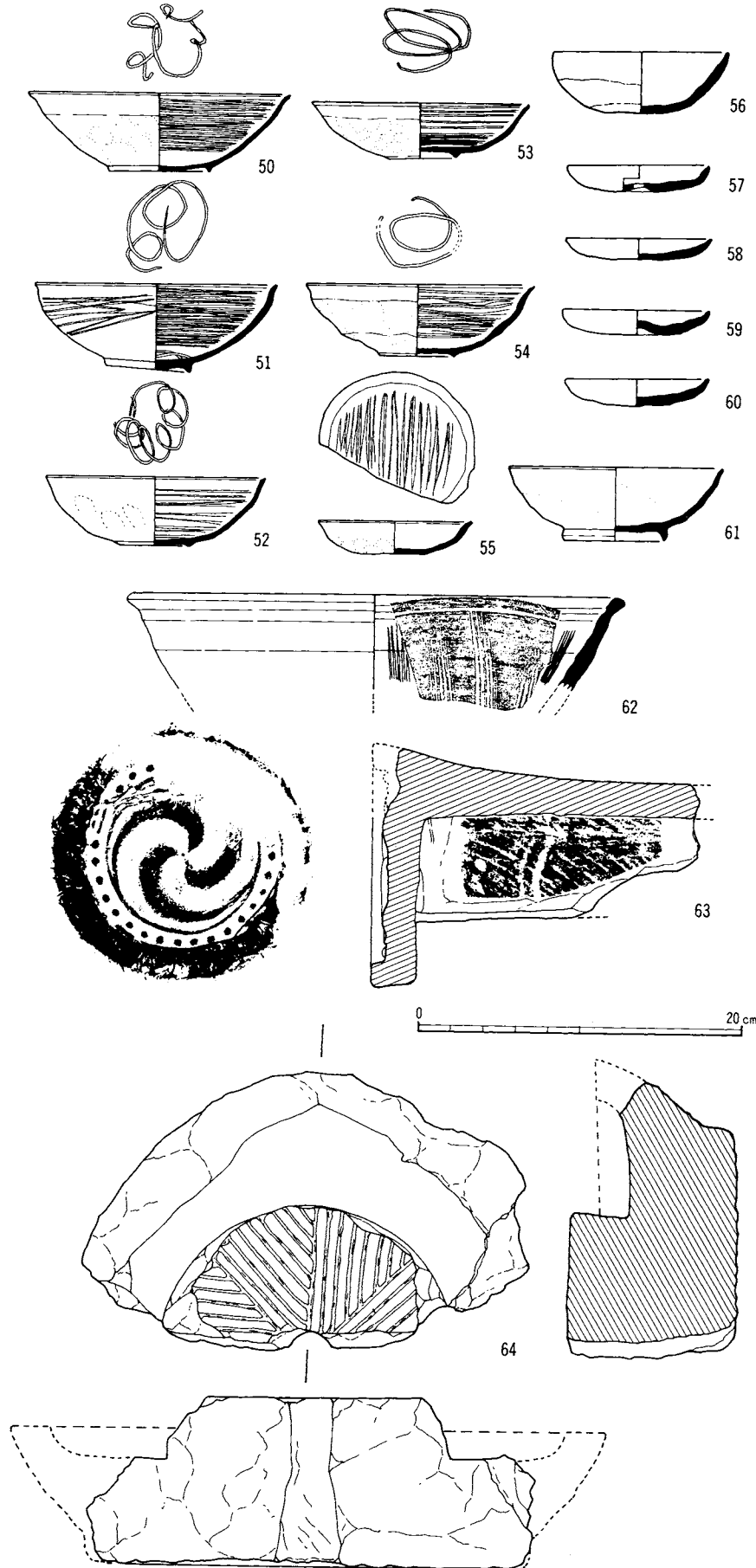
有蓋高杯蓋(19) 口径14.6cm、器高4.5cmで、暗灰白色である。胎土中に2mm前後の白色砂粒を含む。

天井部には扁平なつまみがつき、体部との境目に3.5mm幅ぐらいの沈線がめぐる。天井部内面から体部外面はロクロナデ、また、天井部の外面をロクロヘラケズリしている。ロクロの回転方向は不明である。

杯蓋 (20、21) (20)(21) は各々口径13.7cm、14.2cm、器高4.2cm、4.65cmで、共に暗青灰色を呈す。胎土中には2mm前後の白色砂粒を含み、焼成は良い。

天井部内面から体部外面をロクロナデ、天井部外面をロクロヘラケズリするが、回転方向は不明。(20)の口縁端部外周には、ヘラ状工具を連続して当てた跡がある。

聴 (22) 口径12.2cm、器高15.5cm、胴部径9.9cmで、器面は黒く光沢がある。口縁部から頸部にかけての内面及び胴上半部外面は、全面に自然釉がかかっている。胴下半部から底部外面にはヘラケズリがなされているが、底部の中央部は未調整のままで、かなりの凹凸を残している。また、2条の沈線によって限られた胴中央部には径1.7cmの円孔が、上外方から下内方に穿孔されている。口縁部はゆるやかに内弯しながら立ち上がり、端部はやや外反しながら終る。口縁部の下方には幅5.5mmの沈線が1条めぐり、稜線によって頸



第6-13図 平安～室町時代遺物実測図(1:4)

部との間に段をなしている。

C. その他

石製模造品 (49) S B 12の床面直上から、土師器甕片の内側に付着して、滑石製の双孔円板が1点出土した。暗緑色で、端部を欠失している。径約1.5cm前後の不整形で、厚さは3mmである。片側穿孔の2孔間は6mm。孔径約1mmである。

4. 平安時代の遺物

A. 施釉陶器

灰釉椀 (61) D地区内のS X 15から4.5m南方のピットから出土した。口縁部約3分の2を欠失している。推定口径13cm、器高4.5cmで、灰白色の器壁は丁寧にロクロナデされている。胎土、焼成ともに良好である。口縁部の施釉は漬け掛けで、三分割と考えられる。底部に三角高台がつき、横ナデされた結果、不明瞭な糸切痕跡を残している。所謂、折戸53号窯に特徴的な器である。

4. 鎌倉・室町時代の遺物

A. 土師器

小皿 (57~60) いずれもA地区-1からの出土である。(57)はS K 1から瓦器椀(51)(52)に伴って出土したものであるが、他は包含層下層の遺物である。

(57)は口径8.8cm、器高1.6cm。暗橙褐色。胎土精良で金雲母の微細粒子を含み、焼成も良である。口縁部はゆるく「く」の字に折れて立ち上がる。底部中央に径7~8mmの孔を穿っている。内面、口縁部はナデ調整をし、底部外面は指押えをしている。

(58~60)は基本的に淡黄褐色で、口径、器高を順に記すと、各々下記のとおりである。(58)9.0cm、1.3cm、(59)9.2cm、1.5cm、(60)8.6cm、1.7cm。いずれも歪みは大きく、(59)には底部中央を押し上げた指頭圧痕がある。

(57)は13世紀代におさまるものであるが、底部穿孔した同類の小皿は、現在でも、六地藏の燈明皿として使用されている^①。

B. 瓦器

椀 (52)(53)はA地区-1のS K 1から、皿(55)はS K 1に近い遺構検出面直上の包含層から各々出

土している。椀(54)と(50)は、前者がB地区-2のS K 3、後者は同区内の包含層、更に、(51)はE地区内の土壇から出土したものである。完形出土は(53)のみ。

椀 (50~54) 外面に粗く、三分割のヘラミガキがある(51)は、口径14.8cm、器高5.3cmで、胎土精良、焼成も良である。内面のヘラミガキは可成り密で、レコード圏線状を呈す。見込みの暗文は、連結輪状文の簡略化された螺旋状を示している。

(52~54)の場合、外面へのヘラミガキは姿を消している。そして、内面のヘラミガキも粗になってきており、高台も(50)(51)に比べると低くちびたものになっている。(50)は内面ヘラミガキに密度もあり、高台もまだ退化してはいないが、外面にヘラミガキがない。胎土精良で焼成も良。口縁部外面の横ナデは強く、外反のしかたは(51)よりも大である。見込みの暗文が少し変っている。仮に不規則な輪状文と呼んでおく。推定口径16.3cm、器高4.8cmである。

見込みの暗文と器のつくりとがアンバランスな印象を与えるのは(52)である。推定口径約13.8cm、推定器高約4.2cm。内面のミガキは他に比べてはるかに粗で、高台も著しく退化している。しかし、見込みの暗文は、連結輪状文で、暗文の前に、底面へ横ナデ調整を施している。

(53)(54)はともに見込みの暗文がℓ字状文であるが、前者は二重のℓ字、後者は一重のℓ字状である。

(54)の場合は、暗文の前に横ナデを施している。器は(53)の方が小さく、口径13.4cm、器高3.4cmに対し、(54)は口径14.1cm、器高4.6cmである。

皿 (55) 口径9.6cm、器高2cm。暗灰色で歪み大きく、口縁部約3分の1を欠く。胎土は精良で、焼成も硬い。内面に刷毛目かとも思える横ナデをしている。暗文はジグザグ状文である。外面は、口縁部から底部中心に向かってナデ調整をし、口縁部内外面は横ナデをしている。器面は内外面共に凹凸が多い。

C. 陶器

擂鉢 (62) 口縁部の破片のみである。推定口径約30cmとする。暗茶褐色、2~3mmの砂粒を含む。硬く焼き締められた器体である。口縁部は一度薄く

なって外反し、端部はやや丸味をもつが水平に近い。内面に筋目施条後に施された幅2mm程の沈線がめぐる。筋目は、一単位5条で、放射状に分割される。中には沈線を越えた端部近くまでかき上げた筋目もある。口縁端部に極僅かであるが、自然釉のかかったような痕跡がある。

D. 瓦

軒丸瓦 (63) 遺構編のSK3のところでも少し触れた左巻き三巴文の軒丸瓦である。瓦当部分と丸瓦部分とが剥がれた状態で出土した。

瓦当部の径15.5cm、暗灰色で、胎土中に1～2mmの白色砂粒を多数含有し、焼成はもろい感じがする。

内区を中心に、ほんの僅かだが退化した珠文の小さな痕跡がある。巴の頭は未発達で、足は長い。外区内縁の珠文は、比較的小粒で、密である。外区外縁は直立縁で幅約1.5cmである。丸瓦の痕跡は半円より大きく接合粘土は少ない。

瓦当側面を横ナデし、瓦当部裏面をナデにより調整している。粘土が少ないので段はつかない。丸瓦凹面の接合部に近い部分には、約1.5cm幅の横ナデをしている。また丸瓦の両側端は、やや肥厚し、内側にヘラケズリをした面をもつ。側面と共に縦方向のナデを施す。凸面は全体に縦方向のヘラケズリとナデを施している。凹面には、糸切り痕の他、中央

部を横断する溝状痕^⑫や布目が残っている。

E. 石製品

茶臼 (64) 茶臼の下臼部分で、約2分の1が出土した。粉受け用の皿をもつが、皿部は破損していて、その形態は不明である。臼面の直径約18cm、底面の直径約26.8cm、高さ10.4cm、芯木孔径2.5～2.7cmである。臼面は8溝と9溝が交互にくり返す8分画と推定できる。目の断面はU字型の浅い丸溝で、周縁まで切つてある。臼面から皿の内面にかけて研磨され、特に臼面は平滑に仕上げている。芯木孔も研磨されているが、受皿外面や台部及び底部はノミによる荒仕上げが施され、強いて装飾的効果をねらったような跡は見えない。

この道具を使った主人は、これを廃棄する際、「魂ぬき^⑬」のために二つ割りにして捨てたものであろう。

6. その他

土師器 椀 (56) D地区—5のS×15から単独出土したもので時期不明とせざるを得ない。口径10.8cm、器高3.8cm。暗茶褐色で、胎土は1～4mmの砂粒を多く含み、極めて粗い。粘土紐巻き上げ痕と、口縁部を横ナデした痕跡以外は、器壁の剝離が著しいため全く不明である。

4. 結 語

今回調査した檀・柏原(北戸～垣添)遺跡は、縄文時代から鎌倉・室町時代にわたる複合遺跡である。勿論、既に記したように、全面調査ではないので、当該遺跡の全容を知ることはできない。

調査結果から極めて大づかみに言うならば、檀・北戸両遺跡にまたがるA、B、C地区では、鎌倉～室町時代の遺構、遺物が中心になり得るし、垣添遺跡内のDW、D、E地区では、弥生時代中期の住居跡や古墳時代中・後期の住居跡とそれに伴う遺物が中心となり得る。以下にそれらをまとめておきたい。

I. 出土した瓦器は、概ね12世紀末から13世紀前半におさまるものと考えている。(50)～(54)の椀はいずれも器高指数25～35内のものである。伊賀町柏野的場遺跡^⑭と言うC・D型式に相当すると思わ

れる。

今、瓦器椀の時期的変遷を押えるエレメントに、①小型化、②高台の退化、③ヘラミガキの粗雑化、簡略化、④暗文の簡略化という4点を考えるならば、(50)～(54)の瓦器椀は次のようになる。

①口径 (50)→(51)→(54)→(52)→(53)

器高指数 (51)→(54)→(52)→(50)→(53)

② (51)→(50)→(52)(53)(54)

③ (51)→(50)→(52)(53)(54)

④ (52)→(50)→(51)→(53)→(54)

見込みの暗文だけを見ていると、(52)などは大山田村西沖遺跡の椀C類^⑮に相当するように思えるが、外面ヘラミガキは既に消えており、高台も退化している。(50)は口径も大きく、輪状文をもっているが、

外面のヘラミガキがないので、白石編年ではⅡ-6型式¹⁶に落ち着くものであろうか。また、(51)は西沖の椀F類¹⁷や同じく大山田村田中遺跡の椀A¹⁸に類似している。西沖ではこのF類を川越編年のⅢ-A型式¹⁹に当てており、川越氏自身はそれを白石編年のⅡ-3型式に相当するとしつつ、Ⅲ-A型式の年代の一端に1180年をおさえている²⁰。

これを要するに、ここに見る過渡的な瓦器椀には両期のエレメントを無作為に持ち合わせているものと解し、(50)(51)は12世紀末頃、(52)～(54)は13世紀前半のものと位置づけておきたい。

従って、この瓦器が出土したSK1、SB2、SK3はその時期の生活遺構と考えてよく、他に瓦器片等を伴出したSB7やSD11をも含めて、承安四年(1174年)の院序下文により一円不輪寺鎮化されたこの地域の村落における日常生活の一資料とすることができよう。

Ⅱ. SB2とSX6の中間で検出された井戸SE4については、これを江戸時代以降の灌漑用井戸とする可能性も残ってはいる。実際この地域の田畑は水利が悪かったので、灌漑用の井戸がいくつか掘ってあったのである。しかし、①SE4が検出されたのは、耕作土の下の床土よりなお20～30cm以下であった。②その田の地主はもとより、土地に詳しい古老も、この井戸についてだけは全く知らなかった。③残存している他の井戸は、いずれも田畑の隅に掘ってあるが、SE4は田の中央近くで検出された。④落ち込みの遺物の中に、瓦器や山茶椀の細片や播鉢(62)茶臼(64)等があったが、近世以降の遺物は見出せなかった。⑤播鉢(62)は下郡遺跡出土の(33)に類似し、神ノ木館跡というB類²²に相当する。16世紀前半頃のものと考えられる。⑥茶臼(64)は古くても14世紀より溯ることはない²³。以上の観点から、SE4は室町時代後半頃の所産ではないかと推定できる。近くに滝野氏城や貝増館、滝野氏古城跡といった室町時代の城館跡があることから、ここに同時代の集落の存在を想定することも蓋然性をもつであろう。

Ⅲ. 三巴文軒丸瓦(63)については、結論を先に言うと、時期決定は難しく、今後、資料の増加を俟って再検討すべきものである。当初、八尾市蘭光寺跡出土の端丸瓦²⁴3や恭仁宮跡出土の第4-II群KM17

²⁵Cなどに類似するかも考えた。しかし、川原寺出土の鎌倉時代の巴文軒丸瓦に見られる内区中央の珠文は大きく²⁶、当該(63)の珠文痕跡は、それがはるかに小さく退化してしまったものという仮定のもとに、鎌倉時代より新しい時期を可能性の一つとして考えたに過ぎない。

Ⅳ. 昨年、対岸の辻垣内遺跡E地区において検出された円形の竪穴住居跡SB12は、その出土遺物から弥生時代中期(第Ⅲ～Ⅳ様式)に比定された²⁷。

今回、E地区-6で検出したSB16は、石鏃(9)の他、図示できなかったが、やはり辻垣内と同時期の壺、甕片が出土している。南側は壁の外へ延びているので、正確な平面形は不明であるが、方形もしくは長方形の可能性もあろう。近畿地方では、中期後半に円形・方型混在地帯から円形地帯への移行が指摘されているが、その点ではやや後進性をもつものかも知れない。SK21出土の遺物(3)(4)(5)は中期(第Ⅲ様式)²⁸のものであり、SB16にやや先行するものである。SX17は直径が約4m程の円形竪穴状遺構であるが、あるいはこの時期の住居跡であるかも知れない。

Ⅴ. 最後に、DW、D、E地区で検出した古墳時代の竪穴住居跡については、SB18と全く同様の高杯や甕を伴出したSX22も住居跡とみなせば、

- | | | |
|-----|-------------------|---------|
| (a) | SB18、SX22 | 5世紀前半 |
| (b) | SB12 | 5世紀後半 |
| (c) | SB20 | 6世紀前半 |
| (d) | SB8、9、10、13、14、19 | 6世紀後半以降 |

という4グループに分けることができよう。

名張盆地南西部の滝川左岸では、前記上東野遺跡で、古墳時代前期(4世紀代)のSB1・6・7・11と後期(6世紀後半)のSB14～16³⁰が、辻垣内遺跡では、F地区で前期のSB4、後期のSB1～3、N地区で後期(7世紀前半)のSB4・14・15・18～27³¹などが検出されている。滝川右岸にあっては、赤目檀遺跡で中期(5世紀代)のSB1³²が知られていたにすぎない。従って、この両岸地域において、比較的少なかった5世紀代の住居跡が検出できたことは大きな意義をもつであろう。

SB18及びSX22で出土した土器群は、入参峠遺跡の

S B15、S K19やS B13、36で見られた布留式新相段階³³のものと考えられ、少なくとも検出した範囲内では、須恵器やカマドは見られなかった。ところが、S B12の時期になると、須恵器の杯身(13)が唯1点のみ出現し、しっかりしたカマドが付設されていた。同時に、S B18で見られた小型丸底壺が姿を消してしまった³⁴。

そして、S B18の甕(31)とS B12の甕(65)〔第12図〕とを見ると、須恵器出現以後の土師器甕の型式においてもその変化は緩慢なものであったのではないかと思われる。

S B18で発見された土師器の高杯とS B12のそれとを比較すると、表1に見るとおり、大きな差異とは言えぬにしても、後者の方が全体にやや小さく、低くなる傾向が指摘できる。そしてそれは調整技法の粗雑化に伴う変化と受け取れる。

S B12に続く(c)(d)期に入ると、カマドと須恵器が極めて一般的に普及していることが分かる。(c)(d)グループの住居跡には必ず壁際にカマドが検出されたし、須恵器(14)～(22)は全てその住居跡からの出土である。そして、この時期から更に7世紀にかけての住居跡は、発掘された範囲で見ると、この滝川両岸地域に広く分布しており、後期における人口の増加をも暗示しているかのようである。

〈註〉

- ① この項を書くに際し、実見、参照した文献類は次の通り。
 - ・宇佐晋一・森川桜男「伊賀における弥生式土器・土師器の集成—型式分類と編年的試案—」(『伊賀郷土史研究』(4) 1961年所収)
 - ・富森盛一著『黒田庄誌』赤目出版会 1968年
 - ・三重県教育委員会『青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図』三重県埋蔵文化財調査報告3 1970年
 - ・富森盛一著『赤目の歴史と民俗』三重県郷土資料叢書第45集 三重県郷土資料刊行会 1972年
 - ・三重県教育委員会『三重の中世城館』1976年
 - ・名張市教育委員会、同遺跡調査会『名張市遺跡調査概要』蔵持黒田遺跡、前山遺跡群 1978年
 - ・名張市遺跡調査会『蔵持黒田遺跡』名張市文化財調査報告第1冊 1978年
 - ・名張市教育委員会、同遺跡調査会『名張市遺跡調査概要』Ⅱ 白早稲遺跡、白早稲1号古墳 1979年
 - ・名張市教育委員会『三重県名張市遺跡地図』1983年
 - ・三重県教育委員会『昭和57年度農業基盤整備事業地域、埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告60 1983年
 - ・『三重県の地名』日本歴史地名大系24 平凡社 1983年
 - ・『角川日本地名大辞典・24 三重県』角川書店 1983年

このように見てくると、S B12は、この地域における須恵器出現前後の好資料を提供するものと言える。杯身(13)はTK 208前後のものにほぼ相当すると考えている³⁵。従って、伊賀地方におけるカマドの出現も5世紀後半に求めることができよう³⁶。なおS B20やS B19のカマドに見られた石の支脚はS B12では見られず、高杯(35)(36)の片方もしくは両方を支脚に使用していた可能性があり、類似例は上野市北堀池遺跡³⁷や京都府今里遺跡S B1204³⁸にもある。

S B12で出土した滑石製の双孔円板(49)は、所謂祭祀遺物である。県下における有孔円板の出土例は、松阪市草山遺跡の方形台状遺構から1点、熊野市津ノ森遺跡から2点、名張市土山遺跡C-11地区からは4点、上野市北堀池遺跡のS B3027から2点、計9点の他、伊勢市荒祭宮北方遺跡からの出土品もある³⁹。伊賀地方においては7点目の出土である。

S B12が工房跡であるといえる物的証拠は今の所考えられず、あるいは、どこかから入手して保有していたとするならば、多数の土師器高杯の存在とともに、独自の祭祀形態をもった特異な住居跡として再検討する必要があるが、それは類例の増加を待ちたい。

(田阪 仁)

- ② 白早稲遺跡の北方約250mの前山丘陵北斜面に位置する「人參峠遺跡」を追加しておく。名張市遺跡調査会『名張市遺跡調査概要』Ⅲ 1980年 P.4～P.12参照。
- ③ 人參峠遺跡、赤目檀遺跡を追加しておく。前掲『名張市遺跡調査概要』Ⅲ P.4～P.12, P.21～P.30参照。
- ④ 富森盛一著前掲二書。石母田正著『中世的世界の形成』伊藤書店 1946年など。
- ⑤ 三重県教育委員会、前掲昭和57年度発掘調査報告書 P.129第13表「三重県下における小石室一覧表」参照。
- ⑥ S B12の埋土中より出た土師器高杯の破片も含めた中で、脚部だけ数えると36点ある。このうち、床面直上、住居内土壇やカマドより出た完形品を中心に遺物篇で概述する。
- ⑦ 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告5 1970年 P.24～P.44
- ⑧ 松阪市教育委員会『射原垣内遺跡発掘調査概報』松阪市発掘調査概報2 1980年 P.20～P.21
- ⑨ 松阪市教育委員会『鐘突遺跡発掘調査報告書』松阪市文化財調査報告5-3 1981年 P.9～P.15
- ⑩ ⑤前掲書 P.134～P.137
- ⑪ 例えば、松阪市阿坂町や多気郡多気町において、墓地の入口の穴地蔵前に竹を6本立て、尖らせたその先にこの種の小皿がさし込んであるのを、筆者は実見している。

- ⑫ 模骨の紐痕でなければ、被覆瓦衣のつなぎ合わせ部分の痕跡かも知れない。藤沢一夫「造瓦技術の進展」(『日本の考古学』V 古墳時代(下)、河出書房 1966年 所収) P.299～P.300
- ⑬ 三輪茂雄著『臼(うす)』もと人間の文化史25 法政大学出版局 1978年 P.295～P.296
- ⑭ 伊賀町教育委員会『の場遺跡発掘調査報告』伊賀町文化財報告書2 1978年 P.10～P.13
- ⑮ 三重県教育委員会『昭和55年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告44 1981年 P.141～P.143
- ⑯ 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」(『古代学研究』第54号 1969年 所収) P.3。
- ⑰ ⑮の前掲書 P.142～P.143
- ⑱ ⑤の前掲書 P.81～P.82
- ⑲ ⑮の前掲書 P.151
- ⑳ 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」(奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集『文化財論叢』 同朋舎 1982年 所収) P.776
- ㉑ 三重県教育委員会『下郡遺跡試掘調査概報』1979年 P.8。
- ㉒ 三重県教育委員会『昭和54年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財調査報告』県埋文報告43 1980年 P.123～P.130。
- ㉓ 三輪茂雄前掲書 P.280。名古屋市博物館『印』1979年P.23。
- ㉔ 財団法人大阪文化財センター『大阪文化誌』季刊第2巻。第2号、通巻第6号 1976年 P.46～P.47
- ㉕ 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告』瓦編 1984年 P.13、P.38～P.39
- ㉖ 奈良国立文化財研究所『弘福寺』川原寺発掘調査報告、同研究所学報第九冊、1960年 P.36及び図版参照。
- ㉗ ⑤前掲書 P.97
- ㉘ 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」(大林太良編『家』日本古代文化の探求、社会思想社 1982年所収) P.142。
- ㉙ 京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊、『大和唐古弥生式遺跡の研究』臨川書店 1976年 P.66～P.67。
- ⑳ ⑤前掲書 P.128
- ㉑ ⑤前掲書 P.102、P.117～P.118
- ㉒ ②前掲書 P.24
- ㉓ ②前掲書 P.8～P.9
- ㉔ 西弘海「土器様式の成立とその背景」(『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』 平凡社 1982年所収) P.449～P.445を参考にした。
- ㉕ 従って、須恵器生産の地方拡散期に相前後して、カマド築造技術もこのS B12に取り入れられたのではないかと推定する。平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群I』1966年 P.59～P.63。田辺昭三著『須恵器大成』角川書店、1981年 P.38、P.43他。田辺昭三「初期須恵器について」(㉔前掲『小林古稀・考古学論考』所収) P.417～P.429。
- ㉖ 上野市北掘池遺跡では、5世紀代にカマドの出現を推定する。三重県教育委員会『北掘池遺跡発掘調査概要Ⅱ』1979年P.17。赤目横遺跡のS B1がもし、(a)グループと(b)グループの間に位置するときは、カマドの出現時期がS B12より早くなる可能性もある。註㉔参照。
- ㉗ 報告書近刊予定。前掲概要Ⅱ S B3033に類似あり。
- ㉘ 京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1979年 P.117～P.118。この場合、北掘池や横・柏原とは異なり、須恵器の高杯が使用されている。
- ㉙ 1. 大場磐雄著『神道考古学論攷』 雄山閣 1943年
2. 榎本杜人著『三重考古図録』 三重県 1954年
3. 三重県教育委員会『北掘池遺跡発掘調査概要』Ⅱ 1973年
4. 名張市教育委員会『名張市遺跡調査概要』 1978年
5. 熊野市教育委員会『津ノ森遺跡発掘調査概要』Ⅱ 1982年
6. 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』No6 1983年
- ㉚ 梶山林継「石製模造品」(大場磐雄編『神道考古学講座』第三巻、原始神道期二 雄山閣 1981年所収) P.35～P.36。小出義治「祭祀」(『日本の考古学』V、河出書房、1966年所収) P.290～P.304。

Ⅶ 阿山郡大山田村 ふろだに 風呂谷館跡

1. 位置と環境

風呂谷館跡(1)は、阿山郡大山田村大字富永字風呂谷に所在する中世館跡である。

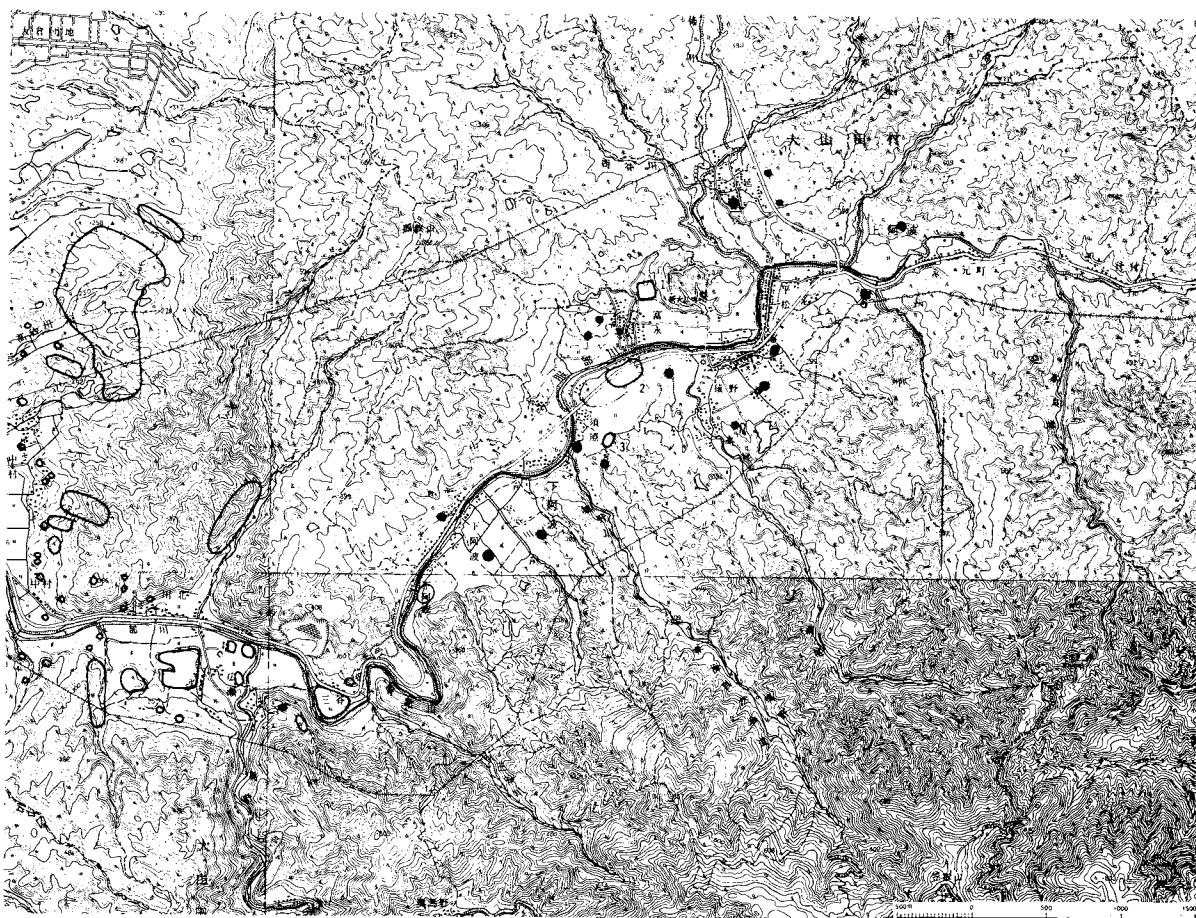
大山田村は、上野盆地の東端部に位置し、津市から上野市へ通じる長野峠越えの伊賀街道が村内をほぼ東西に貫いている。この伊賀街道に沿って服部川が西流し、上流の富永地区で景観が大きく広がり、その北岸に富永の集落が位置する。館跡は、集落より東北方の狭長な谷水田の奥から南へ向って派生する標高約285mの舌状尾根上の全体にわたっている。

この舌状尾根は、周囲の水田との比高約5mであり、眺望が南に大きく開けて館の占地としては攻守にふさわしい適地である。

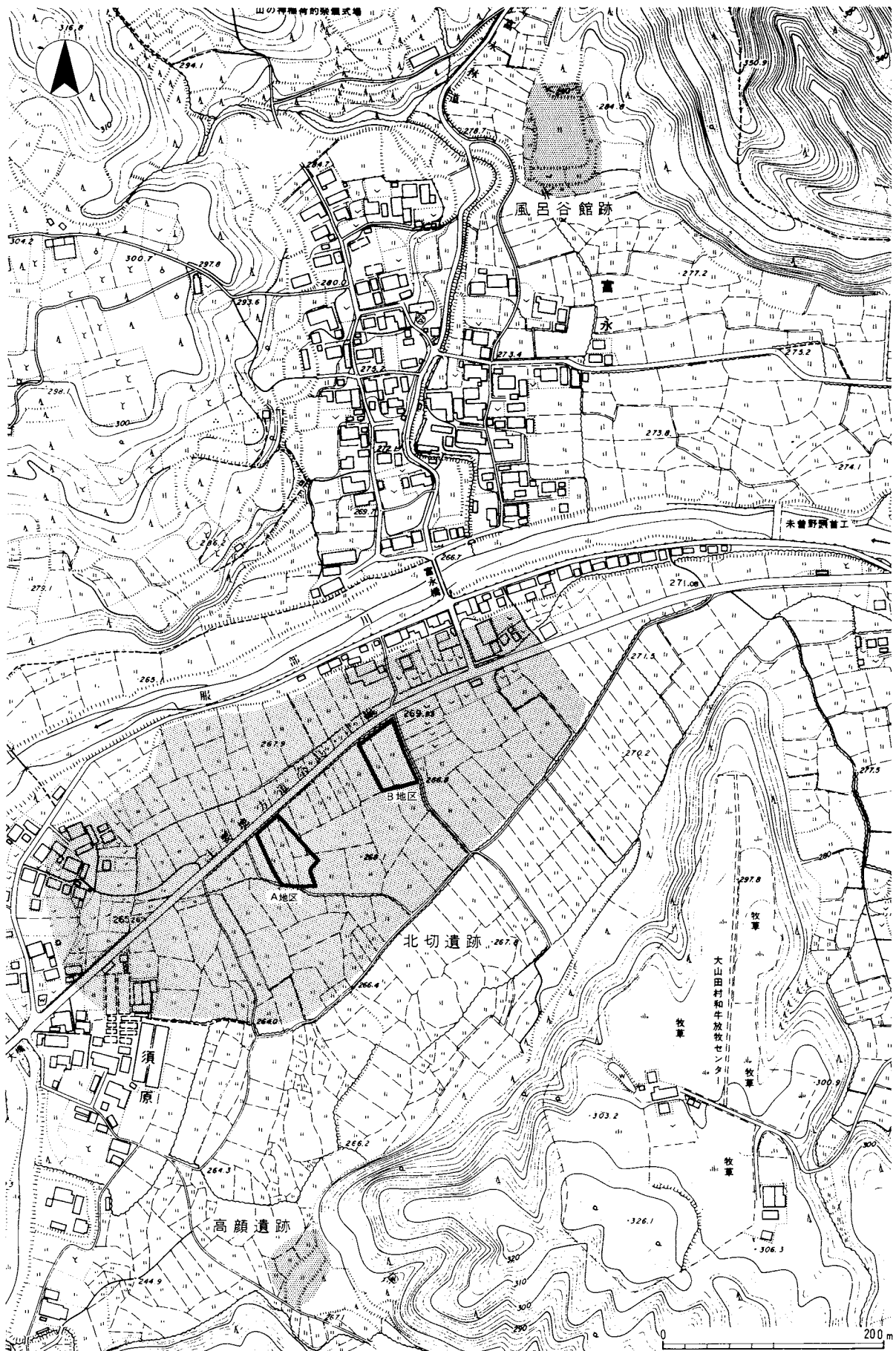
近年この地域における開発に伴う緊急発掘調査が増加し始めており、改めて周辺の開拓の歴史が明確になりつつある。以下、時代順に略述していくが次章の2遺跡についても便宜上ここに一括した。

服部川上・中流地域では、縄文時代後期の川久保遺跡^①・弥生時代では沢遺跡^⑤・西沖遺跡^⑥・田中遺跡^⑦のほか、第Ⅷ章で報告する北切遺跡^②では大型の方形周溝墓・完形の磨製石剣が出土している。

北切遺跡は、大字富永字北切に所在し、風呂谷館跡の西南約400mの服部川左岸の自然堤防上に位置し、標高約265~270mの水田と畠地に当る。遺物の分布範囲は東西約500m、南北約300m、延面積約15



第7-1図 遺跡位置図(1:50000) 黒点は中世城館跡



第7-2図 遺跡地形図 (1:5,000)

haと村内でも屈指の大集落遺跡である。試掘調査結果に基き、工事により削平される県道奈良・津線南沿いのA地区（1,500㎡）・B地区（3,500㎡）を調査対象とした。

これらの弥生時代集落遺跡は、以後中世に至るまで断続的に展開し、第V章で報告する高顔遺跡(3)も小規模な中世集落の一つである。

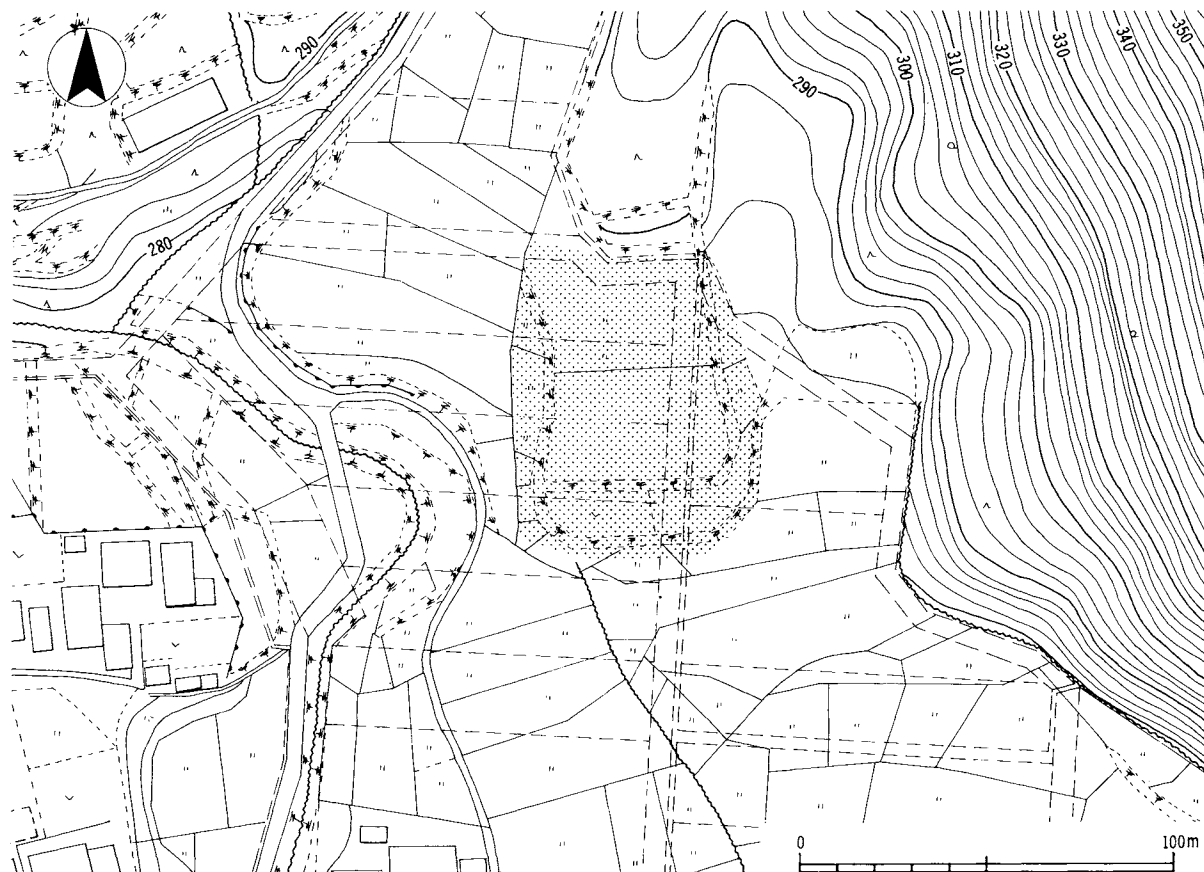
さて、服部川流域には多数の古墳が確認されているが、中流域には荒木車塚古塚（前期）・寺音寺古墳（中期）・鳴塚古墳（後期）などの前方後円墳がある。上野市へ向う狭い丘陵端部にある高猿6号墳^④は、一辺約18mの方墳であり、木棺直葬5基、箱式石棺1基の埋葬が確認されている。服部川右岸の辻堂古墳^⑤では、横穴式石室が調査され、上流域では左岸に横枕古墳群^⑥が調査されているが、流域で最奥に築造された後期古墳ではないかと考えられていた。しかしながら、今回の北切遺跡A地区の調査では円形周溝が検出されており、円墳の可能性を否定できないため後期古墳は服部川上流域にも築造されていた可能性がでてきた。

古墳時代から奈良後代以降の遺跡についても調査例が増加し、大規模なものでは三谷遺跡(8)・西沖遺跡(6)・歌野遺跡^⑦があり、近江タイプと考えられている土師器長胴甕、志摩式製塩土器が出土していることから彼我の交流を窺うことができる。

第V章で報告する高顔遺跡(3)は、大字下阿波字高顔に所在し、上述の北切遺跡の南方約200mに位置し、標高約267mの水田に当たっている。北切遺跡の東南方には服部川に向って丘陵が迫り出しており、丘陵の谷水田の基部に遺跡が所在している。瓦器などの分布範囲は東西約60m、南北約70mと狭いが、工事によって削平される面積約200㎡を調査対象とした。

室町時代の城館跡の発掘調査は、この富永地区では初例であるが、昭和56年度には西方の阿波地区で野中城跡^⑧が調査されている。

なお、鎌倉時代の初頭に俊乗坊重源によって開基された伊賀別所の新大仏寺は、風呂谷館跡の東方約400mに所在し、東大寺再建用材の伐採と搬出事業の宗教的基盤を形成した。小字名の風呂谷の由来も、重源上人による湯施行に縁りあるものであろうか。

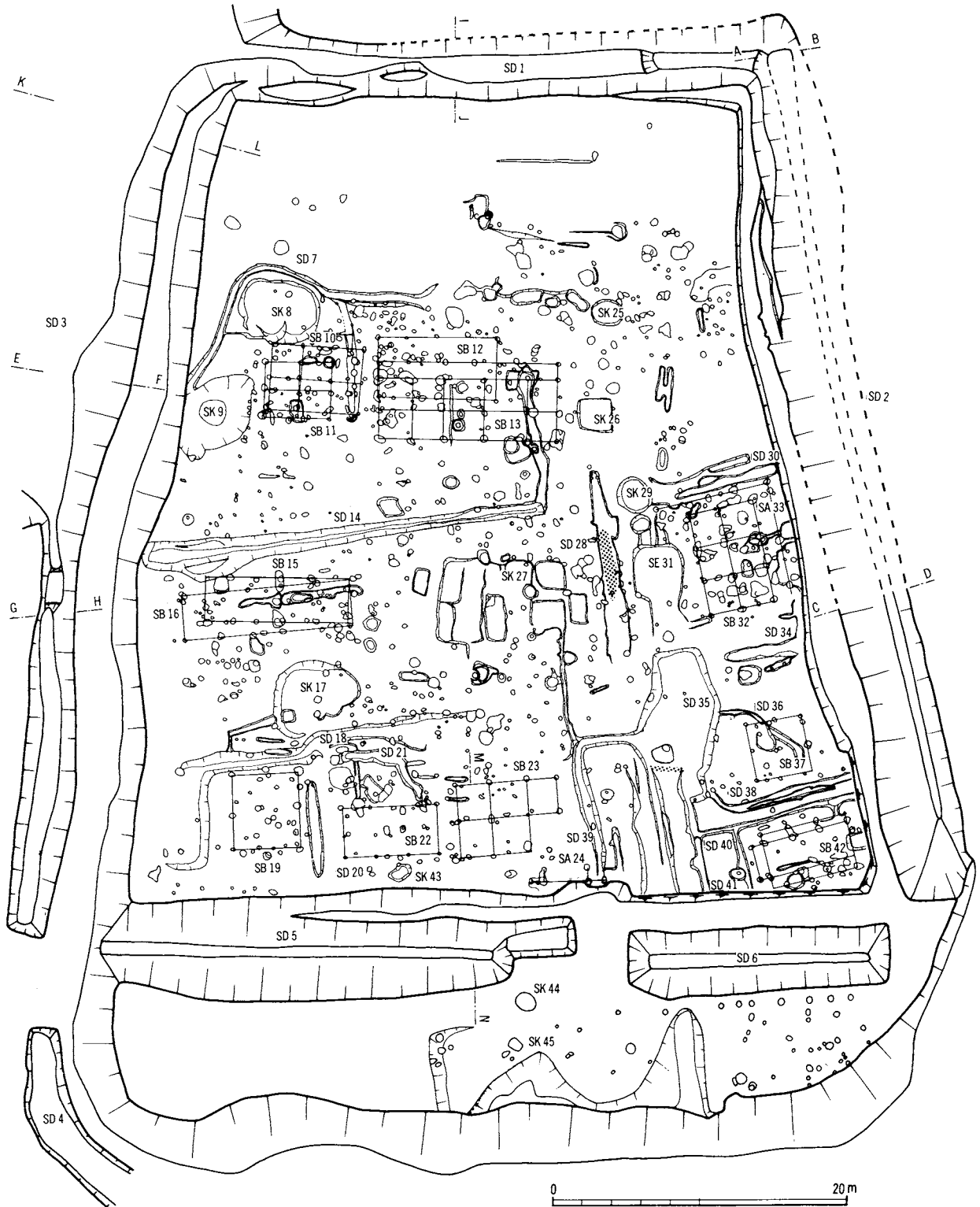


第7-3図 発掘区平面図（1：2,000）

2. 遺 構

主要な遺構は、堀・掘立柱建物・井戸・溝・土壇のほかに多数のピットがある。調査の結果、当館跡は内堀によって南北に2分されていたことを確認し、

北部を主郭、南部を副郭と呼称することとした。なお、副郭の中央部で近世以降のロストル式瓦窯1基を検出したが、本書では省略した。



第7-4図 遺構配置図 (1:400)

試掘調査の結果に基づき、尾根全体に遺構の分布を確認し、層位観察用の断面壁を十字形に残して順次調査を進めたが、工事によって攪乱を受けていた副郭南裾に堀が存在していたかについては遺憾ながら確認できなかった。なお、郭全体の平面形は台形を呈し、主郭の北辺は東西約34m、副郭の南辺は東西約50m、中央部の南北長約68mであり、郭部の面積は約2,860㎡である。(第4図)

なお、郭部の基本層位は第1層：黒褐色砂質土(表土及び床土、厚さ約10～25cm)、第2層：茶褐色砂質土(厚さ約40cm)、第3層：灰褐～暗褐色粘質土(整地層、厚さ約20～30cm)、第4層：地山である。

各層は、細かく分層されることが確認されたが、特に第3層の整地層とした根拠は、断面観察の結果遺構の掘形が当層上面より掘られていることによる。ただ、主郭北部では後世の耕作による削平のため第2層が薄く、第1層直下で第3層が確認されている。また、主郭南辺部の南北セクションの南端部で、第3層上面に地山の灰黄色粘質土のブロックを多量混入した低平な高まりがみられ、おそらく土塁の痕跡と思われる。特に主郭の四辺について同様にセクション観察に注意したが、他辺では土塁の痕跡は認められなかった。しかしながら、北辺部に無遺構の平面が東西に存在するのは、低平で南北基底部が幅広い土塁があったことを示唆するものであり、副郭の周囲にも土塁が設けられていたことと思われる。

郭部の裾の周辺に掘られた堀については、工事と競合して調査せざるをえなかったため、堀の外堤を部分的にトレンチ調査するに留まった。堀の埋土の基本層位は、上下2層に大別され埋土Ⅰ・Ⅱ層と呼称したが、上部の埋土Ⅰ層は基本的に茶褐色系の砂質土で、埋土Ⅱ層は暗灰褐色系で地山の灰黄色粘質土のブロックが流入している。

1. 堀 (第4～6図)

SD1 主郭北辺の外堀で、両端は鈍角に屈折して東西の外堀に連続する。幅3.8m、深さ2.1mの逆台形状を呈し、埋土Ⅱ層は北側からの流入が著しい。東側で底部が一段低く落ち込んでおり、西側では主郭寄りの斜面に狭いテラス2ヵ所があり、犬走りの痕跡または北側の調査地区外の平坦面に対応し

た簡単な橋脚を設けるためのものかとも推定される。

SD2 主郭東辺に平行した外堀で、東側の肩の大半が工事のため削平され、南端部の東肩も削平後に残存した部分であり、旧状を示していない。北端はSD1の底面より約1.5m下位にあり、南に向って緩かに下っている。北半部の東西セクションの観察では、埋土Ⅱ層の東西両肩の幅は約3m、深さ1mであり、埋土Ⅰ層は東に向うにつれて次第に下降しており、埋土Ⅱ層中には多量の植物遺体が流入している。

なお、西肩部に幅約30～40cmの犬走りがあり、北端はSD1に続いている。

SD3 主郭西辺に平行した外堀で、北半部の西肩の大部分は工事によって削平されていた。主郭から西へ緩かに下る斜面途中に犬走りが平行しており、犬走りの西肩から逆台形状の堀となっている。東西幅は約9m、最深部で深さ約1.6mで、底面は西から東へ下降して主郭の裾が最深部となるのは防塁を考慮したものと思われる。

北端はSD1に連続するが、西肩の北端部は明確にできなかった。西側一帯は現状で段状の谷水田であり、南北方向の旧地形の肩をSD3の西肩に利用した可能性もある。以上のごとく北半部の東西幅は長大であるが、主郭の中央部辺りの東南隅から南へ向う幅約2m、深さ1mのV字溝が南方へ約27m延長して掘られている。なお、V字溝の北端よりやや、南寄りの箇所に幅約80cmの陸橋部を掘り残しており、堀の北部の溜水を調整したものと考えられる。

なお、北半部の埋土Ⅱ層には北方の谷水田から流入したと思われる砂質土の堆積が著しく、南半のV字溝の埋土には植物遺体の堆積が著しい。

犬走りは南に向うにつれて次第に幅が広がり、北から南へ向って傾斜している。

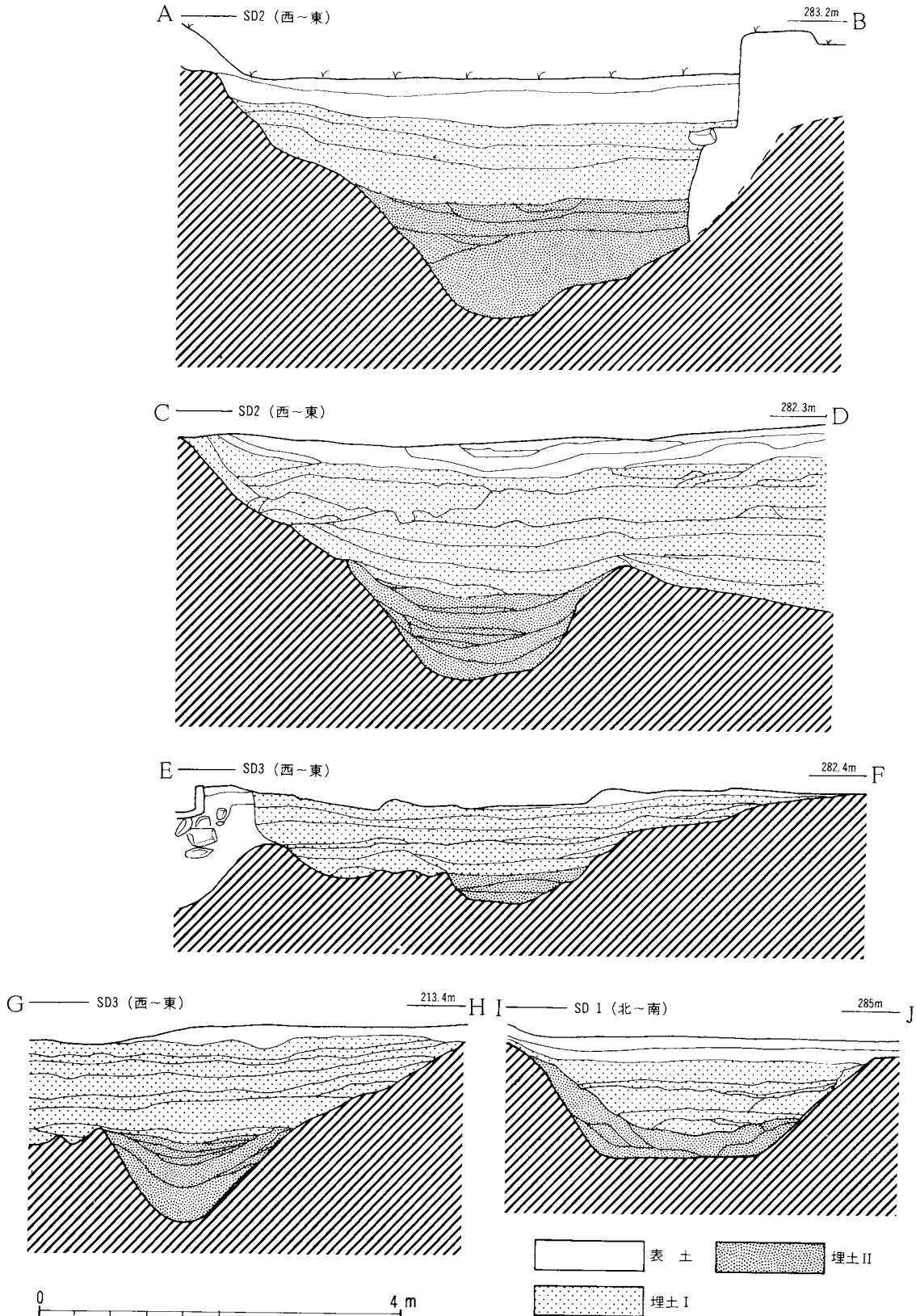
SD4 SD3の南端から約6m離れて検出された幅約3m、深さ約1mのU字溝で、副郭西南部の裾に沿って屈折するが、南方部は工事による削平のため確認できなかった。埋土Ⅱ層には、植物遺体の堆積が著しい。

SD5 主郭と副郭との間の内堀で、西方へ開口している。東端は鋸形の大手道に沿って南肩が屈折して短くなっており、底面も浅く掘られている。北

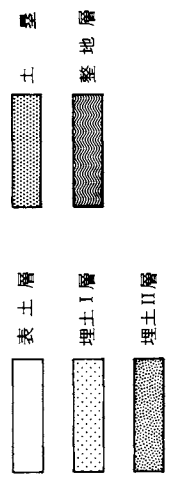
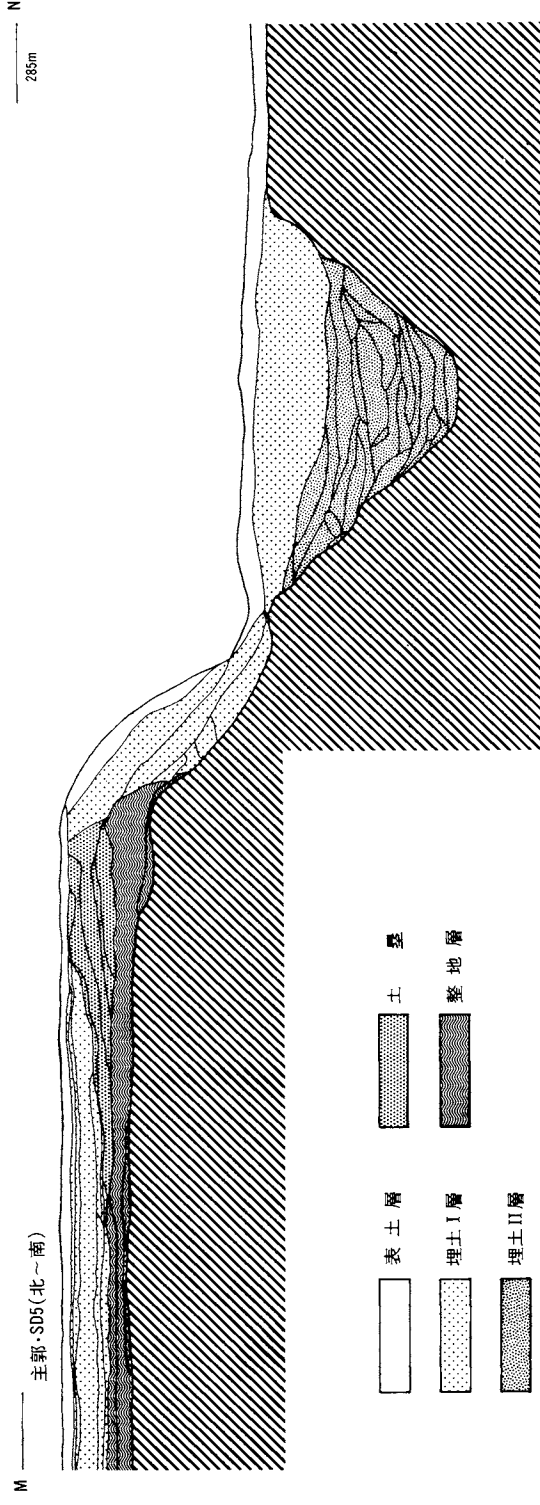
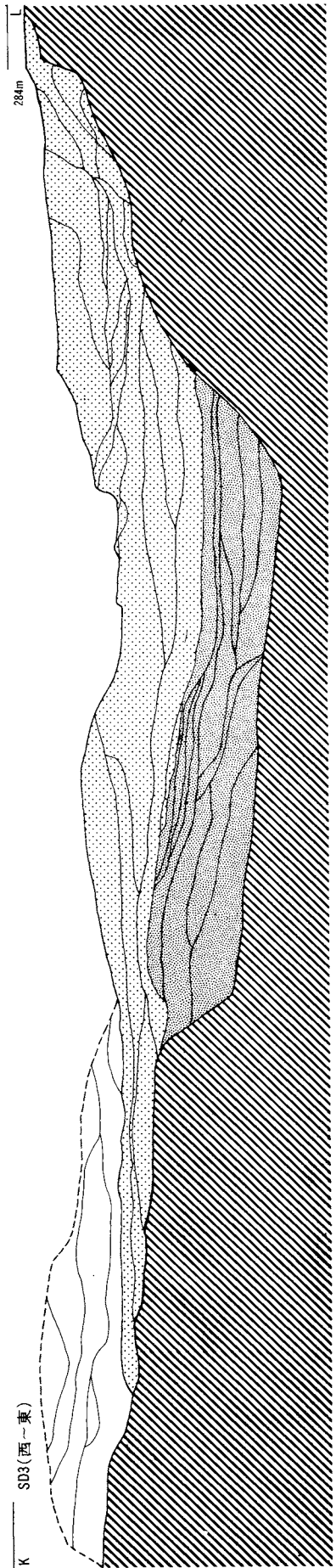
肩に沿って大手道から幅1mの犬走りがあるが、堀のほぼ中央部で途切れている。

幅約4.2m、深さ約2mの逆台形状で、埋土Ⅱ層

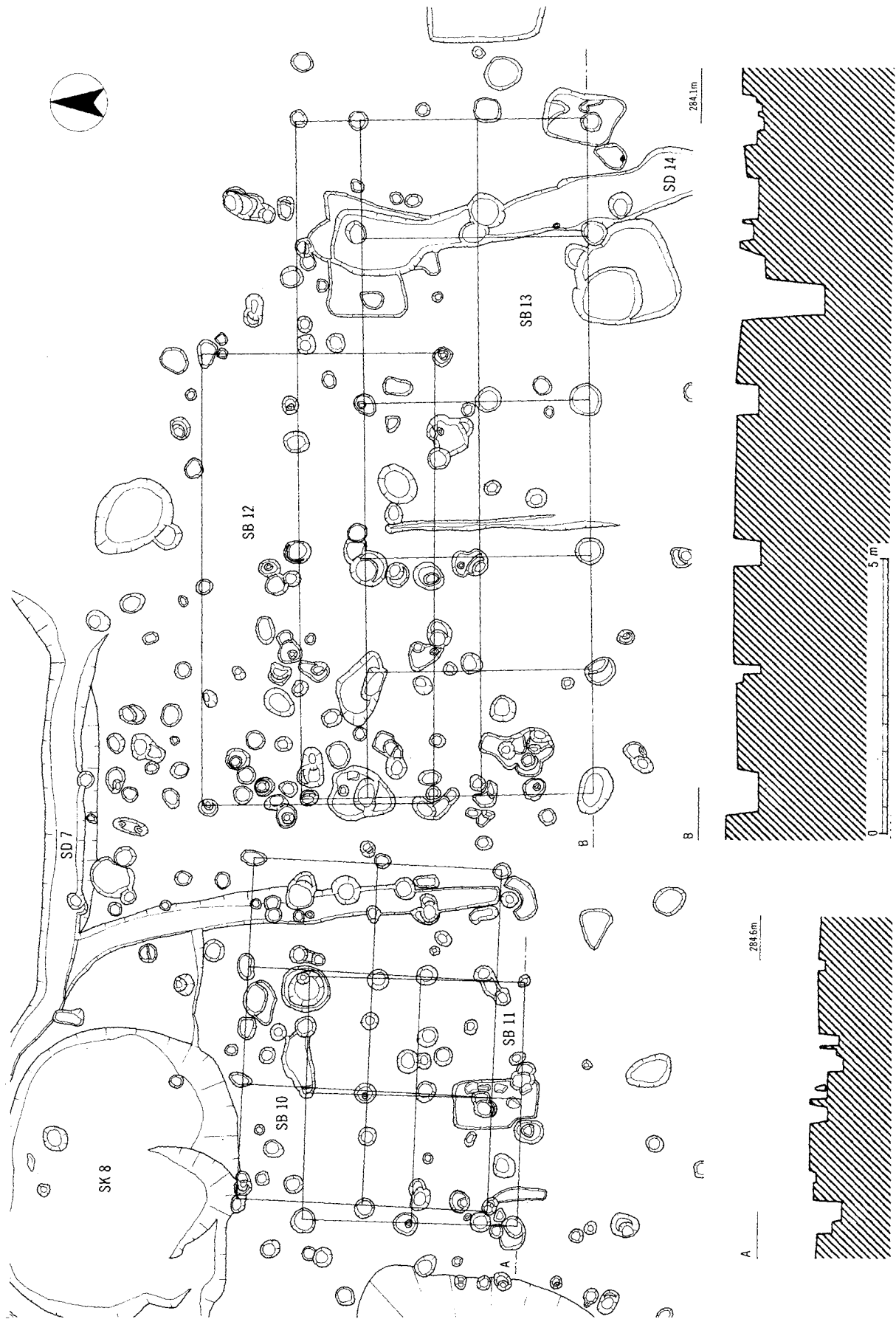
には地山の灰黄色粘質土のブロックが南北両肩より多量流入していることから、主郭南辺と副郭にも土塁が存在していたことが想定される。



第7-5図 SD1~3断面実測図 (1:80)



第7-6図 SD3・5断面実測図 (1:80)



第7-7图 SB10~13实测图(1:100)

SD6 SD5の東方の大手道をはきんで対称的に掘られた内堀で、東端は開口していない。東西約18m、幅約4.4m、深さ約1.7mの逆台形状で、埋土Ⅱ層はSD5と同様の地山ブロックの流入堆積が著しい。なお、SD2の犬走りの延長部が北肩にも存在するが、幅約2mとやや広がっている。また、南肩に沿って柱穴が東西に直線状に並んでいるが、この柱穴を含め副郭部で検出した遺構は全て江戸時代以降に比定される遺物が出土し、この柱穴列からも近世の棧瓦が出土しているため、SD6とは無関係なものである。

2. 掘立柱建物（第7～10・12図）

SB13 当館跡の主屋と想定されるもので、5間×2間の東西棟で、北辺に廂または広縁が取り付けられている。桁行9.7m、梁行4.1mで、柱間は一定していない。梁行中央に束柱が通り、床張りされた部分も存在した可能性がある。柱穴に拳大の礫を置いて根石とした部分もあり、柱穴の直径も他の建物にくらべて大型で約30～50cmである。

SB12 SB7と重複する4間×2間の東西棟で、新旧関係は不明である。桁間8.1m、梁行4.2mで、桁行の柱間は2m等間である。柱穴に根石を置いたものが多く、柱穴径はSB7よりやや小型である。上述のごとくSB7とSB8はいずれかが建替えられたものであるが、当館跡の掘立柱建物の全てが小溝に区画されているので、SB7が東方で区画溝に重複することから区画溝内におさまるSB8の方が古く建てられた可能性もある。

SB11 2間×2間の方形建物で、中央に床束を持ち東西4.4m、南北3.9mで柱間は不揃いである。

SB10 SB9に重複する3間×2間の東西棟で、床束を持ち、桁行6.2m、梁行4.5mである。東端に区画溝が走ることから、区画におさまるSB9の方が古く建てられたものか。

SB15 5間×2間の東西棟で、SB16と重複する。桁行9.8m、梁行3.2mで柱間は不揃いである。

SB16 5間×1間の東西棟で、北側のSD14と平行関係にある。桁行11.5m、梁行3.2mで、柱穴に根石を持つものが多い。

SB19 2間×2間の南北棟で、桁行5.1m、梁行4.5mである。柱間は不揃いであるが、建替は行

われていない。北側と西側をSD18、東側をSD20で区画する。

SB22 基本的に4間×2間の東西棟であるが、柱間3間の可能性が大きく、梁行東側の棟柱穴は認められない。桁行6.4m、梁行3.3mでSD21・SD20で区画する。

SB23 2間×2間で中央に束柱を持つ建物に柱間1間分の張り出し部がつく東西棟である。桁行7m、梁行5mで、柱間はほぼ揃っている。

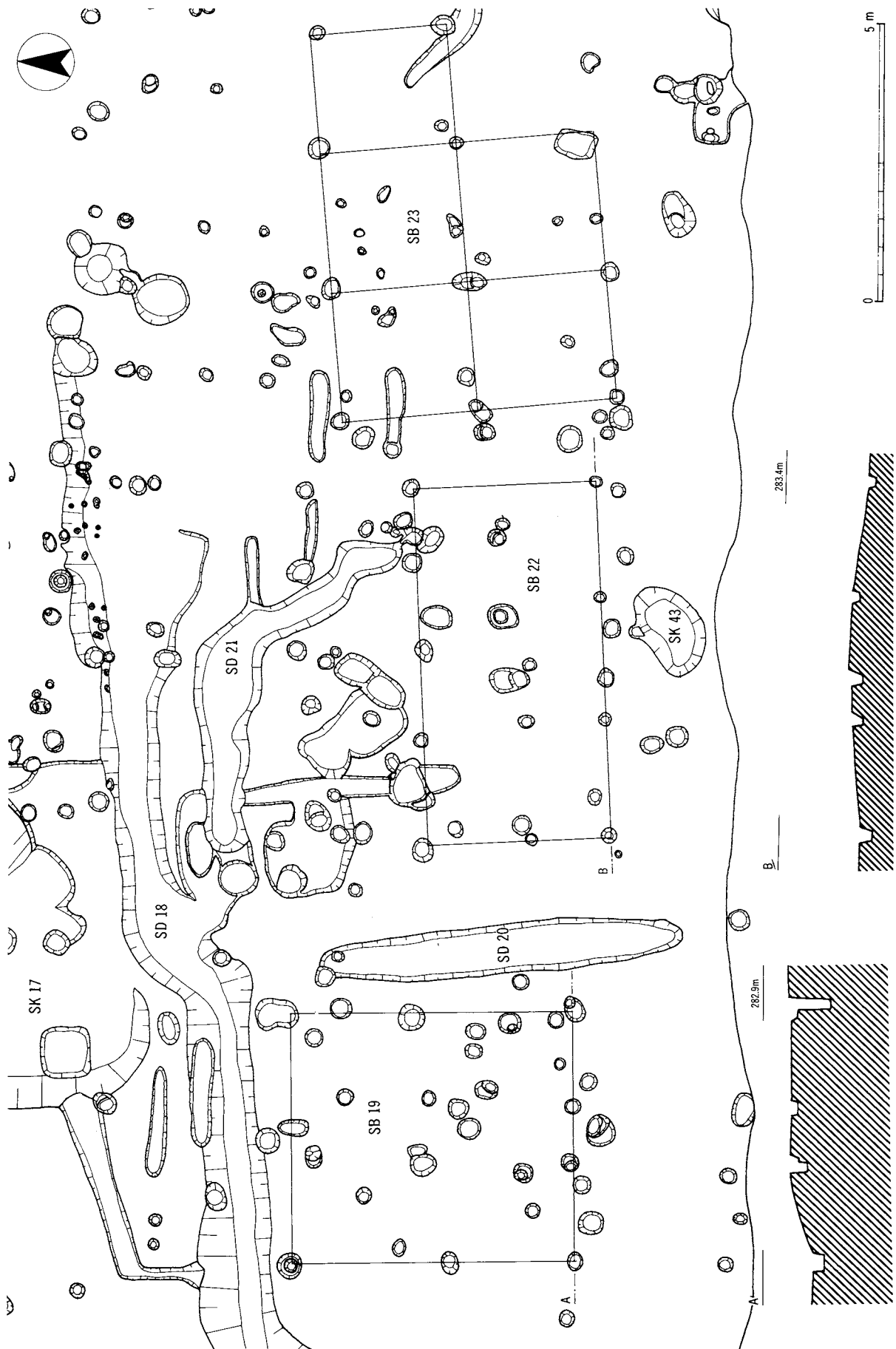
SB32 3間×2間の南北棟で、北側と東側にSA31がめぐる。柱穴が集中する箇所であるため、数回の建替が行われたと思われるが建物を明確にできなかった。桁行7m、梁行4.4mである。SD28・30・33で区画され、西接してSE31がある。

SB37 2間×2間の方形建物で、中央に床束を持つが南辺の柱間は不揃いである。東西3.7m、南北3.9mで、SD33・34・37で区画する。

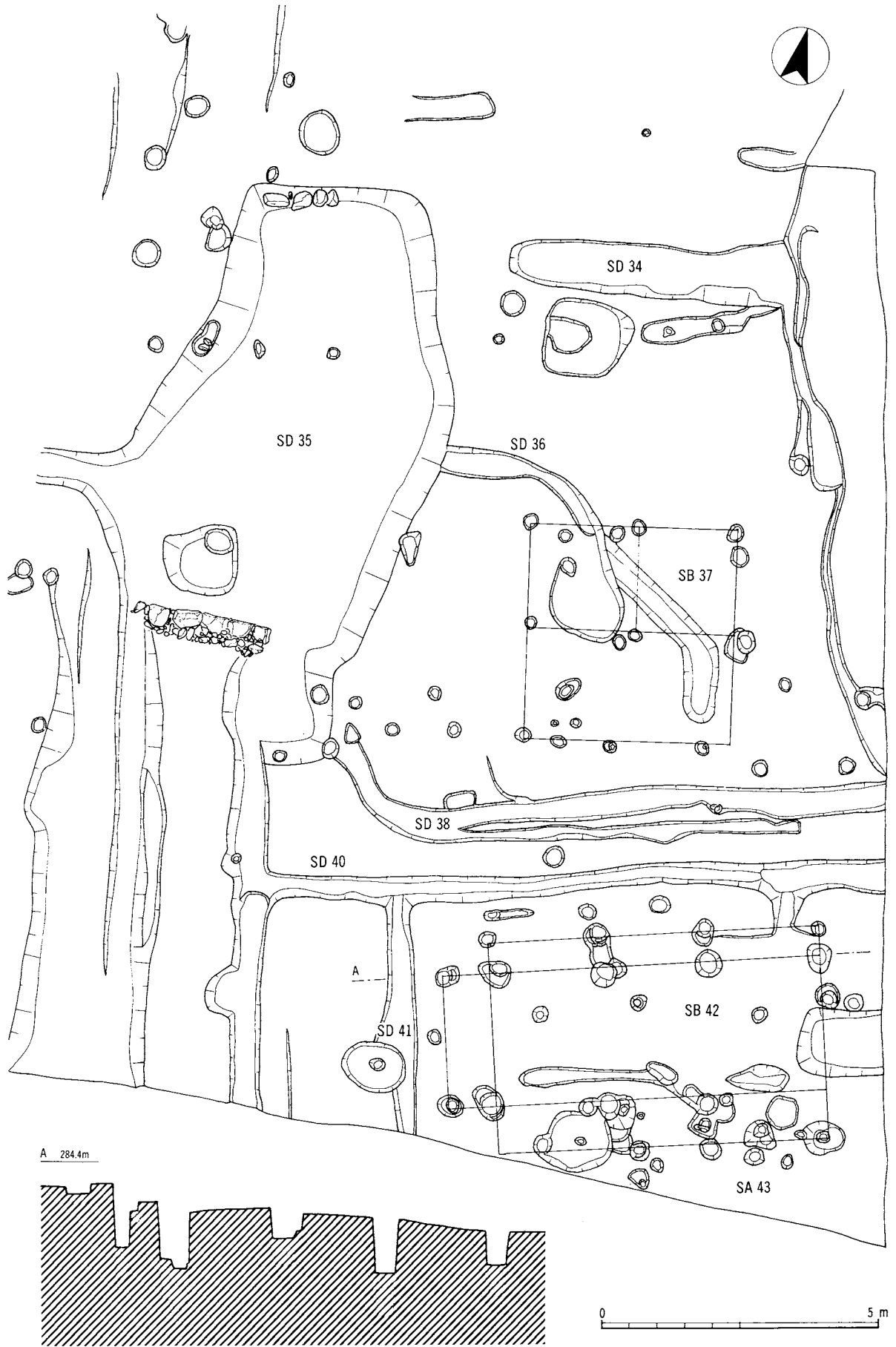
SB42 3間×1間で東側以外に廂または縁を持つ建物である。桁行6m、梁行2.4mでSD40・41で区画する。

3. 井戸（第11図）

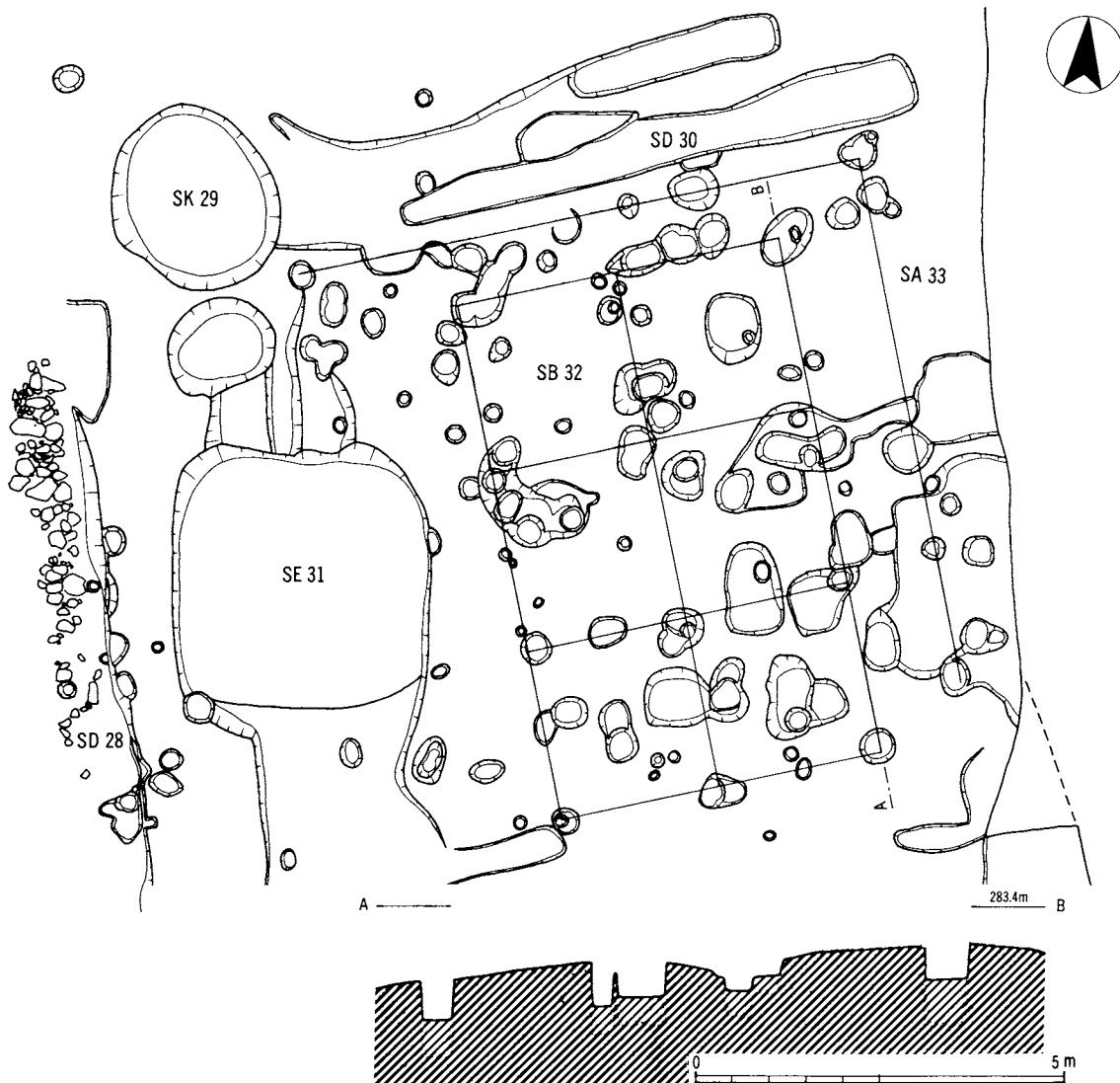
SE31 SB32の西側に接近して掘られたもので、河原石を小口積みした形式である。掘形は隅丸方形で、東西約3.5m、南北約3.4m、深さ約3.7mと大型である。壁面は若干崩落しているものの、下半部はほぼ垂直で、上方に向うにつれてやや外反する。掘形底面は水平で、地山最下部の青灰色土が湧水層である。石組みに先立ち、掘形の中央部に松と思われる巨材を井桁状に陣木として組合せたものを設置している。陣木は、先ず東西に長さ約2.6m、厚さ25cmの木材2本を約1.1m間隔に並行して置き、次に両材の両端より約60cm内側の箇所に長さ約25cmで凹状に缺った部分に、同寸法で缺りのある框材をしっかりと密着させて、直交して重ねている。その上下両面は、水平を保つように粗く面取り加工が施されている。井壁の石組みは、この方形の陣木内側面よりやや外側に小口を揃えて積重ねているが、基底面より約1.5mまでの部分までは陣木に規制されて方形に組まれている。また、石組みの断面も上方に向うにつれて内湾させて、土圧に対する配慮が窺える。この部分から上方への石組みは、やや内傾気



第7—8图 SB19·22·23实测图 (1:100)



第7—9图 SB 37·42实测图 (1:100)



第7-10図 SE 31、SB 32、SA 33実測図 (1:100)

味ではあるが直線状に小口を揃えたとともに、平面を円形にして最上部に至っている。

検出面の最上部では、長さ60cm前後の大型石を並置しているが、この部分で内径は約1m、基底部では約60cmであり、深さは約3.3mである。

石組み内部からの出土遺物は僅少であり、若干の木製品、加工木・石臼片があるのみで、土器類は小片のため井戸の存続時期を明確にしえない。

なお、井戸の南側には浅い落込みが続いているが、洗場を兼ねた排水施設と思われる。また、井戸の掘形周辺には覆屋の支柱穴は認められないので、覆屋は存在しなかったと思われる。

4. 門・柵 (第12・10図)

SA 24 主郭の南辺部中央に位置する柱間3mの門である。主柱の左右に0.9~1.0mの間隔で脇柱を設け、主柱より内側へ0.8~0.9mの位置に対称的に

支柱と思われる垂直な柱穴が並列する。主柱と東側脇柱内には、扁平な河原石を置いている。東側の主柱と脇柱穴は、西側にくらべて約35cm低い位置にあることより、当初は東側も同じ深さに柱を据えていたものが建替えの必要が生じた結果、柱穴の基礎をさらに深くしたものかもしれない。なお、内側の2個の支柱穴が垂直であるので、主柱の上屋に取り付くものと思われる。

SA 33 SB 32の北側と東側に直交して設置された柵か塀と思われるもので、柱間は不揃いである。

5. 溝 (第7~10・12図)

SD 7 主屋のSB 10~13の北側と西側を区画する幅約60cm、深さ30cmのU字溝で、西側は斜めに走ってSK 9に入っている。北側の中央部で南向する支溝が延びており、主屋建物を東西2群に区画している。

なお、北溝の東方に細長い土壇があるが、当溝の延長部分の痕跡かもしれない。

SD14 SD17と同様に主屋群を区画するためのL字状の小溝で、南側で幅約1.1m深さ75cmのV字溝である。

他の区画溝が浅いU字溝であるのに対し、当溝の南側が深く掘られているのは、主屋建物群付近の排水を強く配慮したものと思われる。ただ、層位観察によると、漸次埋没していったものらしく溝を浚えてはいないようである。なお、埋没土より土師器鍋・皿・瓦質火鉢などが出土している。

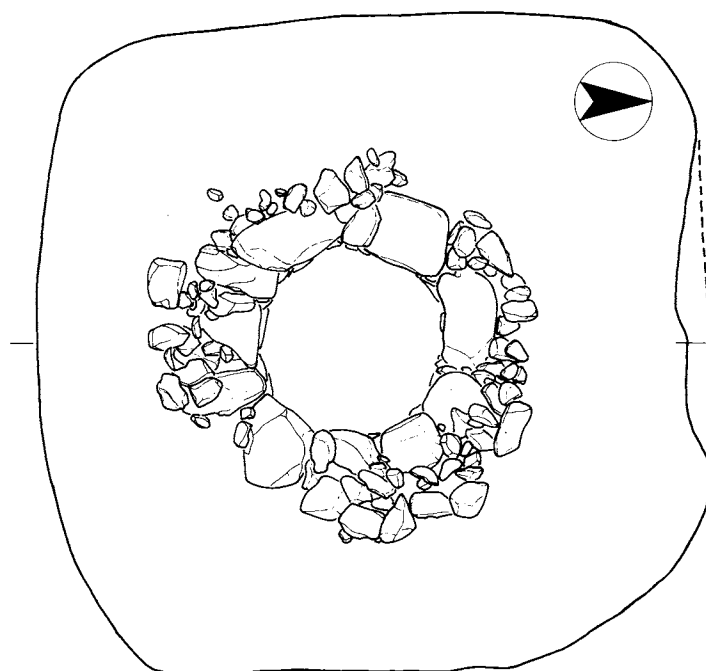
なお、当溝の東側におけるSB13との前後関係は、SB13の方が後出である。

SD18・20・21 主郭南西部のSB19・20・23を区画する小溝である。SB18は逆L字状を呈し、北側はやゝ屈曲し、西側では削平されたためか西縁は検出できなかったが、浅い土壇になっていたかもしれない。幅約1.3m、深さ約20cmのU字溝である。

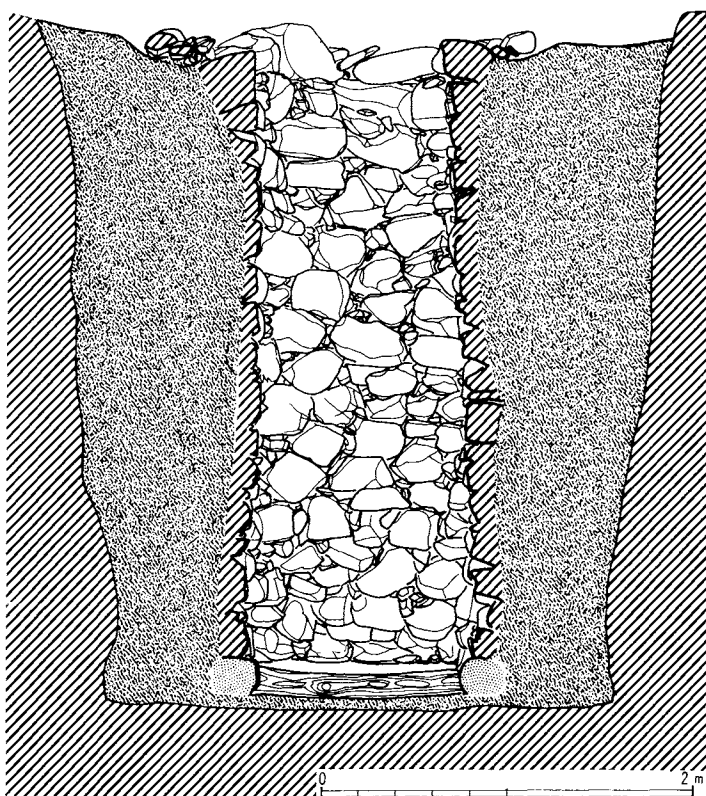
SD20は独立した区画溝で、幅約85cm、深さ約10cmと浅い。SD21はSB22の北側の区画溝で、やゝ屈曲した独立溝であるが、西側寄りで南北方向の小溝が取り付いている。

SD28・30・34 主郭東辺のSB32・SE31の東側を除く3辺の区画溝で、北側のSD30は独立溝であるが、あるいはその北方に当る東西方向の段差は当初の区画溝の痕跡かもしれない。幅約80cm、深さ約20cmのU字溝である。播鉢、施釉皿、土師器などの小片が出土している。

SD28は、SE31より、約90cm西方に位置する南北方向の小溝で、南向して幅が広がるが南端は不分明である。SE31に面した長さ約5.5mの間のみ、河原石と小礫が溝内に敷き詰められており、汲水作業を配慮したものと思われる。溝内より播鉢、鉄釉壺、施釉皿などの小片が出土している。



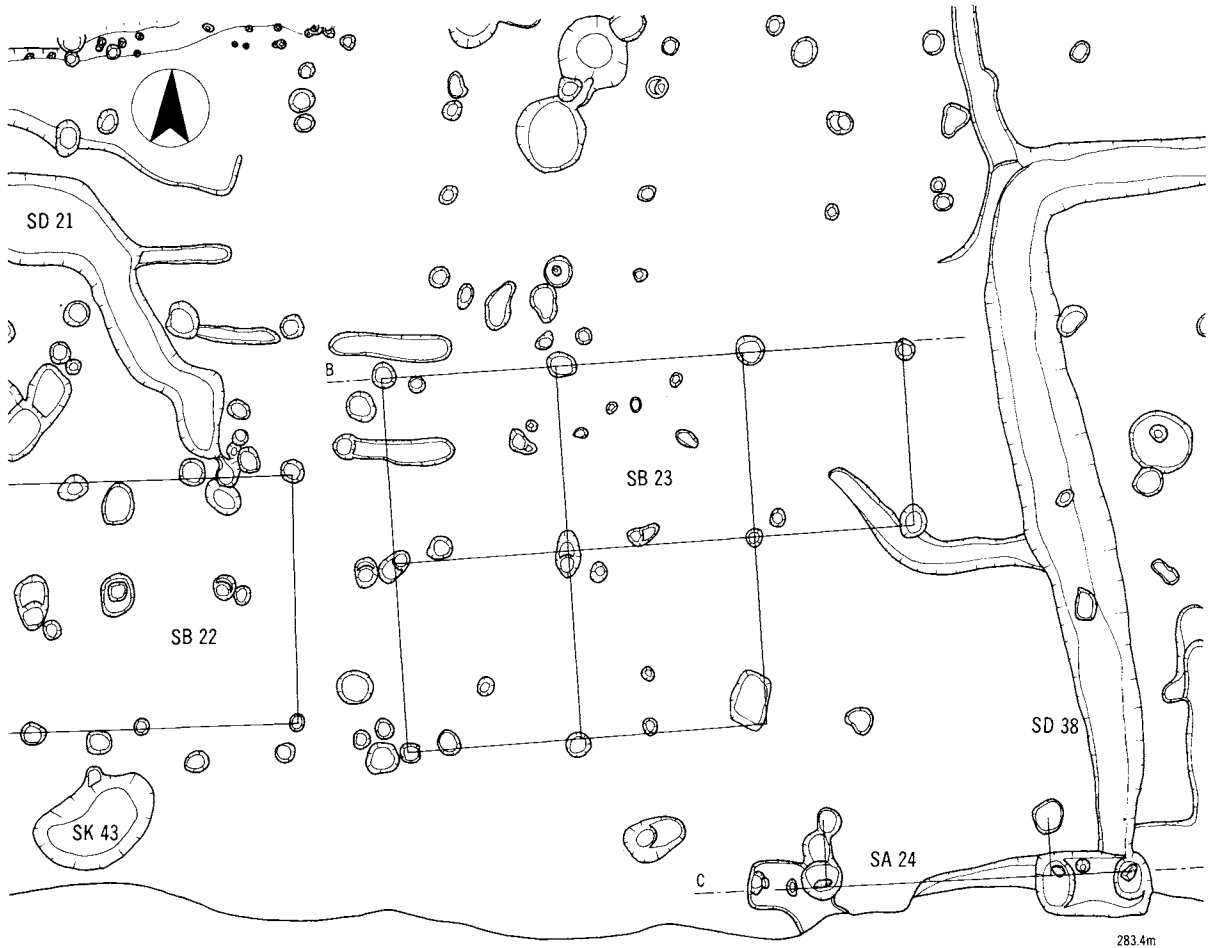
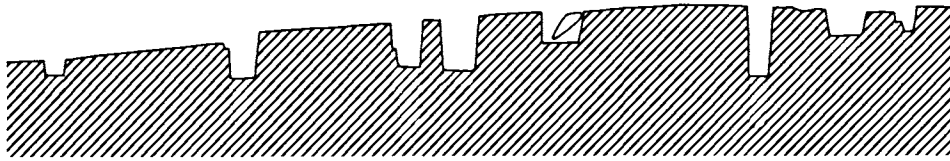
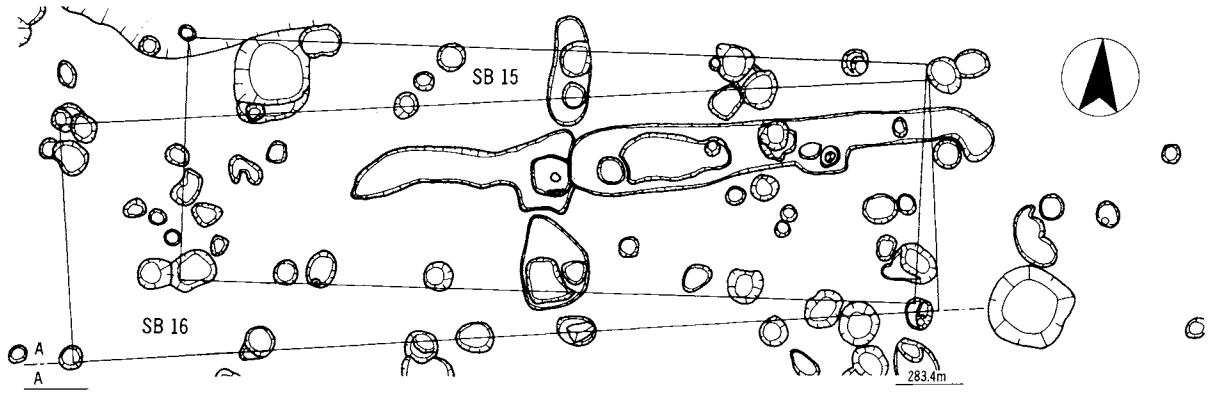
284m



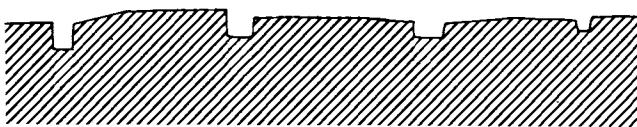
第7-11図 SE31実測図(1:40)

SD34は東方が崖となり不明であるが、南側のSB37に対する区画溝でもある。幅約1.0m、深さ約20cmのU字溝で、信楽壺・青磁碗などの小片が出土している。

SD35 SE31の南側に位置する大型の溝で、む



B 283.4m C



第7—12图 SB 15·16·22·23、SA 24实测图 (1:100)

しろ井戸の排水や雨水を溜めた池かもしれない。南半がや、西へ屈曲し、南端より2条の小溝が取り付け、西側より逆L字状のSD39へ連続している。

南側の小溝の間に、北面を揃えた石列が残り、北側にも同様の石列の一部がある。調査時の所見では東側の溝底にも部分的に河原石が崩落しており、おそらく周囲に石列をもっていたものと思われる。

溝内は北側寄りで深さ約40cmと最も深い、全体に平坦状である。埋土中より信楽甕・土師器皿・天目茶碗・播鉢などの小片が出土している。

SD36 SB37より屈曲してSD35に流入する小溝で、幅約50cm、深さ約15cmのU字溝である。途中で小土壇があり断絶しているかにみえるが、連続していたと思われる。

SD38・40 SB37・38の中間の区画溝と雨落ち溝を兼ねたもので、SD37はSD35へ、SD38はSD35より南へ向うSD41へ流入する。ともに幅約30～50cm、深さ20～30cmのU字溝で、SD40へはSB42の西側に沿って直交する小溝が取り付けられている。両溝より、信楽播鉢の小片が出土している。

SD38の南側では、幅約20cm、深さ約10cmの小溝が平行しているが、SD40との間が通路であったと思われる。

SD39 SD35の西側より逆L字状に屈曲する幅約70～1.0m、深さ約15～20cmのU字溝で、南端はSA24の北側で終わっている。屈曲部には、北方のSK27より南向してきた幅約30cm、深さ約10cmの浅いU字溝が流入している。

SD41 SD35南側の石列の東西両端より南向する2条の小溝があり、そのうちの東溝である。幅約70cm、深さ約15～20cmで、南向して深くなっており、北端のSD38の流入部では土壇状に広がっている。なお、西溝の南端は次第に上昇し溝は消えているが、埋土より信楽播鉢の小片が出土している。

6. 土 壇 (第7・8・10・12図)

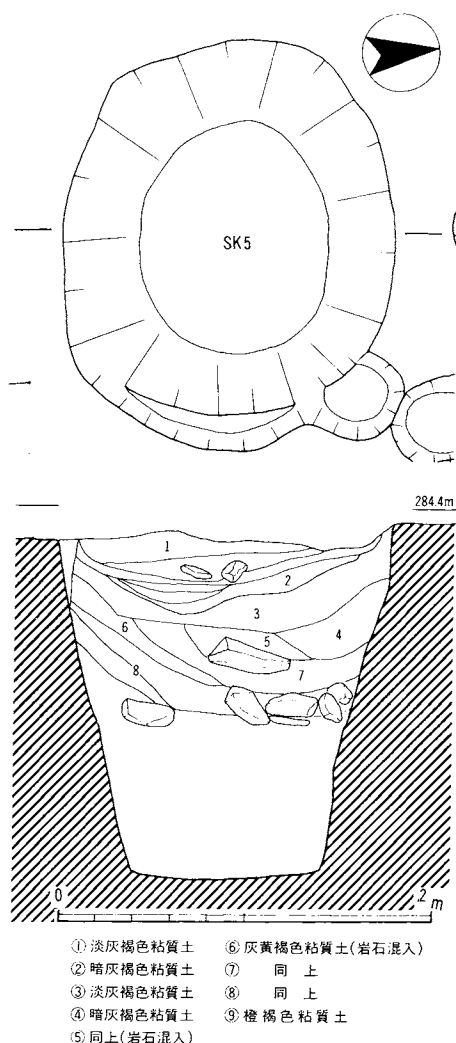
SK8 SB10とSD7に挟まれた楕円形の土壇で、東西約5.4m、南北約4.4m、底部は播鉢状で最深部は約30cmである。南肩はや、凹凸があるが、埋土は茶褐色粘質土の単純層で、信楽播鉢・土師器小片が出土している。

SK9 SB10・11の西側にある不定形な播鉢状

土壇で、南北約4.4m、深さ約55cmで、西側はSD7の東縁に至っている。北東部の斜面に河原石の小集石がみられたが、斜面全体に貼り付けられたものではない。埋土より信楽播鉢・甕・灰釉平鉢などの小片が出土している。

SK17 SD18の北側にある三角形の土壇で、南肩は不明であるが東西約5.7m、南北約5.0m、深さ約40cmの平坦な底面である。西南部よりL字状に屈曲してSD18に流入する小溝が掘られている。なお、土製犬(65)は、南肩部で出土したものである。また、当壇の東南部よりSD18・21にかけての地域一帯には、スサ入りの赤色焼土塊が分布していたが、あるいは小規模な野鍛冶が行われていたかもしれない。

SK25 SB12・13の東北にあり、東西約2.2m南北約1.8m、深さ約1.8mの断面台形状で平底の土壇である。埋土の下部は、橙褐色粘質土で、上部は



第7-13図 SK25断面実測図(1:40)

大小の河原石が乱雑に堆積しており、上下の埋土より信楽播鉢片が若干出土している。

S K 26 S B 13の東側にある一辺約2.3m、深さ約15cmの浅い方形土壇で、埋土は茶褐色粘質土の単純層で、埋土よりの出土品はない。

2 K 27 S D 28の西側に近接する土壇群で、東西約9m、南北約5mの範囲にほぼ収まり、南北軸の長方形土壇が南北2列、東西5列に並んでいる。個々の土壇は大小あるが、大きなもので南北約3.2m、東西1.5m、深さ15~20cmで底部は平坦である。壇内には柱穴はほとんどなく、焼土や炭化物や土器類も含まれていない。作業場的な機能をもった空間かとも思われるが断定しえない。

S K 29 S D 30の西側に接した東西約2.25m、南北約2.5m、深さ約80cmの断面台形状で平底の土壇である。埋土に細かい破碎岩石が混入し、信楽大甕

の小片、土師器鍋・甕の小片が少量出土している。水溜か。

S K 43 S B 20の南側にある東西約50cm、南北56cm、深さ約10cmの浅い土壇である。壇底より数cm浮いた状態で、須恵器壺(1・2)を中央に置き、両側に土師器椀(3・4)各1点を正位に配しているが、椀(3)の下側に壺(1)が埋没していた。当館跡以前の明確な遺構として、唯一のものである。

S K 44 副郭の中央部S D 5の屈曲部南側にある円形土壇で、直径約1.4m、深さ40cmで底面は平坦である。埋土より近世陶器が出土しているが、S K 45出土品と接合するものもある。

S K 45 S K 44の南側にある略長方形の土壇で、東西約1.0m、南北約70cm、深さ約30cmである。壇内のほぼ全体に河原石が乱雑に検出され、近世陶器類が出土している。

3. 遺物

出土遺物は、整理箱で25箱と少量であり、遺構の一括遺物として当館跡の存続時期を比定しうるものもすくない。時代的には、館跡以前の遺物、存続期間の遺物、館跡廃絶以後の遺物に分類できる。

1. 館跡以前の遺物 (第14図)

S K 43出土の古墳時代後期の土器と平安時代の緑釉陶器、鎌倉~室町時代の瓦器椀などがあり少量である。

須恵器 (1・2) 壺の口縁部と体部で、(1)は肥厚した口縁端部に浅い沈線をもつ。(2)の外表面には細かいカキ目がめぐり、焼成良好で淡灰白色である。

土師器 (3・4) 口縁部が緩かに外反する椀で、(3)は端部で短かく直立する。ともに粘土紐巻上げ成形の痕跡が明瞭である。器壁の遺存状況が不良のため調整技法は不明であるが、内面はヨコナデで、胎土に長石粒を含み、暗茶褐色~淡茶褐色である。

緑釉陶器 (5) 口径10.8cm、高さ2.5cmの輪高台皿である。外表面を僅かにヘラ削りし、両面に淡緑黄色釉を掛けており、素地は淡黄褐色の精良土である。S D 6より出土したものであるが、混入品である。

瓦器椀 (6~9) 口径7~8cm、高さ1.8~2.2cmである。(6)は外面に粗いヘラミガキを施し、内面のラセン文もていねいであるが、内底部の暗文は連続輪状文を省略している。(7~9)は、(6)よりも退化形式であり、外面はユビオサエのままの無文である。内面の暗文も粗く、内底部の暗文も省略した連続輪状文である。いずれも口縁端内側に沈線が残り、(7~9)の貼付高台は断面三角形の低平なものである。

(7~9)は主郭のピットより出土したが、建物跡としてまとまるピット群には含まれていない。(6)は西側堀の上層より出土しているが、混入品と考えられる。

2. 館跡存続期の遺物 (第14~17図)

一括遺物として各遺構で集中した出土状況が認められなかったが、土師器、瓦質土器、陶磁器、土製犬のほか、石製遺物、木製遺物、金属製遺物などがある。いずれも室町時代後期に比定されるものである。

1. 土師器

鍋 (10・11) 大小二種類あり、(10)は口径34.8cm、高さ約14.4cmである。ともに大きく「く」字状

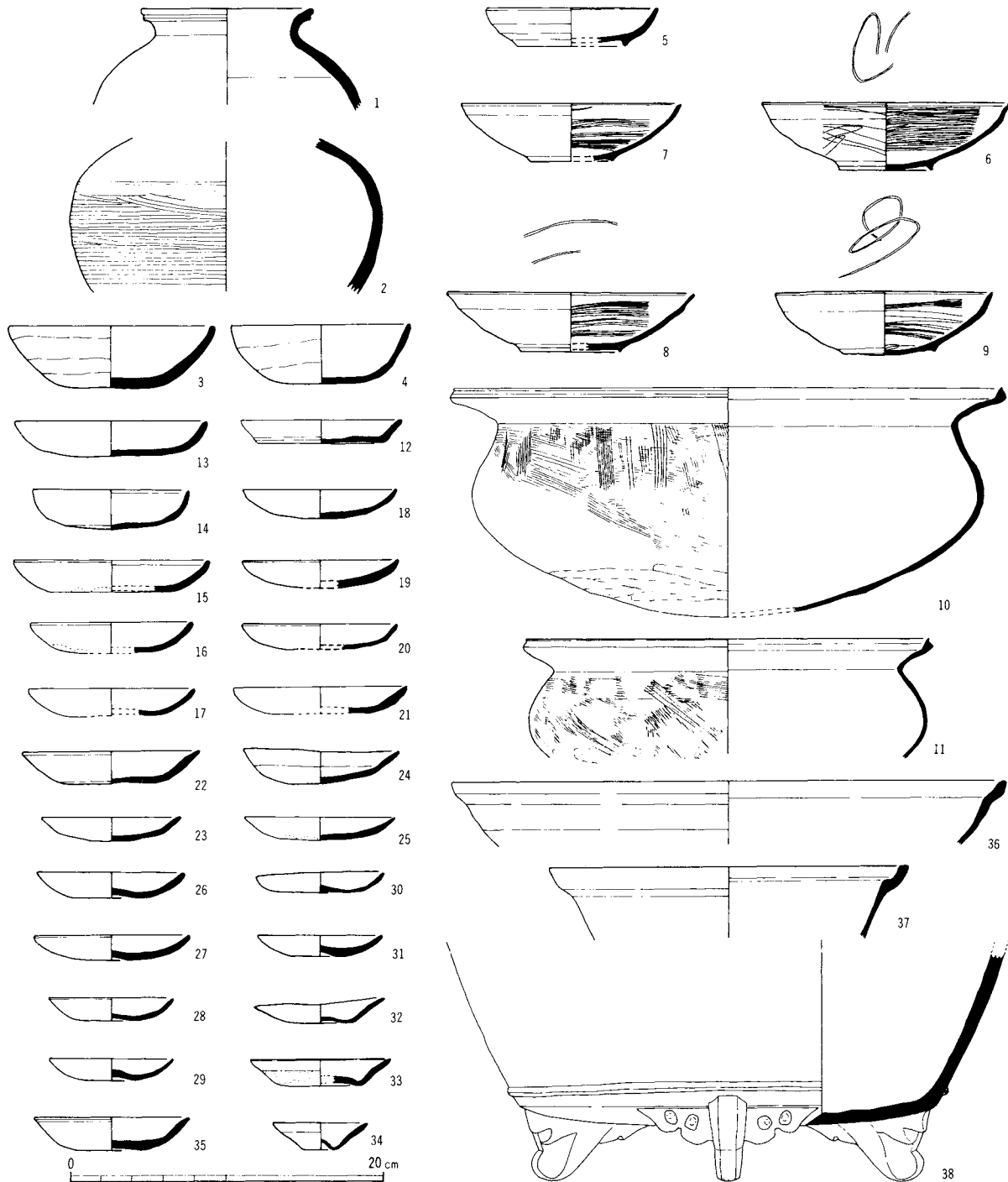
に外反する口縁端部を三角形状につまみ出し、体部外面を細かくハケ目調整し、底面はていねいにヘラケズリして器壁を薄くしている。胎土は砂粒を少量含む精良土であり、灰白色である。S D14出土。なお、淡褐色でや、厚手の同形式のものも少量出土している。

皿 (12~35) 形式的に5種類に分類できる。

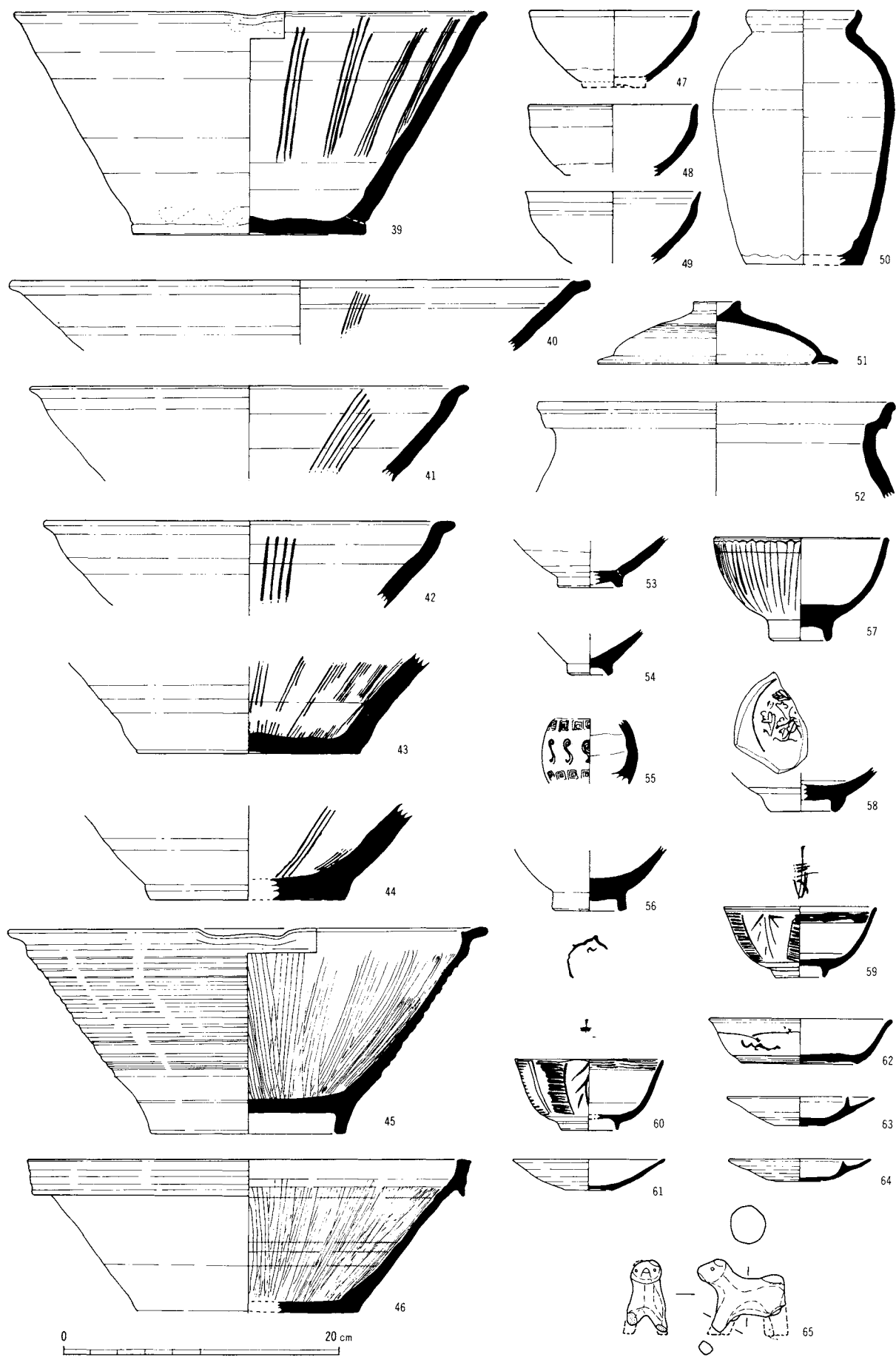
A類 (12) 口径10.2cm、高さ1.5cmで、口縁部は

短く外反し底部は平坦である。口縁部をヨコナデし、他はコピオサエのまま、淡赤褐色である。S Bに伴う土坑内出土。

B類 (13~21) 底部から緩かに外反して丸味をもつ口縁部に至るもので、口径に12.2~10cm、高さ2.2~1.8cmと規格は一定しない。口縁部のみヨコナデし、他は未調整のままであり、淡褐色~淡黄白色である。



第7-14図 出土遺物実測図 (1:4)



第7—15图 出土遗物实测图(1:4)

C類 (23~25・35) 規格はB類に類似するが、口縁部がB類にくらべて直線的に外反し、端部はやや薄く尖り気味である。調整と色調は、B類と同じである。(35)は、糸切り底である。

D類 (26~31) A類の小型品の底部をや・上げ底にしたもので、灯明皿としての使用例が多い。調整と色調は、B類と同じである。

E類 (32~34) ヘソ皿と称するもので小型の(32)は口径6cm、高さ11.8cmである。調整と色調はB類と同じであり、灯明皿として使用されている。

B~E類は、遺物包含層、ピット、主郭内の小溝土坑などからの出土が多く、なかでもB類が主体を占める。なお、(17・21)は、土師器鍋と同じSD14より出土したものである。

2. 瓦質土器

鍋 (36・37) 口縁部の破片であるが、内面の屈折部に小さい面をもつ(35)と、面をもたずに緩かに屈折する(34)の二種類がある。外面をていねいに横位のヘラミガキで調整し、内面はヨコナデする。胎土は精良土で、内外面は黒灰色~黒褐色で、(36)は内面を、(37)は両面を燻し焼されている。

火鉢 (38) 装飾式の貼付け三脚をもつ平底のもので、体部の最下部に断面半円形の突帯を貼付けている。口縁部は欠失しているが、器高は比較的浅いものと思われる。全体にていねいな作りであり、外面は横位にヘラミガキし、内面はヨコナデしている。脚部は側面をヘラケズリで面取りし、雲形装飾の表面には、貫通しない穿孔が2個対称的に配置されている。胎土の精良土を使用し、黒灰色に燻し焼されている。鍋(10・11)、皿(17・21)とともにSD14より出土。なお、同種の脚部が他地区より1点出土している。

小型瓶 (55) 破片であるが復元腹部径約7cmで上下は欠失している。粘土紐を積上げ成形で、内面はユビオサエのままである。平滑な外面の上下に二重方形と二重S字状のスタンプ文がめぐる。精良土を用い、灰黒色であり、花瓶であろう。

3. 陶磁器

青磁碗 (57) 口径12.4cm、高さ7.4cm。緩かに直立する口縁より内弯して平坦な底面に至る丸味を

もつ碗で、輪状口台は厚味がある。口縁直下に頂円形のヘラ描波状文様がめぐり、三本単位の線描き蓮弁文をめぐらしている。内底面には、二重の圏線内に漢字二字(判読不能)の刻印がある。底部の見込み部を除き全面に淡灰緑色釉が掛けられており、露胎部は淡灰色である。高台と体部下半に重ね焼の痕跡が残る。

白磁碗 (54) 全体に施釉された小型碗の底部で、胎土は精良土で、焼成も堅緻である。

灰釉碗 (53・56・58) 高台の形式は異なるが、(56)の底部はロクロ削りで、内底部にヘラ描文様がある。(58)も底部のみヘラ削りで、内底部にヘラ描の花文がある。(53)は体部下半より底部にかけてロクロ削りで、文様はない。以上の3点は、ともに淡緑灰色釉がかかり、高台の形式が異なるが、胎土は精良で焼成は堅緻である。

信楽甕 (52) 口径25.4cm。口縁部が屈曲して段になり、端部はヨコナデによって丸くなっている。胎土に小石を多く含み、器壁に長石が噴き出している。淡茶褐色で、焼成は堅緻である。SK9の出土。

天目茶碗 (47~49) 口径12~12.5cm。口縁部が僅かに屈折し、体部がや・内弯する(48)と、直線的な(47・49)の二種類がある。体部下半を除き全体に茶褐色の鉄釉がたっぷり掛かる。(47)は露胎部に鉄泥が掛かり、SB32の北側ピットより出土。

播鉢 (39~45) 口縁部の形式で二分類できる。端部を外方につまみ出し、浅い凹線状のヨコナデがめぐる(39・40)と、凹線状のヨコナデを施さない(41・42)ものがある。筋目は3条~6条と多様であり、間隔は粗く、(39)は18単位、(43)は21単位である。(39)が片口であるほかは全て破片である。焼成に硬質と軟質の二種類あるが、いずれも胎土に大粒の石を含み器壁に露出している。粘土紐積上げまたは巻上げ成形し、ろくろによりヨコナデするが、体部と底部の接合箇所はヘラオサエや強いヨコナデで調整している。灰白色~明褐色で、硬質のものでは稀に自然灰釉が湧出するものもあるが、全て無釉である。なお、図示していないが、筋目2条で口縁端部をつまみ出さずに緩かな平坦面をもつ端部のままのや・古い形式のものが1点出土している。

4. 木製品

漆塗椀 木質が全て腐蝕し、外面の漆皮模のみが残るもので、体部と輪高台は朱漆を全面に塗り、底部の黒漆面の中央に「村」を朱書きする。ピット内出土

曲物 (70) 直径16cm、厚さ0.2cmの円板で、曲物底部としたものである。上面全体に黒漆を塗り、樋部内面の全体に及んでいる。下面は素地のままであるが、外周辺に沿って、桃核を縦に半截し黒漆で接着した脚が3箇所に残る。配置からみて、6脚であったと思われる。桶材は遺物取上げの際に崩れたが、厚さ0.2cmの薄板を用い、重ね部分は幅1cmに6カ所単位で細かく樹皮で綴合せている。松材。S E 31出土。

加工木 (71・72) (71)は台形状の板片で、一端

に径3mmの2穿孔があり、角桶の部材と思われる。

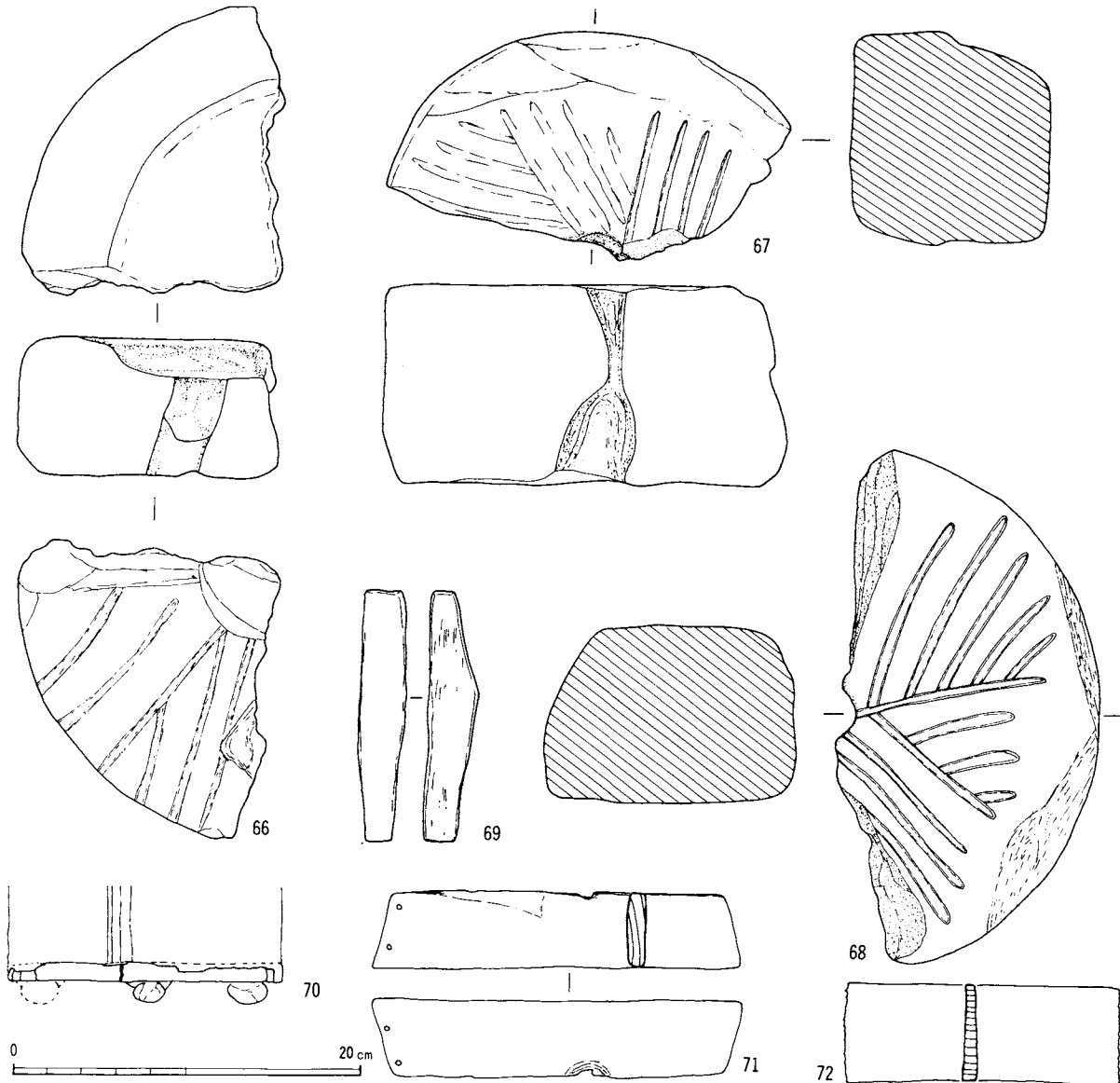
(72)は両端に鋸挽きの痕跡をもつ板片で、用途は不明である。

なお、この他にS E 31の石組内の埋土中より、釣瓶かと思われる丸桶の断片が出土している。

5. 石製品

石臼 (66~68) 穀磨用のもので、(68・67)は下臼、(66)は上臼である。(66)の上面は、幅約5cm、高さ1mの蒲鉾縁で、上面が平滑に磨かれている他は全体を細かく敲打して成形している。下面はやや弯曲した磨目3本で8~9分割と推定されるが、ふくみはほとんどなく、穀落しの孔の痕跡が斜めに認められる。1/4片で、材質は花崗岩である。

(67)は磨目4本の9分割と推定されるもので、磨面のふくみはほとんどないが、かなり磨滅してい



第7-16図 出土遺物実測図 (1:4)

る。磨面以外は細かい敲打による成形で、中央部のほぞ孔は痕跡であるが貫通しており、下側の磨面寄りで径約4cm、高さ約5cmの回転軸を受けるえぐりがある。𠄎片で、花崗岩製で側面に付煤している。S E 31内出土。なお、図示していないがS E 31出土の他の石臼には、磨目の境を複線にしたものが1点ある。

(68) は出土中の最も大型品で、𠄎片であり、磨目4～5本で7分割と推定される。磨面は全体に磨滅しており、中央部の回転軸を受けるほぞ孔は磨面下約2cmの部分まで円形状に磨滅している。全体に粗い敲打による成形で、花崗岩製である。

砥石 (69) 短冊型の携帯用砥石で、上下両面が砥面として使用され、側面には楕状のカキ目が残る。目の詰った精砥で、砂岩製である。

6. 土製品

土製犬 (65) 長さ6.4cm。現高5.2cm。手捏ねの小型犬で、右耳を欠くが頭部の目鼻の表現は稚拙であるが明瞭である。脚部は欠失しているが、しっかりとふんばっており、尾部は体側に曲げられて表現されている。塗彩痕跡はなく、淡灰褐色の素焼きである。

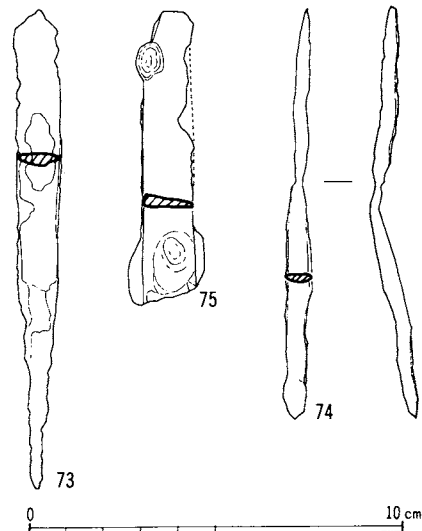
7. 金属製品

筭 (73) 現長12.7cmの銅製品で、全体に緑青が噴き出している。頭部は山形を呈し、上より𠄎の部分以下は細く尖っている。表面のみに装飾文様があるが、剥落しており不明確であり、僅かに魚子地の痕跡が部分的に残っている。上方に雲形を打ち出した厚さ約2mmの装飾板を貼り付けており、裏面に目釘が打たれている。なお、(74)も銅製筭と思われるが、原形を留めていず、全体に緑青が噴き出している。

小刀 (75) 現長7.5cm、幅約1.3cmの鉄製小刀で、全体に錆化が著しい。図の上部が柄部と思われるが、やや反り気味である。

3. 館跡廃絶後の遺物 (第15図)

副郭中央部のピットと土坑(S K 44・45)より出土した一括遺物で、江戸時代の17世紀前半以降に比定されるものである。この時期の遺物は、主郭や堀より殆んど出土していないための廃絶後の遺物と思われ、全て陶磁器である。



第7—17図 出土遺物実測図(1:2)

播鉢 (46) 口径約32cm、高さ11cm。口縁部が縁帯状に肥厚し、端部が下方に垂れる形式であり、口縁部に2条の凹線がめぐる。内面全体に7本単位のカキ目が42～43条めぐらされており、口縁内部の上半より底部を除く外面全体に茶褐色鉄釉がかけられている。体部下半は粗くヨコナデされ、底部はユビオサエとナデのままである。焼成良好で、素地は淡灰褐色。

染付碗 (59・60) 口径約11cm、高さ5.3cm薄手の丸碗で体部から口縁部にかけて直線的に外反し、口縁端で緩かに外反する。高台は輪状高台で、やゝ内弯する。両面に発色の良いコバルトブルーによる手描き文様が施されているが、内面に「寿」とも判読可能な文字が記されている。口縁内面の界線内の文様は、(60)では3本の横線であり、(59)では染料がにじんで太くなっている。全体にガラス状で光沢を持つ発釉である。

染付台付平鉢 (62) 口径13cm、高さ3.3cm、素地や釉調は碗と同様であるが、成形時のロクロ目が全体に良く残っている。底部から緩かに外反し、口縁部では短くさらに外反する。底部は平な輪状高台から内側へ水平状の素地面が続き、中央部の径4cmの部分で一段低く削った面に施釉されている。内面全体にやゝくすんだコバルトブルーによる小舎、柳林などの絵画文様を描き、外面には簡略化されているが伸びやかな手法で草花文様を描いている。

鉄釉小型壺 (50) 口径7.4cm、高さ18.2cm。緩かに「く」字状に内弯する口縁と、肩部がなだらか

となり内弯して直線的に底部に至る小型壺である。ロクロ成形の凹凸が良く残り、素地は石粒の多い茶褐色である。内面全体と外面の最下部までの全体に暗褐色の鉄釉がたっぷりとかかり、底部と外面最下部のみが素地のままである。信楽焼か。

灯明皿 (63・64) 口径約10.4cm、高さ1.6～2.2cm。直線的に外反する口縁部の内側に油を溜める内皿を作る形式で、底部は僅かに内弯する。内皿の口縁の高さが(63)では外皿とほぼ同じ位置にあり、(64)ではやや低い。内面全体に光沢のある淡灰緑色釉がかかり、(64)では口縁部外面にも及んでいる。内皿の一カ所に灯芯を置くため幅2cm深さ0.5cmで、半円状にヘラで切取られた箇所が(63)にある。口縁部外面はヨコナデし、それ以下と底部はていねいにヘラケズリしているが、内皿を先ず成形し、さらに

外皿をつなぎ合せて成形したものである。焼成良好で、素地は淡灰白色である。

灯明皿 (61) 内皿を持たない形式のもので、口径10.8cm、高さ2.2cm。底部は(63・64)にくらべてやや小型で、内面全体と口縁部外面に光沢のある淡黄灰色釉がかかり、外面は口縁部のみヨコナデし、他はていねいにヘラケズリする。なお内面3カ所に重ね焼に用いたトチ痕跡が残る。焼成良好で、素地は淡灰白色である。

蓋 (51) 口径17.2cm、高さ4.8cm。輪状把手を持つ笠型の蓋で、外面に4条の沈線をめぐらせている。身と重ね合う部分の両面のみが素地のままで、全体に淡灰緑色の光沢あるガラス状の釉がかけられており、細かい貫入が全体にみられる。焼成良好で、素地は淡灰色である。おそらく行平の蓋と思われる。

4 結 語

1. 遺構について

風呂谷館跡は、丘陵尾根の自然地形を巧みに利用した室町時代後期の複郭式館跡である。調査地区外の北方尾根にも平坦面が1カ所あり、建物跡と櫓台状施設の存在が推測されるが、調査地区は館の中核部分の主郭とその前方の副郭部分に当る箇所である。

主郭と副郭は、内堀で区画され、両郭の東・西・北側にも外堀が設けられているが、正面の南辺にも存在していたか否かについては、水田による削平のため明確にできなかった。したがって、館に取付く正面中央の大手道も不明確であるが、副郭南辺のし字形の掘り込みが大手道の延長部に当り、さらに主郭との境の西側内堀の屈曲した平面から、副郭の大手道がそれに沿った鍵手状であったことが推定できる。副郭の東部の平坦面には、あたかも内堀に並行した柵状の柱穴群が検出されたが、調査の結果、これらの柱穴は館廃絶後の所産であることが確認された。したがって、基本的には副郭の東部と西部の平坦面のうち、内堀の南方の空間には、内堀を掘削した排土を利用した土塁が存在したものと推定できる。

主郭の三辺をめぐる外堀については、北側は全容を確認できたが、東側については中間部が工事のた

め破壊され全体に検出できなかったものの、北側から屈曲した犬走り全体が存在したことを確認した。東側の堀では、主郭直下の犬走りが南向して西南隅部で幅広い陸橋部へ通じ、南端は副郭の裾と平行して東折するが、その延長部は不明である。東側堀の西肩部については、調査期間に追われたため、3カ所に東西トレンチを設定したに留まった。ただ、堀の底部に直交して、1カ所低い陸橋部があり、周辺の水田への用水を配慮した構造であることが確認された。

主郭の構造が、当館の最も特徴を示唆している。すなわち、平面を縦横に設けられた小溝によって全体が明瞭に区画されている点である。北部の遺構が稀薄な空間は、幅の広い土塁が存在したものと推定されるが、この空間を除くと主郭は東西に2区画、南北に3区画の併せて6区画されるとともに内部がさらに細区画されており、各建物群が機能的に配置されている。建物や他の施設の配置から推定すると、SB10・11・12・13のある西北部が母屋であろう。母屋東側の遺構が稀薄な区画は、広場の可能性もある。母屋の南側のSB15・16のある区画は、母屋に付随する建物であり、その南側の副郭に近い区画は小溝により3群に分かれ、SB19・22・23は、柱間

が2×2間、3×2間の倉庫や雑舎と考えられる建物であろう。

東側3区画のうち、母屋の東側に当る広場的な区画と中央区画との境にSE 31があり、中央区画にあるSB 32は厨房施設と推定される。この中央区画の南側の区画は、並走する小溝の集中性が高いが、あるいは低い土塁が存在した可能性もあり、SB 37・42は雑舎的な建物と推定できる。

以上の建物は、何回かの建替えが行われたため重複してはいるが、基本的には小溝によって区画された内部に一貫性を保持して存続している。当館跡が複郭式とはいえ、主郭構造にみられる上述の機能別を持った建物群の配置は、おそらく単郭式の館のもつ配置と基本的に同性質であったものと考えられる。

また、SE 31の掘形底部に埋設された井桁状の陣木は、県下の中世城跡や館跡の石組井戸で数例検出されているが、これほどの巨材の使用は県下初例であり、井戸作りの工人の熟達した経験と高度な技術を偲ばせるものであった。

2. 遺物について

出土遺物は、他の中世城館にくらべて少量であった。館跡以前の遺物として紹介した瓦器碗の大半が14C代の所産であるが、柱穴等から出土しているため建物配置の復原に努めたが、結局建物遺構を明確に把握できなかった。

館跡存続期の遺物としたものは、15C後半から16C代の所産である。伊賀地方の中世陶器を代表する遺物としての播鉢・甕類のうち、播鉢は割合多数出土しているが、(39~44)は15C後半から16C前半、(45)は16C後半、(46)は17C代以降に比定されるもので伊賀・信楽焼である。

天目茶碗については、産地を確定しえないが瀬戸・美濃大窯の形式編年を参考にすると、16C後半から17C前半代に比定されるものである。このほか甕(50)は、15C後半の伊賀・信楽焼であり、青磁碗(57)も形式的に15C後半から16C代に比定される。

土師器の鍋(10・11、皿(13~35)のうち、鍋は室町時代を通じて伊勢湾西部の集落跡や城館跡より多量に出土しているが、伊賀地方にも少量ではあるが出土が知られるようになってきている。鍋(10

・11は皿(17・21)瓦質火鉢(38)と同一遺構から出土したもので、15C中葉頃に比定しておきたいが、鍋の形式からみて16C代までは降らないものと考えられる。皿(26~34)は、いわゆる「ヘソ皿」と呼ばれているものであるが、京都市内の編年観に従えばその下限を15C代までに比定できるものである。

以上のごとく、一括遺物として時期比定できる資料は断片的であるとはいえ、当館跡の存続時期を15C後半から16C後半の室町時代後期と考えてほぼ誤りないと考えられよう。ただ、廃絶後の資料とした副郭部の土坑・柱穴出土の一括遺物については今のところ明確に時期比定し難い。

その他の出土遺物については、特筆すべきものはないといわざるをえないが、木製品のうち漆塗碗の底部に記された文字については、当館跡に存在した土豪を推定する唯一の根拠である。

現在、大山田村内に所在する中世城館は不明城館を含めて58カ所であるが、その城主や城館名については、江戸時代に上梓された地誌類に負う所が大きい。そのうち伊賀上野城代藤堂元甫によって編纂された『三国地志』(宝暦13年(1763)完成)の現在の大山田村富永地内には、小野氏城(小野氏城址)、西山館(竹野氏宅址)、富野氏館(富野氏址)、北村氏宅址、須曾野氏宅址の5カ所が記載されている。そのうち北村氏宅址には「北村三太夫、字福地」とあり、字名の福地は当館跡の所在する小字「風呂ノ谷」の東南方の服部川右岸一帯に該当している。須曾野氏宅址は字奥屋敷とあり、この小字名は「風呂ノ谷」の南方に該当する。

以上の「三国地志」の記載のうち、上述の漆塗碗に記された「村」を根拠として、当館跡に存在した土豪を「北村三大夫」に縁りのある北村氏の一統と想定できないであろうか。小字名「福地」の所在地が当館跡の足下に当るという地理的条件も一つの傍証と考えておきたい。

天正伊賀の乱による信長勢力の侵攻については、『伊乱記』を始めとして『多聞院日記』『信長公記』に詳細に記されている。16C後半の戦国乱世にあって当館跡もその戦塵にまみれたことは疑いもない事実である。往時の脈動を推察するには余りにも静謐な景観が残るのみであるが、乱世を潜り抜けた歴史

遺産として、現在その全容が水田に変貌したことは

誠に惜しまれるものといわなければならない。

(森前 稔・伊藤久嗣)

[註]

- ① 『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1982
- ② 森前稔ほか『西沖遺跡』『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981
- ③ 森前稔「田中遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983
- ④ 吉村利男ほか「高猿6号墳」前出②に同じ
- ⑤ 森川桜男ほか『辻堂古墳発掘調査報告書』大山田村教育委員会 1973
- ⑥ 中森英夫「横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- ⑦ 中森英夫「歌野遺跡」前出③に同じ
- ⑧ 山田猛「野中城跡」前出①に同じ
- ⑨ 駒田利治「神ノ木館跡」前出③に同じ
- ⑩ 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 一白河北殿北辺の調査一』京都大学埋蔵文化財センター 1982
- ⑪ 『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
『大山田村史 上巻』大山田村 1983

Ⅷ 阿山郡大山田村 ^{きたぎり}北切遺跡

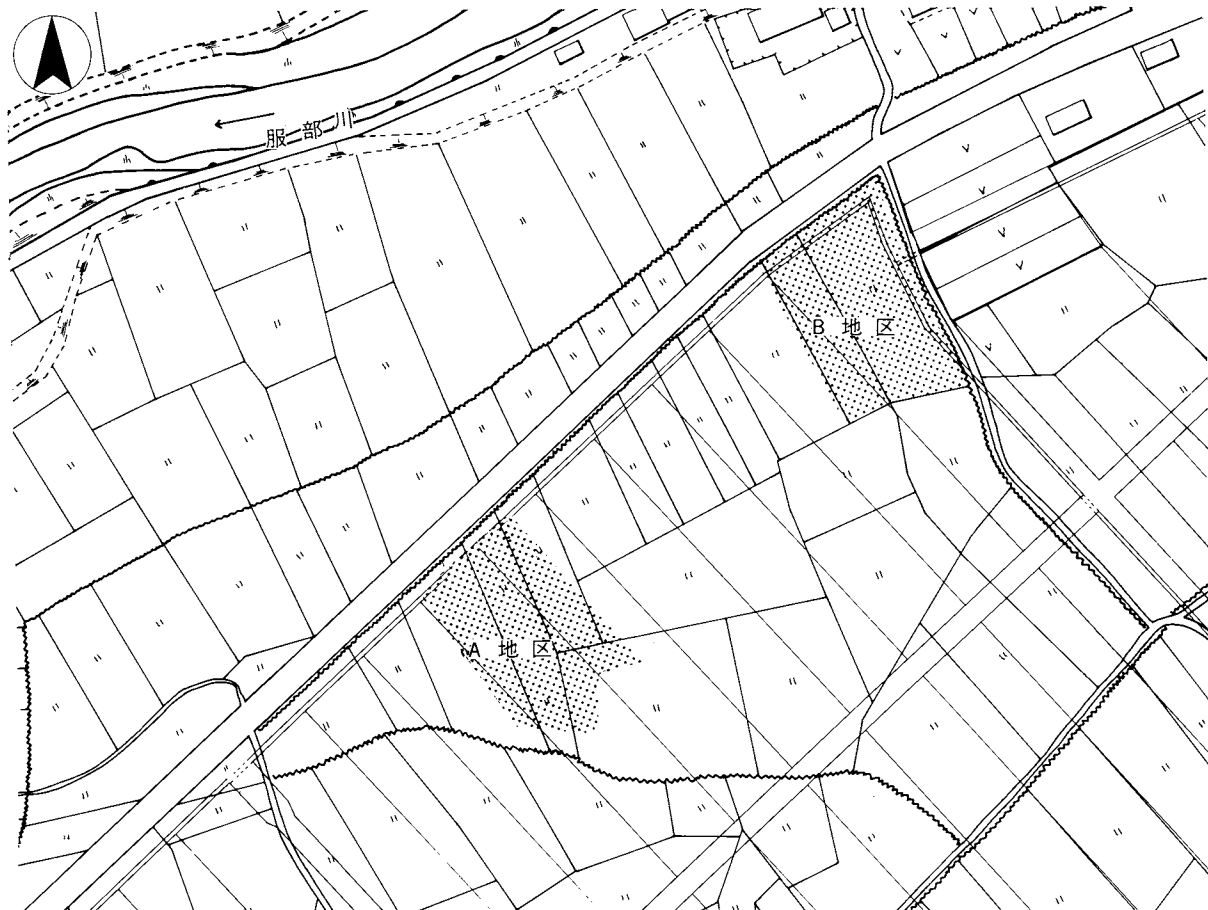
A 地区

1. 遺 構

当地区の土層の基本的層序は上から第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；茶褐色土（床土）、第Ⅲ層；黒褐色砂質土（遺物包含層）、第Ⅳ層；黄褐色砂質土（地山）である。地山までの深さは40～80cmと場所によってやや異なるが、面は北から南に低く傾斜しており、発掘区北端と南端との比高差は約60cmある。遺物包含層中には瓦器を中心とする中世遺物を中心として弥生土器も含むが、層位的に区分できない。検出された遺構として時代的には、弥生時代中期の遺構、古墳時代後期の遺構と中世（平安時代末～鎌倉時代）

の遺構に3大別できるが、検出面としてはすべてⅣ層上面である。遺構埋土の状況としては、弥生時代のもものは茶褐色味が強く、他は黒色味が強いという区別がみられた。また、遺構の残存状況からみて、弥生、あるいは古墳時代の遺構は中世～近世以降の水田開墾等のためかなり上部は削平されたものと考えられる。

以下、時代順を追って検出された各遺構について概述してゆきたい。



第8-1図 発掘区平面図（1：2,000）

1. 弥生時代中期の遺構

A. 方形周溝墓

S X 11 破線で復元したように各辺に弥生土器（中期）を多量に含む溝状遺構を検出した。多少大胆なきらいはあるが、B地区での方形周溝墓検出をも考慮に入れて方形周溝墓と判断した。規模はおおよそ東西10m、南北15mとなる。弥生土器は北辺溝、西辺溝で特に多くみられた。また、北辺溝埋土には土器に混じって完形の磨製石剣（18）が検出された。中世遺構等によりかなり全体が削平されていると思われるが、溝の残存深度は40～60cm、南辺は最も深く80～90cmである。長軸方向は約N23°Wである。

B. 溝

S D 29 幅40～60cm、深さ15～30cmの東西に走る溝で、発掘区東壁で途切れる。

S D 33 S D 29にほぼ並行して走る幅30～40cm、深さ15cm余の溝で、弥生土器片を含む。

C. 土壇

S K 9 2m×4m以上の方形土壇で中央部は2段に下がる。S D 10に切られている。

S K 22・28・30・32 いずれも不定形を呈する弥生土器を含む土壇である。S K 22はS K 21に、S K 28はS D 16に、ともに中世遺構に切られている。深さは30～40cmで、特にS K 28には多量の土器が埋土中にみられた。

2. 古墳時代後期の遺構

A. 円形周溝（古墳周溝跡）

S X 1 発掘区北壁際に検出された孤状を呈する溝で、S X 5同様に円形に溝がめぐると考えられる。幅は広い箇所では1.5m余、狭いところで60cm余で、深さは30～60cmで西半分が相対的に深い。遺物は認められない。

S X 5 径8～8.5mの円形に溝がめぐるので、幅1～1.5m、深さ40～60cmである。溝底は平坦で、南半が深い傾向にある。周溝埋土中の遺物としては北西隅で土師器甕（55・56）が2個体重なって出土した他は須恵器杯蓋（54）があるのみである。

S X 8 S X 5の西側に隣接して検出された半円状の溝で、おそらく発掘区壁以西にのびて円形状に

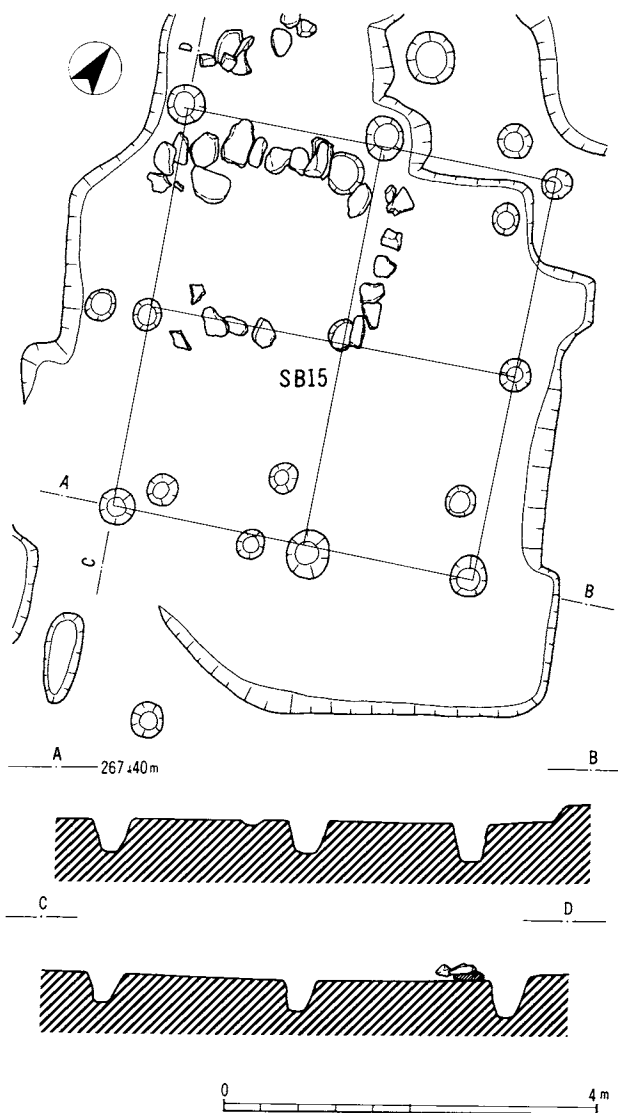
めぐると考えられる。しいて復原すれば径10m余の周溝となりS X 5よりやや、大きいものと思われる。周溝埋土には遺物はみられなかった。

3. 中世（平安時代末～鎌倉時代）の遺構

この時期に相当する遺構は発掘区全体にみられ、数量的にも多い。掘立柱建物、溝が主な遺構で、他に大きさ、形態が様々な土壇がある。各所に散在するピットもこの期のもと考えられるが建物としては1棟しかまとまらない。

A. 掘立柱建物

S B 15 桁行2間×梁行2間（4.2m×3.9m）で南北棟をもつ総柱建物と考えられ、棟方向はN25°Wである。柱間は桁で2.1m等間、梁では東から1.8m、



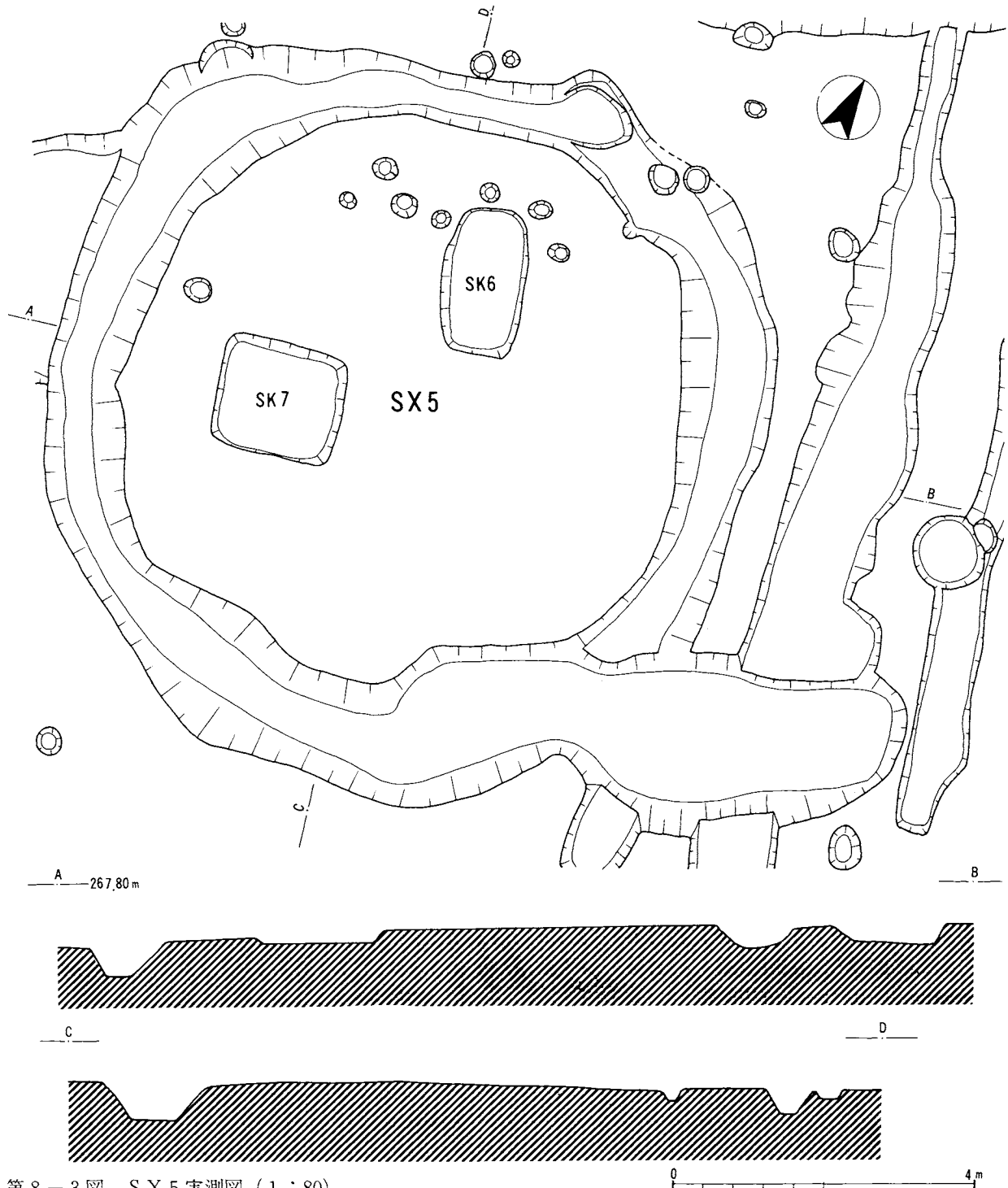
第8-2図 SB15実測図（1：80）

2.1mと不等間となる。柱掘形は円形プランで径30～50cm程度でや、不揃いである。建物北西部（1間分）の床面直上で柱並びに沿うようにコの字形に石列が検出された。建物規模からみても、倉庫的な建物と考えられるが、建物の一部（石列に囲まれた部分）が別の使用目的を有するものなのか、建物の基礎として残存したものか等、その石列の性格については不明と言わざるを得ない。この建物はS K 19の

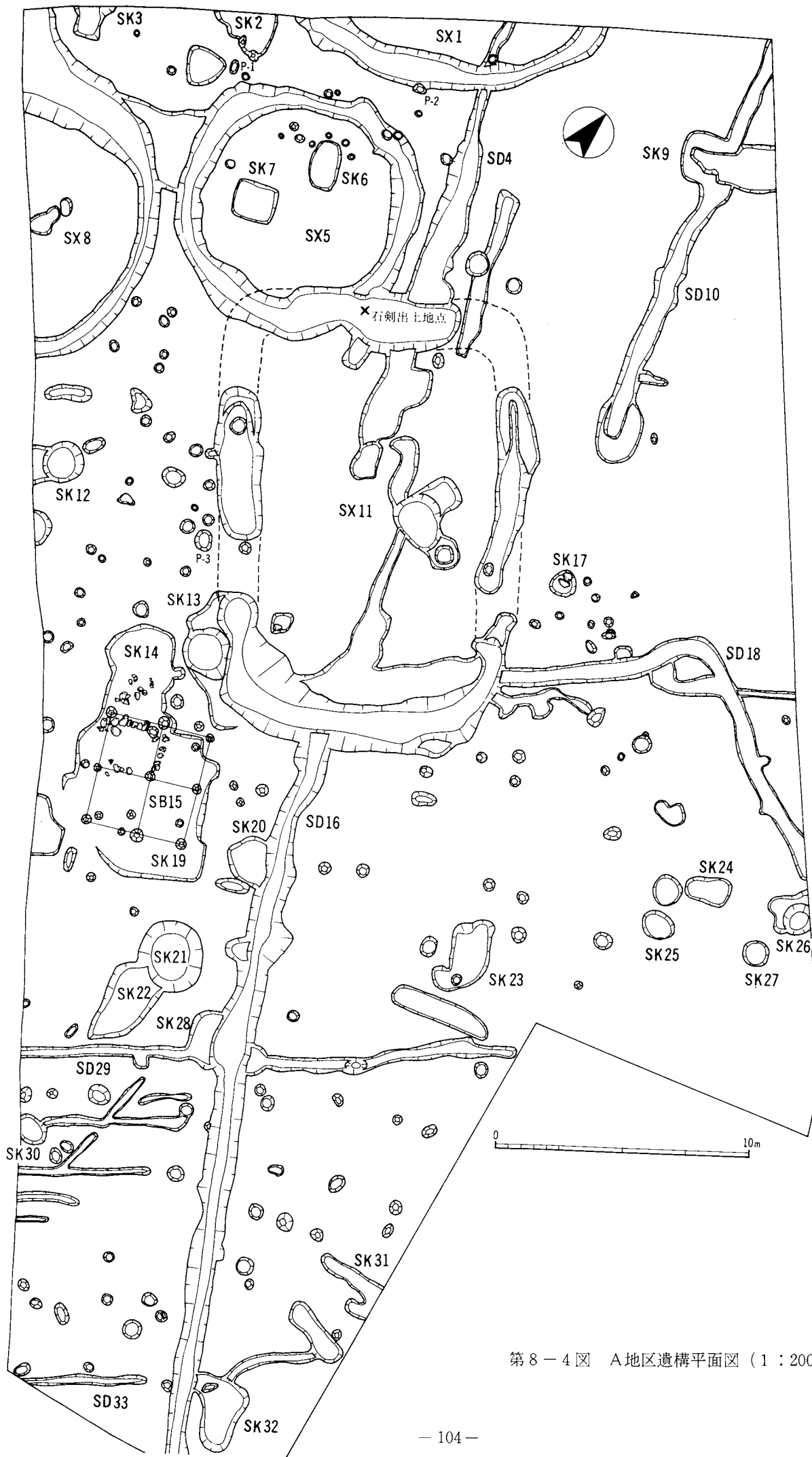
浅い竪穴状遺構に包括された形で検出されており、埋土中には瓦器を中心とした遺物を多く出土している。両者の切り合いは不明である。

B. 溝

S D 4 発掘区北壁の中央部からほぼ西北に走る溝で、南へ18mのところまで浅くなって途切れる。溝幅は北部約6m間は50cm前後と狭く、それ以南については1.2～1.6m余となり広がっている。深さは



第8-3図 SX5実測図(1:80)



第8-4图 A地区遺構平面図 (1:200)

浅いところで15cm余、深いところで30cm前後である。

SD 10 SD 4にほぼ並行して走る発掘区東壁寄りで検出された溝で、南へ約17mのところまで途切れている。幅は60～80cm、深さは15～20cmで底は平坦である。

SD 16 北端と中央や、北寄りで掘形の確認ができなかったが、ほぼ発掘区全体を南北に縦断していた溝と推定される。溝幅は一定ではなく、最も狭い箇所では約40cm、広い箇所では1.2m前後を有する。断面は逆台形状を呈する部分が多く、底は概して平坦である。深さは浅い処で20cm前後、南半は深く40～50cmあり、北から南に向かって緩かに低下している。

SD 18 発掘区の中央東寄りに逆くの字形に検出された溝で幅60～80cm、深さ20cm前後で底は平坦で

ある。

C. 土坑

SK 19 不定形であるが一辺5.6m余、深さ10cm余の浅い竪穴状の掘形をもつ土坑である。SK 14との切り合いは不明である。SB 15の柱穴埋土とは同一であり、SB 15に付随する土坑とも考えられる。

その他、柱穴以外の使用目的が考えられる様々の穴状遺構がある。形状としては不定形なもの(SK 2・SK 3・SK 13・SK 14・SK 23・SK 24・SK 20)、ほぼ円形を呈するもの(SK 12・SK 17・SK 25～27)、方形を呈するもの(SK 6、7・SK 9)等がある。いずれも遺物(瓦器片を中心に)を少量含むが、性格については不明である。

2. 遺物

A地区から出土した遺物はそのほとんどが土器類で他に若干の石製品(磨製石剣・石斧)がある。種類としては弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、山茶碗、陶器に分けられ、時代的には弥生時代中期、古墳時代後期、中世(平安時代末)以降に区分することができる。以下、ここでは遺構伴出の主な土器を中心として時代順に個々概述してゆきたい。

A. 弥生時代中期の遺物

1. SX 11出土の土器と石製品

壺型土器A (1～3) ラップ状に開く口縁部は外反して、端部が下方に垂れ下がる広口壺である。3の口縁端部は上下に肥厚する。1は縦位のハケメの後、頸部に5条の深いヘラミガキ沈線をもつ。口縁端面は4本単位の櫛状工具による列点文、内端面には竹管による円形浮文(3個単位に4ヶ所)を飾る。3は頸部に原体10本単位の簾状文を2帯、体部上半は櫛描きによる横線帯を形成し、最下段は波状文で飾り、体部下半はヘラミガキされる。両者は文様構成、手法を異にし、系統的にもA-a類(3)とA-b類(1)と区分できる。1は茶褐色を呈し、3は白っぽい肌褐色で色調は全く異なる。(2)はいわゆる細頸壺の形態を有する形態とも考えられるが、体部上半の文様構成は壺A-a類と同一である。下

半部は磨耗のため調整手法は不明である。底部に程近いところに穿孔(焼成後)がみられる。

壺型土器B (4・5) 小ぶりの短頸壺で卵形をした体部から口頸部は外反してのび、口縁部がわずかに立ち上るもの(4)と短く直立するもの(5)に分けられる。全体に縦位・斜位のハケメを施したのち、口縁部外面は(4)では櫛描きによる横線文、(5)では波状文という差をもつが、以下の文様構成はほぼ同一である。色調は黄味をおびた灰褐色を呈し、胎土には金雲母片の他、砂粒を少量含む。

甕型土器A (6～9) 丸味をもって外反する口頸部から口縁部が上方に立ち上るいわゆる受口状口縁をもつ甕である。口縁端部以下の外面は斜位の細かいハケメを多用し、内面は横位の粗いハケメの多用という点で手法的にほぼ共通するものであるが、肩部を櫛状工具によって列点文で飾るもの(6・9)とヘラ描き沈線で飾るもの(7・8)に分けられる。外面は口縁端部以下に煤の付着がみられる。色調は黄白味をおびた淡褐色を呈し胎土には金雲母片の他砂粒を多く含む。

甕型土器B (10・11) ゆるやかに外反する口縁部をもち、外面口縁部以下は斜位のハケメ調整で仕上げられ、肩部に1～2帯の7～8本単位櫛描き横線文、あるいは波状文が施されるものである。口縁部

内面には横位の粗いハケメがみられ、端部は無施文のもの(10)と両端に連続刻目文を施すもの(11)がある。口縁部内面は横位の粗いハケメがみられる。

甕型土器C(12・13・15) 15は甕Bと同一の流れの中に置かれるもので、肩部に櫛描き横線が施されており、Bとの違いは刺突文の多用である。13では頸部ヘラ状工具による連続刺突文がみられる。口縁端部にはヘラ状工具による連続刻目文が施される。12はくの字状に強く外反する口縁部をもち、端部は面をつくり、ヘラ状工具による刻目がみられる。外面は斜位の細いハケメ調整がみられ、口縁部内面には横位の粗いハケメが施され、畿内的な色彩の強いものである。

甕型土器D(16) 厚い器壁でゆるやかに外反する口縁部は短くのび端部はやや肥厚する。端部の両端に連続した粗い刻目文を施す。口縁部外面は縦位、以下は斜位のハケメののち、くびれ部は斜格子状に、肩部に斜状に櫛状工具による列点文が施される。口縁部内面は粗い横位のハケメで、以下はナデつけられて器壁をうすく仕上げている。肌色に近い淡茶褐色を呈し、胎土には金雲母片の他、砂粒と石粒を多く含む。

大型蛤刃石斧(17) 刃部を含む両端部を欠くが磨製石斧の体部と考えられる。長さ12~13cm内外、幅5cm内外、厚みは3.2cm余で、淡緑灰色の色調をもち、片麻岩製と考えられる。

磨製石剣(18) いわゆる鉄剣形の磨製石剣で完形である。長さ17.9cm、中心部で幅2.4cmである。サヌカイトに似た色調と石質であるが断定し難い。

2. SK 28出土の土器

壺型土器A(19~23・39~41) 筒状の頸部から口縁部がラッパ状に開く広口壺でSX11でのb類の前身的なものと考えられる。口縁端部は上下に肥厚するもの(19~21)と下方に肥厚するもの(22・23)に分けられる。口縁部内面に瘤状突起がみられるものが多く、23では刻目を施した小さな棒状浮文が3ヶ所に貼り付けられる。口縁端面は、貝殻腹縁による連続圧痕を施すもの(19・20)、櫛状工具によって連続刺突文を施すもの(21・23)の他、一条の凹線がみられるもの(22)がある。さらに16では十字状、20では細い棒状浮文(2個1単位)が貼り付けられ

る。口縁部以下の外面は基本的に縦位、斜位のハケメが施され、その後、頸部に2条以上のヘラ描き沈線文がみられるが、22では不明である。18の頸部下には突帯をもち、その上にはさらに櫛状工具による連続刺突文が施されている。21・23は明褐色を呈し、他はくすんだ茶褐色を呈し、いずれも砂粒を多く含む胎土である。41は胴上半部破片でヘラ描き沈線によって横位に何分画か区画して縄文帯と無文帯(ヘラミガキ)を構成している。39~41は小破片であり、壺Cに属するかもしれない。

壺型土器C(24・25) 壺型土器Bの口縁部に近い頸部が長い形態をもつ。ゆるやかに外反して立つ頸部から、口縁部はやや内弯気味に立ち、受口状の口縁を形成する。口縁部外面は21では粗雑な櫛描き横線、25では櫛状工具による列点文がみられる。頸部は櫛描き横線を施すもの(24)、斜位のハケメを施すもの(25)とに分けられる。

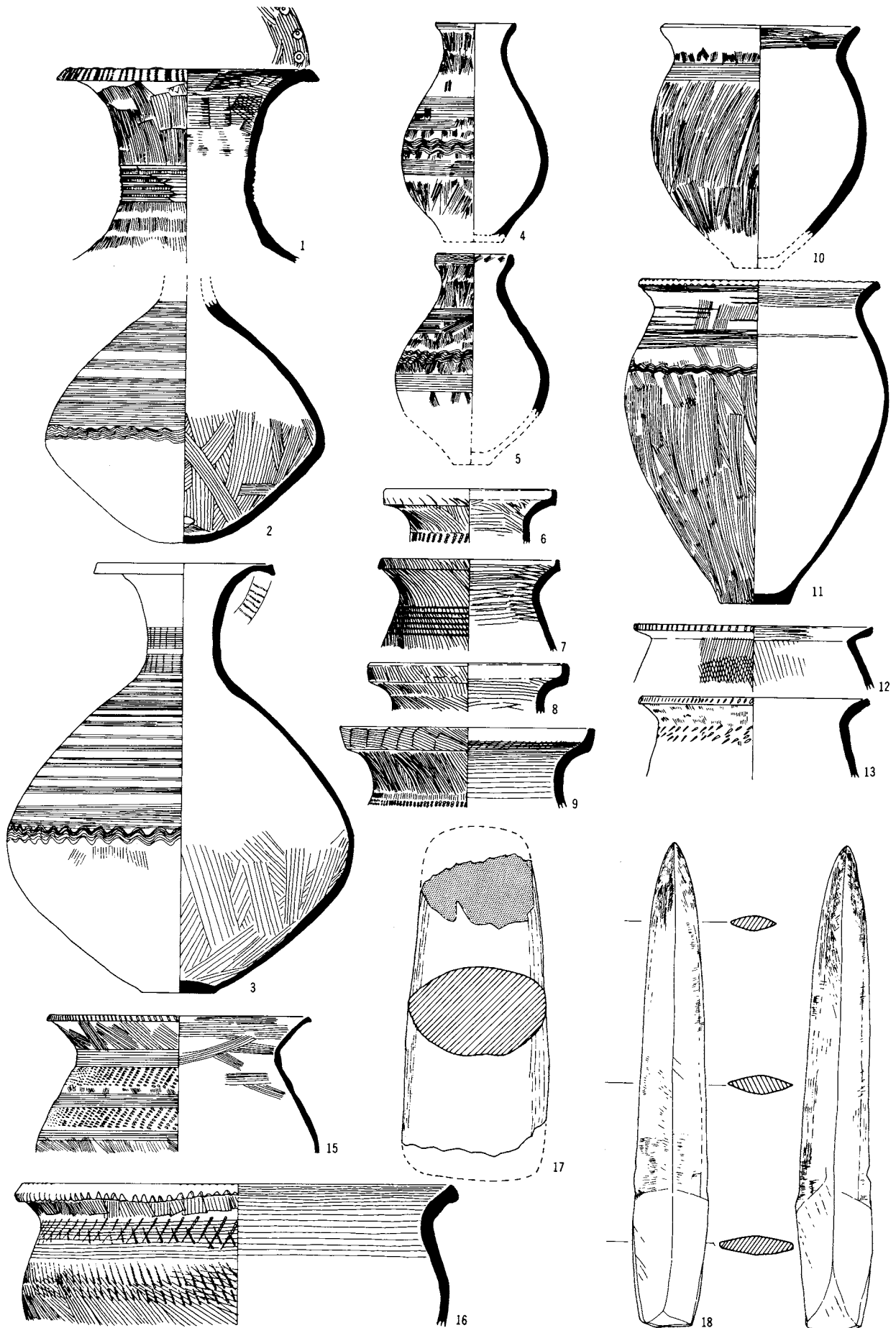
壺型土器D(26~29) 受口状の口縁を有する壺で、口縁端部を斜位、あるいは斜格子状に櫛状工具によって連続した列点文をつくるもの(26・27・29)と棒状工具によって刺突文をつくるもの(28)に分けられる。さらにその上から、24では竹管による連続刺突文がみられる。口縁部下端(稜部)に27・29では2~3本単位の櫛状工具による刻目状の刺文、29ではヘラ状工具による深い連続刻目文が施されている。頸部以下は外面全体を斜位にハケメ調整したのち、26では頸部2~3本単位、29では肩部に7~8本単位の櫛状工具による横線文がみられる。

色調は黄白味をおびた淡褐色を呈し、24を除いて、金雲母片他、砂粒が多い粗い胎土である。

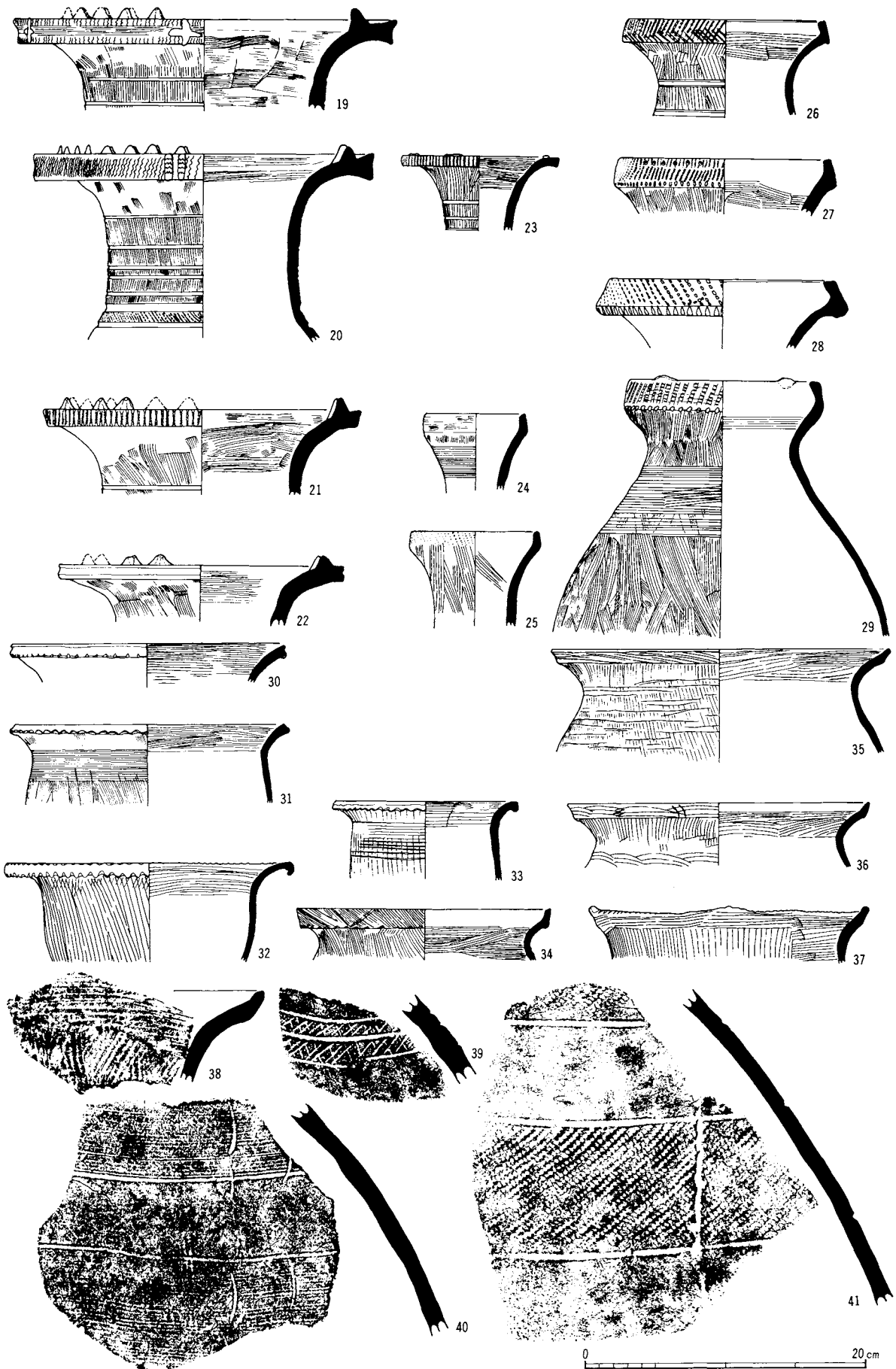
甕型土器B(30・31) 口縁部がゆるやかに外反する形態で、いずれも口縁部下端(32では両端)にヘラ状工具による刻目文をもつものである。

口縁部内面をハケメ調整する点は共通している。斜位のハケメののち、31では肩部に櫛描き横線がみられる。30の胎土は砂粒が多いが、31では緻密である。

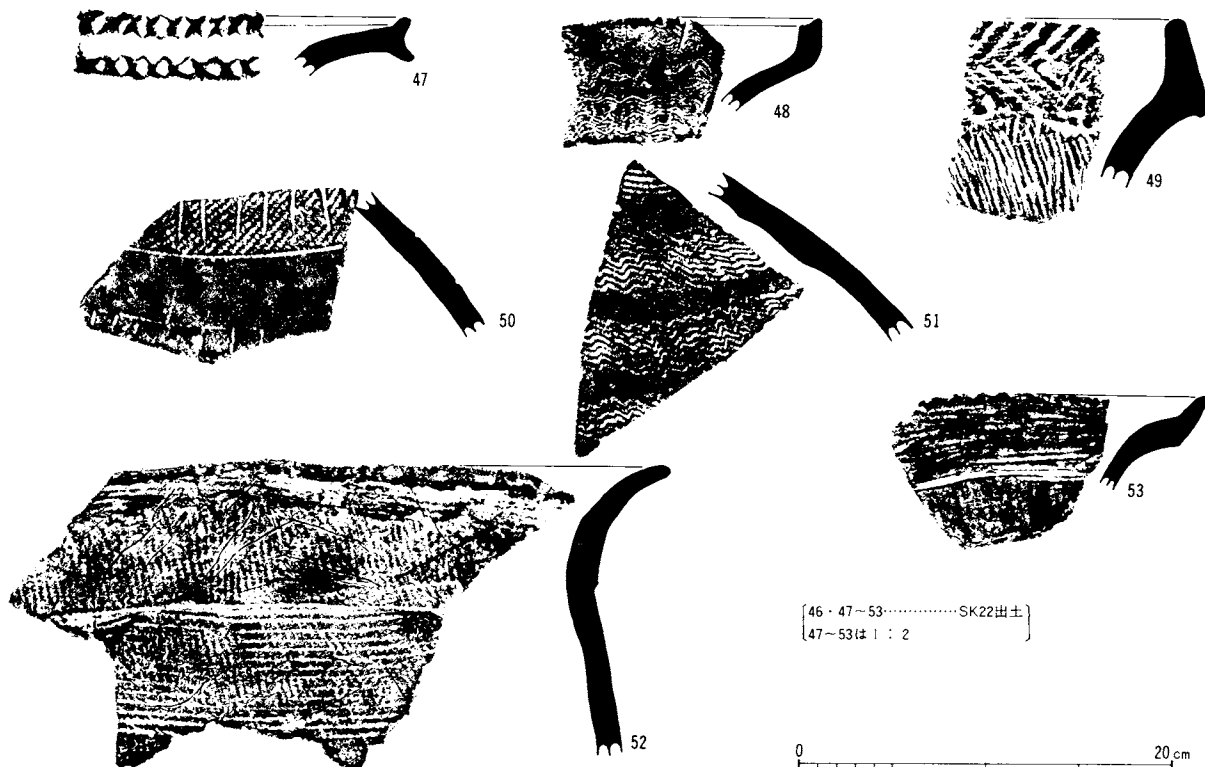
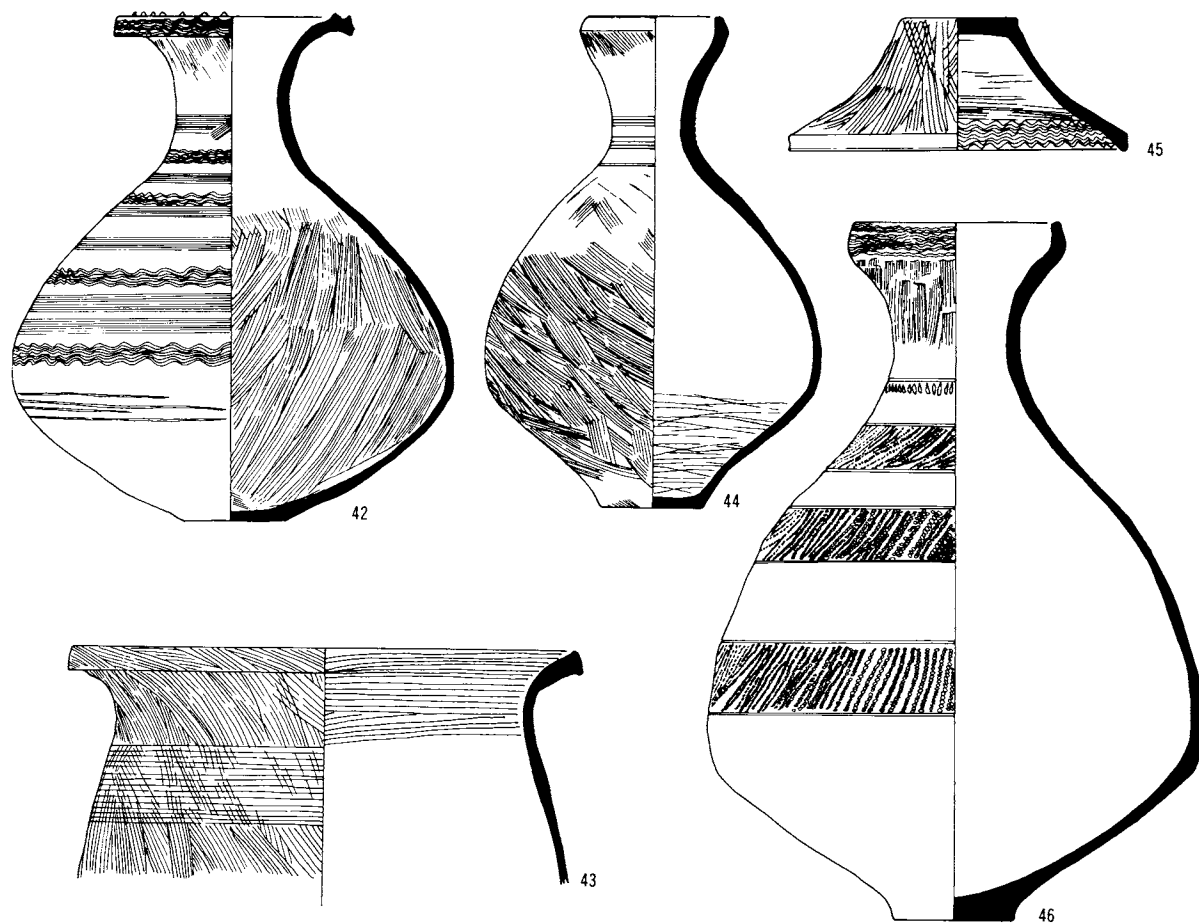
甕型土器E(32・33) ゆるやかに外反する口縁部から端部は水平、あるいは下方に垂れ下がるもので、32では端部の両端、33では下端に刻目を施す。外面は縦位のハケメののち、33では肩部に4条のヘ



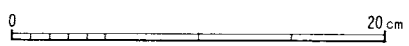
第 8 - 5 図 S X 11 周溝出土土器実測図(1 : 4) 17・18は(1 : 2) 0 20cm



第 8 - 6 図 SK28出土土器実測図(1 : 4) 38~41は (1 : 2)



[46 - 47 - 53 SK22出土]
[47 - 53 1 : 2]



第 8 - 7 图 SK22、包含层出土土器实测图(1 : 4)

ラ描き沈線文がみられる。

甕型土器 F (34~38) 34はやや形態を異にするが口縁端部が上方、あるいは斜め上に立ち上る受口状口縁をもつ甕で甕Aほど口縁部は直立しない。口縁端部は横位、斜位のハケメ、以下は縦位の細かいハケメが見られる。34は口縁端部立ち上りが垂直に近くやや後出と考えられる。38の口縁部は波状となり頸部から外反して立ちあがる口縁部外面には斜位の粗いハケメがみられる。

3. S K 22出土の土器

壺型土器 A (47・50・51) 47は口縁部のみ、50・51は体部の一部と考えられる。47では口縁端部の両端にヘラ状工具による刻目がみられる。50ではヘラ描きによって横位に区画され、縄文帯と無文帯（ヘラミガキ）がみられ、縄文帯の上はさらに縦位のヘラ描きが施されている。50は壺Cの形態をとるかもしれない。

壺型土器 C (46・48) 46はほぼ完形品で直立する口縁部外面には稚拙な波状文、体部上半は、帯状にヘラ描き沈線で区画された縄文帯（3帯）が構成されている。縄文帯の間の素文帯の部分にはヘラミガキがみられる。

壺型土器 D (49) 幅広い口縁端部には櫛状工具による稜杉状に列点文がみられ、以下は縦位の粗いハケメがみられる。

甕型土器 B (52) ゆるやかに外反する口縁部はそのまま丸くおさまる。口縁部外面は縦位のハケメ、肩部は16本単位の櫛状工具による横線が施される。内面は口縁部以下に横位の粗いハケメがみられる。白っぽい淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

甕型土器 F (53) 口縁端部は外反して立ち上り頸部との境に明瞭な稜をもつ。端部には斜位の粗いハケメがみられる。くすんだ黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

4. その他出土の土器

壺型土器 A (42) 完形品で、a類に属し口縁部がラッパ状に開く広口壺である。口縁端部は上下に肥厚し、端面には波状文、上端には瘤状突起が施される。頸部以下、体部上半にいたるまでは櫛描きによる横線文と波状文の文様帯を構成している。体下半はヘラミガキされる。淡褐色を呈し、胎土は精緻

である。

壺型土器 C (41) やや幅広の2本単位の櫛状工具による横線文を頸部にめぐらし、体部は底にいたるまで粗い斜位のハケメ調整がみられる。

蓋 (45) 平坦な天井部から八の字形のひろがるすそ部から端部は外方に面をつくる。口縁部内面には8本単位の櫛描き波状文がみられる。

甕型土器 G (43) く字形に外反する口縁部は端部にいたるほど肥厚し面をつくる。口縁端面以下斜位のハケメが施され、肩部にはそののち13本単位の櫛描横線を施す。口縁部内面は横位の粗いハケメがみられる。

B. 古墳時代後期の土器

1. S X 5 出土の土器

(1) 須恵器

杯蓋 (54) 天井部の一部を欠くが、口径11.6cm、器高4.3cmの杯蓋である。垂直気味の口縁部から端部はわずかに内弯し、内側に鋭い段を有し最端部は斜め下方に突き出す。天井部は約90°範囲にロクロケズリがみられる。ロクロ転左廻りである。色調は青灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。

(2) 土師器

甕A (55) いわゆるS字甕の退化型式と考えられ、く字形に外反する短い口縁部から端部は上方に幅広い面をつくる。外面は口縁部以下、体部下半に至るまで粗いハケメ調整が施されている。内面はナデ調整されているが、各所にユビオサエによる指頭圧痕もみられる。台形状の脚台が付くものである。

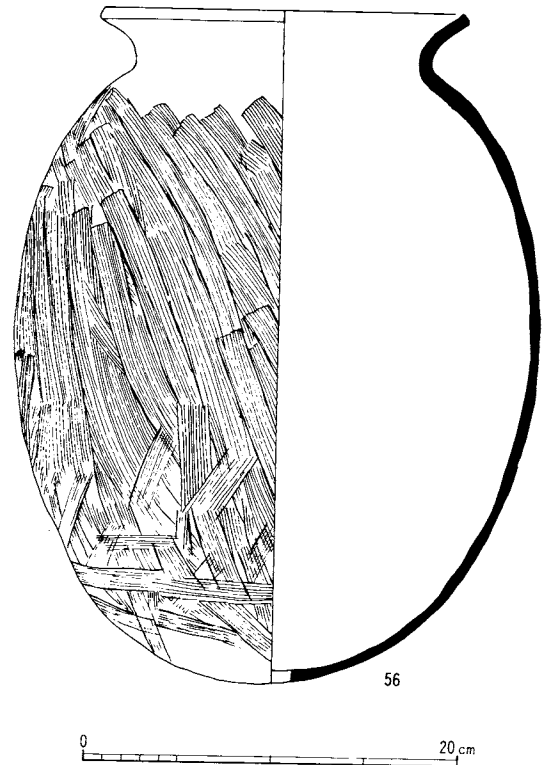
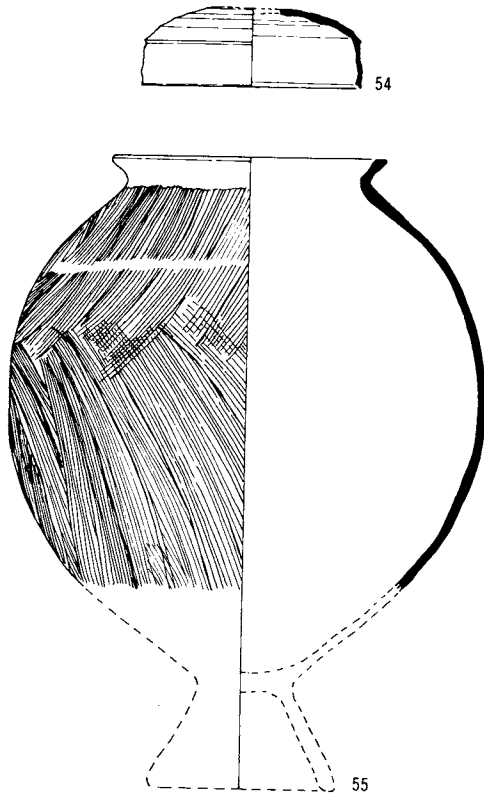
甕B (56) 長胴甕で、く字形に外反する口縁部から端部はやや上方に肥厚しておさまる。

体部外面の全体に斜めハケメがみられるが、底部に近い部分のハケメの方向は不定である。赤味をおびた茶褐色を呈し、胎土は緻密である。底部には焼成後に施された穿孔が1孔みられる。

C. 中世の遺物

1. Pit 2 出土の土器

瓦器椀 (57) 口径12.2cm、器高2.9cm余の浅い椀片で、高台が消失した時期のものと考えられる。口縁部外面は強くヨコナデされ、内側に面をつくる。



第8-8図 SX5周溝出土土器実測図(1:4)

体部はユビオサエによる指頭圧痕が残ったままで、ヘラミガキはみられない。内側は粗いヘラミガキが残る。

常滑甕 (58) 小片であるが口径61cm余に復元できるN字状口縁をもつ常滑焼の甕で、口縁～肩部と考えられる。内外面とも全体にヨコナデ調整され、内面下半のナデはナデつけという感じで凹凸をのこす。色調は黒褐色を呈し、硬く焼き締められている。

2. Pit 3 出土の土器

瓦器椀 (59) なだらかに立ち上る体部から口縁部は直立気味に立ち上り、口縁部と体部との境は明瞭で鈍い稜をもつ。口縁部外面はヨコナデ、以下は未調整で、指頭圧痕を残す。内面には粗間隔のヘラミガキがみられる。口径は13.8cm余である。

土師器鍋 (60) 折り返し口縁をもち、その内側に凹状の面を有する鍋の口縁部片で、口径31cm余に復元できる。内外面ともにヨコナデ調整される。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。

3. SD 4 出土の土器

瓦器椀 (63) 口径12.5cm、3.0cmの高台のない浅椀形態で、口縁部はなだらかな体部からやや直立気味に外反する。口縁端部内側には一条の沈線が走

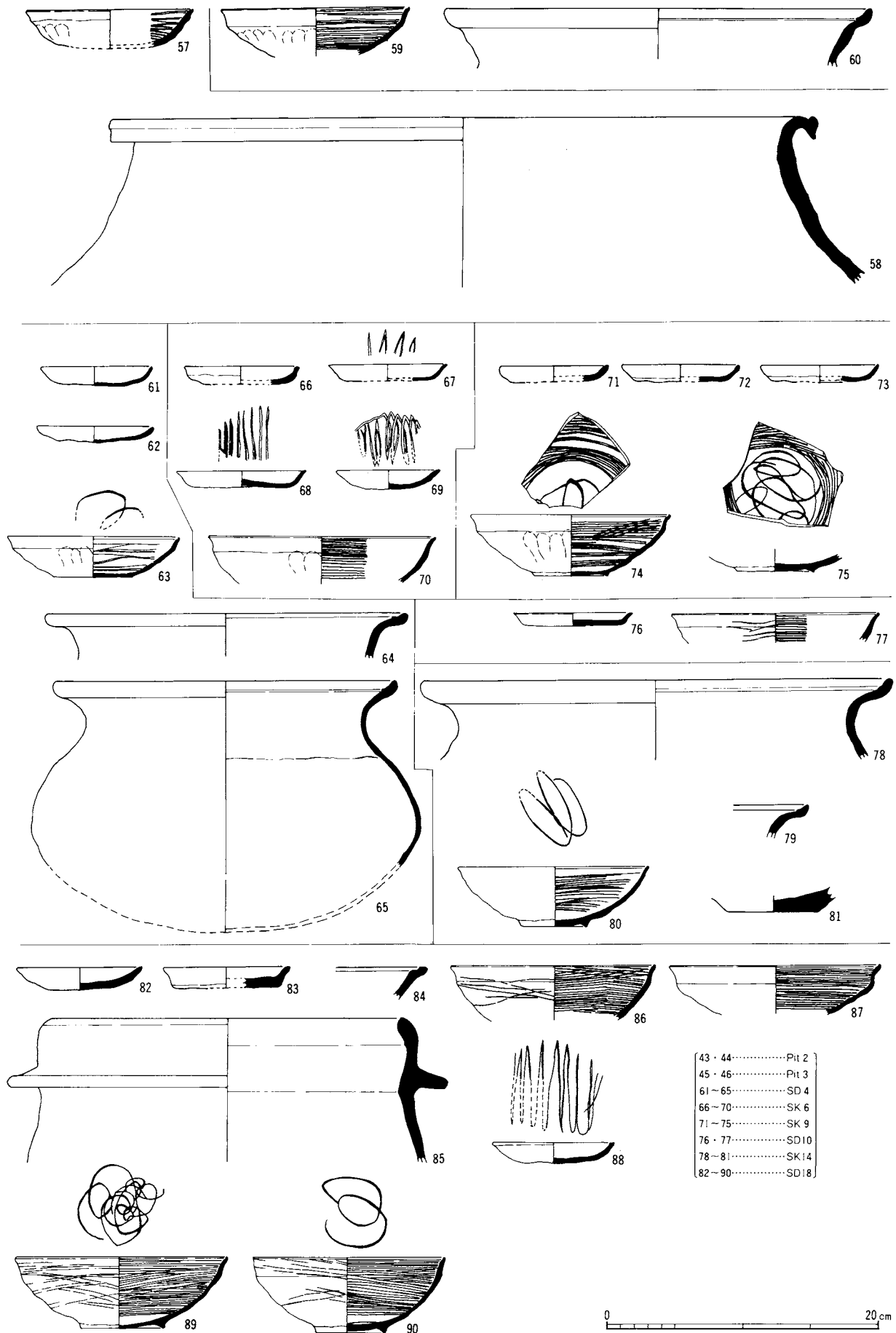
る。口縁部外面はヨコナデされ、以下は未調整で指頭圧痕が残る。内面は粗間隔のヘラミガキの他、内底部にらせん暗文の一部がみられるが、破片のため全体が不明である。

土師器小皿 (61・62) 薄手の小皿で、内面はいずれもナデ調整、外面は61では口縁部のみ、62では端部のみに不徹底なヨコナデがみられる。以下は未調整でユビオサエによる凹凸が目立つ。色調は白っぽい褐色を呈し、胎土は精良である。口径、器高はそれぞれ、8.2cm、8.6cmと1.5cm、1.2cmである。

土師器鍋 (64・65) 扁平球状の体部から口頸部は外反し、口縁部はその端部を内側に折り返されて面を形成する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、65では体部内面はヘラケズリされている。外面は未調整でオサエによる凹凸、指頭圧痕がみられる。両者ともに外面(体部から口縁端にかけて)に煤が付着している。色調は淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口径は25~27cmである。

4. SK 6 出土の土器

瓦器小皿 (67~69) 67・69は口縁部と底部との境が明瞭で外反してのびるが、69は底部から浅い椀状に口縁部がのびる。いずれも口縁部内外面はヨコ



第8—9图 土器实测图

ナデされ、内底部にはジグザグ状の暗文がみとめられるが破片であるため全容が不明確である。口径は各々、8.6cm、9.0cm、7.4cmで、器高は1.2～1.4cm前後と推定できる。

瓦器碗 (70) 口径16.6cmの碗で、口縁部外面は強くヨコナデされ、口縁端部内面に沈線が走る。以下の外面は未調整で凹凸が目立ち、指頭圧痕が認められる。内面のヘラミガキは口縁部付近で密に、以下は粗いミガキが施される。

土師器小皿 (66) 厚手の小皿で口縁部は直立気味に立ち上り、器壁は底部に比べて薄くなる。内面はナデられ、外面は口縁部がヨコナデ、以下は未調整で凹凸が残る。色調はくすんだ淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径8.6cm、器高1.4cm余である。

5. SK 9 出土の土器

瓦器碗 (74・75) 74は口径14.8cm、器高4.6cmで退化した逆三角形の極小の高台をもつ碗である。口縁部には強いヨコナデがみられ、口縁端部の内面に沈線が走る。体部の外面は未調整でユビオサエによる指頭圧痕が明瞭にのこる。底部の高台貼り付け部はヨコナデされ、中央部は乱ナデされている。内底部にはらせん状暗文がみられるが、破片のため全容は不明である。75は底部から体部の一部を残す破片で、小さな逆三角形の高台がみられる。体部外面はオサエの跡がみられ、高台貼り付け部はヨコナデされている。内面はヘラミガキと、内底部にらせん暗文が施されている。

土師器小皿 (71～73) 口径8.0cm、8.4cm、8.6cm、器高1.3cm前後の小皿で、71は厚手、72・73は薄手である。内面はナデ調整、外面は口縁部がヨコナデ、底部は未調整でユビオサエによる凹凸を残すという調整技法の点では共通している。色調は57が黄色味の強い淡褐色、他はくすんだ茶褐色を呈す。

6. SD 10 出土の土器

瓦器碗 (77) 細片で口径15cm余と推定される。口縁部はヨコナデされ、端部内面に沈線が走る。口縁部外面から体部にかけて粗いヘラミガキがみとめられる。

土師器小皿 (76) 比較的厚手の皿で、平らな底部から口縁部は外反して立ち上る。口縁部内外面は

ヨコナデされ、内面はナデのあと一方向の仕上げナデが認められる。底部は未調整でユビオサエの凹凸が残る。口径8.5cm、器高1.9cmで色調は明褐色を呈し砂粒を少量含む。

7. SK 14 出土の土器

瓦器碗 (80) 口径13.9cm、器高4.4cm余で、口縁部と体部の境の不明瞭な丸味をもった碗で、小さな逆三角形の高台をもつ。口縁部はヨコナデされ、体部外面はユビオサエによる凹凸が残る。内面には粗いヘラミガキが施され、内底部には簡略化したらせん暗文がみられる。

土師器鍋 (78・79) 折り返し口縁をもつ鍋の口頸部で、78は極細片、64は口径34.6cmに復元できる。色調は淡茶褐色で両者ともに胎土には砂粒を多く含む。

山茶碗 (81) 底部のみ残すもので、高台はみられない。外底部には糸切り痕が明瞭にみられる。灰色を呈し、砂粒を含む粗い胎土である。

8. SD 18 出土の土器

瓦器碗 (86・87・89・90) 口縁端部内面に沈線をもつ点は共通するが、外面にヘラミガキが施されるもの(86・89・90)と施されないもの(87)に分けられる。87は口縁部を強くヨコナデされており、体部との境に鈍い稜を形成する。口縁端部内面に一条の沈線が走る。口縁部はヨコナデされるが、以下は未調整で凹凸を残す。口径15.4cm、器高は低い。86・89・90は体部から口縁部にかけて粗いヘラミガキがみられる。89の内底部には複雑な連続輪状暗文76には一輪の輪状暗文が施される。89・90の口径、器高はそれぞれ、15.4cm、5.2cmと14.2cmと5.5cmである。

瓦器小皿 (88) 口径9.0cm、器高1.5cmの小皿で、口縁部は外反して立ち上り、端部は上方に凹状の面をつくる。口縁部は内外面にヨコナデされるが外面の口縁部以下は未調整で指頭圧痕と凹凸が目立つ。内面にはジグザグ状暗文が施されている。

伊賀鉢 (84) 小片であるが、外反してのびる口縁部から端部は丸くおさまり、内面に幅広の沈線が一条走る。赤味がかかった褐色を呈し、胎土には石粒を少量含む。

土師器小皿 (82・83) いずれも厚手の小皿であ

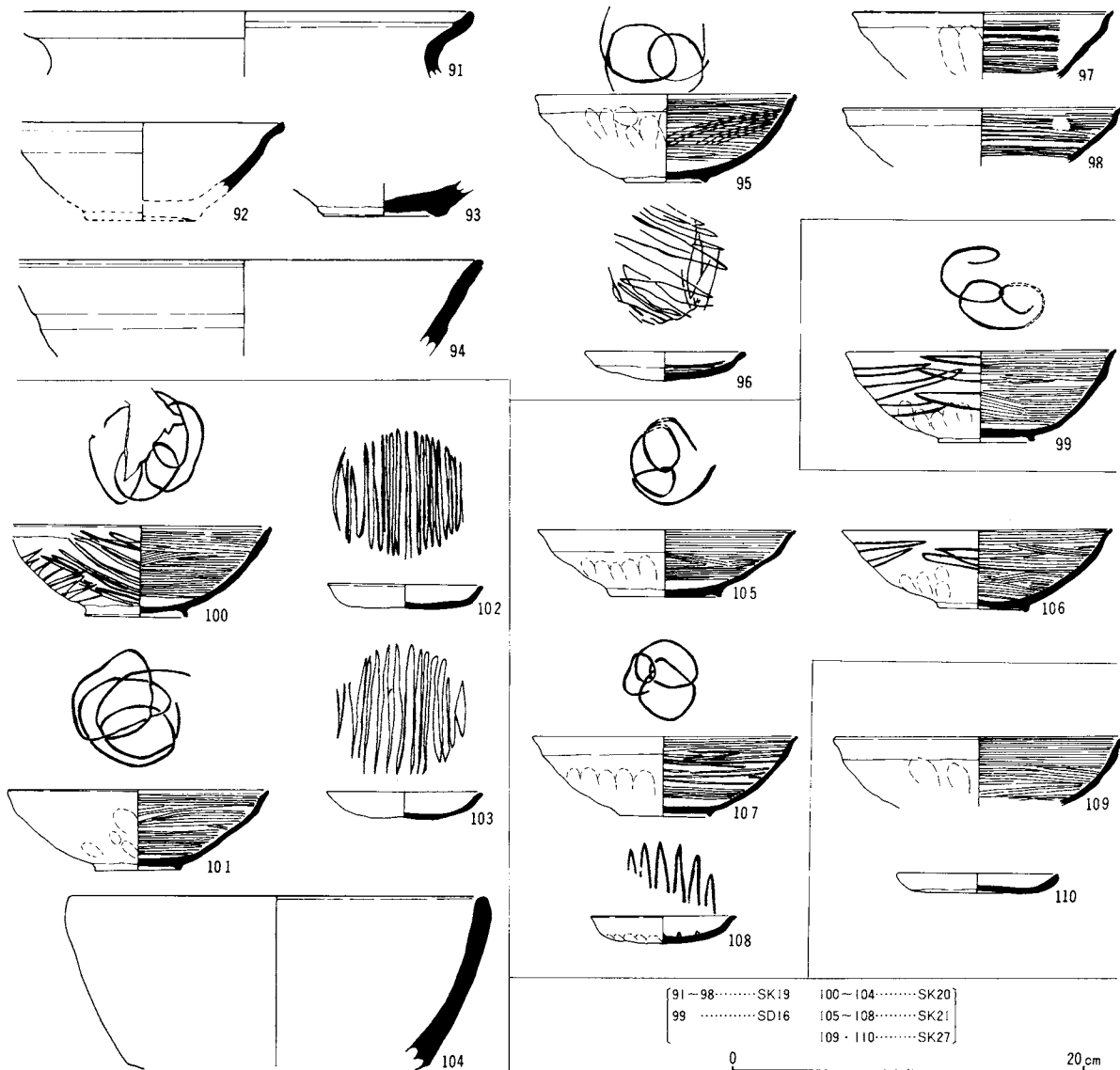
るが、形態的に異なる。82は底部から口縁部までゆるやかに立ち上り、83では平らな底部から口縁部は外反してのびる。内面はナデ調整、外面の口縁部はヨコナデされるが、底部は未調整でオサエによる凹凸がみられ、技法的には共通している。色調はいずれもくすんだ茶褐色を呈し、胎土は比較的精良である。口径・器高はそれぞれ、9.0cm、1.6cmと 9.2cm、1.6cmである。

土師器釜 (85) 口径26cm余の羽釜の上半部で、口縁部は内湾して立ち上り端部は丸くおさまる。口縁部内外面と鏝はヨコナデ調整され、体部は外面がナデ、内面には細いハケメがみられる。また、体部内面にはコゲの付着がみられる。茶褐色を呈し、砂粒を含み、特に金雲母片の含有が目立つ。

9. SK 19出土の土器

瓦器椀 (95・97・98) いずれも口縁端部の内側に沈線が走る。口縁部はヨコナデされ、内面はヨコナデの後、ヘラミガキされている。97・98は不明であるが、95の内底部には二輪の連結輪状暗文がみられる。95の高台は小さな逆三角形を呈する貼付高台で、内側部にはハケメによる調整がのこる。口縁部以下の体部外面はいずれも未調整でユビオサエによる凹凸、指頭圧痕が残る。95は口径14.8cm、器高2.5cm、83・84はそれぞれ口径14.7cm、15.8cmである。

瓦器小皿 (96) 口径9cm、器高1.7cmの小辺で口縁部は強くヨコナデされて外反し、端部は水平近くにのびる。口縁部はヨコナデされるか、外面は以下未調整でユビオサエによる凹凸がみられる。内底



第8-10図 土器実測図 (1:4)

部にはジグザグ状暗文が施される。

土師器鍋 (91) 小片であるが、口径26cm余に復元できる折り返し口縁をもつ鍋の口縁部である。口縁部は内外面ともにヨコナデされている。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

山茶椀 (92・93) 92は直線的にのびる体部から口縁部は外反し、端部は外側にやや丸味の残る面をもつ。口径16cm余、高台は不明であるが逆三角形の高台をもつものと推定される。93は底部のみ残すもので、逆台形状の高台をもつ。外底部の糸切痕はナデによって消されている。

山茶椀系鉢 (94) 口径27cm前後と推定できる鉢の口縁部で、直線状にのびる体部から口縁部へとつづき、端部はやや器壁が薄くなって丸くおさめる。端部の外面に一条の沈線が走る。色調は山茶椀に類似した白灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

10. S K 16出土の土器

瓦器椀 (99) 内底部に3輪単位の連結輪状暗文がみられ、外面のヘラミガキは粗く4分割に施される。

11. S K 20出土の土器

瓦器椀 (100・101) 100は口径14.8cm、器高5.2cmで丸みをもつ体部から口縁部はそのまのび端部は内側に沈線が走る段状となる。高台は器壁の薄い角高台をもつ。口縁部はヨコナデされ、その後、内面全体はヘラミガキされるが、外面のミガキは粗く4分割で順追って施されている。内底部には4輪の連結輪状暗文がみられる。101は100にくらべて体部は直線化しており、口縁部はやや立ち上り気味で体部との境に鈍い稜をつくる。外面のヘラミガキはみられず、口縁部以下はユビオサエによる凹凸をのこす。内底部には連結輪状暗文が施されている。口径14.8cm、器高4.6cmである。

瓦器小皿 (102・103) いずれも口径8.8cm、器高は各々1.3cm、1.5cmで103がやや深い皿である。底部から口縁部は外反してのびるが、102では底部口縁部との境がより明瞭である。口縁部は内外面ともヨコナデされるが底部は基本的に未調整でユビオサエによる圧痕がのこるが、断片的に不徹底なナデの跡も残る。内底部にはジグザグ状暗文が施されているが、102の方がその間隔は密である。

陶器鉢 (104) 細片であるが、口径24cm前後、

器高11~12cm余と推定される鉢である。内弯気味に丸味をもって立つ体部から口縁部はほぼ直立し端部は上方に面をつくる。全体にロクロナデがみられるが、体部から底部への境は明瞭な稜をつくり、その部分はナデられている。くすんだ淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

12. S K 21出土の土器

瓦器椀 (105・107) 内底部に簡略化した連結輪状暗文がみられる。外面のミガキは106では若干残るが105・107ではみられない。105・106の内面のミガキに比べ107ではさらにその間隔が広くなる。

瓦器小皿 (108) 外反する口縁部から端部は水平にのびる。内面にはジグザグ状暗文がみられる。外面、口縁部はヨコナデされるが、以下は未調整でユビオサエによる凹凸がよくのこる。

13. S K 27出土の土器

土師器小皿 (110) 口径9cm余、器高1.1cm余の小皿で、内面はナデられ、外面は口縁部をヨコナデ以下は未調整である。

瓦器椀 (109) 底部を欠くもので、外面のミガキはみられず、ユビオサエの凹凸をのこす。

以上、ここにあげた遺構伴出の土器はすべて瓦器を伴っている。また、Pit3、SD4、SK14、SK19では伊賀では初例と考えられる形態をもつ土師器鍋を検出しており、これについては若干、結語でのべたい。伊賀の瓦器は口縁端部の内側に沈線をもち、系統的には大和型の瓦器に入るものと思われる。しかし、外面のヘラミガキを大和より早い時期に消失する点、あるいは、体部の立ち上り等、形態的にも多少の相違がみられる点も事実である。ここで各遺構のおよその年代をのべると、12世紀後半~末頃(SK6・SK9・SD10・SD18・SD16・SK20・SK21・SK27)、13世紀前半~中頃(Pit3、SK14・SK19)、13世紀後半(SD4)と14世紀前半(Pit2)に大まかに区分できよう。しかし、これはあくまでも大和型瓦器を指標にしての推定年代であり、今後、その年代幅が変更されることは十分予想できるところである。

B 地区

1. 遺 構

須原から富永にかけては服部川左岸に形成された平坦な段丘が広がり、付近一帯は弥生時代～鎌倉時代にかけての良好な遺物散布地となっている。B地区は、A地区から東へ約80m 富永よりの県道脇である。標高268mほどで、現況は水田である。行政上大山田村富永字北切に属する。A地区同様、圃場整備の工法上、包含層下まで削平する箇所を中心に40×80mの範囲で発掘調査を行なった。

調査の結果、表土下30～60cmで遺構面である淡褐色砂質土の地山層に達する。調査区の北側では、表土から遺構面まで浅く、南に進むにしたがって深くなる。暗褐色弱粘質土の遺物包含層も北側では薄く、南へ向かって徐々に厚くなる。地山は南に向かってゆるやかに傾斜していることなどが判明した。遺構密度は全般的に少なく、また、遺物を伴う遺構も少なかった。遺構は北側に多く、南に向かって徐々に少なくなる。遺跡の中心は、県道をこえた北側の一段高まった畑地、さらには東側へもひろがるものと想定される。また、幅10～15cm、深さ5～10cmの溝がほぼ同一方向に、あるいは直交して数十条検出された。埋土は他の遺構と比して黒くて軟質で遺物も混入と思われる瓦器片が少量出土したのみである。これは、近世以後の耕作にともなうものと考えられる。以下、主要遺構について述べる。

弥生時代の遺構

S X 1 方形周溝墓、一辺19.0×19.5m、隅丸で各辺ともややふくらみをもつ、中央の主体部は、近世以後の耕作によって削平され、盛土・土壇等の痕跡を欠く。周溝部は幅2.7～3.6m、下底幅0.4～0.6m、深さ0.9～1.2m。側壁はゆるやかな傾斜をもつ。遺物は弥生中期後半の大型壺(1～6)が東・南・西の溝底から出土した。そのうち(1)は胴部と底部に、(6)は胴部にそれぞれ径3～4cm穿孔が認められる。他に(7～10)が周溝埋土中より出土。

古墳時代の遺構

S B 2 一辺4.4×4.7mの方形竪穴住居である。平面プランは直線的で、各コーナーも鋭角である。壁面はほぼ垂直に約25cm立ち上がる。4本の柱穴を持ち、周溝はない。床の一部はつきかためられ貼床がなされている。棟の主軸はW11°N方向を示す。西壁に竈を有する。竈には大型の自然礫を袖石として使用している。左袖石は床面下約25cmまで埋め込んでいる。火床中央には支脚石をもつ。火床は浅く、焼土、炭化物ともに少ない。断面観察でも焼土や炭化物は少なく、煙道等は確認できなかった。遺物は、土師器杯片・壺片、須恵器杯片、カマドから土師器壺片・甑片が出土した。

S B 3 は遺構の中心部分が県道下にあり、全体は不明であるが、S B 2とほぼ同時期のものと考えられる。

鎌倉時代以降の遺構

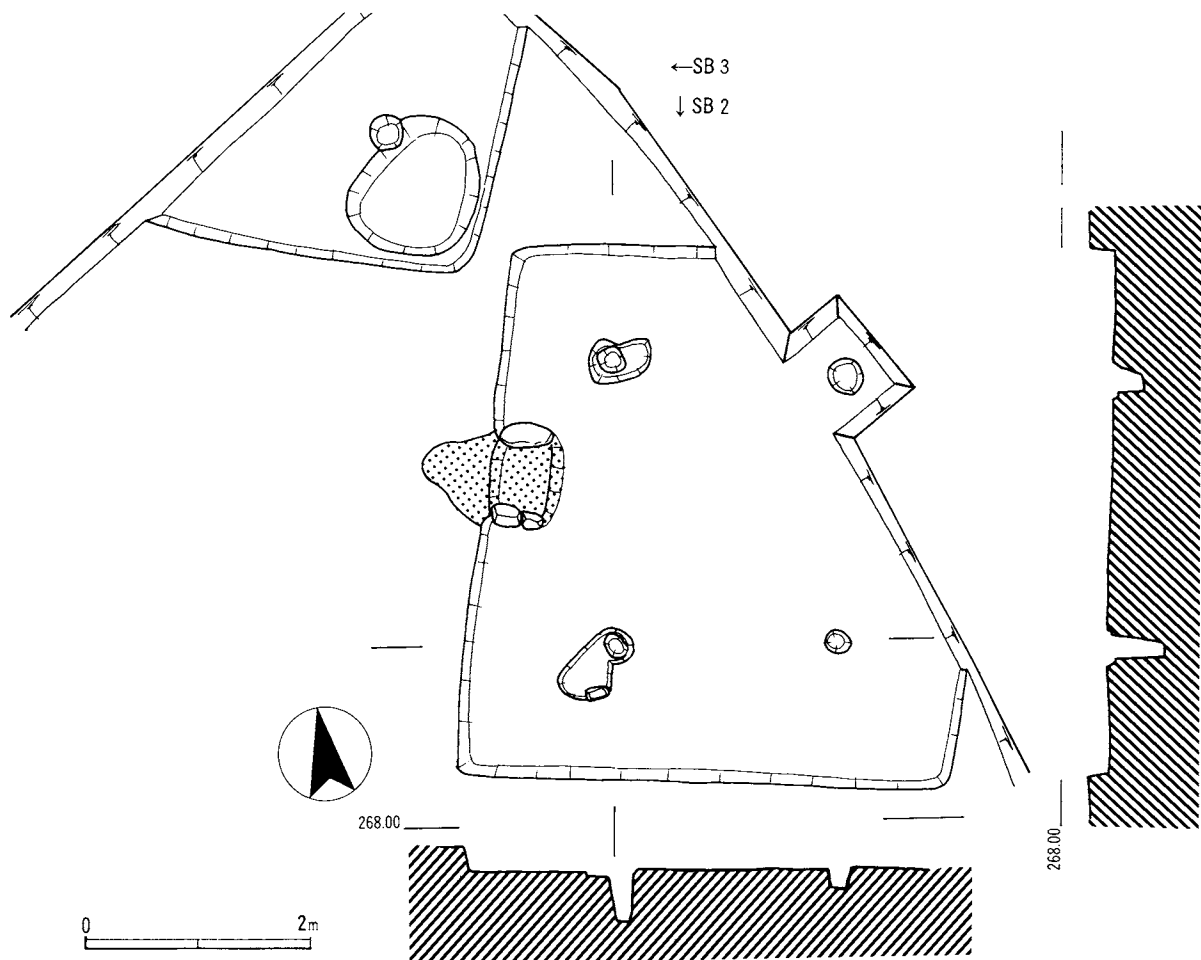
S B 4 掘立柱建物、2×3間の東西棟で、柱間は桁行1.85m、梁間2.15m、柱列の並びは良く、棟の主軸はW5°S方向を示す。柱穴掘形は長径60～70cmと大型である。遺物は瓦器片・土師器片が少量出土したのみである。鎌倉時代前半と考えられる。

S B 5 掘立柱建物、発掘区東端で検出。2×2間以上の身舎に南西北に廂がつく東西棟で、主軸はW19°S方向を示す。柱間は2.3mのほぼ等間柱列はやや不揃いである。瓦器碗・土師器杯片が出土。S B 3と同時期と考えられる。

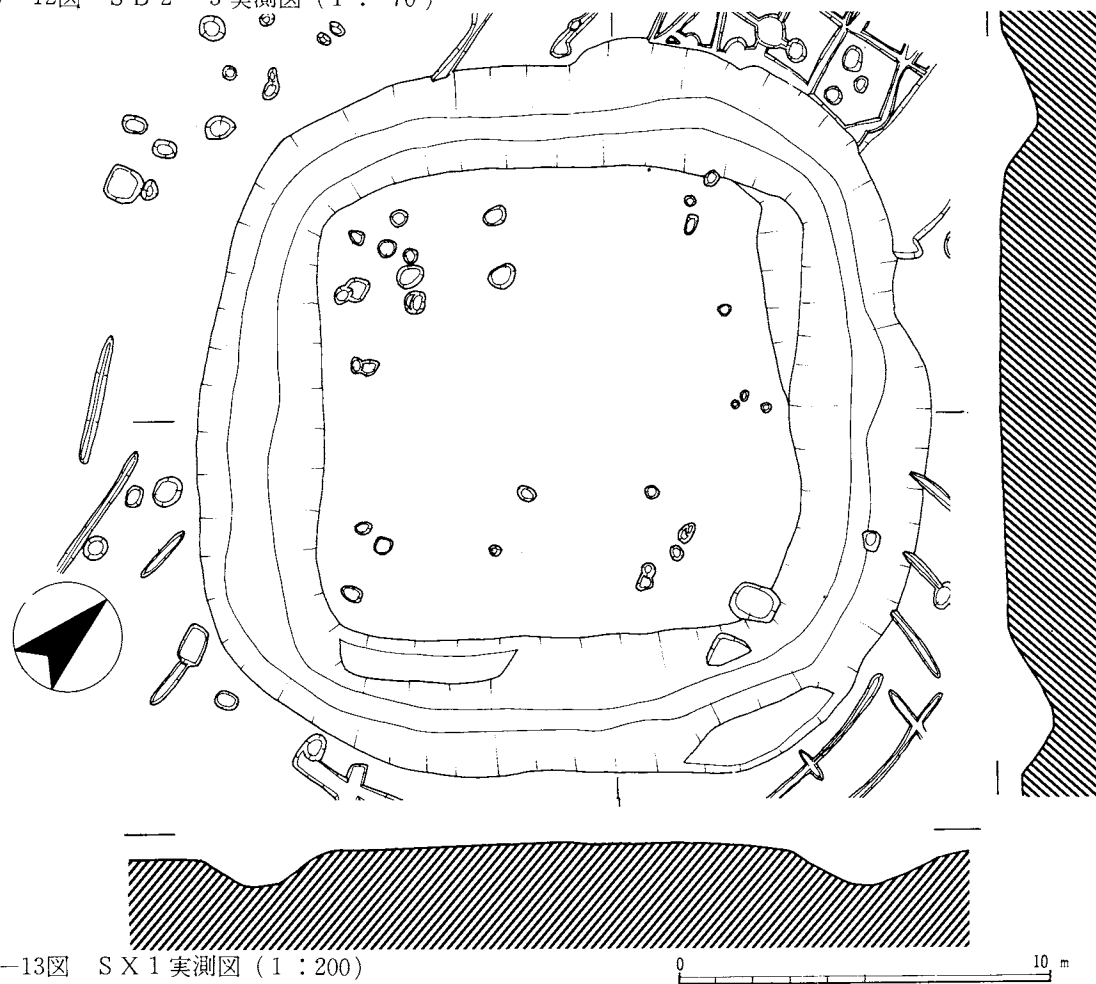
S K 6 3.8×5.0m、深さ20cmほどの方形土壇である。埋土は黒褐色粘質土で、多量の土器片を含む。中央から南端にかけて2.4×3.5mの範囲で20～50cmの川原石が不規則に重なる。石の中には火を受けたものの、古墳切石からの転用と思われるものが若干混入している。中世墓と考えられる。土師器羽釜片・鍋片・杯片・壺片、瓦器碗片が出土。



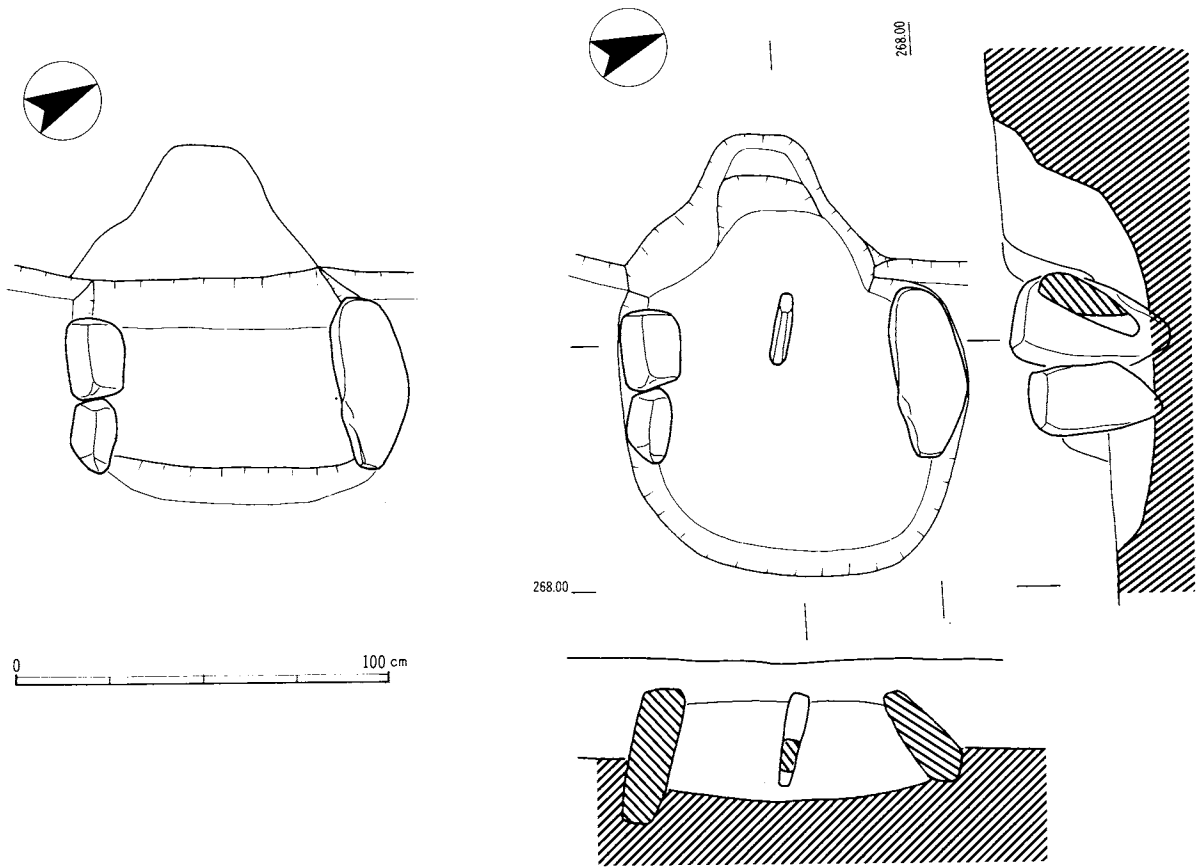
第8-11图 B地区遺構平面図(1:250)



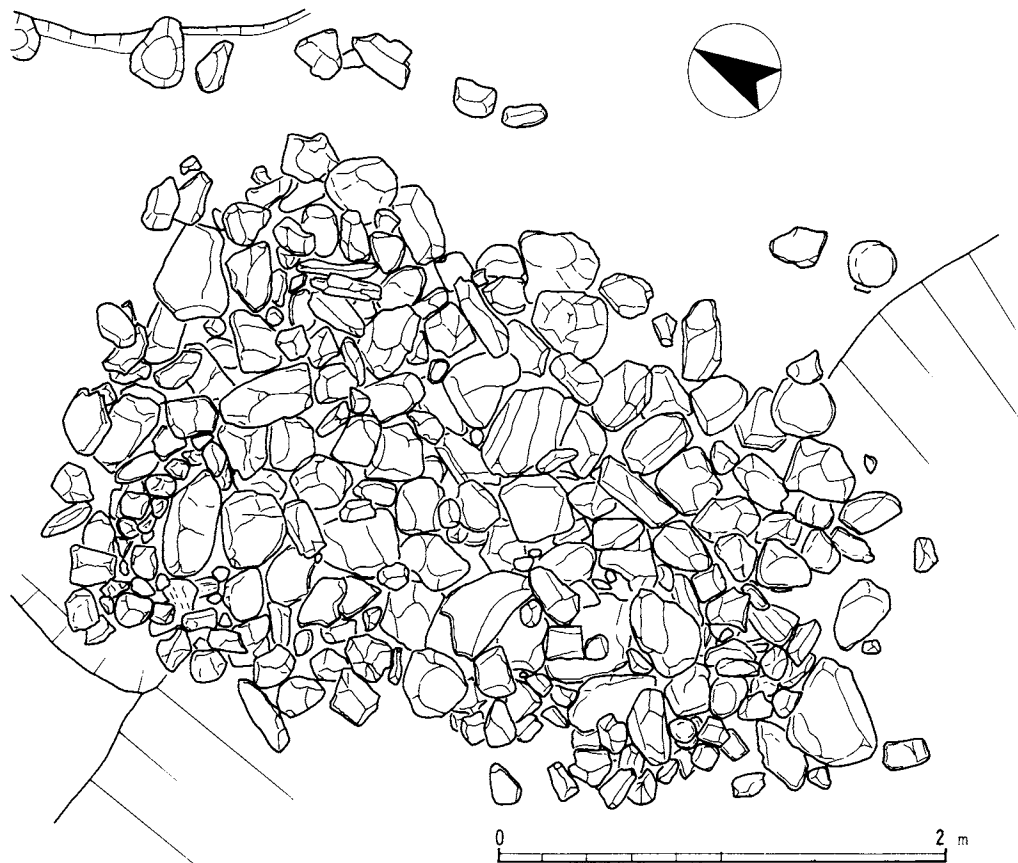
第8-12图 SB 2·3 实测图 (1 : 70)



第8-13图 SX 1 实测图 (1 : 200)



第8-14図 SB2カマド実測図(1:20)



第8-15図 SX6集石遺構実測図(1:30)

2. 遺物

B地区から出土した遺物はA地区に比較して量は少なかったが、方形周溝墓S X 1からは弥生時代中期後半の壺類(1~10)が出土。竪穴住居S B 2・S B 3からは古墳時代後半の土師器壺片・杯片・甗片、須恵器杯片が、掘立柱建物S B 4・S B 5からは鎌倉時代以降の瓦器椀片、土師器杯片が、集石遺構S X 6からは鎌倉時代以降の瓦器椀片、土師器皿片・羽釜片・鍋片がそれぞれ出土した。遺物包含層からは上記時代の遺物に混入して、緑釉陶器片、天目茶椀片、青磁椀片が各1点出土した。以下、弥生時代の土器を中心にその概要を述べる。

弥生土器はいずれも方形周溝墓から出土。(1~6)は周溝底に密着して横臥の状態を検出。(7~10)は周溝埋土中より出土。A区との連続性を考慮して便宜上以下のように分類する。

○壺型土器A-c 広口壺で、朝顔状に大きく外反する口縁をもつ一群。

○壺型土器C-a 受口状口縁をもつ細頸壺で、口縁に刺突文や貝殻腹縁文があり、A-cより頸部が細い一群。

○壺型土器C-b 受口状口縁をもつ細頸壺で、口縁に凹線文をもつ一群。A地区にみられない形式である。

○壺型土器E 頸部が漏斗状に開き、口縁端部にかけて、緩やかに内傾する一群。A地区にみられない形式である。

○甗型土器H 小型の深鉢型甗。

壺型土器A-c (3) 大きく外反する口縁で、端部にヘラ状工具による格子文がめぐる。体部全体に縦方向で密にハケメ調整する。頸部から胴部中央にかけて、2本のヘラ描き沈線によって区分した内側にヘラ描き格子文帯が3条めぐり、2条目の上端の偶然に生じた空間は、後で刺突文で補足している。胎土緻密で焼成は良好である。

壺型土器C-a (5~7) 受口状口縁をもつ細頸壺で、口縁端部に貝殻腹縁による刻目文がめぐる。口縁部から胴部にかけて縦方向にハケメ調整する。頸部に棒状具による4条の沈線、肩部から胴部にか

けヘラ状具により横方向でナデられた暗文風の横線がめぐる。頸部内面には絞り目が残る。色調は淡茶褐色で、胎土に砂粒を多く含むが焼成良好である。

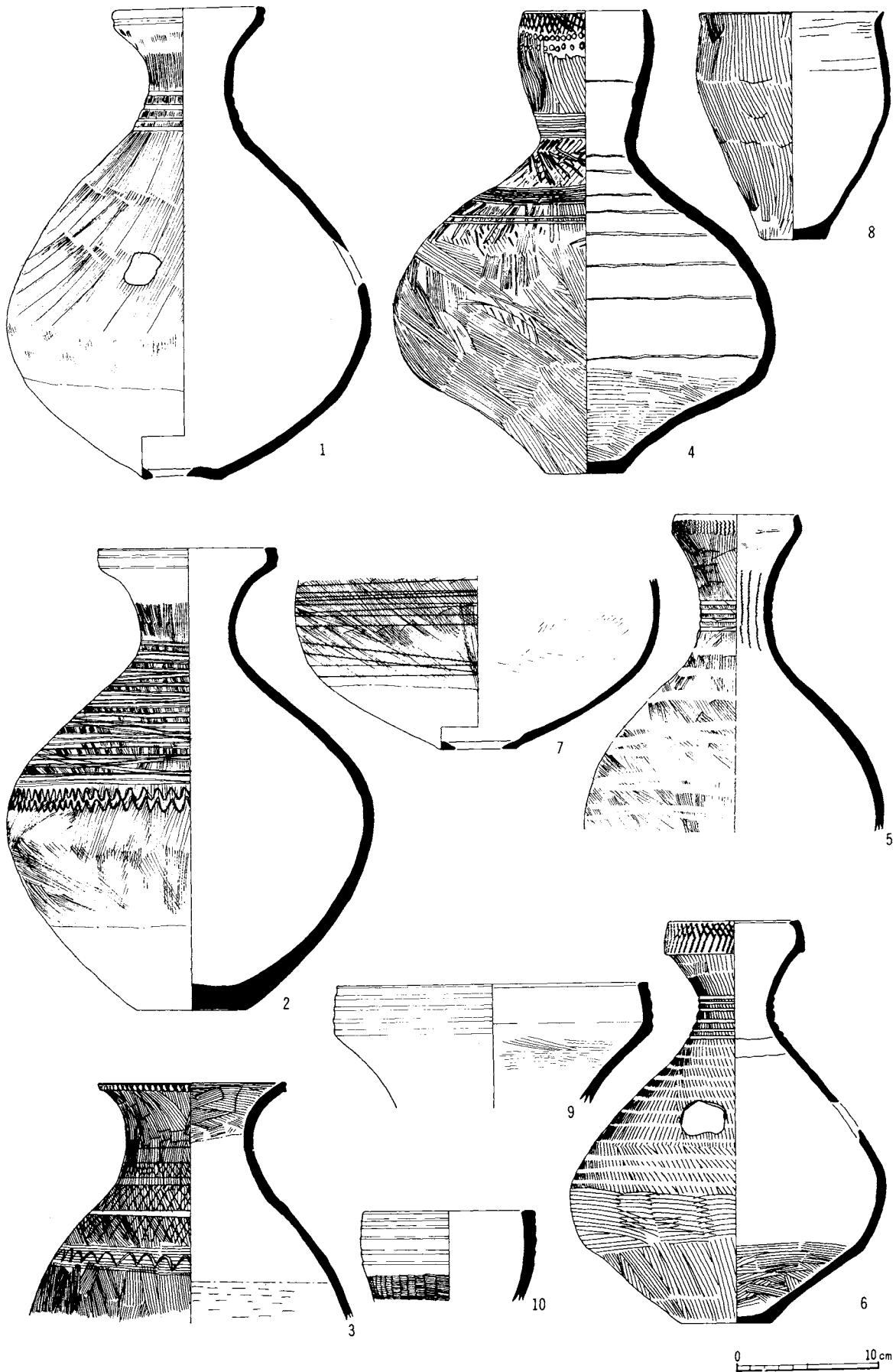
(6)は受口状の口縁端部に櫛状具による刺突文が綾杉状にめぐる。口縁部から胴部中央にかけ斜めのハケメ、胴下半部は縦方向ハケメで調整し、胴部の中央を横方向のや、粗いハケメで調整する。頸部にはや、太目の6条の沈線がめぐり、頸部以下から胴部中央までの間に12条のヘラナデによる暗文風の横線をめぐらし、ハケメを区画している。なお、胴部中央に径3cmの焼成後の穿孔がみられる。色調は淡橙褐色で、焼成は良好である。

(7)は頸部が欠失するもので、口縁の屈折部に櫛状具による細かい刺突文がめぐる。最大径が底部近くにまで至る深く内湾した胴部全体に、斜めの細かいハケメで調整し、胴部下半から底部にかけていい横方向のヘラミガキを施している。胴部全体に1単位6本の間隔の粗い櫛描き直線を密にめぐらしている。なお、底部中央には径約3.5cmの焼成後の穿孔がみられる。色調は淡茶褐色で、胎土は緻密で焼成良好である。

壺型土器C-b (1~2・9) (1)は口縁部に1条、頸部に4条のヘラ描き沈線がめぐるもので、口縁部の沈線は凹線と呼べるものである。口縁部から胴部上半までは縦方向、以下は斜め、胴部最大径以下は縦方向で細かくハケメ調整し、底部周辺はいい横方向でヘラミガキする。胴部中央と底部中央に径約3cmの焼成後の穿孔がみられる。

(2)は口縁部に2条の凹線をめぐらし、凹線上に径の約1/2の範囲で櫛状具による刺突文を配している。頸部から胴部最大径ぐらいままでを細かくハケメ調整し、それ以下は底部に至る間をヘラミガキする。頸部以下には、間隔の粗い4本1単位の櫛描き沈線が密にめぐらされ、最大径の部分には同原体による波状文がめぐる。色調は淡黄褐色で、胎土を多く含むも精良土で、焼成は良好である。

(9)は口縁部破片で、復元口径約22cmと大型壺で、4条の凹線文がめぐる。色調は淡橙褐色で、胎土は



第8-16图 B地区出土遗物实测图(1:4)

細砂を多く含む精良土で、焼成良好である。

壺型土器E (4・10) 頸部から漏斗状に立ち上がり、口縁にかけて緩かに内弯する細頸壺で、胴部は上半に肩をもち下半で深く内弯する。胴部最大径の部分のみ粗い斜めのハケメ調整の他は、全体をていねいにヘラミガキする。口縁端部に櫛状目による格子文、その下方に竹管文風の円形文が2条めぐり、頸部直上に5条1単位の櫛描き沈線がめぐり、その直下に櫛状具による格子文帯、さらにその下方に同単位の櫛描き沈線をめぐらしている。次いでこの沈線の下線に直交して2条1単位の垂下沈線を約4cm間隔で配し、この直線に直交する同単位の沈線をめ

ぐらしている。色調は淡褐色。緻密な胎土で、焼成良好である。

(10)は復元口径12cmの漏斗状の細頸壺で、5条の凹線文がめぐり、その直下に約2cm幅で細かい簾状文帯が2帯以上めぐらしている。色調は淡橙褐色。緻密な胎土で、焼成良好である。

甕型土器H (8) 口縁部は緩かに漏斗状に開き、端部が僅かに外反する。全体に浅い縦方向のハケメで調整する。口縁部内面にも、横方向で同様にハケメ調整する。器表全体に付煤し、色調は灰茶褐色。胎土はやゝ粗いが、焼成良好である。

3. 結 語

北切遺跡は、伊賀と伊勢を分ける布引山地に源を発する服部川の左岸に形成された標高約265mの河岸段丘下位面に立地する遺跡である。今回、両地区で検出された遺構は時代として大きく弥生時代中期古墳時代後期、平安時代末～鎌倉時代前期(中世)の3時期に区分できる。以下、検出された遺構と遺物に分けて、特筆できるものに焦点を絞ってその成果と問題点等を記し結語とする。

1. 遺構について

(1) 方形周溝墓

A地区のSX11、B地区のSX1と、今回の調査で2基の方形周溝墓を検出した。平面規模は前者で10m×15m、後者では19m×19.5mあり、規模として県下では大型の部類に入る。いずれも主体部はすでに削平されて不明であるが、時期的には周溝内出土の遺物からみて、弥生時代中期中葉(畿内第Ⅲ様式併行・尾張編年での貝田町式)の範疇に入るものと考えられる。両者は周溝内出土の壺型土器において顕著な相違がみられ、後者は口縁部に限り凹線文手法を用いる壺Cがみられる。

三重県内でこれまで弥生中期の方形周溝墓検出例は伊勢に限られており、伊賀では今回が初例である。A、Bの両地区は約80m離れており、A、Bを挟む未調査部分、あるいは標高としても漸次高くなる北側への遺構の広がりには十分予想されるところである

が、今回の状況からすれば、周溝墓の検出は各地区で単発独立的であり、また、竪穴住居(集落)は検出されていない。以上のことから溝を共用して群在する集団墓(共同墓)地的なものではなく、独立墓的な要素の強い築造状況であったと考えられる。これは勿論、土器形式の時代幅、あるいは集落の存続期間とも呼応するものであろうが、今回は集落については全く不明であり、また、墓の立地条件等、種々の見地からの今後の検討課題としたい。

(2) 円形周溝遺構

A区の発掘区北部で3基の周溝状遺構を検出した。SX5の形状から他の2基(SX1、SX2)も円形に溝がめぐると推定され、平面形で8～10m内外の円形周溝となる。SX5を除くと周溝埋土からの遺物検出はなく明確な時期決定をし難いが、SX5では5世紀末～6世紀初頭に比定しうる須恵器杯蓋と土師器甕2個体分が出土している。したがって、ここでは一応SX5の出土土器の年代から後期古墳の周溝跡と考えておく。周溝に囲まれた平坦部には瓦器を伴う中世遺構(土坑・柱穴)が切り込まれており、おそらく中世の時期に主体部を含めて、盛土(マウンド)が削平を受けたものと考えられる。しかし、すでに現存面は地山に達していると判断できるが、その削平度からみて、仮に横穴室石室であれば、石室の基底石、あるいはその痕跡、用いた石材の残骸等の散乱も考えられ、主体部はおそらく木

棺直葬であったと思われる。いずれにしてもこれまで大山田村の服部川流域での古墳の存在は約3km下流の広瀬地域（横枕1・2号墳、三谷古墳群）が上限であったが、この検出例によってさらに上流域にまで古墳が築造されていたことが判明した。

2. 遺物について

(1) 弥生中期の土器と所謂「近江系」甕

A地区でのSX11周溝埋土内の土器、さらにはSK22、SK28、B地区でのSX1周溝埋土内の土器など、弥生中期土器の一括資料はこれまで少数であった。それゆえ伊賀における当期の土器編年を考える上で好資料となろう。しかし、周溝内の出土土器については、埋土が単一層であったため層位的な把握が十分ではなく、供献用あるいは廃棄目的であったとしても周溝墓築造時から周溝の埋没時に至るまでの時間幅も当然考慮されるところであり、これらの土器を純粋な一括遺物と扱うにはやや問題がある。

さて、これらの遺構伴出の土器を概観すると、壺A-b類としたものについては、SK28からSX11への形態変化がうかがわれる。全体に器壁が厚く口縁端部を貝殻腹縁圧痕で飾り、瘤状突起を多用するものがSK28ではその主流を占めており、この形態と手法は明らかに当地方の第Ⅱ様式からの流れを認めることができる。

壺Cについては、SK22と、SK28にみられ、体部をヘラ描き沈線によって横位に分画し、縄文帯と無文帯（この部分はヘラミガキされる）を形成する手法は、貝田町式（古）の段階にみられるものである。(40)のように縄文帯の代わりに楡描き横線帯がみられるものがあるが、これはむしろ畿内の第Ⅲ様式（古）の影響とも考えられる。

次に甕については当地方に多い甕Bがあり、畿内大和型の第Ⅱ様式の甕の形態・手法に似る甕Eの他、これまでいわゆる「近江系」甕と呼称されていた受口状口縁をもつ甕Aと甕Fがある。甕Cは鋭く「く」字状に外反するタイプでむしろ畿内的な要素をもつ。

ここで甕Bについては、SK28からSX11の流れの中で、胴張りの傾向がうかがえる。B地区SX1出土の土器は器種が限られているが、先述したよう

に明らかに壺に凹線文手法が採用されている点、またSX11では全く凹線文手法がみられない点等より、SX1はSX11より新しい様相をうかがうことができる。

古く、近江地方の中期前半（第Ⅱ様式）の甕型土器は佐原真氏によってA・B2類に分類され、それぞれ畿内型、近江型の甕として理解されてきた^③。その後、滋賀里遺跡の中ではB類、C類と分類され、C類については方形周溝墓で第Ⅳ様式の壺と共存することが判明し、「B・C類は第Ⅱ様式の甕Aの要素をも受けて発生し、B・C類と発展過程をたどるがそれは第Ⅱ様式後半に始まって第Ⅳ様式まで系譜的につながるものである」とし、第Ⅱ様式以降における変遷と地域性については将来の課題とされている。

当遺跡では甕A、甕Fとしたものが問題となるが他の共存遺物からみると、甕F→甕Aへの変遷を考えることができる。従来、中期に属する近江系甕については、三重県下ではこれまで、永井遺跡^⑤、納所遺跡^⑥、亀井遺跡^⑦、上箕田遺跡^⑧、起A遺跡^⑨等で注意されている。

中期中葉Ⅲ様式（貝田町式）併行と報告されている永井SD6では甕Fがみられ、第Ⅳ様式併行期とされる亀井遺跡SK1、SK2では、甕Aと甕Fの両者がみられ、起A遺跡SB5の甕は亀井と同タイプと考えられる。滋賀里遺跡出土の甕B5^⑩、あるいは第Ⅳ様式とされる長命寺湖底遺跡の甕は、先の亀井遺跡、起A遺跡の甕に形態、手法的にも類似している。

以上、若干の伊勢湾西岸地方での状況について述べたが、甕を含めた土器の総体的な中期中葉（第Ⅲ様式）から後葉（Ⅳ様式）にかけての既成の土器編年観に左右されている感は免れないところであるが、流れとしては北切遺跡甕F→北切遺跡甕A→亀井遺跡SK1、2・起A遺跡SB5の変遷を考えておきたい。このことは凹線文手法をもつ土器を含む亀井遺跡SK1及び2、永井遺跡SX74、SX75等の一群の土器を第Ⅲ様式の新相に位置付けるのか、第Ⅳ様式に位置付けるのかが大きくかかわってこよう。いわゆる近江系甕といわれたものは、県下では北勢から中勢にかけて、さらに伊賀に分布することは明白となったが、本来的に近江型として近江で自生し、

第Ⅲ様式に至って伊勢・伊賀に波及したものが否かについては今後の近江における詳細な検討も必要となってこよう。

(2) 「伊勢型」鍋

扁平球状の体部をもち、ゆるやかに外反してのびる口縁部から端部が内側に折り返されて凹んだ面をつくる土師器鍋(60・64・65・78・79・91)はこれまで伊勢の中世遺跡では多く、かつ普遍的出土例をみるものであるが、伊賀地方での出土は今回が初例である。この「伊勢型」鍋の出自が平安時後半(およそ10世紀後半)にそれ以前(奈良～平安時代前半)にみられる甕の各器種の消滅と画一化の中で型式、系統的にとらえられること、またそれ以後中世～近世に至るまでの「鍋」の型式変化、およびその編年観、加えて県内、県外での分布範囲(流通圏)とその時代的变化等については問題提起がされている。^⑫

この形態の鍋は県外にも搬出しており、現在のところ神奈川県(鎌倉地方)、静岡県、岐阜県、愛知県の各遺跡での出土が判明している。県内及び県外での出土状況から、この鍋は年代的に12世紀末～13世紀代に盛行するものと考えられているが、今回、比較的編年の進んでいる瓦器との伴出によっておよその年代観(特に下限)が矛盾しないことが判明できた。しかし、当形態の鍋も県下全体をみれば、地域差なのか(あるいは時期差なのか)、口縁端部の形態、体部の調整技法、頸部の立ち上り等、細部には若干の相違が認められ、今後は地域ごとの細かい検討の他、中世遺物の1つとしての土師器「鍋」の型式と流通を全国的視野から考えていくことが課題となろう。

(新田洋・田中喜久雄)

(註)

- ① 山岸良二「三重県の方形周溝墓」『三重考古』創刊号 1975
第11回埋蔵文化財研究会『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』1982
県内の中期に属する方形周溝墓検出例としては、四日市市永井遺跡(Ⅳ様式)、鈴鹿市東庄内B遺跡(Ⅲ様式)、津市納所遺跡(Ⅲ様式)、志町鳥居本遺跡(Ⅲ様式)、明和町金剛坂遺跡(Ⅲ様式)、亀山市地藏僧遺跡(Ⅲ様式)等があり、永井遺跡では20m級の最大規模のものが検出されている。
- ② 中森英夫「横枕1・2号墳」『昭和54年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会1979
- ③ 佐原 真「琵琶湖地方」『弥生式土器集成』本編2 1968
- ④ 湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係遺跡発掘報告書』1973
- ⑤ 四日市市教育委員会『永井遺跡発掘調査報告』1973
- ⑥ 伊藤久嗣『納所遺跡』三重県教育委員会 1980
- ⑦ 谷本鋭次「亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文

化財調査報告4 1973

- ⑧ 仲見秀雄・真田幸成・大場範久『上箕田』1961
同上『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』1970
- ⑨ 山下雅春「起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』・三重県教育委員会 1983
- ⑩ ④に同じ
- ⑪ 滋賀県教育委員会『長命寺湖底遺跡発掘調査概要——近江八幡市——』1984
- ⑫ 新田 洋「三重の中世土師器——特に「鍋」——における若干の覚書」第4回三重考古学談話会発表資料 1984
- ⑬ ⑫に同じ

IX 松阪市岩内町 ^{やぶ} ^{した} 藪の下遺跡

1. 位置と環境

藪の下遺跡（1）は、行政区画上、松阪市岩内町字藪の下に所在する。遺物散布状況からみて、その範囲は現在の岩内町の集落と重複するところが多いと考えたい。遺跡の現状は、畑地と水田が混在している。

当遺跡は、岩内町の集落に近接しており、南には堀坂山系の一つ観音岳に源を発する岩内川が流れており、地形的に見れば岩内川の氾濫により形成された扇状地の扇頂部にあたり、標高約80mである。

この地域は、多くの遺跡が分布し、早くから開拓された地域と考えられる。また、来年度以降、近畿自動車道を含めた各種開発事業に伴って、それらに起因する発掘調査が控えており、松阪市西部山麓の

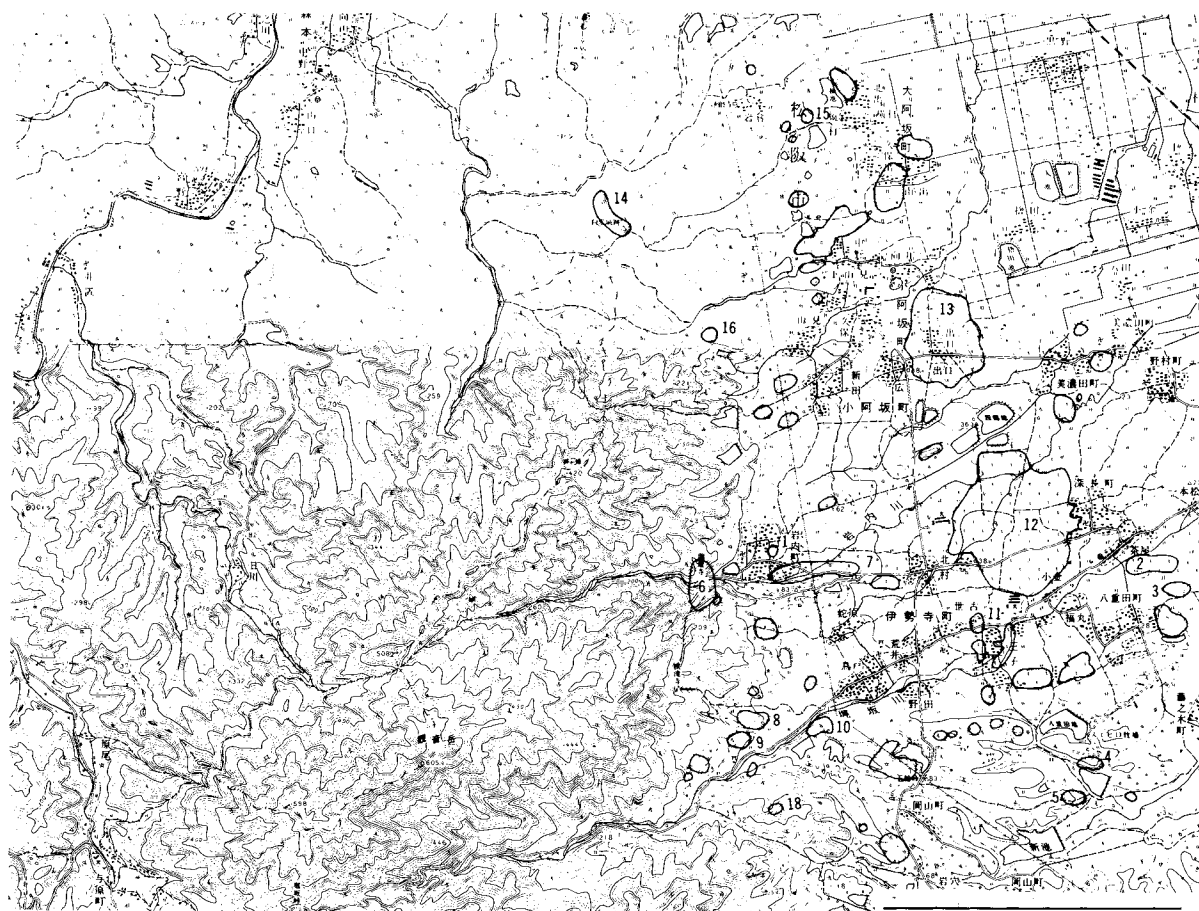
歴史を解明する資料が提供されることになるだろう。

ここでは以下、時代順に分布する主な遺跡について概述したい。

縄文時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。

弥生時代では、堀坂川の沖積地の微高地に位置する田高田遺跡（2）・城垣内遺跡（3）があり、第Ⅳ様式を中心とした弥生土器（壺・甕）が多く出土する。他に藤之木岡崎山A・B遺跡（4・5）がある。これらは古墳時代にも継続しており、古墳の築造も始まる。

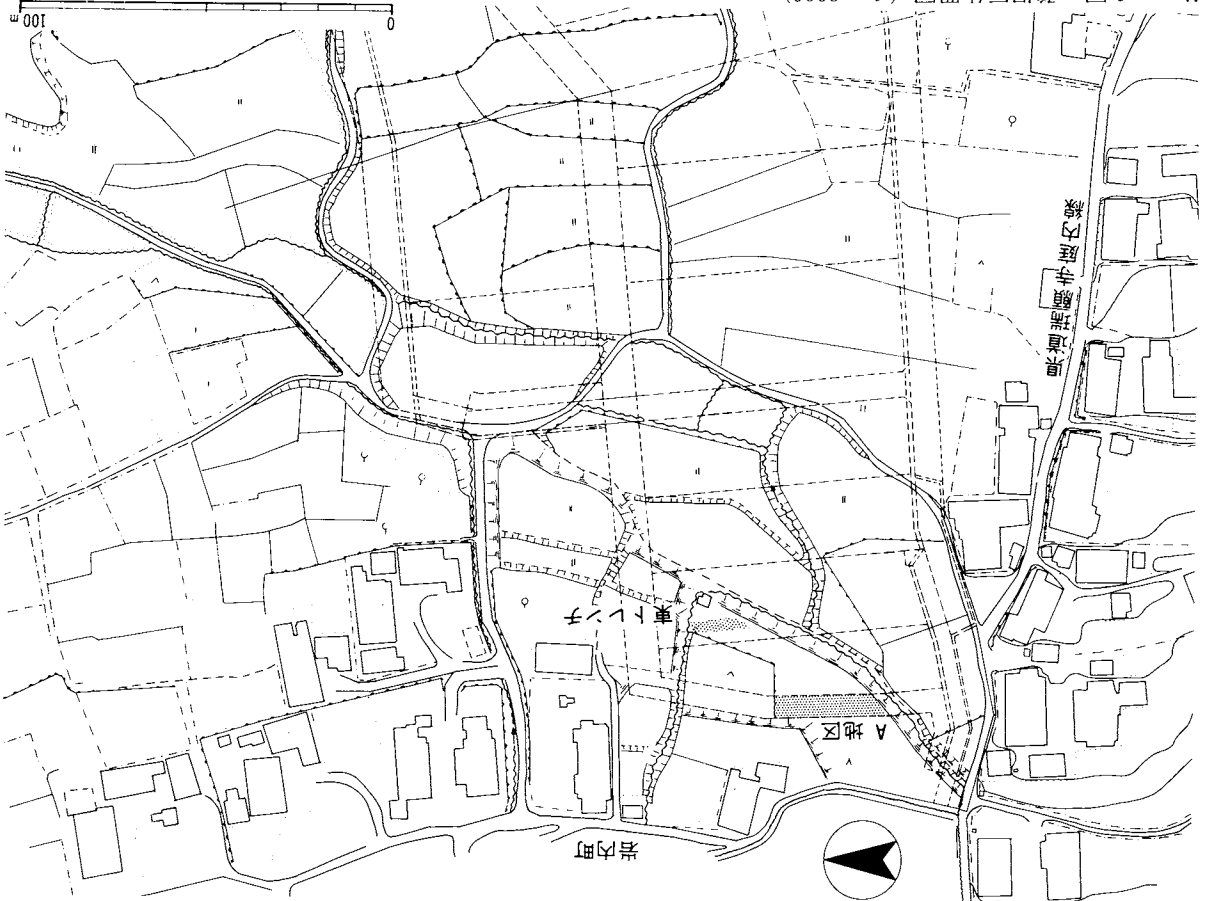
前期古墳としては、当地域に該当する古墳はない。古墳時代の後期に入ると、丘陵地の狭い面に小規



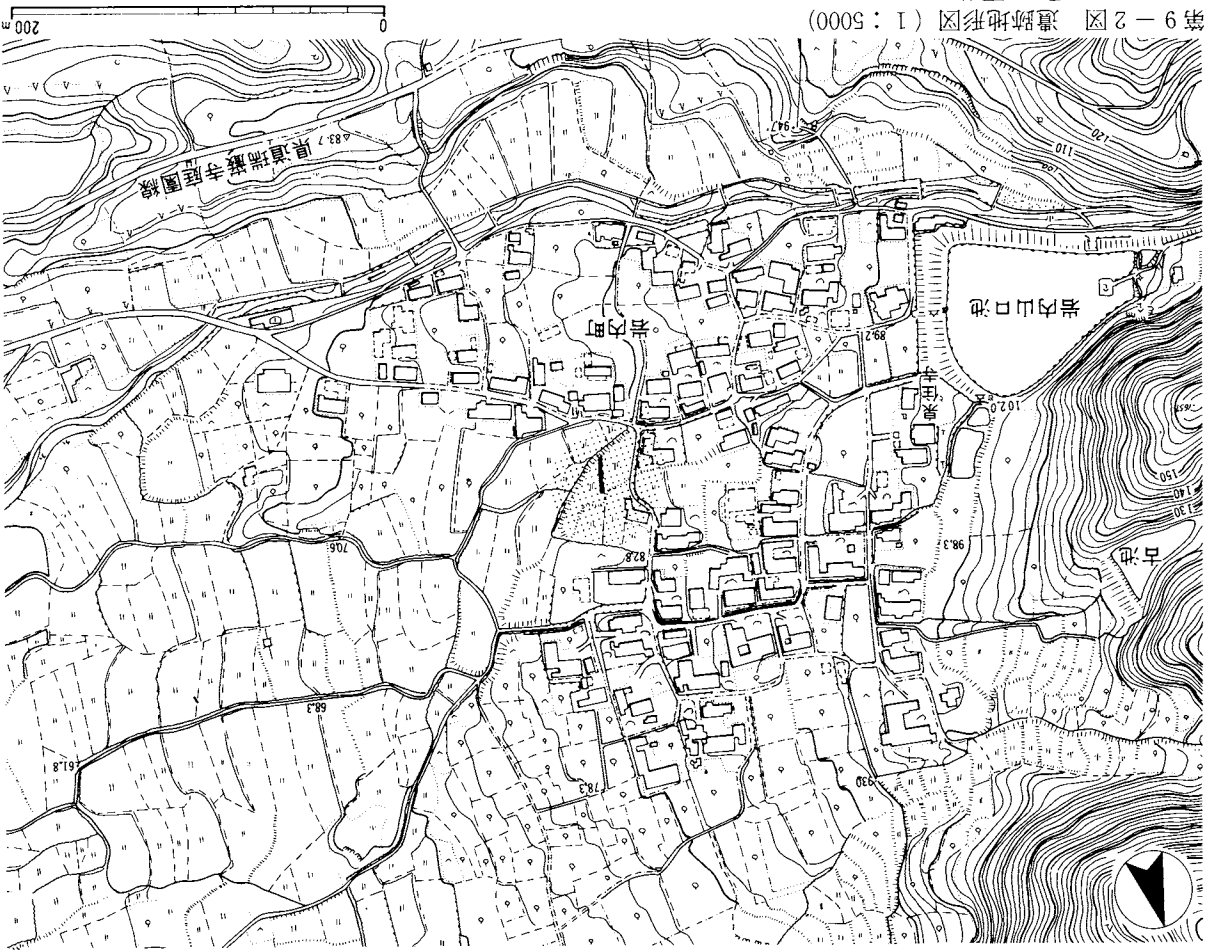
第9-1図 遺跡位置図（1：50000）

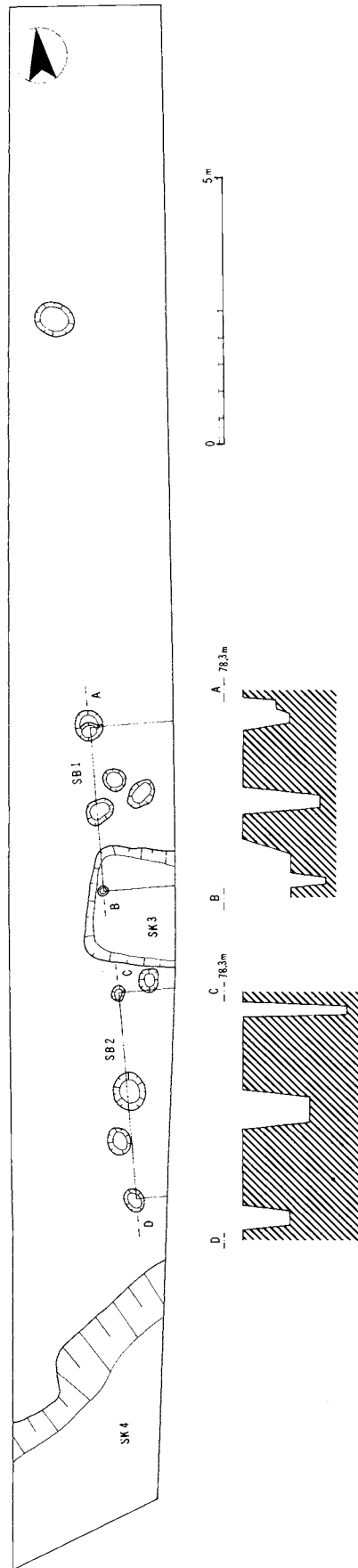
1:25,000 大 仰 大 河 内 国土地理院

第9-3区 発掘区位置図 (1 : 2000)



第9-2区 遺跡地形図 (1 : 5000)





第9-4図 遺構実測図 (1 : 250)

模墳が集中して爆発的に増加しており、群集墳の形態をとるようになり、当地域のある西部山麓にも主なものだけでも、瑞巖寺古墳群(6)・岡崎古墳群(7)・上文珠古墳群(8)・下文珠古墳群(9)・平林古墳群(10)などがある。

飛鳥・奈良時代になると、出土瓦から寺の創建を白鳳期に比定する伊勢寺廃寺(11)が知られている。当寺については、奈良時代後半から平安時代にかけて伽藍の整備が行なわれ、その寺域に方形地割が残存しており、中軸線は南北を指している、東西150m、南北180mが考えられるとされている^①。この時代の集落跡については、遺構の確認されたものではなく、土器片の散布地を集落跡と予想しているものである。その中で伊勢寺遺跡(12)・出口遺跡(13)などは広大な面積を有し、須恵器・土師器・山茶碗などが散布している。

中世に至って、南北朝以降この地域は伊勢国司としての北畠氏の支配下にあったが、この時期に関係する本城・各支城の跡が、堀坂山系に多く確認されている。「白米城」で有名な阿坂城跡(14)があり高城城跡(15)・枳城跡(16)は本城を固める出城であったと考えられている^②。また、本遺跡の近くには、岩内城跡(17)・伊勢寺城跡(18)が知られている。

以上、当地域については周辺の遺跡を概述するにとどめたい。

2. 遺 構

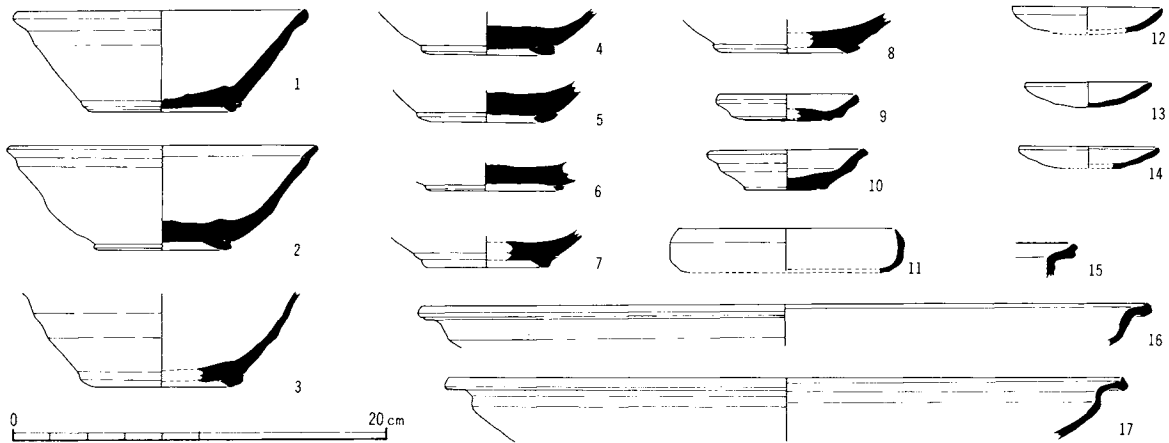
基本的層序は、I層：茶褐色砂質土(耕作土)・II層：黄褐色砂質土・III層：赤褐色粘質土(地山)からなる。

検出された遺構は、掘立柱建物2棟・土壇2基である。

1. A地区

(1) 掘立柱建物

SB1・SB2 一応東側に伸びるものとして掘立柱建物と想定したが、発掘区が限られているため断定できない。柱穴からは、少量ながら土師器や山茶碗の細片が埋土中から出土しているが図示できるものはない。



第9-5図 SK3出土土器実測図(1:3)

(2) 土坑

SK3 西辺が発掘区で切られているため全容は不明であるが、径2.3m、深さ約40cmである。出土遺物として土師器小皿(11)・山茶碗(1)がある。

SK4 発掘区南端で検出されたもので、急に深くなっており、落ち込みと考えられる。遺物として

土師器小皿(12)・山茶碗(2・4・5・6・8)・山皿(9)がある。

2. 東トレンチ

遺構は確認されなかったが、遺物として土師器小皿(13・14)・鍋(15・16・17)・山茶碗(3・7)がある。

3. 遺物

出土した遺物は、少なく整理箱に1箱ほどである。遺物には、土師器・山茶碗のほか、常滑甕・天目茶碗・青磁など小片だが出土している。

A. 土師器

小皿A (12・13・14) 口径7~8cm・器高1~1.5cmの薄手のつくりの小皿である。口縁端部外面のわずかの部分がヨコナデされ、他はナデられているが底部は凹凸が目立つ。胎土は緻密で、赤褐色の色調を呈する。

小皿B (11) 口縁部がやや内弯気味に立ち上がり、端部は尖る皿である。器壁は底部ほど薄くなっている。内面はナデられ、平滑に仕上げているが、外面は一応ナデられているが、不調整である。胎土は緻密で、色調は淡黄褐色である。

鍋 (16・17) 推定口径35~38cmで口縁部は強く外反し、口縁端部を上方につまみ上げ、断面三角形を呈する。底部は欠損するが、底の浅い鍋と考える。

口縁部は内外面ともヨコナデされ、他はヘラケズリされ薄くなっている。外面には煤が付着している。胎土は緻密、色調は赤褐色である。

B. 山茶碗・山皿

山茶碗 (1~8) いずれも完形品ではない。内底面と体部との境が明瞭で、直線的な体部をもつ山茶碗である。高台は低く、小さい。(1・2・3・4)の高台には靱殻圧痕が付着する。(2・6・8)の底部外面には糸切り痕が残るが、他は糸切り痕をナデ消している。(1)の内底面中央部にはユビナデによる凹みがみられる。(1・5・8)の内面には煤が付着している。胎土はいずれも砂粒を含むが緻密である。色調は灰白色である。

山皿 (9・10) いずれも高台の消滅した山皿であり、底部に明瞭に糸切り痕がのこる。胎土は小石粒を含み粗である。色調は淡灰白色である。

4. 結語

今回発掘調査を実施した部分は、藪の下遺跡のな

かでも、遺物がわりと多く散布している地域である

が、発掘調査区が幅3mの水路部分に限られているため、遺構・遺物の保存状況を確認する程度にとどまった。

西トレンチから検出された遺構のうち、SB1・2については、遺構のところで述べたように幅3mと限定されたため、断定することはできないが、各々柱間が1.8m、2.0mであり、柱穴内から少量だが遺物も出土していることから、今回保存される予定地内に広がるものである。SK4は、東端が深く落ち込んでいることから、旧地形をうかがわせる。

出土遺物から時期を2つに分けることができると考える。西トレンチから出土した土師器・山茶碗を

検討すれば、鎌倉時代後期に比定されると考えられる^③。東トレンチから出土した土師器鍋は、口縁端部を折り返さないで、上方につまみ上げる形態からみて室町時代に入ると考える。

その他、わずかだが天目茶碗・青磁が出土していることも付け加えておきたい。

以上のように、今回の調査では建物の確認には疑問を感じたものの、岩内地内では初めての発掘調査であったが、中世の歴史の足跡を知る手掛りを得た感じがある。そして、水路部分以外の地域については、遺跡保存のため盛土保存されることとなった。

(中村信裕)

[註]

- ① 下村登良男他『松阪市史』第二巻 松阪市 1978
- ② 『三重の中世城館一開発集中地域中世城跡分布調査報告』
三重県教育委員会 1976
- ③ 藤澤良祐『瀬戸古窯址群I』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

X 伊勢市佐八町 なかの がいと 中ノ垣外遺跡

1. 位置と歴史的環境

南勢屈指の大河川である宮川は、大台山系に源を發し、度会郡のほぼ中央を貫流し伊勢湾に注ぎこんでいる。度重なる氾濫をくり返し、自然の猛威をほしいままにした本河川ではあるが、兩岸の段丘上には多くの遺跡が分布し、自然と共に生きた人々の営みの跡は、旧石器時代から現代に至るまで連続と生き続けている。

今回、伊勢市南部の河岸段丘下位面に初めて考古学的なメスを入れることになった中ノ垣外遺跡(1)は、行政区画上、伊勢市佐八町字中ノ垣外と天白に

またがって所在し、標高12~13mの南北に細長く伸びる河岸段丘下位面に立地している。

さて、本地域周辺に展開する歴史的環境について、周辺で実施された発掘調査、伊勢市教育委員会が昭和55年に実施した「伊勢市詳細遺跡分布調査」^①の成果及び、皇学館大学考古学研究会の精力的な分布調査^②の成果等を基に以下概観する。

旧石器・縄文時代 宮川下流域における旧石器時代の展開は、ナイフ型石器、舟底型石器、尖頭器、搔器、細石刃、細石核、縦長剥片等の石器が多数発



第10-1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

見され、石器組成より県内では出張遺跡（大台町）、カリコ遺跡（玉城町）に次ぐ規模を誇り、本地域における拠点的な遺跡であると位置づけられるマ・田遺跡^③（近鉄小俣駅北西に所在、小俣町）が特筆される。

この他は、左岸玉城町の低地を眼下に望む丘陵端部等に所在し、ナイフ型石器数点、剥片等の石器組成の小規模な遺跡がほとんどで、移動生活を常とした本時代の宮川流域における諸特徴と合致した角垣外（3）、アレキリ（4）、明豆西（5）遺跡がある。さらに、ナイフ型石器、細石刃、細石核、ドリル、縦長剥片等、比較的まとまった石器組成を示す東伸（6）、仲山（7）遺跡が確認できるが、右岸段丘上での展開は皆無であった。

しかし、近年発見され資料集成されつつある元新田遺跡（2）では、ナイフ型石器、ポイント、縦長剥片、残核等が採集され、市内唯一の明確な旧石器時代の遺跡であることが判明した。このことより移

動生活の一地点が右岸まで及んだことを知るに至った。

次に、縄文時代についてみると、早期では遺構伴出ではないが、格子目押型文土器が検出されている大藪遺跡^⑦が下流へ6.5kmの所に所在する。

また、早期以降晩期に至るまで継続して宮川流域でも屈指の大集落と推定される下久具万野遺跡^⑧が、上流4kmの右岸段丘上に所在する。本遺跡は、早期大川式類似の長楕円押型文土器、前期北白川下層Ⅱ・Ⅲ式類似の突帯刻目文、爪形文、羽状縄文土器、中期初頭船元Ⅰ式類似の土器、後期の磨消縄文、沈線文、条痕文土器、晩期五貫森式類似の土器等、各時期の土器が、また、石器では約2,000点を超える石鏃をはじめ石匙、搔器、石錐、石斧、石皿、石錘、石英製飾玉等多くの遺物が採集されており、石器製作遺跡及び河川ルート上の重要な中継点と位置づけられる遺跡であり、縄文全期を通じての本周辺地域、ひいては宮川流域の拠点的な集落の一端を偲ばせている。



第10-2 遺跡地形図 (1:5,000)

さらに、市内はもとより宮川流域でも前述の下久具万野遺跡と双壁とされる佐八藤波遺跡(9)が、北東の中位段丘上に所在する。本遺跡は、堀之内Ⅰ式類似の土器が最古としてとらえられ、以降後期末葉の宮滝式類似土器、また、わずかではあるが晩期の土器が出土している。石器も多数の石鏃や、スクレイパー、石斧、石錐、石錘、石棒、岩偶等が発見されており、後期を中心とした本地域の拠点的遺跡と推定されている^⑨。

この周辺には、佐八藤波遺跡を核としたキャンプサイトの様な様相をもつ、少量の土器と石器が採集される元新田、中新田(10)、源蔵田(11)、塚の上(12)乙部(13)、小谷(14)、中ノ越(15)遺跡等、いずれも後期から晩期にかけて小規模な展開がみられる。

一方、左岸玉城町周辺では明豆(16)、狼谷(17)東村(18)、寺起(19)遺跡が前方に低地を控える丘陵端部に分散的にみられるが、いずれも少量の土器と石器が確認されるのみで、佐八藤波遺跡級の拠点的な遺跡は現在のところ発見されていない。

晩期に入ると、佐八藤波、元新田、明豆遺跡の他、最下流の大藪、小御堂前遺跡で確認できるのみで、集落が小規模に拡散した様子を窺うことができる。

弥生時代 本地域周辺の前・中期の展開は稀薄な状況である。前期については左岸北東4.5kmの仲垣外(20)遺跡の土坑より壺・甕が発見されている^⑩。さらに大藪遺跡では包含層より壺・甕が発見されており遠賀川式土器の伝播東進ルート上の一点と推定されているにすぎない。中期においても月よべ(21)、小社^⑬(22)遺跡で後半の土器が発見されているのみである。

しかし、後期に至って遺跡は急激に増加し、盛況をきわめ南勢地方でも屈指の大遺跡が左岸中位段丘上を中心に展開するが、右岸とでは異なった様相を示す。つまり、左岸中位段丘には小社、中楽山(23)、野垣外、離宮、大藪遺跡をはじめ、岩出城跡に内包される大森(24)、中角(25)、まこも(26)遺跡等多く分布する。中でも発掘調査が実施された中楽山、野垣外の各遺跡では、多くの竪穴住居をはじめ方形周溝墓が検出され、南勢地方の欠山期から古式土師器への編年上の標準資料と位置づけられる土器が多数出土しており^⑭、眼下に広大な沖積地を見下ろす中

位段丘上にムラが連綿と形成されていたことがうかがえる。

一方、右岸においてはこれまで後期のムラが宮川を渡って南下していないと推察されていた^⑮。しかし、佐八藤波遺跡では欠山期の土器や石鏃が、また、万所遺跡(27)でも少量ではあるが後期の土器が、さらに、元新田遺跡では中期の土器(畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式)が発見されたことより、中期及び後期の小規模なムラの存在は推定できるようになった。

しかしながら、遺跡(ムラ)の規模は歴然とした差異が認められ、これは従来から指摘されているように^⑰、左岸段丘下には広大な沖積平野及び氾濫平野が広がっているのに対し、右岸段丘下には宮川の流路により制約された狭小な沖積地しか存在しておらず、明らかにムラの生産基盤となる水田可耕地供給の差異が、この様相を端的に示唆しているものといえよう。

古墳時代 河川兩岸の丘陵地に分布する古墳は、現在のところ前期古墳は発見されておらず、その多くは6世紀以降の後期古墳である。

前時代である弥生後期に左岸段丘上で盛況した大規模なムラから、前期古墳形成への系譜は認めることはできない。このことはすでに指摘され、県下における特色とされている^⑱。

しかし、小社遺跡では石釧が発見されており、破壊された古墳の痕跡等が発見される可能性は十分考えられる。

左岸玉城町南部の古墳分布は、前岡、空池等の古墳群等が分布する田宮寺周辺地域と、正来寺古墳群等が分布する蚊野丘陵周辺地域に大別できるとされている^⑲。この他、宮古周辺にも矢塚古墳群(28)がある。

一方、右岸佐八周辺地域は、市内古墳分布一地域を形成している。現時点での明確な資料としては田辺氏の陶邑編年でMT-85併行期と推定される蓋杯が出土し6世紀後半頃の築造とされる高殿山古墳(29)や、戦後の開墾中に須恵器が出土した元新田古墳(30)、数基の円墳で構成された佐八藤波古墳群(9)、破壊され詳細は不明な玉田山(31)、寺原(32)古墳が分布し、また、最近円筒埴輪片(P135写真)が発見された中新田遺跡内にも古墳が存在した可能

性が考えられている。²¹⁾

なお、本分布地域に含めて考えるかは今後の課題であるが、北東約4kmに位置する塚山古墳群(33)からは子持台付長頸瓶、金銅製の轡、帯金具(鉸具、飾金具、鉈尾)等が発見されており7世紀前半頃の古墳と考えられ、その副葬品の内容から本地域周辺においても特異な古墳であると考えられる。

歴史時代 中ノ垣外遺跡の北東対岸である岩出には、神宮祭主大中臣氏の祭主館が長保年間から応永年間(11世紀～15世紀)まで所在したと推定されている。²²⁾ また、右岸佐八藤波の地には大中臣氏(後に藤波氏)の居館があったとされ、国の重要文化財である『伊勢新名所絵歌合』にも共に「岩波里、藤波里」として描かれた名所である。

さらに、かなり下流であるが、齋王の離宮であり、大神宮司の政庁であり、しかも度会郡の駅家であったという三つの機能をそなえた離宮院も所在し、昭和53年の発掘調査では主要殿院の一つの南門とされる三間一戸の立派な八脚門や柵(垣)、掘立柱建物が検出されている。²⁴⁾ また、旧高向郷の官衙的性格を有する高向遺跡²⁵⁾や、神宮祠官の伊蘇館周辺地とも推定される殿垣外遺跡²⁶⁾が所在する。

このように、玉城町南部下外城田地区一帯(小社・岩出)及び、右岸佐八地区は、神宮祠官の荒木田氏や祭主大中臣氏の本拠地であったと推定され、本地域周辺にはやはり神宮関係遺跡の多いことが特色づけられる。

一方、左岸一帯における平安～鎌倉時代にかけての一般集落については、玉城町蚊野丘陵地東端周辺の仲垣外、赤垣外、小ばしの各遺跡や、野垣外遺跡、大藪遺跡で掘立柱建物や竪穴住居が検出され、その生活の一端を窺うことができる。²⁷⁾

右岸佐八町周辺では、中新田、西垣外(34)北垣外(35)遺跡等で中世を中心とした遺物散布が認められる。これらの遺跡の遺物散布状況から中世集落の遺跡立地は、時代を追って南下する傾向にあるとされ、昭和58年に発掘調査がなされた中新田遺跡では、柱穴内に扁平な川原石を根石に据えた鉤形平面プランをもつ掘立柱建物等が検出され、鎌倉時代後半～末頃に属する中世村落が検出され、伊勢南部における初めてのの中世集落の面的調査として注目された。²⁸⁾

条里制遺構の分布については、最も連続的で典型的なものは、外城田川以北の旧有田村付近の字長更、井倉において長地型の地割を認めることができるものの、本地域周辺地では、宮川の度重なる氾濫と耕地整理の為、ほとんど失われている状況であり、復元は容易でないとされている。²⁹⁾

これらの他、佐八から高殿山裾部を経て大池へ至り、神宮へ向かう古道と考えられる付近の池之上遺跡(36)からは山茶椀、青磁等の散布が認められ、また、旧前山亀谷郷の世義寺跡(37)からは、治承2年(1178)の銘がある経筒が発見されている。

南北朝時代から室町時代になると、田丸城、岩出城をはじめ、南朝北畠氏関係の中世城館が多数玉城町の丘陵部に分布している。³⁰⁾

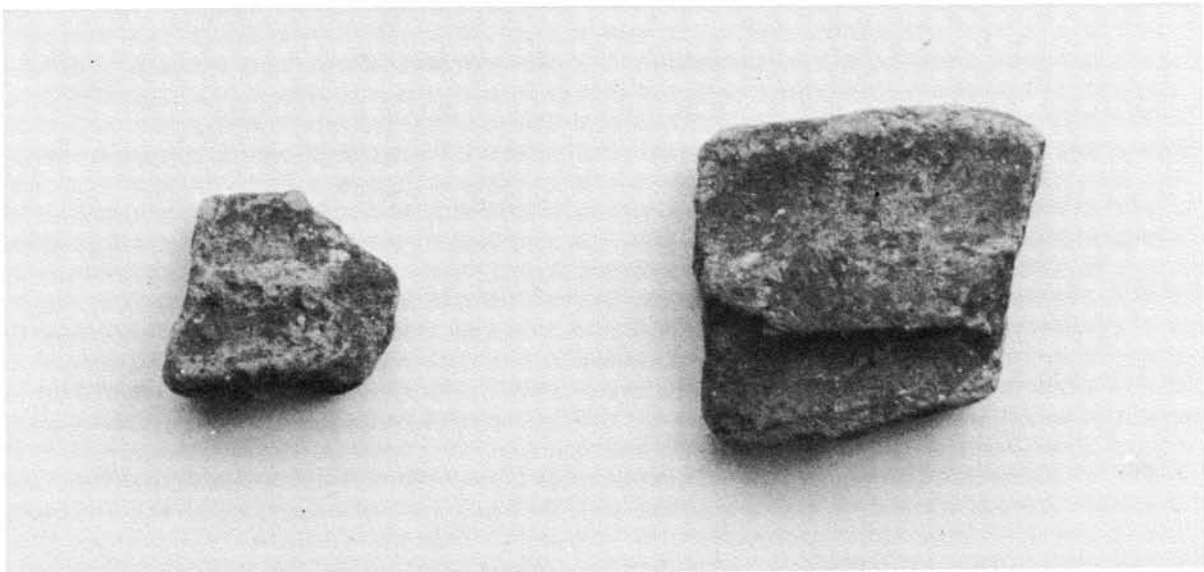
〔註〕

- ① 伊勢市教育委員会編『三重県伊勢市遺跡分布地図』伊勢市教育委員会 1981
- ② 皇学館大学考古学研究会(以下、皇大考研と略称)では、本地域周辺の宮川流域や玉城町南部等、精力的な分布調査を実施し貴重な新遺跡を多く発見している。これらの成果は、『宮川下流域の遺跡一現成果よりみたるその歴史性』1981 や『玉城町南部の遺跡』1982 さらに同研究会機関誌『歩跡』創刊号～3号で報告されている。なお今回報文に際し、玉城町南部の新発見遺跡の概要については上記文献を参考にした。
- ③ 岡田登「度会郡小俣町マ、田遺跡の先土器時代遺物」『史料第43号』皇学館大学史料編纂所 1981
- ④ 奥 義次「三重の遺跡」『日本の旧石器文化第3巻』雄山閣 1976
- ⑤ 各遺跡は、いずれも皇大考研により発見されたもので、各概況は註②の各文献に詳細されている。
- ⑥ 岩中淳之「元新田遺跡」註①の文献、調査概況、宮本・沼木地区及び、木本雅文「三重県伊勢市元新田遺跡の採集遺物について」『マージナルNo.3』マージナル刊行会 1984 この他、奥義次氏及び筆者等によりナイフ型石器、ポイント等が表採されている。
- ⑦ 吉水康夫「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1973
- ⑧ 岡田登「下久具万野遺跡とその遺物」『歩跡2号』皇学館大学考古学研究会 1972
- ⑨ 前川順「伊勢市佐八町の縄文遺跡概要」『歩跡創刊号』皇学館大学考古学研究会 1965 及び、岩中淳之「佐八藤波遺跡」註①文献所収
- ⑩ 小玉道明「仲垣外遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1979
- ⑪ 註⑦に同じ
- ⑫ 小玉道明「月よべ遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
- ⑬ 村山邦彦「小社遺跡」『歩跡2号』皇学館大学考古学研究会

- 1972 及び註②『玉城町南部の遺跡』
- ⑭ 下村登良男「中梁山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1972 及び下村登良男「野垣外遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』1979
- ⑮ 註⑭の後者と同じ
- ⑯ 註⑥の二者の文献と同じ
- ⑰ 和田年弥「伊勢地方と古墳—特に神宮周辺の古墳について」『神道史研究20巻5・6号』1972
- ⑱ 小玉道明「戦後三重の発掘調査の成果と展望」『図録三重の考古遺物』三重の考古遺物編集委員会 1981
- ⑲ 皇大考研により表採され、推定外径7.9 cmを計る滑石製で、大程の破片である。註②『玉城町南部の遺跡』に詳細されている。
- ⑳ 註②文献『玉城町南部の遺跡』による。
- ㉑ 新田洋「中新田遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1982 この円筒埴輪片は現在市教育委員会で保管している。
- ㉒ 註⑰の文献「塚山古墳」の概要の中で和田氏は、帯金具等を6世紀前後と推定されてみえるが、田中新史「東国終末古墳出土の馬具—年代と系譜の検討」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』1981の中で、田中氏は、金銅製鏡板

をⅠ期（6世紀末～7世紀前半に直続する時期）と位置づけられている。筆者は、東博所蔵の本墳出土遺物を東京国立博物館考古課長 村井崑雄氏、同考古課 望月幹也氏のご配慮により実測する機会を得たが、帯飾金具は外縁の文様が、鏡板の四窓外縁にみられる文様（一方向多条直線文）と類似することや、出土須恵器の年代観（一部時期の異なるものも含まれるが）より7世紀前半頃の古墳と考えている。詳細については別稿で報告したい。

- ㉓ 瀬子吉久他「岩出の遺跡—祭主館址、城址とその遺物」『歩跡3号』皇学館大学考古学研究会 1976
- ㉔ 小玉道明他「離宮院跡発掘調査報告」小俣町教育委員会 1980
- ㉕ 伊藤久嗣「高向遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1968
- ㉖ 岩中淳之「殿垣外遺跡発掘調査報告」伊勢市教育委員会 1982
- ㉗ 註⑩、註⑭と同じ
- ㉘ 註②と同じ
- ㉙ 倉田康夫「飯高・度会郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』弥永貞夫他編 東京堂出版 1979
- ㉚ 三重県教育委員会編『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976



中新田遺跡出土円筒埴輪片

2. 遺構

基本的な土層の層序は8層からなり、第1層灰褐色粘質土（耕作土）、第2層赤褐色砂層（床土）、第3層茶灰色砂層、第4層灰褐色砂質シルト、第5層茶褐色砂質シルト、第6層褐灰色砂質シルト、第7層黒褐色砂質シルト、第8層黄褐色シルト質土（地山）であり、第3層～第7層が遺物包含層となっている。

なお、文末『中ノ垣外遺跡における古地理の変遷と住居群の立地』に詳述するが、当遺跡では地理学的見地から、遺跡の立地について今までにはない細かな地形分類及び地質分類を試みたが、層序の分類は驚くほど細分化されている。しかも、当遺跡は宮川の河岸段丘上に立地しているが、当然受けたであろう宮川の氾濫や洪水についても、その時期、回数や洪水の方向等が検証されており、南（上流）から北（下流）へかけて傾斜していることから実証された。これによれば、北側になるほど土砂の堆積が厚くなっている。また東西方向の断面は、川に近い西側から東の方向へゆるく傾斜しており、東側で厚い包含層が確認された。

当遺跡で検出された遺構としては、竪穴住居、掘立柱建物、土壇、柵列、溝、井戸、土壇墓等がある。このうち、竪穴住居は弥生時代中期に比定されるものが2棟、古墳時代後期に比定されるものが3棟、奈良時代2棟の合計5棟が検出された。また、掘立柱建物は平安時代のもので鎌倉時代とに大別される。

なかでも、平安時代のものには、比較的大きな掘形の柱穴を持つものと、小さな掘形の柱穴を持つものとに分けられる。

鎌倉時代のものには、柱穴掘形内に川原石を根石のように据えたものがある。

土壇は、古墳時代から鎌倉時代のものまで確認されている。後で詳述するが、鎌倉時代に比定される掘立柱建物の一隅に1間×2間程度の浅い方形の掘形を持った土壇も検出されている。そのうちで2つの土壇については、周囲に川原石を積み重ねた（現存しているのは2～3方向のみ）土壇も検出された。

土壇墓は総数23基が確認されたが、なかでもS X 47、S X 56からは和鏡が1面ずつ出土している。

以下、検出された遺構について概述する。

1. 竪穴住居

S B 74 発掘区の南端近くで検出された。規模は南北4.3m、東西3.8mの隅丸方形を呈し、地山を8cmほど掘り込んでいる。柱穴は4隅にあり径25～30cmの円形を呈しており、深さは15cmほどである。中央の西寄りに焼土が認められ、北辺には浅い土壇が掘り込まれている。方位は長軸方向で北で39度東にふっている。

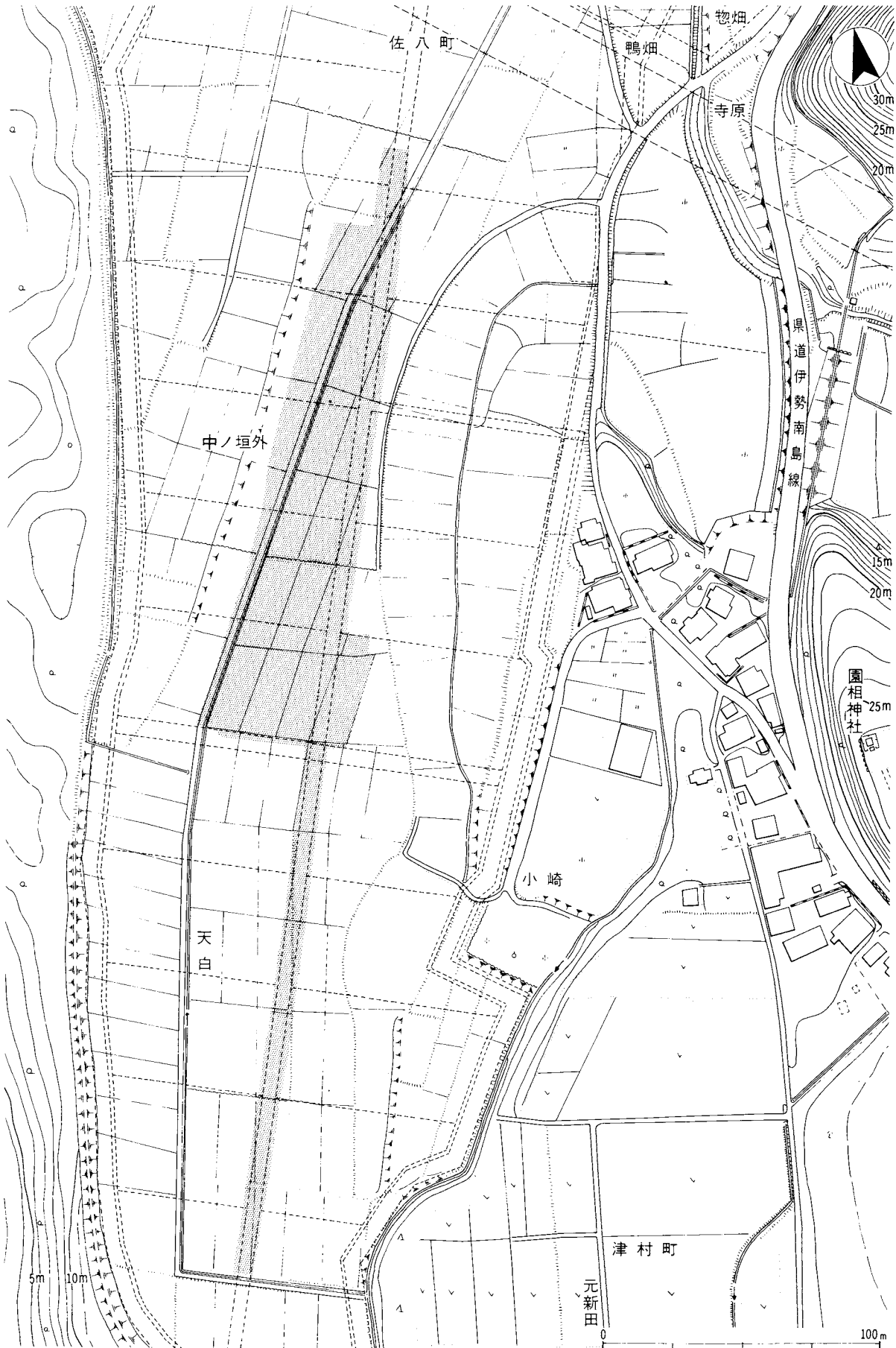
S B 75 S B 74の南側2mほどの位置に検出された。規模は南北3.6m、東西2.8mの隅丸方形で、地山を10cmほど掘り込んでいる。柱穴は4隅にあり径20cmほどの円形を呈しており、深さは25cmほどである。中央部に焼土があり、炉跡と考えられる。南西隅には貯蔵穴と考えられる深さ15cmほどの掘り込みがある。床面には多数の土器片が散在しており、特に甕（15）がほぼ完形に近い姿で出土した。方位は長軸方向で北で39度東へふっている。

S B 74、S B 75は共に出土した土器から、弥生時代中期の前半に比定される。

S B 24 発掘区のほぼ中央に位置する。規模は南北4m、東西5.2mの方形を呈し、地山を40cmほど掘り込んで構築されている。柱穴は東側に2個検出したが、西側は不明である。東壁の中央部にカマド跡と推定される焼土が確認された。カマドの西側床面に貼り付いた状態で須恵器の杯身（23）が出土した。方位は長軸が東西方向を向いており、北で62度西へふっている。

S B 67 規模は南北4.3m、東西3mの方形を呈しており、地山を15cmほど掘り込んで構築されている。明確な柱穴や、焼土は確認されなかった。この竪穴住居からは甕（29）が出土している。方位は長軸が北で24度東へふっている。

S B 71 規模は南北約3m、東西約3.9mの方形を呈しており、地山を15cmほど掘り込んで構築されている。主柱穴が4個確認されている。また北側には柱穴が20cmほど離れた位置に3個並んでおり、南



第10-3図 発掘区平面図 (1 : 2,000)

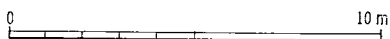
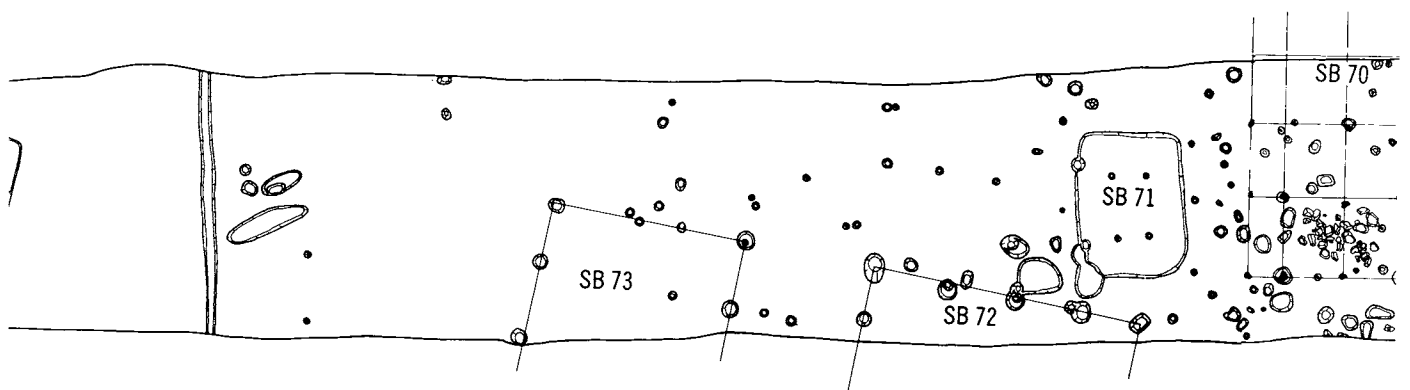
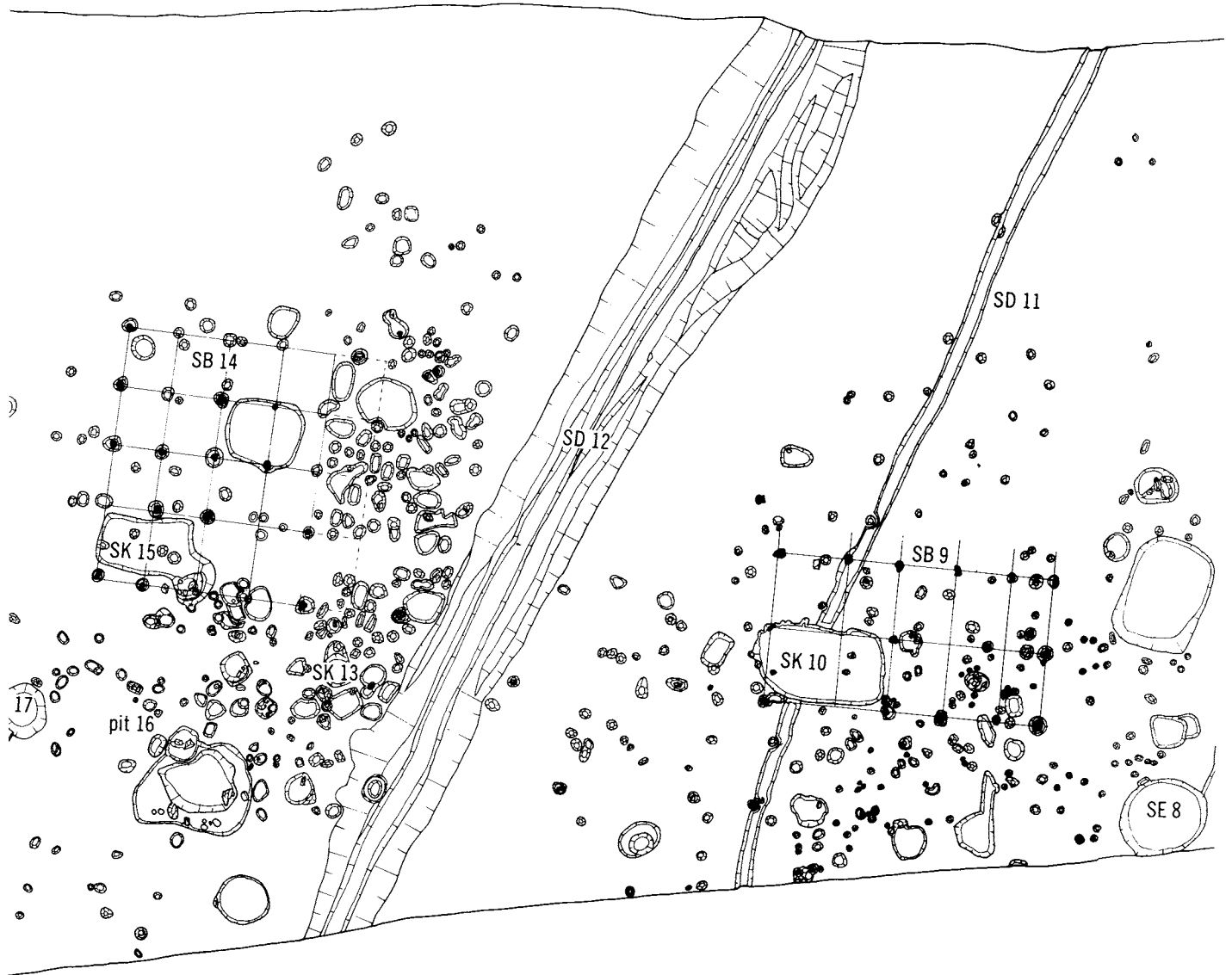


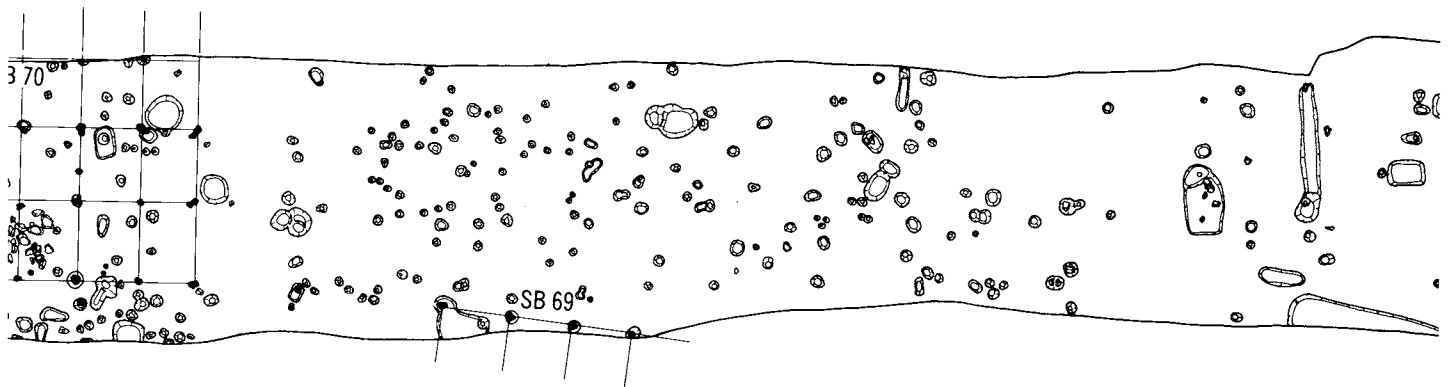
第10-4-1図 遺構平面図 (1:200)



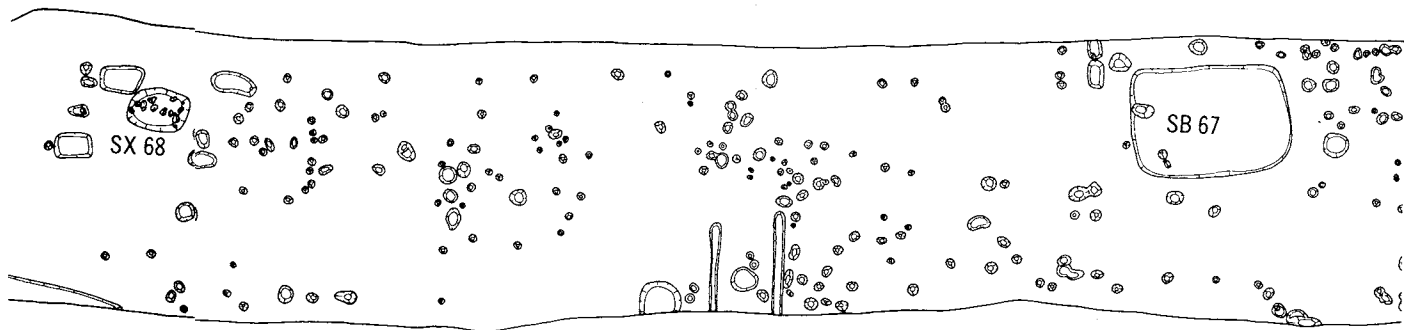
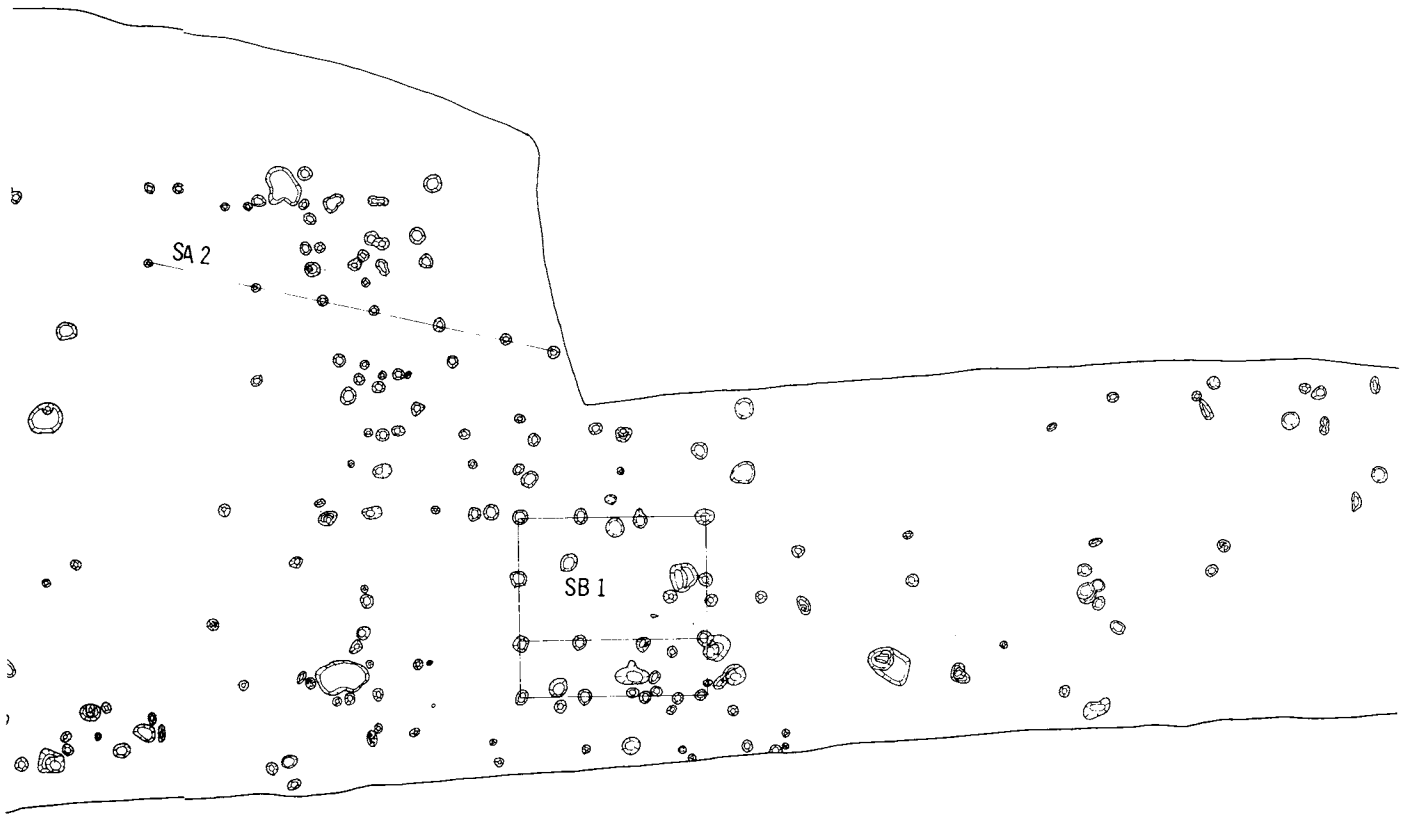
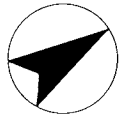


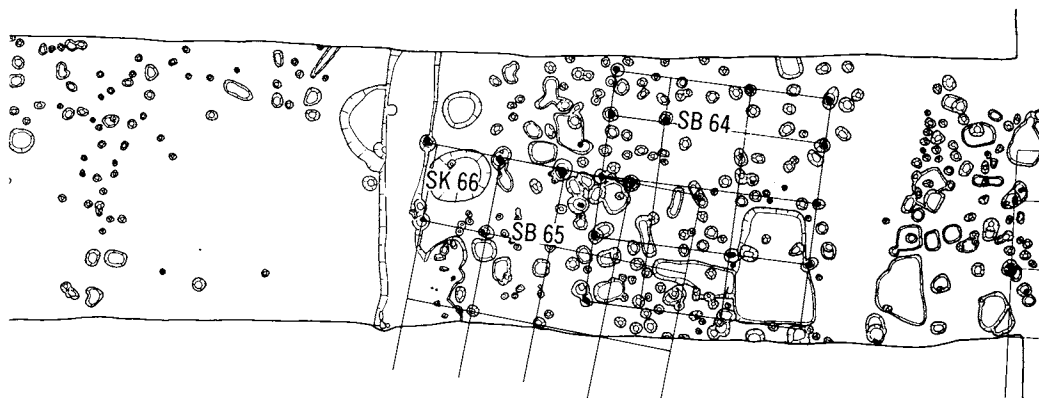
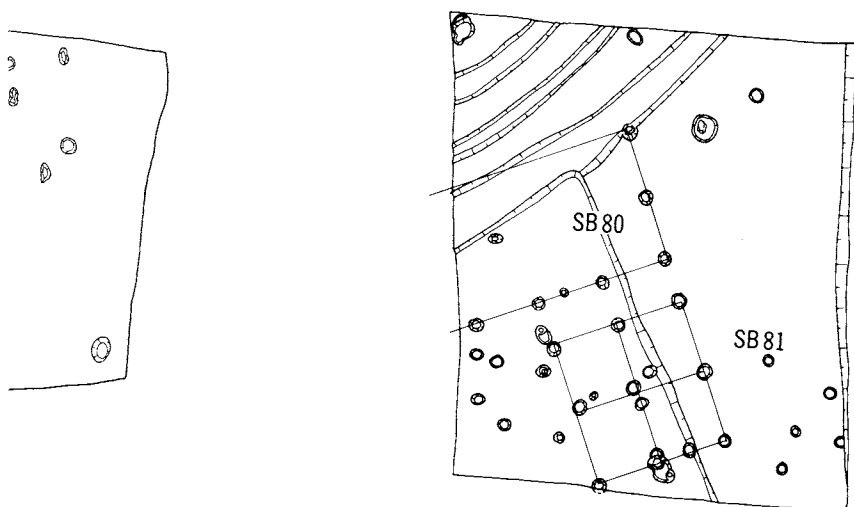
第10-4-2図 遺構平面図 (1 : 200)





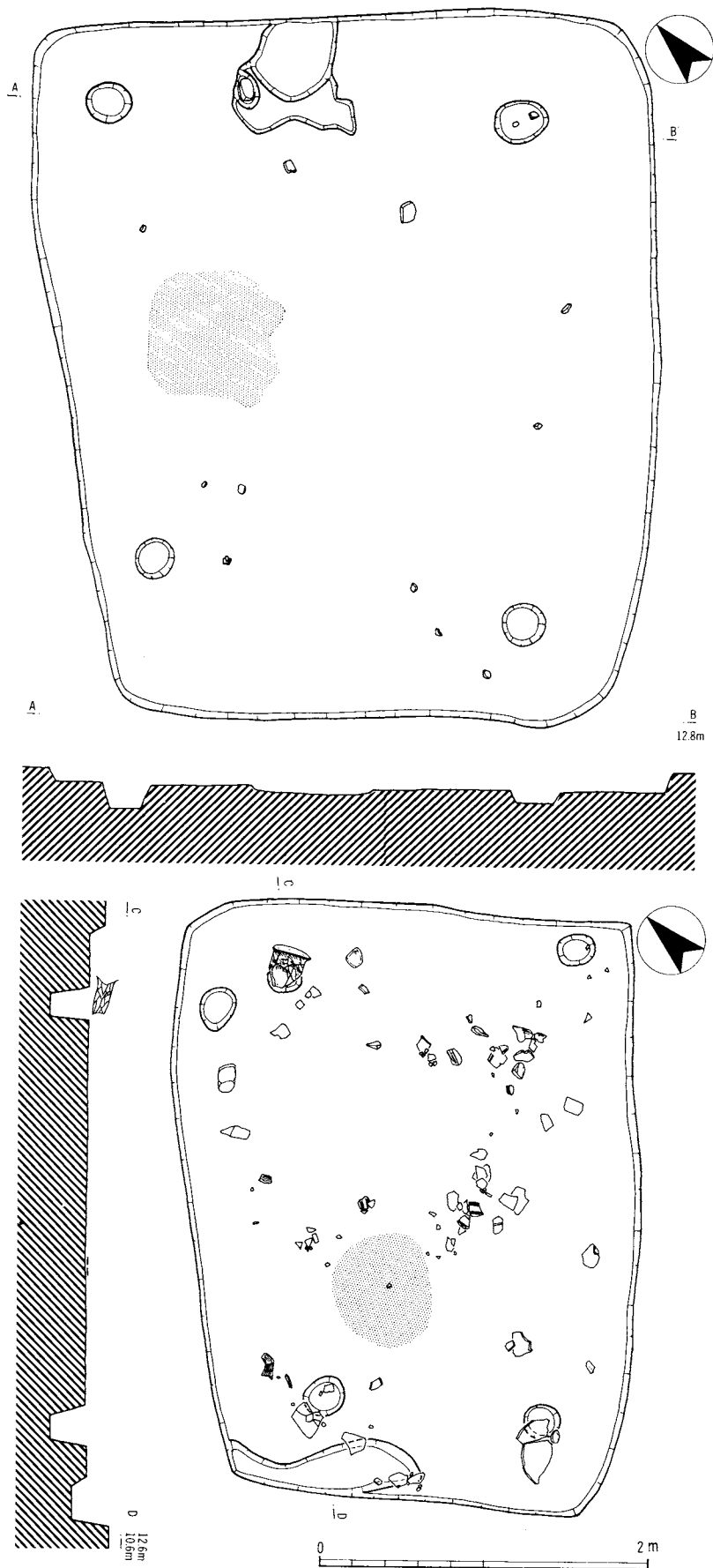
第10-4-3図 遺構平面図 (1 : 200)





第10-4-4図 遺構平面図 (1 : 200)





第10-5図 S B 74(上)・S B 75(下) 実測図 (1:40)

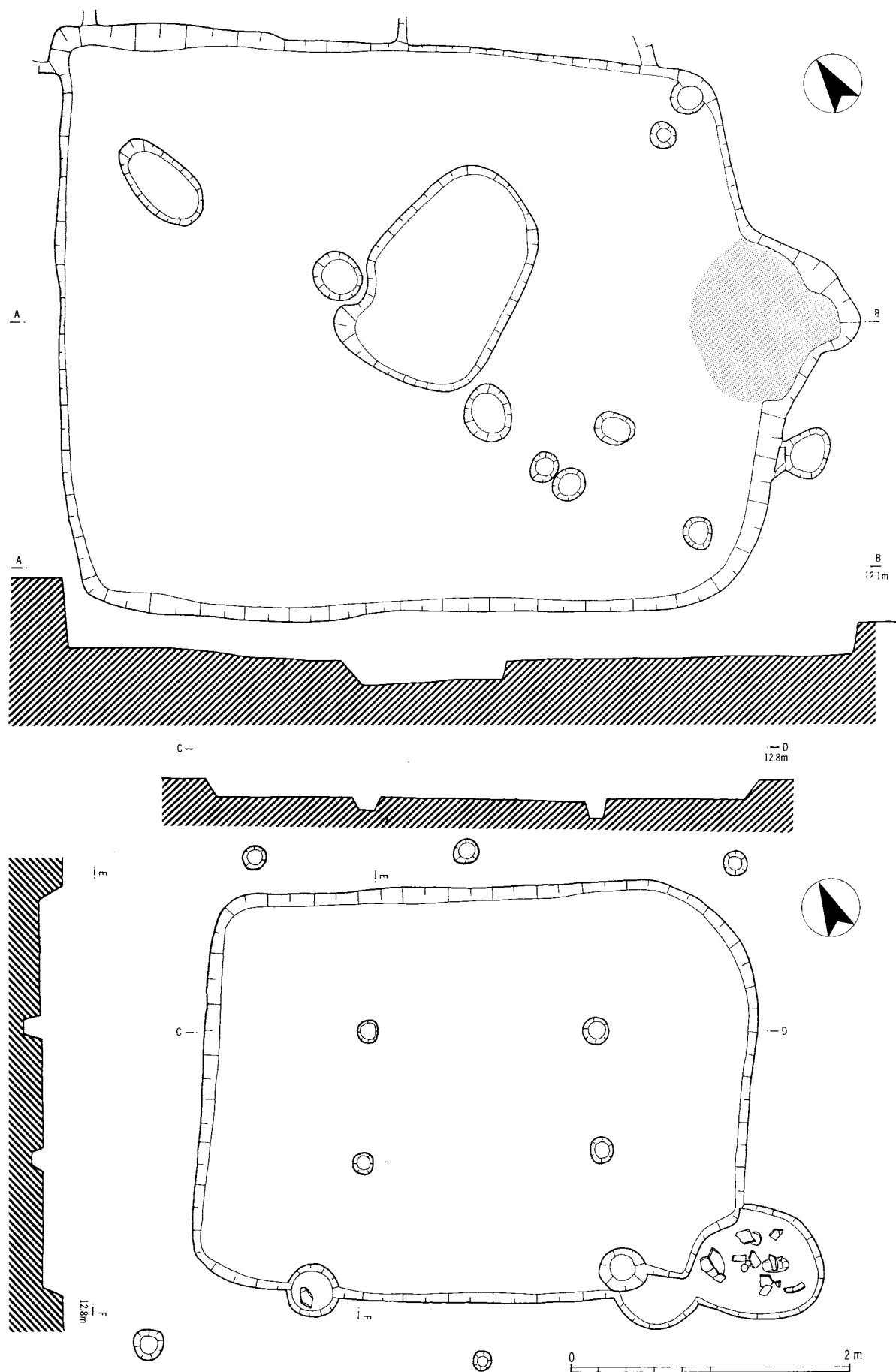
側では40cmほど離れた場所に、北側の柱穴と対応する形で2個の柱穴が確認された。これらの柱穴については側柱穴の可能性が考えられる。また、南東隅には壁からはみ出した形で、カマドが確認され、甑(28)が出土している。方位は長軸が北で65度西へふっている。

S B 24、S B 67、S B 71は共に出土した土器の特徴から古墳時代後期と考えられる。

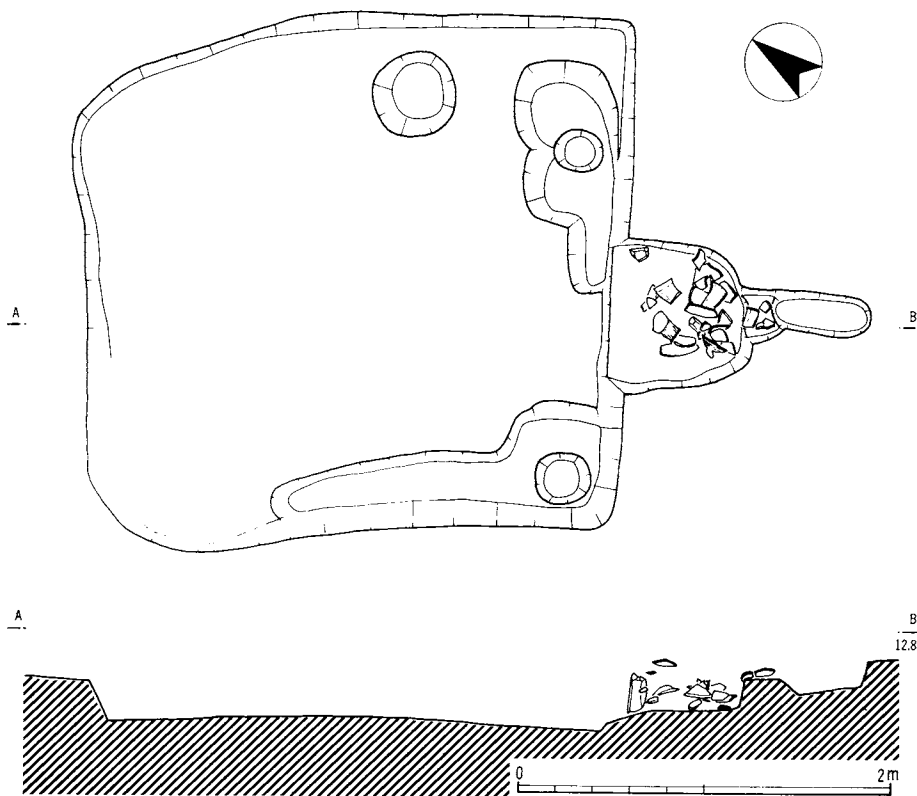
S B 58 規模は南北3.1m、東西4.7mの方形を呈し、地山を25cmほど掘り込んで構築されている。明確な柱穴は確認されなかったが、東寄りの北壁に接した所と、中央部西壁に接した所の2カ所に焼土が確認された。この北壁に接した焼土中からは、土師器杯・皿・甕・刀子(45~60)など多数が出土した。方位は長軸で北に対し49度西へふっている。

S B 62 調査区の西端に位置し、南北2.6m、東西3mの規模で地山を25cmほど掘り込んで構築されている。東側には、70cmほどカマドが延びている。また、カマドの入口には1対の板石が支柱として立てられており、カマド内に鍋や甕(61~67)が散乱していた。カマドから先には、長さ70cmほどの煙道と考えられる掘り込みが東方向に続いている。住居内には明確な柱穴は確認されていないが、南端と東側には貯蔵穴と見られる掘り込みが確認された。方位は、長軸で北に対し35度西へふっている。

S B 58、S B 62共に出土した土器の特徴から奈良時代と考えられる。



第10-6图 SB24(上)、SB71(下) 实测图 (1:40)



第10-7図 SB 62実測図 (1 : 40)

2. 掘立柱建物

SB 1 南北棟。3間×3間で、東側に廂をもつ建物である。柱間は桁行で1.80+1.60+1.60m、梁行は1.66mの等間である。廂柱の出は1.44mである。柱掘形は、身舎部で径40cm前後、深さ40~50cmであり、廂部で径30cm、深さ20cm前後と小さく浅い。建物柱穴内より灰釉碗底部(86)、土師器杯(84、85)の他、同甕、杯等の小片が出土。平安時代後半の建物と推定。

SB 3 2間分×5間を検出した東西棟建物と推定。柱穴内すべてに、桁方向に長軸を揃えて据えられた15~30cm、厚さ15cm前後の川原石を根石にもつ。柱間は、推定梁行で北より1.62+1.62+1.84+1.84+2.00mと2間ずつ等間で最南間のみ長い。桁行は、2.16mの等間である。

柱掘形は、径24~48cmと種々である。その中に据えられた根石上面のレベルは、推定桁行の北側柱は標高11.51~11.58mと高いが、それを除く梁行西側柱は約20~30cm低い。根石の高低で推察すれば、

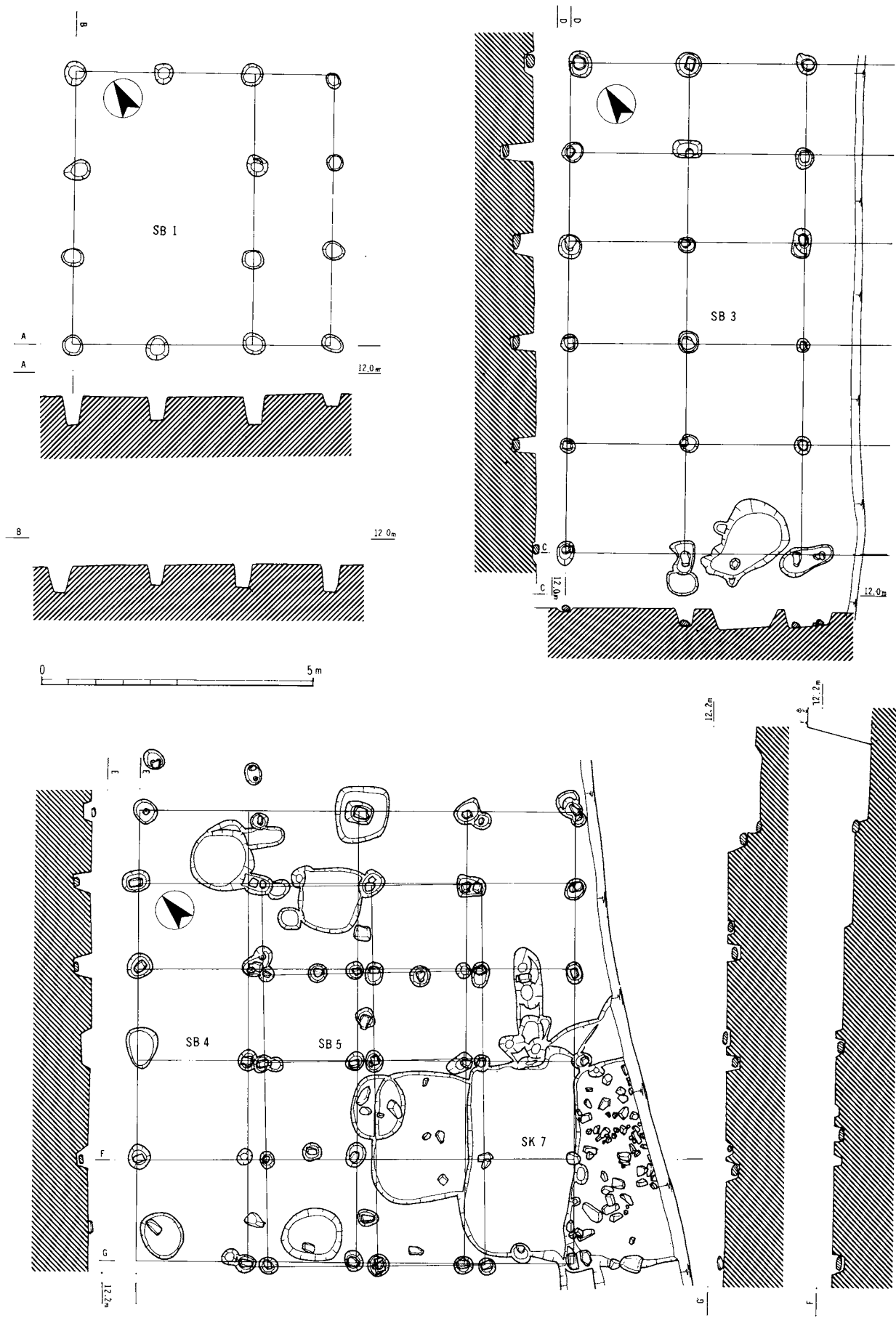
北側1間分は廂(縁)とも考えられる。なお、東柱根石上面のレベルは、西側柱より高くなり(北側柱よりは低い)バラツキがある他は特色的なことはみあたらない。建物柱穴内より土師器皿(179、180)、甕、灰釉碗、山茶碗片が出土。鎌倉時代前半頃の建物と推定。

SB 4 東西棟。4間×5間で、北側に廂(縁)をもつ建物と推定。ほとんどの柱穴に15~20cmの川原石を根石にもつ。しかし、据え方には統一性はみられない。柱間は、身舎部で桁行2.0mの等間、梁行で1.56+1.64+1.84+1.84mと不揃いである。北廂(縁)の出は1.36mである。柱掘形は、径30~50cm、根石上面のレベルは北側柱が高く、このことより廂(縁)と推定した。身舎部側柱は、ほぼ同じ高さで、東柱は間取りの関係か±20cm程の差がある。

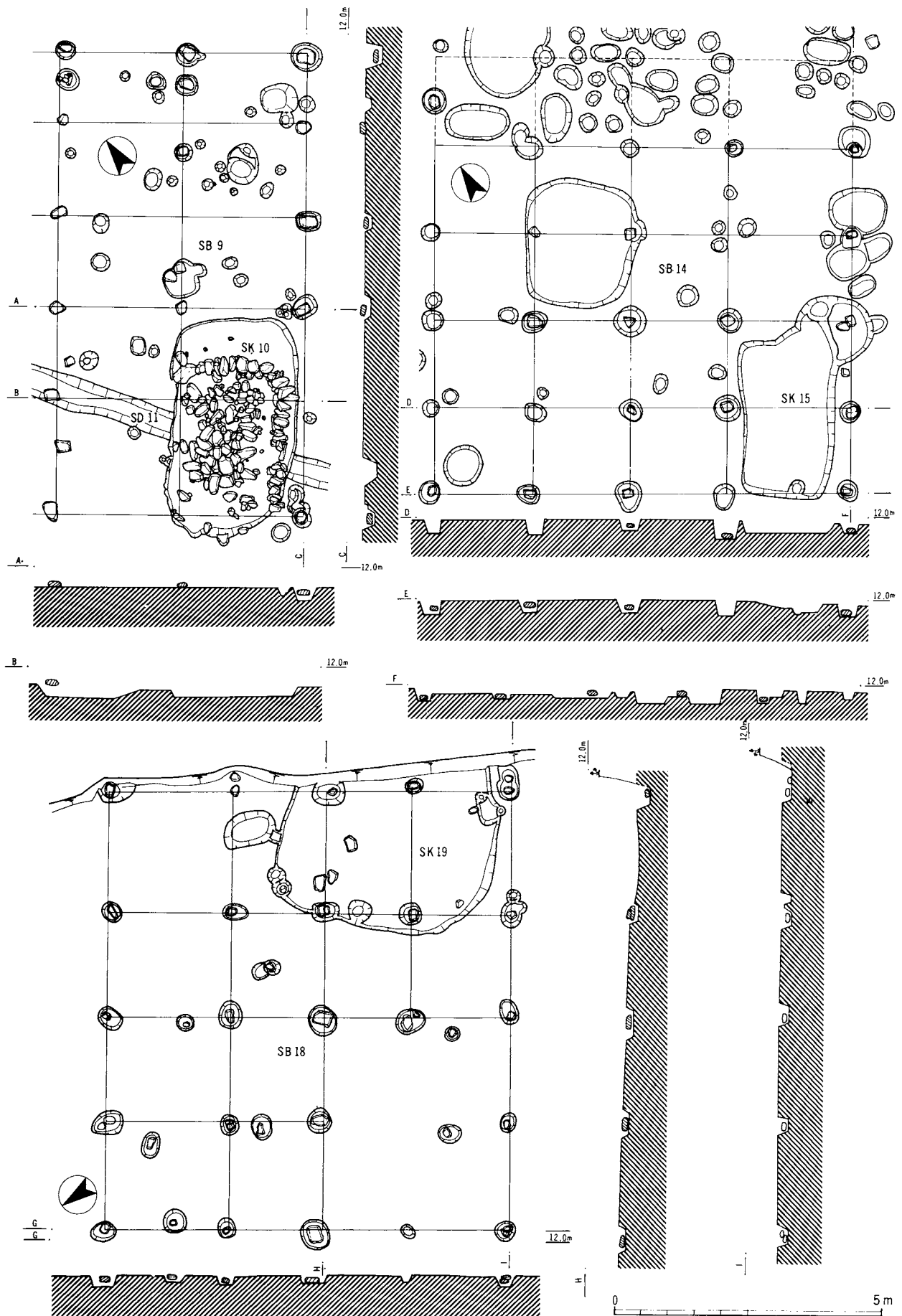
南東隅には、東西1間、南北2間内に収まる土壇7が伴うと考えられる。この土壇は東と西側で他の土壇と切り合うが、前後関係はよくわからなかった。建物柱穴内からは、土師器甕、皿小片、土壇7からは、土師器皿(173)、台付碗(174)、鍋(178)、山茶碗(175)、常滑鉢(177)、渥美壺(176)が出土。鎌倉時代前半頃の建物と推定。

SB 5 南北棟。SB 4内で建替えられた4間×2間の建物と推定。柱間は梁行で2.0mの等間であるが、桁行は1.62+1.62+1.78+1.96mと不揃いである。SB 4との前後関係は不明。

SB 9 2間分×5間を検出した北側に廂をもつ東西棟建物と推定。柱掘形が削平され根石のみ残存している柱穴が多く、そのため西側への広がりには検出できなかった。検出した柱穴は、ほぼ梁行に長軸を揃えて据えられた30~40cm、厚さ15cm前後の川原石を根石にもつ。柱間は身舎部梁行で1.70+1.70



第10-8图 掘立柱建物实测图 (1:100)



第10—9 图 掘立柱建物实测图 (1 : 100)

+1.70+2.14mと最南間だけ長く、桁行で2.3mの等間である。北廂の出は、1.28mである。土台石上面のレベルは側柱は低いが、束柱はそれより20cm前後高くなっている。南東隅には東西1間、南北2間内に収まる土壇10が伴うと考えられる。建物柱穴内から土師器皿、山茶碗小片が出土。土壇からは、土師器皿(250)、鍋、山茶碗、鉢、常滑甕片、砥石(251)が出土した。鎌倉時代後半頃の建物と推定。

S B 14 東西棟。4間×4間の建物と推定。数個を除く柱穴内に、桁行にほぼ長軸を揃えた川原石を根石にもつ。柱間は桁行で1.78+1.78+1.78+2.30mと最東間だけ長く、梁行は1.6mの等間である。柱掘形は径40~60cm、根石のレベルは側柱、束柱ともほぼ同じ高さである。南東隅には東西1間、南北2間内に収まる土壇15が伴うと考えられる。なお、建物の北側には対応しそうな根石を伴わない柱穴が検出されており、北へ一間分のびるかもしれない。建物柱穴内から土師器皿、鍋片が出土した。鎌倉時代後半頃の建物と考えられる。

S B 18 4間×4間の東西棟建物である。2個を除くすべての柱穴に、柱通りにはほぼ長軸を揃え、柱穴中程に据えられた15~30cmの川原石を根石にもつ。柱間は、桁行で2.00+1.90+1.90+2.24m、梁行で2.30+1.74+1.62+1.86mと不揃いである。柱掘形は径30~50cmで、根石上面レベルは側柱、束柱とも標高11.2~11.3mとほぼ同じ高さである。建物柱穴内より土師器皿(232、233)、鍋口縁(234)、山茶碗底部、白磁片が出土。なお、南東隅にて検出した土壇19は1間×2間内に収まらず浅いもので、また方向もずれることより、建物に伴う土壇とは考え難い。鎌倉時代後半頃の建物と推定。

S B 22 部分的に柱穴がひろえず、また、根石をもたない柱穴があるが、4間×4間の東西棟建物と推定した。柱間は、桁行で1.90+1.90+1.90+2.70m、梁行は1.90mの等間になるよう復元した。残存根石上面レベルは、ほぼ同じ高さである。建物に伴うと考えられる東西1間、南北2間に収まる土壇21の位置は、他の建物内に収まる土壇例とは異なっている。このことより、土壇四隅の柱穴で覆屋される堅穴状建物かもしれない。建物柱穴内より、土師器皿、鍋小片が、土壇21からは、常滑甕(224)、常滑

鉢(222)、山茶碗(221)、おろし皿(220)、土師器鍋(219)、皿・小皿(213~218)、砥石(223)、青磁片の他、土師器皿小片が多数出土した。鎌倉時代後半の建物と推定。

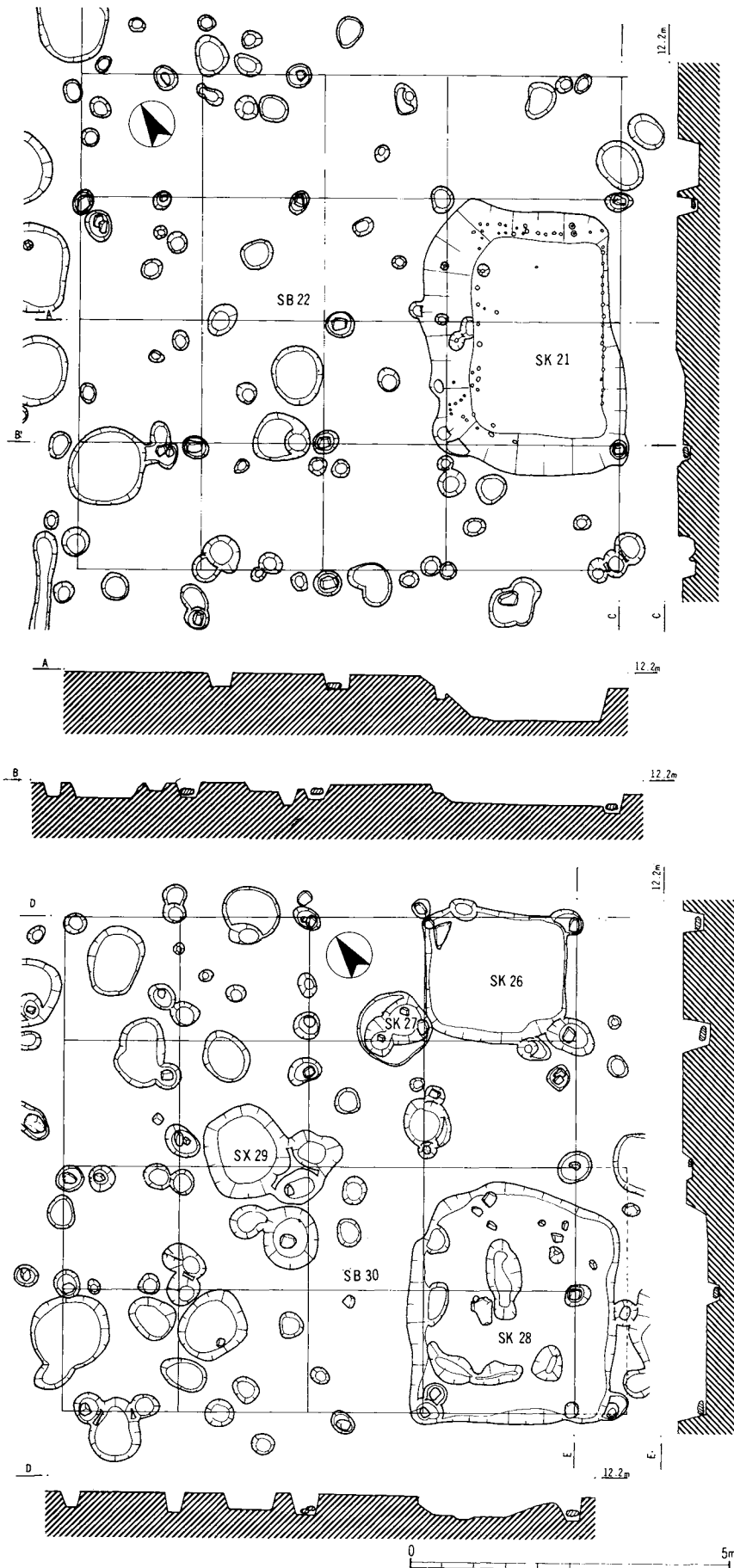
S B 30 本建物も部分的に柱穴がひろえないが、4間×4間の東西棟建物と推定した。柱間は桁行で1.80+2.00+1.80+2.34mと不揃いであるが、梁行はほぼ1.90mの等間である。根石上面レベルは、側柱はほぼ同じ高さであるが、束柱はバラツキがみられる。建物北東隅の1間×1間内に収まる四隅に根石をもつ土壇は、建物に伴うと考えられる。さらに、南東隅の土壇28も建物に伴うと考えられるが、南北は2間内に収まるが、東西は60cm程東へ出る。この土壇の東肩にはややずれるが柱穴をひろうことができ、2間×1間の孫廂を推定できるかもしれない。建物柱穴内より土師器皿、鍋片が出土。また、S K 26からは、土師器小皿(162~169)、皿(170、171)、山茶碗(172)が出土。鎌倉時代前半頃の建物と推定。

S B 33 南北棟。4間×4間、北、東、西側に廂をもつ3面廂の建物と推定。身舎は束柱をもつ3間×2間と考えられる。柱通りは良く、柱間は桁行で1.98m、梁行2.12mの等間である。廂の出は北で1.20m、東、西はほぼ1.50mである。身舎側柱の柱掘形は、径80cm前後、深さ50~60cmと大きく深いもので、束柱は小さく浅くなる。廂柱掘形は径30~40cm、深さ20cm前後と小さく浅くなる。なお、北、東、西側の柱の出は縁かもしれない。

身舎部南側で検出した柱穴は、当初梁側柱と考え4間×2間の身舎を想定したが、柱間が狭くまた梁行中央の柱穴も検出できず、身舎に付属する何らかの施設に伴う柱穴と考えた。その施設については、建築学的な検討が必要であるが、入口に伴う施設のようなものと考えられる。建物柱穴内より土師器杯(78~81)、甕(83)、灰釉碗(82)及び緑釉陶器、土師器片が出土した。平安時代後半頃の建物。

S B 35 南北棟。3間×2間の建物。柱通りは不揃いであるが、柱間は桁行で1.76m、梁行で1.74m程である。柱掘形は径40~60cm、深さ20~30cm程である。建物柱穴内より土師器甕(87、88)、及び杯片が出土。平安時代後半頃の建物。

S B 36 発掘区の関係上2間分×3間を検出した



第10-10図 掘立柱建物実測図 (1:100)

東西棟建物と推定。柱通りはやや悪く、柱間は桁行で2.14mの等間であるが、梁行は1.86+2.72+2.54mとかなり不揃いである。北側1間は廂かもしれない。柱掘形は径24~30cm、深さ12~20cmと小さく浅い。土台石はない。建物柱穴内からは遺物は出土しなかった。

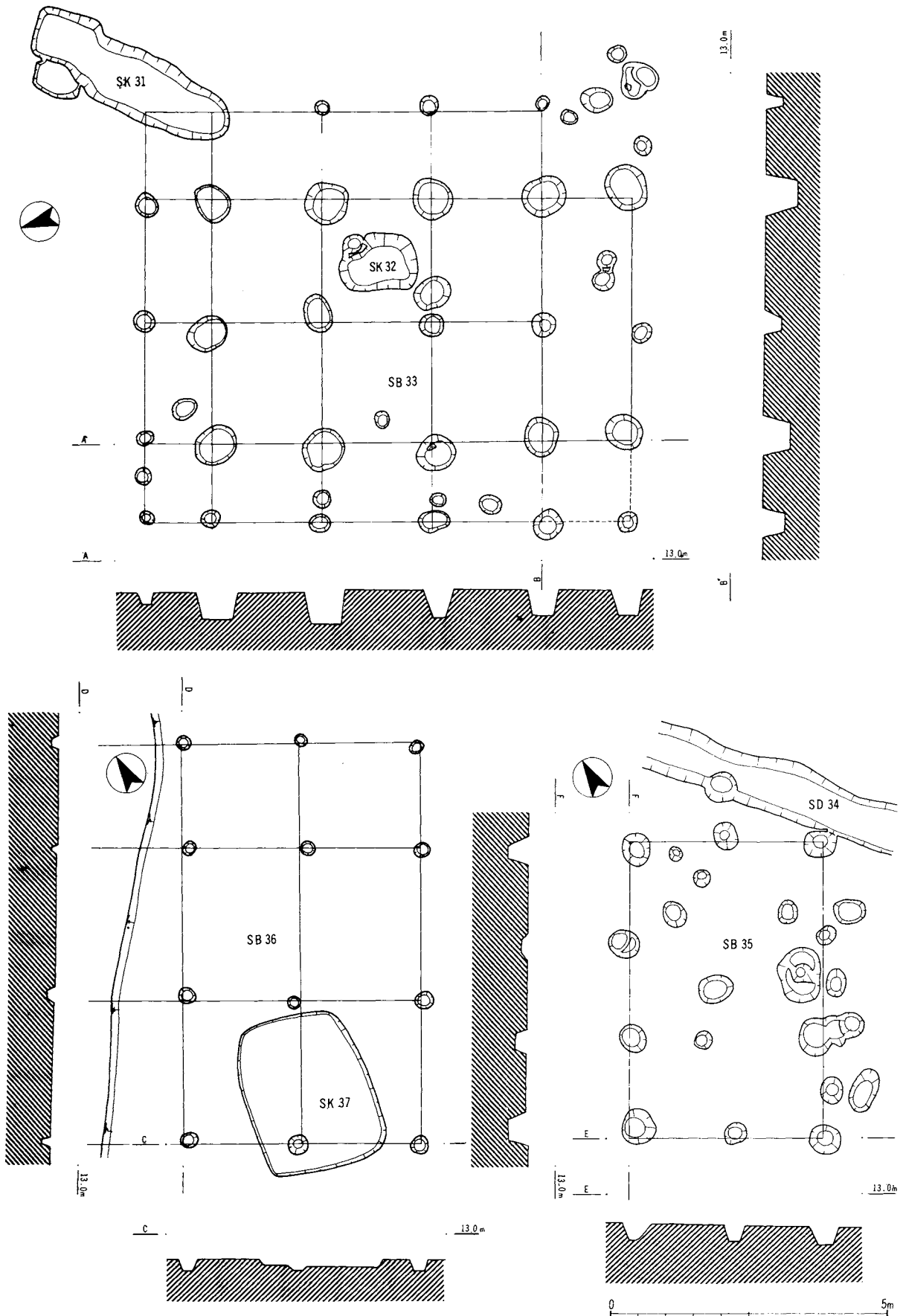
時期不明。

SB 40 東西棟。3間×3間の建物。柱通りは良いが、梁行第2・第3柱通り内には根石をもつ柱穴が対応して検出され、小さな間取りもしくは建替えが想定される。柱穴内根石上面のレベルは、側柱は低いが、東柱は10~15cm高く据えられている。建物南東隅には、東西1間、南北2間内にほぼ収まる方形土壇39が伴う。この土壇の底は厚さ3cmほど叩きしめられたように固いものであった。建物柱穴内より山皿(210、211)、鍋口縁(212)、皿(208、209)が、土壇内からは土師器皿、鍋片が出土した。鎌倉時代後半頃の建物。

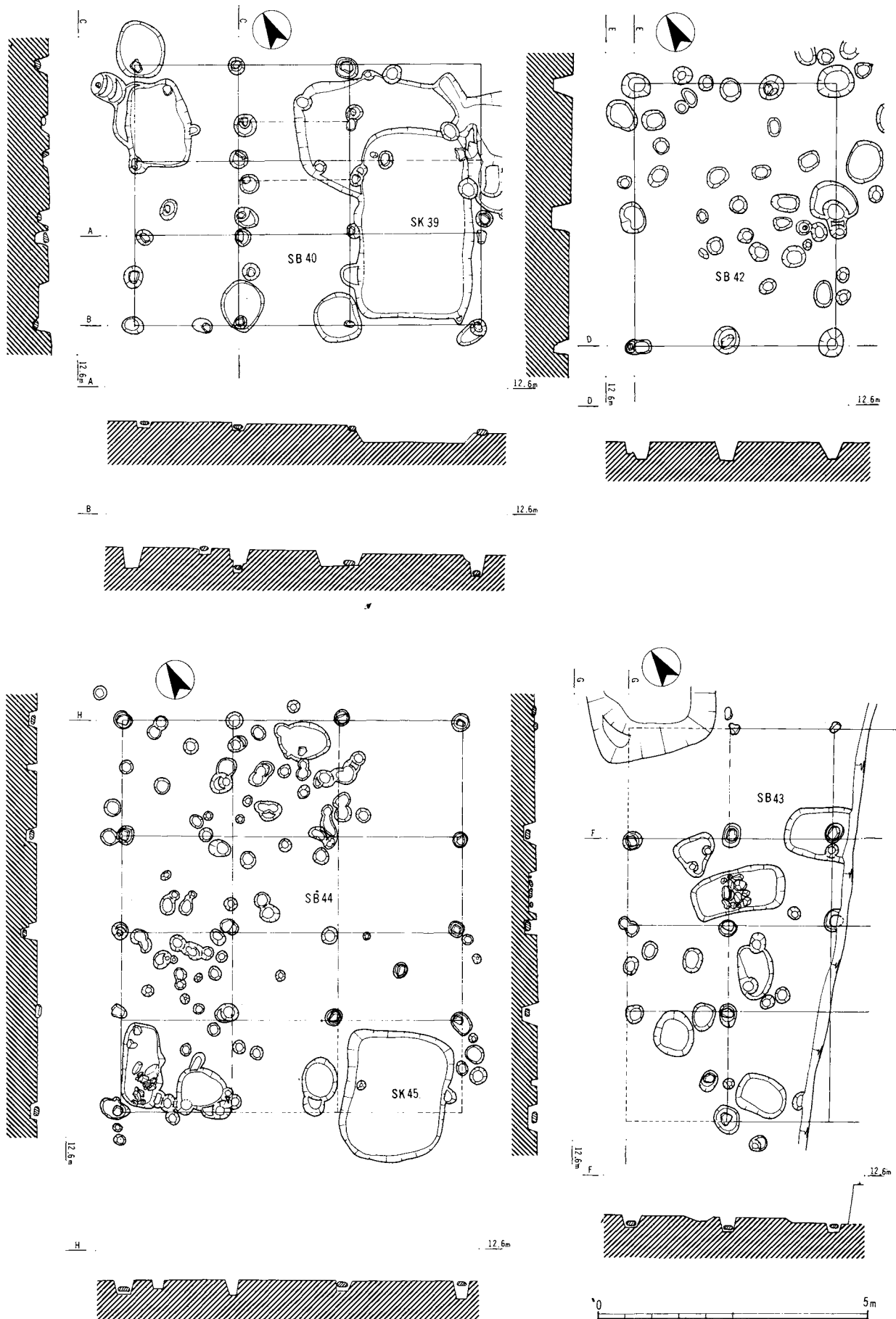
SB 42 2間×2間の南北棟建物。柱間は桁行で2.40mの等間、梁行は1.70+2.00mと不揃いである。柱掘形は径40~60cm、深さ21~37cmである。建物柱穴内からは遺物は出土しなかった。

時期不明。

SB 43 2間分×4間を検出した東西棟建物と推定。



第10—11图 掘立柱建物实测图 (1 : 100)



第10—12図 掘立柱建物実測図 (1 : 100)

柱穴内のほとんどに20cm前後の川原石を根石にもつ。根石上面のレベルは側柱、束柱ともほぼ同じ高さである。柱間は梁行で2.00+1.60+1.60+2.00m、桁行は1.88mの等間である。建物内北西にて検出した土壇は中央に石敷がなされ、一部石材は火熱を受けたようで赤化し、また、炭化物も多く認められた。しかし、遺物は全く出土せず建物に伴うか否かは不明。なお、桁行は2間と推定したが最西間は2間×1間の出間、もしくは孫廂かもしれない。建物柱穴より土師器皿、鍋、山茶碗等が出土。鎌倉時代後半の建物。

S B 44 4間×3間の南北棟建物と推定。ただし、3間×3間建物の南西隅に1間四方の室が伴う建物かもしれない。柱間は桁行で2.12+1.76+1.60+1.68m、梁行で2.04+1.96+2.28mと共に不揃いである。柱穴内の根石上面のレベルは、側柱、束柱ともバラツキがある。南西隅の側柱に接する長さ1.5m、幅80cmの方形土壇は、遺物もなく建物に伴うかどうかは不明だが厠かもしれない。なお、北東隅の柱穴根石の下からは、鬼門を意識してか渥美産の壺(197)が一括で出土した。(復元時には、不足する破片が多く完形にならない) 鎌倉時代中葉の建物。

S B 48 南北棟。3間×4間の建物で東と西側に廂をもつ。東廂は、この東側に対応しそうな柱穴が検出され、別の建物柱穴とも考えたが、柱筋が通らぬことより廂とした。身舎部は3間×2間と判断したが、南梁行第2柱穴の北にも対応する柱穴があり2間×2間の身舎に南廂の可能性も窺えるが、径が小さく浅いもので束柱と考えた。柱間は、桁行で2.14mの等間、梁行は不揃いである。東廂の出は1.1m、西廂の出は1.36mである。なお、廂については間が異なり一方は、隠し堀かもしれない。建物柱穴より土師器糸切り皿(130)、台付碗(136)、杯(131~135)、灰釉碗(137)、山茶碗底部、緑釉片が出土。

平安時代後半頃の建物。

S B 49 5間×1間分を検出した南北棟建物と推定。建物側柱の東と南側で対応しそうな柱穴を検出したがまとまりをみない。柱間は桁行で2.1m前後のほぼ等間で、梁行は2.62mである。柱掘形は径30~50cm、深さは側柱で24~37cm、束柱は10~23cmと浅い。建物柱穴より緑釉陶器、灰釉陶器、土師器杯

小片が出土。平安時代末頃の建物。

S B 53 5間×5間。北と西側に廂をもつ東西棟建物と推定。もしくは、4間×4間の身舎部の北東に、2間×1間の孫廂(出間)を想定することも可能である。柱間は桁行で1.80+1.80+1.88+2.44mで推定西廂の出は1.40m、梁行は1.64+1.70+1.64+1.88mで推定北廂の出は1.24mとなる。根石上面レベルは、側柱はほぼ同じ高さであるが、束柱ではバラツキがみられる。南東隅の南北2間×東西1間内にほぼ収まる土壇52は、深さはやや深いが建物に伴うものと考えられる。建物柱穴内より土師器皿、鍋等の小片。土壇52からは土師器小皿(187、188)、鍋(193)、山皿(189)、山茶碗(190)、おろし皿(191)、鉢(192)等が出土。鎌倉時代中葉頃の建物と推定。

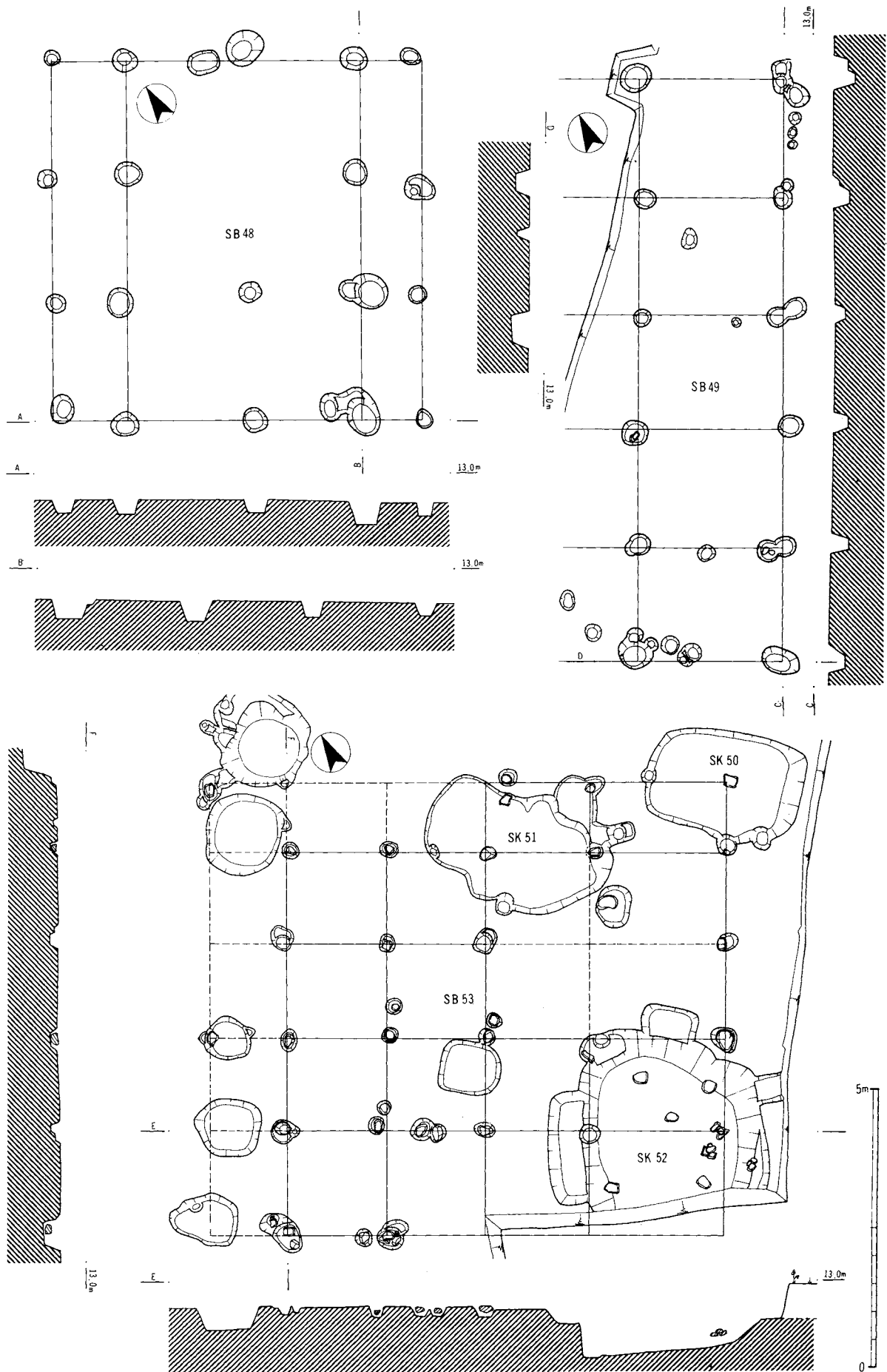
S B 59 南北棟。3間×2間の建物で南に廂をもつ。建物西側に伴う3間分の柱穴は目隠し堀(柵)と推定した。柱間は桁行で2.54m、梁行は不揃いである。南廂の出は1.96mとなる。堀は西側へ1.62m出る。柱掘形は、身舎部で40~70cm、深さ20~30cmであるが、西側堀は径30cm前後、深さ20cmと小さく浅い。建物柱穴内より土師器甕、杯小片が出土。

平安時代末頃の建物と推定。

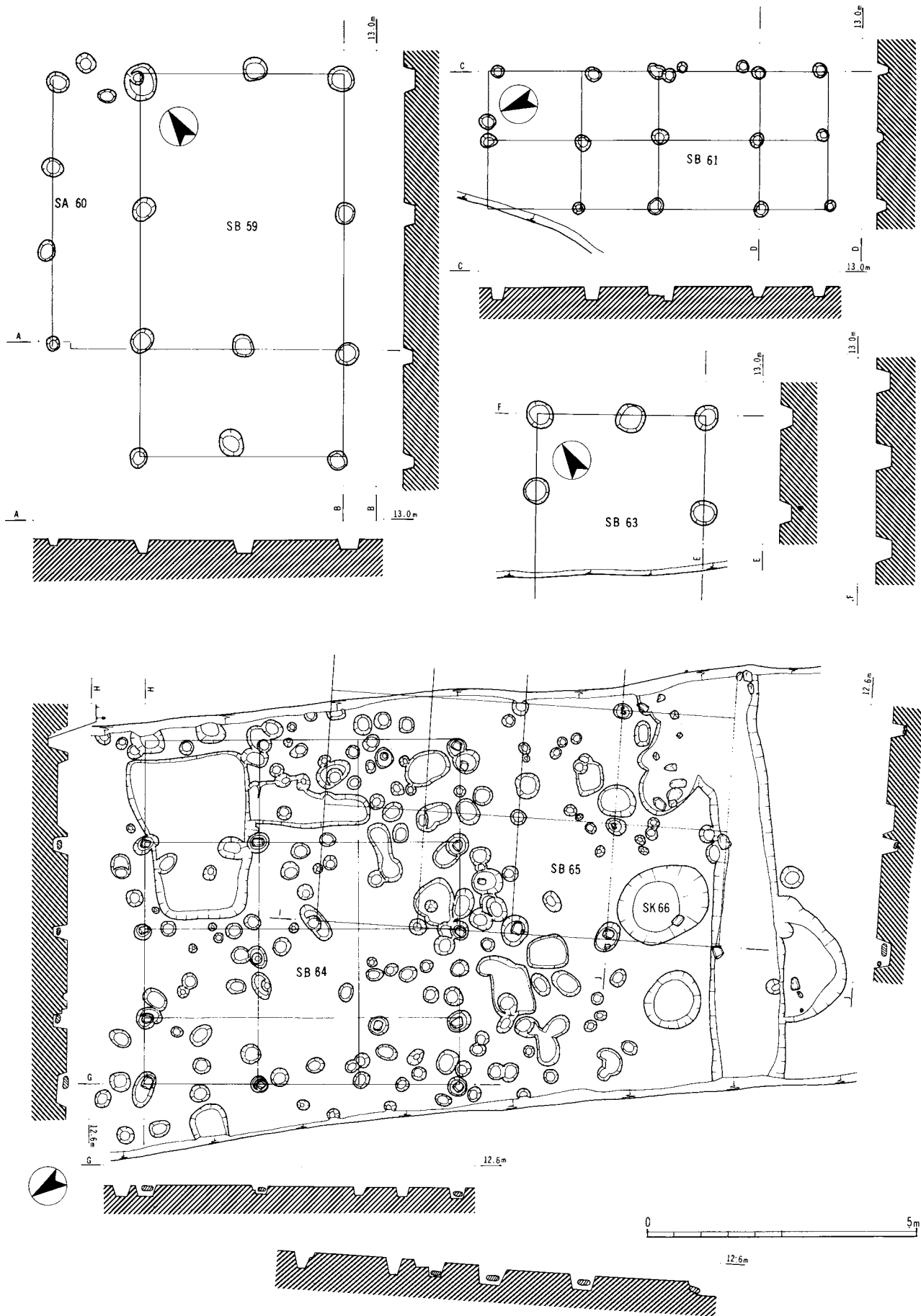
S B 61 南北棟。4間×2間の細長い建物と推定。柱間は桁行で1.28+1.88+1.42+1.72m、梁行で1.26mの等間である。柱掘形は径20~30cm、深さ10~20cmと小さく浅い。西へ数間伸びる可能性も考えられる。時期不明。

S B 63 発掘区の関係上、1間分×2間を検出した南北棟建物。柱間は梁行で1.72+1.40m、桁行は東1.78m、西1.40mと不揃いである。柱掘形は径50cm前後、深さ23~34cmである。建物柱穴内より土師器杯、甕小片が出土。平安時代末頃の建物と推定。

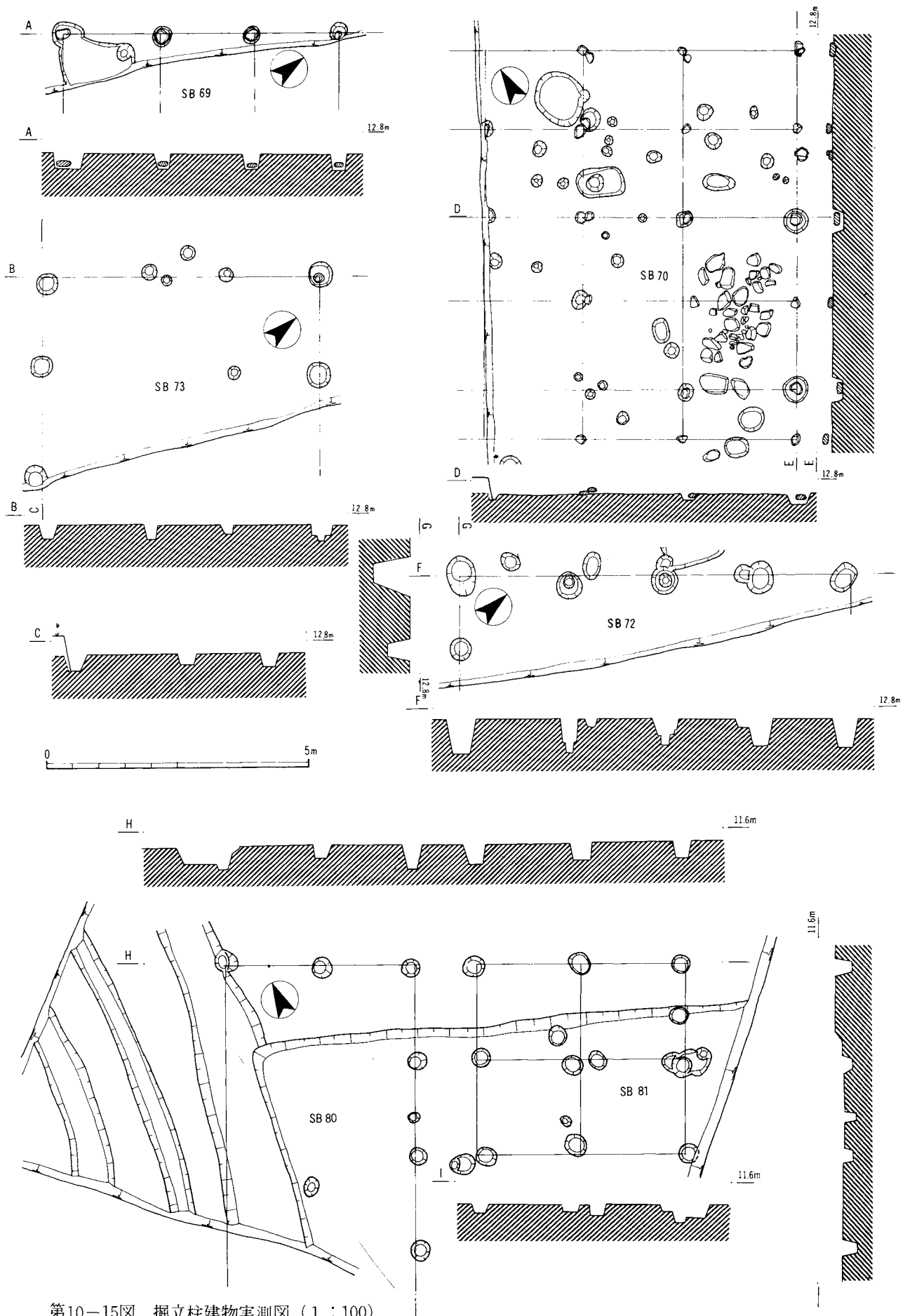
S B 64 南北棟。4間×3間の建物で西に廂をもつ。柱間は桁行で2.10+1.86+1.86m、梁行で1.90+1.60+1.60mとなり、廂の出は1.22mである。根石上面レベルは、身舎側柱は低くなるが、廂部はそれより15cm程高く据えられている。建物柱穴内より土師器台付碗、甕、皿片が出土。鎌倉時代前半の建物と推定。なお、北東隅にある土壇は、東西2間、南北1間内に収まるが、出土遺物からみれば、建物より古いと考えられる。



第10-13图 掘立柱建物实测图 (1:100)



第10—14図 掘立柱建物実測図 (1 : 100)



第10—15图 掘立柱建物实测图 (1 : 100)

S B 65 S B 64と一部重複する4間×2間分を検出した東西棟建物と推定。柱間は梁行で1.86+1.76+1.76+2.10mで、桁行は2.1mの等間である。根石上面レベルは、側柱、束柱ともほぼ同じ高さである。建物柱間内より土師器皿、鍋(231)、山茶碗片が出土。鎌倉時代後半頃の建物と推定。

S B 69 発掘区の関係上3間分の柱穴を検出したのみであるが、おそらく柱穴内に根石を伴う建物側柱の一部と推定した。建物柱穴内より土師器小皿(181・182)、皿(183)、鍋(186)、山茶碗(184・185)が出土。鎌倉時代前半頃の建物と推定。

S B 70 3間分×5間分を検出した南に廂をもつ東西棟建物と推定。遺構検出面が高いためか、柱掘形の不明なものが多く20cm前後の川原石が根石として残っている。柱間は梁行で、1.48+1.66+1.58+1.66m、桁行で2.08+1.90+1.90mとなる。南廂の柱の出は0.92mである。根石上面レベルは、廂部は高く、その他にはバラツキがみられる。建物に伴うと推定される南東隅にて検出した南北2間、東西1間内に収まる集石は、建物根石同様に土坑としての

掘形は検出できず、土坑底に伴うものか否か、また、性格等については不明である。建物柱穴内及び集石付近より土師器皿、鍋小片が出土。鎌倉時代後半の建物。

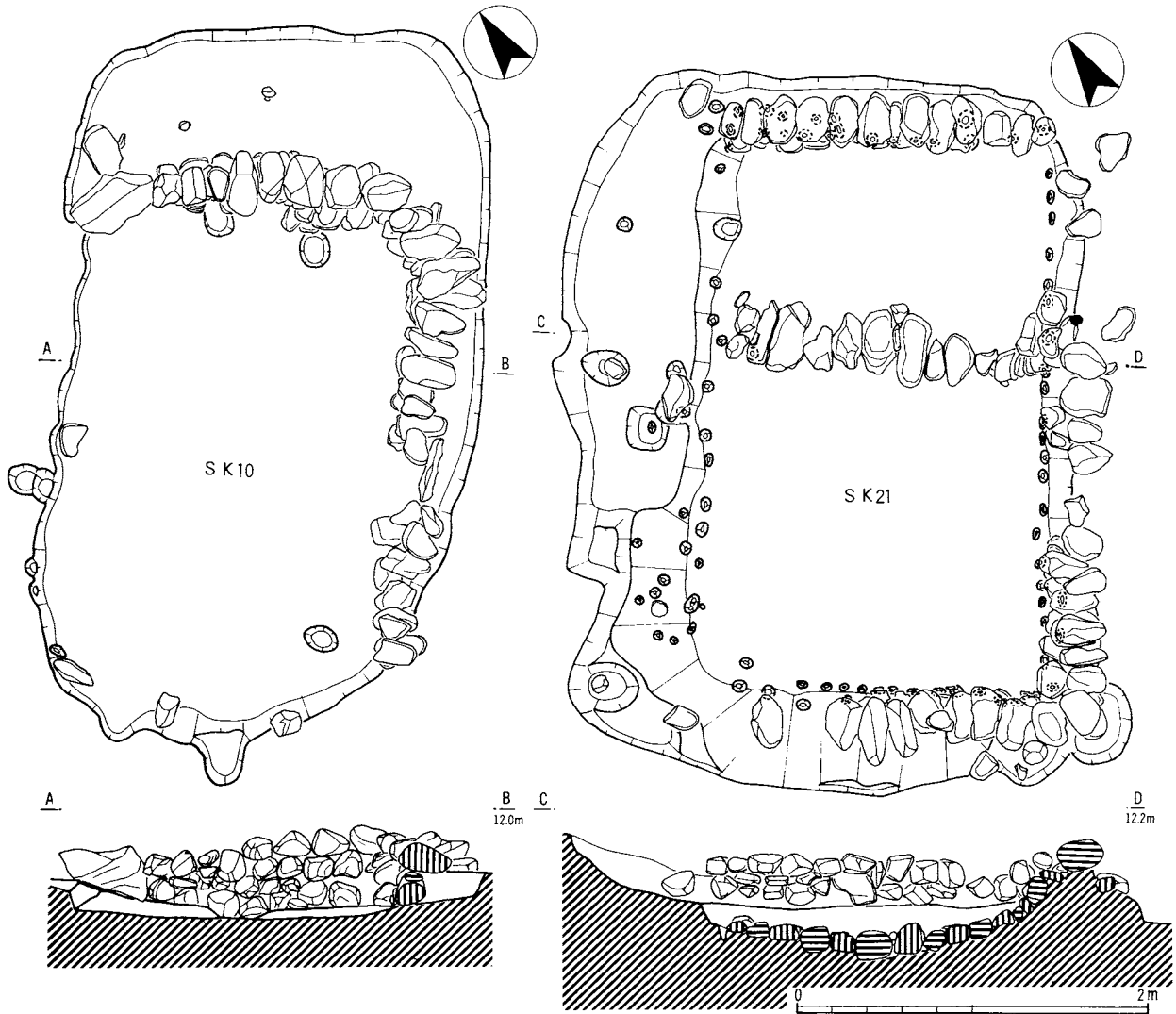
S B 72 4間×1間分を検出した南北棟建物と推定。柱間は桁行で、1.80+1.80+1.80+2.08m、梁間は1.42mである。柱掘形は径50cm前後、深さ50～60cmと深い。本建物の桁行は、南に3.5m離れたS B 73の梁行と柱筋を通してしている。建物柱穴内より土師器甕頸部、杯小片が出土。平安時代末頃の建物と推定。

S B 73 2間分×3間分を検出した東西棟建物と推定。柱間は、桁行、梁行とも不揃いである。柱掘形は、梁行第2・3柱穴は径30cmと小さいが、その他は径40～50cmとしっかりしている。深さはともに40cm前後である。本建物の梁行は、S B 72の桁行と柱筋が通っている。

S B 80 3間分×2間分を検出した南北棟建物。柱間は、桁行、梁行とも1.80mの等間である。柱掘形は径40cm前後、深さは50cm前後である。梁行中央柱

名称 SB	規模(間)	柱筋方向	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	時 期	備 考
1	3×3	N29°E	5.00	4.76	23.8m ²	I期(平安後半)	東面に廂、廂柱間1.44m
3	(2)×5	N28°E	(4.32)	8.92	—	II期(鎌倉前半)	北面に廂?、廂柱間1.62、根石建物
4	4×5	N40°E	8.00	8.24	66 m ²	〃	北面に廂、廂柱間1.36m、根石建物、南東隅に2間×1間に収まる方形土坑
5	4×2	N41°E	6.98	4.00	28 m ²	時期不明	根石建物、建替えか?
9	(2)×5	N39°E	(5.60)	8.52	—	III期(鎌倉後半)	北面に廂、廂柱間1.28m、根石建物、南東隅に2間×1間に収まる方形土坑
14	4×4	N40°E	7.64	6.40	49 m ²	〃	根石建物、南東隅に2間×1間の方形土坑
18	4×4	N36°E	8.04	7.52	60 m ²	〃	根石建物
22	4×4	N31°E	8.40	7.60	64 m ²	〃	根石建物、方形土坑が伴う。
30	4×4	N28°E	7.94	7.60	60 m ²	II期(鎌倉前半)	根石建物、方形土坑2基が伴う。南東隅に孫廂か? 廂柱間1.3m
33	4×4	N18°E	8.76	7.30	64 m ²	I期(平安後半)	北、東、西に三面廂、南面向排?がつくか。
35	3×2	N30°E	5.28	3.48	18 m ²	I期(平安後半)	
36	(2)×3	N31°E	(4.28)	7.12	—	時期不明	北側1間は廂か。
40	3×3	N25°E	6.40	4.76	30 m ²	III期(鎌倉後半)	根石建物、南東隅に2間×1間の方形土坑
42	2×2	N36°E	4.80	3.70	18 m ²	時期不明	
43	(2)×4	N25°E	(3.76)	7.20	—	III期(鎌倉後半)	根石建物、最西間は2間×1間の出間か。
44	4×3	N30°E	7.16	6.28	50 m ²	II期(鎌倉中葉)	根石建物、北東隅柱穴内にて壺出土。
48	3×4	N36°E	6.42	6.64	43 m ²	I期(平安後半)	東、西面に廂。
49	5×(1)	N23°E	10.44	(2.62)	—	〃	束柱をもつ。
53	5×5	N30°E	9.32	8.10	75 m ²	II期(鎌倉中葉)	根石建物。北・西面に廂、南東隅に2間×1間に収まる方形土坑が伴う。
59	3×2	N35°E	7.04	3.78	27 m ²	I期(平安末葉)	南面に廂、廂柱間1.96m、西に目隠し堀。
61	4×2	N21°E	6.30	2.52	16 m ²	時期不明	西に数間伸びる可能性もある。
63	(1)×2	N29°E	1.78 1.40	3.12	—	I期(平安末葉)	
64	4×3	N34°E	5.82	6.32	37 m ²	II期(鎌倉前半)	根石建物
65	4×(2)	N39°E	(4.20)	7.48	—	III期(鎌倉後半)	根石建物
69	—×(3)	N36°E	—	—	—	II期(鎌倉前半)	根石建物の側柱と推定
70	(3)×5	N31°E	(5.88)	7.30	—	III期(鎌倉後半)	南面に廂、廂柱間0.92m、根石建物。
72	4×(1)	N46°E	7.48	—	—	I期(平安末葉)	桁行はS B 73の梁行と柱筋を通す。
73	(2)×3	N46°E	(3.80)	5.26	—	〃	梁行はS B 72の桁行と柱筋を通す。
80	(3)×2	N24°E	(10.80)	3.60	—	〃	梁行はS B 81の桁行と柱筋を通す。
81	2×2	N24°E	4.00	3.60	14.4m ²	〃	桁行はS B 80の梁行と柱筋を通す。

第10-1表 掘立柱建物一覧表



第10-16図 土坑実測図 (1:40)

穴の深さは他より20cm程浅い。梁行北側柱は、S B 81の桁行と柱筋を揃えている。建物柱穴内より土師器杯、甕口縁部小片が出土。平安時代末頃の建物。

S B 81 南北棟。2間×2間の総柱建物。柱間は桁行で2.0m、梁行は1.80mの等間となる。柱掘形は径40cm、深さ50cm前後である。S B 80とは、お互いに桁行と梁行を直交させ、しかも北側の柱筋を揃えて配置されている。建物柱穴内より土師器甕口縁部小片等が出土。平安時代末頃の建物である。

以上、発掘区のほぼ全域において総数30棟の掘立柱建物を検出した。これらの建物には、通常の掘立柱建物と、柱掘形内に川原石を根石として据えた掘立柱根石建物とでも言うべき建物とがある。概要、規模等は第10-1表のとおりであるが、建物の柱筋は磁北より東に偏る特色をもつ。

3. 土 坑

S K 57 径1.3m、深さ30cmほどの円形の土坑である。奈良時代の竪穴住居S B 58の北東方向4mほどの所に検出された。埋土中から須恵器の杯蓋(68)が出土しており、S B 58、S B 62との関連性が考えられる。

S K 31 長さ4m、幅1.2m、深さ25cmほどの細長い土坑であり、平安時代の掘立柱建物S B 33の北東隅に当たる柱穴部分に重複した形で検出された。埋土中からは緑釉陶器、灰釉碗をはじめ、平安時代の土師器など(69~77)が出土している。

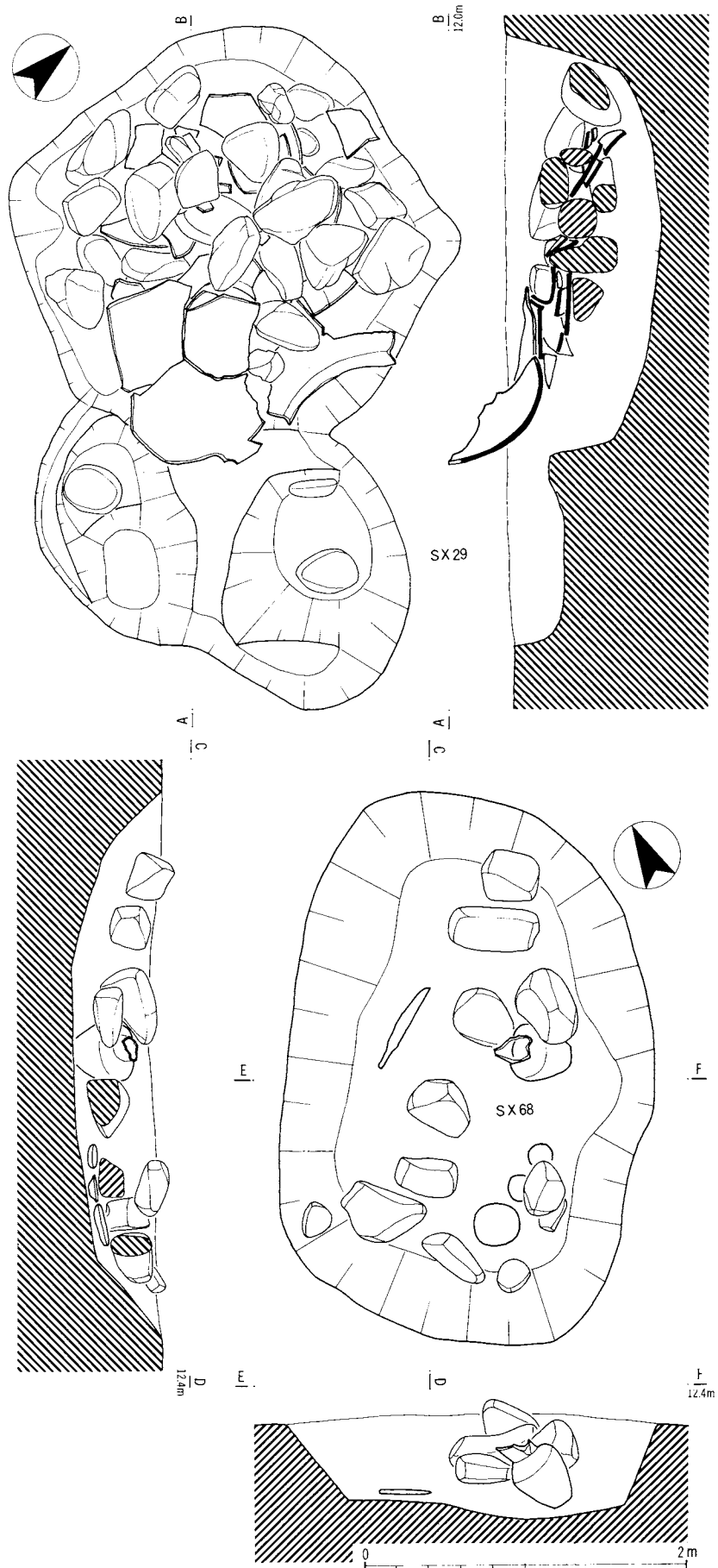
Pit 76 調査区の北端近くに検出された。径50cm、深さ30cmほどの小さな建物としてはまともでない柱穴であるが、埋土中から土師器の皿、台付碗、甕等(112~129)多数の平安時代末葉の土器が一括して出

土した。該期の土器の組成を知る上でも好資料が得られたものと言えよう。

S K 55 径80cm、深さ15cmほどの円形の土塚であるが、包含層上面から掘り込まれている。埋土中には、縄文土器（2・8）をはじめ鎌倉時代の土器及び、近世・現代の土器などが混在しており、後世に掘り込まれた土塚と考えられる。

掘立柱建物に伴う土塚（S K 7・10・15・21・28・39・45・52） これらの土塚は、S K 21を除きすべて掘立柱建物の南東隅に1間×2間の規模で収まる。このうち、S K 10とS K 21（第1C-16図）は人頭大の川原石を掘形の周囲に面を内側に揃えて2～3段が残存している。特にS K 21の場合は、石組の内側に当たる部分に揃えて径10cmほどの小さい穴があけられている。部分的に2列に配置されている所もあり、石組が崩れるのを防ぐために板囲いをしたものとも考えられる。

これらの土塚はすべて鎌倉時代の掘立柱建物内に収まり、同時存在が考えられる上、出土する遺物も土師器皿、鍋をはじめ、おろし皿や砥石など日常雑器が多く、これらの土塚の持つ性格については今後検討を要する。



第10-17図 土塚墓実測図（1：40）

4. 井戸 (SE8・17・20)

いずれも素掘りの井戸で、SE8は径2.4m、SE17は径1.6m、SE20は径1.8mである。井戸の底には井筒などは認められない。出土した土器(198~203、239~243)などから、鎌倉時代後半に営まれた井戸と考えられる。

5. 溝

SD12は、約3~4.5mの幅を持ち、深さは1.7~2.1mを測る大溝である。断面形は胴部がややふくらむがV字形をしており、底部は幅40cmほどの方形を呈する。この大溝が存在した時期は、上限を古墳時代前期(19・20)に求められるが、12世紀前半~中葉頃には埋没していたものと考えられる。

6. 土 塚 墓

SX29(第10-17図)発掘区ほぼ中央部に検出された。径2.8mほどの円形を呈し、1mほど地山を掘り込んである。この土塚墓は最大径68cm、高さ68cmの底部を打ち欠いた大甕(329)を埋納し、上部に人頭大の石を多数積み重ねた甕棺墓と考えられる。この石の間には、供献品と考えられる山茶碗片が出土している。

SX68(第10-17図)長径3.5m、短径2.3mの長円形を呈し、深さ60cm土塚墓である。渥美窯製の広口

瓶と小刀、鉄釘、土師器皿等(339~344)が出土している。上部に人頭大の石を少量積み上げたものらしく、崩落した状態で検出された。鉄釘が出土していることから、木棺が使用されていたと考えられる。

SX23 古墳時代の竪穴住居SB24の東側に検出された。規模は1.4m×0.8mの長方形を呈し、深さは45cmである。内部から小刀と鉄釘、土師器小皿等(352~357)が出土している。

SX47 規模は1.4m×0.9mの長方形を呈しており、上部は削平されたものか深さは22cmである。土坑内から和鏡1面と淡緑色の釉のかかった山皿(330、331)が出土している。

SX54 規模は1.2m×0.8mの長方形を呈し、深さは22cmである。内部から小刀と土師器小皿(361~367)が出土している。

SX56 規模は径1.2mほどの不正円形を呈し、深さは10cmである。埋土からは小ぶりの和鏡1面と青磁碗、土師器(322~338)などが出土している。

SX78 発掘区中央部に検出された。土師器の大型の羽釜(368)がうつ伏せの状態出土しており、その内部から土師器の鍋が出土した。

これらの土塚墓はSX29が大甕の特徴から平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて造営されたと考えられるが、他はすべて鎌倉時代に造営されたものと考えられる。

3. 遺 物

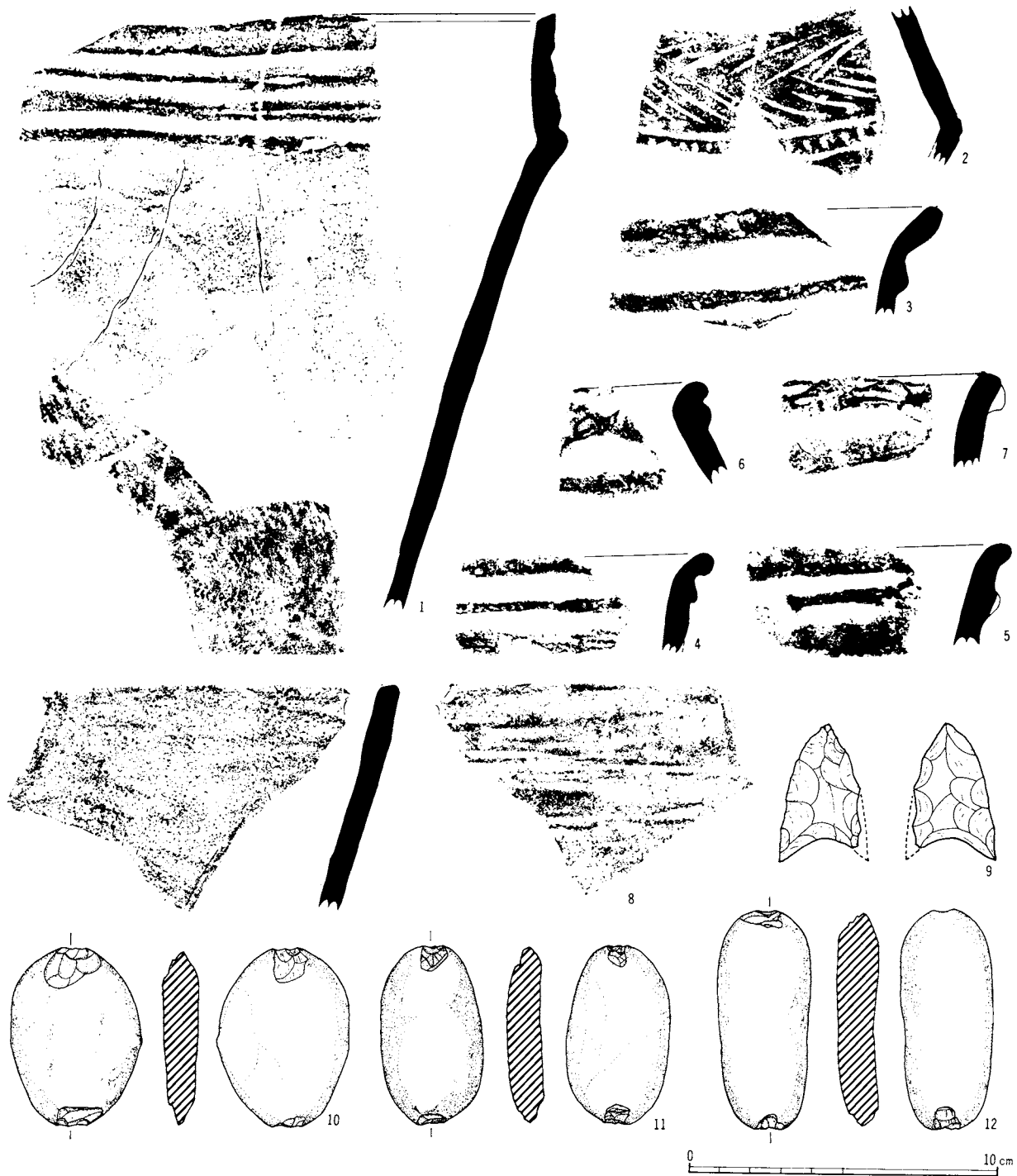
当遺跡から出土した遺物の年代幅は広く、縄文時代後期の土器・晩期の土器及び石器類、弥生時代中期前半の壺・甕、古墳時代の須恵器の蓋杯・土師器の甕や甗、奈良時代の土師器の杯・甕・甗、平安時代の土師器の杯・甕・緑釉陶器・灰釉碗や鎌倉時代の山茶碗・青磁・おろし皿・土師器の鍋・杯・小皿羽釜、他に小刀・砥石・和鏡・北宋銭など多岐にわたり、多数が出土している。

1. 縄文時代の遺物 (第10-18図1~12)

縄文時代の明確な遺構は確認されず、ほとんどの遺物が包含層出土である。

鉢(1~8)

(1)は縄文土器の中では最も大きな破片であり、口縁部から体部まで続いている。体部は無文で、ゆるやかな傾斜で直線的に外反している。頸部から口縁部にかけては、反転して内傾しており、頸部には3条の凹線が施されている。口縁端は内傾しており、平坦面を作る。内面は頸部に著しい凹みを持ち、全体的に磨かれている。胎土中には若干の金雲母を含



第10-18図 遺物実測図 (9は1:1、他は1:2)

み、最大粒5mmほどの砂粒を含んでいる。色調は、内面が黄褐色を呈しているが、外面は煤の付着が多く灰茶褐色をしている。口縁部の凹線文の特徴等から宮滝式の土器に類似しており、後期に位置づけられる。

(2)は口縁部を欠いているが、体部の最もふくらんだ部分に、上下を2mmほどの沈線で区画した5mmほどの突帯を作り、刻み目を施す。突帯の上部はてい

ねいに磨いた後を、篋状工具を用いた沈線で綾杉状に施文している。内面は横方向にていねいに磨きが施された精製土器である。胎土中には細砂粒を少し含むが、金雲母は含まれていない。色調は黒褐色を呈している。時期は後期中葉に求められる。

(3~7)はすべて口縁部のみの小片である。(3~6)は、口縁直下に1条の突帯を巡らせており、

(7)は口縁に突帯を巡らせている。(5～7)の突帯は貼り付け突帯である。また、(6・7)の突帯には貝殻腹縁状の工具を用いた刻み目を施してある。(3～5)は、いずれも口縁が突帯から大きく外反しており、(6)の口縁は内傾するが、口縁端は外反している。いずれも風化が著しく、器壁は脆弱である。(6)外面には煤が付着している。

(8)は口縁が直立気味に外傾しており、口縁端は平坦面を作る。外面には文様はなく、ナデのみの調整であるが、内面は横方向に条痕が施されている。(3～8)共に晩期の後葉から終末期に比定される。

石鏃 (9)

一部を欠くが無茎凹基の二等辺三角形を呈した石鏃である。材質は片岩系のものであり、さほど硬いものではない。重さは0.9 gである。

石錘 (10～12)

いずれも硬砂岩質の川原石を用い、長軸方向を両面から打ち欠いただけの打製の石錘である。重さは(10)が42g、(11)が33.2g、(12)が42.3gである。

2. 弥生時代の遺物 (第10～19図13～18)

壺 (13・14)

(13)は、底部から大きく外傾して立ち上がり、そろばん玉の形をした胴部を形成する。最大径は胴部やや下寄りにあり、40cmである。細くくびれた頸部から大きく外反しながら口縁部を形成し、口縁端はわずかな凹面をなすが平坦面を作る。高さは46cmと大型の壺である。器壁は全体を横方向にいてねいにへら磨きし、その上から原体幅1単位13本の櫛状工具を用いて横線文を施している。櫛描きの横線文は、口縁から1・1・2・2・2単位で頸部に文様を引き、肩部から胴部上半には2・2・3単位の文様が施されている。また、肩部には横線を引いたあとで、6方向に4段に分けて櫛描き扇状文を施した疑似流水文を施している。口縁部と胴部の2ヵ所に黒斑があり、全体に黄褐色を呈する。この壺は破碎された状態で、S B 75の床面に散乱していた。時期は弥生時代の中期前半に比定される。

(14)は(13)と同様の壺の頸部小片と思われる。頸部の最もくびれた部分に、(13)よりやや目の粗い櫛描き横線文が描かれている。器壁も薄手に仕上げられてお

り、(13)よりはやや新しい時期に比定されよう。

甕 (16・17)

(16)は胴部下半の一部を欠くが、口縁部及び胴部上半と底部が残存する。口縁部径は21.2cmであり、大きく外反して口縁を形成する。口縁端は丸く仕上げられている。器壁外面は1.3 cm幅に6本の刷毛目を持つ原体で、全体に縦方向にハケナデされている。口縁部内面には、外面に使用されたものよりも粗い原体で横方向にナデつけている。底部は粗く縦方向にへら削りされており、底面はやや上げ底仕上げがなされている。体部外面には煤の付着は認められず、全体に赤褐色を呈する。(13)と同様に破碎された状態でS B 75の床面に散乱していた。

(17)は、S B 75の北側柱穴上からほぼ完形のまま出土した。胴部はやや丸味を帯びており、頸部から大きく外反して口縁部を作る。口縁は指押えにより波形を呈しており、口縁端面は丸く仕上げられているが、内面にわずかながら稜を作る。外面は全体に凹凸が目立ち、目の細かいハケナデを施しているが、原体幅は不明である。ただ、底部近くに幅2 cmほどの無文部がある。無文部をはきんだ上と下では、ハケの原体は異なったものを用いている。底部には圧痕等は見られず、円形にナデた痕跡がある。胴上部の外面には煤が付着しており、暗茶褐色を呈するが、内面には一部にコゲ状の付着が見られる。

高杯 (15)

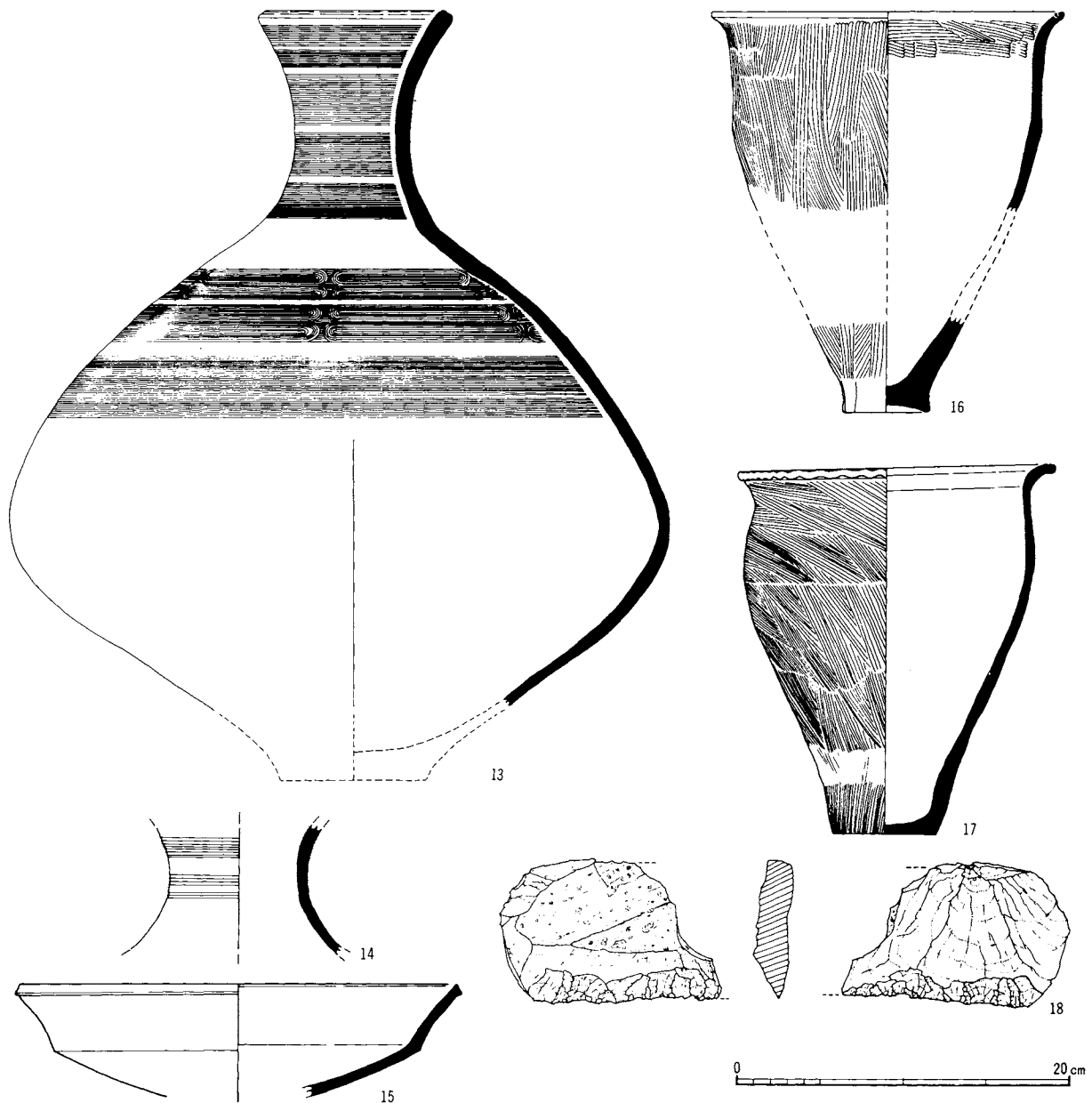
口縁部のみ的小片であり、脚部については不明である。杯底部から口縁部に移行する所に稜がついている。口縁端は肥厚させ、断面三角形を呈する。調整は内面・外面共にへら磨きしている。また外面には、一部にわずかながら丹塗りした痕跡が認められる。包含層出土である。

石器 (18)

サヌカイト製の不定形石器である。残存しているのは $\frac{1}{2}$ ほどの破片であるが、刃部は表裏面とも一次剝離面に粗い二次加工調整を施し、背側は打点があるまま残り未調整である。打製の石包丁と考えられる。S B 75の床面から出土した。

3. 古墳時代の遺物 (第10～20図19～44)

竪穴住居内の埋土、溝下層、遺物包含層出土のが



第10-19図 遺物実測図 (13~17は1:4, 18は1:2)

ある。竪穴住居内出土のものは、他時期の土器も若干混入しており十分な一括資料とは言えないかもしれない。

SD12出土土器 (第10-20図19・20)

壺 (19・20)

(19)は、口縁部は緩やかに外反し、端部内面は丸く収めるが僅かに二段に屈折させる。口縁端部はヨコナデ、外面は5本/1cmの内面も5~6本/1cmの粗い刷毛目を施す。(20)は、口縁部はくの字形に外反し、端部はナデられて上下方に肥厚面をつくる。口縁部と頸部の境には凸帯をもつ。口縁部外面は刷毛目調整の後、横ナデで整形している。体部外面は、6~7本/1cmの縦位の刷毛目、内面は横ナデを呈

す。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含み、ともに残りは不良である。古式土師器と考えられる。

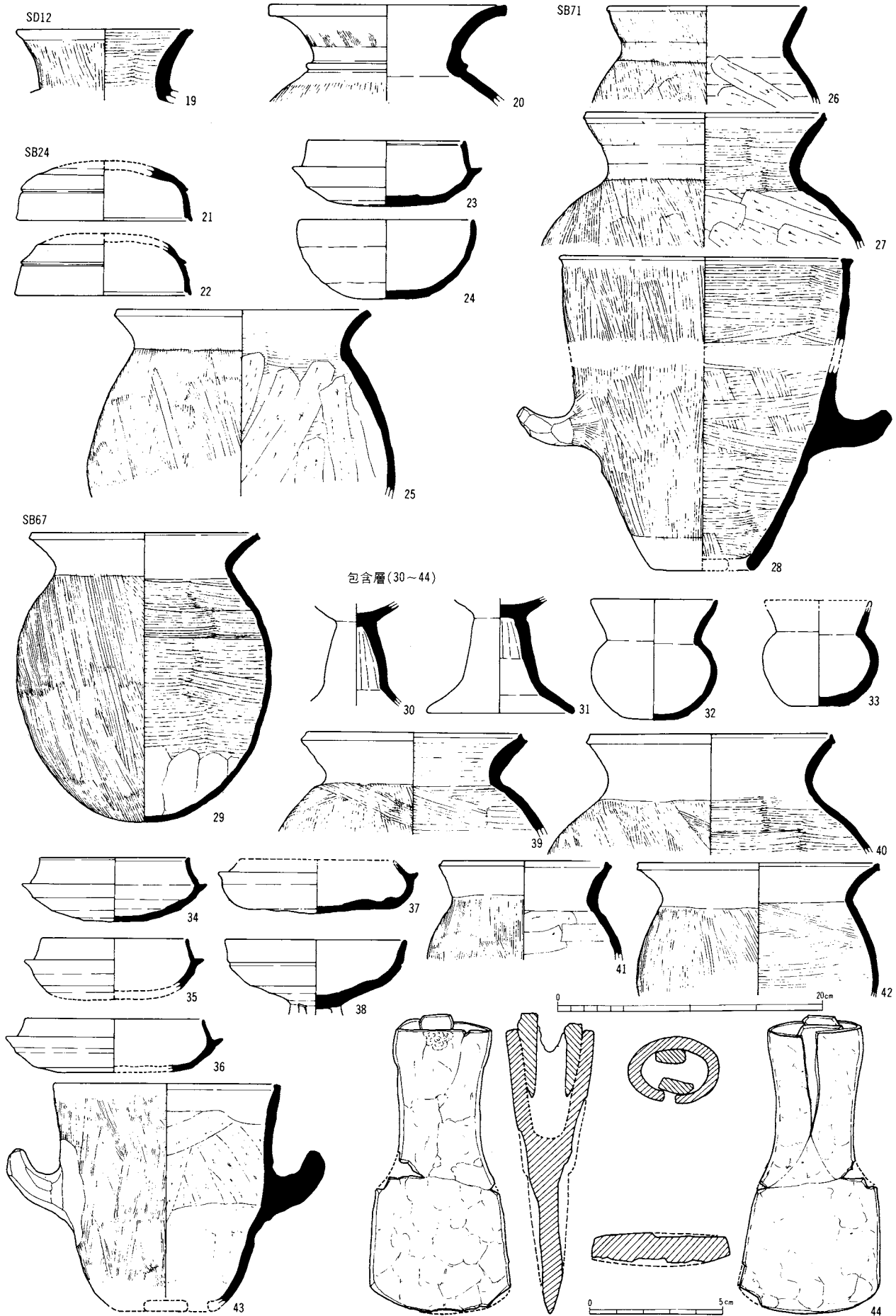
SB24出土土器 (第10-20図21~25)

杯蓋 (21・22)

ともに天井部と口縁部の境に、短くシャープさを欠く稜を有する。口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は内傾する段をもつ。天井部を程比較的丁寧な左方向の回転ヘラ削り、他はロクロ水挽き成形である。胎土中細砂を含む堅緻なもので、(22)は内外面とも暗灰色を呈し焼成は良好だが、(21)は白灰色と残りは不良である。

杯身 (23)

口径が小さく器高は深い。立ちあがりは長く僅か



第10—20図 遺物実測図 (19~43は1:4、44は1:2)

に内傾しながらほぼ垂直にのび、端部は内傾する明瞭な段をもつ。受部は比較的長く端部は丸く仕あげるのが鋭い感がする。底体部は $\frac{1}{2}$ 前後丁寧な左方向の回転ヘラ削りを施し、底部は平坦となり「 \searrow 」のヘラ記号がみられる。内底部中程から口縁部にかけてはロクロ水挽き成形、底部内面は同心円スタンプの上を中央のみ一方の指ナデで消しており、調整過程の省略がみられる。焼成良好で暗灰色を呈す胎土堅緻な土器。

土師器碗 (24)

器高は深く、丸底の体部より内弯気味にのびる口縁を有し、端部は丸くおさめる。口縁部付近のみ内外面を横ナデしているが、他は底部まで指オサエによる凹凸がめだつ。器壁には輪積み痕が僅かに残る。胎土堅緻で残り良好の精製品である。

土師器甕 (25)

体部中半から欠失する。外反する口縁部は上半で僅かに肥厚し、端部をほぼ平坦に仕あげる。口縁部外面は横ナデ、体部外面は $7\sim 8$ 本/1cmの細かい刷毛目、口縁部内面は横位の刷毛目の上を横ナデし、体部上半部より横位の刷毛目の上をヘラ削りする。胎土中粗砂を含み暗黄褐色を呈す。残りは普通である。

以上、これらの土器は蓋杯より陶邑古窯址の田辺編年ではTK-47(中村編年ではII-1)型式に比定できそうで、調整過程の省略や、各種の成形にややシャープさを欠くことより、6世紀初頭でもやや下がる時期が考えられる。

S B 71出土土器 (第10-20図26~28)

土師器甕 (26・27)

(26)は口径15cmの小型品。端部を丸くおさめる口縁部はくの字形に外反する。器壁の調整は、口縁部内外面とも横ナデされるが、外面には僅かに刷毛目が残る。体部は $5\sim 6$ 本/1cmの刷毛目が、内面は上半部より上から下へのヘラ削りが施される。なお、内面には輪積み痕が明瞭に残る。赤黄褐色を呈し、胎土中には粗砂を多く含む。残りはやや不良。

(27)は口径18cmの中型品。長く外反する口縁部をもち、端部は上、下方につまみあげ面をなす。器壁の調整は、口縁部外面は縦位の粗い刷毛目の上を横ナデし、内面は横位の刷毛目を施す。体部外面は $4\sim 5$ 本/1cmの粗い縦位の刷毛目、内面は上半部より上か

ら下への斜めのヘラ削りがなされる。黄褐色を呈し、胎土中粗砂を多く含む。残りは良好である。

甕 (28)

口径22cm、推定器高は24cm前後になると思われる。体部中程に指オサエにより成形された鉤形の把手が付く。底部は欠失するが半月状の蒸気孔がつく。口縁端部は内側に折り曲げられ丸くおさめている。口縁端部のみ横ナデ、体部外面は $5\sim 6$ 本/1cmの粗い縦位の刷毛目、内面は $4\sim 5$ 本/1cmの粗い横位の刷毛目と縦位の刷毛目が併用されている。底部外面付近は横ナデがなされる。赤褐色を呈し、胎土中砂を含むが堅緻で、残りも良好である。

以上、本住居跡内の土器は土師器のみで、時期比定はむずかしいが、遺構検出面直上の包含層より杯身(37)、と高杯(38)が出土しており、これからみれば6世紀後半頃の時期が推定される。

S B 67出土土器 (第10-20図29)

土師器甕 (29)

くの字形に外反する口縁部をもち、端部は僅かに上、下方につまみ出され面をなし、体部は球形に近い器形である。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は $4\sim 5$ 本/1cmの縦位の刷毛目、内面上半は $5\sim 6$ 本/1cm、中半から下半にかけてはやや粗い刷毛目、底部はナデツケがなされる。胎土中細砂を含む暗黄褐色を呈し、残存状況良好の比較的薄手の土器である。

包含層出土遺物 (第10-20図30~44)

高杯脚部 (30・31)

外膨みの脚柱部に屈曲した裾部が広がるもの(30)と、斜め下方に広がる脚柱部に屈曲した短かい裾部が続くもの(31)がある。脚裾部は横ナデ、脚柱部内面はヘラ削りとしぼり痕がみられる。ともに赤黄褐色を呈し、細砂を含む硬質の土器。

小型壺 (32・33)

口縁の高さが器高の $\frac{1}{3}$ 程あり、器面の調整は丁寧なナデが施されるもの(30)と、手づくねのあとが残るもの(32)がある。ともに黄褐色を呈し、細砂を含む硬質の土器であるが残りは不良。

須恵器杯身 (34~37)

口径11cm前後、器高5cm前後の体部が深いもの(34・35)と、口径13.8cm、器高4.0cmの体部の浅いもの(36)がある。いずれも口縁部は内傾するが、

端部に段を有するもの(34)と、丸くおさめるもの(35・36)がある。底部はそれぞれヘラ削りがなされる。前者はTK-47~MT15型式、後者はTK-10型式頃に比定できそうである。(37)は、立ちあがり短く内傾し、体部は丸味をもつ。底部はヘラ切り未調整。MT-85型式に比定できそうである。

須恵器高杯(38)

杯部は外反し、口縁部と杯部の境には浅い1条の沈線がめぐる。脚基部が少し残るのみだが、3方長形透しがなされる。杯底部はヘラ削り、他はロクろ水挽き成形がなされる。胎土中粗砂を含み、黄灰色を呈し残りは非常に悪い。

土師器甕(39~42)

ともにくの字形に外反する口縁部の端を、上、下方につまみあげ面をなす。口縁部内側面は横ナデが施されるが、(39・42)には刷毛目が残る。体部外面は7~8本/1cmの縦位の刷毛目、内面はやや粗い4~6本/1cmの横位の刷毛目がなされるもの(39・40・42)と、右から左へのヘラ削りが施されるもの(41)がある。(39)はやや厚手であるが、他は薄手である。胎土中粗砂を含み、黄褐色を呈すもの(39・40・42)と、赤黄褐色(41)のものがある。

土師器甕(43)

口径17cm、推定器高17cm前後の小型品である。体部中程に指オサエで成形された鉤形の把手がつく。底部は欠失するが半月状蒸気孔がつくものであろう。口縁部内面及び外面上端は横ナデ、体部は8~10本/1cmの細かい刷毛目を、底部は横ナデがなされる。内面中程は下から上へのヘラ削り、下半部は指オサエを施す。胎土中粗砂を多く含み黄褐色を呈す。体部外面には部分的に黒斑がみられる。SB67の南西約4mの発掘区断面包含層中より甕(41・42)と一括して出土した。

鉄斧(44)

刃部をつけた鉄板の上方を折り曲げて中空の袋部をつくり、木柄が着装されるようにした有肩式の鍛造品である。袋部には柄と考えられる木質と、それに打ち込まれた鉄製楔が2個残る。刃部の形状はやや孤状を描く。遺物包含層出土で、付近に古墳時代に属する遺構は検出されていないが、古墳時代の遺物と考えられる。

4. 奈良時代の遺物(第10-21図45~68)

竪穴住居内埋土及び土壇から出土したもので、一応一括資料として考えられる。

S B 58出土遺物(第10-21図45~60)

杯(45~52)

(45・46)は、外反する口縁部の端を内側に丸く巻き込んだものである。口縁部内外面は横ナデ、底部内面はナデツケ、外面はヘラ削り(b手法)を施す。(45)の口縁部内面には斜行暗文が施される。ともに赤褐色を呈す堅緻な土器であるが残りは悪い。

(47~51)は、口径13~15cmの小型品で、いずれも内面はナデツケであるが、外面は口縁部付近は横ナデ、底部はヘラ削り(b手法)を施すもの(49・50)や、口縁部上端までヘラ削り(c手法)を施すもの(51)、さらに口縁部は横ナデ、底部は指オサエ(e手法)のもの(52)などの、3種の手法がみられる。なお、(51)の底部外面には8条のカキ目が残っている。いずれも暗赤黄褐色を呈す胎土堅緻な土器であるが残りは悪い。

皿(53~55)

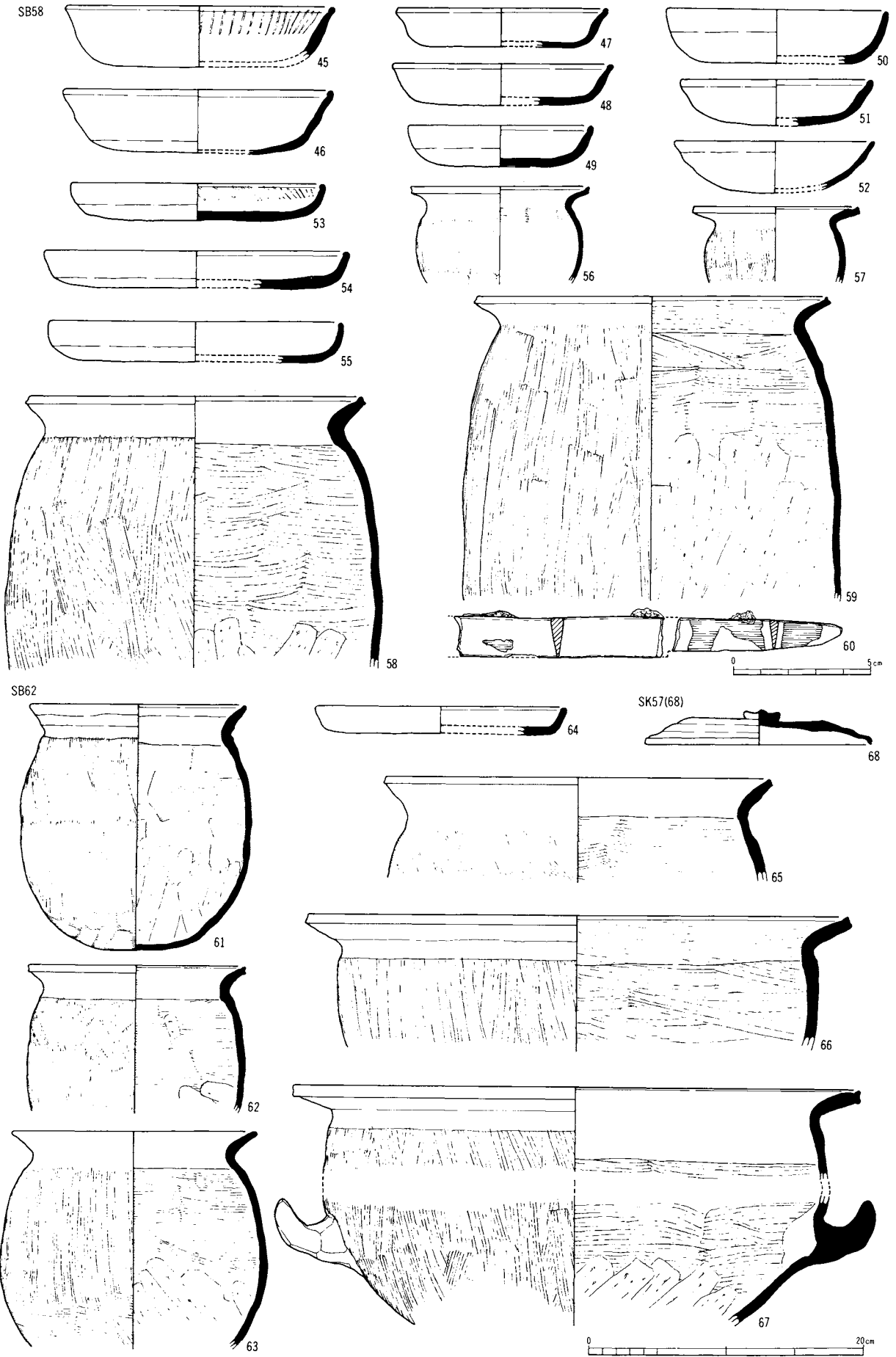
ともに口縁部内外面は横ナデ、底部内面はナデツケ、外面はユビオサエのあと雑なヘラ削り(b手法)を施す。(53)には右下がりの雑な斜行暗文が施される。胎土堅緻で赤褐色(54・55)及び、暗黄褐色(53)を呈し残りは良い。

甕A(56・57)

口径13cm前後の小型品で、胴部下半は欠失するが球形を呈すと考えられる。口縁部は大きく外反し、端部はわずかに上・下方につまみあげ面をなす。ともに口縁部内外面は横ナデを施す。(56)は胴部外面は4~5本/1cmの粗い縦位の刷毛目、内面上半部は、7~8本/1cm本の縦位の細かい刷毛目を施す。(57)は胴部外面は7~8本/1cmの細かい縦位の刷毛目、内面は残りが悪く調整は不明。赤黄褐色を呈し胎土中に細砂を含む。

甕B(58・59)

胴部は長胴となる所謂長胴甕である。いずれも外反する口縁部は中央が肥厚し、端部は上、下方につまみあげ面をなす。(58)は口縁部内外面を横ナデ、胴部外面は2本/1cmの縦位、内面も2~3本/1cmの



第10-21図 遺物実測図 (60は1:2、他は1:4)

横位と、粗い刷毛目を、その下半は上から下へのヘラ削りを施す。(59)は、口縁部内外面は横ナデを施すが、内面にはわずかに横位の刷毛目が残る。胴部外面は $7\sim 8$ 本/ 1cm の横位の刷毛目、内面は $5\sim 6$ 本/ 1cm の横位の刷毛目、下半部は上から下へのヘラ削りを施す。ともに胎土中粗砂を多く含み、黄褐色を呈す残りの良好な土器である。

刀 (60)

切先及び関部付近を欠損する。刀身は、平棟平造りで断面三角形を呈す。茎部は刀身に対して僅かに内反りしており断面二等辺三角形に近い平棟で、端部は丸くおさめる。刀身及び茎部には部分的に木質の付着が認められる。銹化がひどく目釘孔は不明。

以上、比較的多く住居跡内から土器が出土した。これらの土器の時期については、杯、皿の手法でみれば、口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りという手法が多く、形式的にも、古い様相を示し8世紀中葉頃に比定できそうである。しかし、(49~51)のように体部のカーブが丸味をもちc・e手法がみられ、これらには形式差が認められる。このことにより、本住居跡内の一括資料は8世紀後半頃に位置づけるのが妥当だと思われる。

S B 62出土土器 (第10-21図61~67)

甕A (61~63)

口径 $15\sim 18\text{cm}$ 前後の小型品で、体部も球形に近い器形である。口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめるもの(61・63)と、上、下方にわずかにつまみあげ面をなすもの(62)がある。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は $7\sim 8$ 本/ 1cm の細かい縦位の刷毛目、下半部は細かい横位の刷毛目、内面は $7\sim 8$ 本/ 1cm の横位の刷毛目のあと上から下へのヘラ削りを施す。胎土中粗砂を含み黄褐色のもの(61・63)と、暗赤黄褐色(62)のものがある。残りは比較的良好である。

皿 (64)

やや厚手の土器で、口縁端部は丸く内側に巻き込む。赤褐色を呈し胎土は堅緻であるが、残りが悪く調整等は不明。

甕B (65)

体部上半部より下は欠失するが、長胴甕になると考えられる。外反する口縁部の中央は肥厚し端部は面をなす。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は $7\sim 8$ 本

/ 1cm の細かい縦位の刷毛目、内面は $5\sim 6$ 本/ 1cm の横位の刷毛目を施す。胎土中粗砂を多く含み、淡黄褐色を呈し残りは不良である。

鍋 (66・67)

大きく外反する口縁部は全体的に肥厚し、端部は上、下方につまみあげ面をなす。口縁部よりほぼ真直ぐにおりる体部には2個の鉤形の把手がつく。(66)は、把手がつくかどうか不明。体部下半は欠失するが、浅い半球形の底部になると考えられる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は $5\sim 6$ 本/ 1cm の粗い縦位、内面も $4\sim 5$ 本/ 1cm の粗い横位の刷毛目、その下は上から下へのヘラ削りを施す。ともに胎土中粗砂を多く含み赤黄褐色を呈すが残りは不良。

以上、本住居跡では、杯、皿類が少なく甕、鍋が多く出土した。これらの土器も8世紀後半頃の一括資料と考えられる。

S K 57出土土器 (第10-21図68)

杯蓋 (68)

扁平な天井部を有し、口縁部は直線的に外下方へのび、端部を下方につまみ出し丸くおさめる。宝珠つまみは扁平なもので中央部は突出する。天井部のみ左方向の回転ヘラ削り、他はロクロ水挽き成形である。胎土中細砂を含み暗灰色を呈す焼成良好なものである。8世紀後半頃と比定される。

5. 平安時代の遺物 (第10-22図69~161)

掘立柱建物柱穴内、土壇、溝上層及び遺物包含層出土のものがある。

S K 31出土土器 (第10-22図69~77)

土師器皿 (69~72)

口径 $10.6\sim 12\text{cm}$ 、高さ 2.5cm 前後の杯を小型化したものである。口縁部は横ナデ、体部中程から底部にかけては指オサエの凹凸がめだつ。胎土中細砂を含むが緻密でやや薄手の土器。残りは比較的良好。

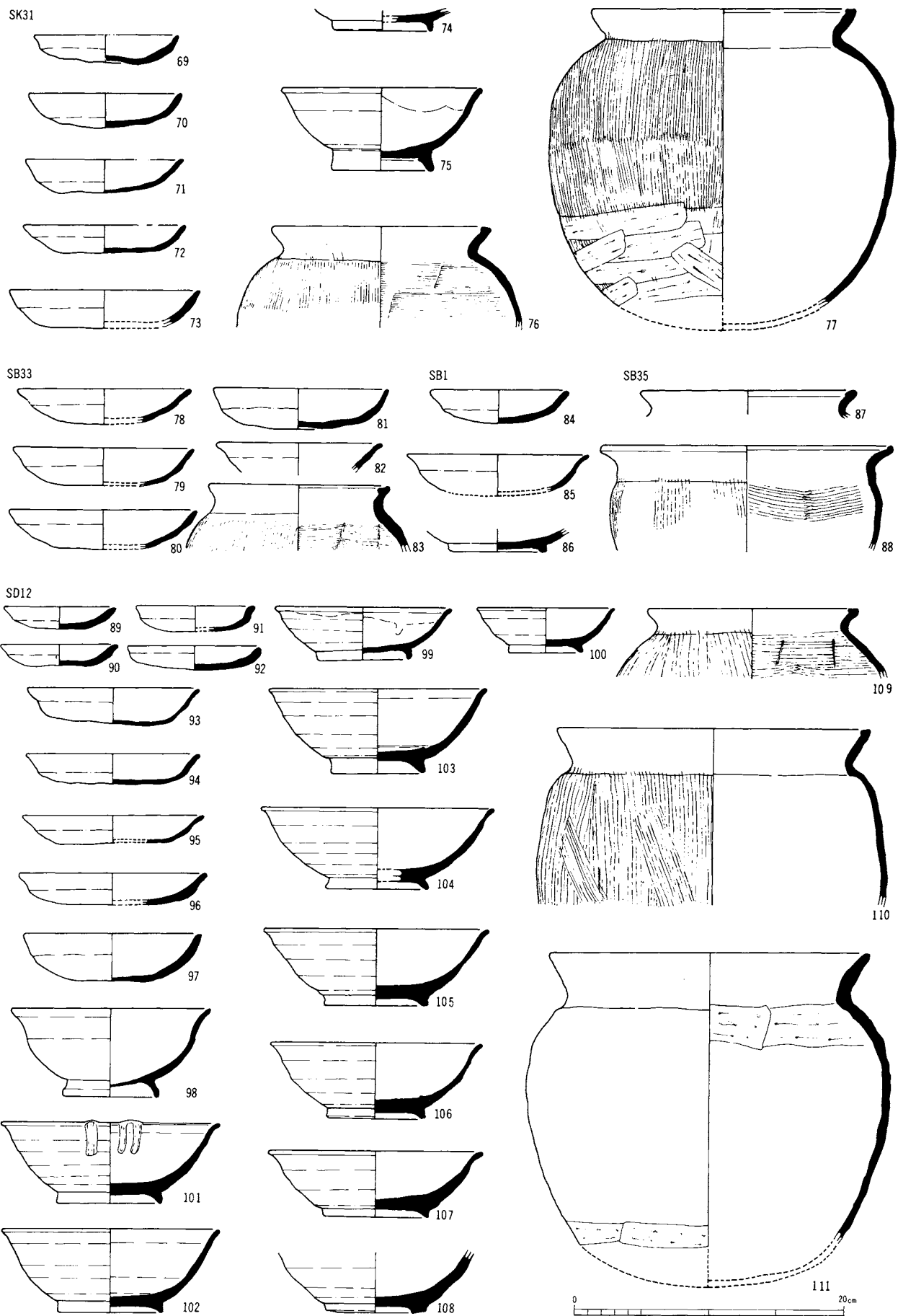
土師器杯 (73)

口縁部は横ナデ、体部中程から底部にかけては指オサエで成形する。黄褐色を呈し胎土中細砂を含む。

緑釉底部 (74)

底部のみの破片で、白黄色の軟質素地に濃緑色の釉を施す。残りは悪い。

灰釉椀 (75)



第10-22图 遗物実測図 (1 : 4)

口径に対してやや深い体部を有する。体部は外反しながらゆるやかに立ちあがり、端部は僅かに外反する。高台はやや外に開く断面二等辺三角形に近い高台を貼り付ける。内面上半部のみ淡黄灰色の灰釉がツケガケされるが、外面は剥落がひどく不明である。胎土は白灰色を呈し堅緻でやや厚手の土器である。東山72号窯式に比定できそうである。

土師器甕 (76・77)

小さく外反する短い口縁部は、端部を内側に折り曲げ面をなす。体部は球形に近い。器壁は指オサエの凹凸がめだち、外面には5~6本/1cmの粗い縦位、内面は11~12本/1cmの細かい横位の刷毛目が施される。(77)は内面はナデツケで、体部外面下半は左方向のヘラ削りがなされる。ともに黄褐色を呈し、胎土中には粗砂の多い土器で、残りはやや悪い。

S B 33出土土器 (第10-22図78~83)

土師器杯 (78~81)

口径14cm、高さ3cm前後。口縁部は横ナデ、体部から底部にかけては指オサエによる凹凸がめだつ比較的薄手の土器である。暗黄褐色や淡赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含み緻密である。

灰釉碗 (82)

口縁部だけの小片である。胎土白灰色で堅緻、施釉は白っぽい灰釉であるが、残りが悪くその掛け方は不明である。

土師器甕 (83)

小さく外反する短い口縁部の端が内側に折り曲げられ面をなす。器壁は指オサエによる凹凸がみられ、外面は4~5本/1cmの粗い縦位、内面は9~10本/1cmの細かい縦位の刷毛目が施される。暗黄褐色を呈し胎土は緻密である。残りはやや悪い。

S B 1 出土土器 (第10-22図84~86)

土師器杯 (84・85)

いずれも口縁部は横ナデ、体部から底部にかけては指オサエ成形。赤黄褐色を呈し胎土中は細砂を含む緻密なものである。残りは良い。

灰釉陶器 (86)

底部のみの破片。底部には回転糸切りの後、高台を貼り付ける。内面底部近くまで黄灰色の灰釉を施釉する。

S B 35出土土器 (第10-22図87・88)

土師器甕 (87・88)

小さく外反する短い口縁部は、内側に丸く折り曲げられる。体部外面は、幅2.6cm11条の縦位の刷毛目を間隔をあけて施す。内面は、やや粗い横位の刷毛目を施す。白黄褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。残りはやや悪い。

以上、S K 31、S B 33、S B 1、S B 35のこれらの土器は、杯、皿は比較的薄手で平滑に仕上げられており、また、猿投古窯編年では東山72号窯式に相当しそうな灰釉碗等より、11世紀後半頃(平安時代後半)頃の時期が比定できそうである。

S D 12出土土器 (第10-22図87~111)

土師器小皿 (89~92)

口縁部のみ横ナデ、体部中程から底部にかけては指オサエの凹凸がめだつ。内面はナデツケにより調整される。胎土中細砂を含み赤黄褐色や黄褐色を呈す。残存状況は比較的良好。

土師器杯 (93~97)

いずれも外反する口縁部は横ナデ、体部中程から底部にかけては指オサエの凹凸がめだつ。内面はナデツケにより調整される。薄手で平滑に仕上げたもの(93~95)や、やや厚手のもの(96・97)がある。黄茶褐色や赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。残りは良好である。

土師器台付碗 (98)

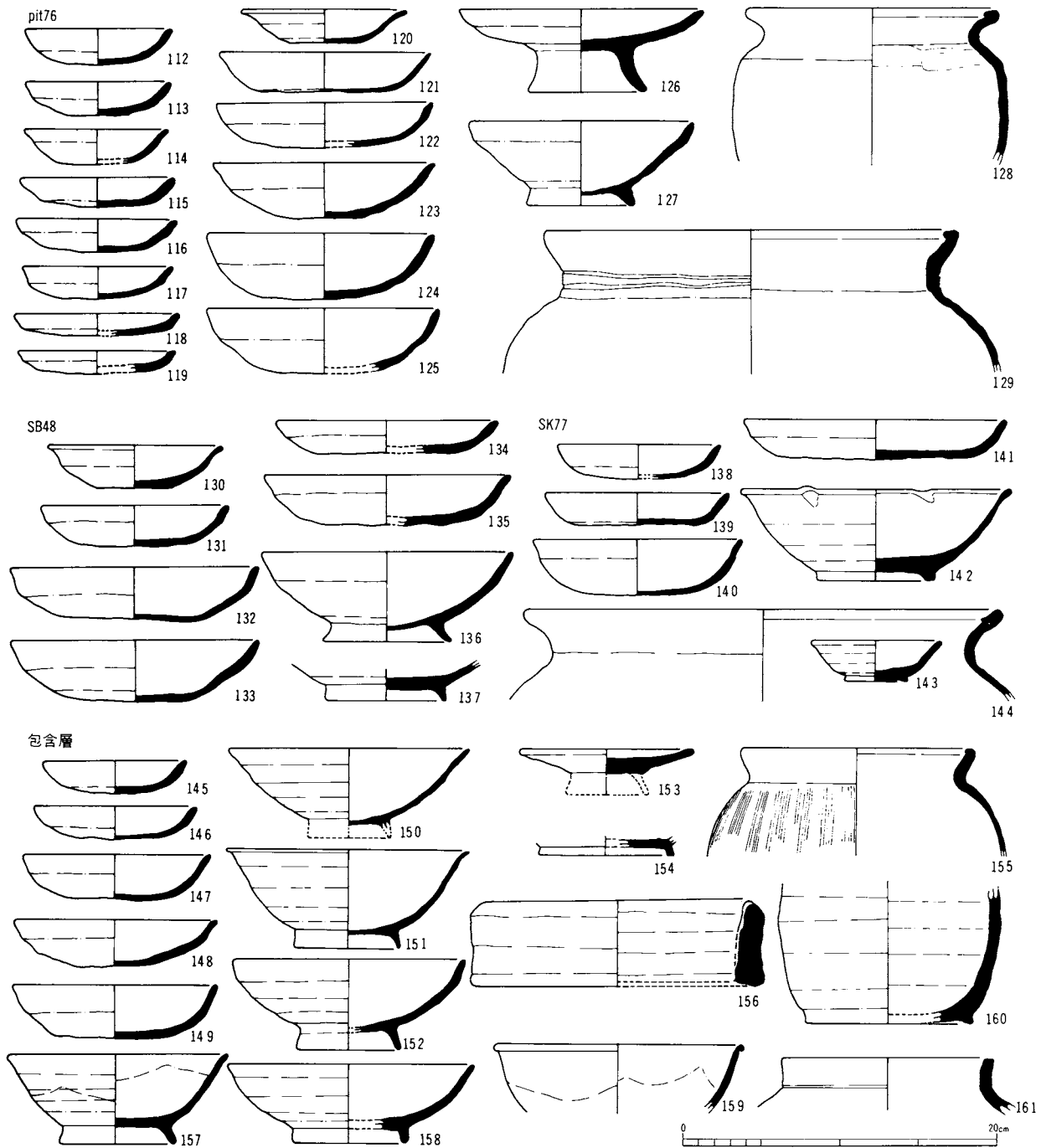
一見灰釉陶器の焼成不良品かと思われるロクロ製の精製品で、他の土師器製品とは胎土は全く異なる。高台は貼り付けられ、糸切り痕はナデにより消される。胎土堅緻で赤黄褐色を呈す。残りはやや不良。

灰釉碗 (99)

口径に対し器高はやや浅い碗である。やや張り出す口縁端部は僅かに外反し丸くおさめる。底部外面は回転糸切りのままで、腰部もロクロ水挽きである。高台の高さは低く、内面下端の内弯も小さい。胎土白灰色で堅緻。折戸53号窯式の後半期に相当しそうである。

山茶碗小碗 (100)

碗をそのまま小さくしたような器形で、腰部は丸味をもち口縁端部は外反し丸くおさめる。底部は糸切り未調整で、その上へ高台を貼り付ける。白灰色を呈し胎土堅緻な精製品。藤澤編年Ⅱ-3期に比定



第10-23図 遺物実測図 (1:4)

できそうである。

山茶椀 (101~108)

口径16cm前後、高さ5.5~6cm、器高の深い大型の精製品である。いずれも腰部は丸味をもち、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。底部は糸切り未調整のものや、高台を貼り付けた後すべてナデ消すもの、一部をナデるものがある。高台は外方へふんばるように張出し丸くおさめるもの(101~104)と、

しっかりした逆台形を呈すもの(105、106)がある。(101)は指ナデによる輪花が4方向に施される。(108)は、判読不明(「大」か?)だが、底部外面に墨書がみられる。(101~107)は、いずれも胎土中砂粒を含む白灰色で、瀬戸窯系のものと考えられる。藤澤編年でみれば(101)はI-2期、(102~104)はII-3期、(105~107)はII-4期頃に比定できそうである。なお、(108)は胎土中細砂を含む暗灰色のもの

で渥美窯産に似た土器で、他に比べてやや時期が下がりそうである。

土師器甕 (109～111)

小さく外反する短い口縁部の端を内側に折り曲げ面をなすもの(109,110)と、口縁部中程で肥厚し端部を丸くおさめるもの(111)がある。体部は肩部でやや張り球形に近い。(109,110)は口縁部横ナデ、体部外面は $3\sim 4\text{本}/1\text{cm}$ の粗い縦位刷毛目を施し、内面は(109)は $5\sim 6\text{本}/1\text{cm}$ の横位刷毛目(110)は指ナデしている。(111)の体部外面は刷毛目を施さず指オサエで成形するのみで器壁の凹凸は激しい。下半部はヘラ削りが施される。内面は何らかの工具による横ナデ、下半部は指オサエ成形である。(109,111)は黄褐色、(110)は、黄灰色を呈し、ともに胎土中粗砂を多く含み、口縁部から体部にかけてほぼ全面に煤が付着する。

以上、これらの土器はやや時代幅が認められる。つまり、薄手で平滑に仕上げた土師器杯(93～95)と折戸53号窯式後半期に類似する灰釉碗(99)が上限であり、藤澤編年Ⅱ-3・4期に類似する山茶碗(102～107)と、厚手の土師器小皿(89～92)が下限としておさえられる。前者は10世紀中葉頃、後者は、12世紀前半～中葉頃の時期が比定できそうである。

pit76 出土土器 (第10-23図112～129)

土師器小皿 (112～119)

口径10cm、高さ20cm前後のもの(112～117)と、口径10.6cm、高さ1.5cmのもの(118,119)がある。口縁上端部のみ横ナデをし、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部上半より底部にかけては指オサエの凹凸がめだつ。赤黄褐色や暗灰色を呈し、胎土中に細砂を多く含む厚手の土器である。残りは良好である。

土師器皿 (120)

ロクロ成形品。底部は回転糸切りのままで未調整。赤黄褐色を呈し、胎土中には細砂を多く含む。

土師器杯 (121～125)

口縁部の外反はほとんどなく、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部上半は横ナデ、体部中半から底部にかけては指オサエの凹凸がめだつ。暗黄褐色や赤黄褐色を呈し、胎土中には細砂を多く含む厚手の土器である。

土師器台付皿 (126)

口縁部は横ナデ、他は指オサエ成形の皿に、大きく外反し端部は丸くおさめる長い高台を貼りつける。高台の内外面は指ナデにより調整される。淡黄褐色を呈し、胎土中に粗砂を多く含む。残りは不良。

土師器台付碗 (127)

口縁部上端部のみ横ナデで、それに伴い端部は尖り気味に丸くおさめる。体部から底部にかけては指オサエで、杯、皿同様の手法である。外方に反るように貼り付けられた高台は低いもので、内外面はナデ調整する。黄褐色を呈し、胎土中には粗砂を多く含む。残りは比較的良い。

土師器甕 (128,129)

ともに小さく外反する短い口縁部の端を、内側に折り曲げ面をなし丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデを施す。(129)は、指ではなく施工工具を用いたようで、それによって生じたと考えられる2条の沈線が頸部をめぐっている。体部外面の調整は刷毛目は施さず、指オサエによる成形のままで凹凸がめだつ。内面は(128)の上半部のみ施工工具による横ナデ、他は指によるナデである。(128)は暗黄褐色、(129)は淡黄褐色を呈し、ともに胎土中粗砂を多く含む。成形、調整の雑な土器である。

以上、これらは12世紀前後頃(平安時代後半)の土器と考えられる。

S B 48 出土遺物 (第10-23図130～137)

土師器皿 (130)

ロクロ成形品。底部は回転糸切りのままで未調整。黄褐色を呈し胎土中には細砂を含む。

土師器杯 (131～135)

口縁部のみ横ナデ。他は指オサエの凹凸がめだつ。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む、器壁は厚い。

土師器台付碗 (136)

底部より口縁部までほぼ真直ぐにのび、端部は僅かにたちあがる。高台は外反気味に貼りつけられる。口縁部は横ナデ、下半は指オサエで凹凸がめだつ。内面は丁寧にナデツケられる。白黄褐色を呈す。

灰釉底部 (137)

胎土は白灰色で堅緻。内面には重ね焼きの痕跡が認められ、底部外面には回転糸切り痕が残る。

以上、これらは12世紀前半頃(平安時代末葉)の

土器と考えられる。

S K 77出土土器 (第10-23図138~144)

土師器皿、杯 (138~141)

ともに口縁部は横ナデ、体部中程から底部は指オサエの凹凸がめだつ。黄褐色や赤黄褐色を呈し、胎土中には粗砂を多く含む。

山茶椀 (142)

口径17.2cmの大型品である。腰部でやや丸味をもつがほぼ直線的にのび、口縁端部は僅かに外反し丸くおさめ、雑な指オサエによる輪花が施される。底部は糸切りの後、雑なナデを施す。白灰色を呈し、胎土中細砂を含み堅緻な土器である。藤澤編年ではⅡ-4期頃に比定できそうである。

山茶椀小椀 (143)

体部はやや直線化し、皿に近くなる。底部は回転糸切りの後、短い高台を貼りつける。藤澤編年ではⅡ-4期頃に比定できそうである。

土師器鍋 (144)

口縁端部は比較的短く内側に折り曲げられ面をなす。口縁部内外面はともに横ナデされる。肩部には指オサエの凹凸がみられる。黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。外面ほぼ全体に煤が付着する。

これらは、Pit76やSB48出土の土器よりやや時期がさがりそうで、12世紀後半頃の土器と考えられる。

包含層出土土器 (第10-23図145~161)

土師器小皿、杯 (145~149)

ともに口縁部は横ナデ、他は指オサエにより成形される。黄褐色や赤黄褐色を呈し、胎土中に細砂を含む。

土師器台付椀 (150~152)

(150、151)は、一見灰釉陶器の焼成不良品かと思われるロクロ成形の精製品。他の土師器とは胎土がまったく異なる。淡黄褐色を呈し残りは非常に悪い。(152)は、杯、皿同様の手法で、口縁部は横ナデ、底部は指オサエ成形したものに、高台を貼りつける。

土師器皿 (153)

ロクロ成形品。高台は欠失する。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む精製品。

緑釉陶器 (154)

白黄色の軟質素地に、底部まで濃緑色の施釉をす

る。残りは非常に悪い。

土師器甕 (155)

短く外反する小さい口縁部を有し、端部は内側に折り曲げ丸くおさめる。口縁部内側面は横ナデ、体部外面は間隔をあけて刷毛目を施す。

志摩式製塩土器 (156)

体部はやや外反気味に直立し、口縁端部は僅かに内傾し尖り気味に丸くおさめる。粘土紐巻き上げで成形された体部内面のみ、胎土の細かい異なる粘土を3mmほど貼りつけている。この貼りつけられた粘土は非常にもろくボロボロしており、部分的に剥落している。底部は欠失する。体部外面は火熱を受け赤化している。

灰釉陶器 (157~161)

椀(157~159)は、腰部でやや丸味をもち、体部はやや外反しながらのび口縁端部を丸くおさめる。やや外方に開く高台の内、外側は横ナデされ、外底には糸切り痕がのこる。(157、159)は、明らかに淡黄緑色の釉がツケガケされている。白灰色を呈し、緻密な胎土である。(160)は、壺の底部で、断面三角形の高台が貼りつけられている。器壁外面には淡緑色の自然釉をかぶる。(161)は、短頸壺で、短く直立する口縁部を有し、端部は平滑に仕あげる。口頸部内外面は横ナデされる。淡灰色を呈し胎土中細砂を含む堅緻な土器。

6. 鎌倉時代の遺物 (第10-24図162~299)

掘立柱建物柱穴内、土壇、井戸、及び遺物包含層出土のものがある。

S K 26出土土器 (第10-24図162~172)

土師器小皿 (162~169)

口径7.0~9.0cm、器高1.0~1.5cm。口縁部は断面三角形に近いもので、端部を尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、体部中程から底部にかけては指オサエ未調整で凹凸がめだつ。黄褐色や暗赤褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器。残りは良い。

土師器皿 (170、171)

口縁端部を尖り気味に丸くおさめる口縁部をもつ。口縁部は横ナデ、底部は指オサエ未調整で、小皿同様の手法である。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器、残りはやや悪い。

山茶椀 (172)

腰部に僅かな丸味をもつが、ほぼ直線的に体部がのび、口縁端部も僅かながら外反し丸くおさめる。低い高台の内、外側は貼り付けの後ナデている。内底には重ね焼きの痕跡がみられ、それより口縁部外面にかけては淡緑色の自然釉をかぶる。白灰色を呈し、胎土中砂粒を多く含む。瀬戸窯製品と思われる。

S K 7 出土土器 (第10-24図173~178)

土師器皿 (173)

口径11.4cm、器高2.0cm。口縁部は内弯気味にほぼ直立し、端部は丸くおさめる。口縁部のみ横ナデ、底部は指オサエ未調整である。口縁部は厚手、底部は薄い土器、白黄色を呈し細砂を含む。残りは良い。

土師器台付椀底部 (174)

外方に開く高台は端部を丸くおさめる。高台貼り付け部のみ横ナデし、他は指オサエ成形である。暗黄褐色を呈し胎土中細砂を含む。残りはやや悪い。

山茶椀 (175)

底部のみの破片で、低い台形を呈す高台の内、外側はナデられ、外底は静止糸切り痕が残る。白灰色を呈し、胎土中砂粒を多く含む。

壺 (176)

ほぼ直立気味に外反する口頸部をもち、口縁端部は外方に丸くおさめる。頸部付け根接合部外面は横ナデされるが、他はロクロ水挽き痕が残る。体部内面には粘土紐接合痕が認められる。口頸部から体部にかけて黄緑色の自然釉をかぶる。暗灰色を呈し、細砂を含む胎土である。渥美窯製品と思われる。

常滑鉢 (177)

口径14.8cm、器高6.0cm。肩部で逆くの字形に内折し、口縁部は内傾させ端部を肥厚気味に丸くおさめる。ロクロ成形品で、底部はヘラ切り未調整。赤茶褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。底部付近のみ焼成が悪い。

土師器鍋 (178)

口縁部だけの破片。口縁端部を内側に折り曲げ面をもつ。口縁部内外面は横ナデされる。赤黄褐色を呈し、胎土中粗砂が多い。残りは悪い。

S B 3 pit 出土土器 (第10-24図179・180)

土師器皿 (179・180)

口縁端部を丸くおさめるものと、尖り気味におさ

めるものがある。ともに口縁部は横ナデ、外底は指オサエのままである。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器。残りは普通。

S B 69 pit 出土遺物 (第10-24図181~186)

土師器小皿 (181・182)

手づくね製で口縁部は正円にならず歪んでいる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。残りは普通。

土師器皿 (183)

口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。黄褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器。

山茶椀 (184・185)

腰部にやや丸味が残るが、ほぼ直線的に体部がのび口縁端部を丸くおさめる。断面三角形の高台の内、外側はナデられ、外底は糸切り未調整である。内底は、全体的にナデられくぼんでいる。白灰色を呈し胎土中砂粒を多く含む。瀬戸窯製品と思われる。

土師器鍋 (186)

口縁端部は内側に折り曲げられ面をもつ。口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はヘラ等によるヨコナデにより生じたあとが残る。黄褐色を呈し、胎土中粗砂を多く含む。残りはやや悪い。

S K 52 出土土器 (第10-24図187~193)

土師器小皿 (187・188)

口縁は正円にならず歪みがある。口縁部は肥厚気味に丸くおさめ、底部は薄い。口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエの凹凸が残る。淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。残りは良い。

山皿 (189)

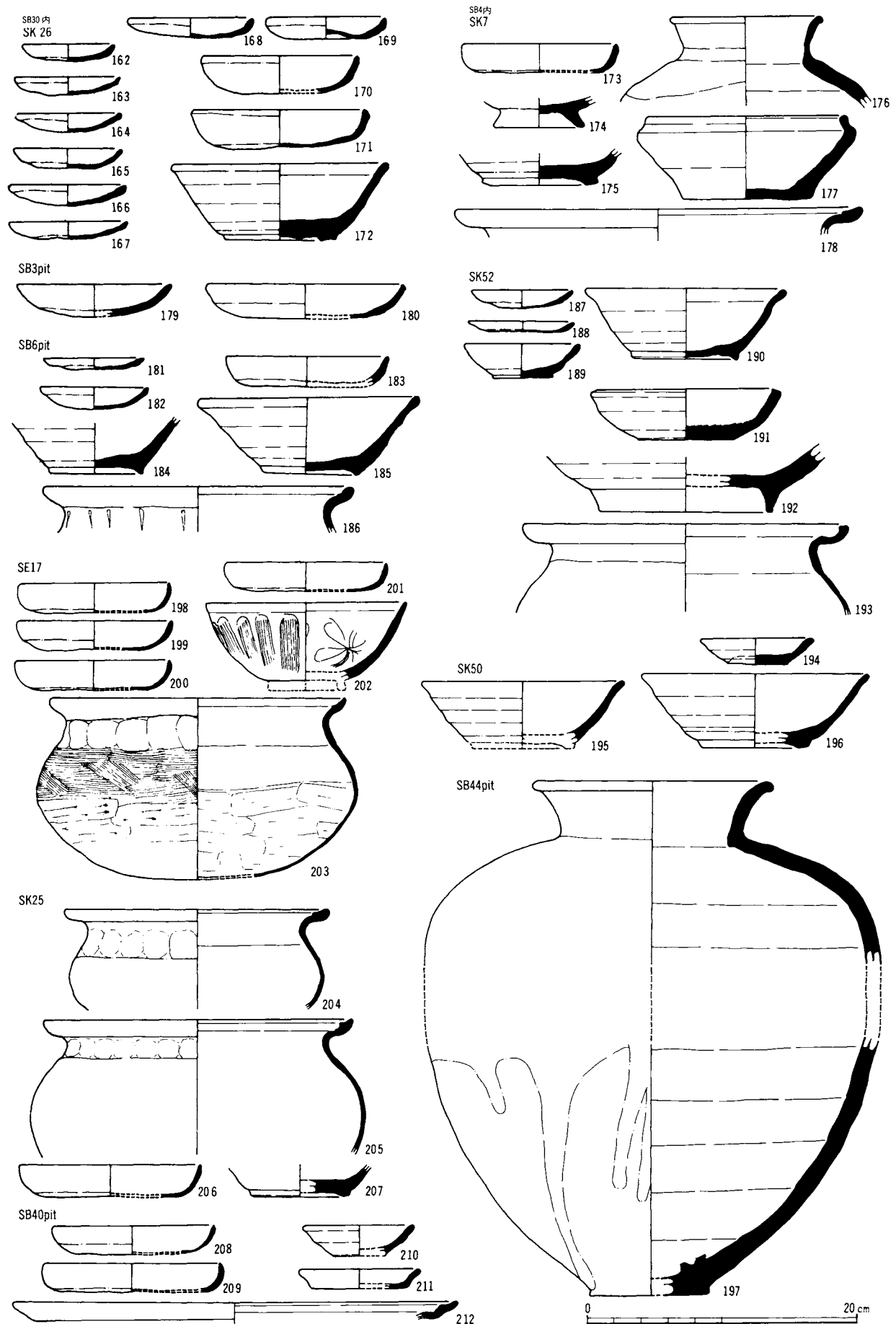
口径8.4cm、器高2.5cm、腰部で僅かに丸味をもちやや外反する口縁端部は丸くおさめる。底部は擬高台のように切断され、回転糸切り未調整である。白灰色を呈し、胎土中砂粒を含む。瀬戸窯製品か。

山茶椀 (190)

腰部は丸味が残る、外反する口縁部の端を丸くおさめる。逆三角形を呈す高台は内、外側とも横ナデされ、外底は回転糸切り未調整である。内底は全体にナデられ浅いくぼみがある。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む。渥美窯製品に似た土器である。

おろし皿 (191)

ゆるやかに外反する口縁部の端は外傾する面をも



第10-24图 遺物実測図 (1 : 4)

ち、外底は回転糸切り未調整で平坦となる。内底にはヘラで格子目状に刻みを入れておろし目をつくっている。外底を除くほぼ全体に白黄色の釉をかぶるが、自然釉か施釉かは不明。瀬戸窯製品と思われる。

鉢 (192)

ほぼ垂直に貼り付けられた高台は、端部を平坦に仕上げ、内外側はナデられる。外底はヘラ切り未調整である。ロク口成形品で暗灰色を呈し、胎土中粗砂を多く含む。残りは良い。

土師器鍋 (193)

口頸部で大きく外反し、口縁は内弯気味に直立し、端部を平坦におさめる。口縁部内外面は横ナデ、体部には刷毛目を施さず指オサエで成形され、器壁には凹凸がめだつ。赤褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。口縁部から胴部にかけて煤が付着する。

S K 50出土土器 (第10-24図194~196)

山皿 (194)

口径8.4cm、器高1.9cm。腰部の丸味はなくなり、僅かに外反する口縁部の端を丸くおさめる。外底は擬高台のように切断され、回転糸切り未調整である。白灰色の胎土であるが、外底を除く全面に淡黄緑色の施釉がみられる(自然釉かもしれない)。胎土中細砂を含む。瀬戸窯製品と思われ、残りは良い。

山茶碗 (195・196)

ともに腰部に丸味が残り、口縁部は僅かに外反して端部を丸くおさめる。逆台形を呈す高台の内、外側はナデられ、外底は糸切り未調整である。(195)は白灰色を呈し、胎土中砂粒を含む瀬戸窯産、(196)は灰色を呈し、胎土中細砂を含む渥美窯に似た製品と思われる。

S B 44 pit 出土土器 (第10-24図197)

壺 (197)

口縁部はくの字形に外反し、端部は丸くおさめる。肩部は丸味をもってなだらかに張り、体部上半部で最大径をもつ。底部は比較的細まり、ヘラ切り未調整のままで平坦に仕上げる。口縁部から底部にかけて暗緑色の自然釉が流れるが、部分的に黄緑色に剝離している。また、内面にも体部中程は黒灰色、底部はほぼ全体に暗緑色の自然釉をかぶり、粘土瘤が一部付着する。体部下半から底部にかけて、僅かに格子目叩きが残るが、ほとんどナデ消されている。

暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む焼成良好の土器。渥美窯製品と思われる。

以上、S K 26、S K 7、S B 3 pit、S B 69 pit、S K 52、S K 50、S B 44 pit 出土のこれらの土器は、土師器小皿、皿類でみれば成形、調整は雑であるが、口縁部は外反し、やや厚手の器壁をもつものが多く、鍋も器壁にまだ厚味が残っている。さらに、山茶碗、山皿は、藤澤編年ではⅢ-5~6期頃に比定できそうなもので、大きな区分で鎌倉時代前半頃の時期と考えられる。

S E 17出土土器 (第10-24図198~203)

土師器皿 (198~201)

口径11.6~12.0cm、器高2cm前後。内弯気味にほぼ直立する口縁部は、端部を尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ成形である。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

青磁碗 (202)

碗部外面には線彫り蓮弁内に櫛描線を配し、蓮弁上に1本の圈線を巡らす。内面は線彫りの花文を配す。釉厚は1mmと比較的厚いもので、青緑色の釉である。素地は白灰色で堅緻なものである。

土師器鍋 (203)

口縁端部は薄く内側に折り曲げられ面をなす。胴部は扁平で、最大径は中程に求められる。口縁部内外面は横ナデ、頸部は指オサエを施す。胴部外面上半は、 $11\sim 12$ 本/1cmの細かい刷毛目を横位を中心に、部分的に縦位に施し、下半部から底部にかけてはヘラ削りがなされる。内面は上半部はナデ、下半から底部は外面同様にヘラ削りが施される。胴部から底部外面には煤が、内面には煮こげが付着する。赤黄褐色を呈し、胎土中粗砂多く含む器壁の薄い土器。

S K 25出土土器 (第10-24図204~207)

土師器鍋 (204・205)

ともに口縁端部を内折し面をもつものであるが、その形態に若干の差異がある。(205)は内折面に2面の凹面をもつ。両者とも口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は指オサエで成形される。胴部外面は煤が全面に付着し、調整は不明であるが器壁には凹凸がみられる。暗黄褐色を呈し、胎土中粗砂を多く含む薄手の土器。残りは普通。

土師器皿 (206)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエのままである。淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。残りは不良。

山茶椀 (207)

底部のみの破片。逆台形の低い雑な高台は内側のみナデられ、外底は糸切り未調整である。内底には一方向のナデがみられる。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む土器。

S B 40 pit 出土土器 (第10-24図208~212)

土師器皿 (208・209)

口縁部は内弯気味に直立し、端部を尖り気味に丸くおさめる。口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエ未調整。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

山皿 (210・211)

腰部外面は内側にへこみ、口縁端部は丸くおさめる。(49)の外底は糸切り未調整である。灰白色を呈し、胎土中細砂を含む。

土師器鍋 (212)

内折される口縁端部は、2面の凹凸をもつ。口縁部は横ナデされる。口縁部外面には煤が付着する。

S K 21 出土遺物 (第10-25図213~224)

土師器小皿 (213~215)

口縁部は正円にならず歪んでいる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエのめだつ手づくね製。淡黄色、赤黄褐色を呈し、胎土中粗砂を含む薄手の土器。

土師器皿 (216~218)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整で凹凸がめだつ。淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。残りは良い。

土師器鍋 (219)

口縁端部は内側に長く折り曲げ凹面を2面もつ。口縁部内外面は横ナデ、頸部は指オサエで成形される。器壁の外面には煤が付着する。黄褐色を呈し、胎土中粗砂を含む薄手の土器。

おろし皿 (220)

腰部よりほぼ直線的に外方にのびる口縁部をもち、端部は内、外側に丸くおさめ、上端に凹面をもつ。内底にはヘラで格子目状に刻まれたおろし目をもつ。外底は糸切り未調整で平坦となる。口縁部の内外面

に淡黄緑色の自然釉をかぶる。白灰色を呈し、胎土中細砂を含む堅緻な土器。瀬戸窯製品と思われる。

山茶椀 (221)

底部よりほぼ直線的に体部がのび、口縁端部を丸くおさめる。低い雑な高台は内、外側ともナデられる。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む渥美窯に似た土器である。残りは良い。

鉢 (222)

底部は欠失するが、腰部より直線的に体部がのび、口縁端部を肥厚させ丸くおさめる。ロクロ成形品であるが、腰部にはヘラ削りがなされる。暗灰色を呈し、胎土中粗砂を多く含む土器。

砥石 (223)

硬質砂岩製で、砥石使用面3面と人為的に割った2面、1面の自然面からなる。

常滑甕 (224)

口縁部をN字形に近く折り返して押える大甕である。球形の胴部中半に最大径をもつ。粘土輪積み成形で、内面にはそのあとが残る。器壁は紫蘇色や茶褐色を呈し、残りは良好である。13世紀後半から14世紀前半(Ⅳ期)頃の土器と考えられる。

S K 38 出土遺物 (第10-25図225~230)

山茶椀 (225~229)

いずれも底部より直線的に体部がのび、口縁端部は僅かに丸味をもつが尖り気味におさめる。低く雑な高台は(225)は内側のみナデるが、他は内、外側ともナデている。外底には回転糸切りのあとがそのまま残る。(227)は暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む渥美窯産に似た土器であるが、他は白灰色を呈し、胎土中砂粒を含む瀬戸窯製品と思われる。藤澤編年ではⅢ-7期頃に比定できそうである。

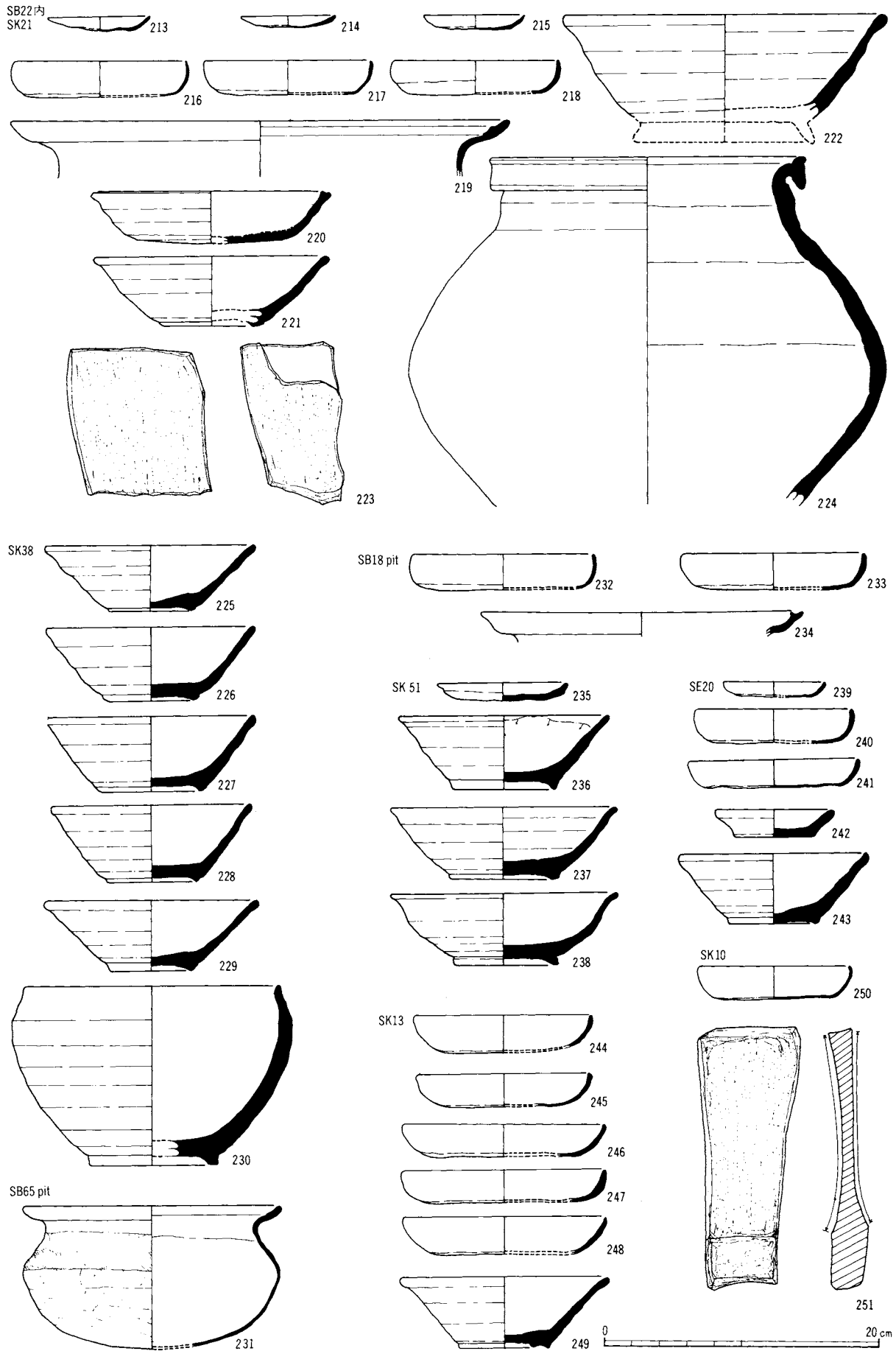
常滑鉢 (230)

肩部がゆるやかに張り出し、口縁部は僅かに内弯して、端部は細く直立気味につまみあげられる。ロクロ成形品で、腰部から底部にかけてヘラ削りされ、その後、逆台形のしっかりした高台を貼りつける。暗赤茶褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。口縁部外面付近に部分的に赤茶色の自然釉をかぶる。

S B 65 pit 出土土器 (第10-25図231)

土師器鍋 (231)

口縁端部は薄く内側に折り曲げられた面をもつ。



第10-25図 遺物実測図 (223、251は1 : 2、他は1 : 4)

胴部は扁平で最大径は中程に求められる。口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は指オサエの凹凸がみられ、体部外面上半は横位の細かい刷毛目、下半から底部はヘラ削りが施される。内面は上半から底部はナデられている。器壁外面には煤、内底には煮こげが付着する。淡黄褐色を呈し、胎土中粗砂を多く含む。

S B 18 pit 出土遺物 (第10-25図232~234)

土師器皿 (232・233)

口縁部は内弯気味に直立し、端部を尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエの凹凸がめだつ。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む全体的に薄手の土器。残りは良い。

土師器鍋 (234)

口縁部は内折し、上端に凹面をもつ。口縁部内外面は横ナデされる。口縁外面には全体に煤が付着する。白黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。

S K 51 出土土器 (第10-25図235~238)

土師器小皿 (235)

口縁部は断面三角形に近い尖り気味のもので、正円にならず歪んでいる。口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエの凹凸が残る。黄褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器。残りは良い。

山茶椀 (236~238)

(236) は、底部より直線的に体部がのび、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。低い雑な高台は内側のみナデられ、外底は回転糸切り未調整である。口縁部内面から内底にかけてほぼ全面に黒褐色の二次的な有機物が付着する。(237・238) は、腰部は丸く口縁部は外反して端を丸くおさめる古い形態を示す。逆台形の丁寧な高台は、内、外側ともナデられる。外底は回転糸切り未調整である。(236) は、白灰色を呈し、胎土中砂粒を含む瀬戸窯製品と思われ、藤澤編年ではⅢ-7期、(237・238) は、暗灰色を呈す胎土中に細砂を含む渥美窯製品に類似したもので、同編年ではⅢ-5期頃に比定できそうである。

S E 20 出土土器 (第10-25図239~243)

土師器小皿 (239)

口縁部は正円にならず歪みがあり、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。手づくね製品。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

土師器皿 (240・241)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整の薄手の土器。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む。

山皿 (242)

腰部外面がくぼみ、口縁部は僅かに外反し端部を尖り気味におさめる。外底は糸切り未調整。白灰色を呈し、胎土中細砂を含む。

山茶椀 (243)

腰部より直線的に体部がのび、口縁端部は尖り気味におさめる。低く雑な高台は内、外側ともナデられる。外底は糸切りの後雑なナデを施す。内底は一方のナデが施される。また、重ね焼きのため、内底を除く体部内面から口縁部にかけて淡黄緑色の自然釉をかぶる。白灰色を呈し、胎土中砂粒を含む瀬戸窯製品と思われる。

S K 13 出土土器 (第10-25図244~249)

土師器皿 (244~248)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。白黄色や淡赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。

山茶椀 (249)

腰部より直線的に体部がのび、口縁部は僅かに外反し端部には丸味が残る。低く雑な高台は内、外側ともナデている。外底は回転糸切り未調整である。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む渥美窯産に類似する土器である。残りは良い。

S K 10 出土遺物 (第10-25図250~251)

土師器皿 (250)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む非常に薄手の土器。

砥石 (251)

硬質砂岩製。砥石面2面と、人為的に切断した4面とからなる。砥石面は非常によく使用され薄くなっている。

S K 55 出土土器 (第10-26図252~261)

土師器小皿 (252~258)

いずれも口縁部は正円にならず歪んでいる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整の手づくね製品。淡赤黄褐色や黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む薄手

の土器である。残りは良い。

土師器皿 (259・260)

口縁部は内弯気味に直立し、端部を尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

土師器鍋 (261)

口頸部で大きく外反し、短い口縁部はやや外方に開き、端部は内折させ面をもつ。口縁部から頸部にかけては横ナデされる。器壁にはほぼ全面に煤が付着する。赤黄褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。

以上、S E 17、S K 25、S B 40 pit、S K 21、S K 38、S B 65 pit、S B 18 pit、S K 51、S E 20、S K 13、S K 10、S K 55の出土土器は、口縁部が正円にならず歪みの多い小皿や、口縁部が内弯気味に直立し端部を尖り気味に丸くおさめる皿、さらに、比較的長くまた薄く内折される口縁部をもつ鍋等、いずれも器壁は薄手のものである。また、山皿、山茶碗は、藤澤編年Ⅲ-7期頃のものが多く、大きな区分で鎌倉時代後半頃の土器と考えられる。

包含層出土土器 (第10-26図262~308)

土師器小皿 (262~273)

ほとんどの口縁部は正円にならず歪んでいる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整の手づくね製品である。淡赤黄褐色や白黄色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

土師器皿 (274~278)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整で凹凸がめだつ。白黄色や淡赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む土器である。

土師器鍋 (279~282)

いずれも口縁端部を内側に折り曲げて面をもつものであるが、その面は2種類のタイプがある。ともに口縁部は横ナデ、頸部は指オサエで成形するもの(21)と横ナデのもの(279・280・282)がある。体部外面には煤が付着するが、細かい刷毛目で調整されるもの(280・281)と、指オサエ成形のままのもの(279・282)がある。黄褐色や赤黄褐色を呈し胎土中粗砂を含む薄手の土器であるが、(280)は器壁は厚い。

山茶碗 (283~288)

腰部に丸味をもち、外反する口縁部の端を丸くおさめるもの(283~285)と、腰部よりほぼ直線的に体部がのび、口縁端部を尖り気味に丸くおさめるもの(286~288)がある。いずれも高台の内、外側はナデられ、外底は糸切り未調整である。(286~288)の内底部は、丸くナデられくぼんでいる。(286)は片口を意識したのか指で口縁部を凹ませている。白灰色を呈し、胎土中砂粒を多く含む瀬戸窯製品と思われるもの(283・285・286・288)と、暗灰色を呈し胎土中細砂を含む渥美窯製品に類似するもの(284・287)がある。藤澤編年では(283~285)はⅡ-4~Ⅲ-5期、(286~288)はⅢ-6期頃に比定できそうである。

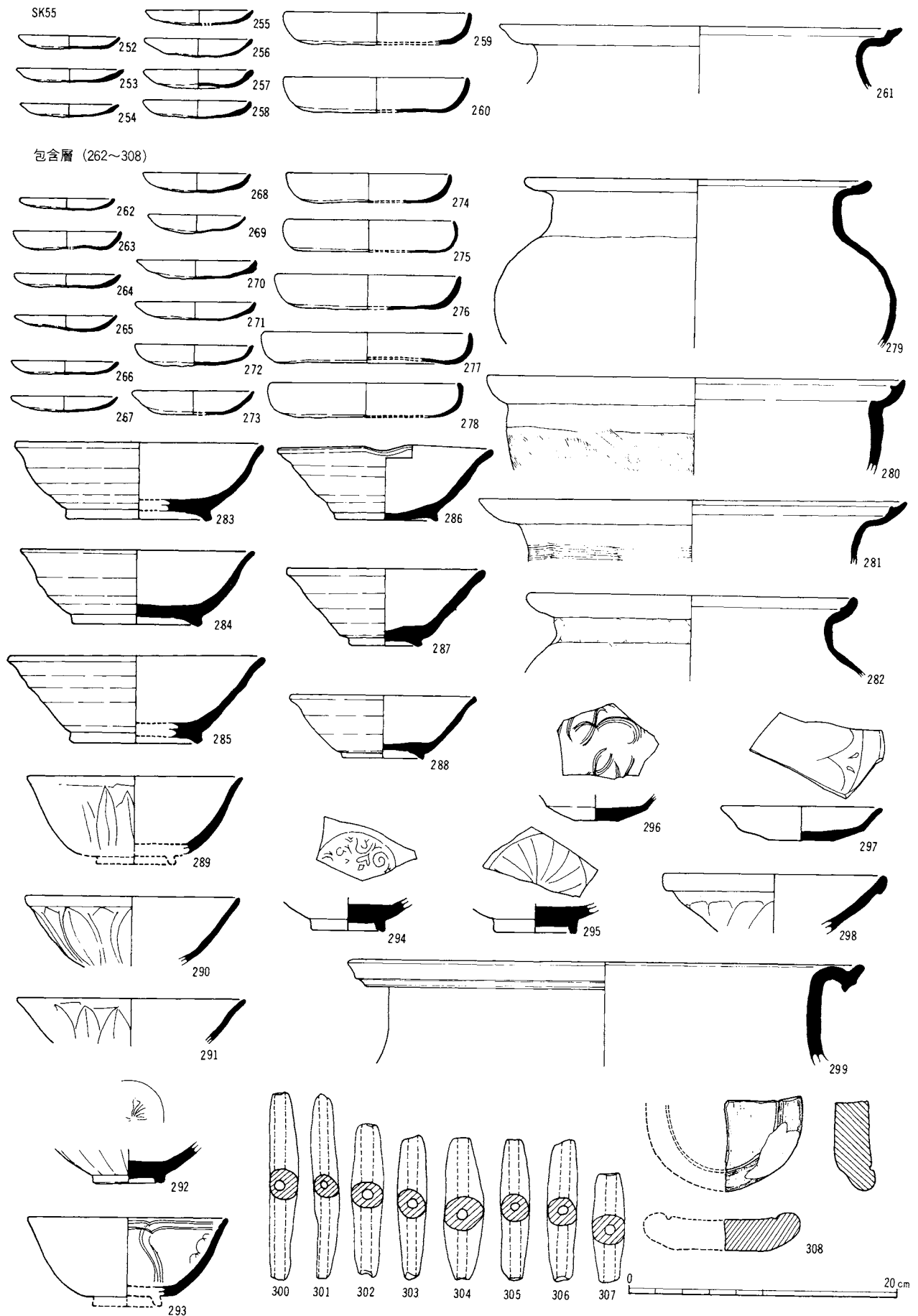
青白磁類 (289~298)

(289~292)は、線彫りの鎬蓮弁文碗で、(289・290)は蓮弁上に1本の圈線が1周する。高台はいずれも削り高台で、高台内面から外底にかけては露胎である。釉厚は0.5~0.8mmの薄いもので、深緑色の釉である。素地の胎土は白灰色の堅緻なものである。(292)の内底には、線彫りの花文が施される。(294)は、内底部に線彫りの文様を配し、淡灰色の施釉がなされる。

(293)は、碗内面に片切彫りの2条の沈線と、線彫りの花文を配す。釉厚1mmほどの淡青黄色の施釉で、貫入が多く入る。(295)の碗は、内底に線彫りの花文を配するもので、削り高台の内面から外底は露胎で、淡青灰色の施釉がなされる。釉厚は0.3mmと非常に薄い。

皿(296)は、内底見込み部に劃花文を配したもので、ヘラ削りの底部を除く他は淡黄緑色の施釉がなされる。釉厚は0.8mm程である。(297)は白磁の皿で内面に線彫りによる文様が配される。糸切り未調整の外底を除く全体に淡黄灰色の施釉がなされる。釉厚は0.5mm程で貫入もみられる。(298)は、口縁部を玉縁状にしたもので、体部外面にはヘラで削られた花卉が施される。釉厚0.2mmの薄い白灰色の施釉がなされる白磁である。(289~291、293)は龍泉窯製品、(296)は同安窯製品、(297、298)は日本製と思われる。なお、この他小片を含めれば約80点の青白磁類が出土した。

常滑甕 (299)



第10-26図 遺物実測図 (300~308は1:2、他は1:4)

口縁端部はやや外方に開くが、N字状に折り返す口縁部をもつ。粘土紐輪積成形であるが、口頸部内面には指オサエのあとが残る。

その他の遺物 (第10-26図300~328)

土錘 (300~307)

いずれも手づくね製で、器面をナデで成形する。先端が尖り断面円形を呈す細長いもので、両端はヘラで切断したものである。

石硯 (308)

海部及び陸部の $\frac{1}{2}$ を欠くおよそ $\frac{1}{4}$ の小片で、全体

の形状は不明である。外周は幅1cm、高さ3mmほどの丸い凸面をもち、その内側は幅2mmほどの溝が巡る。陸部には縦方向の研磨痕が認められ若干すり減っている。硬質砂岩製もしくは頁岩製と思われる。

pit16出土銭貨 (第10-27図309~328)

建物には伴わない柱穴中程より、重なった状態で一括して出土した。判読できるものは、いずれも唐銭、北宋銭に限られ、開元通宝から紹聖元宝まで11種20枚である。法量、特徴は初鑄年代順に下表10-2に示した。

時代	No.	銭貨名	初鑄年代	西暦	書体	特 徴	径 cm	重さ g
唐	309	開元通寶	武徳4年	621	隸	大字肉細 背上に月文	2.4	2.9
	310	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	2.5
	311	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	2.9
	312	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	2.7
	313	〃	〃	〃	〃	〃 背上に「洛」か	2.4	3.3
北	314	咸平元寶	咸平元年	998	楷	大字、 $\frac{1}{2}$ 欠、外輪幅広	—	(1.2)
	315	景德元寶	景德2年	1005	〃	中字、「元」は行書に近い。「徳」と「元」の間に月文	2.4	3.1
	316	天聖元寶	天聖元年	1023	〃	大字、	2.5	2.8
	317	〃	〃	〃	〃	中字、背の外輪にズレ、孔形不明	2.4	3.2
	318	〃	〃	〃	〃	小字肉太、外輪幅広	2.4	3.1
	319	皇宋通寶	宝元元年	1038	篆	大字、「皇」は楷書に近い。背の外輪、内部、孔にズレ	2.4	2.6
	320	〃	〃	〃	〃	小字、	2.5	2.9
	321	至和元寶	至和2年	1055	楷	中字「至」のみ大字、背の外輪幅広	2.3	3.2
	322	至和通寶	至和2年	1055	篆	中字、外輪幅広	2.4	3.2
	323	熙寧元寶	熙寧元年	1068	楷	大字、背の外輪、内郭消失気味	2.4	3.3
宋	324	〃	〃	〃	〃	中字、孔形不整	2.3	(2.1)
	325	元豊通寶	元豊元年	1078	行	中字、	2.4	3.3
	326	〃	〃	〃	篆	中字、孔形不整	2.4	2.8
	327	元祐通寶	元祐元年	1086	行	中字、外輪幅広	2.3	3.8
	328	紹聖元寶	紹聖元年	1094	篆	小字、背外輪幅広	2.3	3.3

第10-2表 Pit 16出土銭貨一覧表

7. 中世墓出土遺物 (第10-28・29図329~368)

各遺物の時期をみれば平安時代末葉から鎌倉時代後半にかけてのものであるが、各墓出土ごとに述べることにする。しかし、混入遺物と考えられる土器小片も含まれ、すべてを副葬品と考えることはできないと思われる。

S X 29出土土器 (第10-28図329)

大甕 (329)

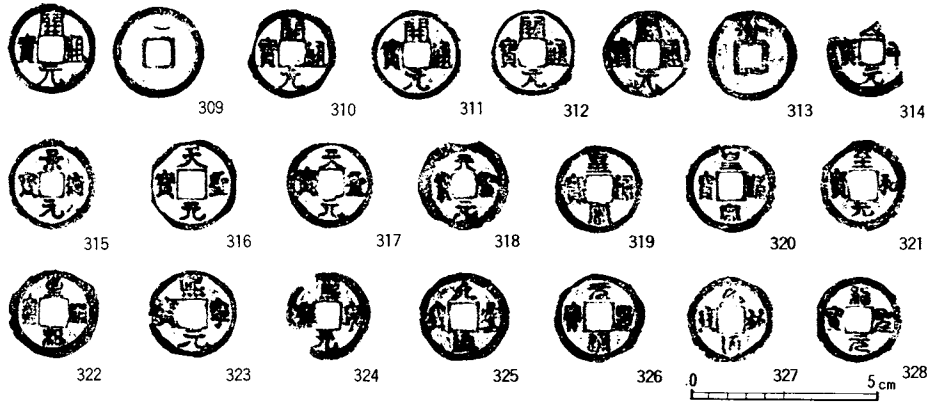
くの字形に外反する短い口頸部を有し、端部が薄く横にのびた口縁部をもつ。肩部は丸く張り体部上半に最大径をもち、下半部は細まっている。底部はちょうど接合部で打ち欠いており欠失する。口縁

部から頸部にかけては横ナデ、体部中半から下半にかけて3段にわたって押印帯が認められるが、部分的にナデで消している。体部内面には輪積み成形のあとが残る。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む焼成及び残りの良い土器。平安時代末頃の渥美窯製品と考えられる。

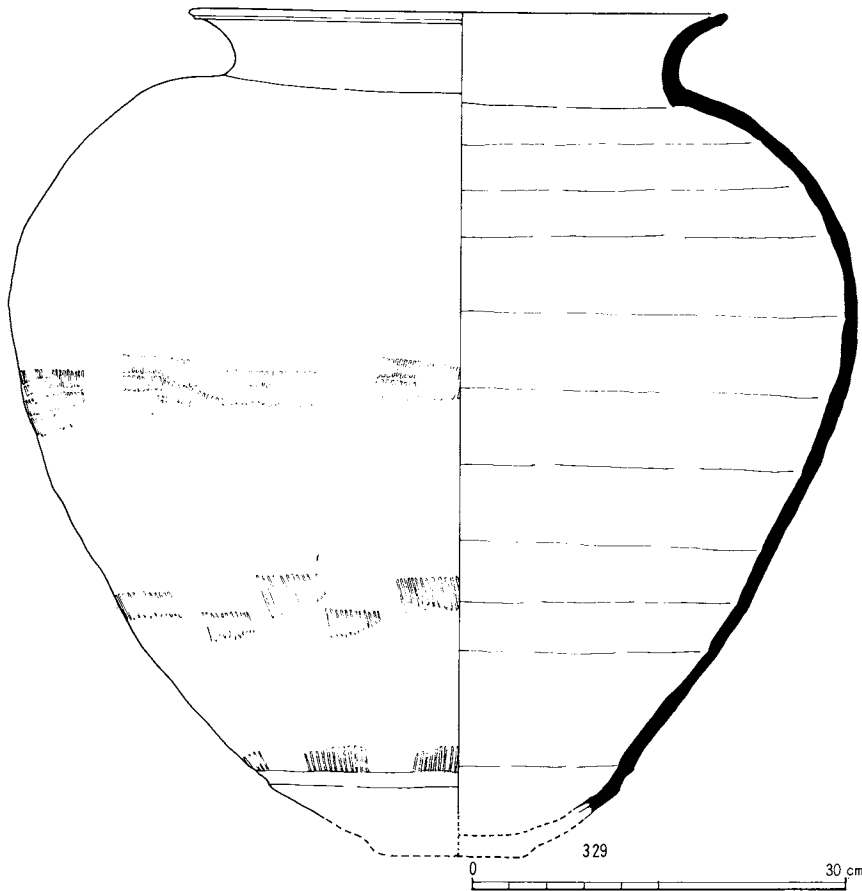
S X 47出土遺物 (第10-29図330・331)

菊花双鳥鏡 (330)

径10.4cm、縁高7mm、縁幅3mm、鏡胎1mm。外傾式細縁の薄手の鏡である。鏡背文様は、内区全面に花卉は少ないが菊と思われる花文と左に双鳥、外区には水流と思われる波文が部分的に配されている。鈕座をもつ鈕の孔には和紙のコヨリが残っている。



第10-27図 Pit16出土銭貨拓影(1:2)



第10-28図 S X 29出土土器実測図(1:6)

鏡面、鏡背とも緑青が生じ、また、一部は白蠟化しており残りは悪い。平安時代後半から鎌倉時代にかけての鏡と思われる。

山皿 (331)

径7.0 cm、器高1.7 cmの完形品。腰部で僅かに丸味をもち、外反する口縁端部を丸くおさめる。外底は擬高台のように切断し、回転糸切り未調整である。内面及び口縁部外面の全面にかなりきれいな淡緑色の釉をかぶる(自然釉か施釉かは不明)。白灰色を呈

し、胎土中細砂を含む。瀬戸窯製品と思われ、藤澤編年ではⅢ-5期に比定できそうであり、埋葬時期の一端を知ることができる。

S X 56出土遺物

(第10-29図332~338)

山吹草鳥鏡 (332)

径9.6 cm、縁高4 mm、縁幅4 mm、鏡胎1.5 mm、外傾式細縁の鏡である。鏡背文様は右下及び上方に山吹と思われる草花と、左に双鳥を配している。鏡背及び鏡面の一部には緑青が生じており残りは悪い。なお、鏡面の一部には和紙が貼りついて残っている。和紙で包んで埋葬したものと思われる。

土師器小皿

(333~333)

口縁部は正円にならず歪みがある手づくね成形品。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整である。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

緑釉底部 (336)

灰黄色の軟質素地に濃緑色の釉が施される。残りは非常に悪く、釉の剥落がみられる。混入品か。

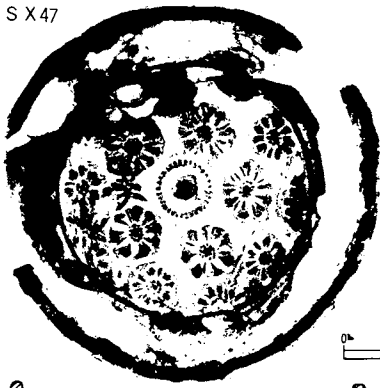
青磁椀 (337)

片切彫りによる蓮弁文を体部外面に施す。胎土は白灰色の堅緻なもので、淡黄緑色の釉厚は0.3 mmと薄い。高台部は欠失し1/3程の破片である。

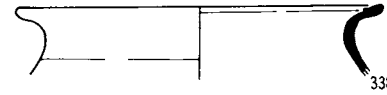
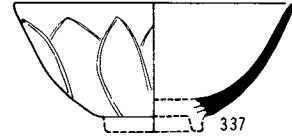
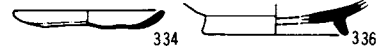
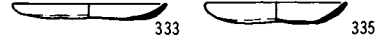
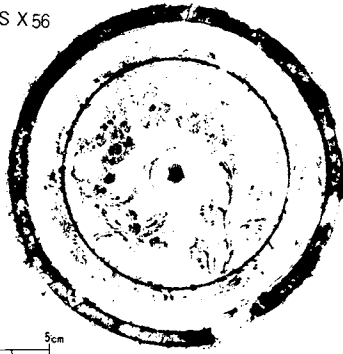
土師器鍋 (338)

口縁端部は内側に折り返し凹面をもつ。口縁部内外面は横ナデを施す。黄褐色を呈し、胎土中粗砂を

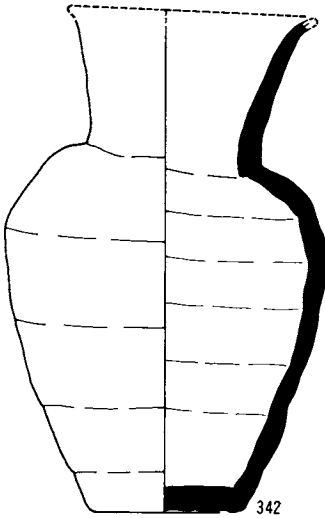
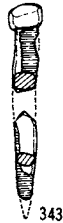
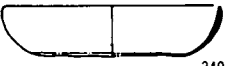
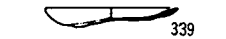
S X 47



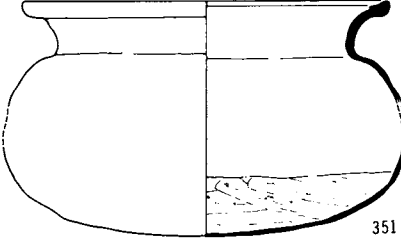
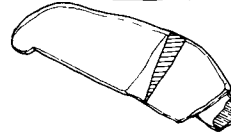
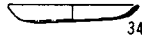
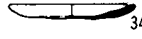
S X 56



S X 68



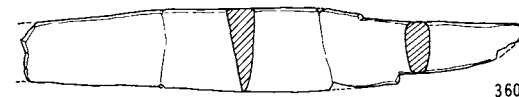
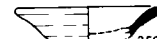
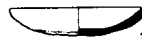
S X 41



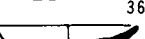
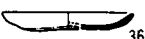
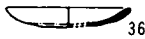
S X 23



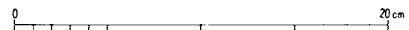
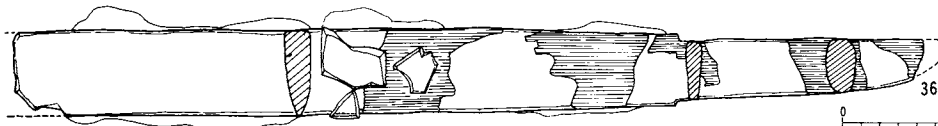
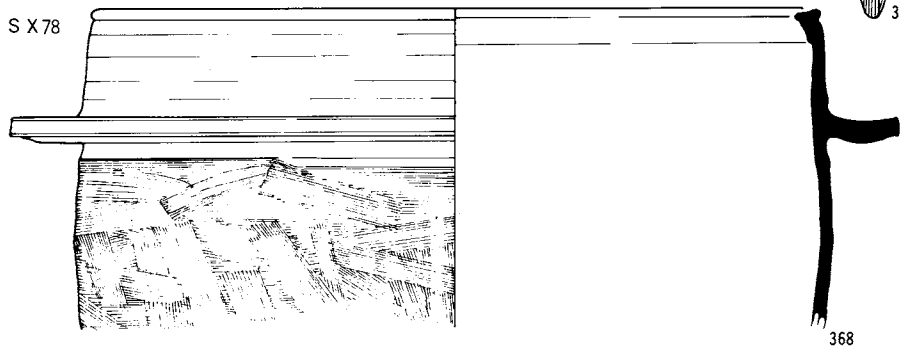
S X 79



S X 54



S X 78



第10-29図 中世墓出土遺物実測図(拓影は1:2、鉄器は1:3、他は1:4)

多く含む。器壁外面には煤が付着する。1/3程の破片。

S X 68出土遺物 (第10-29図339~344)

土師器小皿 (339)

口縁部は正円にならず歪む手づくね成形品。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。残りは悪い。

土師器皿 (340~341)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエ未調整。淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。

広口瓶 (342)

やや外方に開く長い口縁部をもち、口縁端部は欠失するが薄く丸くおさめるものと考えられる。細長い体部は最大径を肩部にもつ。全体的にロクロ水挽き成形で、後の調整は施さない。頸部の付け根は雑なもので、体部内外面には輪積みのあとが残る。口縁部内面及び体部外面上半部に、黒褐色の2次的な有機物が付着する。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含む焼成の甘い土器である。渥美窯製品と思われる。

釘 (343)

頭部は叩きつぶされて面をもち、断面はほぼ方形を呈す。部分的に木質が付着する。

小刀 (344)

全長29.5cmの完形品。刀身は平棟平造りで断面二等辺三角形を呈す。刃関は背、刃部とも僅かに認められる。茎部は刀身に対してほぼ真直ぐつけられ、端部は丸くおさめる。断面は刃部側が狭い台形を呈す。茎部には部分的に木質が残るが、目釘孔は不明である。

S X 41出土遺物 (第10-29図345~351)

土師器小皿 (345~348)

口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエ未調整の手づくね成形品。口縁部は正円にならず歪みがある。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む土器。

土師器皿 (349)

口縁部は直立気味に内弯し、端部は丸くおさめる。口縁部のみ横ナデ、外底は指オサエ未調整。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。

鉄製品 (350)

銹化がひどく残りは悪いが鎌と推定した。先端部は丸味をもち、刃部は厚さ2mmと薄いものである。

茎部には一部木質が残る。

土師器鍋 (351)

口縁端部は内側に折り返して凹面をもつ。口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部外面は指オサエの凹凸がめだち、刷毛目は施されない。内底部には不定方向のヘラ削りを施す。黄褐色を呈し、胎土中粗砂を多く含む薄手の土器である。

S X 23出土遺物 (第10-29図352~357)

土師器小皿 (352、353)

口縁端部は三角形に尖る。口縁部上端のみ横ナデ、体部から外底にかけては指オサエの凹凸がめだち。暗黄褐色を呈し、胎土中細砂を含むやや厚手の土器である。

釘 (354~356)

頭部を叩きつぶされて面をもち、断面はほぼ長方形を呈す。部分的に木質の付着するものがある。

小刀 (357)

関部付近は欠失する。刀身は平棟平造りで断面二等辺三角形を呈し、全体に木質が付着する。埋葬時の上面にあたる側には、土師器小皿片が付着する。茎部には柄の木質が卵型に残り、目釘も遺存する。

S X 79出土遺物 (第10-29図358~360)

土師器小皿 (358)

底部のみ指オサエ未調整で、他はナデにより成形される。赤黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む。

山皿 (359)

底部は欠失する。腰部外面でくぼみ、口縁端部は丸くおさめる。白灰色を呈し、胎土中細砂を含む。

小刀 (360)

切先部は欠失する。刀身は平棟平造りで断面二等辺三角形を呈す。関部は背と刃側では位置が異なる。銹化がひどく木質の付着は不明であるが、断面が楕円形を呈すことより柄の遺存が推定される。

S X 54出土遺物 (第10-29図361~367)

土師器小皿 (361~364)

口縁部は正円にならず歪みがある。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整、白黄色や淡黄褐色を呈し、胎土中細砂を含む薄手の土器。

土師器皿 (365・366)

口縁部は内弯気味に直立し、端部は尖り気味に丸くおさめる。口縁部は横ナデ、外底は指オサエ未調整。

整である。口縁部のみやや厚手、底部は非常に薄い。白黄色を呈し、胎土中細砂を含む。

小刀 (367)

切先部は欠失する。刀身は平棟平造りで、断面二等辺三角形を呈すがやや厚い。刃関は背、刃側とも認められる。茎部は刀身に対してほぼ真っ直ぐにつけられるが端部は欠失する。刀身、茎部には木質の付着が認められるが、目釘孔は不明である。なお、埋葬時の上面にあたる刀身部には、土師器小皿片が付着する。

S X 78出土土器 (第10-29図368)

羽釜 (368)

〔補註〕

本文中で用いた土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗の編年根拠はそれぞれ下記の文献によった。

- 奈良国立文化財研究所編『平城京発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 中村 浩他『陶邑Ⅲ』大阪府文化財センター 1978

反転出土のため底部は欠失する。直立する口縁部を有し、端部は内側に折り曲げられ凹面をもつ。鏝は体部に対してほぼ直角につけられる。口縁部内外面は横ナデ、鏝部の接合部も丁寧な横ナデが施される。体部外面は9~10本/1cmの細かい刷毛目が上半部は横位に、下半部は斜めに施す。内面はナデで仕上げている。淡黄褐色を呈し、胎土中粗砂を含む。体部外面には煤が付着する。

以上、これらの中世墓の時期については出土遺物より、S X 23、S X 29、S X 47、S X 56は平安時代末葉~鎌倉時代前半、他は鎌倉時代でも後半頃に比定できると思われる。

- 檜崎彰一、斎藤孝正『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅰ~Ⅲ』愛知県教育委員会 1980 1981 1982
- 前川 要『猿投窯における灰釉陶器生産の最末期の諸様相』『瀬戸市歴史民俗資料館紀要Ⅲ』瀬戸市歴史民俗資料館 1984
- 藤澤良裕『瀬戸古窯址群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』瀬戸市歴史民俗資料館 1982

4. 結 語

今回の調査は約8500㎡と広範囲なもので、検出された遺構、遺物には得るものが多かった。言い換えれば、広範囲にわたる調査区の隅々まで、歴史を物語る資料を提示し、これまで発掘調査例がほとんどなかった宮川右岸地域において、数多くの考古学的な成果を得ることができたといえる。

調査の結果、縄文後期~晩期の土器をはじめ、弥生時代~鎌倉時代にかけての遺物や、住居も弥生中期、古墳時代後期、奈良時代後半、平安時代後半~鎌倉時代全般にかけて検出することができ、弥生時代~鎌倉時代にかけて断続的に形成された集落であることが判明した。

しかし、室町時代頃に入ってから、何らかの理由で生活の営みが消え、遺構等は検出することはできなく、それは洪水等で、居住地としての適性を失ったものと考えられる。

以下、種々の成果及び問題点について若干述べ結語としたい。

1. 弥生中期、古墳時代後期の竪穴住居について

発掘区の南端部幅8mのトレンチ内で、幸いにも2棟(S B 74、S B 75)検出した。検出面は標高約12.7mと発掘区内で最高所に位置し、建物の主軸はN 39° Eと方向を揃えている。わずか2棟の検出ではあるが、右岸周辺地域では初検出であり、意義深いことであつた。

というのも、「I. 歴史的環境」で先に詳述したように、周辺地域では弥生中期の遺構は未検出であり、中期後半の遺物は左岸の月よべ遺跡、小社遺跡、右岸の元新田遺跡で少量発見されているのみで、稀薄な状況であった。後期になって、広大な沖積地を眼下に見下す左岸中位段丘上には、ムラが連綿と盛況して展開するが、右岸においては以然として佐八遺跡、元新田遺跡、万所遺跡等で、遺物散布が認められる程度で、表採資料から小規模な展開を推察できるにとどまっていたからである

以上のような歴史的背景の中で、2棟のみの検出で判断することは早計かもしれないが、トレンチ部周辺においても住居の形成を想定することは十分可能であり、小規模な展開ではあるが左岸よりも早く集落の形成が認められることになったといえる。

次に古墳時代後期の竪穴住居についてみる。発掘区の中央部、南トレンチ部で集中せず分散して3棟（S B 24、S B 67、S B 71）検出された。検出面は標高約12.8mと、調査区内でも高所にあたり、建物の主軸はN 62°～65°Eとほぼ方向は揃っている。いずれも長方形を呈し、S B 24を除く他は小型のものである。カマドはS B 24とS B 71にみられ、ともに東辺に付設されている。

このうちS B 24は、陶邑古窯址田辺編年TK-47型式（同中村編年Ⅱ-1期）^①に比定できる蓋杯が出土し、6世紀初頭頃の住居と考えられ、市内初の明確な資料提示となった。^②

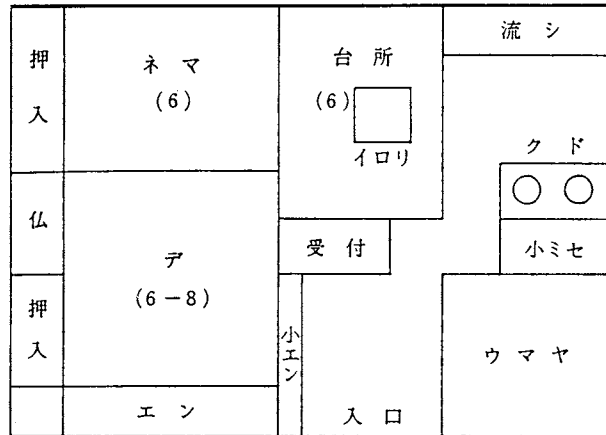
2. 掘立柱根石建物について

柱掘形内の底及び中程に川原石を根石として据えた（根巻き石とは明確に異なる。また、据え方も柱筋に長軸を揃えたものもあるが、意識的な統一性はあまりみられない）『掘立柱根石建物』^③とでも言うべき建物が多く検出された。

この建物は、ほとんどが総柱的建物であるが、一部根石の高低で廊部を想定できる建物（S B 3、S B 4、S B 9、S B 70等）はあるが、身舎部、廊部土間部、さらには間取り等を復元することは、今後、建築学的な要素から検討を加えなければならない大きな課題として残っている。

これらの建物の中には、南東隅に東西1間×南北2間内にほぼ収まる浅い方形土壇を伴う建物があり、近年、このような建物は県内でも、鈴鹿市郡山町末野C遺跡、松阪市久保町草山遺跡、明和町齋宮等で多く検出されている。この方形土壇の機能については、近世の一般民家の典型的な間取りを参考にして、短絡的に推定すれば厩とするのが妥当だと考えられる。

たとえば、第10-30図は、大正、明治期の民家の例ではあるが、入口土間の南東隅にマヤ、日当りの良い南側が客間（デ）、北側に寝室（ネマ）や居間という、



第10-30図 民家の間取り例

所謂「三間どり」の間取りが多い^④。そのまま、方形土壇を伴う建物にスライドさせて復元することは非常に問題があるが、このような間取りを想定することも可能かもしれない。

しかし、厩と比定すれば、後述する集落変遷の分類の中で、Ⅱ期には7棟中3棟、Ⅲ期では8棟中4棟と、ほぼ半数が馬もしくは牛を家畜として保有していたことになり、13世紀～14世紀頃にかけて、一集落内での保有数を考えると、少し多いとも考えられ問題も出てくる。さらに、S B 22内の石組がみられる土壇からは、日常雑器である土師器小皿、皿、鍋小片が多量に出土しており、他の機能を考慮する必要もある。たとえば、上浜田遺跡（神奈川県海老名市）で検出された13世紀中葉頃の4間×2間の建物内に竪穴状遺構があり、その性格についてはムロと推定されている。ただし、13世紀後半～14世紀頃の4間×2間の北側土壇の伴う建物では、馬具が出土しており、厩舎とされており^⑤、今後の検討課題といえる。

なお、このような掘立柱根石建物の出現時期は、建物柱穴内及び建物内方形土壇の出土遺物より、本遺跡では13世紀前後に求めることができる。

3. 集落の構成、変遷について

本遺跡の中心をなす古代末～中世にかけての、すべて柱筋方向を磁北より東に偏る特色をもつ掘立柱建物で形成される集落の一端を検出したが、その建物の年代をⅢ期に分類して、集落の構成、変遷を推察してみたい（第10-31図参照）

〔Ⅰ 期〕

発掘区の北東、中央西、南の3ブロックにみられる根石を持たない掘立柱建物で構成されるが、井戸、区画溝等は未検出である。建物柱穴内の出土遺物から11世紀後半頃を中心とした建物群と推定される。

比較的まとまって検出された中央西区の場合、建物の柱筋方向でみればS B 48、S B 59、さらに時期は不明であるが柱筋方向を同一とするS B 42が、N35°～36°E内で収まり、1群を形成すると思われる。また、柱筋方向はN30°E前後に収まるS B 35、S B 63、時期不明S B 36も1群を形成し、2群に大別できそうである。しかし、北、東、西側の3面に廂を持ち、南面に1間分の柱の出をもつS B 33は、両群の建物方向とはまったく異なる柱筋方向を示し、特異なものとして位置づけられる。

一方、ともに全容は不明だが南区のS B 72とS B 73、北東区のS B 80とS B 81は、前者は西側の柱筋を、後者は北側の柱筋を揃えて配置されており、柱規格性が窺えるが、柱筋方向はN46°EとN24°Eとなり、他の建物群とはその方向を異にしている。

以上のようにⅠ期における建物は、掘立柱根石建物は1棟もなく3間×2間や、総柱建物で構成されるが、各群における柱筋方向は磁北より東に偏するという特色の他は、統一性はみられない。なお、各建物群の詳細な時期は、土器型式の明確な差異としてあられわず、前後関係や同時併存かは確定することはできない。

〔Ⅱ 期〕

総数7棟が検出され、建物柱穴内や建物内南東隅方形土壇の出土遺物より12世紀末～13世紀中葉頃にかけての時期が比定でき、鎌倉時代前半頃の建物群と推定した。しかし、これに伴う井戸、区画溝はⅠ期同様検出されていない。

この時期に入って初めて掘立柱根石建物が出現するが、本遺跡内では根石を持たない掘立柱建物とは併存していない。なお、建物内南東隅に方形土壇が伴う建物は未検出部分もあるが7棟中3棟を数える。

S B 44、S B 53、S B 64の3棟が集中する中央東区の場合、S B 44とS B 53は柱筋方向をN30°Eと揃えており、5間×5間の建物と推定したS B 53が主

屋、3間×3間南に1間の1室をもつ建物と推定したS B 44を副屋とした構成を指摘できるかもしれない。また、S B 64は柱筋方向は4°ほどずれるが倉庫的機能をもつ建物と推定すれば、主屋、副屋、倉庫という基本的な建物構成を推察することも可能である。

しかし、S B 4を除くS B 3とS B 30は柱筋方向がN28°Eと揃ってはいるが分散して分布しており、N28°～30°E内に収まるⅡ期の7棟が、それぞれ独立した建物であった可能性も十分考えられるところである。

〔Ⅲ 期〕

総数8棟が検出され、建物柱穴内、南東隅方形土壇内及び井戸の出土遺物より、鎌倉時代後半代の建物群と推定した。本期に至って初めて建物に伴うと考えられる井戸が検出されたが、区画溝は以前として未検出である。

8棟はすべて掘立柱根石建物である。また、南東隅に方形土壇が伴う建物は未検出部分もあるが8棟中4棟となる。

本期の建物の特色は、発掘区中央東で検出したS B 40とS B 43が柱筋方向をN25°Eと揃えて近接する他は、柱筋方向に統一性はなく各建物が発掘区内に点在することがあげられ、また、建物規模も4間×4間のものがほとんどで、主屋、副屋というような建物構成を指摘することはできない。

井戸についても、各建物が個々に保有しておらず、S B 14の南西4mにS E 17、S B 18の南3.8mにS E 20、S B 9の北東3.8mにS E 8が検出された他は認めることができない。

いずれにしても、個々の建物が同時併存であったか、また、前後関係があるのかは確定できないが、各建物が点的に分布することより、個々に独立した建物と考えるのが妥当だと思われる。

以上、集落は発掘区北から中央部は東側に、南トレンチ部は東、西側に広がることは明確であり、集落の全容を語ることはできないが、各期の建物構成について述べた。

近年、集落内の周辺をめぐる溝や柵で囲まれ、棟方向をほぼ統一した主屋、副屋、倉庫という建物群で構成される中世集落の諸例が数多く報告されているが、本遺跡ではそのような構成を指摘することは

できなく、柱筋方向を磁北より東に偏って形成された個々に独立した建物で構成される集落である可能性が強いといえる。

また、建物の変遷でみればⅠ期(11世紀後半頃)は3間×2間の掘立柱建物や総柱建物で構成され、13世紀前後になって4間×4間、5間×4間の掘立柱根石建物が出現することが指摘でき、掘立柱建物、総柱建物→掘立柱根石建物へという変遷過程がうかがえる。

ところで、発掘区北よりで検出した東西に走る大溝SD12は、上層埋土遺物でみれば12世紀前半～中葉頃には埋没していたと考えられ、Ⅱ、Ⅲ期の建物群とは併存しなかったことが窺え、大溝によってⅡ、Ⅲ期の集落が区画されていたと考えることはできない。

報文の執筆については、1、2、(2)、3、(3)～(7)、4は岩中が、2、(1)、(3)～(6)、3、(1)、(2)は高見が担当した。(高見宜雄、岩中淳之)

[註]

- ① 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981 及び、中村浩他『陶邑Ⅲ』 1978 の編年による。
- ② 実見した限りでは、市内におけるTK-23～TK-47型式(中村編年Ⅰ-5型式～Ⅱ-1型式)の須恵器は、有滝町高ノ御前遺跡の表採資料である蓋杯と、西豊浜町野依に所在する丁塚古墳出土と考えられる器台、小型壺のみで、いずれも外城田川下流左岸の野依及び有滝地区にとどまっており、遺構に伴う明確な資料としては初見例である。
- ③ 柱掘形内に据えられた川原石に根石という呼称が適しているかどうかは問題があり、土台石とでも言った方が良いかもしれない。しかし、すでに県内出土の諸例で根石という呼称が使用されているため便宜的に統一した。
- ④ 森田利吉編『三重県民家調査概報』 三重教育委員会 1974.3 には、県内各地域の民家の間取り図が報告されている。なお、例示した間取り図は、飯南町史編纂委員会『飯南町史 第10編民俗』P1390 の例(一)図による。
- ⑤ 神奈川県教育委員会『上浜田遺跡』1979 大三轮龍彦「中世・近世の集落—A・東国の集落—」『日本歴史考古学を学ぶ(上)』有斐閣選書 1983
- ⑥ 和気遺跡調査会編「各地の古代末から中世に至る遺跡について」『和気遺跡発掘調査報告』1979 服部英雄「総合史としての中世農村・中世荘園」『月刊文化財 206号』1980 山口県教育委員会編『下右田遺跡第四次調査概報』1980等



時代別建物対照表

時代	建物番号
弥生時代中期	S B 74、S B 75
古墳時代後期	S B 24、S B 67、S B 71
奈良時代後半	S B 58、S B 62
平安時代後半 —末葉	S B 1、S B 33、S B 35、S B 48、S B 59 S B 63、S B 72、S B 73、S B 80、S B 81
鎌倉時代前半	S B 3、S B 4、S B 30、S B 44、 S B 53、S B 64、S B 69
鎌倉時代後半	S B 9、S B 14、S B 18、S B 22 S B 40、S B 43、S B 65、S B 70

第10—31図 主要遺構配置図 (1 : 1,000)

5. 中ノ垣外遺跡における古地理の変遷と住居群の立地

1. はじめに

沖積低地は、過去以来、人間生活の舞台として重要な役割を果たしてきた。中ノ垣外遺跡の立地する自然堤防状微高地は、こうした沖積低地の一要素であり、かつ人間の居住に適した土地と考えられる。

そこで、本稿では中ノ垣外遺跡付近における微細な古地理を復元し、それと住居群の立地との関係について考察してみたい^①。

2. 微地形の形態的特徴

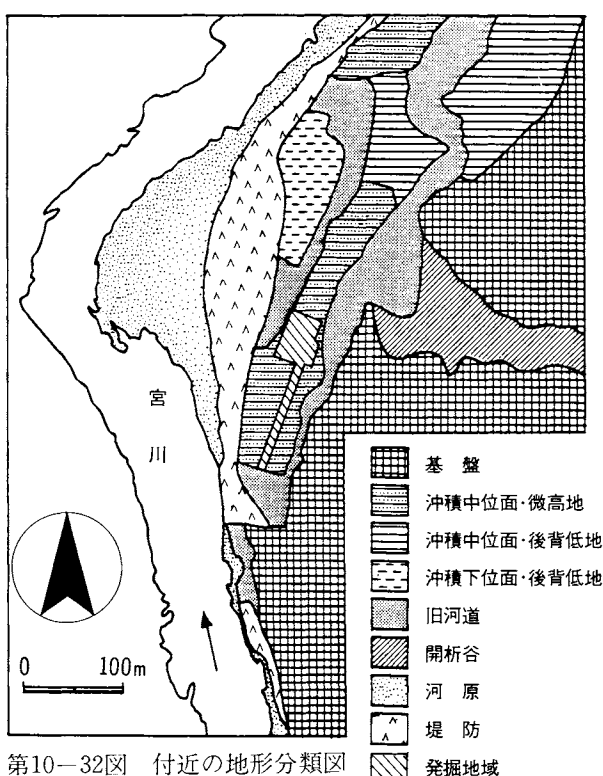
中ノ垣外遺跡付近に分布する微地形をとらえるためまず 8,000分の1 空中写真の判読と現地での地形観察とによって地形分類図(第10-32図)を作成し、ついで地形測量を行った(第10-33図)。こうして得られたデータを基にして、以下に微地形の形態的な特徴について述べることにする(第10-32図、第10-33図参照)。

中ノ垣外遺跡は、現宮川河口から約11km上流に位置する。ここは、宮川が横輪川を合わせる付近に近く、この合流点から下流に向かって広がる宮川沖積低

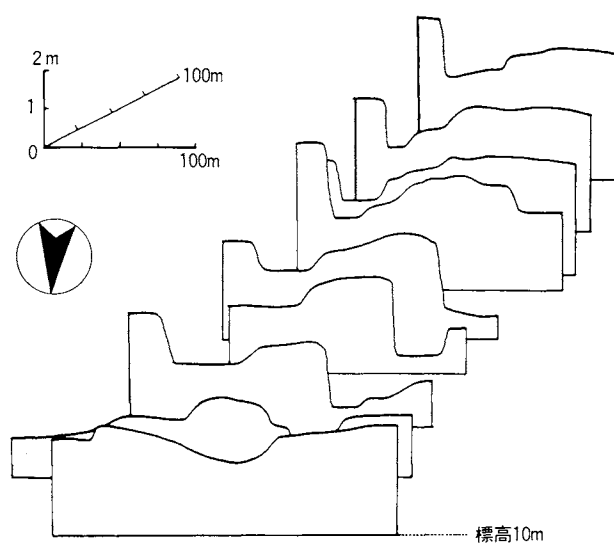
地のほぼ頂部に当る。遺跡付近において、現在の宮川は北から北東方向へその向きを若干変えており、本遺跡は、こうした曲流地点の滑走斜面である宮川右岸に立地している(第10-32図参照)。

中ノ垣外遺跡付近の沖積低地は、宮川現流路と洪積段丘および山地からなる基盤との間に発達している。山地は、主に角閃石によって構成され、低地の北東側に位置する。また、洪積段丘は2~5mの比高を持って、低地の北側と南東側に認められる。このような沖積低地には、宮川の下流域において広くみられる沖積上、中、下位面のうち、沖積中位面と同下位面とが分布する(第10-32図)。

沖積中位面は、本遺跡周辺において最も広範に発達している。この面には、自然堤防状微高地、後背低地、旧河道が明瞭に認められる。中ノ垣外遺跡がのる微高地は、南南西~北北東にほぼ直線状に延びる。その上面は、およそ12.8mの標高をもつ南南西端から北北東方向へ徐々にその高度を下げていく。東西方向においては、微高地の頂部が現在認められる微高地の中心よりやや西へ片寄ってみられる(第10-33図参照)。さらに、この微高地の北方にも、もう一つの微高地が認められる。これは、西方に向かって高度を増し、沖積中位面の後背低地よりおよそ1.5m高い。ここには、土畑遺跡^②が立地しており、室町時



第10-32図 付近の地形分類図



第10-33図 付近の投影断面図

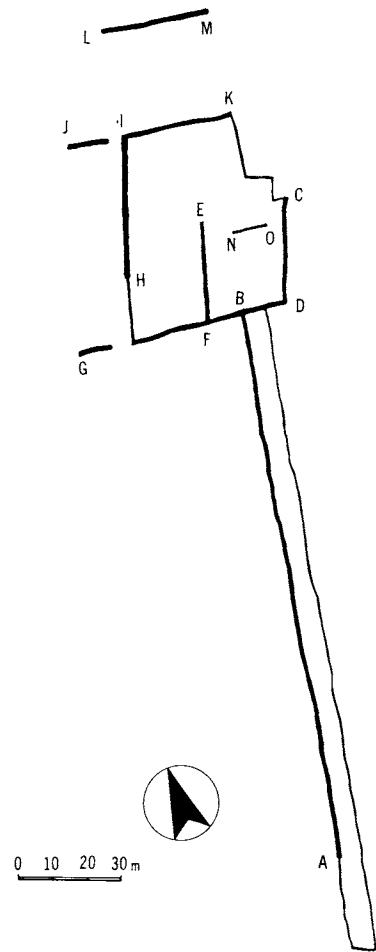
代の土器が検出されている。

沖積中位面の後背低地は、この微高地の西、中ノ垣外遺跡の北北東に発達する。しかし、現在、後背低地は圃場整備されており、微細な起伏は不明である。また中ノ垣外遺跡の立地する微高地の東側に隣接して、旧河道が認められる。微高地と旧河道とは比高50cm程度の小崖で画されている。この旧河道は、微高地と基盤との間を若干曲流しながら、ほぼ微高地に沿って延びており、その上面は北北東に緩く傾斜していく。

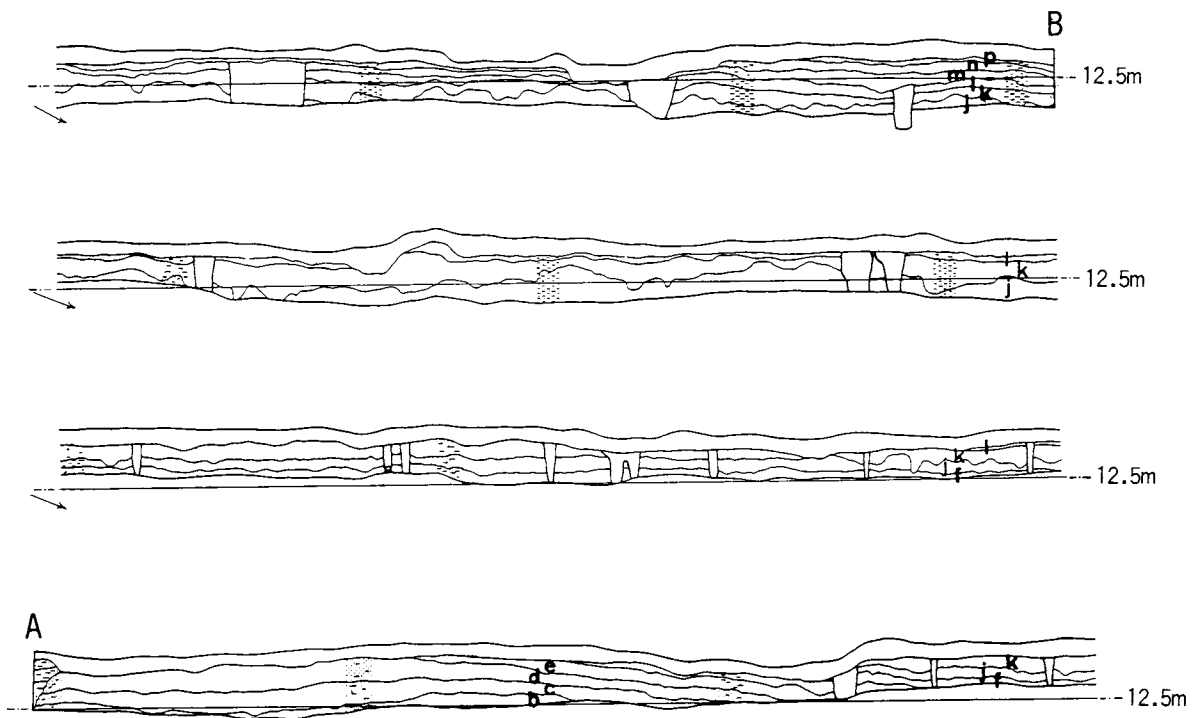
この微高地の西側には、崖を挟んで沖積下位面が広がる。沖積中位面と下位面を境する崖の比高は、南南西でおよそ3mであるのに対して、北北東では1.5m前後まで減少する。崖下には、旧河道が崖に沿って南南西から北北東へ延び、中ノ垣外遺跡北方に位置する微高地の南で西へ曲がる。この旧河道は、その西方に分布する下位面の平坦な後背低地より約70cm低い。なお、中ノ垣外遺跡周辺の沖積下位面には、微高地は認められない。

3. 地質構造

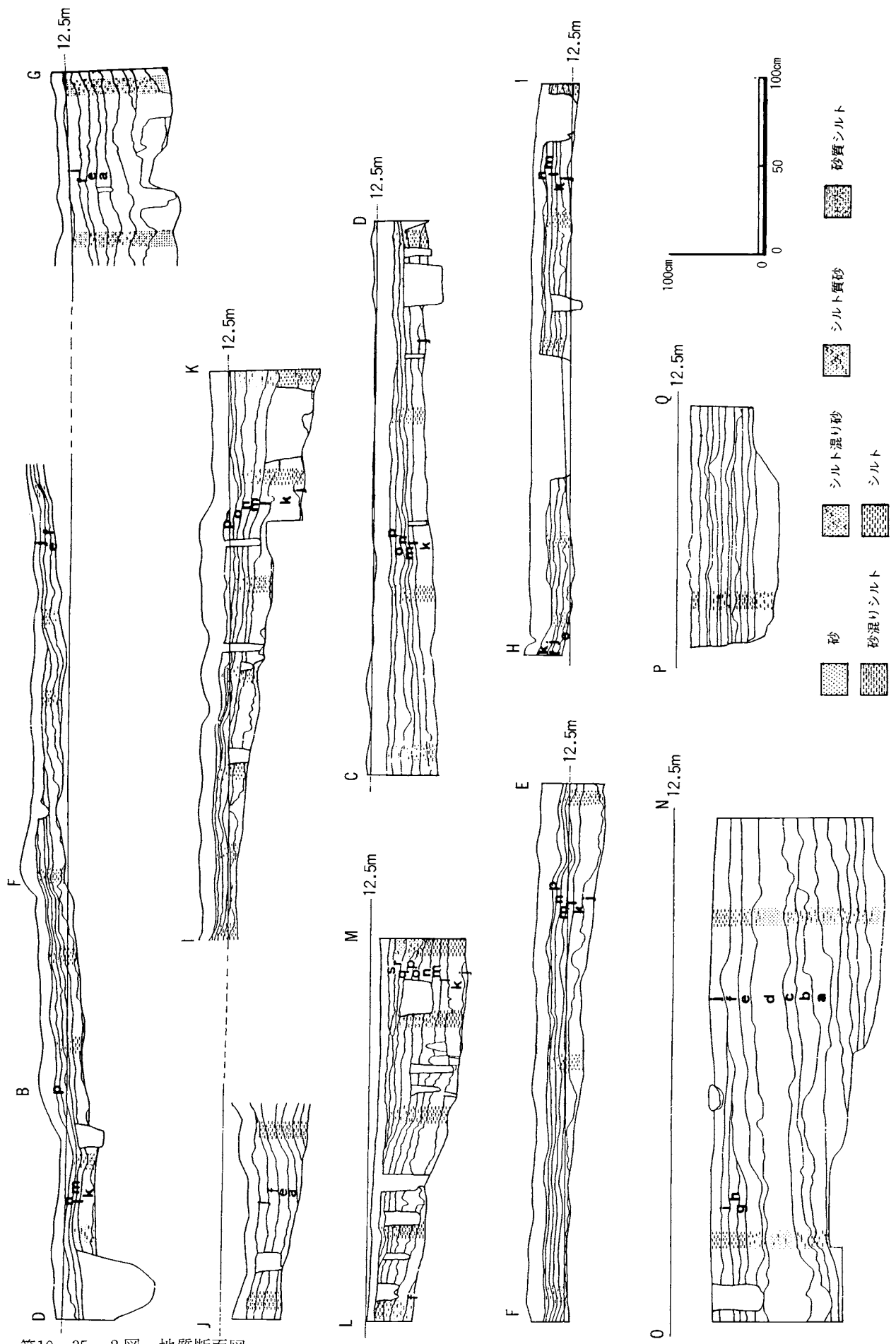
中ノ垣外遺跡付近の地質構造を明らかにするために、1.5mハンドボーリングを実施すると共に、遺



第10-34図 地質断面位置図



第10-35-1 地質断面図 (アルファベットは地層名、凡例は2図と同じ)



第10-35-2図 地質断面図

跡周辺の露頭および遺跡内におけるトレンチ断面やセクション断面の観察を行った。そうして、堆積物の色調、粒度、堆積構造、遺物の包含状況などを指標に、中ノ垣外遺跡付近における沖積層を細分した。以下に、中ノ垣外遺跡付近の沖積中位面・自然堤防状微高地、沖積中位面に位置する旧河道および沖積下位面を構成する区分した各地層についての記載を行う(第10-34図、第10-35-1、10-35-2図)。

(1) 沖積中位面・自然堤防状微高地構成層

中ノ垣外遺跡の発掘地域は、沖積中位面・自然堤防状微高地にあたる。この微高地下には、比較的ゆるい褐灰色の砂礫層が認められる。この層の上面は、海拔9.5 m付近に連続している。この砂礫層の上位には、層厚10cm前後の粘土層が被覆しており、層中には腐植物が混入する。また、同層は腐植の進行した暗灰～暗紫灰色を呈する。こうした色調および腐植物の混入具合からみて、この層は静穏な環境下で堆積したものと考えられる。

この粘土層より上位には、砂およびシルトからなる洪水堆積物が観察される。中ノ垣外遺跡におけるトレンチ断面およびセクション断面では、こうした堆積物のうち海拔10.1m以浅のものが確認でき、これらを19層以上に細分した。本稿では、最も下位に認められた遺物包含層以浅の各地層を、下位より、a、b、c……s層とする。

a層は、主としてシルト質砂からなり、西南方向へ行く程砂分が多くなる。層中からは、縄文時代後期の土器片が多数検出され、また焼土が認められる。このことから、a層は縄文時代後期までに堆積したと考えられる。ON断面(第10-35図)においてa層の上位に位置するb層は、a層より若干砂の多いシルト質砂およびシルト混り砂である。この層は、発掘地域の東端にのみ堆積しており、NO断面(第10-35図)の西端で消滅する。c層は、AB断面(第10-35図)においてシルト質砂として、それより北方のNO断面(第10-35図)では砂質シルトとして観察される。この層は、発掘地域のおよそ東半分にのみ分布している。同層に認められるピット内からは縄文時代晩期の土器片が出土しており、これはc層が縄文時代晩期には堆積していたことを示す。c層の上位にあるd層は、c層とほぼ同じ範囲に分布している。NO断面

(第10-35図)において、粒度がc層より若干粗く、層厚も38cmと大きい。しかし、同層はc層と同様に北方へ向って細粒堆積物に変化していく。d層には、グレーディングしたラミナや明瞭なクロスラミナが観察される。また、この層からは弥生時代中期の住居跡が認められ、d層がその時代以前に堆積したことが知られる。

e層とその上位のf層は、共にシルト質砂によって構成される。f層に比してe層の方は若干砂分が多く、淘汰が悪い。両層とも、発掘地域の南端を除く全域に認められる。f層上に堆積するg層、h層、i層は、NO断面(第10-35図)にのみ観察される。これらは、色調、粒度などが微妙に異なるものの、主に黄褐色を呈する砂質シルトからなる。こうした各層は、東方向へ行くとf層にアバットして消滅するため、発掘地域の東端に偏在している。j層は、一般に黄褐色を呈し、微高地の南西部から北東方向へシルト質砂からシルトに層相変化していく。この層もe層とf層と同様、発掘地域の南端には堆積していない。こうしたj層からは、古墳時代中期の土器を伴う住居跡が検出され、このことよりe、f、g、h、i、j層が弥生時代中期から古墳時代中期までに堆積したと考えられる。

j層の上位に位置するk層は、j層以深の層とは対照的に暗灰～黒褐色の色調を呈する。この層は、発掘地域北東部に分布し、南端と南西部ではj層にアバットして消滅する。全体として砂質シルトからなるものの、南から北へその粒度をやや細粒化させていく。層中には土師器片が混入しており、また奈良時代～鎌倉時代の住居跡がこの層から掘り込まれている。さらに、人為的に攪乱された痕跡が各所に観察され、ときには下位に堆積するj層上面をも攪乱している場合がある。l層は、k層の上位に堆積し、k層とほぼ同じ分布を示す。この層は、褐灰色の砂質シルトからなり、4cm前後の層厚を大きく変化させない。同層にもk層の上面まで攪乱を受けた箇所がよくみられる。こうした層中には、平安時代末～鎌倉時代の土器片が多数含まれ、鎌倉時代の掘立柱建物の柱穴やピットが観察される。以上のようなk層とl層中における遺物・遺構の検出状況は、k層が奈良時代以前、l層が鎌倉時代に堆積したこ

とを示唆している。

m、n層も発掘地域北東部に分布する褐色の砂質シルトである。しかし、m層はその下位のk層より、またn層はその下位のk層より、またn層はその下位のm層より若干多く砂分を含む。こうしたm層とn層は、両層とも南東から北西へ行くに従って細粒化する。これらの層には、時折土師器片が認められる。n層の上位に位置するo層は、CD断面(第10-34図)およびKI断面(第10-35図)の東側のみ観察され、その堆積範囲はm、n層より小さく、やや北東部に偏る。この層は、褐色を呈し、その粒度は北西方向へシルト質砂から砂質シルトに変化していく。p層は、n層などと同じ堆積範囲に分布する。この層は、淘汰の悪い粗中砂からなり、発掘地域の北西部ではシルトを混える。一般に褐色を呈するものの、ところどころ赤褐色を示す場合もある。

最も北側に位置するLM断面(第10-35図)では、以上のk~p層を覆うようにq、r、s層が観察される。この断面においてq層は褐色を呈し、その下位のp層とは砂分が多いことで区別される。また同層は、東から西へ淘汰の悪いシルト混り砂からシルト質細砂に変化する。q層の上位に堆積するr層は、粗中砂で構成される。この層は、西方へその粒度をシルト混り細砂に変化させ、色調も灰色から褐色へ徐々に移り変わる。さらに、s層は褐~灰色の粗砂からなり、層中には明瞭なラミナが観察される。LM断面(第10-35図)において、これらの3層は西方へ層厚を減じ、やがて消滅する。また、これらはJK断面(第10-35図)より北側、すなわち、発掘地域の北北東部にのみ堆積しているのである。

(2) 沖積中位面に位置する旧河道構成層

中ノ垣外遺跡が立地する自然堤防状微高地の東側には、旧河道が認められる。この旧河道においてトレンチを掘った微高地北東側では、少なくとも13層の洪水堆積層が確認された。これ以深の堆積層については、-110cm付近から地下水が流出しはじめたため、トレンチ掘削を断念せざるを得なくなり、観察できなかった。

この旧河道のトレンチ断面(第10-35図・PQ断面)において、海拔11.63m以深にはシルト混り砂層が、またその上位にはシルト質砂層が認められる。さら

に、海拔11.69~11.76mでは砂質シルト層が観察できる。この層中の海拔11.72m付近からは、山茶碗などの中世土器が多数検出され、同層は微高地を構成する層と連続するものであることが知られる。この砂質シルト層の上位には、洪水堆積層が10層認められる。これらは、シルト質砂層とシルト混り砂層および粗中砂層との互層である。こうした各層は、微高地下で確認できた中世土器包含層より上位の各堆積層とそれぞれ対比できないものの、両者の層数は比較的類似している。

(3) 沖積下位面

沖積下位面は、中ノ垣外遺跡の立地する微高地西側に発達する。この面の旧河道におけるトレンチ断面の観察によると、下位面は砂礫層の上にシルト層が堆積する構造をとることが知られる。砂礫層は、その上面が現地表面下約70cmと地下浅所に存在する。礫は、ペブル大のチャートを主体とする亜円礫からなる。また、マトリックスは粗所であり、シルトが混入することもある。同層は、一般に褐色を呈し、崩壊しやすい、こうした砂礫層は、微高地下で認められた沖積中位面下の砂礫層とスムーズに連続する。また、この層の上位に位置するシルト層は、褐色を呈し、層厚およそ50cmと薄い。この層は、沖積中位面下では認められないことから、中位面が段化した後に堆積したと推定される。

4 住居跡の分布とその変遷

中ノ垣外遺跡は、縄文時代後期から室町時代にかけての複合遺跡である。この遺跡からは、住居、溝、墓などが検出されている。ここでは、こうした遺構の中で住居跡の分布について記載したい(第10-36図)。

中ノ垣外遺跡において、住居跡は弥生時代中期、古墳時代中期、奈良時代、平安時代、および鎌倉時代のものが認められる。弥生時代中期の住居跡は、発掘地域の南端付近に2棟隣接して検出される。これらは、海拔およそ12.70~12.75mに相当する。今回の調査では、発掘地域北部においてこうした弥生時代の住居跡が検出されるc層まで発掘していないので、その分布の全容は不明である。古墳時代中期の住居跡は、j層から検出される。これらは、発掘

地域の南部から中央部にかけて、一定の距離をおいて3棟認められる。こうした中で最も南に位置する住居跡は海拔約12.8mで、弥生時代中期のものよりやや高所に分布する。これより北方の2棟は、順次その分布高度を下げ、最も北のものは海拔12.2mに建てられている。このように古墳時代中期における住居跡の高度は、海拔12.8～12.2mまでばらつく。

k層から検出される奈良時代の住居跡は、発掘地域西部に2棟隣接して分布する。その分布高度は、海拔およそ12.8～12.9mである。この時代の住居跡は、弥生時代中期のものに比べやや高く、古墳時代中期の最も高いものとほぼ同じ高度に認められる。平安時代の住居跡は、奈良時代と同様にk層から検出されるもので、それ以前より分布数が著しく増加する。すなわち、発掘地域の南部で2棟、中央部で7棟それぞれまとまって分布する。これらは、海拔12.8mから12.5mまでに建てられている。最も南の住居跡は、海拔約12.8mと最高所にあり、奈良時代のものと同様と同じ高さである。これに対して、発掘地域中央部の住居跡は、南西から北東に向って海拔12.75mから12.5mまで徐々に高度を下げて分布している。

鎌倉時代の住居跡は、k層あるいはl層から検出される。こうした住居跡は合計11棟認められ、平安時代より若干増加する。これらのうち2棟が発掘地域南部に位置することは、平安時代と同じであるものの、他の9棟が発掘地域東部に分布する点で大き

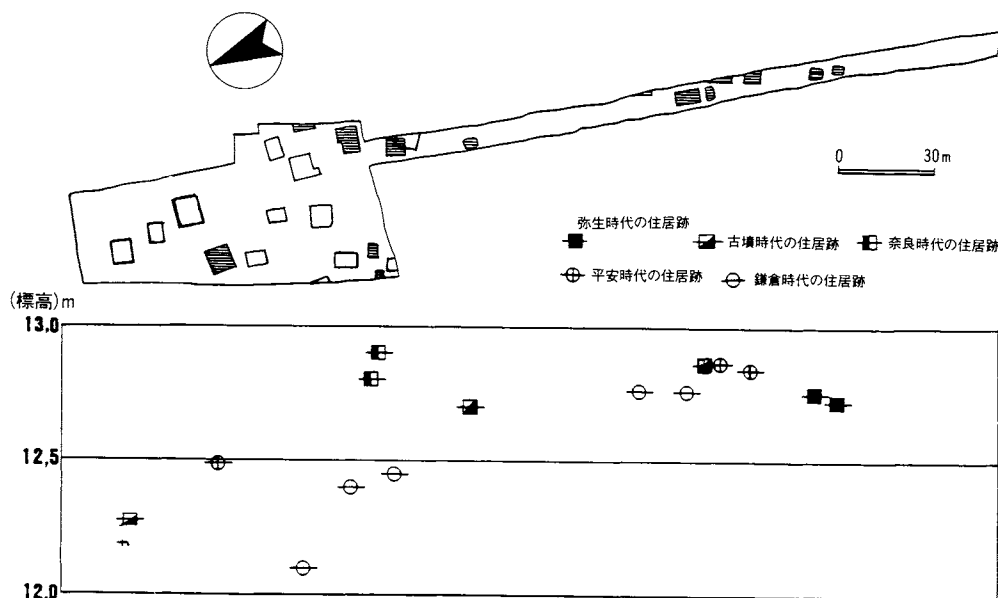
く異なる。最も南部に位置する住居跡の高度は、海拔およそ12.8mであり、これは古墳時代中期、平安時代における最も高い住居跡と同じ海拔高度に建てられている。これに対して、発掘地域東部の住居跡は、海拔12.1mまで分布する。この時代には、住居跡がそれ以前と比べてより低所に位置し、また分布高度のばらつきが最も大きい。

なお、以上の住居跡は、人為的に盛り土した上に建てられた形跡が認められず、洪水によって形成された各時代の地表に、それらが造営されたと解される。

5. 古地理の変遷と住居群の立地

ここでは、2、3で述べた地形・地質についての事実から、中ノ垣外遺跡付近の古地理を復元し、これと4で論じた住居跡の分布に関する結果に基づいて、住居群の立地について考察する。

中ノ垣外遺跡付近は、縄文時代後期より少し前、砂礫層が堆積するような環境であった。(第10-37図(1))。その後、環境は急変し、腐植質粘土が堆積・生成される静穏なものとなった(第10-37図(2))。ついで、砂およびシルトが搬出され、微高地は形成しはじめた。そうして、縄文時代後期までに、発掘地域西南部では砂が北東方向へ徐々にシルトに変化していくa層が堆積した(第10-37図(3))。縄文時代後期に入ると、ここに人間が居住し、焼土を生成した。その後、弥生時代中期までに3回の洪水が発生し、a



第10-36図 住居跡高度分布図

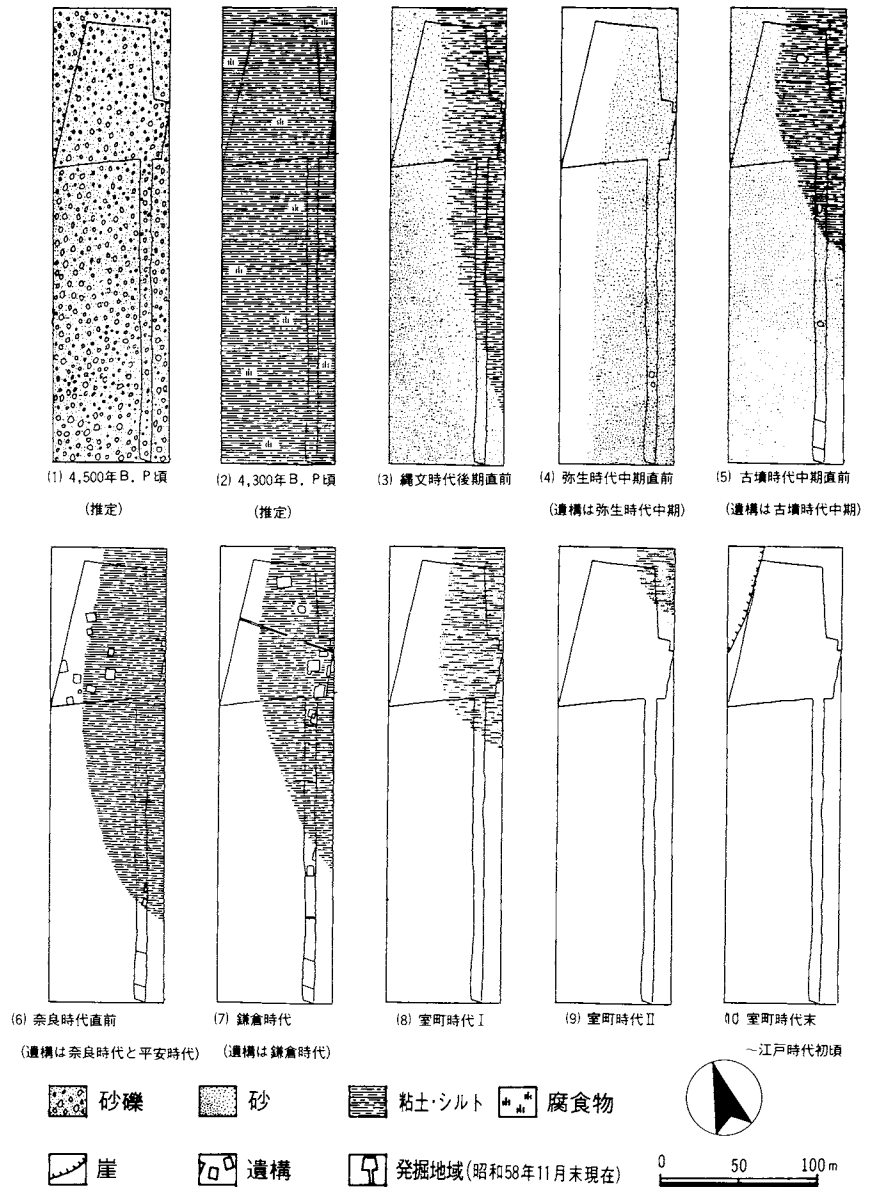
層の上位に位置するb、c、d層が発掘地域の東半分
に堆積した。特に、d層の層厚が大きいこととそ
の層相がクロスラミナの発達する粗中砂であること
から、3回目の洪水は大規模であったと考えられる。
こうして高まった微高地の海拔12.75m付近に、弥
生時代中期の住居群が立地した(第10-37図(4))。

弥生時代中期から古墳時代中期には、e、f、g、
h、i、j層を堆積させた計6回の洪水が起った。
これら6回もの洪水が、約300年間に発生したこと
から、この時期は環境が悪化していたと考えられる。
これらの洪水により運搬されたg、h、i層は、発
掘地域の東端にのみ堆積しており、洪水がその付近
にのみ起ったことを示している。また、i層の上位
には、発掘地域南西部で砂、北東
方向に行く程細粒物質に変化する
j層が堆積した。こうしたj層は、
発掘地域の南端を除く全域に堆積
しており、古墳時代直前には発掘
地域のほぼ全域に及ぶ大規模な洪
水が発生したと考えられる。こう
した洪水によって微高地は高くな
り、古墳時代中期には弥生時代中
期よりも高い海拔12.8m付近に1
棟、それより低所にも2棟の住居
が建てられた(第10-37図(5))。

これ以後奈良時代までに洪水は
1回起り、発掘地域の南端と西部
を除いて主に砂混りシルト層(k
層)を堆積させた。奈良時代に入
ると、当時最も高かった発掘地域
西部の海拔12.8m付近に住居群が
立地した(第10-37図(6))。以上の
各時代においてはそれぞれ住居数
が少なく、かつ発掘地域東部の低
所には分布しない。これは、中ノ
垣外遺跡付近において、特に東部
で洪水の危険性が高かったことが
要因のひとつであったと推定され
る。

奈良時代から平安時代にかけて
は、洪水が全く発生しなかった。

そのため、平安時代には奈良時代以前よりも多くの住
居が建てられた。これらは、12.5m以上の海拔高度
を持つ発掘地域の南部と西部に分布した(第10-37図
(6))。つづく鎌倉時代も比較的穏やかな環境であり、
発掘地域に洪水は1回しか訪れなかった。この洪水
は、k層を堆積させたものと同様範囲に及び、
ここに砂質シルト層(1層)を堆積させた。こうし
た1層の堆積によって発掘地域の東部は若干高まり、
鎌倉時代の住居は、南部だけでなく東部にも分布し
た。これらは平安時代よりもやや多く建てられ、ま
た東部は高くなったものの、住居が海拔12.1mと低
所にまで認められる(第10-37図(7))。このように平
安時代と鎌倉時代に住居数が増加し、また鎌倉時代



第10-37図 付近の古地理変遷図

において住居群が低所にまで立地したひとつの要因としては、これらの時期に洪水に対する危険性がより低下し、環境が安定していたことがあげられよう。

しかし、室町時代には洪水が7回発生し、再び環境が悪化した。まず、m、n、o、p層を発掘地域東部に堆積させた洪水が、連続5回訪れた（第10—37図(8)）。ついで、その北方に3回の洪水が起こり、そこにq、r、S層を次々に堆積させた（第10—37図(9)）。こうした洪水は、発掘地域の東部および北東部にしか及ばず、またシルトや砂質シルトなどの細粒堆積物しか運搬・堆積できない小規模なものであったにもかかわらず、それらが頻発したためか、中ノ垣外遺跡には住居群は立地しなかった。

以上のような特徴を持つ中ノ垣外遺跡では、江戸時代の遺物包含層が認められない。この事実は、室町時代以降江戸時代初頭までに微高地に洪水が及ばなくなったことを示唆しており、これはこの微高地の西側に、侵食作用によって崖が形成されたためと考えられる。すなわち、微高地の沖積中位面が、この時期に段化したのである（第10—37図(10)）。その後、沖積下位面にシルトなどの土砂が堆積し、同面を発達させていった。

6. おわりに

中ノ垣外遺跡の古地理を復元した結果、以下の事柄が明らかになった。縄文時代後期以降、合計19回の洪水が発生し、それらによって運搬された土砂の堆積域は、全体として発掘地域の南部および南西部

から北東方向へ移動していった。こうした堆積域の変遷に伴って、中ノ垣外遺跡の立地する自然堤防状微高地は発達した。また、以上の洪水は、特に弥生時代中期から古墳時代中期および室町時代に頻発し、この遺跡に環境の悪化をまねいた。さらに洪水と住居群の立地について考察したところ、奈良時代以降鎌倉時代まではこの遺跡に洪水の危険性がほとんどなく、平安時代と鎌倉時代にはその数が著しく増加し、とりわけ鎌倉時代には低所にまで立地するようになった^③という一定の関係が認められた。

しかし、こうした住居群の立地は、地形や自然環境をその基礎的な条件とするものの、単にそれらのみから規定されるものではない。すなわち、住居群の立地をより鮮明にとらえるには、人間の生活基盤として営まれる水田とそれらとの位置関係などの社会条件にも考察を加える必要がある。また、堤の造成など洪水に対する人間の対応も考慮しなければならない。こうした諸点が、今後の調査における課題となるであろう。

（青木哲哉）

〈註〉

- ① 本稿は、筆者が発掘調査に参加した1983年11月末までのデータに基づいた。
- ② 伊勢市教育委員会『三重県伊勢市遺跡分布地図』伊勢市文化財調査報告3 1981
- ③ 1983年12月以降の発掘調査で検出された平安時代の住居跡には低所に分布するものもあると考えられる。

XI 三重郡菰野町 ^{ろくたん} 六谷遺跡

1. 位置と環境

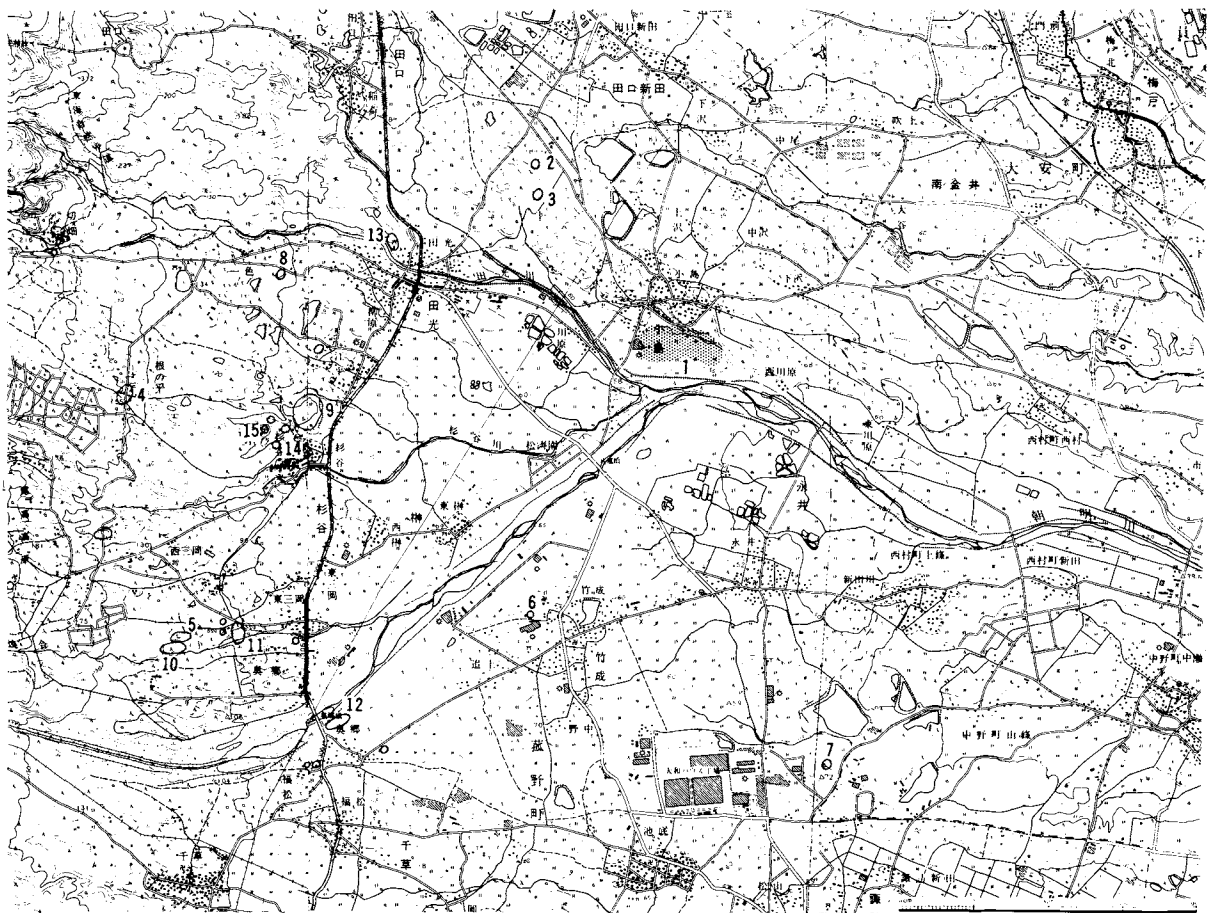
六谷遺跡(1)は菰野町の北東部に位置し、行政区画上、三重郡菰野町大字小島字上六谷及び下六谷に所在する。この遺跡は地形立地的には朝明、杉谷、田光川の三河川が合流する左岸で、河川の浸食作用によって形成された54m～55m前後の河岸段丘上面部にある。今回の調査区域(A、B地区)はともに3～5段からなる階段状の水田で、最上段部に位置する。

本遺跡の所在地には、六谷山清月寺廃寺跡という言い伝えがあり「お鐘つつみ」、「仏師谷」といった小字名が残っている。

また、遺跡の北に隣接する小島集落北側の台地上には数多くの遺跡が存在する。

鈴鹿山脈の根の平峙に源を有する朝明川はV字谷の朝明溪谷、根の平扇状地を形成し、焼合、杉谷、田光川等の支流を合流して伊勢湾に注いでいる。この朝明川が形成する扇状地上の尾高、根の平の高原地帯は縄文から室町期までの遺跡が鈴鹿山麓に平行して南北の帯状に展開している。

主な遺跡を概観すると縄文時代の遺跡は東北山A、B遺跡(2・3)が小島の集落に連なる台地上にみられる。当遺跡は山の赤肌が各所でみられ、すで

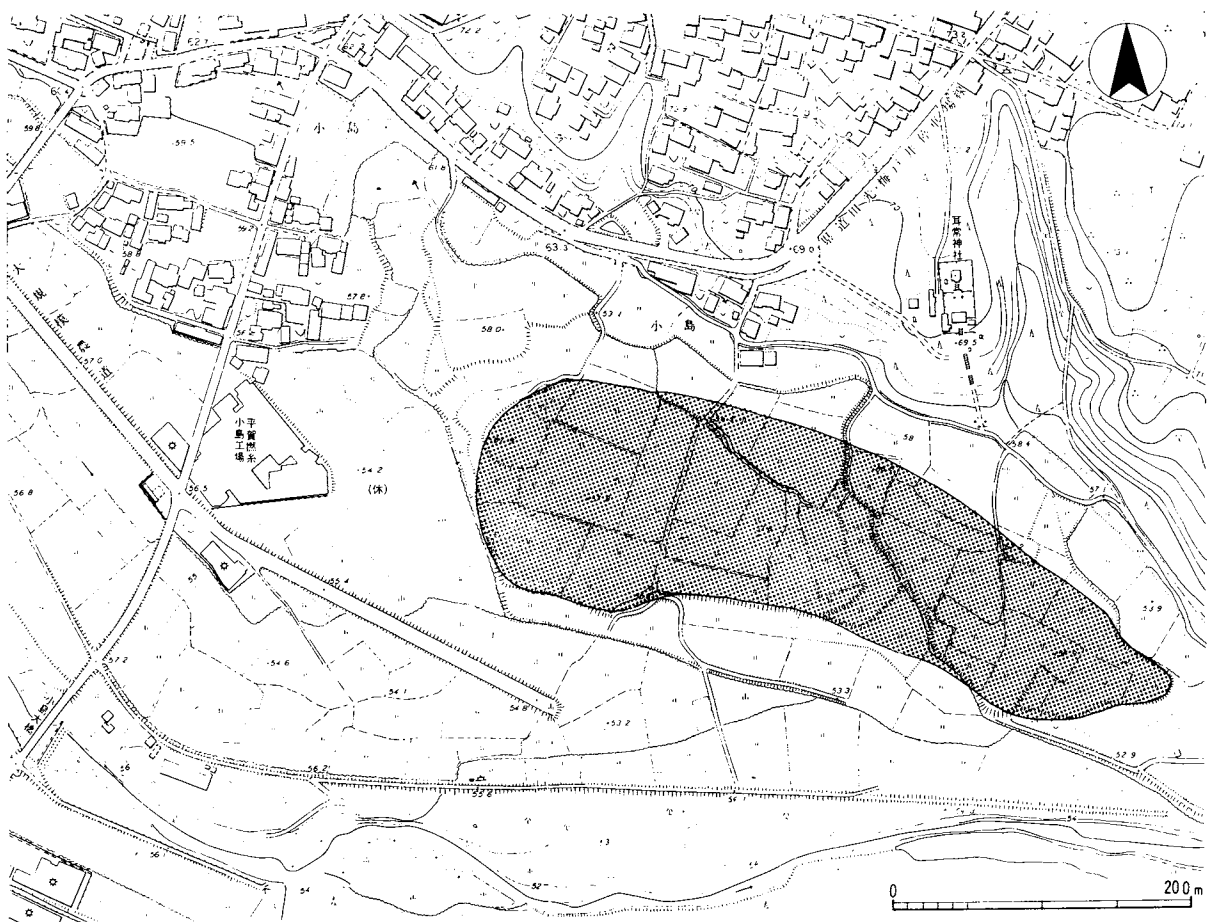


第11-1図 遺跡位置図(1:50,000)

に遺構は削平されているとも考えられるが、古くより、石鏃、スクレーパー、石錘等、各種の石器類を主体とした遺物散布が広範囲に確認できることで著名である。また、縄文時代の遺跡は尾高高原の山麓部にもみられ、夏至花遺跡（4）、黒石原遺跡（5）が知られている。山麓部、あるいは朝明川左岸にくらべて比較的、遺跡の希薄な朝明川右岸においても、竹成遺跡（6）をはじめ、現在でも各種の石器類を表採できる下雁沢遺跡（7）が存在しており、その立地の在り方等は、今後の先土器時代遺跡発見の可能性も含めて菰野町内の歴史、文化の繋ぎを考える上で興味深い。弥生時代の遺跡は現在のところ上記の夏至花遺跡での弥生土器片の出土等によるごく断片的な把握しかできないが、朝明川両岸の沖積平野及び、段丘上に立地していたことは十分予想される。あるいは、遺跡の埋没深度が深いために踏査によって、これまで発見されていないとも考えられる。ちなみに六谷遺跡では少量ながら弥生時代中～後期にかかる石器、土器を出土していることを付記してお

く。古墳は地形的にも当然のことながら巡見街道（現在の国道306号線）から西側の山麓部に多くにみられ、北より一色古墳群（8）、江平古墳群（9）黒石原古墳群（10）、高塚古墳群（11）、そして奥郷原古墳群（12）が5基前後を単位とした小群をなして立地している。これらの群は、北より田光川、杉谷川、焼合川等、朝明川の各支流を一つの水系としての集合体としても把握でき、この地域における古墳群、あるいは、各地域社会の形成過程を考察する上で重要となろう。古代律令期（奈良・平安時代）にかかる遺跡については当遺跡の他は不明と言わざるを得ない。当小島地域は伊勢国朝明郡田光郷の旧行政区に属していたものと考えられ、古代末期から中世に至っては神宮領荘園としての御厨、御園の名も散見することができ、『神鳳鈔』等に「小島御厨」の名がみえる。

中世以降の遺跡としては、今なお明瞭に空濠、土塁等を残す田光城跡（13）、杉谷城跡（14）等が知られ、杉谷城跡から谷一つ隔てた北の屋根には古瀬戸



第11-2 遺跡地形図（1：5,000）

常滑等の蔵骨器をもった一大中世墓地として有名な杉谷中世墓（15）が存在する。

以上、考古学上の調査例もこれまで皆無に等しく

今なお遺跡、遺物に基づく当地域の歴史を語る素材は少なく、ここではその概観をふれるにとどまりたい。

2. 遺 構

1. A地区の遺構

A地区の土層の基本的層序は、第Ⅰ層；耕作土（暗灰色土）、第Ⅱ層；黒灰褐色土（遺物包含層）、第Ⅲ層；黄褐色粘質土（地山）となる。又、この層序はB地区においても基本的に同様である。遺構面までの深さは浅いところで30cm内外、深いところで50cm内外で、地山面は北が最も高く、ゆるやかに南に下がり、また発掘区中央から南では高くなっており、両者を狭んで東西に浅い窪地（谷筋）状の遺構面がみられる。この窪地における地山土層は特に粘質度が強く、遺構も希薄である。以下、検出された主要な遺構について時代別に個々概述してゆきたい。

A. 縄文時代後期の土坑

SK 3 発掘区中央部や、西寄りで見出された約1.7m×1.0mの楕円状を呈する穴で肩は2段に下がる。深いところで約50cmあり、その底部中央にさらに径12cmの小穴が確認された。埋土は炭を含む灰黒色土で縄文土器片を含む。

SK 9 約2.4m×80cm～1m内外の不定形の穴で、深さは30～40cmで底は凹凸がみられる。埋土はSK 3と同じで、縄文土器片を含む。

B. 古墳時代後期の遺構

(1) 掘立柱建物

SB 1 発掘区北東隅で見出された掘立柱建物で、



第11-3図 発掘区平面図（1：2,000）

桁行4間×梁行2間の東西棟をもつものと推定できる。柱間は桁で1.8m（6尺）等間、梁で2.1m（7尺）等間である。柱の掘形は径30～50cm、深30cm内外である。北側柱の最も東寄りの柱穴の埋土からは須恵器（杯蓋）が出土している。

SB2 桁行3間×梁行2間の東西棟の掘立柱建物で棟方向はN78°EでSB1とほぼ一致している。

柱掘形は径25cmから大きいもので60cmと不揃いであり、柱通りもバラツキがある。柱穴埋土は炭を多く含むが、土器は土師器細片のみである。

(2) 竪穴住居

SB7 南北4.1m、東西4.3mでほぼ正方形を呈する竪穴住居と考えられ、幅70～90cm、深さ10～15cmの周溝だけが残存している。主柱穴は1間×1間



第11-4図 A地区遺構平面図(1:300)

として各コーナーにみられ、径20~30cm、深さ30cm余である。北辺の中央部に焼土がみられ、カマドの痕跡と思われる。周溝内の遺物は土師器細片のみである。

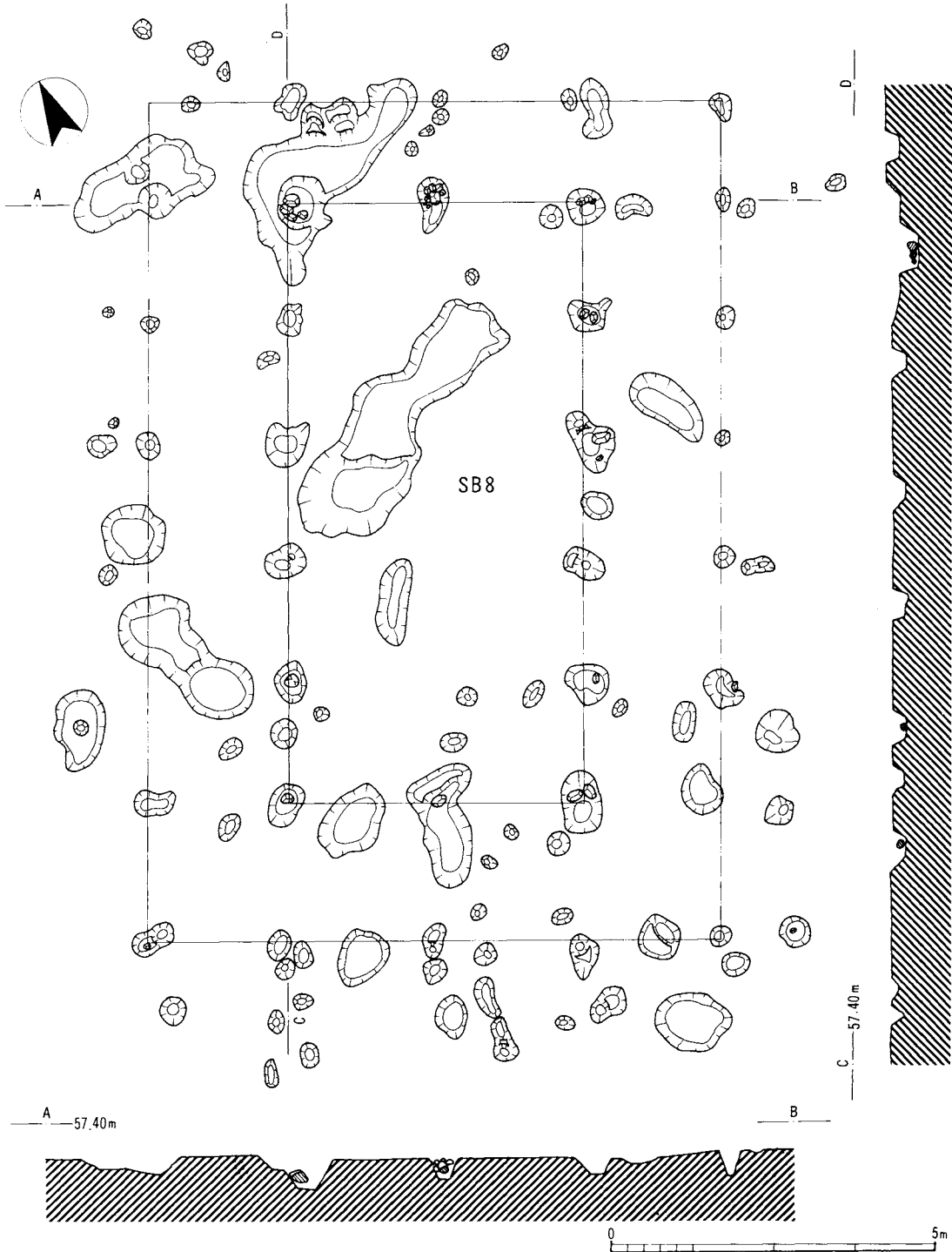
C. 奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居

SB 4 南北2.6m余、東西3.2m余、深さ25cm内外の竪穴住居で、主柱穴は確認できない。

SB 5 一辺2.6m~3m余の方形プランを呈する竪穴住居と考えられるが、西側は不定形土壇によって切られ、形状は不明である。南側で主柱穴らしき柱穴が2個確認できたが、北側では不明である。埋土には炭が多く含まれていた。

SB 10 一辺約3.6m内外の方形プランを呈する竪穴住居で、北側は新しい土壇に切られ形状が不明である。深さは約30cm余で、西側に主柱穴とおも。



第11-5図 SB8実測図(1:100)

われる柱穴が東西に並ぶが東側では確認できない。

D. 平安時代末頃の遺構

(1) 掘立柱建物

SB 6 2間×2間(4.2m×3.9m)のほぼ正方形を呈する掘立柱建物である。柱間は7尺(2.0~2.1m)等間である。西柱列の中央の柱穴埋土から山茶椀片が出土している。

SB 8 身舎部が桁行5間×梁行2間で、四方に1間ずつの廂が付く四面廂付の南北棟をもつ大形の掘立柱建物(7間×4間)で棟方向はN27°Eである。平面規模は、南北12.7m、東西8.7m余で、柱間は身舎部の桁方向で6尺(1.8m)等間、梁方向で7尺(2.1m)等間である。廂部分の柱間は身舎部と揃い、各廂柱の出は北面のみ6尺(1.8m)で、他は



第11-6図 B地区遺構平面図(1:300)

すべて7尺(2.1m)である。

身舎の柱穴は円形あるいは、楕円形プランを基本とし、径50cm前後のものと80cm内外のものと大小のバラツキがある。また、深さは30~40cmで柱穴内には柱を固定するための根巻き石(挙大の川原石)を伴うものがみられる。廂柱穴は身舎柱穴より一段と小さく径20~35cm余深さ10~20cmで、柱穴内に根巻き石、根石等を一切伴わない。柱穴埋土内の遺物は少量細片が多いが、山茶碗片を若干量含む。

2. B地区の遺構

A. 奈良時代の遺構

(1) 竪穴住居(竪穴状遺構)

S B 3 南北8.7m余、東西5.8m余、深さ25cm内外の長方形プランの竪穴状遺構である。壁に沿って周溝がみられるが西辺部中央部では確認できない。柱穴の並びは壁、及び周溝に沿ってみられ、4~5間×3間程度の規模とも推定できる。こうした構造から、ここでは竪穴住居の中に入れたが、むしろ半地下式の構造をもった掘立柱の建物とも考えられるが、今後こうした類例を待って検討したい。焼土はみられない。

S B 4 竪穴住居の南東コーナー部分と推定でき、およそ4m×5mの規模が想定されよう。支柱穴は不明である。S B 3との切り合いは埋土に差はなく不明である。

S B 6 S B 5の中央部を切ってつくられた南北3.1m余、東西5m余の隅丸方形の竪穴状遺構で、深さ40~45cmである。埋土は土師器小片の他、須恵器杯身を含む他、炭の含有度が高い。

S B 9 南北4.8m余、東西3.5m余で隅丸方形プランの竪穴住居で北東コーナーで周溝が確認できる。

S B 10 南北5m余、東西5.5m余のほぼ正方形に近いプランをもつ竪穴住居で深さ25~30cmである。支柱穴は4本柱と考えられるが、北西の柱穴は確認できない。

S B 11 西北4.7m余、東西4m内外で、西辺が丸く膨らむ竪穴状遺構で、深さは25cm前後である。支柱穴等は確認できない。

S B 12 南北4.2m余、東西3.7m余の方形プランを呈する竪穴住居で、西、及び南辺には内壁に沿っ

て幅30~40cmの周溝が確認できる。支柱穴、焼土等とはみられない。

S B 13 南北2.8m前後、東西4m内外のいびつな長方形プランをもつ竪穴住居で、支柱穴は4本柱と考えられる。

S B 14 南北3.5m余、東西1.9m余の長方形を呈する竪穴状遺構で、支柱穴等は確認できない。

S B 15~17 3軒の竪穴住居の重複関係が推定できるが、埋土に差がないため、その新旧関係は不明である。それぞれ一辺5m前後、4.5m前後、4.8m前後の方形プランを呈する竪穴住居と考えられるが正確な規模は不明である。いずれも支柱穴は不明であるが、S B 16の埋土には多量の焼土の堆積がみられ、それに混在して多量の須恵器と少量の土師器が出土したことが特徴的である。

S B 18 一辺7m余、深さ15~20cmの方形プランを呈する竪穴住居の一部と考えられる。同溝は北西コーナーに一部認められ、北部中央部の壁に近い床面に径約60cm範囲に焼土がみとめられる。支柱穴は4本柱と推定され、その柱間は約4.3mである。

S B 21 一辺2.5mの方形プランを呈する竪穴住居の一部と考えられるが東半は削平を受けており壁を確認できない。

(2) 掘立柱建物

S B 1 桁行2間(3.4m)×梁行2間(2.8m)の南北棟をもつ総柱建物で棟方向はN4°Wである。柱間は桁で1.7m等間、梁で1.4m等間である。柱掘形は方形を呈するもの、円形、あるいは楕円状のものと不揃いで一返60~80cmと径80cm~1mに分け、深さは30~40cm程度である。住居というより、倉庫的な建物と考えられる。

S B 5 桁行5間(9.0m)×梁行3間(4.5m)の南北棟をもつ建物で、棟方向はN6°Eである。柱間は桁で1.8m、梁で1.5mでいずれも等間である。柱掘形は基本的に一辺50~70cm程度の方形プランを呈し、深さは浅いもので30cm、深いもので50cm余ある。

S B 7 桁行4間(6.8m)×梁行3間(4.2m)の南北棟をもつ建物で、棟方向はN2°Eである。柱掘形は円形を呈するものがあるが、基本的に一辺50

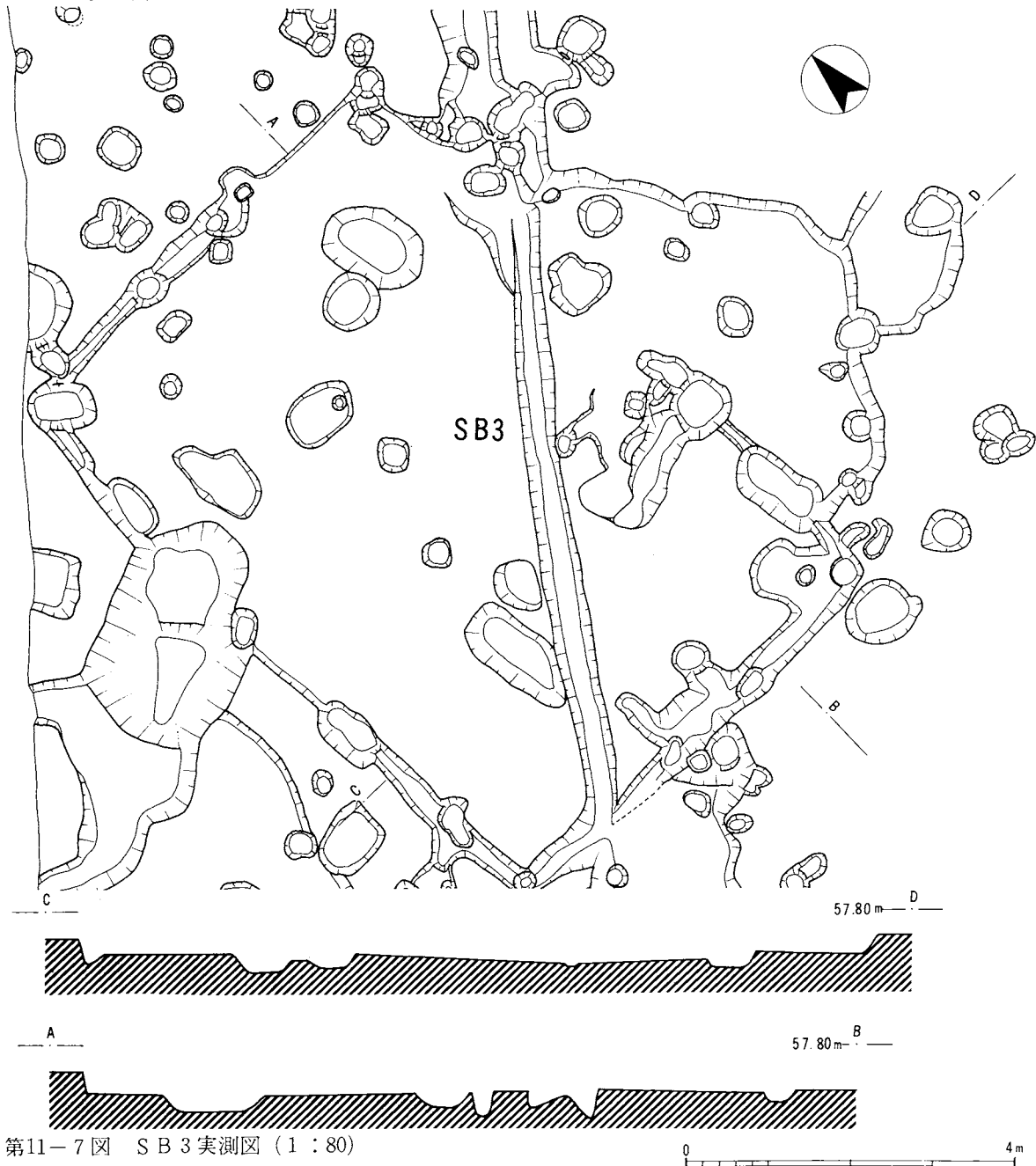
～70cmの方形プランで、深さは30～50cmである。

SB 8 桁行6間(11.9m)×梁行3間(4.8m)の南北棟をもつ建物で、棟方向はN8°Eで、SB5の棟方向にはほぼ一致する。柱間は桁で1.9m、梁で1.6mの等間と考えられるが桁方向の最北1間分は、2.4mとなり、5間×3間分が身舎で、この部分は廂とも判断できる。柱掘形も身舎部は長方形プラン(一辺60cm～1m)であるが、廂柱は円形(径35～50cm)プランである。

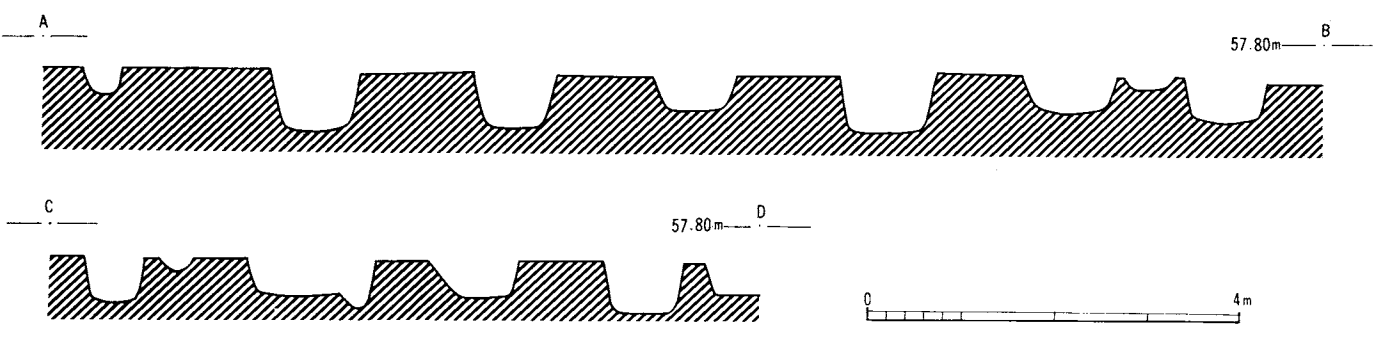
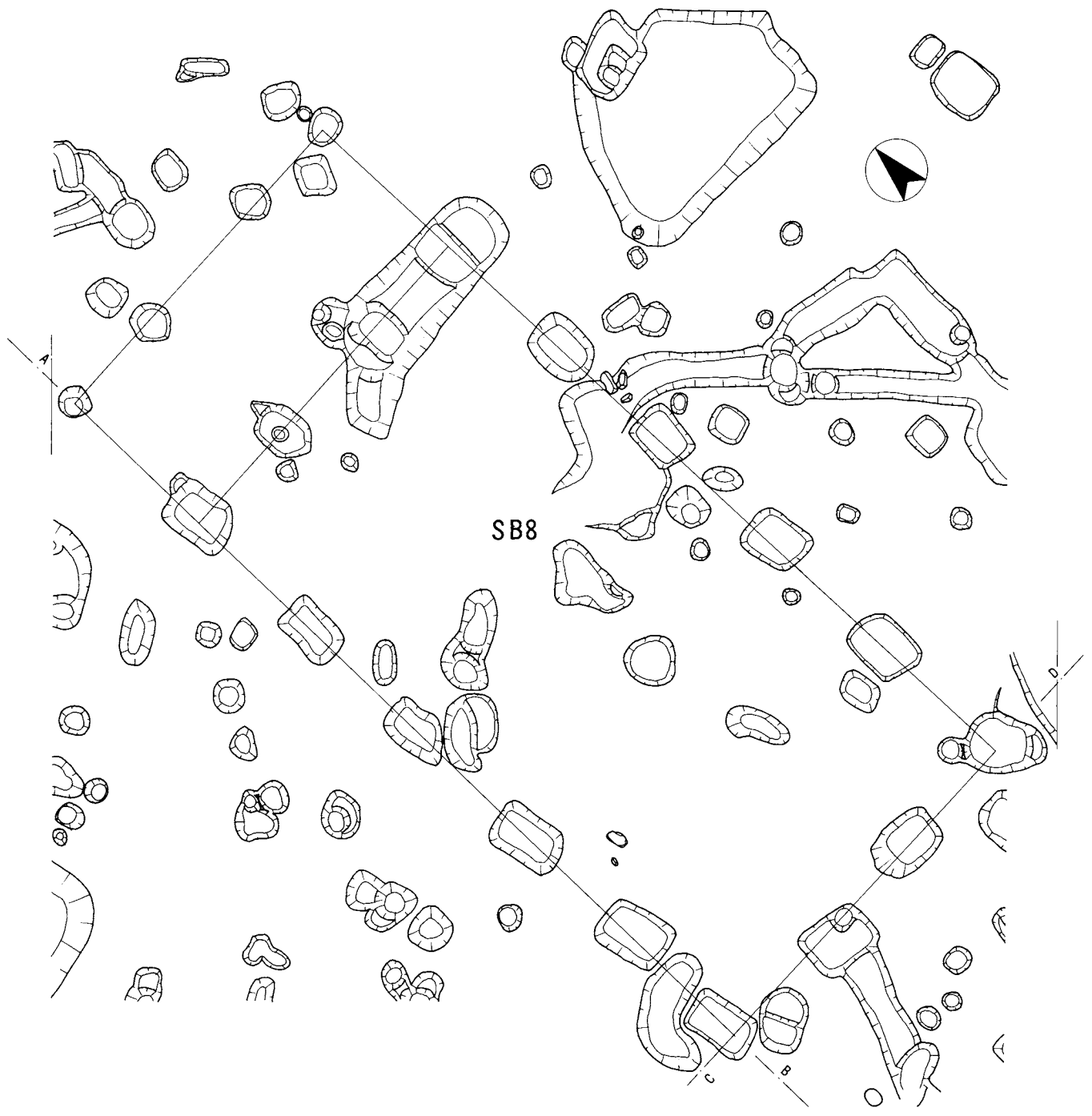
SB 19 桁行4間(7.2m)×梁行3間(4.8m)の南北棟をもつ建物で、棟方向は方位(磁北)にのっている。柱間は桁で1.8m、梁で1.6mでそれぞれ

等間である。柱掘形は円形プランで径30cm余のものから70～80cmのもの等、不揃いである。

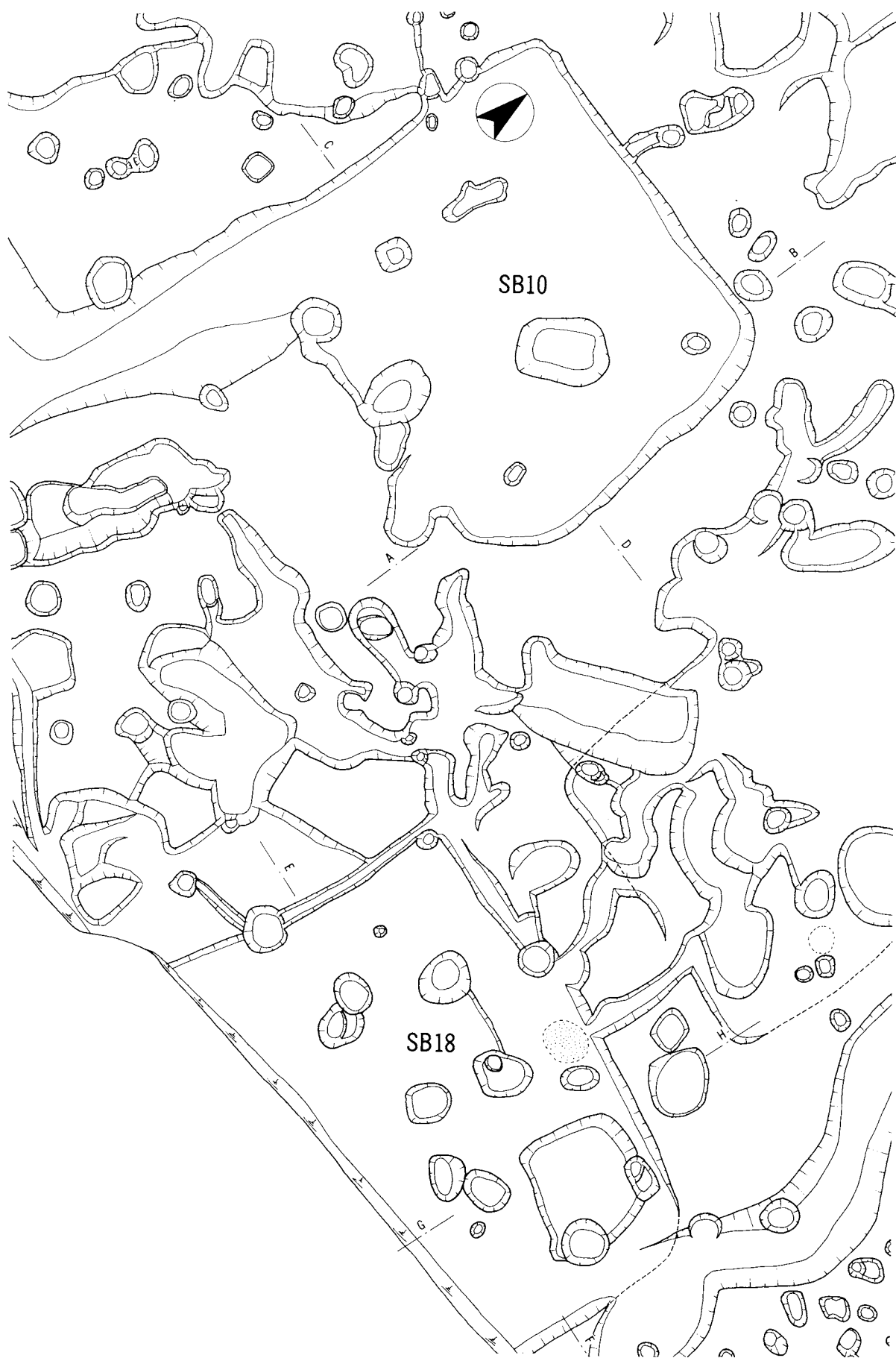
SB 20 桁行5間(10m)×梁行3間(5.1m)の南北棟をもつ建物で、棟方向はN16°Eで、検出した建物の中ではもっとも磁北に対して東に振れている。柱間は桁で2.0m、梁で1.7mの等間と考えられる。柱掘形のプランは一定でなく、径50～80cmの円形のもの、一辺60cm内外の方形のもの等、不揃いである。柱穴に隣接して径10～20cm内外の小柱穴がみられるものもあり、これらは建築時における足場(小柱材)の痕跡とも推定できる。



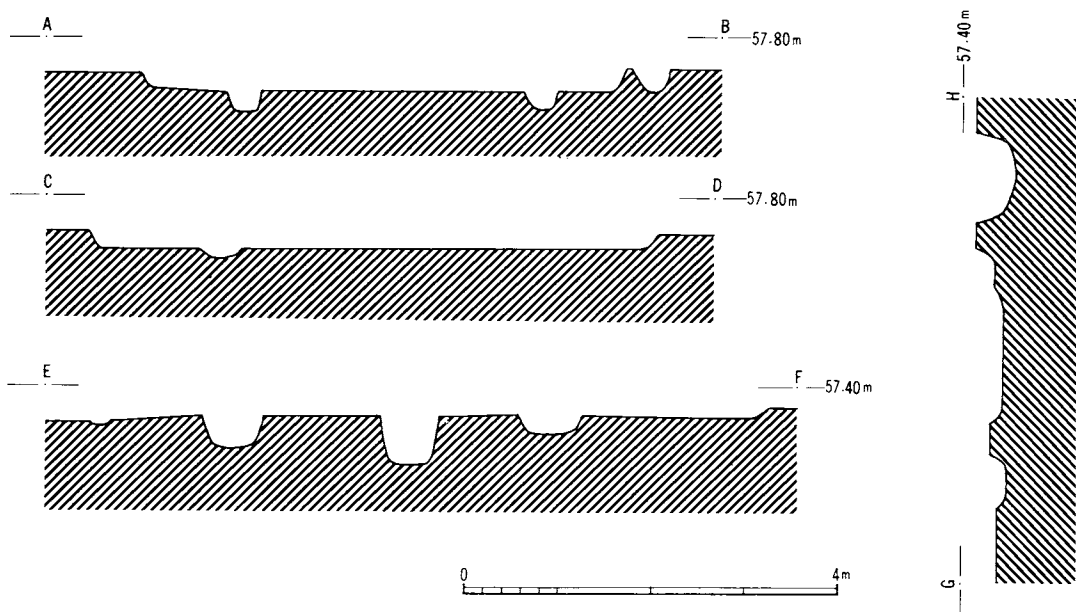
第11-7図 SB3実測図(1:80)



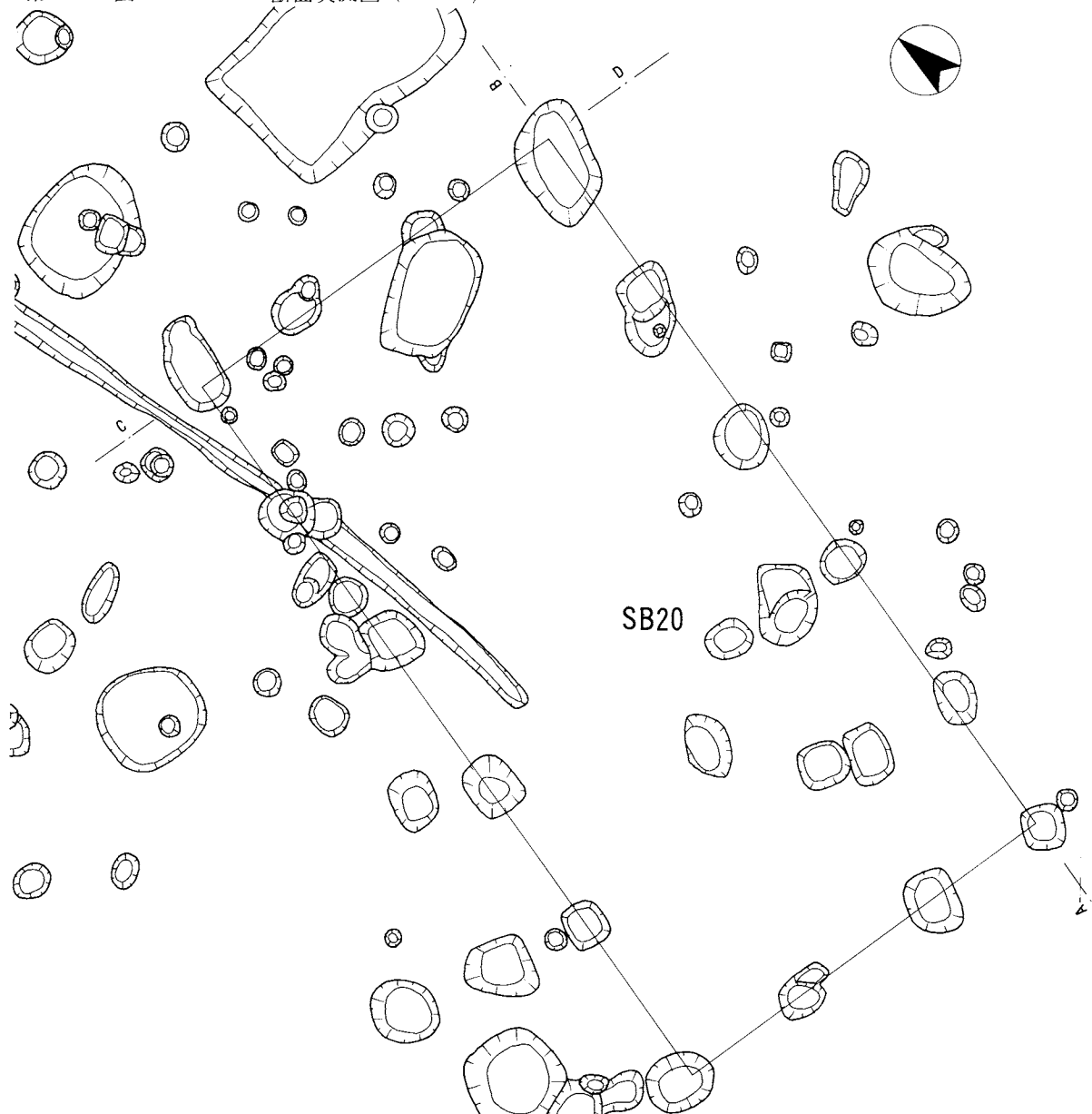
第11-8图 SB8 实测图 (1:80)



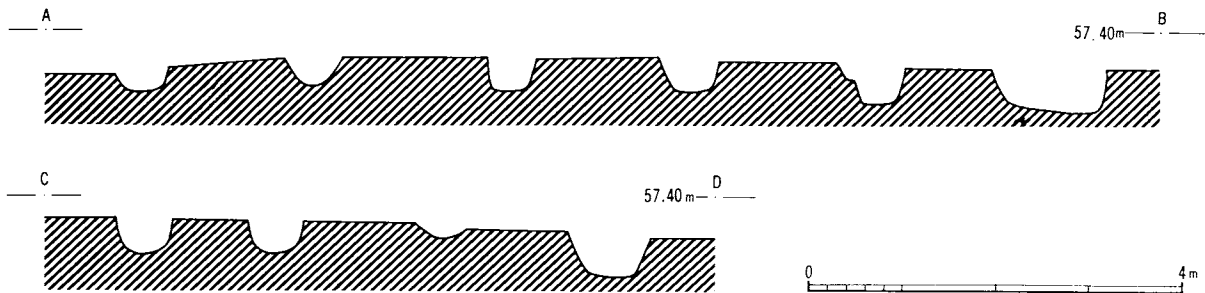
第11-9图 SB10·18实测图(1:80)



第11-10图 SB10·18断面实测图(1:80)



第11-11图 SB20实测图(1:80)



第11-12図 S B 20断面実測図 (1 : 80)

名称 (S B)	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟方向	柱間寸法(m)		備考
					桁行	梁行	
1	2 × 2	3.4	2.8	N 4°W	1.7	1.4	総柱・倉庫的建物
5	5 × 3	9.0	4.5	N 6°E	1.8	1.5	
7	4 × 3	6.8	4.2	N 2°E	1.7	1.4	
8	6 × 3	11.9	4.8	N 8°E	1.9	1.6	身舎は5間×2間で北側に1間分(2.4m)の扉か?
19	4 × 3	7.2	4.8	NS 0°	1.8	1.6	
20	5 × 3	10.0	5.1	N16°E	2.0	1.7	

第11-1表 B地区掘立柱建物の規模

3. 遺物

出土遺物は数点の石製品を除くとすべて土器類である。種類としては、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶椀、陶器、磁器がある。時代的には、縄文時代(後期)、弥生時代、古墳時代(後期)、奈良時代(前半)、中世(平安時代末～鎌倉時代前葉)の5期に大別できる。しかし、弥生時代については表採による磨製石斧1点と後期の壺、高杯小片が若干みられる程度である。土器の相対量とすれば、A地区では中世、B地区では奈良時代前半のものが多い。縄文土器はすべてA地区から出土している。ここでは若干の縄文～弥生時代の遺物の他、B地区の竪穴住居に伴出する土器と、A地区出土の包含層出土の土器についてのみ紹介しておく。

A. 縄文～弥生時代の遺物

1. 縄文時代後期の遺物 (1～5・7)

1は浅鉢、あるいは皿状を呈するもので、口縁端部の外面に浅い沈線を配す。内外面、特に上半部を中心に横位のヘラ研磨がみられる。色調は淡茶褐色で、胎土には金雲母片の他、砂粒を多く含む。

2は口縁部がや、外反して立ち上る深鉢と推定される。全体に磨滅が進むが、口縁部外面、及び内面

は横、あるいは斜位に草茎束によるナデがみられる。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒量が非常に多い。3と4は同一個体と考えられ、4は波状口縁部、3はキャリパー形の深鉢の腰(くびれ)部分と考えられる。波状口縁部の端部は上方に面をつくり、縄文帯をつくる。内外面にヘラ研磨がよくのこる。3は縄文地の上に幅広の深い沈線で直線的な文様区画がみられ、以下はその後に研磨を施している。内面にも研磨がよくのこる。茶褐色を呈し、胎土は堅緻で良く焼きしまっている。また4には外面に煤の付着が厚くみられる。5は波状口縁部の突出部片で、端部に沿って3条の沈線が配される。色調は白色味の強い淡灰褐色を呈し、胎土は砂粒が多く粗い。7は横長石匙で刃部の長さは8.2cmである。暗灰色の色調を呈するサヌカイト製品である。1～4はSK3出土、5・7は包含層出土。

2. 弥生時代の遺物 (6・8)

6はミニチュア壺の腹部の破片と考えられる。3本単位の櫛目状工具による横線とその中に同一の原体による波状文を配している。濃茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。8は大型蛤刃石斧で柄部を欠く。硬質砂岩製である。

B. 奈良時代前半の土器 (B 地区)

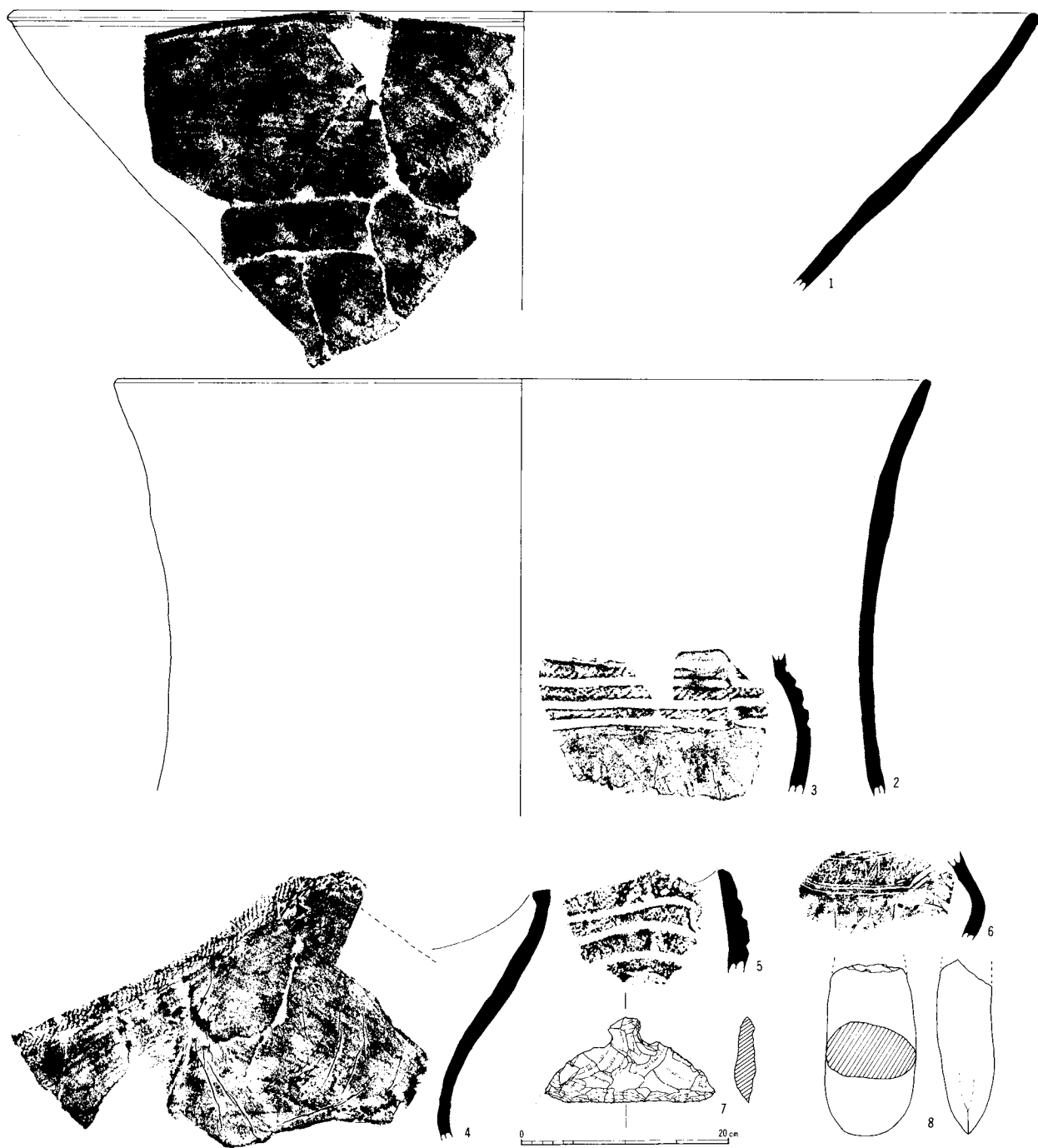
1. SB出土の土器

土師器杯 (9) 口径12.4cm、器高 3.2cmに復元できる丸みをもつ碗形態を呈する。口縁部は内外面ヨコナデされ、内面には放射状の稚拙な暗文が残る。外面の口縁部以下はヘラケズリされている。赤褐色を呈し、胎土は精緻である。

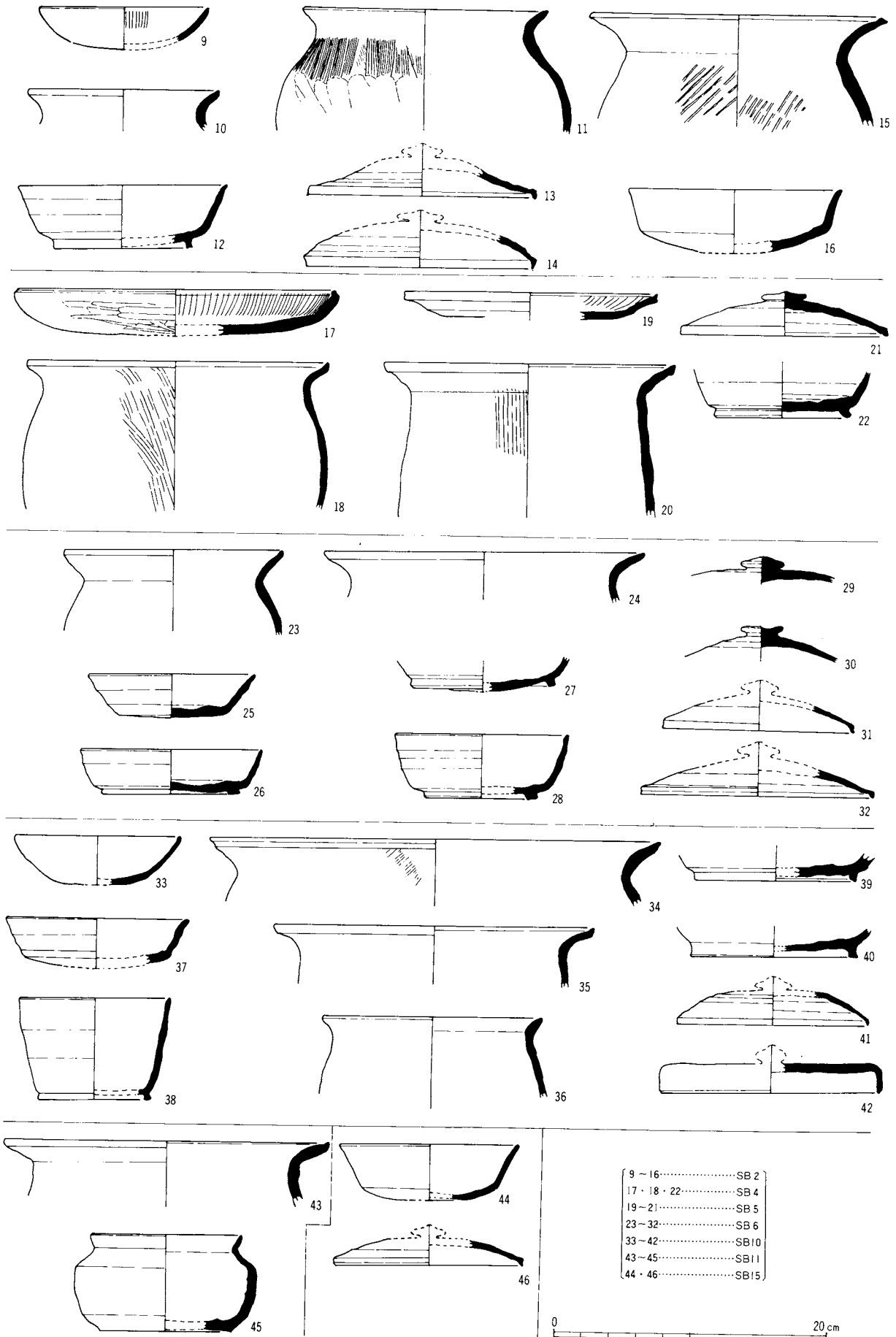
土師器甕 (10・11) 10は口縁部のみ残るもので

いずれもくの字に外反する口縁部は短く端部は丸くおさまる。口縁部は両者とも内外面ヨコナデされ、11では外面上部(肩部)にはハゲメ、以下にはヘラケズリがみられる。いずれも磨耗が進み、砂粒を多く含む粗い胎土である。口径は10で14cm内外、11で17cm内外である。

須恵器杯A (16) 半焼成の杯と考えられ、現存は淡黄褐灰色の色調を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。口縁部は外反してのび、端部はそのまま丸く



第11-13図 縄文土器・弥生土器・石器実測図(1:3)



第11-14图 竖穴住居出土土器実测图(1:4)

おさまる。

須恵器杯B (12) 口径15.2cm余、器高 9.6cmで体部から口縁部は外反してそのままのび、端部はやや外方に八の字状にふんばる形態で端部に沈線が走る。暗青灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

須恵器甕 (15) くの字形に鋭く外反する口頸部から、端部は外側に面をつくる。体部の内外面には斜位の叩目の痕がのこる。焼成は生焼けに近く、軟質を呈し、くすんだ淡黄灰色を呈する。

須恵器杯蓋 (13・14) いずれも口径16.6cm余で宝珠つまみのつく杯蓋と考えられる。口縁端部に相違がみられ、13では短く垂下し、14ではやや内傾して垂下する。13の色調は淡青灰色、14では淡黄灰色で全く異なり、胎土も14は砂粒を多く含む胎土である。

2. S B 4 出土の土器

土師器皿 (17) 口径23cm余、器高 3.4cm余に復元できる大ぶりの皿で、口縁は底部からやや内弯気味に立ち、端部は直立する。内面は丁寧にナデられたのち、放射状暗文が施されている。外面の口縁部はヨコナデ、以下はヘラケズリされ、平城宮土器の調整手法分類でのC手法に近いものである。色調は赤褐色を呈し、胎土は精緻である。

土師器甕 (18) 口径22cm余の甕の破片である。丸味をもつ体部から口縁部はくの字に外反し、端部は直立して受口状となる。内面は磨滅がすすむが、外面は口縁部以下に斜位のハケメが施されている。色調は淡黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。

須恵器杯B (22) 高台は八の字状に外方にふんばる形態をもつ。全体に丁寧なロクロナデが施され、内底部には一方向のナデがみられる。色調は青灰色を呈し胎土は堅緻である。

3. S B 5 出土の土器

土師器高杯 (19) 口径は18.6 cm余と復元できる高杯の杯部にあたる破片と考えられる。口縁部はゆるやかに外反して、端部は上方に肥厚し、外側に浅い沈線をつくる。内面には粗い放射状暗文がみられる。淡赤褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。

土師器甕 (20) 長胴甕の形態と考えられ、口径23.6cmと復元できる。くの字に外反する口縁部から端部は外に面をつくり、わずかに上方に肥厚する。

口縁部の内外面はヨコナデ、内面はナデ、外面の体部には縦方向のハケメがわずかに残る。白色味の強い黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む粗い。

須恵器杯蓋 (21) 扁平な宝珠つまみを有し、ゆるやかな傘状の天井部から口縁部はそのままのび、端部は短く屈曲して垂下する。口径15.2cmで半焼成品で胎土には砂粒を含む。

4. S B 6 出土の土器

土師器甕 (23・24) いずれも口縁部のみ的小片で、口縁端部はやや内傾する。口縁部の内外面はヨコナデされるが、以下は磨滅が進み、調整手法は不明である。

須恵器杯A (25) 口径11.8cm、器高 3.2cmで、底部から口縁部が立ち上り、端部は丸くおさまる。底部はヘラ切り後、ナデ調整がなされている。淡青灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

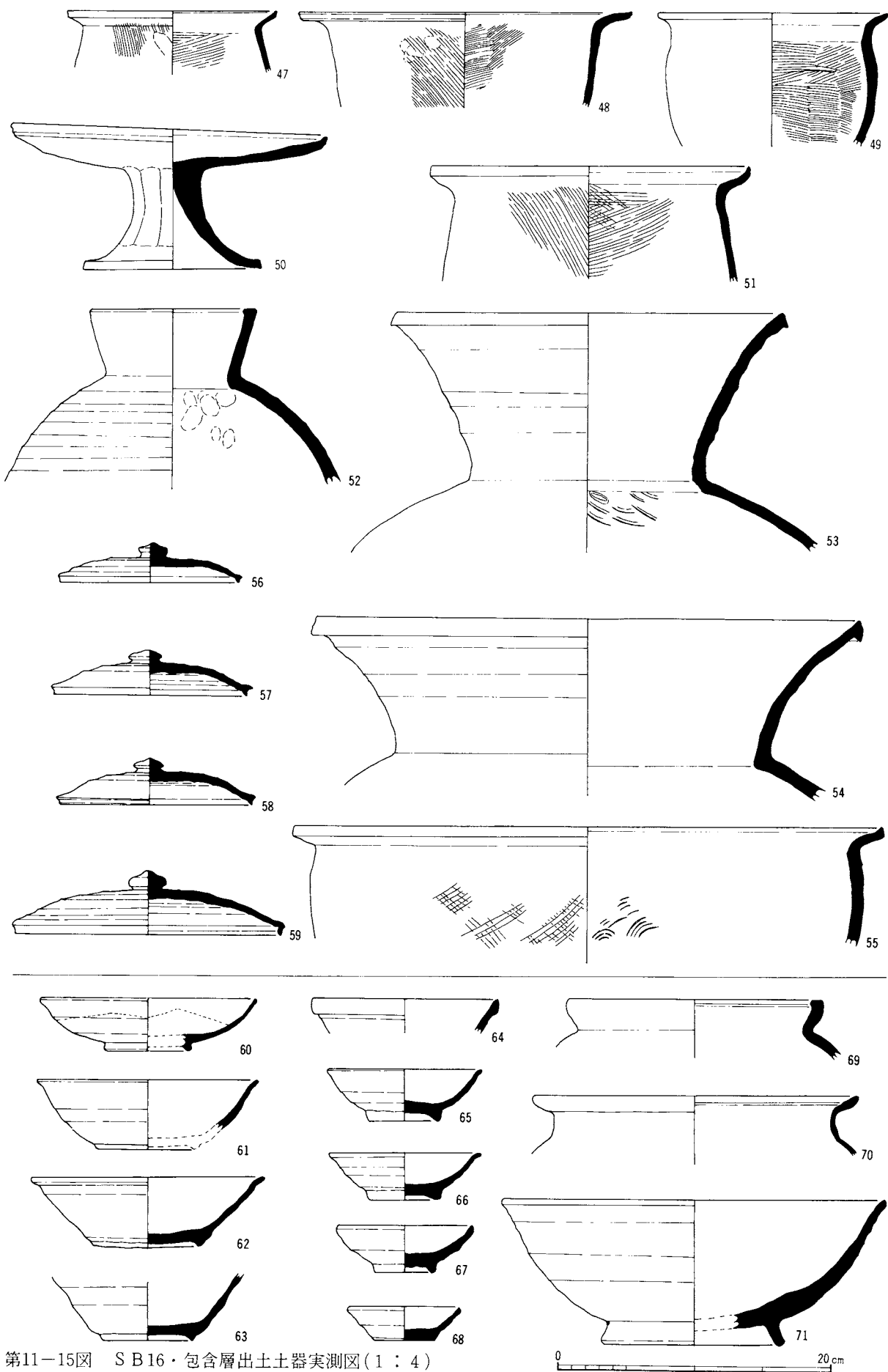
須恵器杯B (26~28) 26は口径13cm余、器高33cmの浅い杯身で、口縁部は直線上に立ち上り、端部は尖先となる。高台は扁平で薄く、両側に肥厚する。底部はヘラ切り未調整である。内面底部の中央部には一方向のナデがみられる。27の外底部にはロクロケズリされている。

須恵器杯蓋 (29~32) いずれも扁平な宝珠つまみを有する杯蓋で、30の中央部はくぼみ状となる。31・32では天井部が直線状に内弯し、端部は短く垂下する。29の色調は青灰色、他は灰色を呈し、胎土はすべて堅緻である。

5. S B 10 出土の土器

土師器椀 (33) 口径12cm、器高 3.6cmで丸味をもつ体部から口縁部はやや内弯気味に立ち、端部は丸くおさまる。磨滅が進み、調整手法は不詳であるが、口縁部の内外面はヨコナデされる。色調は淡肌色をして、胎土には砂粒を多く含む。

土師器甕 (34~36) いずれも口縁部から頸部にかけての破片で、34ではくの字形に外反する口縁部から端部は尖り気味となり、下面に一条の沈線が走る、35では口縁端部が直立して受口状口縁をつくる。36は体部よりかなり肥厚した短い口縁部をもつ。いずれも磨耗して調整手法は不詳であるが、34の外面体部には斜位のハケメが若干残る。34は長胴甕の形態をとるものであろう。色調は肌色に似た淡褐色を



第11—15图 S B 16·包含層出土土器実測図(1:4)

呈し、砂粒を多く含む。焼成は全体に軟質である。

須恵器杯A (37) 口径13.2cm余、器高 3.6cm余の高台を持たない杯身である。全体にロクロナデがみられるが、底部の調整については不明である。色調は青灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

須恵器杯B (39・40) 底部と体部の一部のみ残る破片である。高台部の形状に相違がみられ、40では八の字に外へ向ってふんばる形態をもつ。外底部については39ではヘラ切り未調整、40ではロクロナデの跡がみられる。色調は淡青灰色を呈し、32では胎土に砂粒を多く含むが、40では緻密である。

須恵器杯C (38) 口径11cm余、器高 7.4cmの杯Aより深い形態を有する杯である。体部から口縁部まで、やや外反するが、そのままのびて、端部は丸くおさまる。高台はわずかに外方にふんばる形態で、断面は台形状となる。茶色味がかかった淡青灰色を呈し、胎土は緻密である。

須恵器杯蓋 (41・42) 形態の異なる杯蓋で、42は水平な天井部から口縁部はほぼ垂直に垂れ下がり、口縁端部の外側に沈線風の段を有する。全体にロクロナデがみられ、内面中央付近には一方向の仕上げナデがみられる。41の色調は淡茶灰色、42では灰色を呈し、後者の胎土は砂粒が多く粗い。

6. S B 11出土の土器

土師器甕 (43) ほぼ直立する体部から口縁部はくの字に外反し、端部は上方にわずかに肥厚して丸くおさまる。磨滅が進み、調整技法は不明であるが口縁部はヨコナデされているものと考えられる。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

須恵器短頸壺 (45) 口径11cm余、器高 7 cm余で口縁部は外反して短くのび、端部は丸くおさまる。全体にロクロナデの痕がよく残るが、底部は未調整である。やや青味がかかった淡灰色を呈し、砂粒を少量含む胎土をもつ。

7. S B 15出土の土器

須恵器杯A (44) 色調が赤褐色を呈する生焼けのもので、口縁部は外反して立ち上り、端部はそのまま丸くおさまる。外底部はヘラ切り未調整である。

須恵器杯蓋 (46) 宝珠つまみの付く杯蓋と考えられ、小片からの推定口径は13.8cm余である。淡青灰色を呈し、胎土は堅緻である。

8. S B 16出土の土器

土師器甕 (47~49・51) 47・49は中型の丸底、48は長鉢状、51は長胴甕と推定される。口縁部の形態は様々で、くの字状に外反する口縁部から端部に面をつくるもの(47)、口縁部が水平にのびるもの、短い口縁部から端部が直立して受口状を呈するもの(51)等がある。磨滅がすすみ、残りが悪いが、44を除くと他は外面に斜位のハケメが施される。45の体部内面には粗いハケメがみられる。色調はすべて黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を少量含むものである。

土師器高杯 (50) 脚部に12面体の面取りが施される高杯で、杯部は直線上にのび、端部は上方に肥厚し外側に沈線をもつ。裾部は八の字状にゆるやかにのび端部は下方にやや肥厚して面をつくる。杯部は全体にヨコナデ調整が施され、脚部はヘラで縦方向に面取りされている。杯部の口径23cm、器高は10cm内外である。色調はやや赤味のある黄褐色を呈し胎土には砂粒を少量含む。

須恵器壺 (52) 口径12cmで、球状の体部から口縁部はやや外反して直立する直口壺の形態をもつ。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部は内外面ともロクロナデ、体部は外面にロクロナデによるロクロ目がよく残存する。内面はユビオサエによる指頭圧痕がみられる。淡灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

須恵器甕 (53~55) いずれも大型の甕形態と考えられ、口径は各々、28.4cm・39.6cm・43cmである。53・54では体部からくの字に鋭く外反してのびる口縁部を有し、端部が53では下方に肥厚、54では端部が下方に垂下している。55は張りのない体部から口縁部は短く外反してのび、端部が上方に肥厚する。体部外面の調整手法は、53・54では斜位に平行叩きを施したのちにナデ消されており、55では格子目の叩き目が一部残存している。53の口縁部内外面にはほぼ全体に釉着がみられる。53・54の色調は淡茶灰色を呈し、55では淡灰色を呈し、胎土、焼成ともに堅緻、良好である。

須恵器杯蓋 (56~59) 口径19cm余のやや大ぶりの59を除く56~58は口径13~14cm内外で、法量的にも形態的にも相似た杯蓋で、いずれも中央部は突出

した宝珠つまみをもつ。天井部を中心として約 $\frac{1}{2}$ 強ロクロケズリされて、それ以下はロクロナデが施される。59の口縁端部はやや内傾して垂下する。色調は青灰色を呈するもの(56)、淡茶灰色を呈するもの(57・58)、淡灰色のもの(59)に分けられ、胎土には砂粒を少量含む。

C. 平安時代～鎌倉時代の土器(包含層出土)

灰釉椀(60) 口径15.6cm、器高3.8cmの浅い部類の椀で口縁部の内外面には破風状のつけ掛け釉が施されている。色調はやや黄味を帯びた淡灰色で、胎土には砂粒を多く含む。

山茶椀(61～63) 口径16～17cmの大ぶりで口縁部が外反する形態(61・62)と、内面の底部と体部の境が明瞭で体部が直線状に立ち上る形態(63)に分けられる。全体にロクロ水挽きによる成形がみられ、高台は62では逆台形、57では逆三角形の小さな形態をもつ。61・62の胎土は比較的堅緻であるが、57では砂粒を多く含む粗い。

山皿(65～68) 68の高台を消失する時期のもの他はすべて高台の付く小椀とも言われる形態の山皿である。後者は口縁部が端部にいたるところでそのままのびるもの(65)、外反するもの(66)、内弯気味に立つもの(68)に分類できる。

捏鉢(71) 山茶椀系の色調と胎土をもつもので八の字状に張り出した高い高台が付く。口径28cm、器高10cm内外である。全体がロクロ水挽きによって丁寧につくられている。胎土は堅緻で焼成は良好である。

土師器鍋(69・70) 口縁端部器壁の厚さに明瞭な差がみられ、69では短く立ち上がる口縁部から端部内側に肥厚し、上端に面をつくる。口縁部の内外面はヨコナデが施される。70の口縁部は内側に折り返され、凹状の面をつくる。色調はいずれもくすんだ茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

白磁(64) いわゆる玉縁状口縁をもつ白磁椀の口縁部である。色調はややくすんだ白色を呈す。釉厚は0.2cm内外である。

4. 結 語

六谷遺跡は、朝明川の左岸に形成された河岸段丘上位面に立地する遺跡で、今回は工事によって削平される部分のみについて調査を実施したが、事前の試掘調査によって当遺跡は東西約300m、南北100mの範囲に及ぶことが判明した。

A地区の遺構としては、発掘区中央南より検出した四面廂付の大型掘立柱建物の特筆されよう。時期としては柱穴内出土の山茶椀型式より、平安時代末葉(12世紀後半)期に比定される。しかし、時期、棟方向的にも当建物に付随する建物等の検出は今回の発掘区ではみられず、状況からみれば発掘区の西方に関連遺構が存在することも推定される。

B地区では、南北に走る中世溝(SD2)を除くとして奈良時代前半の遺構である。掘立柱建物は6棟検出されており、棟方向としてはSB6～8と19の1群が考えられ、この一群に比べSB1は西にSB20は東に振れている。規模的には5間×3間と4間×3間に分けられるが、SB1は小規模な割に大きな掘形をもつ総柱建物であり、いわば倉庫的な

建物と判断されよう。

次に竪穴住居については、掘立柱建物のみられない発掘区中央部に集中して検出されている。SB3はその内でも平面規模が大きく、掘立柱建物(4間×3間)であるSB5、SB19に近い面積をもつものであり、むしろ従来の竪穴住居の概念に入れるものではなく、半地下的な構造をもつ掘立柱建物と考える方が妥当かも知れない。SB3の柱穴については内壁に沿った4間×3間分の復元も推定できる。掘立柱建物と竪穴住居については切り合いがなく時期差については不明であるが、遺物の年代幅からみて両者が共存していたものと考えたい。

出土遺物は、A地区の縄文時代土塚に伴う後期(前葉)のものを上限とする。弥生時代については、両区において若干の後期末の高杯片、壺片がみられる程度で遺構は検出されていない。図に掲載した石斧は中期、また6のミニチュア土器については中期後葉に属するものと考えられるが、他に中期に属する土器はみあたらない。古墳時代後期については、6

世紀後半～末の須恵器杯身、杯蓋の小片から年代を得られる程度の出土量である。

奈良時代については、B区を中心に、竪穴住居に伴出する須恵器、土師器があるが、土師器は残りが悪く、詳細な技法を捉えられないものが多い。しかし、SB2、SB4、SB5、SB16では暗文を有し、赤褐色を呈する畿内的な要素をもつ良質の土師器もみられる。また、長胴形態の土師器について概して受口状口縁部をもち、従来よりいわゆる「近江系」と呼称されるものの影響を考えることも近江に近い当遺跡については関心もたれる点であるが、詳細な検討は今後に期したい。B地区の竪穴住居に伴う土器の編年観については、奈良時代前半代におくことができ、およそ8世紀初頭(SB4・SB5

・SB6・SB11)、8世紀前葉(SB10)と考えられ、SB16についてはやや下るものと思われる。

中世の遺物は、平安時代後半(折戸53号窯以降)の灰釉陶器が数片みられる他は、平安時代末から鎌倉時代前葉にかかる土師器鍋、山茶椀、山皿等が検出されている。

以上、A地区での大型建物の検出、B地区における奈良時代前半の建物群、そして遺物の年代幅について概観してきたが、北勢地域での当時期の調査例も少なく、こうした建物の歴史的な性格については今後の調査例を待っての総合的な検討に委ねたい。

(新田洋・神田薫)

索 引

(行)	(項目)	(頁 数)	(行)	(項目)	(頁 数)
い	井戸	60、74、85、136、160、188			150、161、177、181、184
	石 臼	88、96		穿孔土器	105、120
	石 鈎	133	そ	双孔円板	72、75
う	漆塗椀	96、99		染 付	97
お	近江型(系)甕	27、79、219		搔 器	47、48、180
	押型文土器	65	た	鉄製紡錘車	44
	帯金具	134		手焙型土器	57
か	カマド	13、27、61、63、64、75、116、 119、136、145、205		天目茶椀	91、95、99、120、129
	瓦質土器	13、24、29、34、35、36、37、89、95		鉄 斧	168
	岩 偶	133	と	土 釜	24、26、35
き	経 筒	134		土塚墓	36、136、162
こ	小型丸底壺(埴)	12、57、67、75		銅 鐸	41
	黒色土器	34、36		土製犬	91、92、97
	筭	97		ドリル	182
	子持台付長頸瓶	134	な	ナイフ型石器	131、132
	金銅製轡	134	ね	根 石	85、147、150、151、154、158 159、188、189、192
さ	細石刃	180、181	は	羽 釜	13、53、54、114、120、161、187
	細石核	180、181		白 磁	57、95、151、181、218
	削 器	47、48	ふ	複合口縁壺	67、68
し	小石室	61		船底型石器	131
	陣 木	85、99	へ	ヘソ皿	99
	志摩式製塩土器	175	ほ	方形周溝墓	77、102、122、133
す	播 鉢	35、60、72、74、89、91、92、95、99		ポイント	132
せ	銭 貨	183		方形土塚	147、150、154、158、160、188、189
	石 硯	183	ま	磨製石剣	77、102、105、106
	石 棒	133		曲 物	96
	石英製飾玉	132	み	ミニチュア壺(土器)	212、218
	尖頭器	131	り	緑釉陶器	44、92、120、150、154、159 161、169、174
	石 刀	57	ろ	ロクロ土師器	154、171、173、174
	石製盒子	57	わ	和 鏡	136、161、183、184
	石製模造品	57、63、72	ゆ	有舌尖頭器	55
	青 磁	57、89、95、99、120、129、134、			

版 图



航空写真（東から）



調査前近景（南東から）



調査後近景（北東から）



SB 6 (北東から)



SB 6 (北西から)



SB 2・3・4 (北から)

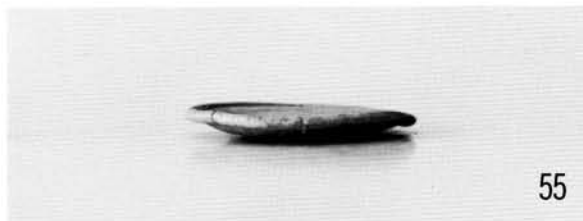
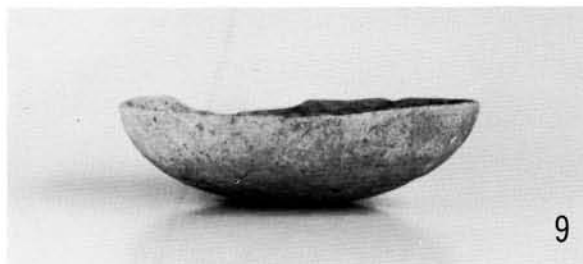


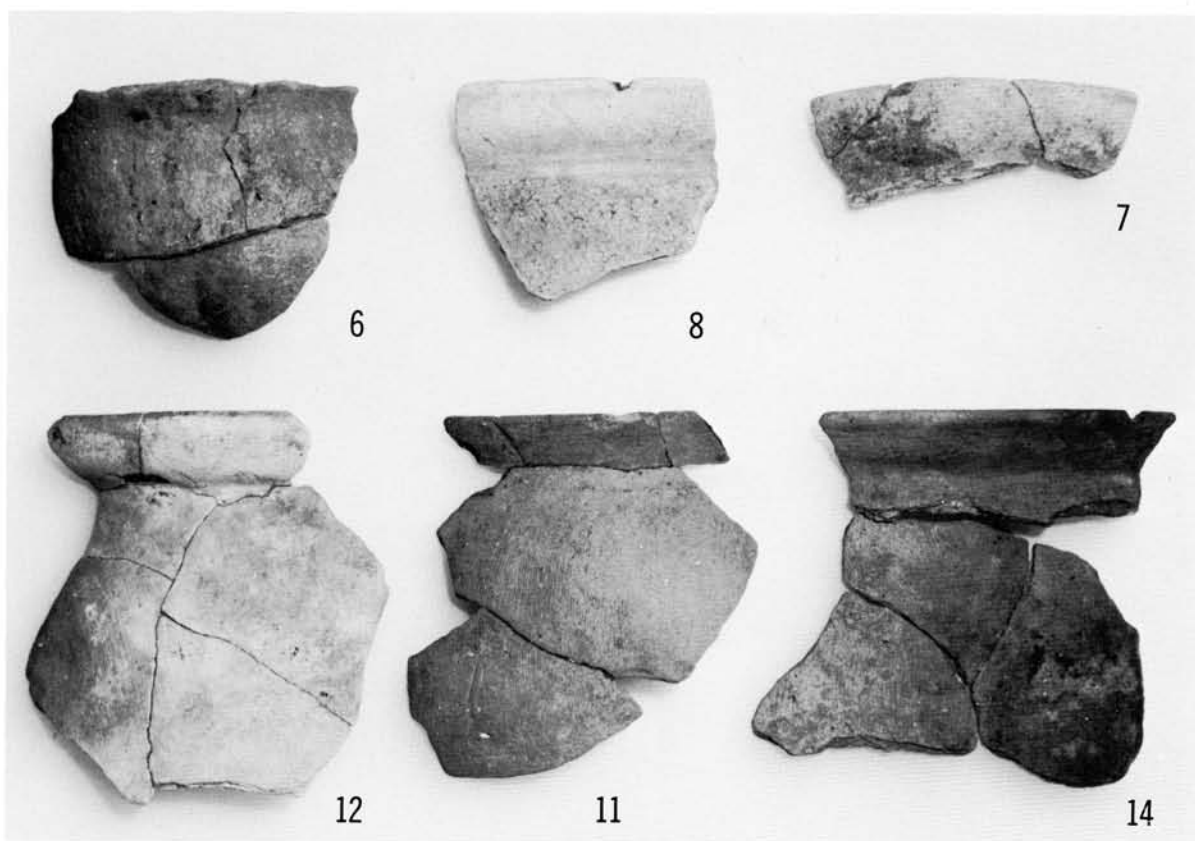
SK 1 (北西から)



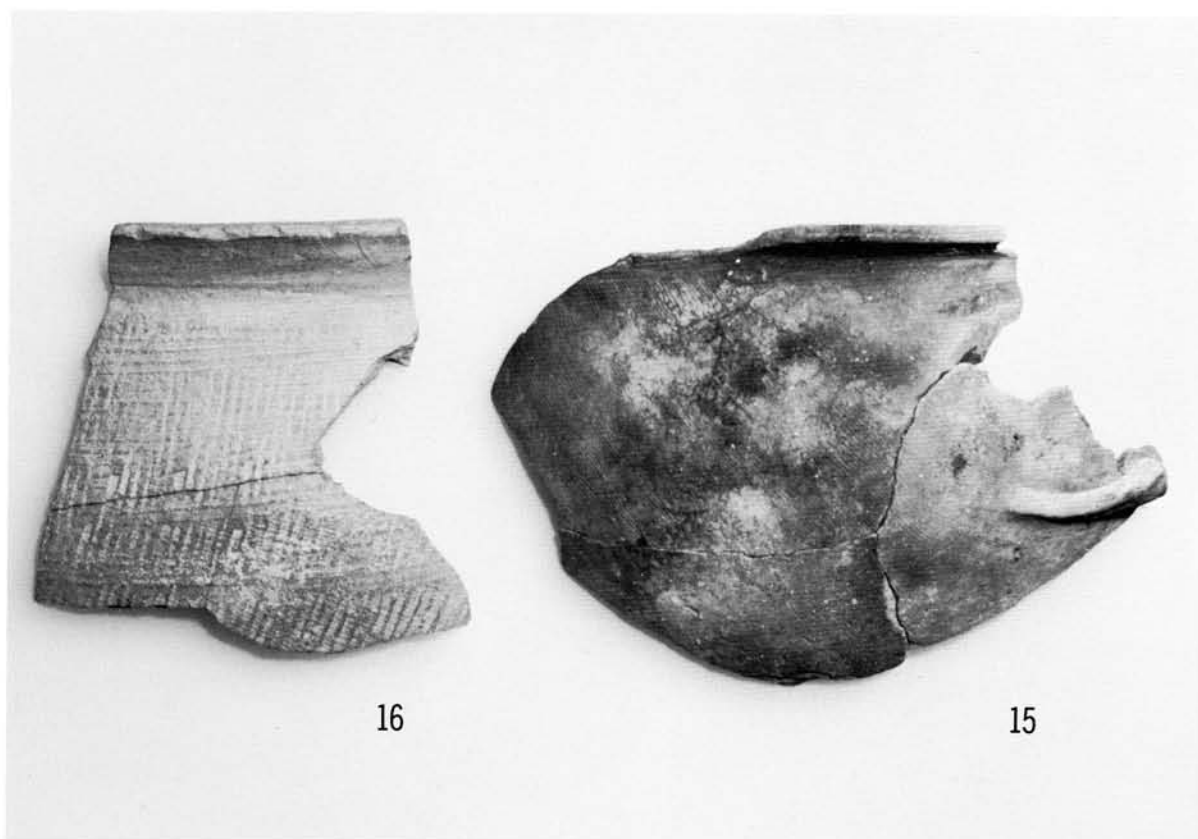




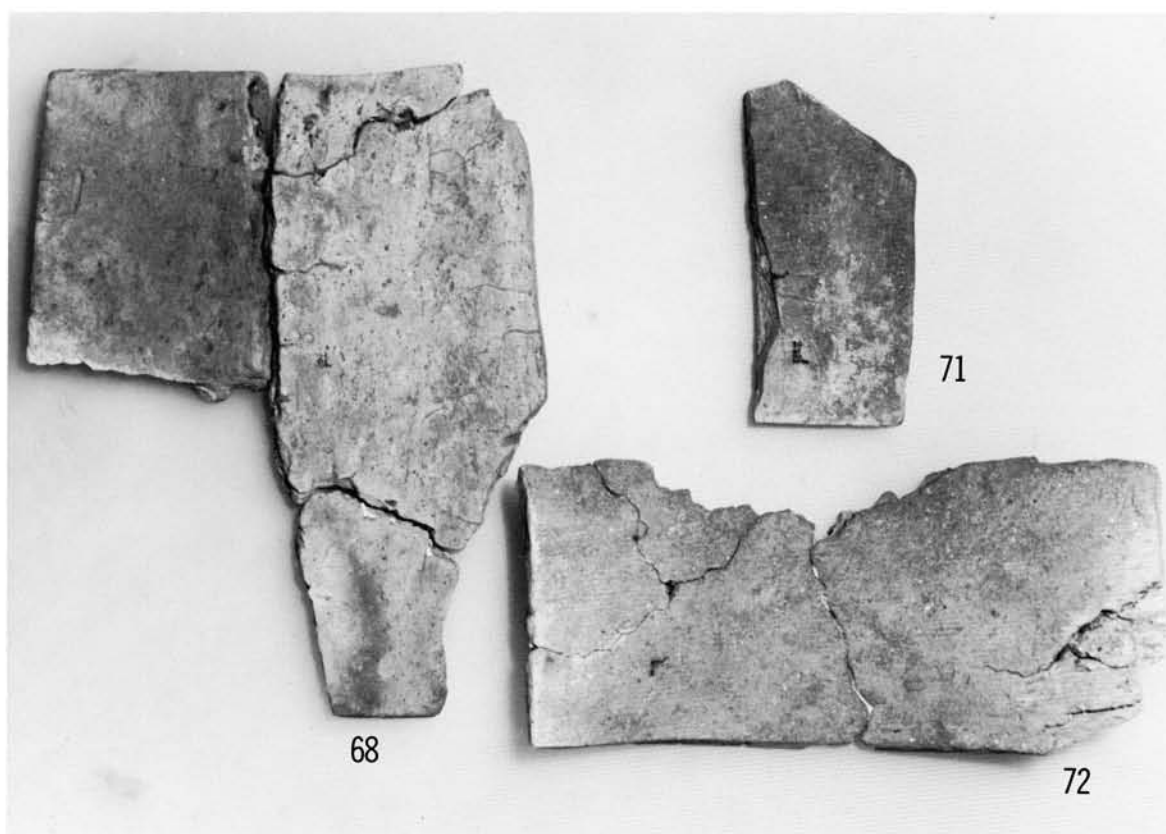




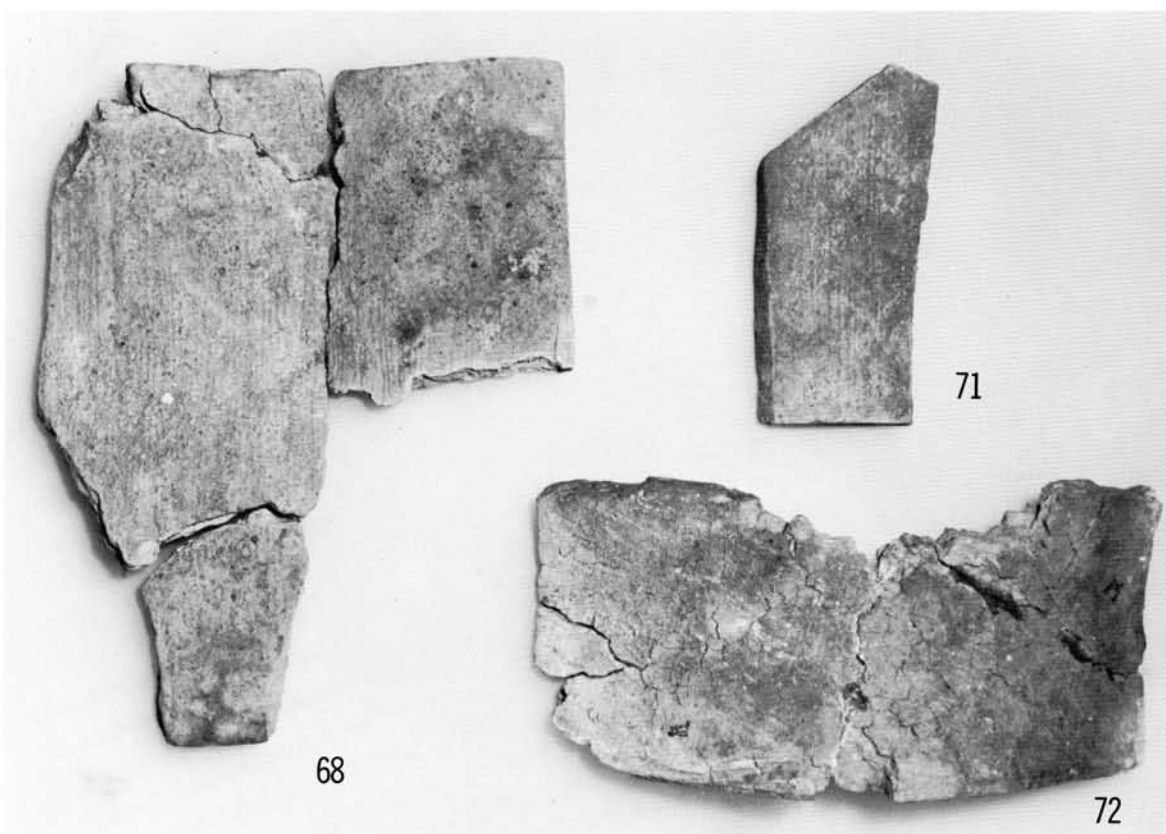
出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物（凹面）（1：4）



出土遺物（凸面）（1：4）



調査前全景（東から）



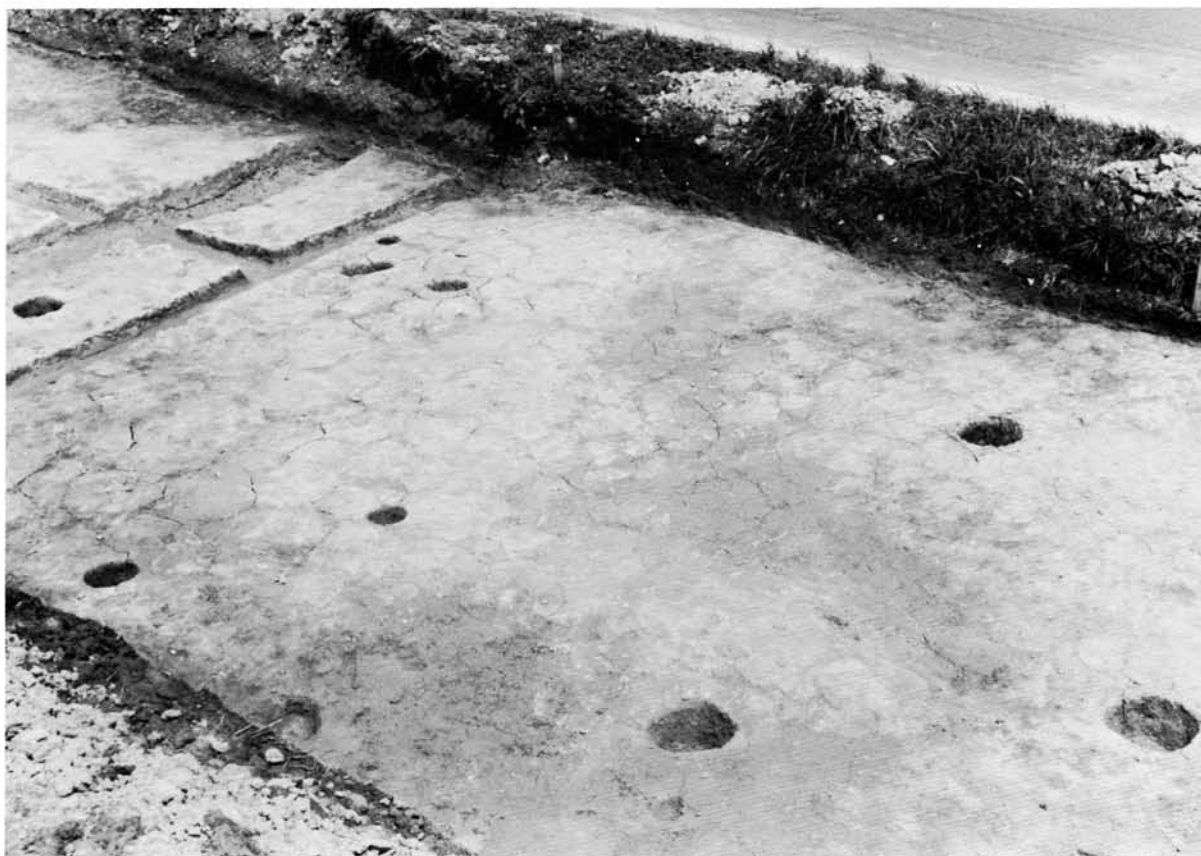
調査風景



調査後全景（東から）



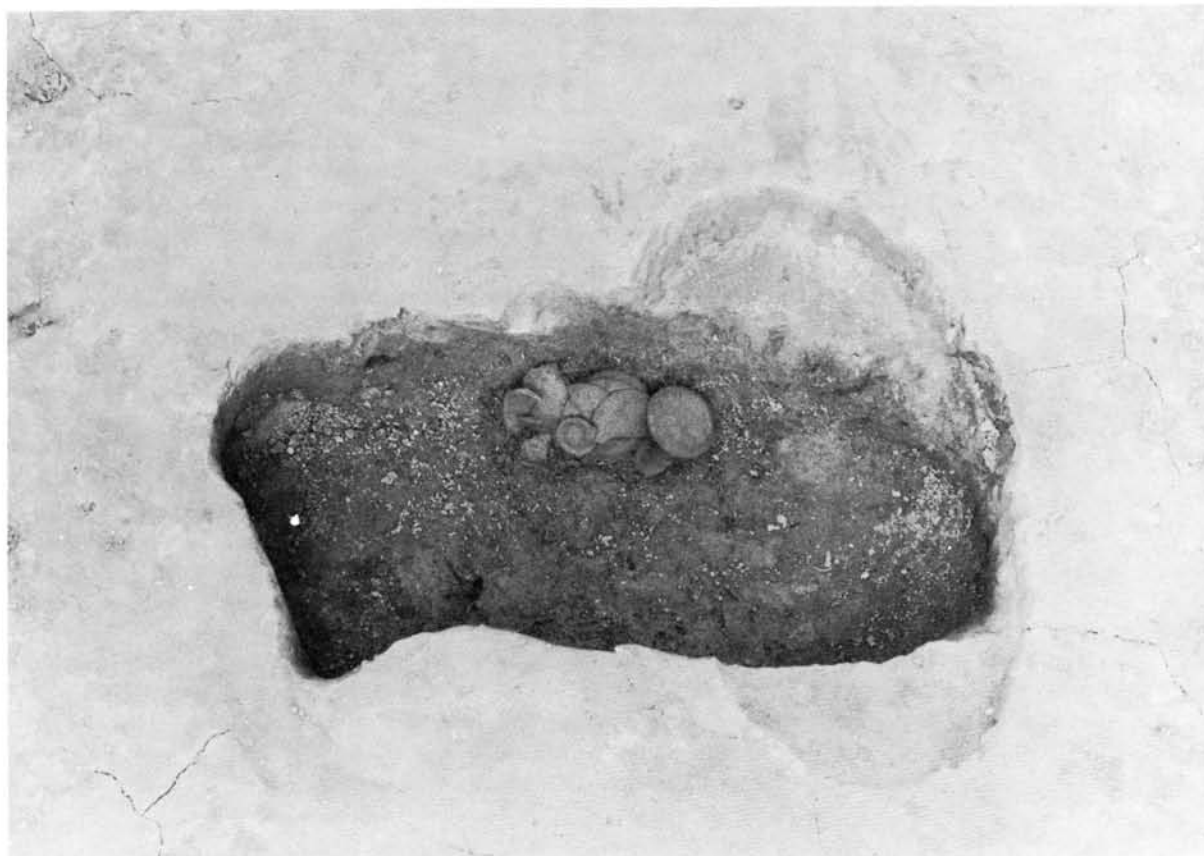
調査後近景（西から）



SB 8 (南東から)



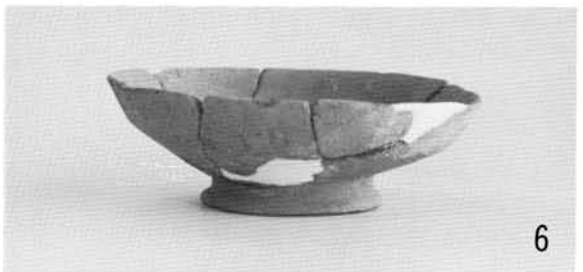
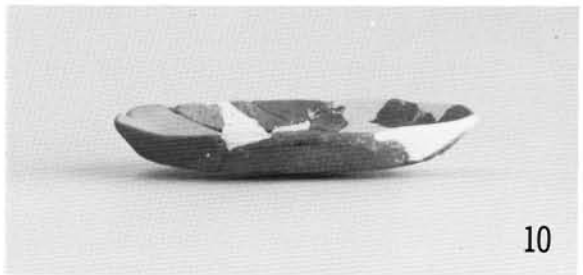
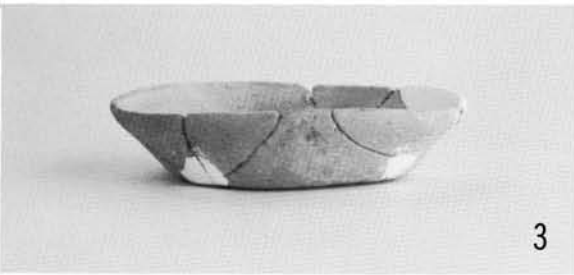
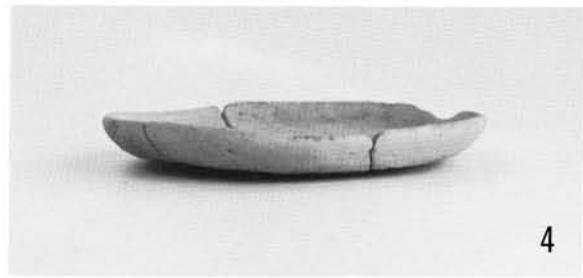
SB11 (南東から)



SK 9 土器出土状況（西から）



Pit B 土器出土状況（東から）





近景（北から）



A トレンチ東壁（南から）



D トレンチ北壁（南東から）



遺跡遠景（南西から）



調査区全景（南西から）



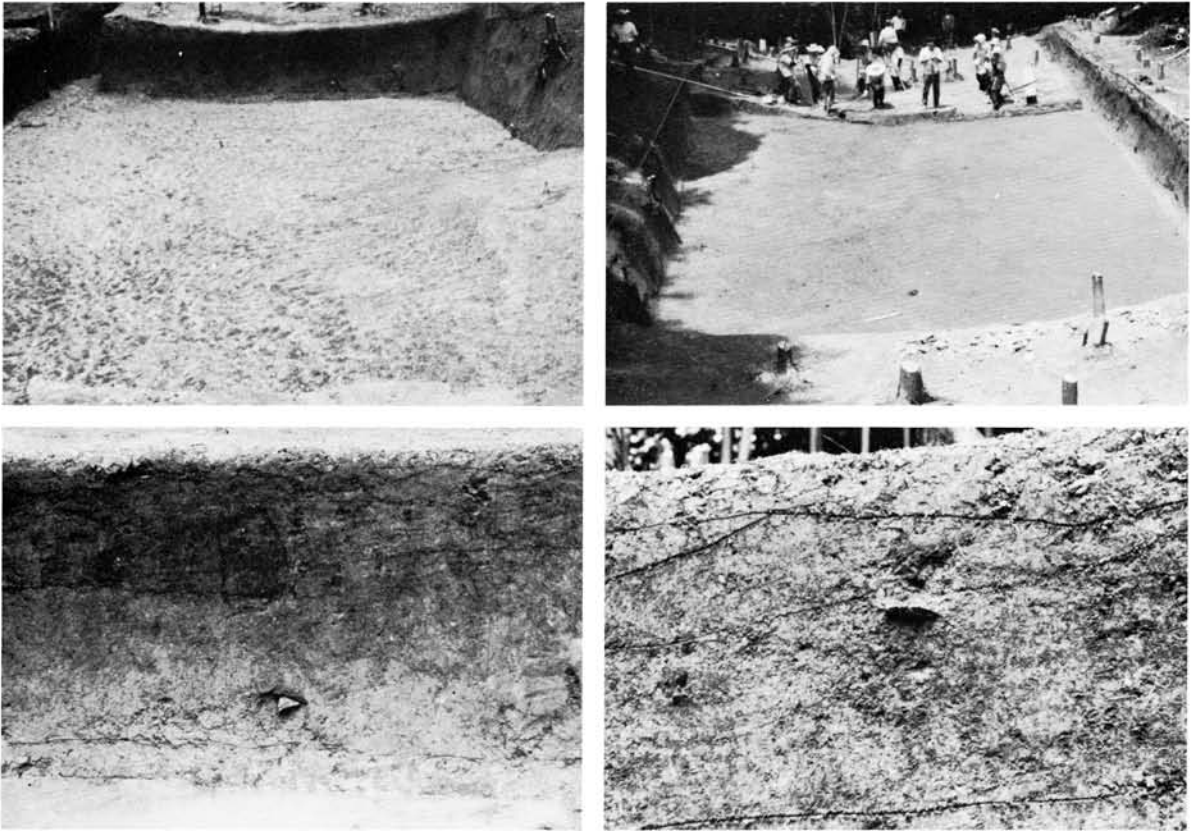
調査風景（北から）



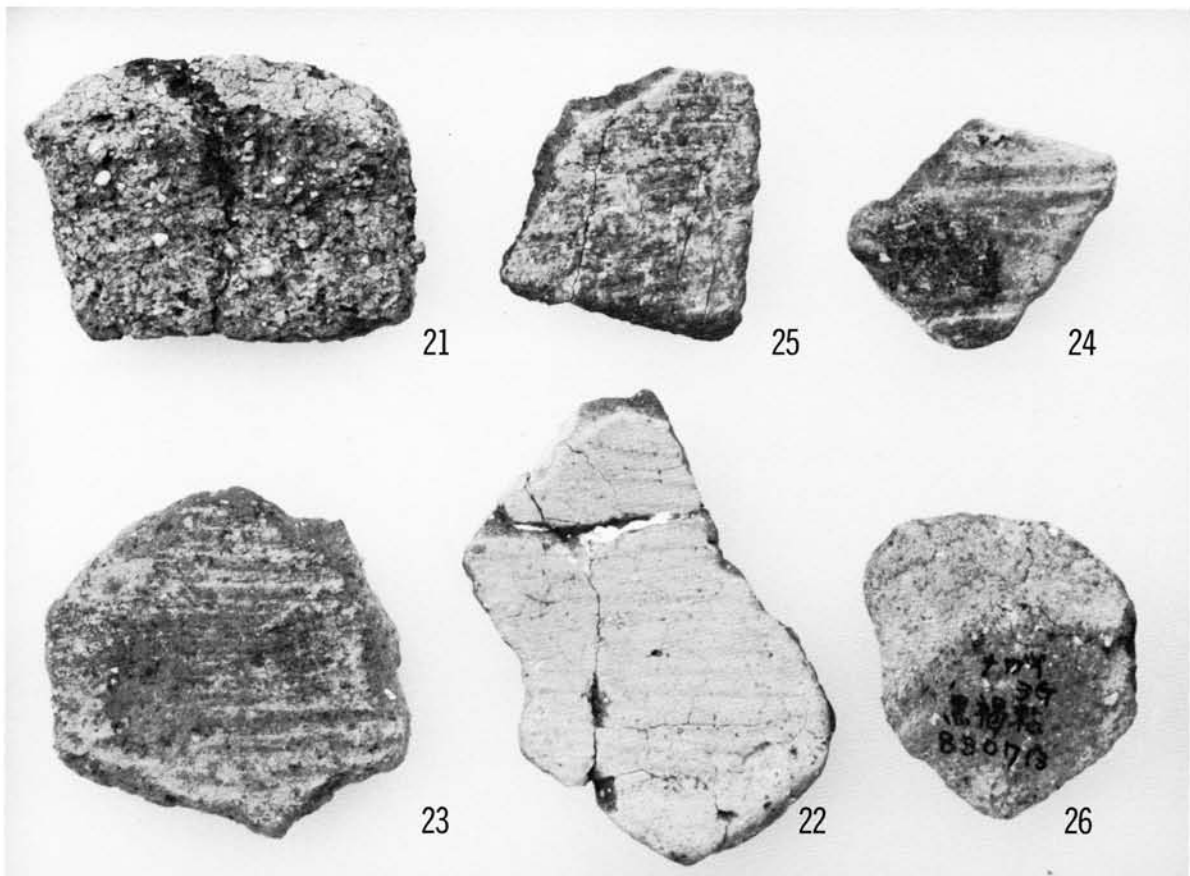
土層断面（東から）



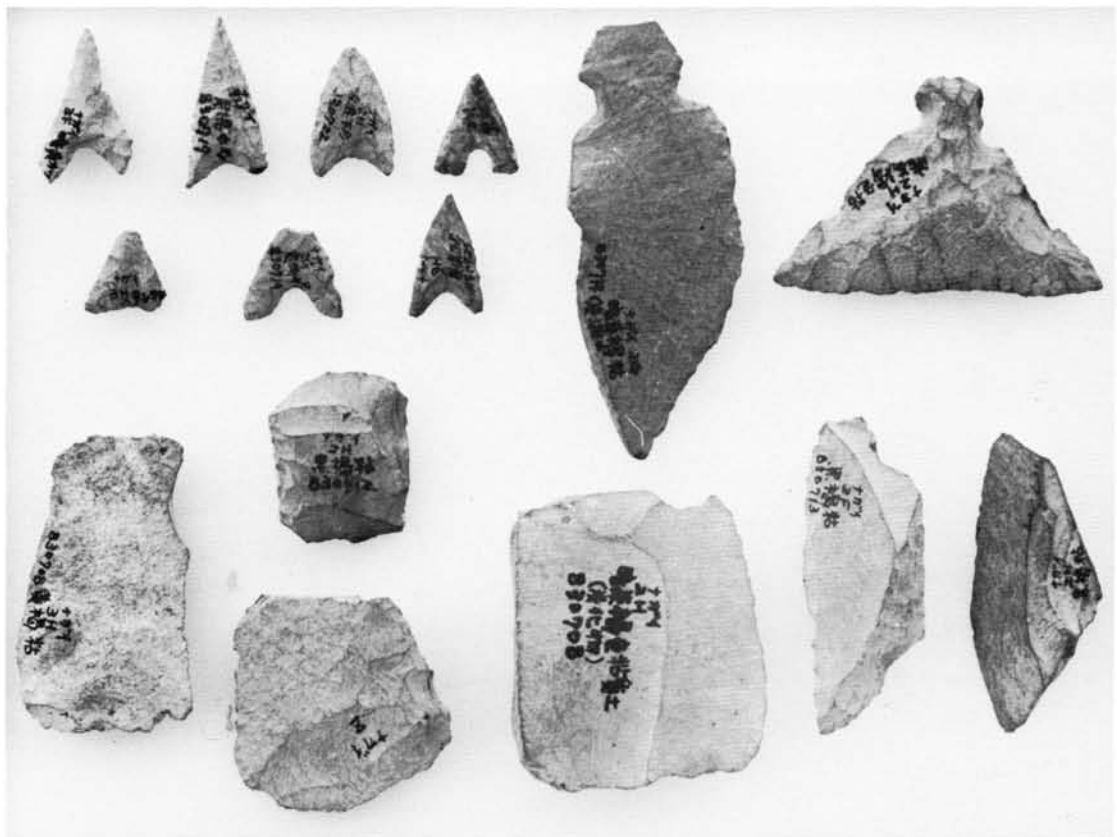
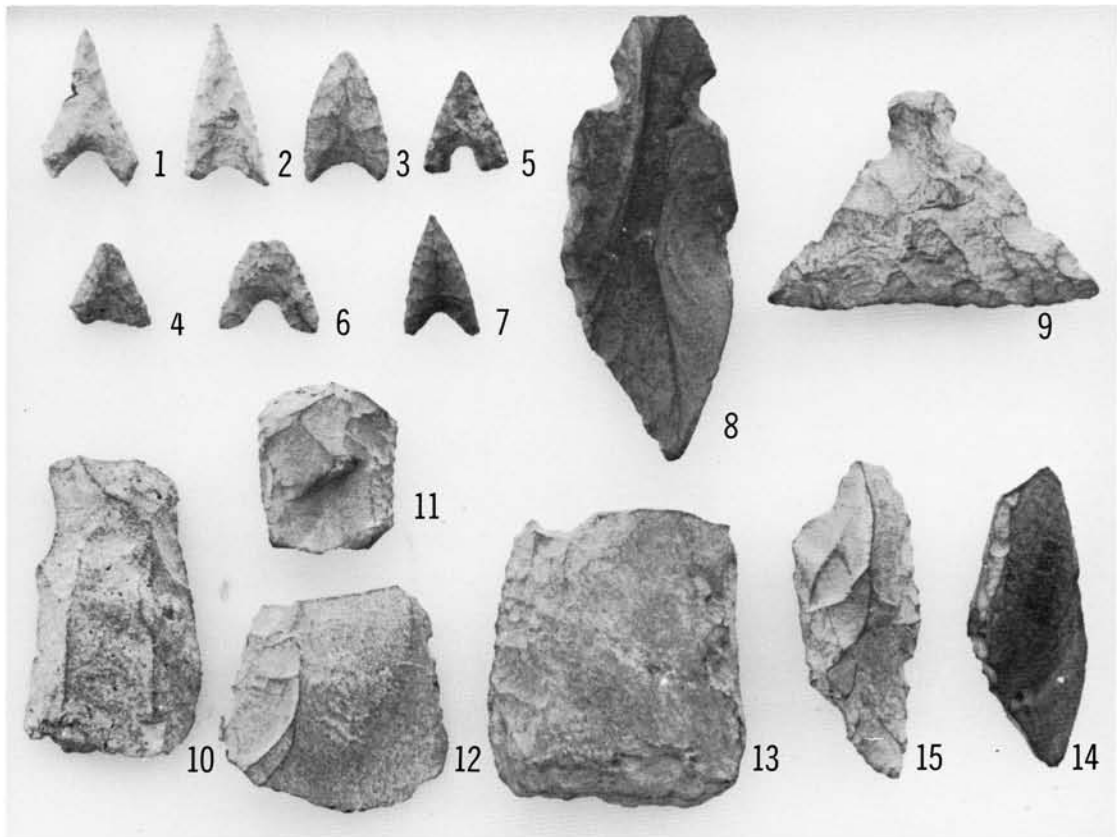
上3段 永井氏城跡南外堤
最下段 中出第12号墳



上段 鞍部全景（西から）、下段 鞍部東壁



鞍部出土土器



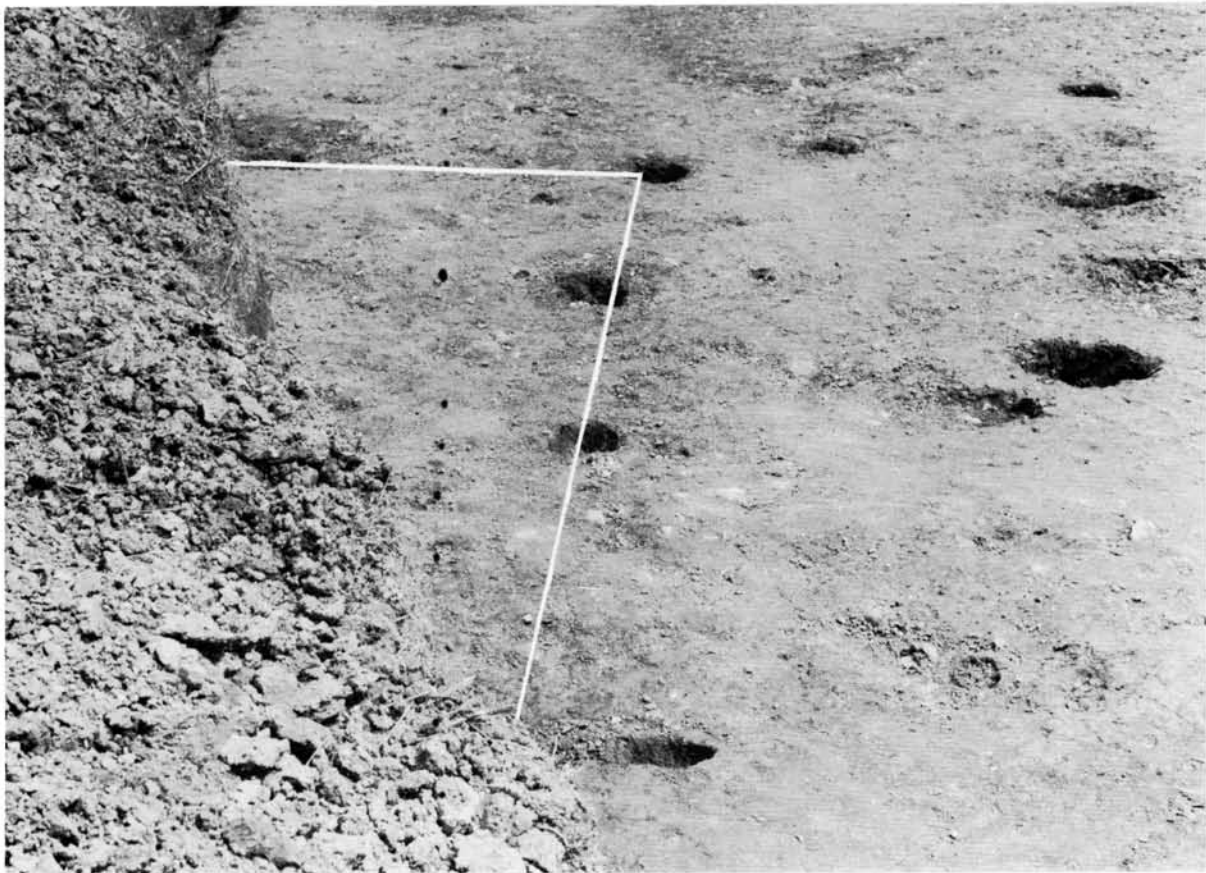
鞍部出土石器



遺跡遠景（北から）



発掘区全景（東から）



SB 1 (西から)



SK 3 (南から)



航空写真



調査前風景（A区南側からB区を望む）



SB2・SK3 (南から)



SE4 (西から)



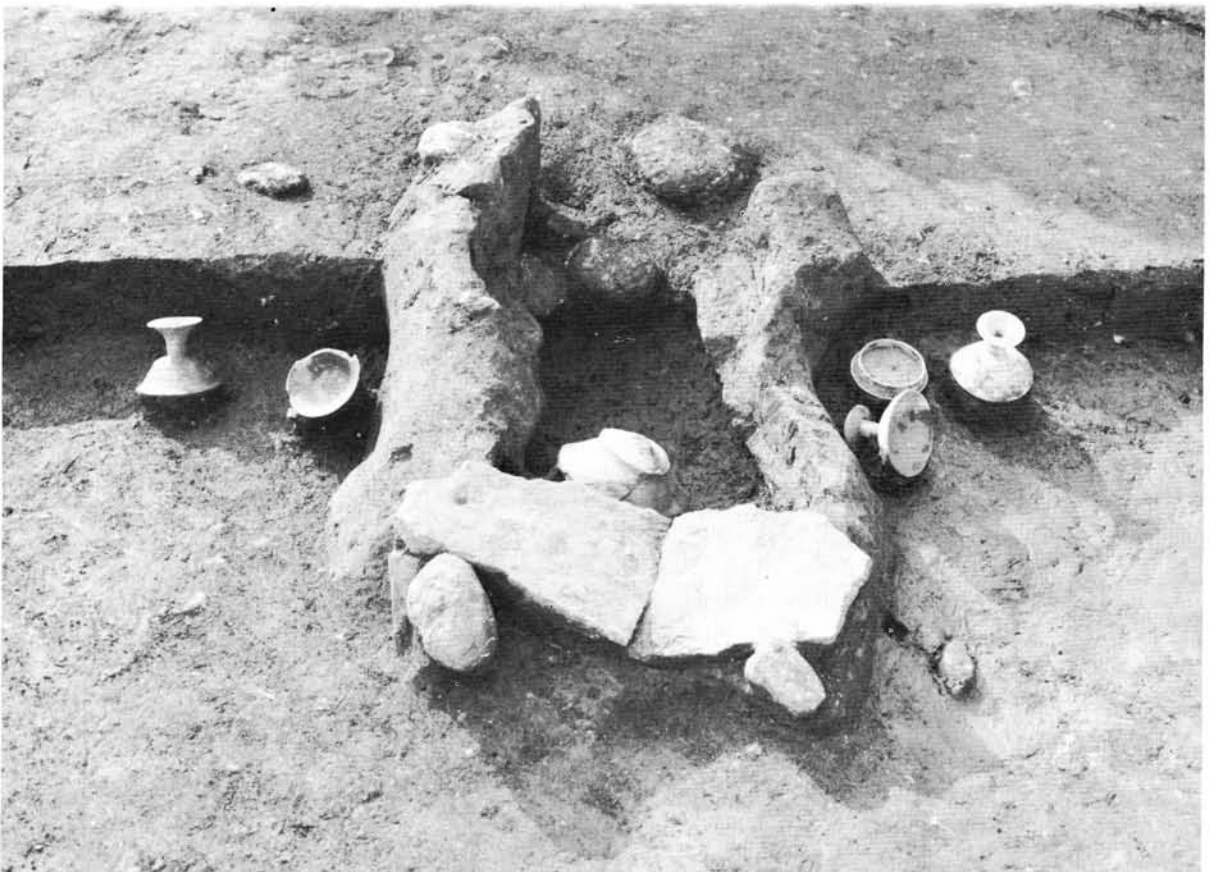
SK5・SX6 (西から)



DW区全景 (東から)



SB12 (南から)



SB12 カマド (南から)



SB14 (南から)



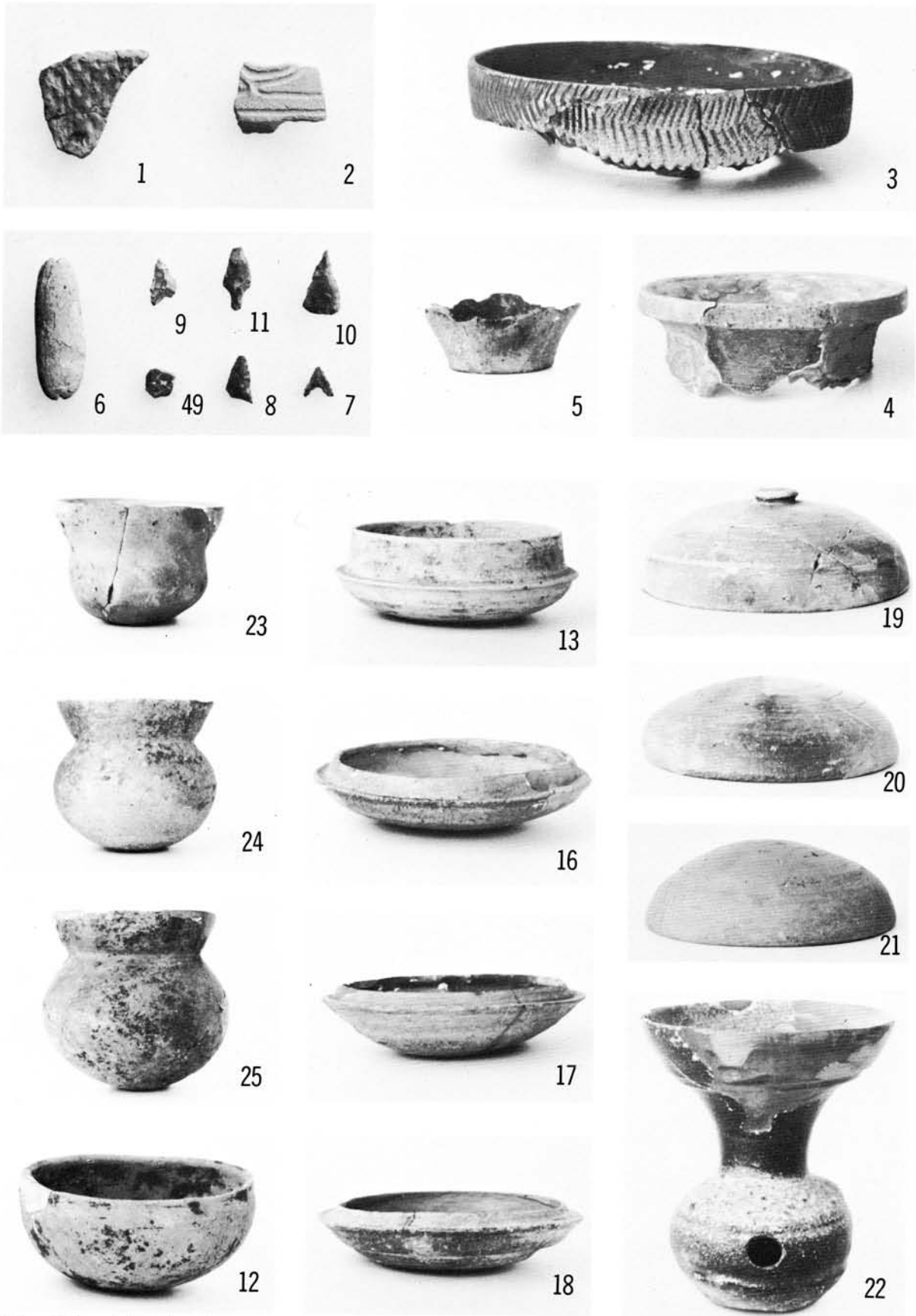
SX15 (北から)



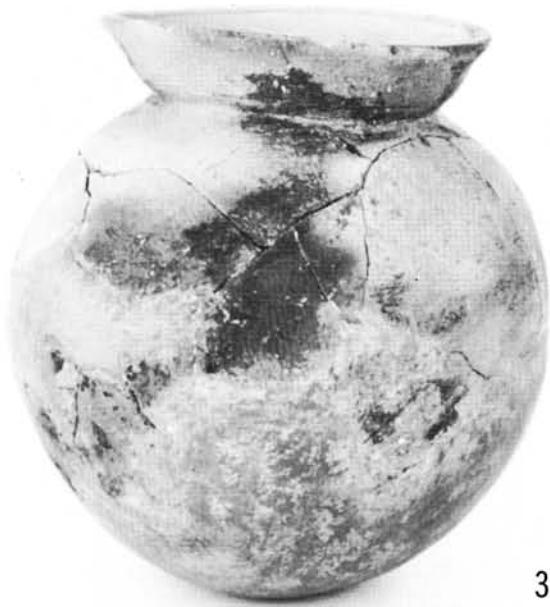
SB16 (北から)



SB19 カマド (南から)



縄文・弥生・古墳時代の遺物（1：3）



31



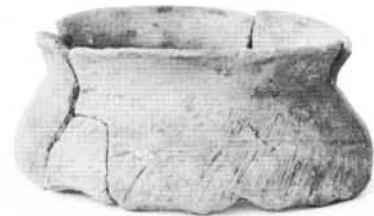
32



46



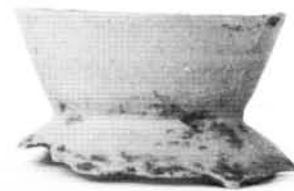
33



45



65



47



48



27



35



28



36



29



37



30



39





遺跡遠景（東南から）



遺跡近景（南から）



遺跡 近景 (北西から)



遺跡 近景 (北西から)



SD 5 (西から)



SD 6 断面 (西から)



SB12・13、SD14 (東から)



SB19 (東から)



SB36、SD35 (西から)



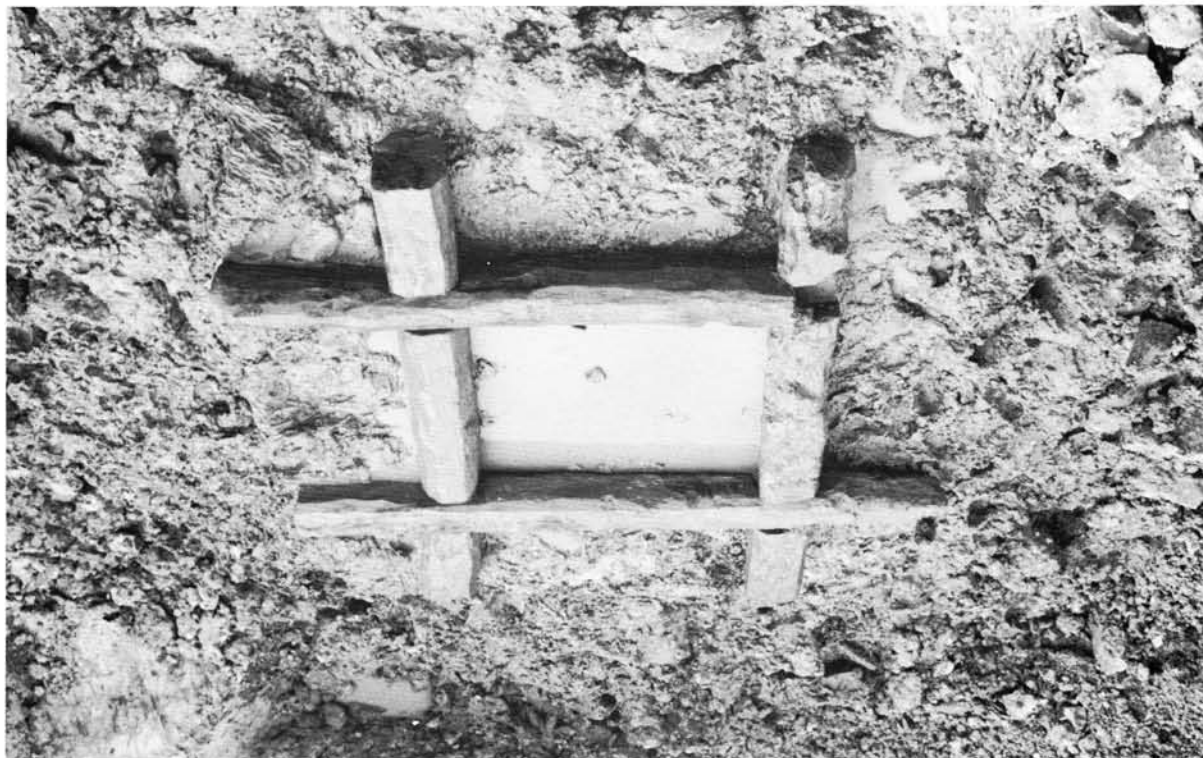
SB41、SD37・39・40 (西から)



SB32・SA33・SE31（北から）

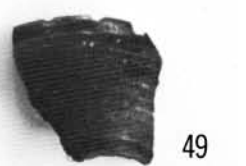
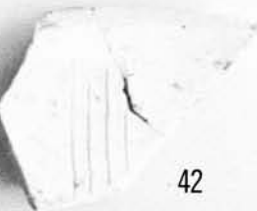


SE31（東から）



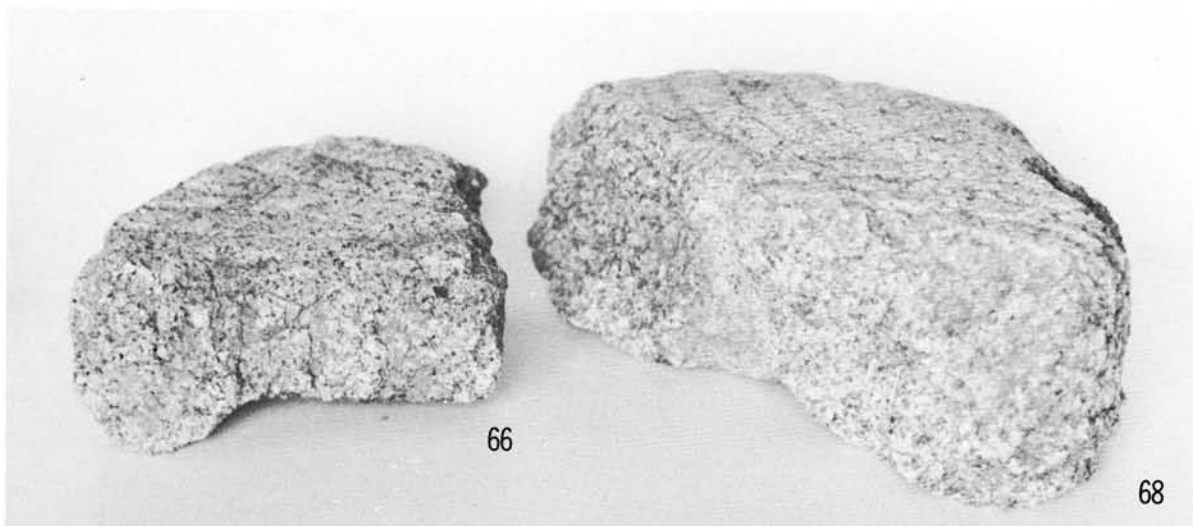
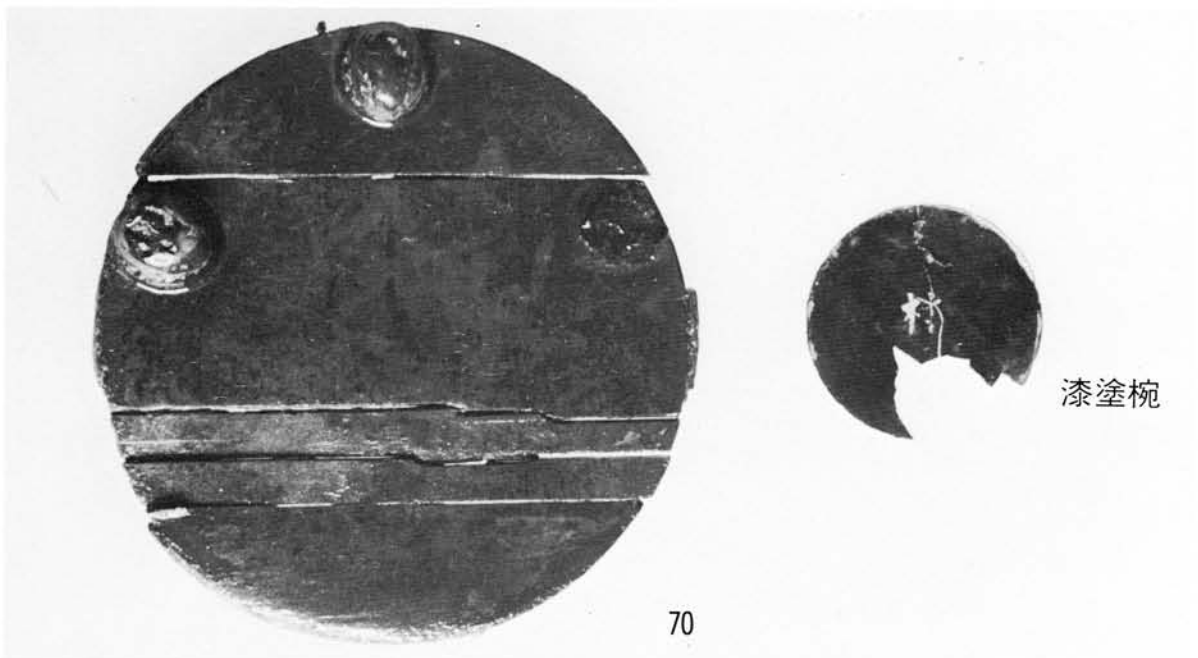
SE31 断面 (東から)

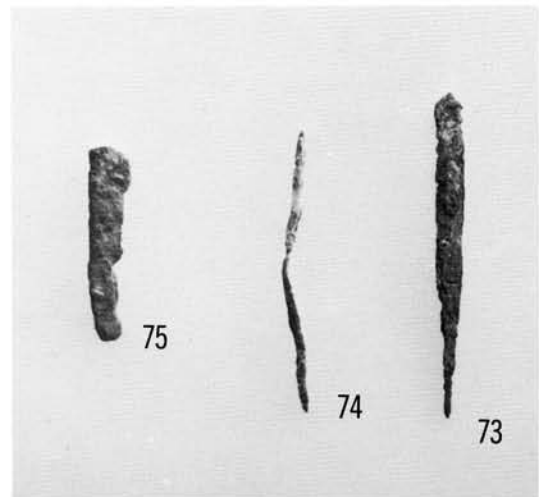




火鉢

播鉢





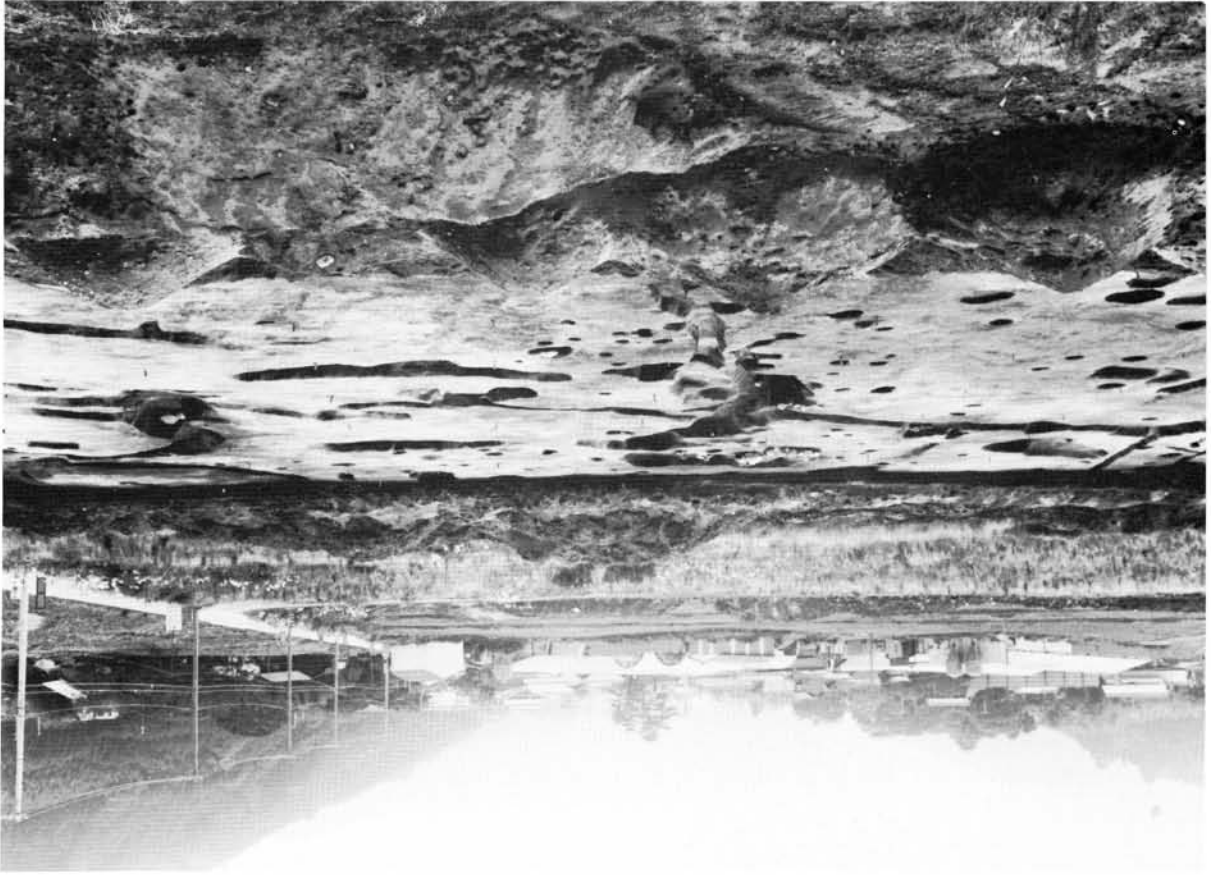


航空写真



調査前風景（西から）

A地区中央部 (東から)

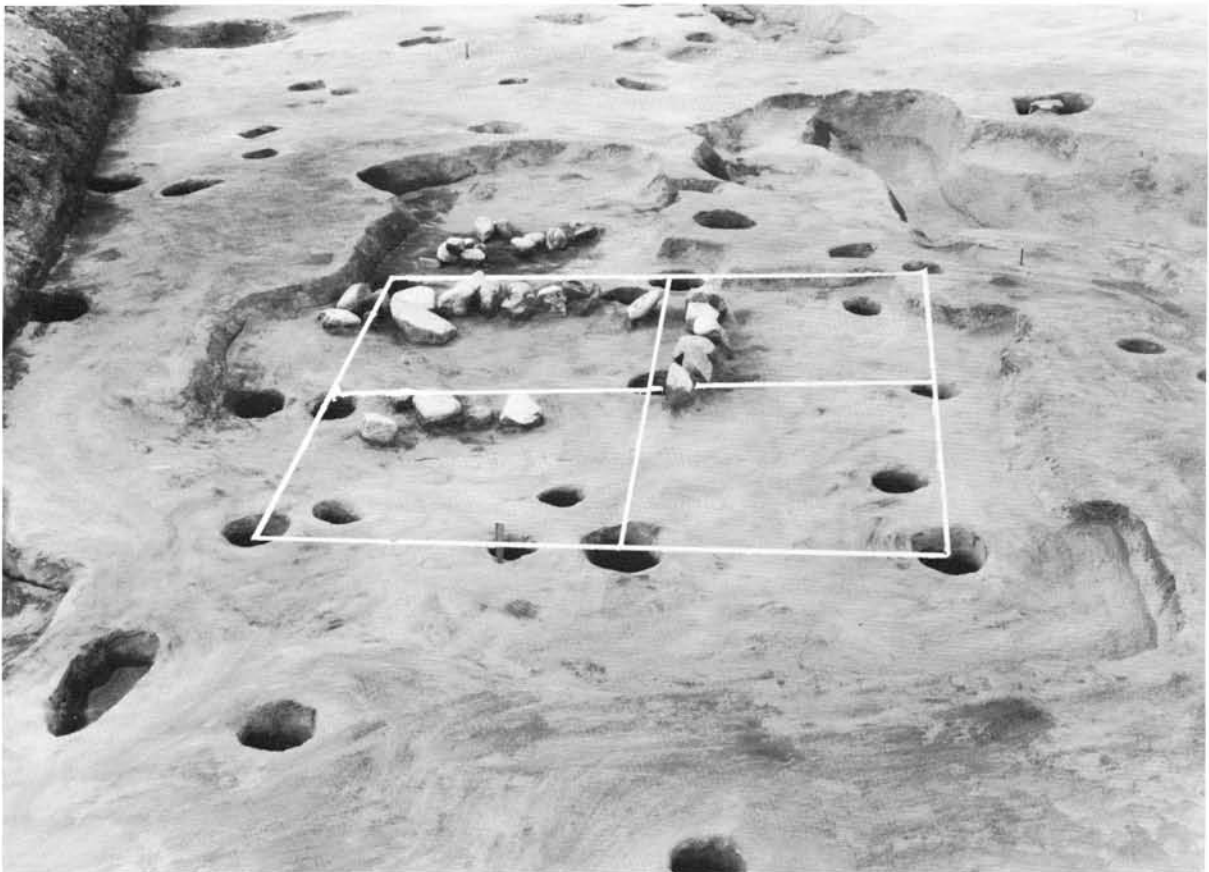


A地区全景 (南から)





SX1・5・8 (東から)

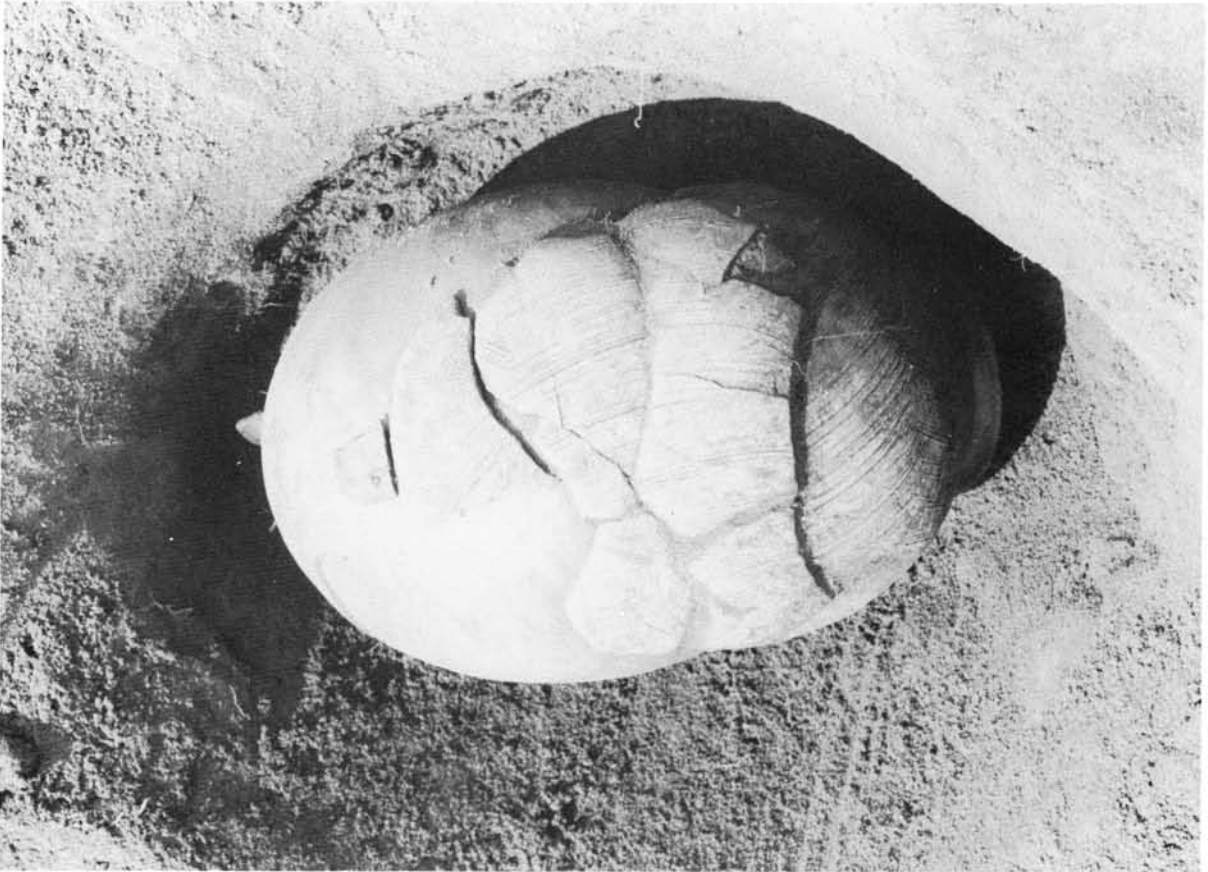


SB15 (南から)

磨製石劍出土狀況



土師器(甕)出土狀況





B地区全景（南から）



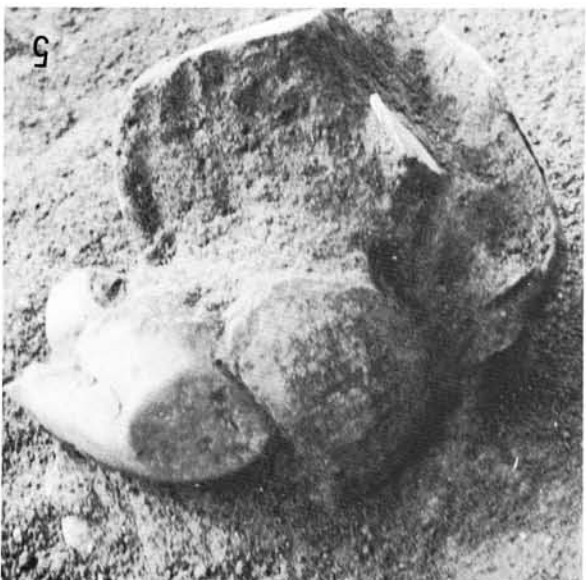
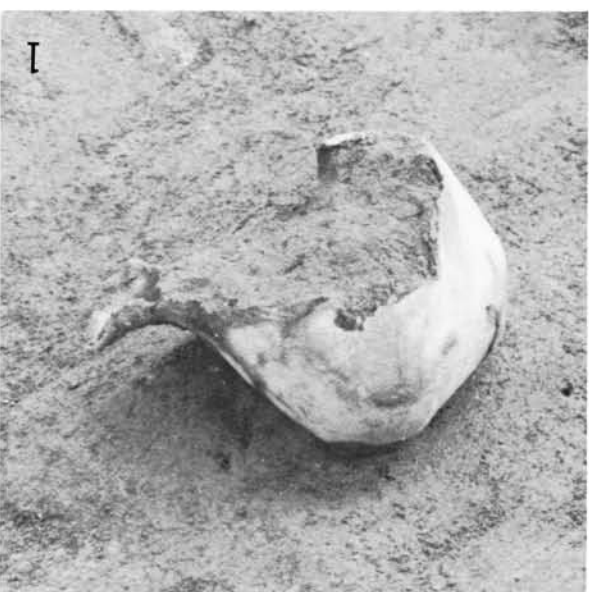
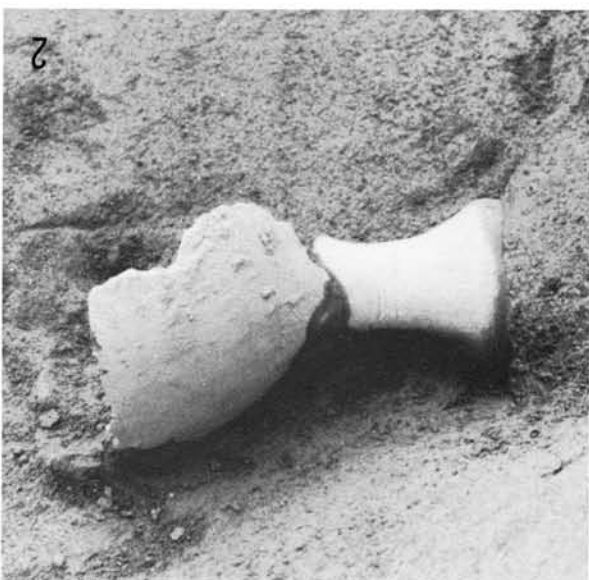
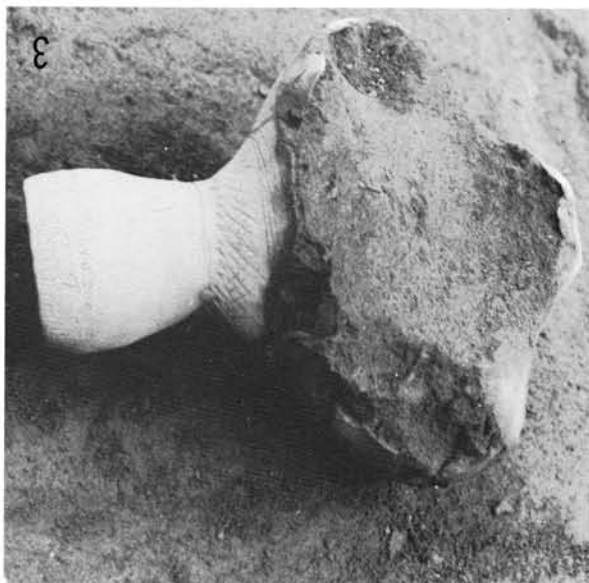
SX6（西から）



SX1 (東から)



SB2・3 (東から)





SB2 カマド (東から)



SB2 カマド (北から)



SB4 (北から)



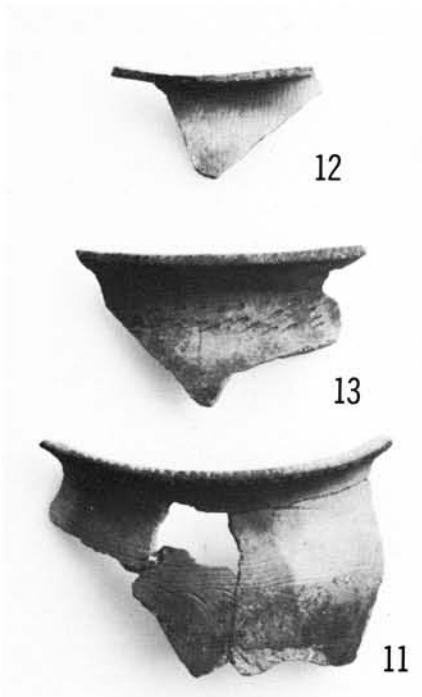
SX6 (北から)



1



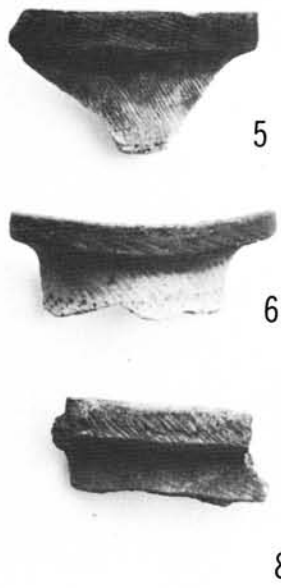
5



12

13

11



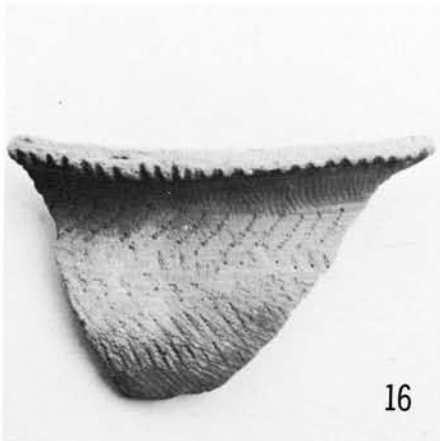
5

6

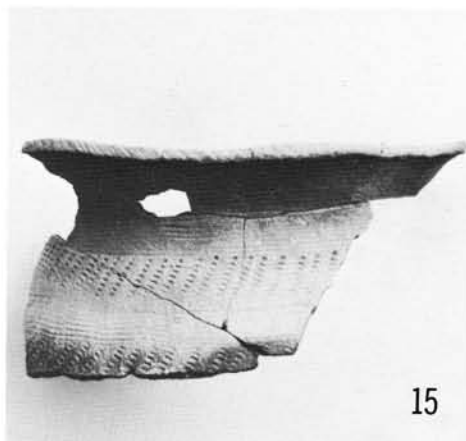
8



18



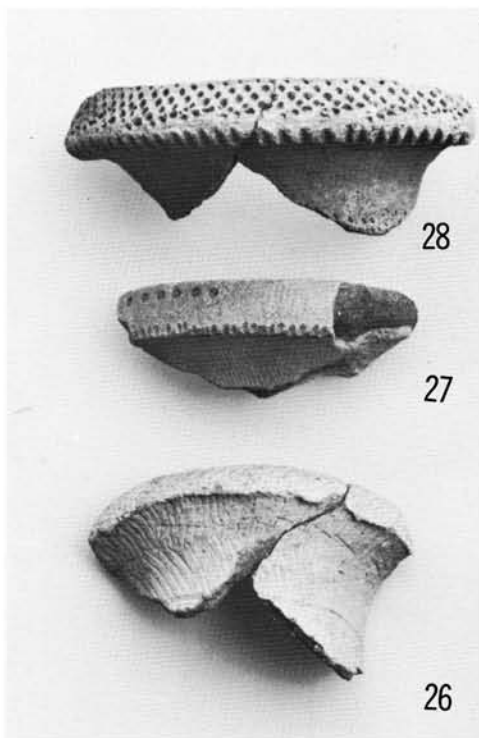
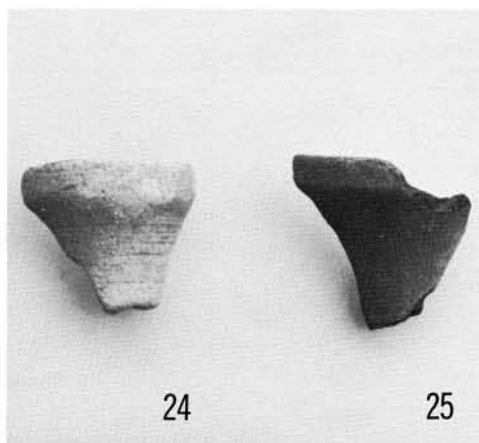
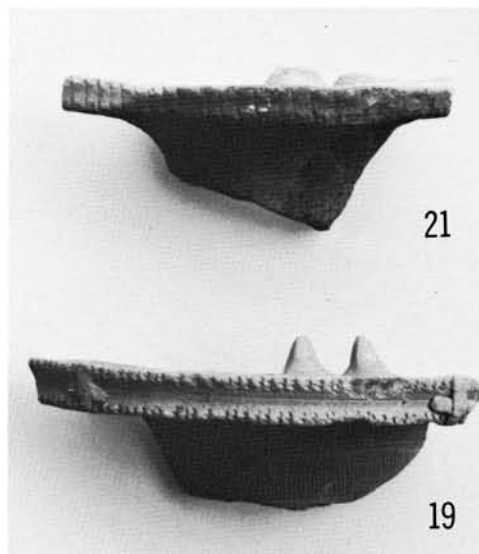
16

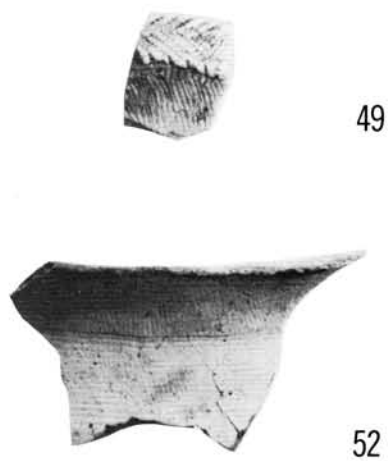
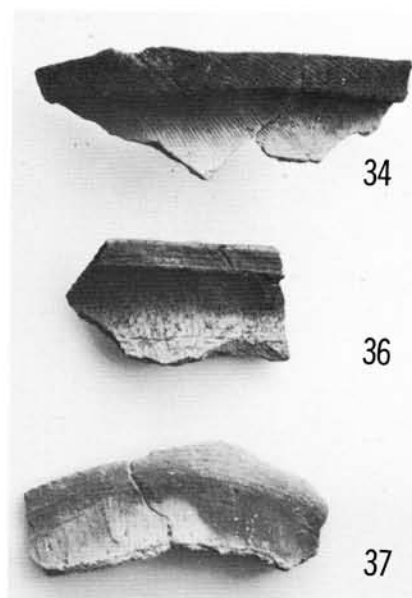
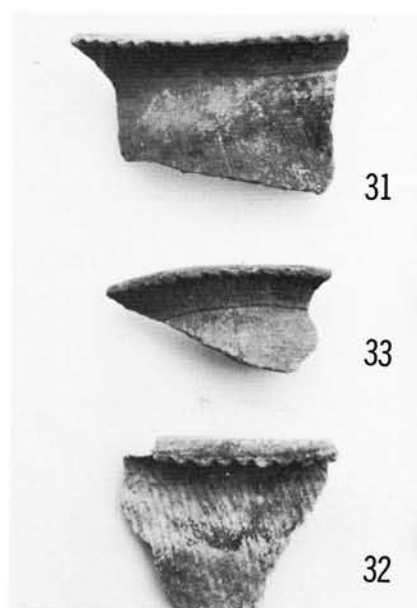


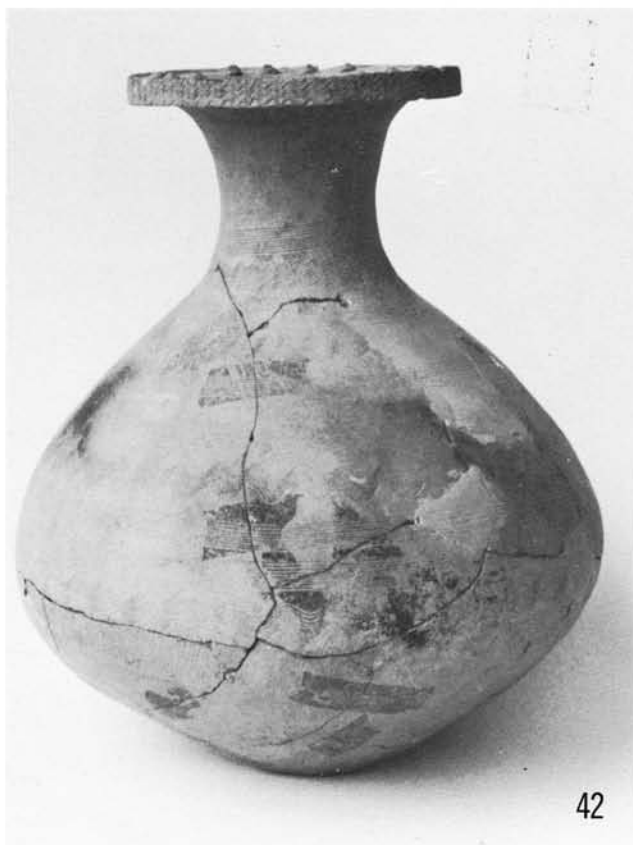
15

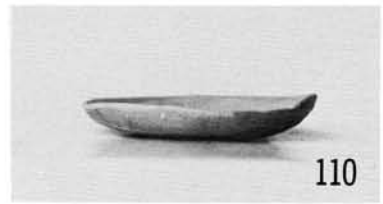


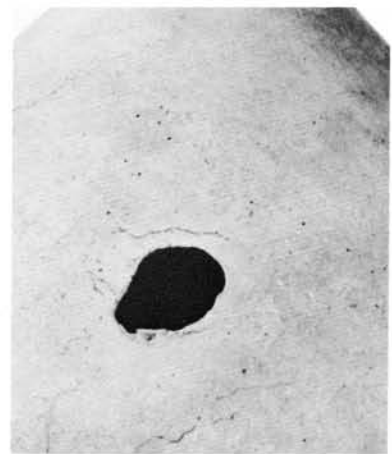
17



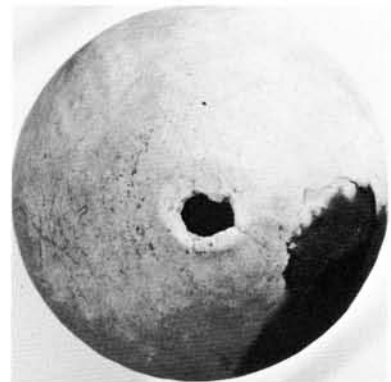




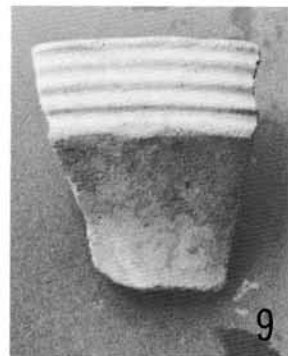




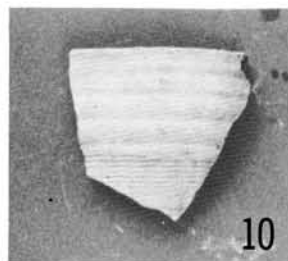
(1)穿孔部拡大



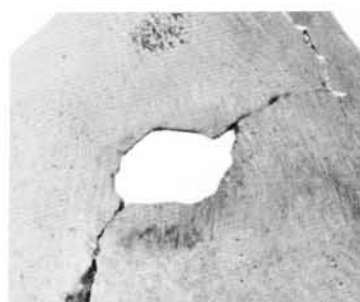
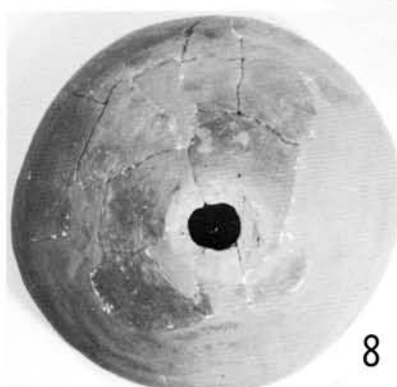
(1)底部の穿孔



9



10



出土遺物 (1 : 3)

(8)底部の穿孔

(6)穿孔部拡大



航空写真



遺跡遠景（東から）



SB 1・SK 3 (北から)



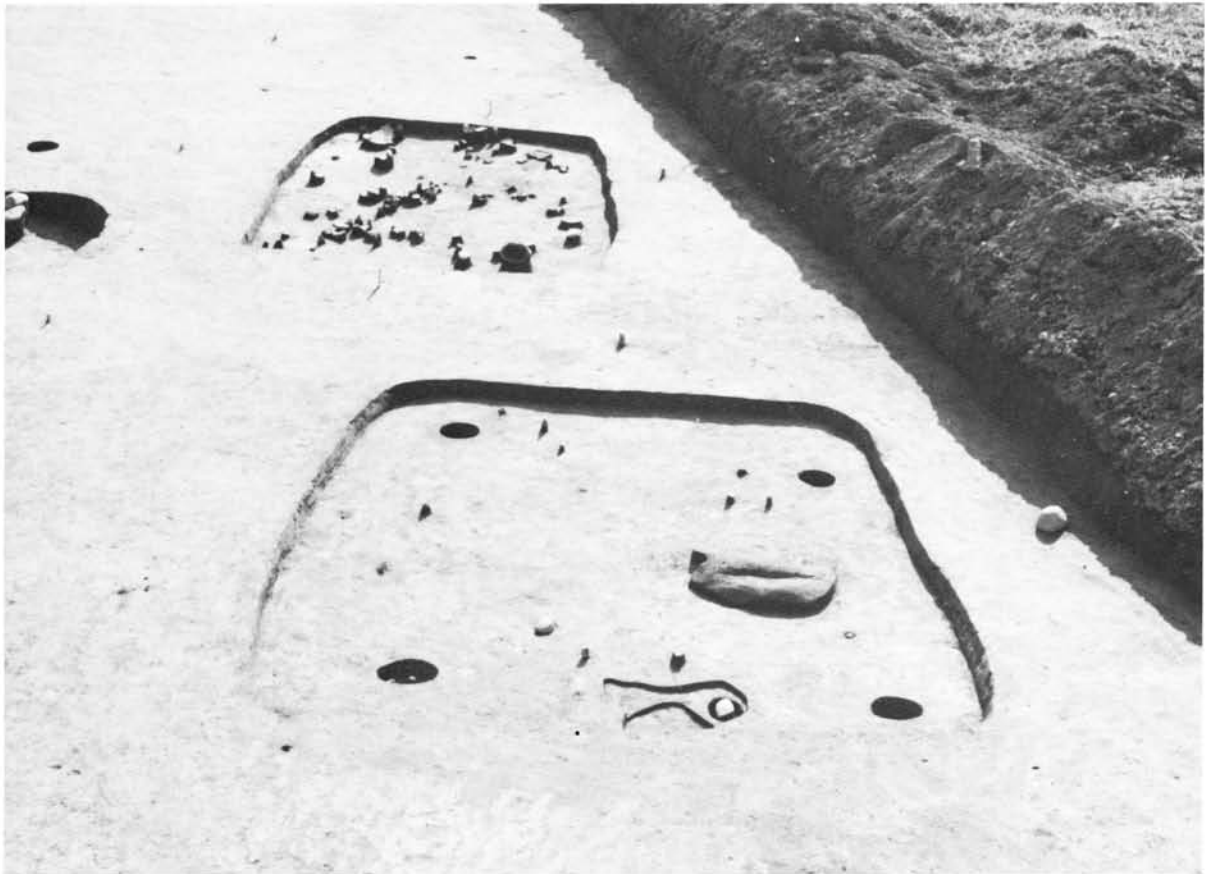
SK 3 (西から)



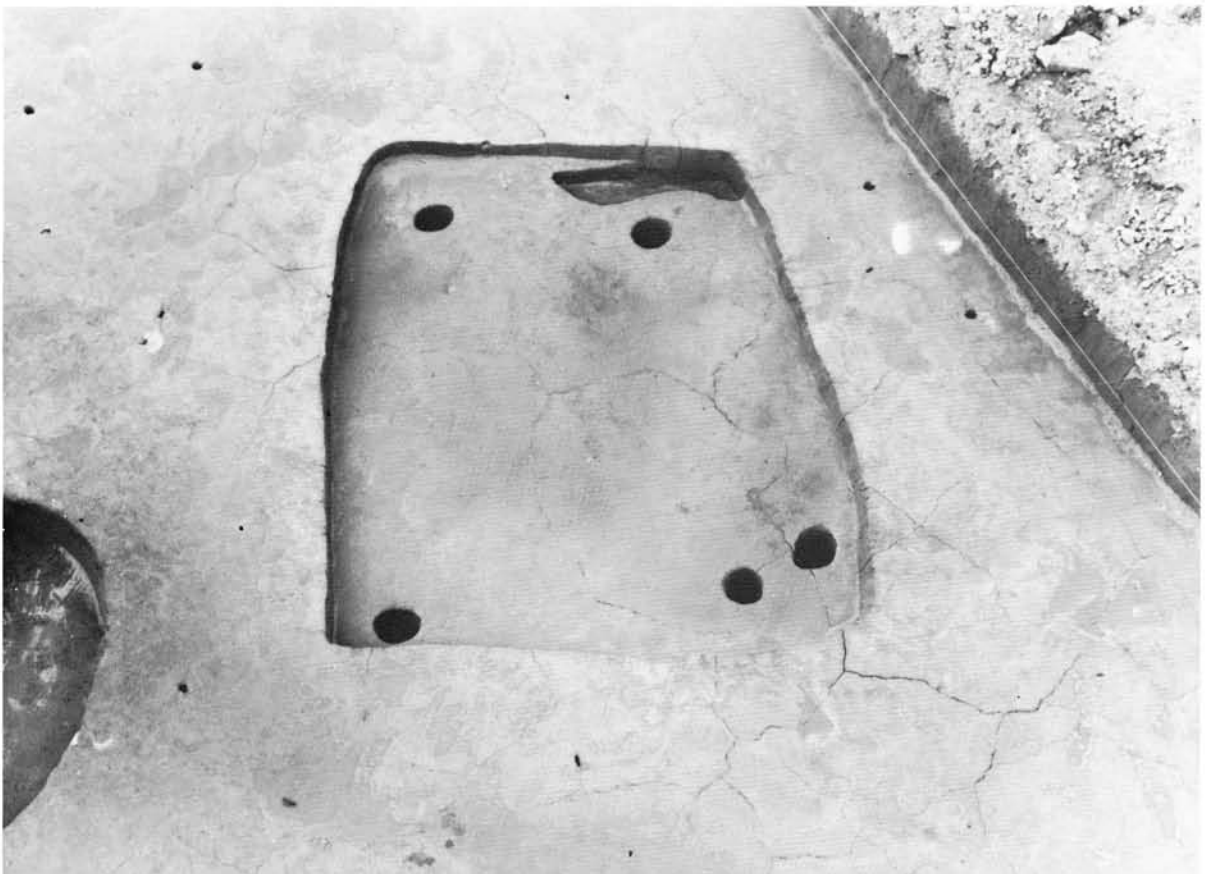
航空写真



調査前近景（北東から）



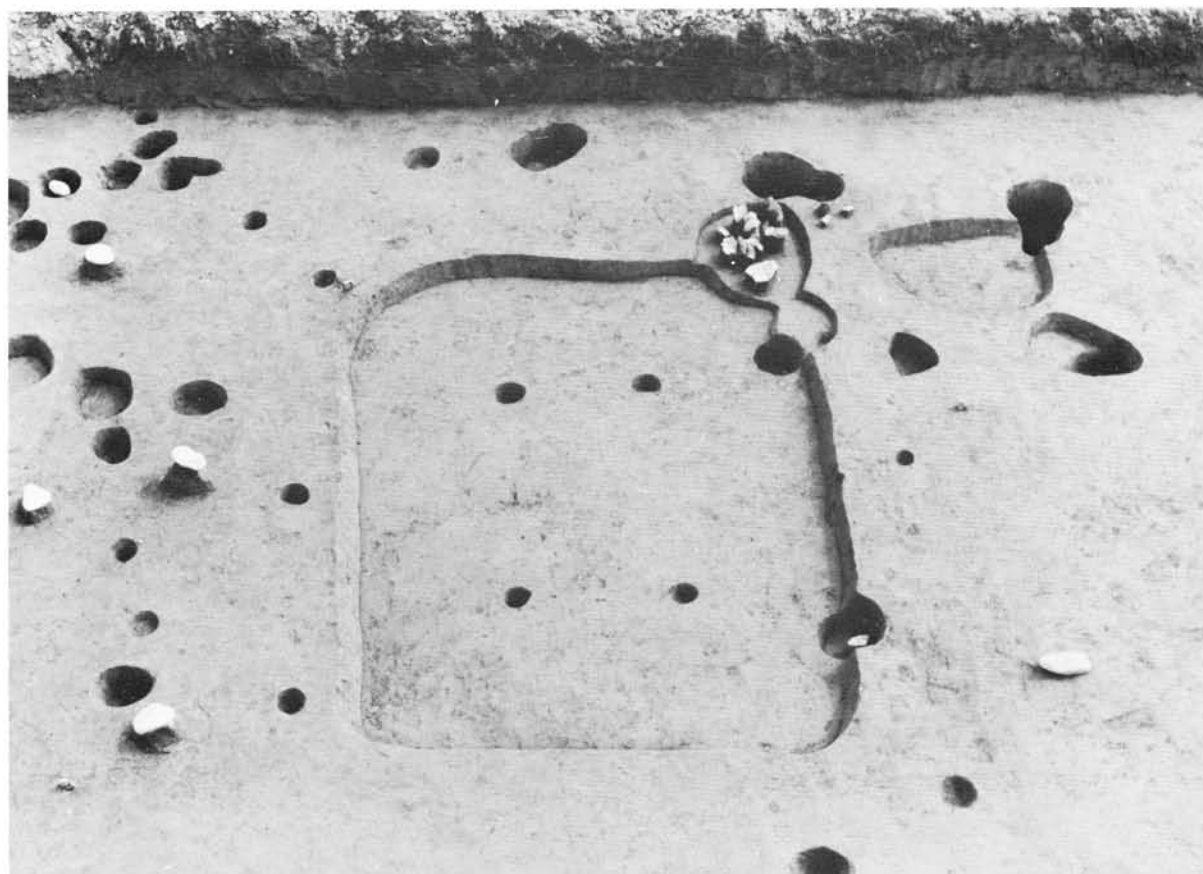
SB74・75 (北東から)



SB75 (北東から)

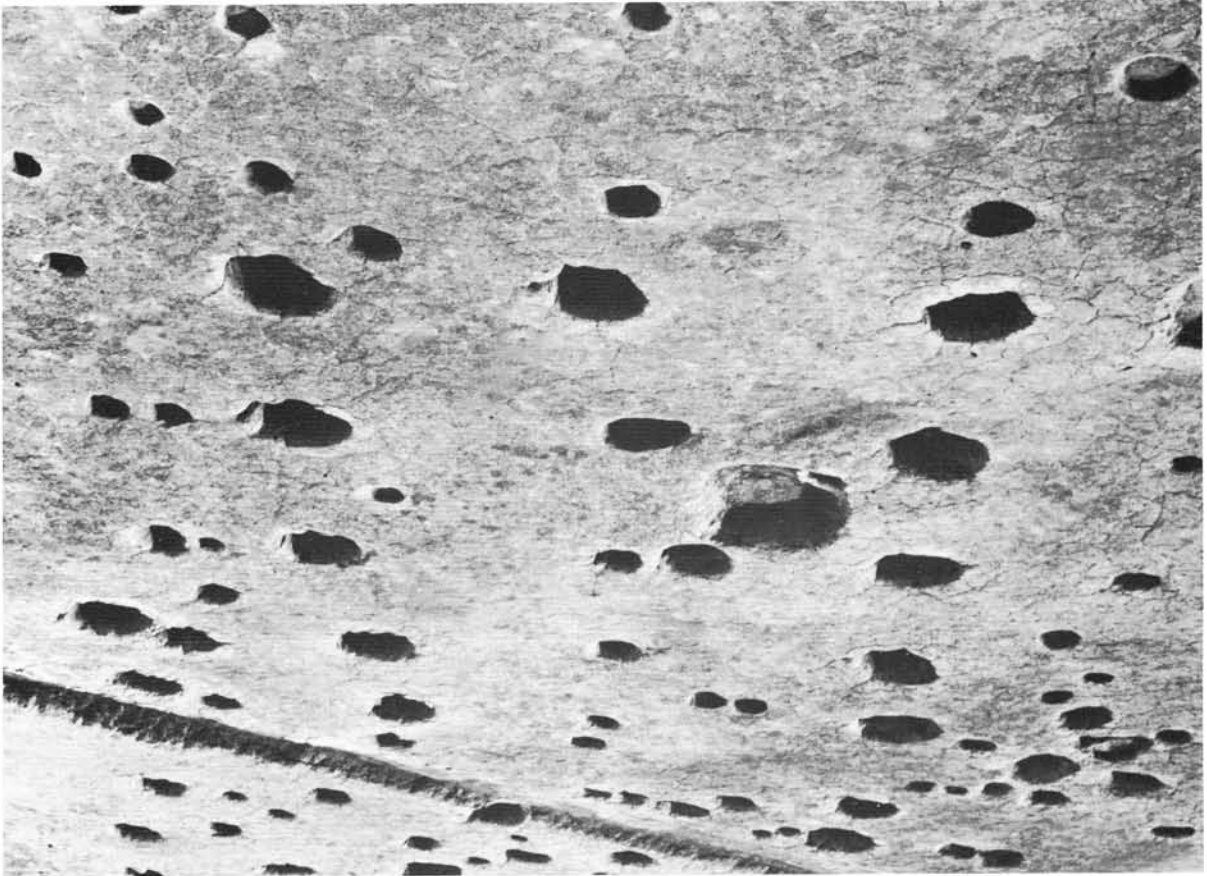


SB24 (西から)

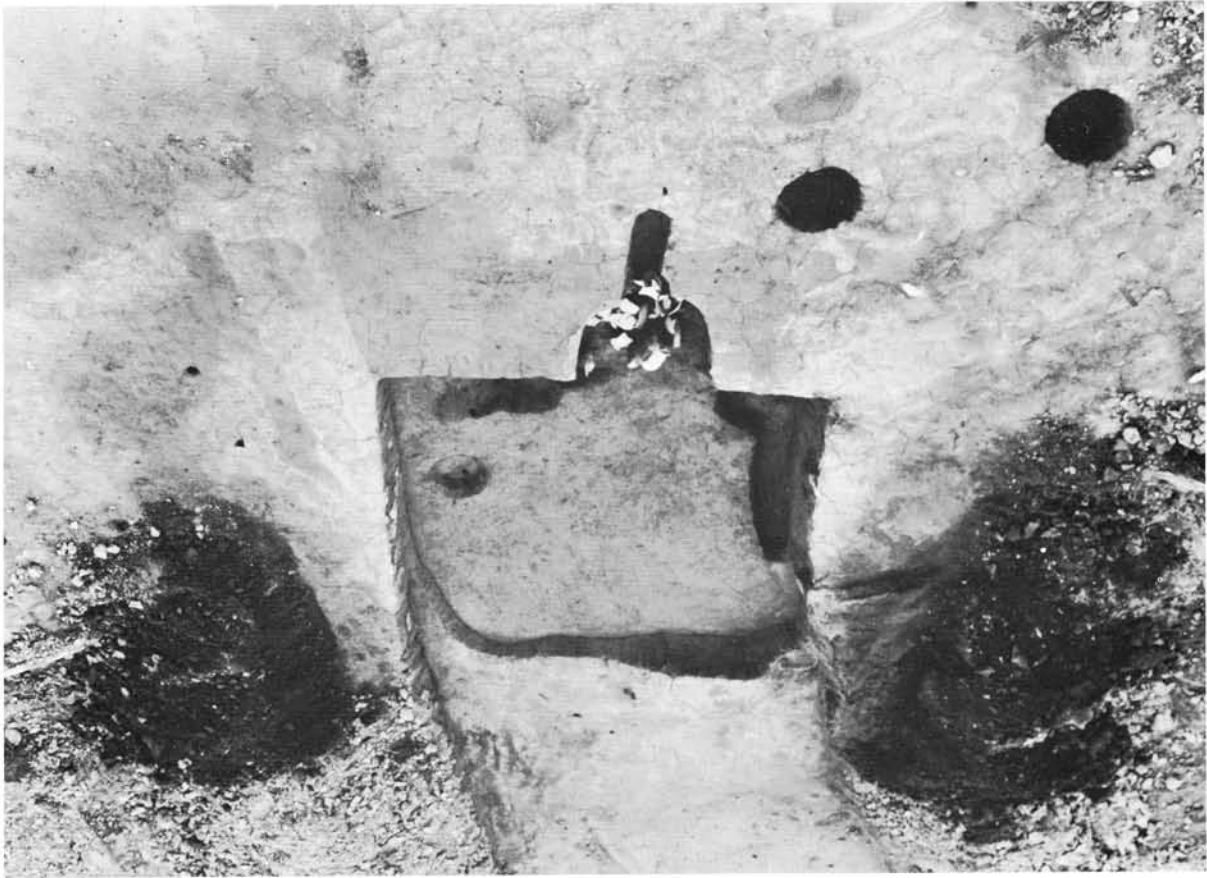


SB71 (西から)

SB33 (北から)



SB62 (東から)

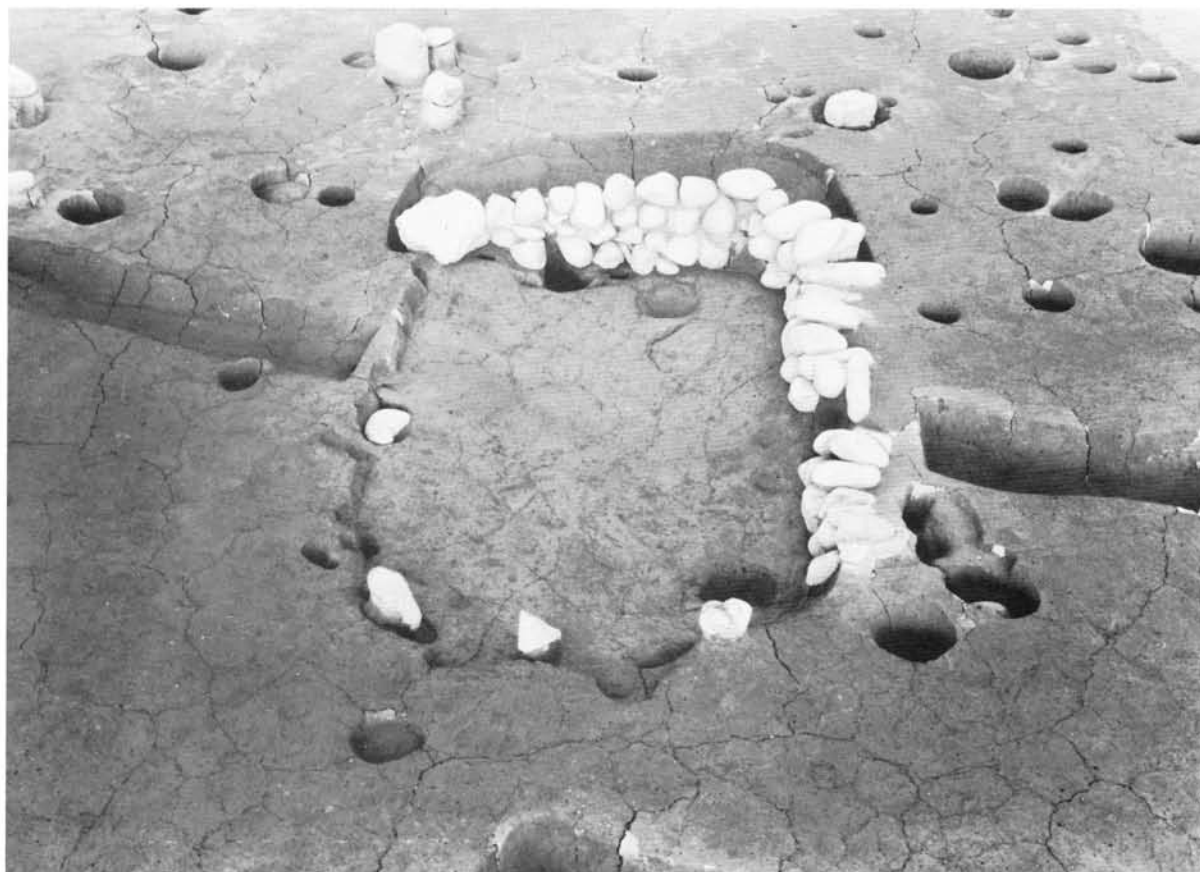


PL10-4

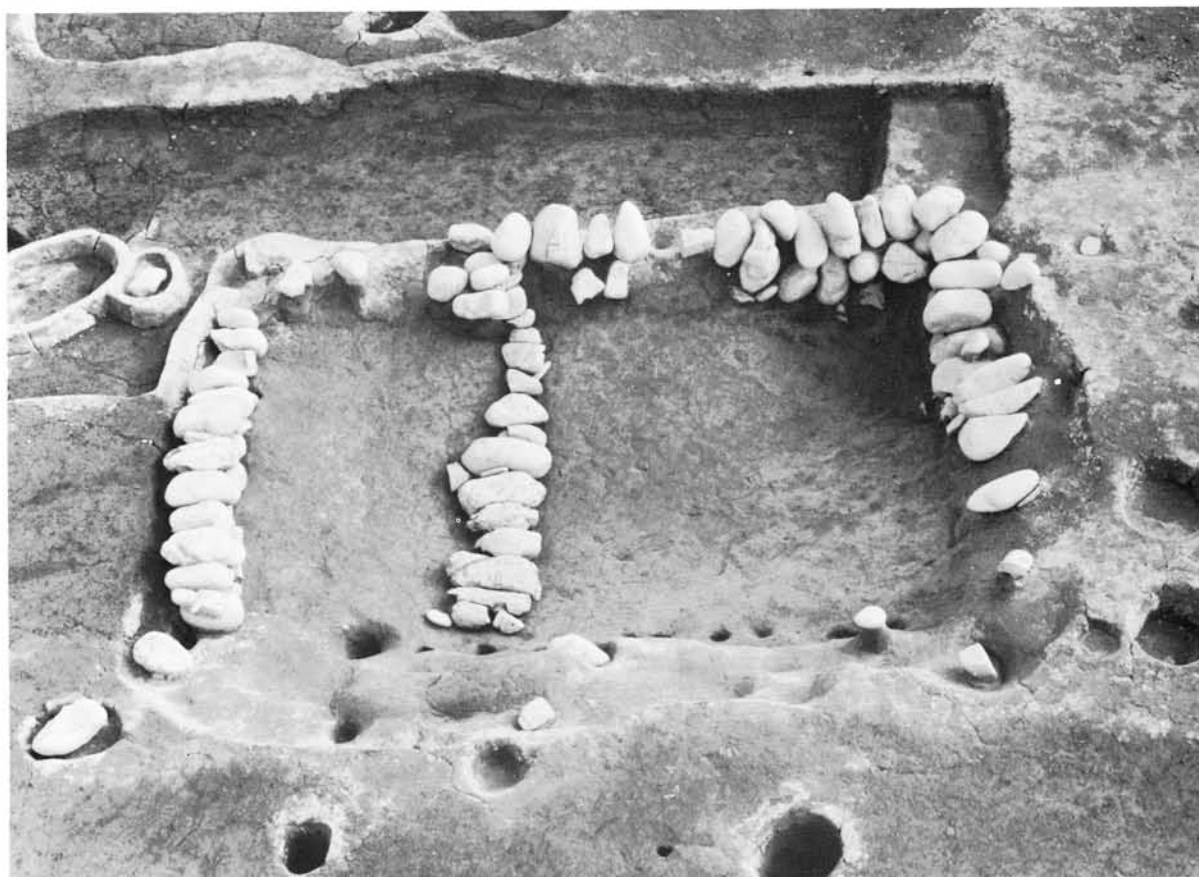
中ノ垣外遺跡



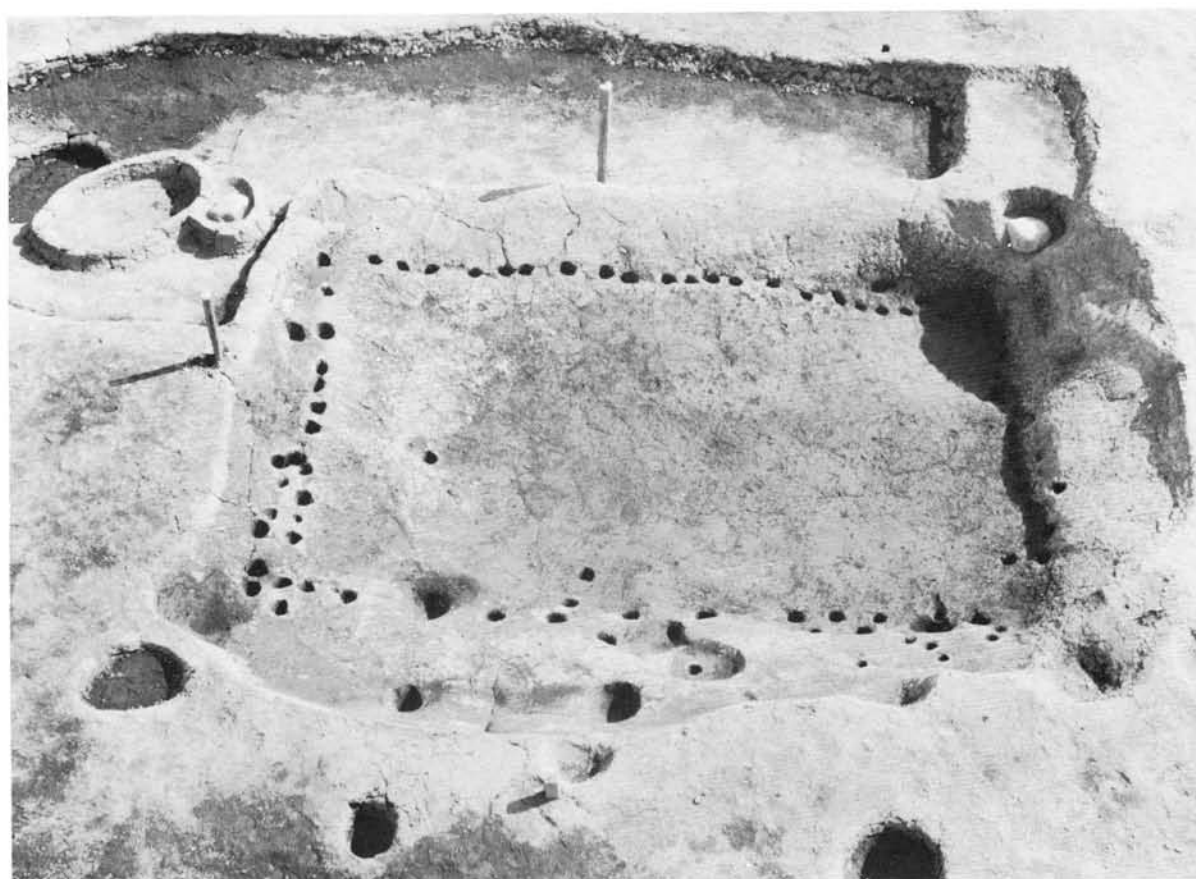
SB40 (南から)



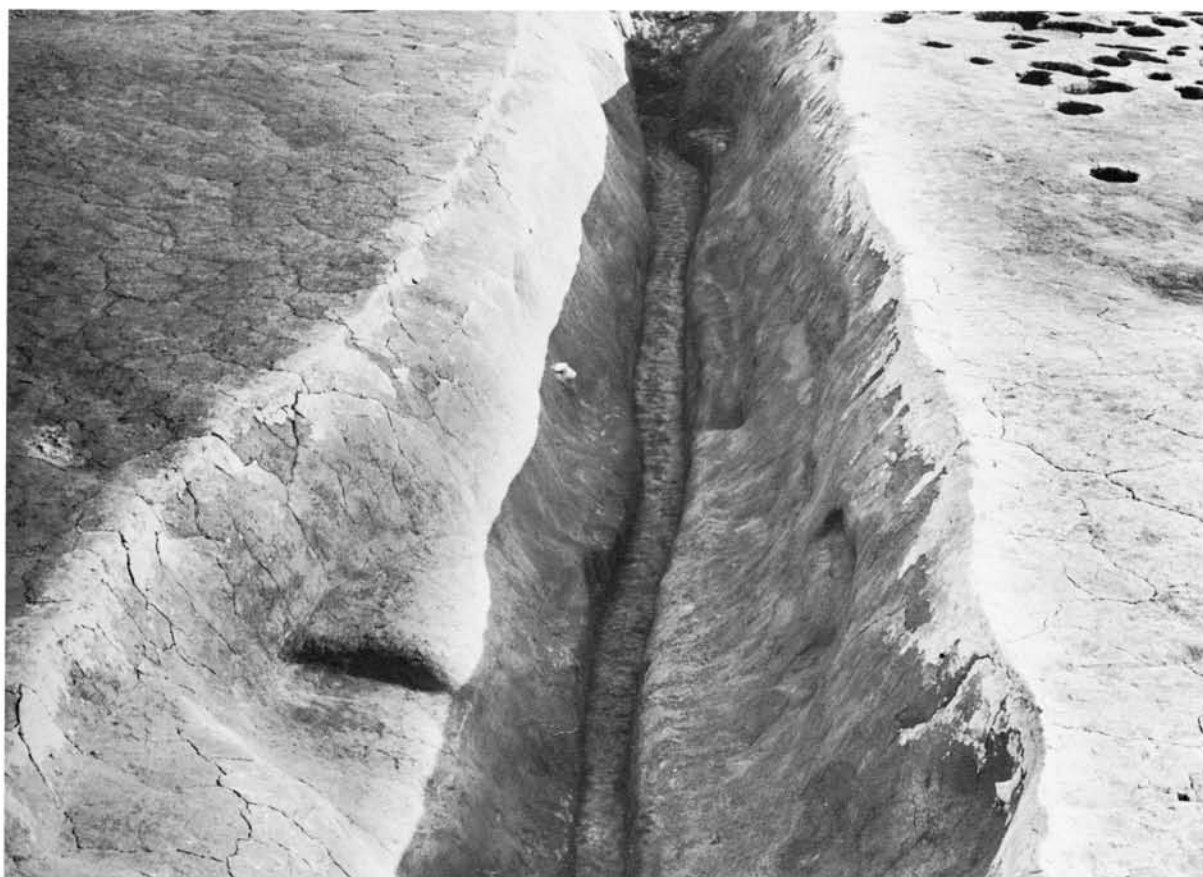
SK10 (南西から)



SK21 (西から)



SK21 (西から)



SD12 (北西から)



SX29 (北から)



1



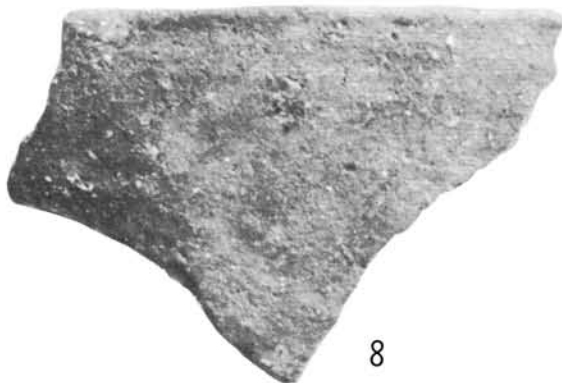
2



3



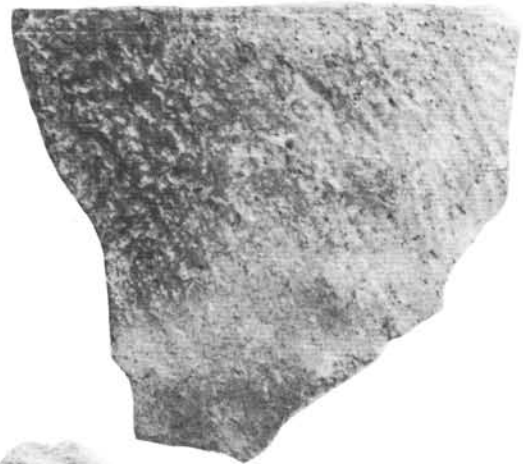
4



8



7



18



10



11



12





13

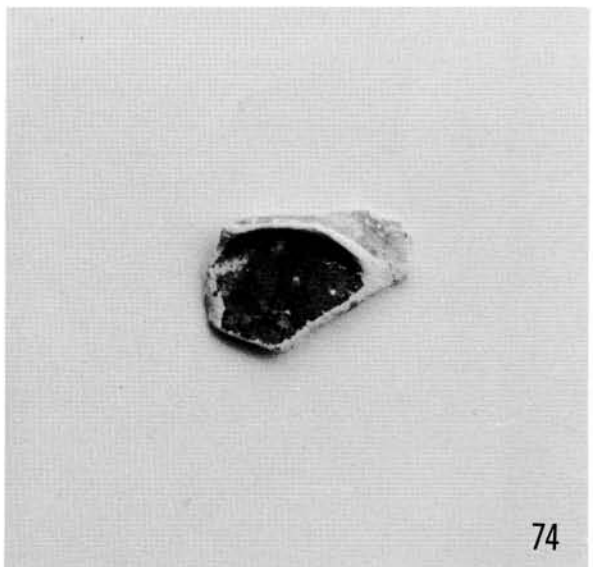


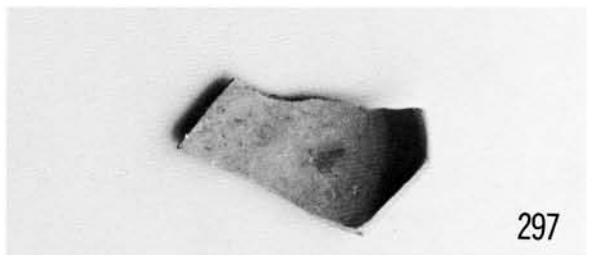
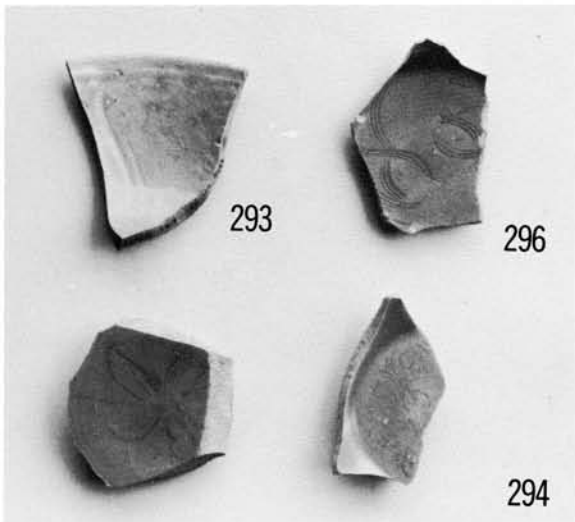
17



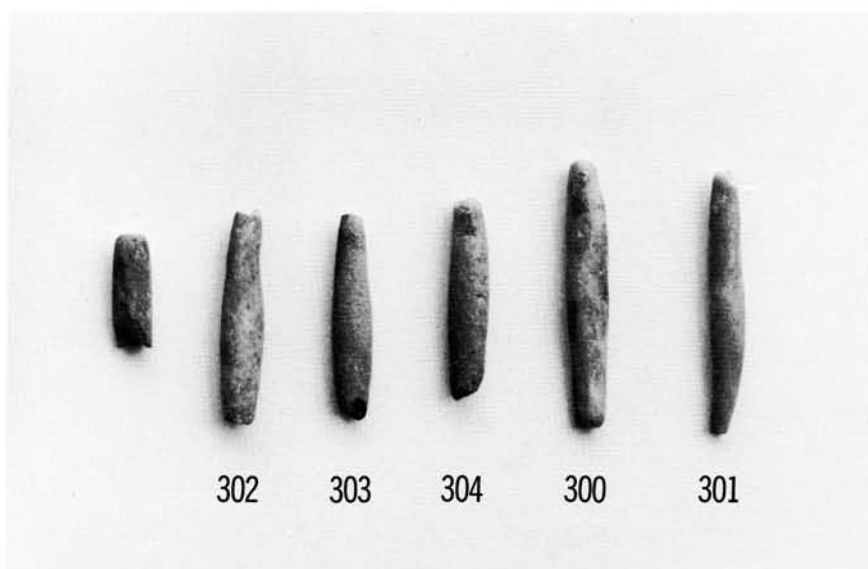
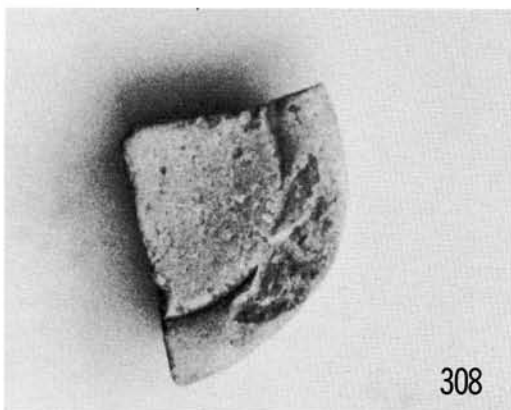








山茶碗・青磁（1：3）



土師器・常滑甕・石硯ほか（1：3）



330



鈕部分の拡大



332



342



344

367



航空写真



調査前遠景



B地区調査風景（東から）



調査区全景（東から）



B地区中央部（東から）

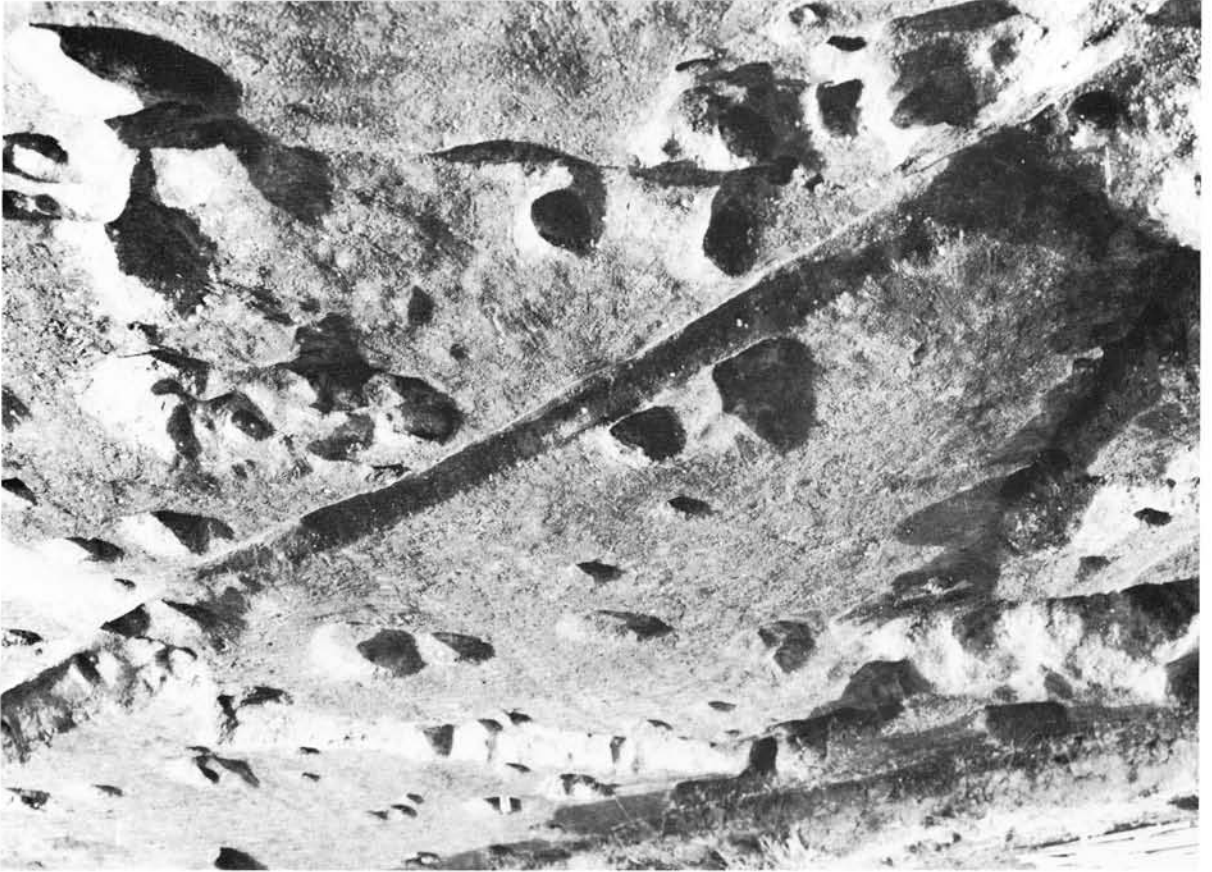


SD2（北から）

SB1 (北から)



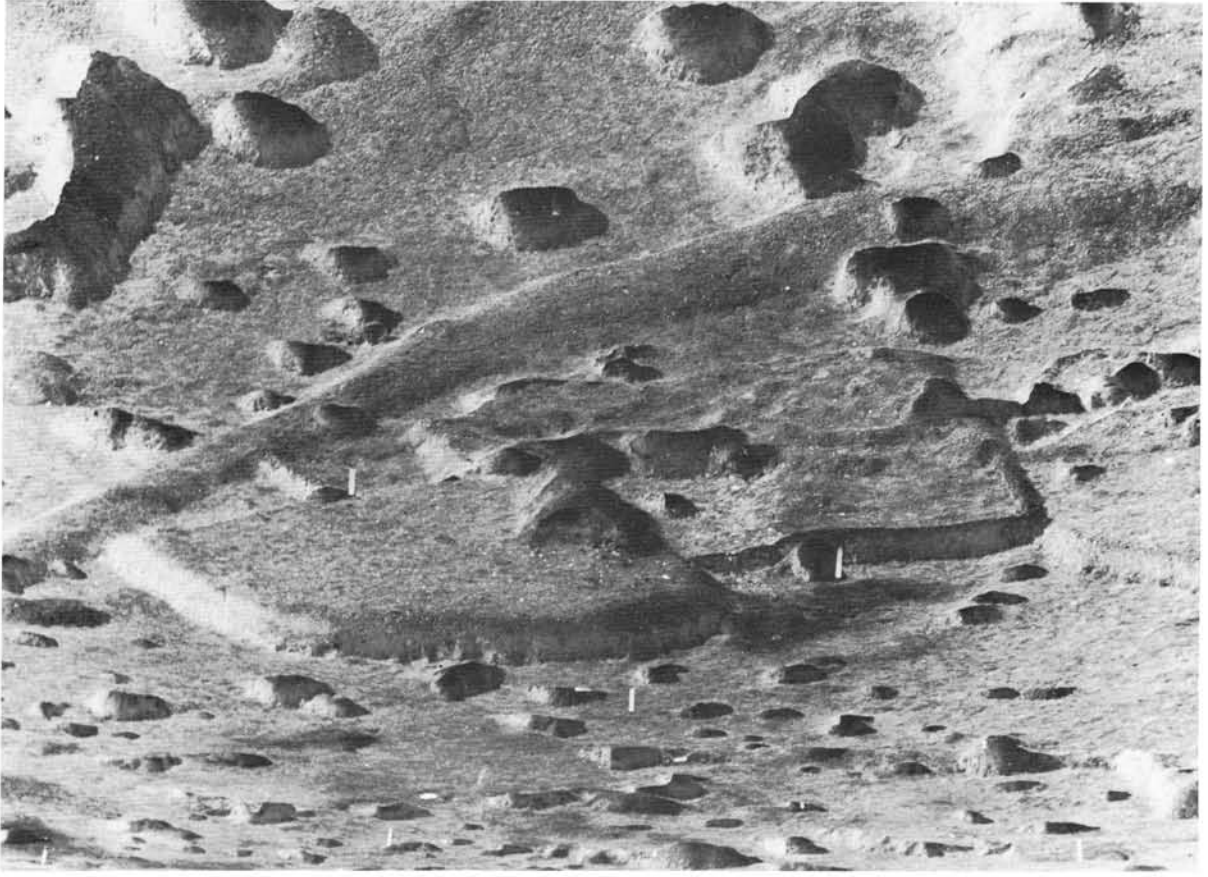
SB3 (南から)



六谷遺跡

PL11-4

SB11・12 (東から)



SB10 (北から)



六谷遺跡

PL11-5



SB10 (西から)



SB18 (南から)



SB8 (南から)



SB20 (北から)



2



4



5



3



6



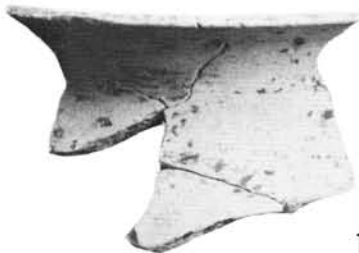
8



7



16



15



18

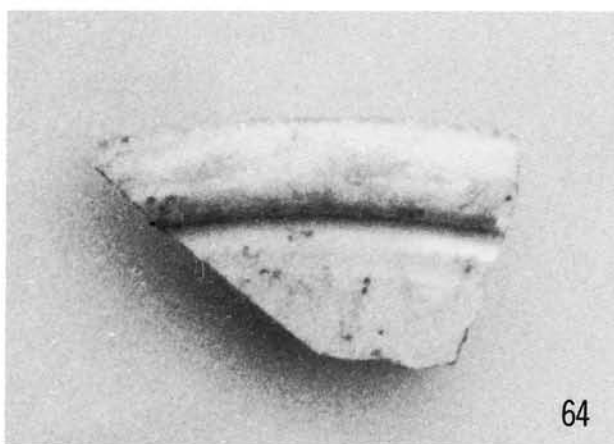


18



17





昭和58(1983)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告63

昭和58年度県営圃場整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和59年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県教育委員会
印刷 オリエンタル印刷株式会社
